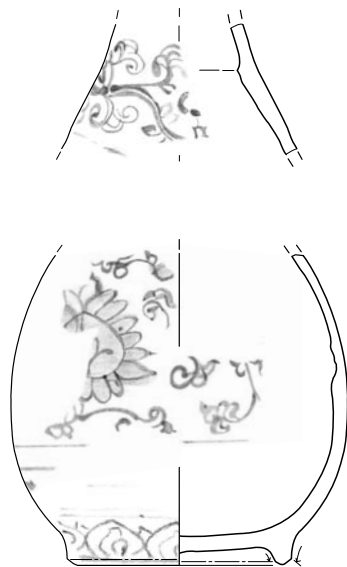


伊礼原D遺跡

— キャンプ桑江北側返還に伴う発掘調査事業（平成10～13年度） —



2008(平成20)年3月

沖縄県 北谷町教育委員会

伊礼原D遺跡

－ キャンプ桑江北側返還に伴う発掘調査事業（平成10～13年度） －

2008(平成20)年3月

沖縄県 北谷町教育委員会



1 トレンチ南側より



1 トレンチ北壁



2 トレンチ南側より



2 トレンチ東壁



3 トレンチ東側より



3 トレンチ北壁



3 トレンチ壁面



3 トレンチ樹根



北壁(4-1)



表土剥ぎ取り後・東側より



貝層掘り下げ後・東側より



南壁・黒色混貝土層(4-2)



南壁(4-6)



柱穴 No.6061 人骨頭骨片(4-6)



南壁・落ち込み面(4-5)



南壁・落ち込み面(4-7)



東壁・落ち込み面(4-5・6)



戦前遺構検出面 (4-4)



戦前遺構 (4-3)



戦前遺構 (4-4)



柱残存状況 (4-6)



炉址(1~3号炉)



2号炉



1号炉



3号炉



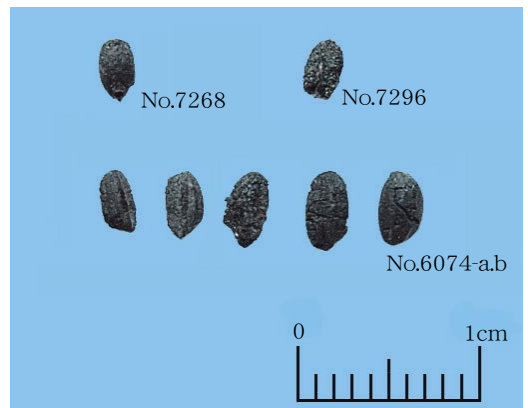
炉址全景



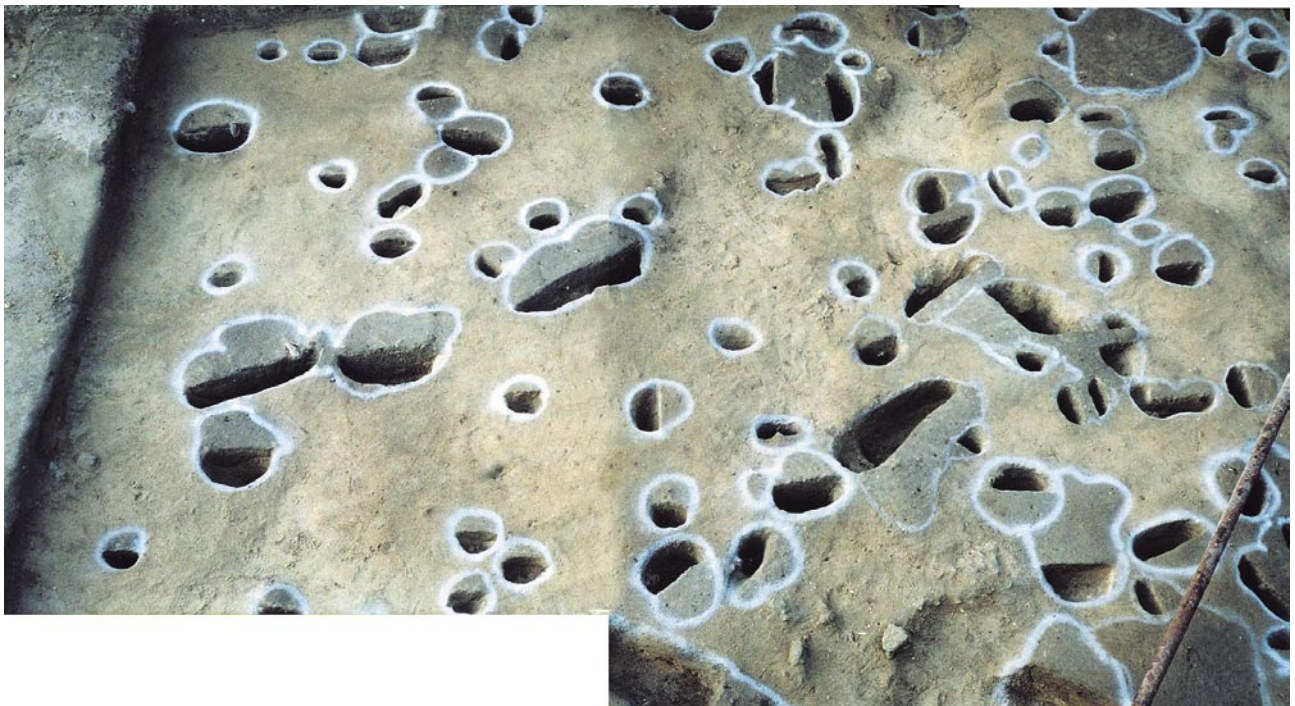
柱穴完掘状況



柱穴群と溝状遺構(4-6)



炭化米(番号は柱穴No.)



柱穴群(4-7)



卷首図版7 出土遺物



青磁



染付



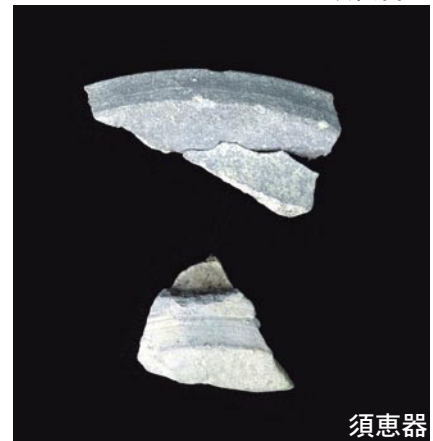
染付・青磁・白磁



白磁・瑠璃釉・色絵



タイ鉄絵合子



須恵器



西壁 (試掘No.6)



壁面 (試掘No.7)



北壁 (試掘No.6)



木片検出状況(試掘No.7)



土器・骨製品・貝製品(試掘No.6)



土器・貝製品(試掘No.7)

本文目次

卷首図版	
はじめに	
例言	
第一章 調査に至る経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査体制	6
第二章 遺跡の位置と環境	8
第三章 調査の方法と成果	12
第1節 調査の方法	12
第2節 調査の経過	12
第3節 層序	20
第4節 遺構	29
第5節 出土遺物	44
1. 土器	44
2. 滑石製石鍋	65
3. 須恵器	65
4. 白磁	66
5. 青磁	71
6. 染付	84
7. 中国産磁器	95
8. タイ産鉄絵	96
9. 褐釉陶器	97
10. 瓦質土器	107
11. 陶質土器	109
12. 沖縄産施釉陶器	110
13. 沖縄産無釉陶器	114
14. 近世・近代陶磁器	119
15. 骨製品	124
16. 貝製品	127
17. 石器・石製品	143
18. 瓦	156
19. 羽口	156
20. 焼土	156
21. 円盤状製品	159
22. 銭貨	160
23. 簪	162
24. キセル	163
25. 金属製品	164
26. 軽石製品	166
27. 軽石	167
28. チャート	167
第四章 自然遺物	168
第1節 伊礼原D遺跡から出土した貝類遺体	168
第2節 伊礼原D遺跡第3・第4トレンチ出土の脊椎動物遺体	184
第五章 理化学的分析	203
第1節 伊礼原D遺跡の放射性炭素年代測定	203
第2節 伊礼原(D・E)遺跡の放射性炭素年代測定	205
第3節 伊礼原(B・D・E)遺跡出土石器の岩石肉眼鑑定	208
第六章 沖縄県北谷町伊礼原D遺跡出土の古人骨(1)	212
第七章 まとめ	221
付篇(試掘穴No. 6・7)	
試掘No. 6	233
1. 層序	233
2. 遺構	234
3. 土器	238

4. 骨製品	241
5. 貝製品	241
6. 糞石	243
7. 伊礼原D遺跡出土糞石の自然科学分析	244
試掘No. 7	246
1. 層序	246
2. 遺構	249
3. 土器	250
4. 貝製品	251
5. 石器	252
試掘のまとめ	256
報告書抄録	

図版目次

巻首図版 1	1. 2. 3トレンチ	図版35	貝製品 1	136
巻首図版 2	層序(4トレンチ)	図版36	貝製品 2	138
巻首図版 3	層序(4トレンチ)	図版37	貝製品 3	140
巻首図版 4	戦前遺構 (4トレンチ)	図版38	貝製品 3	142
巻首図版 5	炉址検出状況(4-5グリット)	図版39	石器 1 (石斧・敲き石)	147
巻首図版 6	柱穴検出状況 (4トレンチ)	図版40	石器 2 (敲き石)	149
巻首図版 7	出土遺物	図版41	石器 3 (敲き石・凹み石)	151
巻首図版 8	出土遺物	図版42	石器 4 (用途不明)	153
巻首図版 9	試掘No. 6・7トレンチ	図版43	石器 5 (円盤状製品・石製品・石球)	155
図版 1	水路址	図版44	瓦	157
図版 2	1号炉	図版45	羽口・焼土	158
図版 3	2号炉	図版46	円盤状製品	159
図版 4	3号炉	図版47	銭貨	161
図版 5	3号炉検出状況	図版48	簪	162
図版 6	白磁出土状況	図版49	キセル	163
図版 7	土器 1 (4トレンチ)	図版50	金属製品	165
図版 8	土器 2 (4トレンチ)	図版51	軽石製品	166
図版 9	土器 3 (4トレンチ)	図版52	軽石	167
図版10	土器 (1・2・3トレンチ)	図版53	チャート	167
図版11	土器 底部 1 (4トレンチ)	図版54	伊礼原D遺跡試掘坑TPの土壌断面	170
図版12	土器 底部 2 (4トレンチ)	図版55	貝類 (巻貝 1)	197
図版13	グスク土器	図版56	貝類 (巻貝 2)	198
図版14	滑石製石鍋・須恵器	図版57	貝類 (巻貝 3) (T-タカラガイ R-陸産貝を示す)	199
図版15	白磁	図版58	貝類 (二枚貝 1)	199
図版16	青磁 1	図版59	貝類 (二枚貝 2)	200
図版17	青磁 2	図版60	カメ・ジュゴン骨	200
図版18	青磁 3	図版61	イノシシ骨	201
図版19	青磁 4	図版62	ウマ骨	201
図版20	染付 1	図版63	ウシ骨	202
図版21	染付 2	図版64	4トレンチ	225
図版22	染付 3	図版65	人骨検出状況	226
図版23	中国産磁器	図版66	作業風景 1	227
図版24	タイ産鉄絵	図版67	作業風景 2	228
図版25	褐釉陶器 1	図版68	一括土器	237
図版26	褐釉陶器 2	図版69	試掘No. 6 VII層状況	237
図版27	褐釉陶器 3	図版70	土器 (試掘No. 6)	240
図版28	瓦質土器	図版71	骨製品・貝製品 (試掘No. 6)	242
図版29	瓦質土器不明	図版72	試料の外観分析状況写真	245
図版30	陶質土器	図版73	木片検出状況 (北側より)	249
図版31	沖縄産施釉陶器	図版74	土器 (試掘No. 7)	250
図版32	沖縄産無釉陶器	図版75	貝製品 (試掘No. 7)	251
図版33	本土産近世・近代磁器	図版76	石器 (試掘No. 6・7)	253
図版34	骨製品			126

挿図目次

第1図	北谷町の位置	2	第42図	沖縄産施釉陶器	113
第2図	北谷町の遺跡	3	第43図	沖縄産無釉陶器	117
第3図	伊礼原D遺跡位置	5	第44図	近世・近代磁器 1	122
第4図	試掘ポイント（『キャンプ桑江試掘調査』）（2005）	18	第45図	近世・近代磁器 2	123
第5図	伊礼原D遺跡グリット配置	19	第46図	骨製品	125
第6図	1 トレンチ東壁層序	23	第47図	貝製品 1	135
第7図	2 トレンチ東壁・5 トレンチ北壁層序	24	第48図	貝製品 2	137
第8図	3 トレンチ北壁層序	25	第49図	貝製品 3	139
第9図	4 トレンチ南壁層序	28	第50図	貝製品 4	141
第10図	4 トレンチ遺構及び区割り	30	第51図	石器 1（石斧・敲き石）	146
第11図	木製品	32	第52図	石器 2（敲き石）	148
第12図	4 トレンチ石列遺構	32	第53図	石器 3（敲き石・凹み石・石皿・砥石・未製品）	150
第13図	炉址の配置	34	第54図	石器 4（用途不明）	152
第14図	1号炉・2号炉・3号炉平面・断面	35	第55図	石器 5（円盤状製品・石製品・石球）	154
第15図	柱穴平面・断面（4-5）	36	第56図	瓦	157
第16図	柱穴平面・断面（4-6）	38	第57図	羽口	158
第17図	柱穴平面・断面（4-7）	42	第58図	円盤状製品	159
第18図	柱穴平面・断面（4-8）	42	第59図	寛永通宝の分類	160
第19図	土器 1（4 トレンチ）	54	第60図	錢貨	161
第20図	土器 2（4 トレンチ）	56	第61図	簪の分類と部位名称	162
第21図	土器 3（4 トレンチ）	58	第62図	簪	163
第22図	土器 4（1. 2. 3 トレンチ）	58	第63図	キセル名称	163
第23図	土器（底部）	61	第64図	キセル	163
第24図	グスク土器	64	第65図	金属製品	165
第25図	滑石製石鍋・須恵器	65	第66図	軽石製品	166
第26図	白磁	69	第67図	試掘坑TP 7におけるマルタニシの出土位置	170
第27図	青磁 1	77	第68図	伊礼原D遺跡の柱状図と遺物変遷図（3・4 トレンチ）	229
第28図	青磁 2	79	第69図	試掘No. 6・7位置	232
第29図	青磁 3	81	第70図	試掘No. 6層序	235
第30図	青磁 4	83	第71図	試掘No. 6ピット状遺構	235
第31図	染付 1	89	第72図	試掘No. 6遺物出土状況（Ⅲc層・Ⅲd層）	236
第32図	染付 2	91	第73図	試掘No. 6遺物検出状況（Ⅳ層）	237
第33図	染付 3	93	第74図	試掘No. 6遺物検出状況（Ⅶ層）	237
第34図	中国産磁器	95	第75図	土器（試掘No. 6）	239
第35図	タイ産鉄絵	96	第76図	骨製品・貝製品（試掘No. 6）	241
第36図	褐釉陶器 1	101	第77図	試掘No. 7層序	248
第37図	褐釉陶器 2	103	第78図	試掘No. 7木片検出状況	249
第38図	褐釉陶器 3	105	第79図	土器（試掘No. 7）	250
第39図	瓦質土器	107	第80図	貝製品（試掘No. 7）	251
第40図	瓦質土器不明	108	第81図	石器（試掘No. 6・7）	252
第41図	陶質土器	109			

表目次

表 1	北谷町遺跡一覧	4	表13	染付出土量	86
表 2	柱穴計測一覧（4-5）	37	表14	染付観察一覧	86
表 3	柱穴計測一覧（4-6）	39	表15	染付文様別出土量	93
表 4	柱穴計測一覧（4-7）	41	表16	褐釉陶器出土量	98
表 5	柱穴計測一覧（4-8）	43	表17	褐釉陶器観察一覧	99
表 6	土器胴部出土量	49	表18	陶質土器出土量	109
表 7	土器口縁部・底部出土量	50	表19	沖縄産施釉陶器観察一覧	111
表 8	土器観察一覧	50	表20	沖縄産施釉陶器出土量	112
表 9	白磁出土量	67	表21	沖縄産無釉陶器出土量	115
表10	白磁観察一覧	68	表22	沖縄産無釉陶器観察一覧	116
表11	青磁出土量	73	表23	近世・近代磁器出土量	120
表12	青磁観察一覧	74	表24	近世・近代磁器観察一覧	121

表25	骨製品観察一覧	124	表50	その他の種類一覧	189
表26	貝製品出土量	132	表51	ジュゴン出土一覧	189
表27	貝製品観察一覧	133	表52	イヌ出土遺体一覧	189
表28	二枚貝有孔製品観察一覧	134	表53	ウシ/ウマ(ヤギ)遺体同定結果	189
表29	石器出土量	144	表54	イノシシ(歯)集計一覧	192
表30	石器観察一覧	145	表55	イノシシ/ブタ遺体同定結果	192
表31	瓦出土量	157	表56	ブタ遺体同定結果	192
表32	円盤状製品観察一覧	159	表57	イノシシ(/ブタ)計測一覧	192
表33	銭貨観察一覧	160	表58	イノシシ(歯)出土一覧	192
表34	簪観察一覧	162	表59	イノシシ遺体同定結果	193
表35	キセル観察一覧	163	表60	ウシ遺体同定結果	196
表36	金属製品観察一覧	164	表61	ウマ遺体同定結果	196
表37	軽石製品観察一覧	166	表62	ウシ・ウマ(歯)出土一覧	196
表38	軽石柱穴別重量	167	表63	第3・第4トレンチ出土脊椎動物遺体の同定標本数. イノシシ/ブタ・ウシ・ウマの部位不明破片は除外した	186
表39	チャート出土一覧	167	表64	糞石出土遺跡(参考資料)	243
表40	出土貝類とその生息場所類型	177	表65	石器観察一覧	253
表41	4トレンチのグリッド別出土貝類の詳細	179	表66	その他の種類歯出一覧	254
表42	4トレンチにおける優占種の出土状況	183	表67	ウミガメ・リクガメ・クジラ歯出一覧	254
表43	海産腹足類(タカラ貝を除く)の出土量	C D	表68	イノシシ(ブタ?)歯出土一覧	254
表44	二枚貝類の出土量	C D	表69	イノシシ・イノシシ・/ブタ・ブタ出土量	255
表45	陸・淡水産貝類の出土量	C D	表70	海産腹足類(タカラ貝を除く)の出土量	C D
表46	タカラ貝類の出土量	C D	表71	二枚貝類の出土量	C D
表47	魚類遺体同定結果	189	表72	陸・淡水産貝類の出土量	C D
表48	魚類遺体計測一覧	189	表73	タカラ貝類の出土量	C D
表49	ウミガメ・リクガメ遺体同定結果	189			

グラフ目次

グラフ1	土器胴部グリッド別出土状況	49	グラフ8	4トレンチにおける貝類遺体の生息場所 類型組成の時代変遷	176
グラフ2	沖縄産施釉陶器出土状況	112	グラフ9	第4トレンチ出土脊椎動物遺体の グリッド別出土数	187
グラフ3	二枚貝有孔製品(グリッド別)	131	グラフ10	第4トレンチ出土脊椎動物遺体の グリッド別組成(同定標本数比)	187
グラフ4	二枚貝有孔製品(重量別)	131	グラフ11	第4トレンチ出土主要魚類のグリッド別 出土数	188
グラフ5	タカラガイ科(ハナマルユキ)製品(グリッド別)	131			
グラフ6	焼土出土状況	156			
グラフ7	グリッド別軽石出土一覧	167			

はじめに

伊礼原D遺跡は、旧キャンプ桑江北側地区返還跡地に伴う区画整理事業の事前調査として、文化庁の補助を得て平成7年度から平成9年度に行われた試掘調査で見えられた9遺跡のうちの1つであります。

平成9年度の試掘調査では、米軍施設が稼働中のため試掘箇所には制約があった地域であることから、遺跡の規模である範囲を確定するなどの情報を得るために平成11・12年度事業として範囲確認調査を行っております。

伊礼原D遺跡は、平成9年度の試掘調査の成果からグスク土器や青磁などと共に柱穴群が検出され15世紀から16世紀の生活址と考えられた遺跡であります。

範囲確認調査においては、人骨の頭骸骨が出土したことから埋葬址の可能性を秘めている遺跡であることと、本遺跡の北側に位置する遺跡とは川を挟んだ別の遺跡であることが把握されました。さらに、これらの遺跡を分けている沖積平野部を流れる川についても、戦前のナガサ川の川底にあたることが確認され、河川の流が沖積平野部において蛇行している様相など、遺跡が所在するこの地域の自然環境の形成過程をもうかがい知ることができております。

戦前は、字平安山と字伊礼の集落の間に広がる耕作地であった地域一帯から縄文時代相当期、弥生時代相当期、グスク時代、近世、現代までいたる永い間の人々の生活の様子をうかがい知ることができ、北谷町内の桑江・伊平地域が生活を営むうえで環境の良い地域であったことを明らかにすることができております。

今後、これらの成果を踏まえ、現在進められております跡地利用計画の桑江伊平土地区画整理事業、さらに諸開発事業と貴重な埋蔵文化財の保護との調和を図りながら文化財行政を進めてまいります。

末尾になりましたが、範囲確認調査・資料整理にあたりご指導・ご助言を頂きました関係各位に深く感謝申し上げます。

平成20年3月

北谷町教育委員会
教育長 瑞慶覽 朝宏

例 言

1. 本報告書は平、「キャンプ桑江北側返還に伴う発掘調査事業」として文化庁補助を受けてキャンプ桑江北側返還に伴う範囲確認調査、平成11年から平成13年度まで実施した『伊礼原D遺跡』試掘調査の成果をまとめたものである。
2. 本報告書に掲載した地図は、国土地理院発行の1/2,500地形図(昭和54年測量)を元に北谷町役場都市計画課が作成したものである。本報告書の方位は磁北をさす。
3. 遺物の同定等については、下記の方々にご協力をいただいた(敬省略)。記して感謝申し上げます。

石 質	大城 逸朗 (北谷町文化財審議員：理学博士)
獣魚骨	樋泉 岳二 (早稲田大学 非常勤講師)
貝 類	黒住 耐二 (千葉県立中央博物館 上席研究員)
人 骨	松下 孝幸 (土井ヶ浜人類ミュージアム館長)
本土産陶磁器	渡辺 芳郎 (鹿児島大学法文学部教授)

4. 松下孝幸氏・松下真美氏・樋泉岳二氏・黒住耐二氏には玉稿を頂いた。記して謝意を表します。

5. 実測業務委託

株式会社 埋蔵文化財サポートシステム沖縄支店・株式会社 イーエーシー株式会社
文化財サービス・株式会社 アーキジオ沖縄

5. 放射性炭素分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社・株式会社古環境研究所で行った。

6. 本報告書の編集は、東門研治・島袋春美が行い執筆分担は下記のとおりである。

第一章～第三章 第1・2節	中村 愿
第三章 第3・4節・第5節5	東門研治・島袋春美
第七章	島袋春美・秋本真孝
第三章 第5節1・2・7・8・10～16・18～21	島袋春美
第三章 第5節5・6	東門研治・島袋春美
第三章 第5節17・28・2	秋本真孝
第三章 第5節9・21～25・26・27・28	細川 愛
付篇 (試掘No.7) 1・2・7・11	秋本真孝
(試掘No.6) 1～5	島袋春美
試掘まとめ	細川 愛

(試掘) 13 島袋春美・秋本真孝

7. 遺物洗浄・接合・実測・復元・集計・写真撮影・図面整理・トレース・図版作成等の資料整理は下記の人員で行った。

上間真寿美	豊里 初枝	東 順子	照屋 元子	佐久間クリエ	山城小百合
稲嶺恵利奈	西原 美草	仲村渠恵子	東恩納里花	大城 光	吉田美百合
曾木 菊枝	知念 栄子	上江洲陽子	蔵本奈々絵	名嘉真弥生	上地千賀子

8. 本書に掲載した発掘調査に関する写真、実測図などの記録および出土遺物の全ては北谷町教育委員会に保管している。

第一章 調査に至る経緯

第1節 調査に至る経過

伊礼原D遺跡の範囲確認調査については、キャンプ桑江北側返還跡地に伴う区画整理事業の事前調査として、文化庁の補助を得て平成7年度から平成9年度の3年間に行われた。この試掘調査の成果を踏まえ、区画整理事業を円滑に進めるために、発見された9遺跡を対象とし、その範囲と遺跡の性格を詳細に把握するために行われたものである。試掘調査の成果については『キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査』として平成17年3月に公に付してある^(註1)。

試掘調査は返還跡地約40.5haを30×30mのメッシュを組み、そのクロス点に4×4mの試掘穴を設け調査地点とした(第4図)。その総試掘面積は5,568㎡である。そのような中、平成10年度に文化庁から『埋蔵文化財の把握から開発事前の発掘調査に至るまでの取り扱いについて(報告)』が刊行され、「台地上の比較的単純な遺跡の場合には、埋蔵文化財包蔵地の範囲の10%について確認調査を行えば、本発掘調査の範囲の決定に必要な情報を得ることができる。」という指針が示され、文化庁からその指導・助言を賜り、平成11年度から範囲確認調査として情報の必要な遺跡の把握に努めることにした。

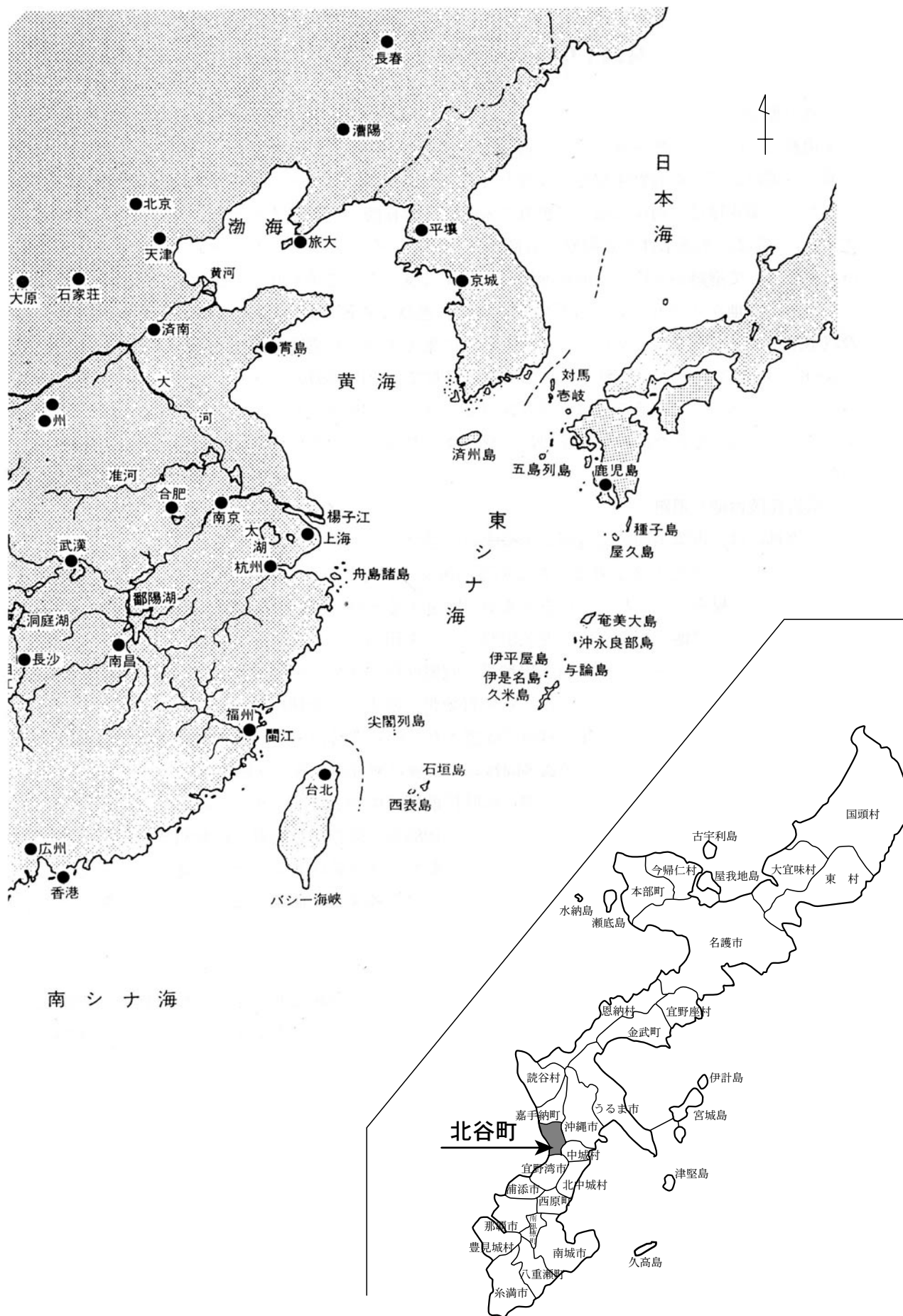
そのことを踏まえ、範囲確認調査は9遺跡すべてではなく、試掘調査で出土遺物がまばらで遺構が明確には把握出来ない遺跡を主とし、遺物は多量に出土するものの遺構が確認できない遺跡をその対象とした。

範囲確認調査を対象とした遺跡は小堀原遺跡・伊礼原遺跡(旧伊礼原C遺跡・旧伊礼原A遺跡)・伊礼原B遺跡・伊礼原D遺跡・伊礼原E遺跡・平安山原B遺跡である。

今回の伊礼原D遺跡は平成11・12年度に平成12年2月10日～平成12年3月31日と平成12年7月11日～平成13年3月29日に行なった。南東部の伊礼原遺跡との中間、現在のナガサガーの右岸上流部に2ヶ所の4×4mの試掘を13年度に設け、遺跡の拡がりを見直すため平成14年2月12日～平成14年3月8日にNo6・7試掘(第5図)を行なった。

参考文献

- 註1. 中村愿・東門研治ほか『キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査』—伊礼原B遺跡ほか発掘調査事業— 北谷町文化財調査報告書第23集 北谷町教育委員会 2005年3月
- 註2. 文化庁文化財保護部記念物課 「埋蔵文化財の把握から開発事前の発掘調査に至るまでの取り扱いについて(報告)」 月刊『文化財』文化庁文化財保護部監修 平成10年7月号



第1図 北谷町の位置

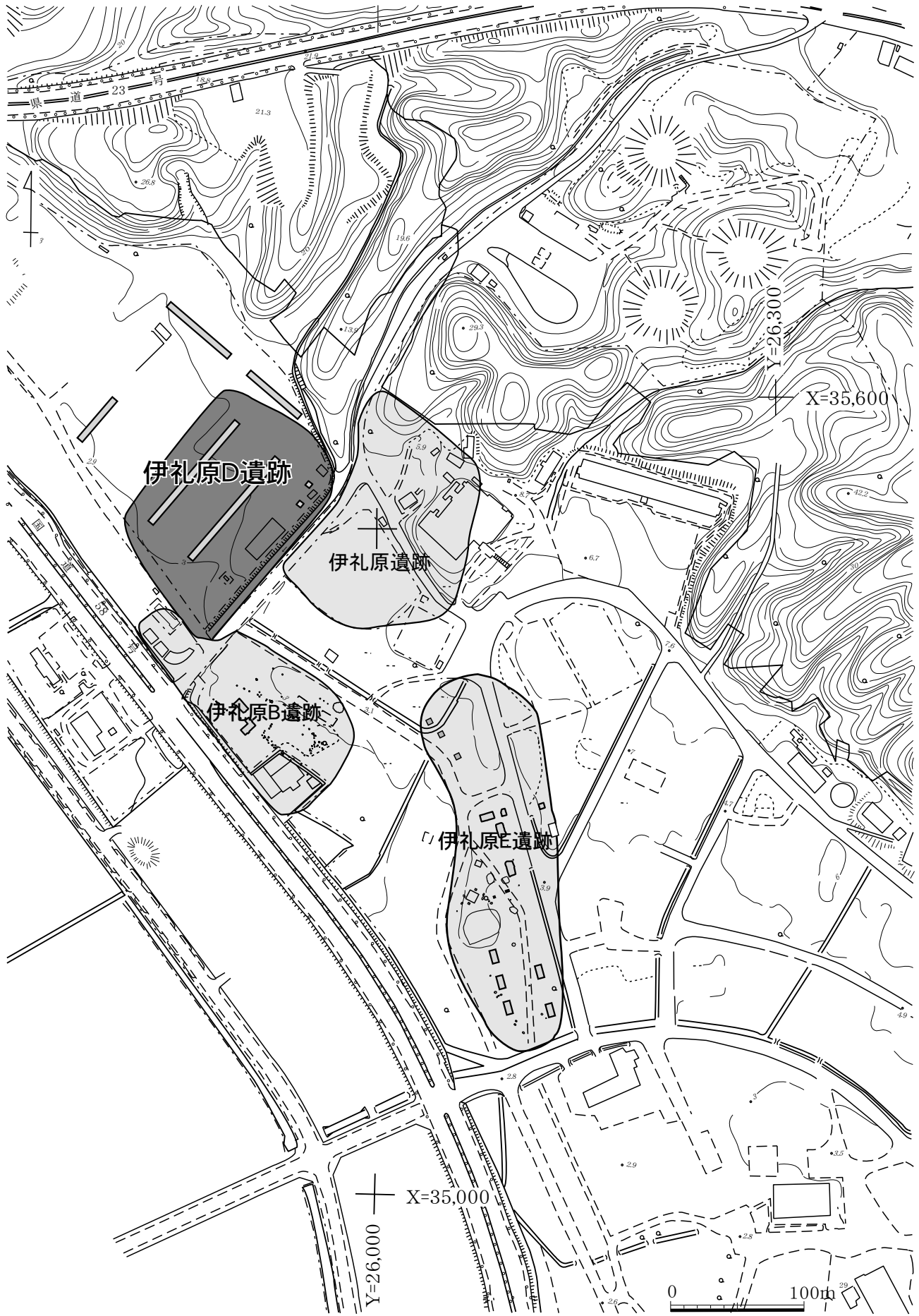


第2図 北谷町の遺跡

表1 北谷町遺跡一覧

	遺跡名	時期	
1	砂辺サーク原貝塚	前期	字砂辺差久原770番地 他
2	砂辺サーク原遺跡	後期～近世	字砂辺加志原415、444番地 他
3	砂辺貝塚	後期～グスク	字砂辺村内原147、502～505番地
4	砂辺ウガン遺跡	後期～グスク	字砂辺加志原524番地
5	カーシーノポントン遺物散布地	グスク	字砂辺加志原340番地 他
6	クマヤー洞穴遺跡	前期～グスク	字砂辺村内原49番地
7	浜川千原岩山遺物散布地	後期	字浜川浜川千原145、157番地 他
8	浜川ウガン遺跡	後期	字浜川浜川47番地
9	上・下勢頭区古墳群	近世	字上勢頭平安山伊森原・伊礼伊森原・下勢頭平安山下勢頭原
10	伊礼原遺跡	前期～近世	字伊平伊礼原188番地 他
11	伊礼原B遺跡	グスク	
12	桑江ノ殿遺物散布地	後期～近世	字桑江小堀原278・279・280番地
13	桑江遺物散布地	後期	字桑江後兼久原213-2番地 他
14	鹿化石出土地	旧石器	字吉原栄口原・桃原
15	前原古島A遺跡	近世	字桑江桑江原60・62番地 他
16	前原古島B遺跡	近世	字桑江前原1018番地 他
17	伊地差久原古墓	近世	字桑江伊地差久原841番地
18	前原古墓群	近世	字桑江前原978-2、1070番地
19	桃原洞穴遺跡	旧石器	字吉原東新川原
20	インディアン・オーク号の座礁地	近世	字北谷地先
21	池グスク	後期	字吉原東宇地原・西宇地原
22	白比川河口遺物散布地	グスク	字北谷西表原
23	北谷城遺跡群	後期～近世	字大村城原
24	北谷城第7遺跡	後期～近世	字大村城原325番地
25	北谷番所址	後期～近世	字北谷北谷原
26	吉原東角双原遺跡分布地	グスク	字吉原東角双原931-1番地 他
27	山川原古墓群	近世	字大村山川原448・450・454番地 他
28	玉代勢原遺跡	後期～近世	字大村玉代勢原43・44番地
29	長老山遺跡分布地	後期～グスク	字大村玉代勢原14番地
30	大道原A遺跡	後期	字北谷大道原983、992番地
31	大道原B遺跡	後期	字北谷大道原993番地
32	新城下原遺跡		
33	後兼久原遺跡	グスク～近世	字桑江小字後兼久原、字桑江小字小堀原
34	塩川原遺跡	後期	
35	稲千原遺跡	前期	
36	伊波川原遺跡		
37	伊礼伊森原遺跡	後期	
38	東表原遺跡		
39	安仁屋原遺跡		
40	千原遺跡	後期	
41	平安山原A遺跡	後期	
42	平安山原B遺跡	後期	
43	平安山原C遺跡		
44	伊礼原D遺跡	後期	字伊平伊礼原213番地 他
45	伊礼原E遺跡	後期	
46	小堀原遺跡	後期	
47	大作原古墓群	前期～近世	
48	横嵩原遺跡	後期	

* 番号は位置図に付随



第3図 伊礼原D遺跡位置

第2節 調査体制

1. 範囲確認調査の組織

補助事業に伴う平成11・12・13・14・15・16・17・18・19年度の組織体制

調査主体	北谷町教育委員会		
調査責任者	教育長	當山 憲一（平成11年度） 瑞慶覧朝宏（平成12～19年度）	
事務総括	教育次長	伊禮 喜正（平成11～16年度） 阿波根 進（平成17～18年度） 謝花 良継（平成19年度）	
	文化課長	嘉手納 昇（平成11～14年度）	
	社会教育課長	幸地 清（平成15～16年度） 大城 操（平成17～19年度）	
調査総括	文化係長	中村 愿（平成11～19年度） 嘉陽田朝栄（平成19年度）	
調査担当	文化係主任主事	東門 研治（平成11～19年度）	
	文化係主事	松原 哲志（平成18～19年度）	
事務担当	主任主事	比嘉ゆかり（平成12～16年度）	
	主事	太田 有紀（平成15年度） 鈴木 典子（平成16～19年度）	
調査指導	黒住 耐二（千葉県中央博物館上席研究員） 樋泉 岳二（早稲田大学・東京農業大学非常勤講師） 松下 孝幸（土井ヶ浜人類学ミュージアム 館長） 知念 勇（恩納村立博物館 館長）		
調査協力	ポール宜野座（在沖海兵隊基地施設部不動産事務所長） クリス・ホワイト（在沖海兵隊基地環境保護課 自然・文化財保護官） 平敷 兼直（ 同上 自然・文化財保護係） ヘリック・ウイリアムズ（ 同上 考古学専門官） 喜友名朝重（在沖海兵隊基地施設営繕部部長） 比嘉 賀盛（沖縄市文化財審議委員）		

（平成11年度）発掘調査補助員

真喜屋 隆 田仲 康里 花城 清哉 新里 直哉 砂川 正幸 安里 美紀 岸本 竹美
井上 美里 天久 朝海 我如古真弓 宮里 光 與那覇 徹 松田 勇治 伊波 静江
安仁屋邦子 新垣千代子 伊波 千代 當山 敏子 東 康博 吉田 昌博 安里 盛保
棚原 将也 仲元 浩哉 松本 文喜 金城 義彦 棚原 潤也 崎浜 聡 宮城 好枝
目取真貴子 宮里 光 與那覇 徹 照屋 高之
シルバー人材センター
稲嶺スミ子 桑江 良善 島袋 雅治 小浜 守市 東江清次郎 宮城キク子 松島 正吉

普天間直純 照屋 寛勝 與那覇政栄 花城 可順 立津 善徳 嘉手川繁栄 森屋 正一
 仲本 潤一 新城 賢志 高江洲義雄 具志堅用徹 大村 泉一 宮城 吉廣 稲嶺 盛仁
 島袋 盛厚 金城幸次郎 比嘉 勇 玉城 清忠 比嘉ハル子 仲嶺 文子 宮里ミチ子
 比嘉美佐子 伊計 明貞 浦田 ワカ 新垣 吉子 仲真次政典 宮里 辰雄 屋比久孟盛
 宮里 福栄 知念 勇進 金城 勝治 多和田真栄 儀間 真吉 棚原 三郎 高江洲義弘
 垣花 忠夫 神山 鴻善 平 武彦 池宮城昌一 多和田クニ子 宮里 武 新里 安子
 浜里 ヤス 新田 保栄 志喜屋孝仁 菊原 義久 津波 勇雄 新垣 正雄 兼島 兼清
 屋良 朝盛 安次嶺長英 山川 寛 西里 肇 仲宗根ヨシ子 大城 吉子 比嘉 清子
 伊禮 千代 金城喜美子 山城キヨ子 仲道トミ子 西銘 和子 仲真千代子 田里 和子
 津波古ヨシ 豊里タマ子 具志堅スミ 石原 昌診 上里 拓裕

(12年度) 発掘調査補助員

喜友名勇人 井上 美里 照屋 高之 玉城 和美 我那覇智美 花城 健治 砂川 正幸
 成田満利子 目取真貴子 尾木 綾 森田 直哉 金城 善彦 崎浜 聡 大濱 永寛
 喜友名朝代 宮城 修 屋嘉比邦之 喜瀬 乗幸 宮里 光

シルバー人材センター

桑江 義彦 中山 和成 稲嶺 盛仁 比嘉 憲栄 島袋 盛厚 宮平 孝重 高江洲安廣
 森屋 正一 稲嶺 盛勝 比嘉 政雄 普天間直純 玉城 清忠 多和田クニ子
 渡久地真栄 白保英勝 郡山 隆彦 親富祖行平 金城 健治 玉城 清忠 與那覇政栄
 金城 良夫 松島 正吉 小浜 守市

(13年度) 発掘調査補助員

松原 哲志 安里 美紀 屋嘉比邦之 中村 響 金城 直子 照屋 高之 島袋 彩人
 東 順子 山内 盛英 照屋 元子 仲田 浩二 宮平 論 宮里 光

シルバー人材センター

根間 平雄 小渡 義昌 喜屋武盛忠 新垣 好唯 新垣 義孝 四元 正 内間 千福
 仲村 幸有 佐久川正喜 仲村渠春義 仲村渠正雄 安里 盛保 松本 文喜 仲村渠春幸
 德里 栄子 屋我 清子 石川 光江 山川 良子 松田 洋子 福本サナエ 園田 和子
 大嶺トシ子 大城ヨシ子 儀間 義忠 中山 和成 原 節子 目取真久子 島袋 隆子

(平成14年度) 発掘調査補助員

照屋 高之 島袋 春美 前川 恵子 菊池 恒三 金城 麻紀 島袋 保 東 順子
 山内 盛英 照屋 元子 比嘉 光彦 富平砂綾子 八田 夕香 當山 悠太 知念 均

(平成15年度)

嘱託職員 島袋 春美 菊池 恒三

臨時職員 真喜屋 隆 尾木 綾 松原 哲志 砂川 正幸 縄田 雅重 上原 恵 秋本 真孝
 八田 夕香 上間真寿美 知念 真衣 田仲美智子 東 順子 佐久間クリエ
 山城小百合

(平成16年度)

嘱託職員 島袋 春美 尾木 綾 菊池 恒三 縄田 雅重 上原 恵 八田 夕香
 上間真寿美 細川 愛 富平砂綾子
 臨時職員 仲田 浩二 豊里 初江 島袋 保 知念 均 佐久間クリエ 山城小百合
 東 順子 金城 拓真 田仲美智子 照屋 元子 佐久本盛翔 宮里 伊織
 棚原 優樹 山岡 由治 浦崎 誠 照屋 博之 大嶺 一貴 亀谷 幸伸

(平成17年度)

嘱託職員 島袋 春美 尾木 綾 細川 愛 菊池 恒三
 臨時職員 仲村 毅 徳嶺 理江 島袋 保 照屋 元子 田仲美智子 呉屋 広江
 瑞慶覧 亮 稲嶺恵利奈 富平砂綾子 花城 直子 西原 美草 八色 篤史
 新城とよ子 山田 奈美 知念 栄子 宮城 康 三宮 央意 安達 美奈
 提 祥雄 與那覇洋子

(平成18年度)

嘱託職員 宮里 光 島袋 春美 呉屋 広江
 臨時職員 西原 美草 山田 奈美 新川美和子 比嘉 美恵 大城 梨乃 池原恵梨香
 仲里 知子 湧川 卓 松長 稔 比嘉 学 喜友名正和 古謝かなえ

(平成19年度)

嘱託職員 秋本 真孝 細川 愛 豊里 初江 上間真寿美 東 順子 照屋 元子
 西原 美草 島袋 春美 山城小百合 佐久間クリエ
 臨時職員 新川美和子 比嘉 美絵 大城 梨乃 仲里 知子 上江洲陽子 蔵本奈々絵
 仲村渠恵子 稲嶺恵梨奈 仲村渠春樹 名嘉真弥生 東恩納里香 大城 光

第二章 遺跡の位置と環境

位 置

伊礼原D遺跡は、旧キャンプ桑江北側返還に伴う事前の試掘調査で発見された9遺跡の内の1つである。

旧キャンプ桑江北側が位置していたのは沖縄県中頭郡北谷町字桑江・伊平地域である。旧キャンプ桑江は平成15年3月（2003年）に返還され、現在、区画整理事業が進行中である。隣接するキャンプ桑江南側半分約61haも近年に返還が予定されている。

北谷町は略南北に細長く伸びる沖縄本島の南西よりに位置し、県庁所在地の那覇市から約20km北東に所在している。南北約6km、東西約4.3km、総面積13.63km²の台形状を呈し、底辺が西側の東シナ海に面した形状を成している。人口約27,000人余で第三次産業を主とした町である。

今回の伊礼原D遺跡は伊礼原遺跡と伊礼原B遺跡の中間に位置し、ナガサガールの右岸に位置しているが、範囲確認調査の結果や地籍図・米軍航空写真などから、戦前は伊礼原D遺跡の北側約100mを西流していたのを戦後米軍の改変により現状となっていることが判断された。

伊礼原D遺跡は河川の改修工事で分断された状態になっているが、南隣の伊礼原遺跡のグスク時代の範囲とは同一遺跡と考えられ、柱穴の粗密の状態から伊礼原D遺跡の方が中心部で、伊礼原遺跡の方は南側端部にあたる。そのことから伊礼原D遺跡はナガサガールの左岸河口部に位置するグスク時代の集落址であったと考えられ、出土遺物から15世紀～16世紀にかけての約10,000㎡の集落であったと判断される。

地 勢

北谷町の北側は標高10～30m程の緩やかな石灰岩高地が広がり、そこには極東一を誇る米空軍嘉手納飛行場が位置し、戦後、北の嘉手納町との行政区分のきっかけとなった広大な地域である。

東側は標高100mあまりの脊梁から数段の石灰岩の海岸段丘が形成されており標高80mの二段目で沖縄市との境域としている。南側は米海軍普天間飛行場の位置する標高60～70mの石灰岩台地の西側に形成された海岸段丘を横切るように西流する佐阿天川によって宜野湾市と境域としている。

西側は東シナ海に面していることから北谷町域は東高西低の地勢を成している様相である。

東側の沖縄市や南側の宜野湾市側の海岸段丘は隆起石灰岩一帯であることから保水性が悪く、段丘下には所々に湧水を排出し、特に沖積世平野部の近くでは多く、戦前まではそれを源とする水田が広がり、北谷町から南の宜野湾市までの沖積世平野部には連続して存在していた。特に北谷町の南側に位置する字北谷地域（現在のキャンプ・ズケラン）一帯は戦前までは沖縄本島の三大美田の一つされている北谷ターブクァ（北谷田圃）と呼ばれ広がっており、それらの地勢に起因しているという。

これらの段丘上の縁辺部や湧水近くには遺跡が点在し、特に宜野湾市に所在する米海軍普天間飛行場の丘陵上部の西側縁辺部（オープン・サイト）や麓は顕著で、数十箇所の遺跡が集中している^(註1)。北谷町域では北側の古い石灰岩の残りといわれる円錐形のカルスト残丘が点在し、その一つである砂辺集落背後の丘陵部一帯には、砂辺貝塚・クマヤー洞穴遺跡・サーク原遺跡・サーク原貝塚・カーシーノボントン遺物散布地・浜川御願遺跡が集中し、南側では北谷城の丘陵部一帯（北谷城・北谷城第7遺跡・玉代勢原遺跡・長老山遺跡）がそれらにあたり知られている。キャンプ桑江のある平坦部は略北西方向から南東部方向への一直線上を境として北東部は標高約30mの海岸段丘の丘陵部が連なり、南西部は標高10m前後の小段丘を介して沖積世平野部の麓に至る。ここは桑江断層^(註2)と言われ湧水の所在するラインでもある。

周辺の遺跡

旧キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査で段丘の麓から沖積世平野部にかけての一帯に、北側から千原遺跡・平安山原A遺跡・平安山原B遺跡・平安山原C遺跡・伊礼原遺跡・伊礼原D遺跡・伊礼原E遺跡・小堀原遺跡・後兼久原遺跡の遺跡が発見され密集している様相が窺える。

この沖積世平野部は戦後の米軍によって削平や客土が施され、当地域の現状は一見すると標高数メートルの低平な平野部であると見受けられるが、石灰岩の岩塊が所々に露頭が見られる。試掘調査の成果や戦前の地形図、戦中の米軍航空写真などから丘陵部の形状や河川を追って旧地形

を復元すると石灰岩微高地や河川の流路が確認でき、それらに伴う海岸線の形成過程である砂丘の発達上部に戦前の集落の配置も位置づけられ、旧地勢の様相の一旦が垣間見ることができる^(註3)。遺跡は石灰岩縁辺部の陸生土壌と形成過程の見られる海生砂地や砂丘の上に立地が見られ、基本的には内陸側から海岸よりへと、古い時代の遺跡から新しい時代への遺跡の展開の様相が窺える。それらはキャンプ桑江の東側丘陵麓に位置するウーチヌカー（湧水）や、さらに南側には奈留川（湧水）も存在しそれらを源として遺跡は形成されている。

発見された遺跡の中でも伊礼原遺跡は沖縄諸島で最古の土器とされる爪形文であるヤブチ式・東原式土器が出土している。次いで曾畑式土器、室川下層式土器、面縄前庭式土器、仲泊式土器、面縄東洞式土器、嘉徳Ⅰ式土器、嘉徳Ⅱ式土器、松山式土器、市来式土器、荻堂式土器、大山Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ類土器、カヤウチバンタ式土器、宇佐浜式土器、黒川式土器、阿波連浦下層の土器、弥生前・中期土器、玉縁口縁白磁、滑石製石鍋、カムイヤキ須恵器、青磁、華南三彩、天目茶碗、瑠璃釉などグスク時代の遺物まで連綿と出土している。

沖縄諸島の先史時代編年体系が網羅できるほどの各型式が粗密にあるものの存在していて生活の場として息の長い地域であったことが窺える。遺跡より西側の海岸線側（国道58号より）には戦前の集落まで存在し、近世においても人々の痕跡が残り生活のしやすい環境の良い地域であったことが窺える。縄文時代から弥生時代相当期を経てグスク時代、近現代まで人々の痕跡が存在する稀にみる複合遺跡である。

伊礼原遺跡は丘陵部の麓に湧水があり、その下流域に曾畑式土器を中心とする低湿地遺跡として発見され、洗い場や水を確保する場所として永い間使用された水辺の生活址が確認された空間である。それらと共に曾畑式土器期からグスク土器期までの有機質の堆積がみられ、種子や樹種から当時の植物相が把握でき環境復元や植物利用の状況が把握された南島での新たな発見であった。

さらに下流域の沖積平野部には陸生シルトや海生砂地には室川下層式土器や面縄前庭式土器・面縄東洞式土器・嘉徳Ⅰ式土器・嘉徳Ⅱ式土器の炉跡や竪穴円形配石住居址などの生活址の痕跡、黒色磨研土器、阿波連浦下層の土器の遺構、諸岡型ゴホウラの一括出土や弥生前・中期土器、玉縁口縁白磁、滑石製石鍋、カムイヤキ須恵器、青磁、華南三彩、天目茶碗、瑠璃釉などグスク時代までの遺物が混在して出土した。これは縄文時代晩期以降、同一空間で新たな人々の生活が繰り返し行われた様相で、常に改変された結果と判断された。

沖積平野部の砂丘地域は生活址として利用された空間で、低湿地の空間と連動して生活址が確認されるということで、低湿地区の伊礼原C遺跡、砂丘地区の伊礼原A遺跡をまとめて伊礼原遺跡とした。

この伊礼原遺跡の北側に西流するナガサガーがあり、その河口部分の改修工事で伊礼原B遺跡は発見され、発掘調査の結果、キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査の発端になった遺跡である^(註4)。

伊礼原B遺跡は現在のナガサガーが国道58号と接する地域で、1988年の那覇防衛施設局の河川改修の際に発見された遺跡である。発掘調査の成果をみると、標高30cmの第Ⅷ層の旧海底に堆積した枝サンゴ上部に水磨を受けた室川下層式土器、面縄前庭式土器、仲泊A・B式土器、面縄東洞式土器、嘉徳Ⅰ式土器、伊波式土器が混在して出土し、標高1m以下の第Ⅵ層の海生砂地から15～17世紀の青磁、染付、南蛮などの陶磁器と共にイノシシ・牛・馬の下顎骨と人骨片が出土している。第Ⅲ層の下部から喜名焼や壺屋焼出土以後には黄褐色シルトが1～1.5mも急激に堆積していることから、上流地域の人的改変があったことが窺われ、近世の入植者との関わりが推察される。

文化層はいずれも二次堆積であったが、東側の上流域や南側の地域に遺跡の本体が予想された。

参考文献

- 註1. 呉屋義勝ほか 『土に埋もれた宜野湾』宜野湾市文化財調査報告書 第10集 宜野湾市教育委員会 1989年
- 註2. 松田順一郎 「伊礼原遺跡砂丘区の堆積物・埋没地形と中央区・南区にみられた古地震痕跡」『伊礼原遺跡』—伊礼原B遺跡ほか発掘調査—北谷町文化財調査報告書 第26集 北谷町教育委員会 2007年3月
- 註3. 中村愿・東門研治ほか『キャンプ桑江返還に伴う試掘調査』—伊礼原B遺跡ほか発掘調査事業—北谷町文化財調査報告書 第23集 2005年3月
- 註4. 中村愿 『伊礼原B遺跡』—旧メイ・モスカラー地区雨水排水施設工事に係る発掘調査—北谷町文化財調査報告書 第8集 北谷町教育委員会 1989年

第三章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

伊礼原D遺跡は平成11・12年度の範囲確認調査である。平成10年度に当地域の米軍スクールバスターミナルが他に移転したために許可の下りた地域である。平成9年度の試掘調査の時点では稼動していることから試掘ポイントも制約があった。しかし、少ないポイントにも関わらず、表土下には客土と海生白砂層があり1.5mあたりから厚さ40cmの灰褐色混土砂層の包含層がみられ、その下面には1㎡あたりに6～7個の柱穴が確認された。包含層には青磁やグスク土器が出土することから15世紀から16世紀の生活址が考えられ、バスターミナルのほぼ全域で遺物が確認されることから、一つの集落が予想された。

それらのことを踏まえ、範囲確認調査は砂丘形成の過程を考慮し、砂丘を縦に切る形で東北から南北に幅5m、長さ100mのトレンチを米軍スクールバスターミナルを横断する形で上下に2本設定した。東側背後の丘陵部との境には平安山原B遺跡との接点と後方の丘陵部から流入しているカリガー（涸れ川）が麓で徳川と合流しナガサガーとなる地域にあたり、後背湿地（バックマッシュ）や水田の可能性を考慮し幅5m、長さ100mのトレンチを南北に設定したが、南半分のトレンチが以前の試掘調査区と重なることから、その間に30mの間隔をおいて設定をやり直した。結果的に北側の平安山原B遺跡側に幅5m、長さ60mのトレンチを設定し、南側のバックマッシュ側には30mの間を置き、幅5m、長さ40mのトレンチを設定した。北西側の平安山原A遺跡との関係を把握するために幅5m、長さ40mのトレンチを略東西に1本（東側半分に稼動しているMP施設が存在した為）設定した。

合計、幅5m、長さ100mのトレンチを2本、幅5m、長さ60mのトレンチを1本、幅5m、長さ40mのトレンチを2本設定して範囲確認調査の場所とした。各トレンチは北東側から

- 第1トレンチ（平安山原B遺跡の接点地域）幅5m×長さ60m
- 第2トレンチ（バックマッシュ地域）幅5m×長さ40m
- 第3トレンチ（バスターミナルの北側）幅5m×長さ100m
- 第4トレンチ（バスターミナルの南側）幅5m×長さ100m
- 第5トレンチ（平安山原A遺跡の接点地域）幅5m×長さ40mと命名した。

第2節 調査の経過

範囲確認調査は表層のアスファルトや客土、間層はバックホーを用いたが、包含層は基本的に手掘りで行った。

第1トレンチは標高4.2mに位置し、30cmの客土下には60cmの褐色シルトが堆積し、その下位には2～2.4m以上の黒褐色の泥炭層が堆積していた。周辺部の試掘調査の経験から、黒褐色泥炭層は水分を含んで壁面の崩落が激しいことから、幅5mのトレンチ中央西側に幅2mのサブトレンチを設け階段状に掘り下げた。黒褐色泥炭層の下位には多量の木片の後、拳大から人頭大のロー

リングを受けた石灰岩礫の堆積があり、そのレベルでローリングを受けた土器小片が点在していた。黒褐色泥炭層は南側で堆積が厚く、流水と共に壁面の崩落が激しく、即刻、写真撮影と壁面実測を行い終了した。黒褐色泥炭層のみで遺物が出土したが下面の水磨を受けた円礫の堆積状況から川底と判断された。

第2トレンチの標高は6mあるが客土が1.6mと厚く、旧表土下の土壌の堆積状況は第1トレンチと基本的に同一であった。黒褐色泥炭層は厚みがあり、流木等の木片も多く大形片の傾向があり、流路の止まる一因と判断された。

第3トレンチは標高4.4～5mに位置し、第4トレンチの北側35mに平行して設置したトレンチである。表土下0.7～1.2mの客土があり、その下位には所々に海生砂層が1～1.5mの堆積層が確認されたが、大半は暗褐色から黒褐色泥炭層との混在であることや明確な互層を呈していること、枝サンゴの跳ね上がりや表土下3m（標高1m）のビーチロック面まで泥炭層が堆積していることから、基本的に川底であることが判断された。

青磁や土器片は白砂層から散見されたが、ローリングを受けた遺物は泥炭層からの出土であった。写真撮影の後、壁面実測を行い終了した。

この第3トレンチについては地形・地籍図併合図と米軍航空写真と照合した結果、戦前のナガサガーと重なり、河川が沖積平野部で蛇行している様相が想定された。その結果、北側の平安山原A・B・C遺跡とは河川を挟んで対岸の別の遺跡であることが想定できた。

第4トレンチは標高4.2～5.3mに位置し、現在のナガサガーの北側約50mにほぼ並行して略北東方向に設定した。当初、北側約30mに設置する予定であったが、その線上には横断するパイプラインがまだ稼働しているのでユーティリティの確認を米軍にしてもらい十数メートルは避けるようにとの要請があり、結果的には米軍スクールバスターミナルの中央を横断する形状となった。

第4トレンチは幅5m、長さ100mのトレンチを設定した。このトレンチを10m間隔で区切り、東側から1グリッド、2グリッド、3グリッド……10グリッドとし、各グリッドは4トレンチ1グリッド、4トレンチ2グリッド…と命名し、4-1、4-2、4-3と略称して使用した。

表土下1.2～1.4mの客土があり、その下位に厚さ約40cmの濁った淡灰褐色混土砂層があり、その下面から径20cmから径40cm大で、深さ30cmから50cmの柱穴が確認でき、後者の方が多かった。

4-1・2グリッドの南半分には暗灰褐色砂層の落ち込みがあり、そこから多量の「くびれ平底土器」と貝殻が出土した。出土した土器は細片のみで大形破片がみられないことから往時の二次堆積の可能性も考えられた。4-3～5グリッドでは近世の切石による石敷きや水路状の遺構が検出された。4-5～8グリッドでは15～16世紀の柱穴群でプランを検証できないほどの密度であった。4-6グリッドの中央部で柱穴やその周辺部で人骨の出土があった。散在した破片の出土であることから同時期のものとは判断されなかった。4-9・10グリッドの北側半分ではナガサガーの河川敷と思われる泥質の流路がみられ、柱穴も洗われた様相が確認された。

第5トレンチは幅5m×長さ40mで、標高3mにあたる。当初、第3トレンチから北側50mの位置に並行して設定する予定であったが、当地域はMP施設の道路であることと、厚さ約40cmのコンクリート床が約50m×30mの長方形の施設の中央部にあたることから断念し、さらに30m離し結果的には80m北側の草地に設定した。表土下約40cmの客土があり、その下位は濁った暗褐色混貝砂層の文化層が確認できた。トレンチの北東角で人骨の下顎骨も出土したが、周辺の検証を試み

たが本来の埋葬址の可能性は少なく二次堆積の可能性が高いことから、北側のMP施設の移転後、改めて範囲の確認を行うことで記録をとり埋め戻した。

伊礼原D遺跡と伊礼原遺跡（砂丘区）との状況が判明すると同時にその中間地域の包含層の確認が必要となった。そのためナガサガの右岸上流部に4×4mの試掘穴を2ヶ所に設定した。その名称は伊礼原D遺跡のトレンチ設定につづきNo.6、No.7とした。下流部のNo.6と上流部のNo.7とは10mの間を置いた。

No.6試掘穴は標高5.2mにあたり、標高1.7mで地下水が湧出したので、これ以下の調査は断念した。No.6試掘穴では海生砂層に柱穴や土器が出土した。砂層の上部の柱穴は15～16世紀のもので、砂層下部の土器は弥生時代相当期のものと判断された。

No.7試掘穴はNo.6試掘穴とはわずか10m東側のみしか離れていないが、表土下1mまでは海生砂層で形成されていたが、それ以下は灰褐色から暗灰褐色の有機質層で標高1.7mの地下水が湧出するレベルまで堆積していた。その下面と下層の灰白色砂層の境目でゴホウラの貝輪が3点、一括で出土した。

No.6・7試掘穴の境目あたりが後背湿地（バックマッシュ）との境目にあたり、急激に落ち込む様相が想定できた。この有機質層の上部から土層観察に際して淡水産巻貝であるマルタニシの存在していることを千葉県立中央博物館の黒住耐二氏に指導・助言を得た。

参考文献

- 註1. 中村 愿 『伊礼原B遺跡』—旧メイ・モスカラー地区雨水排水施設工事に係る発掘調査— 北谷町文化財調査報告書 第8集 北谷町教育委員会 1989年
- 註2. 中村 愿・東門 研治 ほか 『キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査』—伊礼原B遺跡ほか発掘調査事業— 北谷町文化財調査報告書 第23集 北谷町教育委員会 2005年

調査日誌

平成12年	
2月15日	スクールバス駐車場跡、東西に100m×1.5m2本、表層から1m掘り下げまた、駐車場東側に南北に40×5m1本掘り下げ駐車場北側に南北に60×5m1本の表土層
2月18日	遺物探し・No.4掘削
2月19日	No.1 No.3 No.5の掘削
2月21日	ユンボによる掘削 No.3 No.5 No.1。 プレハブ設置
2月22日	No.1トレンチ掘削
2月23日	No.1トレンチ掘削（ユンボ）No.5トレンチ周辺の土手作りNo.3.4トレンチ周辺の土手作り・遺物洗い
2月24日	・No.2トレンチ周辺の土手作り作業ユンボ（04）
2月25日	・No.2トレンチ土手作り、ユンボ（07）
2月24日	・No.2トレンチ周辺の土手作り作業ユンボ（04）
2月28日	・No.4（5×100m）トレンチ北壁の清掃・No.3（5×100m）トレンチ北壁の清掃・No.4トレンチ北側に東西に1m間隔に釘を打つ（断面図割付準備）
2月29日	No.4トレンチ西側とNo.3トレンチの北壁清掃・No.4トレンチ東側を起点として、約60mまでの北壁の分層及び写真撮影を行う・No.4トレンチ北側に釘打ち作業（1m間隔）
3月1日	No.3 No.5 No.1トレンチの清掃 ・No.4トレンチ分層及び写真撮影
3月3日	・グリッド設定
3月6日	・グリッド設定 ・水抜き作業 ・水道工事
3月7日	No.4トレンチの平面清掃及び掘削 ・No.3トレンチ北壁面、分層・水道工事
3月8日	No.4トレンチ掘り下げ ・No.3トレンチ分層
3月9日	No.4トレンチ掘削
3月10日	No.4トレンチ掘削 ・No.3トレンチ分層
3月13日	No.4淡灰黒色層掘り下げ ・No.1トレンチ、No.3トレンチ水くみ上げ
3月14日	No.4掘り下げ・No.3平面清掃・No.1ミニユンボによる掘削、水抜き作業（発電機使用）ミニユンボ
3月15日	No.4トレンチ混貝土層掘り下げ（4.1.2.5.6）・No.3トレンチ壁削り写真撮影・No.1トレンチユンボ
3月17日	No.3トレンチ掘削作業
3月21日	No.3トレンチ掘削
3月22日	No.3トレンチ掘削 ・割付
3月23日	No.3トレンチ、3-8-9掘削 ・No.1水くみ上げ
3月24日	No.3トレンチ、3-1-3図面セクション ・3-5-10壁面清掃
3月27日	No.3トレンチ、3-5掘り下げ ・3-1セクション図作成
3月28日	No.3トレンチ掘り下げセクション図作成 ・3-1平面清掃
3月29日	No.3トレンチ掘り下げセクション図作成
3月30日	No.3トレンチ掘り下げ、写真撮影、図面作成

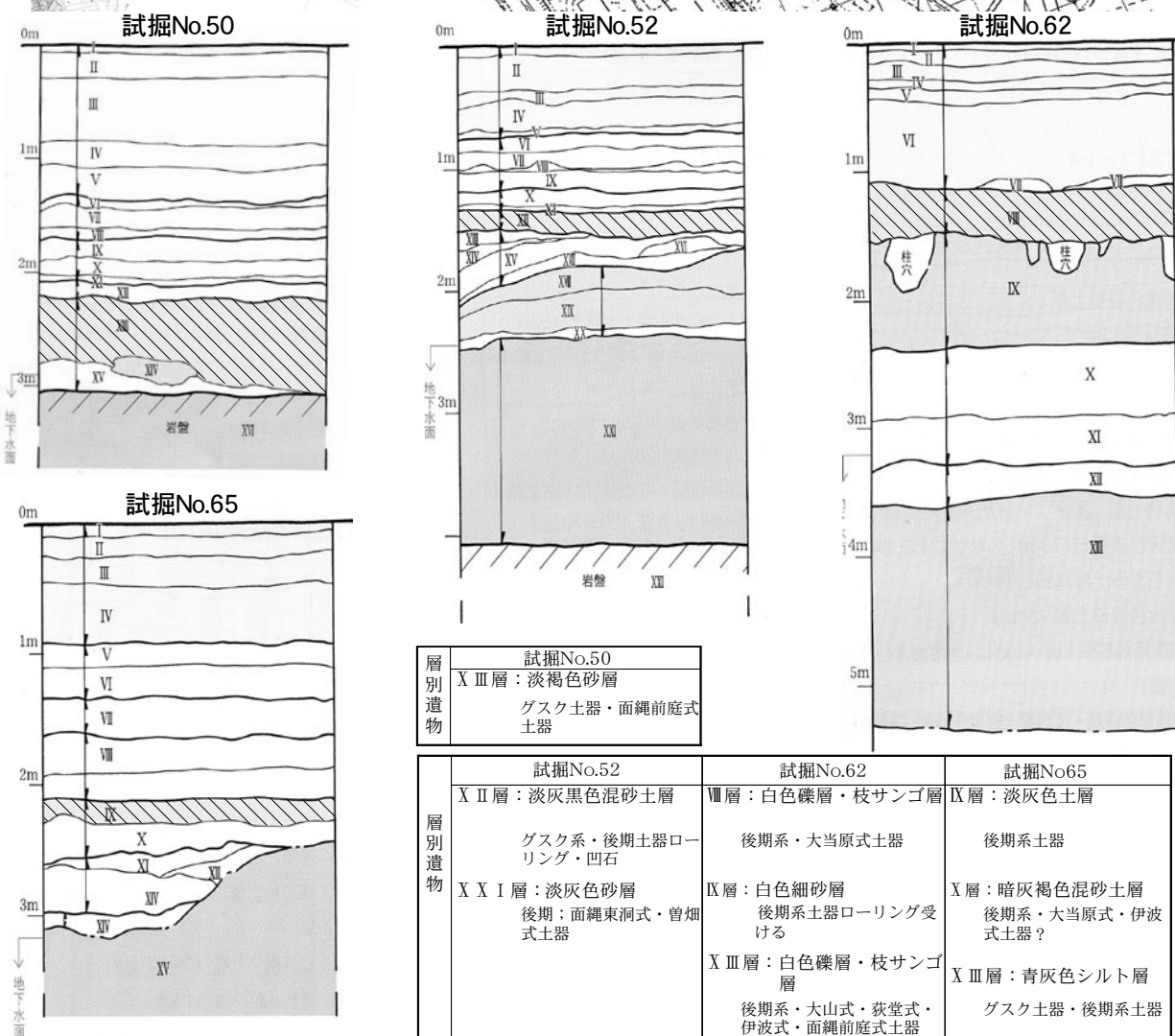
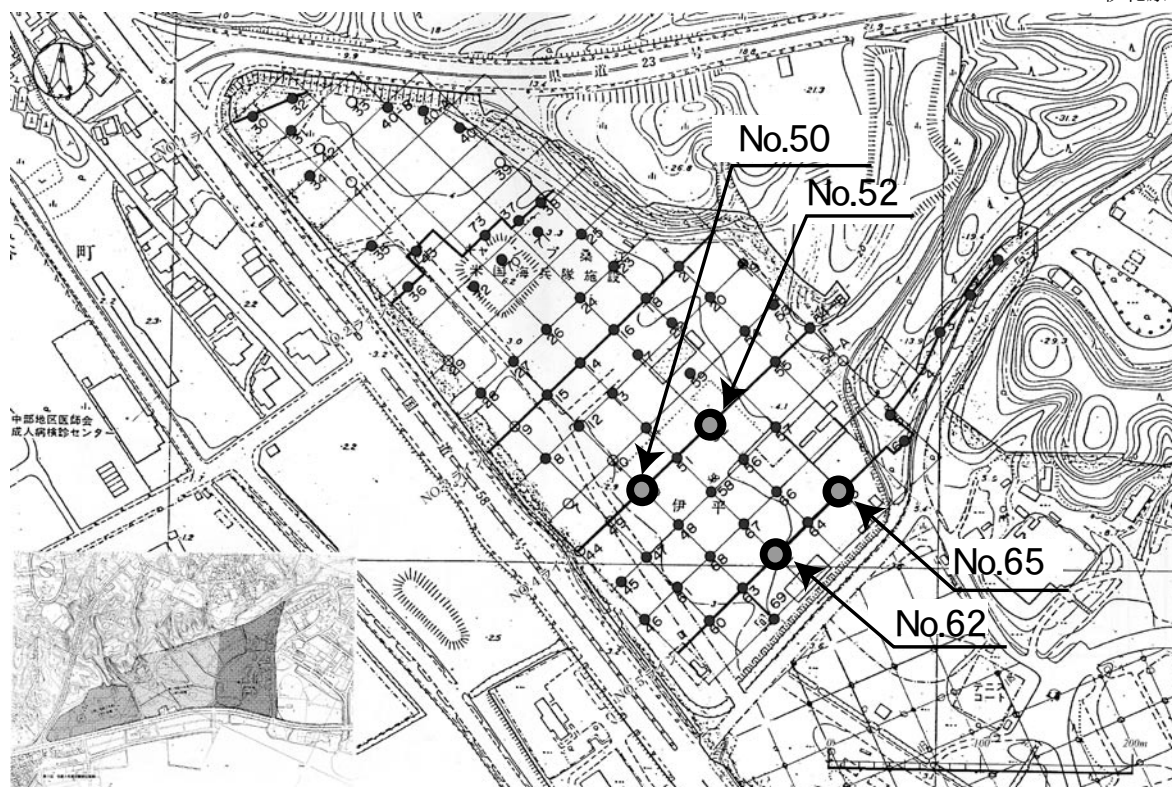
調査日誌

平成12年

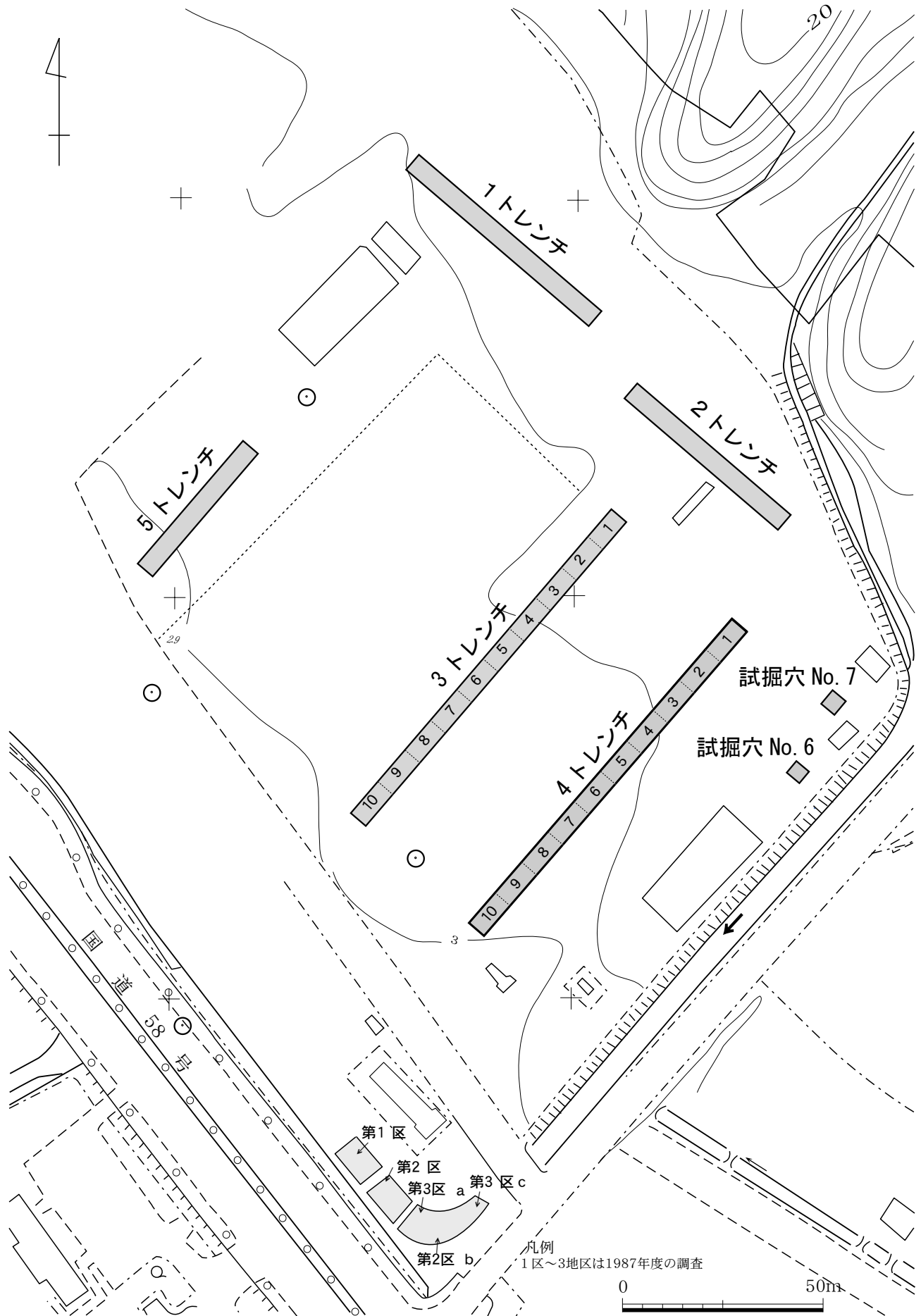
- 2月15日 スクールバス駐車場跡、東西に100m1.5m2本、表層から1m掘り下げまた、駐車場東側に南北に40×5m1本掘り下げ駐車場北側に南北に60×5m1本の表層
- 2月18日 遺物探し・No.4掘削
- 2月19日 No.1 No.3 No.5の掘削
- 2月21日 ユンボによる掘削 No.3 No.5 No.1。 プレハブ設置
- 2月22日 No.1トレンチ掘削
- 2月23日 No.1トレンチ掘削（ユンボ）No.5トレンチ周辺の土手作りNo.3.4トレンチ周辺の土手作り・遺物洗い
- 2月24日 ・No.2トレンチ周辺の土手作り作業ユンボ（04）
- 2月25日 ・No.2トレンチ土手作り、ユンボ（07）
- 2月24日 ・No.2トレンチ周辺の土手作り作業ユンボ（04）
- 2月28日 ・No.4（5×100m）トレンチ北壁の清掃・No.3（5×100m）トレンチ北壁の清掃・No.4トレンチ北側に東西に1m間隔に釘を打つ（断面図割付準備）
- 2月29日 No.4トレンチ西側とNo.3トレンチの北壁清掃・No.4トレンチ東側を起点として、約60mまでの北壁の分層及び写真撮影を行う・No.4トレンチ北側に釘打ち作業（1m間隔）
- 3月1日 No.3 No.5 No.1トレンチの清掃 ・No.4トレンチ分層及び写真撮影
- 3月3日 ・グリッド設定
- 3月6日 ・グリッド設定 ・水抜き作業 ・水道工事
- 3月7日 No.4トレンチの平面清掃及び掘削 ・No.3トレンチ北壁面、分層・水道工事
- 3月8日 No.4トレンチ掘り下げ ・No.3トレンチ分層
- 3月9日 No.4トレンチ掘削
- 3月10日 No.4トレンチ掘削 ・No.3トレンチ分層
- 3月13日 No.4淡灰黒色層掘り下げ ・No.1トレンチ、No.3トレンチ水くみ上げ
- 3月14日 No.4掘り下げ・No.3平面清掃・No.1ミニユンボによる掘削、水抜き作業（発電機使用）ミニユンボ
- 3月15日 No.4トレンチ混貝土層掘り下げ（4.1.2.5.6）・No.3トレンチ壁削り写真撮影・No.1トレンチユンボ
- 3月17日 No.3トレンチ掘削作業
- 3月21日 No.3トレンチ掘削
- 3月22日 No.3トレンチ掘削 ・割付
- 3月23日 No.3トレンチ、3-8-9掘削 ・No.1水くみ上げ
- 3月24日 No.3トレンチ、3-1-3図面セクション ・3-5-10壁面清掃
- 3月27日 No.3トレンチ、3-5掘り下げ ・3-1セクション図作成
- 3月28日 No.3トレンチ掘り下げセクション図作成 ・3-1平面清掃
- 3月29日 No.3トレンチ掘り下げセクション図作成
- 3月30日 No.3トレンチ掘り下げ、写真撮影、図面作成

3月31日 No.3トレンチ セクション図作成
 4月5日 No.3トレンチ セクション図作成 ・水汲み上げ
 4月6日 No.3トレンチ セクション図作成
 ～11日
 4月12日 No.3トレンチ セクション図作成 ・No.3トレンチ東側畑跡？他の清掃及び写真撮影
 4月17日 No.3トレンチ、下層確認作業
 4月18日 No.3トレンチ確認及び埋め戻し水くみ上げ
 4月19日 No.3トレンチ埋め戻し、水くみ上げ
 4月20日 No.3トレンチ埋め戻し、ユンボ ・No.4トレンチ 4-1.2南北東壁セクション図
 4月21日 No.3トレンチ埋戻し ユンボ ・遺物洗い ・図面作成
 4月24日 No.3トレンチ埋め戻しと整地 ・図面作成 No.4トレンチ 4-1東南壁
 5月11日 No.4トレンチ北壁清掃及びレベル値設定
 5月15日 4-1 南壁図 、4-3～西側へ北壁面の図面作成
 5月16日 4-1.2.南壁図面作成 ・4-3～北壁図面作成
 5月19日 図面書き、北壁4-6.7.8
 5月25日 No.4トレンチ 4-6.7南壁図面作成
 5月26日 No.4トレンチ、4-6.7南壁図面作成 ・遺物洗い
 5月31日 No.5トレンチ北壁清掃（壁削り）
 6月1日 No.5トレンチ内にエレベーション・杭を設置 ・北壁面図面作成
 6月2日 No.5トレンチ北壁、東壁、図面作成 ・東側サブトレンチ掘り下げ
 6月5日 No.5トレンチ 北東角サブトレンチ内掘り下げ
 6月6日 No.4トレンチ、4-8.9掘り下げ
 6月7日 No.4トレンチ、4-8.9掘り下げ、4-7の掘り下げ
 6月9日 No.4トレンチ、4-7掘り下げ
 6月15日 No.4トレンチ、北壁清掃及びレベル値設定
 7月5日 台風対策 ・遺物洗い
 7月11日 ・発掘作業再開 ・4-7.8.9グリッド壁面、床面清掃
 7月12日 4-6.7平面清掃 ・4-5西側平面清掃 ・4-1.2平面清掃
 7月13日 4-1.2.5掘り下げ
 7月14日 4-3.4、戦前の住居跡、検出面清掃 ・No.5トレンチ、5cm掘り下げ
 7月17日 No.5トレンチ掘り下げ
 ～18日
 7月24日 No.5トレンチ掘り下げ（No.5トレンチ、No.4トレンチ水くみ上げ） ・戦前の住居跡実測
 7月25日 No.5トレンチ掘り下げ No.4人骨取上げ及び写真撮影

平成12年 8月11日	4-3掘り下げ
8月18日	No.4ふるいがけ
8月21日	4-5.6柱穴掘り下げ
8月29日	4-10掘り下げ ・ 柱穴実測
8月31日	4-10表面清掃 平面図実測
9月1日	4-1茶黄色混砂質層掘り下げ・4-10掘り下げ
9月6日	4-4・4-10掘り下げ
9月18日	4-1表面清掃・4-1.2.3.4.5.6掘り下げ
9月19日	4-3.5.6掘り下げ・4-6平面清掃
9月22日	4-1黒色混貝土層掘り下げ・4-1.3.5掘り下げ
9月25日	4-1黒色混貝土層掘り下げ・4-1.3.5掘り下げ
9月27日	4-1黒色混貝土層掘り下げ・4-1.3.5掘り下げ
9月29日	4-4.10掘り下げ ・ 4-1壁面写真撮影
10月2日	4-1黒色混貝土層掘り下げ・4-1.3.5.6掘り下げ・4-6柱穴
10月13日	4-3.5.10黒色砂質土層掘り下げ
10月16日	4-6黒色砂質土層掘り下げ
10月24日	4-4.5.10掘り下げ
10月25日	4-5掘り下げ・黒色砂質層
11月7・8日	4-1.4.5掘り下げ・4-6溝状遺構（人骨）
11月15日	4-6黒色砂質土層掘り下げ
11月24日	4-4.6掘り下げ ・ 溝状遺構の実測。写真撮影
12月11・12日	4-2.3.4掘り下げ・黒色混貝土層
12月12日	4-3.4掘り下げ
12月13日	4-3.4.5 ・ 4-6灰黒色上面、灰黒色砂質土上面
12月19日	4-1.2.5掘り下げ・4-5淡灰色砂質土層
12月20日	4-1.2掘り下げ ・ 4-5攪乱 ・ 4-6黒色砂利層
12月22日	4-2掘り下げ ・ 4-5砂利層、淡灰黒色土層
12月25日	4-5落ち込み部 ・ 4-6淡灰黒色層、淡灰黒色利層
12月26日	4-6淡灰黒色砂質土層
1月16日	4-6掘り下げ
1月18日	4-6掘り下げ ・ 淡灰緑色層
1月22・23日	4-4.6掘り下げ ・ 4-5.6柱穴
2月9日	4-4.5 ・ 4-5.6灰黒色砂質土層
2月19・20日	4-5 2号炉、柱穴 ・ 3号炉 ・ 2～3号炉実測
2月21日	4-4掘り下げ ・ 4-5柱穴
3月2日	4-2.3.4.5.6掘り下げ
3月19日	4-1 4-3.4.5 4-5 4-6掘り下げ
3月22日	4-5白色砂利層 ・ 黒色砂質土層、黒色砂質層
3月23日	4-5柱穴 ・ 黒色砂質土層 ・ 柱穴実測
3月29日	4-5. ? IV 実測確認 4-5表面清掃 ・ 4-6掘り下げ ・ 調査完了写真



第4図 試掘ポイント(『キャンプ桑江試掘調査』)(2005)



第5図 伊礼原D遺跡グリッド配置

第3節 層序

本遺跡は第5図に示したようにキャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査（2005）で試掘No.50、52、60、62層序と今回、遺跡の範囲確認をするために1～5トレンチを設定した。

1・2トレンチは東側（山手）、3・4・5トレンチは東西（海側）に3本設定した。

以下、これらの層について第6図から第9図に示し、トレンチごとに略述する。

a. 1トレンチ（巻首図版1）

標高4.2mに南北方向にトレンチを設定した（第6図）。層序は南北方向にほぼ水平に堆積している。遺物包含層は確認できなかった。

客土：部分的に見られる。

黄色土：一部マンガンを含むもので、南側では細かい白粒を含む。

黄灰色土：旧表土。カワニナを少量含むもので、マンガンの含量や色合いによって6つに細分した。

淡灰色土：カワニナを含む層で、カニの巣穴なども見られる。

カワニナの含量や灰色の濃淡により4つに細分した。

泥炭層：検出された人骨で放射性炭素年代測定を行った結果補正年代2390±30年（第五章1節参照）

白砂粗砂層：ローリングを受けた面縄前庭式土器の胴部（第22図12）が出土。

b. 2トレンチ（巻首図版1）

1トレンチの南側、海岸から1トレンチほぼ同位置に南北方向にトレンチを設定（第7図）したが、遺物包含層は確認できなかった。

1トレンチと同様、戦前の水田址の可能性が高く、上層に米軍基地建設に伴う造成土の客土が厚く堆積する。その下部には土が締まった旧表土が見られる。

c. 3トレンチ（巻首図版1・第8図）

東西方向に3本のトレンチを設定した中の真ん中のトレンチで、10グリッドに区切った。

客土：厚さ80cm～170cm、米軍基地建設のための土。コーラルや砂利などの層で、ほぼ全面に堆積するが、3-5、3-8、3-10でパイプ埋設のために深く掘り込んだ部分がある。3-4はコンクリートが検出されたため、下部は掘り下げなかった。

淡黄色土：旧表土層。

淡灰～茶砂質土：マンガンをカワニナを含む層で細かく分層される。下部の方では赤状斑文が若干含む。

灰色土：粗い砂質で、カワニナを少量含み、下部にカワニナが多くなる傾向があり、マンガンは少量見られる。その下部ではやや赤み持つ層になる。山手側の3-1と3-2の下部で検出され、特に3-1では厚いようである。

灰茶色土（カワニナを含む）。

淡青灰色土：やや粘質である。

黒色砂質土パミス 3-3。Ⅲ

淡灰色粘砂質土マンガ下3-3

灰・淡黒色土層：Ⅲ層。3-5で石列より下部の層。土器379点、染付碗、褐釉陶器10点、タイ産陶器、中国色絵磁器（第34図5）、青磁碗、染付碗は芭蕉文で、15～16世紀代に属するものである。

灰色枝サンゴ層は3-2で確認。Ⅲ層としたものである。土器胴部1点出土。

灰色砂層Ⅳ層3-2

枝サンゴ層：Ⅳ層としたもので、3-2で確認。

泥炭層：Ⅴ層、3-2で確認。

淡灰緑色土層：3-8で見られる。土器の胴部56点出土。

淡青灰色土：3-1やや粘質である。泥炭層のことか

地山。

下部で樹痕が検出されている（巻首図版1）。樹痕は地形が安定していることの現れだという。（松田2007）

d. 5トレンチ

Ⅱ層：淡茶褐色砂層、淡灰色石混土、淡灰黒色粘質土などが見られる。場所によって若干色が異なる。

青磁の碗・皿などが数点出土した。

Ⅲ層は淡灰黒色砂混じり土層である。青磁が出土。

後期系土器が13点出土、くびれ平底土器も得られている。

淡褐色砂質層出土の人骨で、放射性炭素年代測定の結果、補正年代850±30年である。（第五章1節参照）

e. 4トレンチ

砂丘地に形成された本トレンチの基本層序は①層（客土米軍の整地土）、②層（旧表土戦前の耕作土）、③層（淡灰黒砂質土層）、④層（淡灰～黒色混貝土層）、⑤層（白砂層）、⑥層（枝サンゴ層）、⑦層（ビーチロック）である。

遺物を包含するのは②層、③層（黒褐色砂質層）、④層（淡灰～黒色貝土層）である。

①層:客土

表土下0.7～1.2mの客土。米軍の基地建設により整地した層で、コーラルや褐色土などの客土である。

全体的にほぼ水平に整地されているが、やや西側（海）に低くなる。

②層：旧耕作土

米軍基地建設以前の旧耕作土で、本トレンチ全面に見られる。

特に4-3・4では石列・石敷遺構が検出され、厚さははっきりしない。4-8・9・10に厚く堆積する。

出土遺物は沖縄産の陶器などがある。

戦前遺構の大型石列遺構や石敷遺構などが検出される。

-褐色土層。4-10沖縄産施釉陶器・本土産磁器

③層：淡灰～黒色砂質層

4-5・6・7で見られる。下面に多数の柱穴と3基の炉址の検出された。柱穴の覆土である。

遺物は白磁、青磁、染付、褐釉陶器などが出土。

柱穴の中から貝塚後期の土器などが出土しているが、下層に存在した貝塚後期の包含層を壊したものである。

黒色土層

4-8に見られる。4-9では色が薄くなり、淡灰色土層となる。

青磁、褐釉、染付などの出土遺物は前述の黒色砂質層と大差はないので、同じ層と思われる。

川底と考えられている池状遺構の部分で、その為、土の割合が高いと思われる。

黄色土層：4-9・10トレンチで淡灰色土層の下部で見られる。出土遺物には褐釉陶器がある。

④層：黒色混貝土層

淡灰～黒色の土に貝殻を含む混貝土層で色調は淡灰～黒色を呈する。貝塚後期の層と考えられる。

4-1～4および4-8の一部に見られ、特に4-1・2では南側に深くなる（巻首図版2）。後期系土器や貝殻などを包含する層で、4-1・2で厚く、4-3・4は薄なり、上層との区別は明瞭でない。4-5・6では、混貝土層は確認できないが、貝塚後期の土器が出土することから③層の時期の柱穴に壊されたものである。4-1・2ではシャコガイが多く、アラスジケマンガイが少ないようである。

白あるいは灰色砂利層、淡灰黒色砂利層とされるものを含む。4-5・4-9・4-6で検出されている。

砂利層：4-9で確認。

⑤層：白砂層

上層からの影響で上部は灰色が強く下部以降するに従って、白色が強くなる。今回の試掘調査はこの段階で調査を止めた。

灰色砂層

⑥層：枝サンゴ層

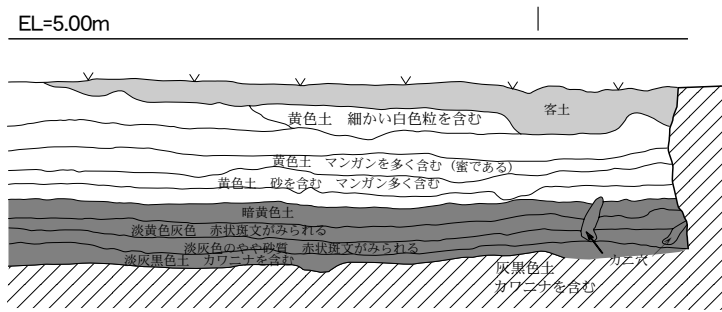
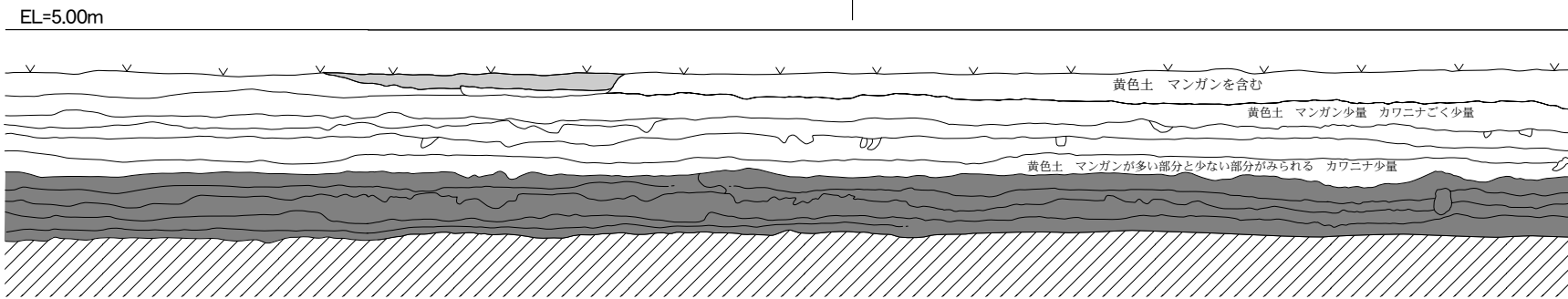
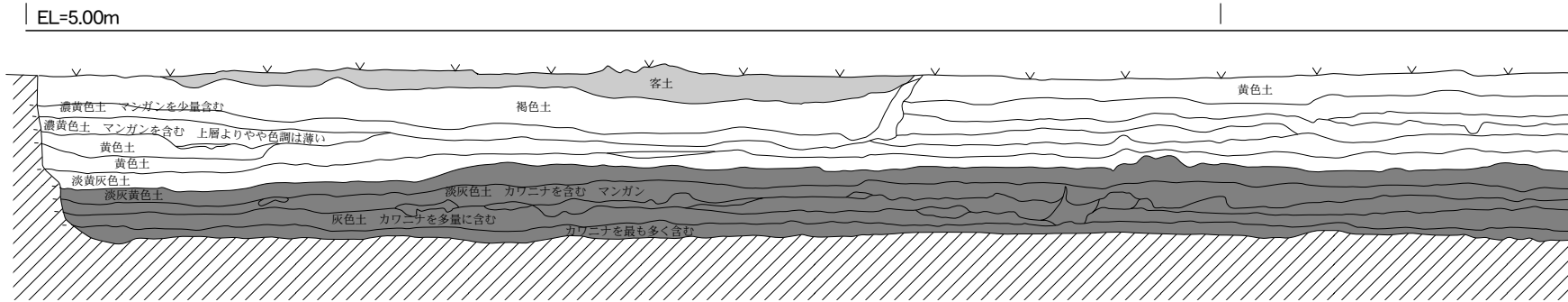
今回の一部（3トレンチや試掘No.6）と試掘No.50、52、60（第4図）で確認されている。試掘No.6で確認されている。

伊礼原E遺跡でも確認されている。

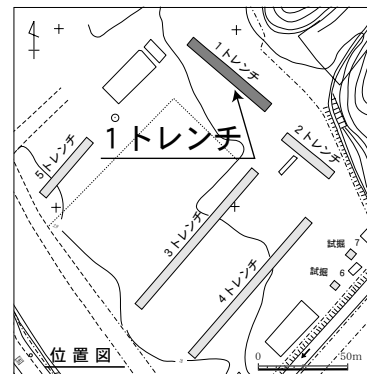
⑦層：ビーチロックは試掘No.50・52（第4図）で確認されている。ビーチロックは海浜堆積物が主に炭酸カルシウムによるセメント作用で膠結された板状の石灰質砂礫岩で、旧海水準の指標ともなっている。

参考文献

田中好國(1995)；ビーチロックの研究小史、地理科学、vol.50,no.1,p.45



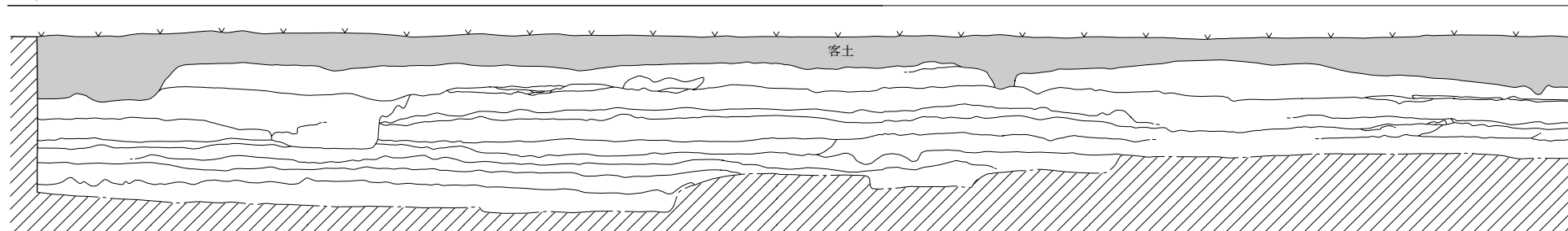
- 凡例
- ① 客土
 - ② 黄色土(カワニナ含む)
 - ③ 淡灰色土 (カワニナ含む)



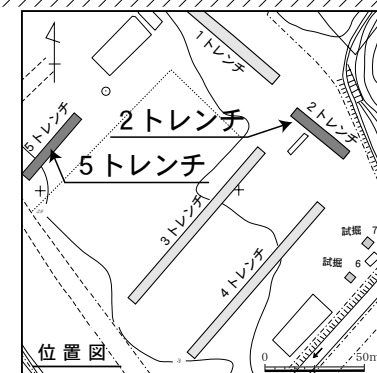
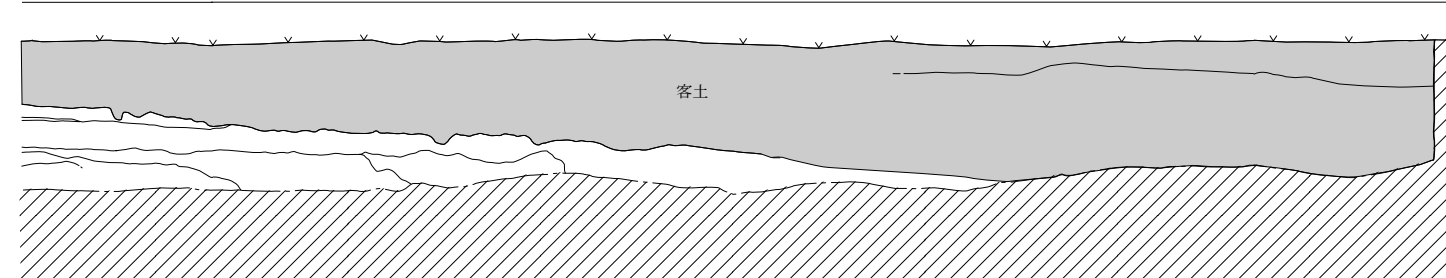
第6図 1トレンチ東壁層序

2トレンチ東壁

EL=5.40m

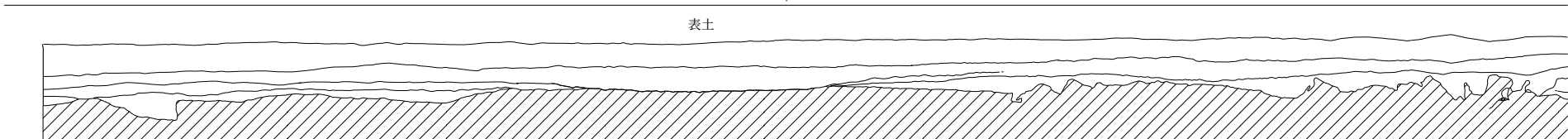


EL=5.40m

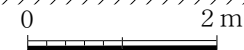
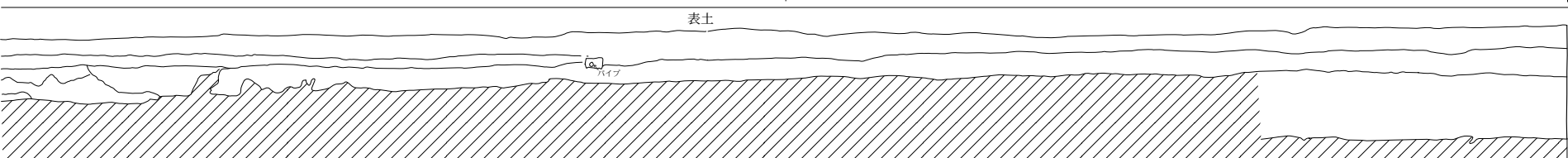


5トレンチ北壁

EL=4.00m

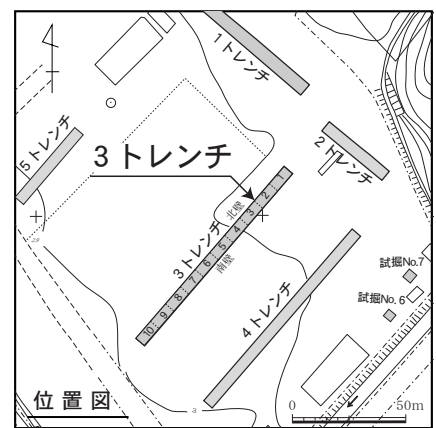
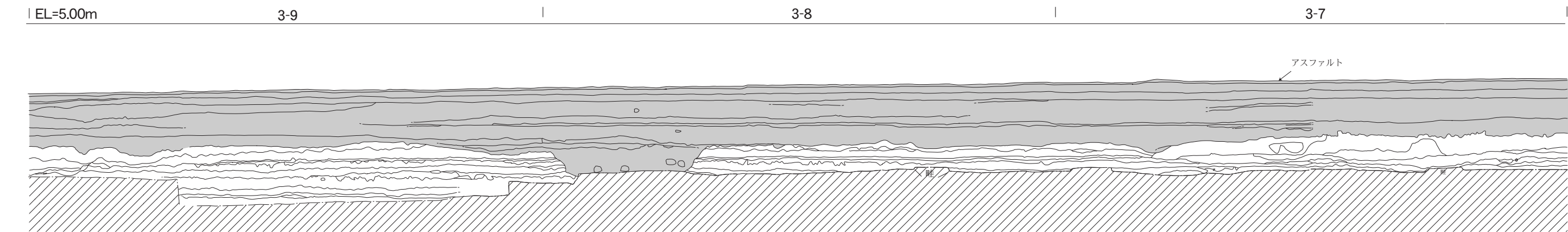
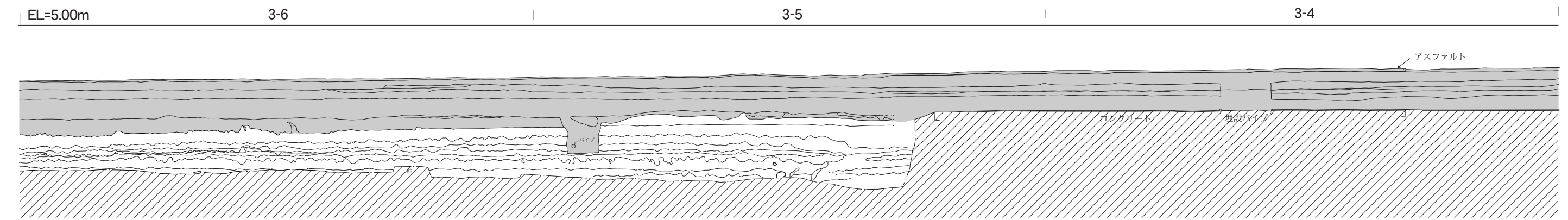
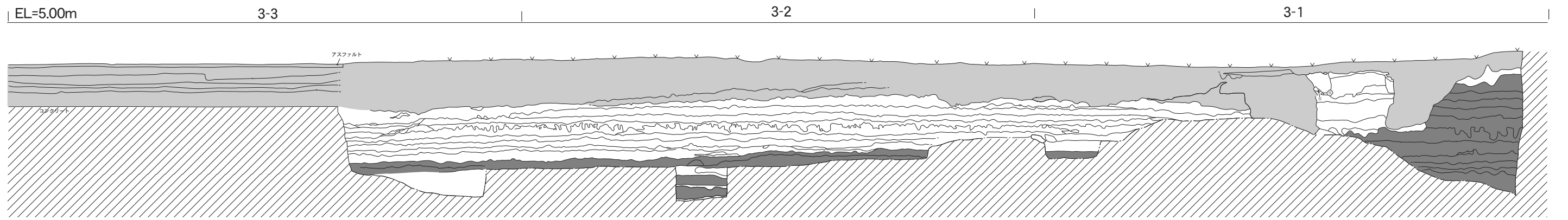


EL=4.00m

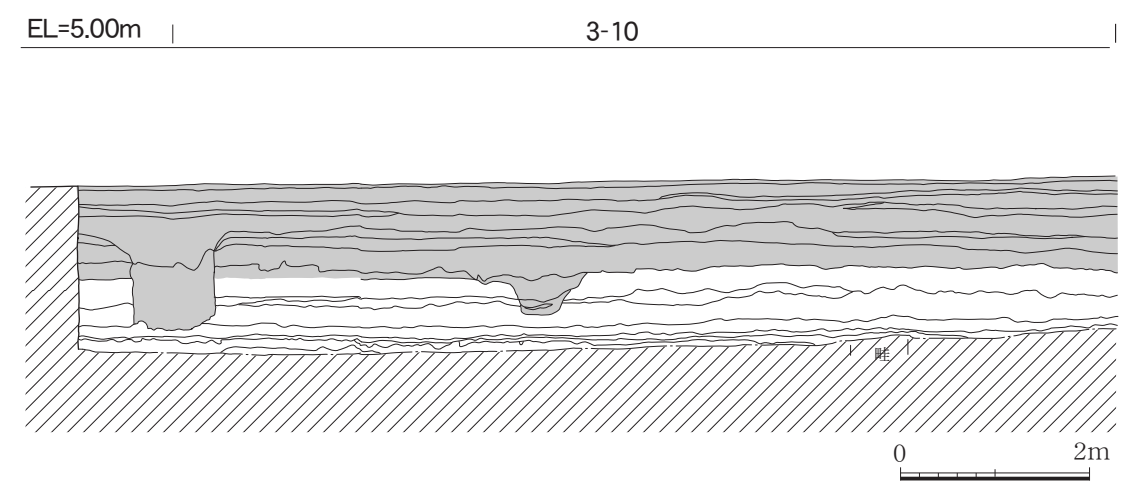


伊礼原D遺跡

第7図 2トレンチ東壁・5トレンチ北壁層序



- 凡例
- ① 客土
 - ② カワニナ層



第8図 3トレンチ北壁層序

第4節 遺構

本遺跡出土の遺構は近世とグスク時代の2つの時期が確認された。

近世の遺構とされるのは戦前遺構、石列および石敷遺構、池状遺構である。

グスク時代の遺構と考えられるのは4-5・6を中心に検出された柱穴群である。以下に略述し、図および図版は各々の項で示す。

1. 米軍による水道パイプの敷設（巻首図版4）

4-4でパイプ南北方向に直径約20cmの鉛管のパイプ（パイプ①）と4-3で南東～北西に直径約5cmの鉛管（パイプ②）が1本敷設されていた。米軍基地建設時のものである。

2. 戦前～近世遺構

4-3～4にかけてⅡ層で検出された遺構。石灰岩を用いた石列2列、これに伴う水路跡が2カ所が検出された。なお、石列は3トレンチでも検出されているが図は省略した。

出土遺物は土器、青磁、褐釉陶器、沖縄産施釉・無釉陶器、円盤状製品、瓦、青銅の釣り針などである。

青磁は雷文帯や線刻蓮弁文の直口碗や外反皿、盤、白磁の碗・皿、タイ産陶器や沖縄産施釉陶器の掛け分け碗、鉢、急須、無釉陶器の摺り鉢・火炉・壺・瓶などが出土している。これらのうち、土器や青磁や白磁などは下部にある貝塚後期や15～16世紀の時期の遺物が石列などの遺構を作るときに掘り起こされたものと思われる。

a. 石列・石敷遺構（第12図・図版1）

4-3・4で検出されたもので10cm～50cm大の石灰岩の石を列状にあるいは敷した遺構である。3-5でも検出された。

ア) 石列①

4-4に南西から北東にのびる石列で幅1m、長さ約3mである。南西側の石列に使われている石の大きさは10cm～20cm程度で、大きめの石を配し、面取りされ、ほぼ水平に検出されている（第12図）。中込石は約10cmのものが用いられている。後述の石列②と平行に検出されていることから段差をもつ通路（道路）の様なものと思われる。

イ) 石列②

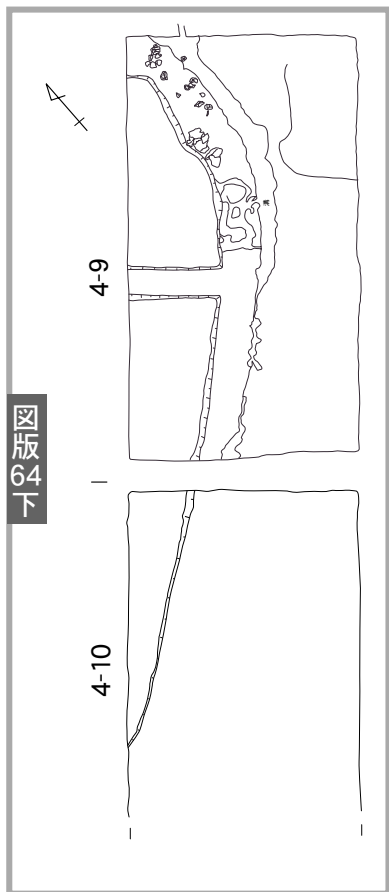
4-3～4-4に南西～北東に幅約2mに伸びる石列で、2本の鉛管パイプで壊されているが、3トレンチに検出された石列に通ずるものと思われる。4-3では水路①にぶつかる。石列の中には風化したサンゴ礫も含まれている。出土遺物は後期系土器5点、染付、褐釉陶器などがある。

b. 水路址

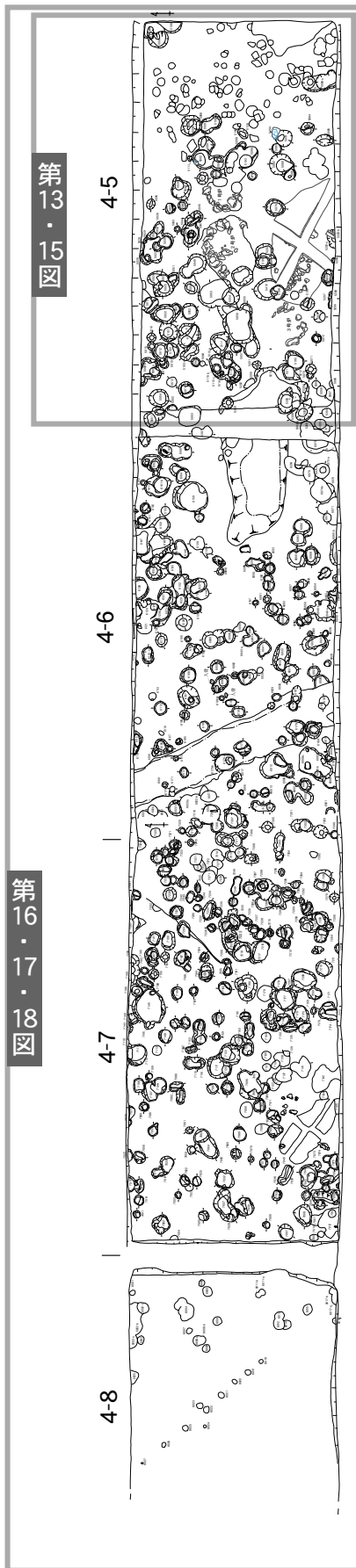
幅30cmほどの石列が平行に2基検出された。それに伴い、木杭が検出されたことから水路址と考えられる。2つの遺構は「L」字状に連続しており、川へ流路、あるいは排水施設と考えられる。

ア) 水路①

4-3の中ほど、北壁よりに約30cm離れて、長さ150cmの石列がほぼ平行に検出された。その南側に、石列に対してほぼ垂直方向に12本の木杭が約10cm間隔で突き刺されるように検出された（第12図）。木杭は横断面が方形を呈する木材（第12図）、横断面が円形の木枝（第11図）が2種類見られる。



版図 64



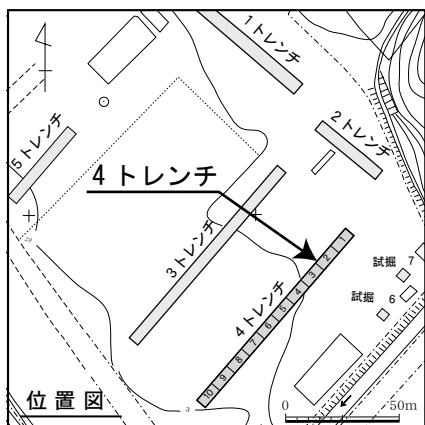
第13・15図

第16・17・18図



版図 64上

第12図



第10図 4トレンチの遺構及び区割り

イ) 水路②

4-3のほぼ中央にグリッドラインとほぼ平行に幅35cm、長さ200cmの石列がほぼ平行に並ぶものである。その南側には前述の水路①と同様、木杭が確認できる。

c. 石敷遺構

4-3、4-4のⅡ・Ⅲ層にまたがって検出された遺構である。

出土遺物は土器15点、染付の直口口縁碗、褐釉陶器の壺、瓦、沖縄産施釉の碗胴部、沖縄産無釉陶器のすり鉢、壺など出土した。この他に土器やヒメジャコの二枚貝有孔製品、オオツタノハ貝輪など下部の時期の遺物も出土している。土器の中にはグスク土器の底部や胴部なども含まれている。

d. 池状遺構（第10図・図版64）

4-8～10の北側半分に検出された淡色細砂層の落ち込みである。幅1.7m×長さ14mの北側に弧状落ち込むことから北側に流れていた川に関連するものと思われる。出土遺物は染付の直口口縁碗やタイ大型壺、褐釉陶器などがある。ここでは石列との関連で、近代の時期に含めたが、出土遺物からは15～16世紀に属する可能性も考えられる。

3. 15世紀～16世紀の遺構

a. 炉（巻首図版5）

拳大から人頭大の石を「コ」状に高さ約30cmほど積み上げたもので、炭や焼け土などが検出されたため「炉」とした。検出された場所はいずれも4-5グリッドで、近接して検出された。東側（山手）～西側（海側）の順に1号炉、2号炉、3号炉と呼称した。

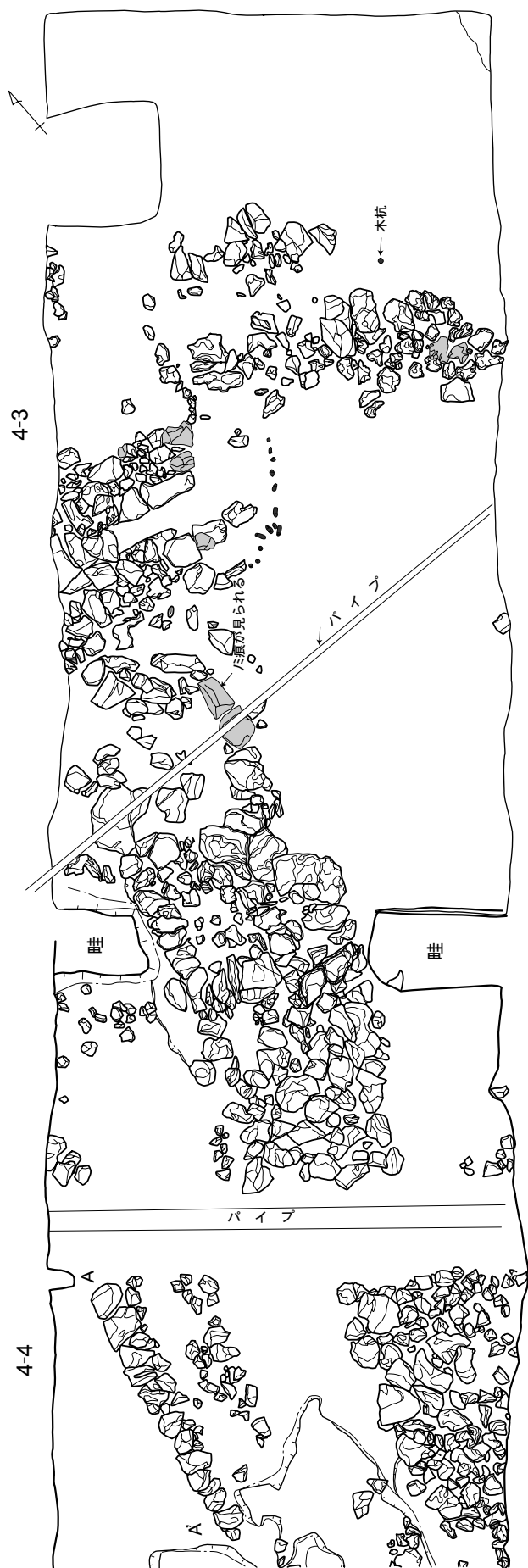
ア) 1号炉

4-5のほぼ中央、東壁から4m、北壁から1.5mに石灰岩などの石で「コ」字状に作られたものである。開口は南東方向である。炉の大きさは幅80×70cmで、石積みの高さは35cmである、炉の底は鍋底状を呈する。囲いに使われている石の大きさは大きいので20×33cm、小さいので10cm程度である。石積みは大きい石は立位、小さい石は横位に積み上げられている。中央側に小さい石が多いようである。また、炉の南東方向に90cm×55cmの浅いほりこみがある。直径20cm、深さ50cmの柱穴が近くに検出されている。炉の周りの土は淡～灰色砂質土である。2号炉と近接する。

出土遺物は白磁碗（図版6）が2点出土し、接合できた。（第26図11）ウシの頭蓋骨や指骨、中手骨、中足骨、イノシシの橈骨など食用となる骨が検出され、中には嚙跡が残る骨も見られた。また、洪武通宝（初鑄造1368年）（第60図1）や羽口か出土している。

イ) 2号炉

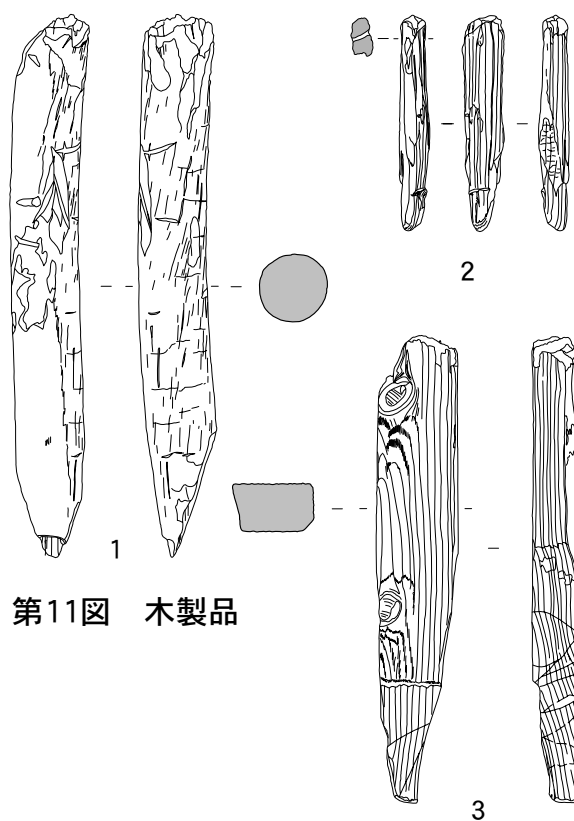
1号炉の西側、東壁から4.9m、北壁1.4mに石灰岩などの石を「コ」字状に積み上げた開口は南側である。炉の大きさ幅130cm×85cm、石積みの高さは45cmで、炉の底は鍋底状である。1号炉よりは若干大きい。石は20×30cm、小さいものは15cm大である。全体的に小さいものが多い。石は横位積んでいるものが多い。西端に直径20cm、深さ50cmの柱穴が検出される。出土遺物は炉の周辺及び内部からは後期系土器の胴部21点、タイ産陶器の壺、イノシシの脛骨を利用した骨製品（第46図9）も出土している。



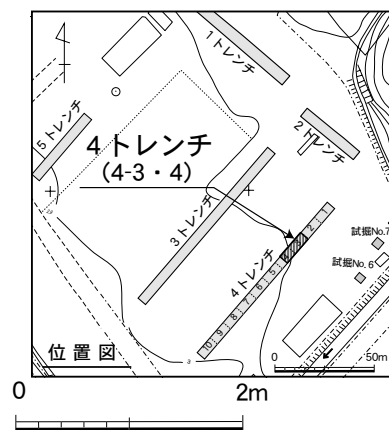
第12図 4トレンチ石列遺構



図版1 水路址



第11図 木製品



ウ) 3号炉

4-5の南西側、南壁から0.6m、西壁1.5m、1・2号炉から離れて検出される。炉の大きさは幅90cm×75cmと小さい。石囲いは「コ」字状と呈し、開口部分は北西方向である。石の大きさは30×20cmの大サイズと10cm×15cmの小サイズがある。底は鍋底状で、中央に白砂が検出される。出土遺物は後期系土器の胴部24点、タイ産陶器の大型壺やフローテーションでカエルの骨、魚骨のクロダイ歯骨などが出土した（図版4）。

b. 溝状遺構（巻首図版6）

4-6の南西側で検出されたもので幅54cm、長さ5.5mの浅い溝である。用途ははっきりしないが、検出面からこの時期のものと推定される。青磁の碗や染付の直口口縁碗が出土。

c. 柱穴群（巻首図版6）

下部の白砂層の面で黒色砂質土がほぼ約10cm～80cmに落ち込んだものが、4-5～8の範囲で多数検出された。

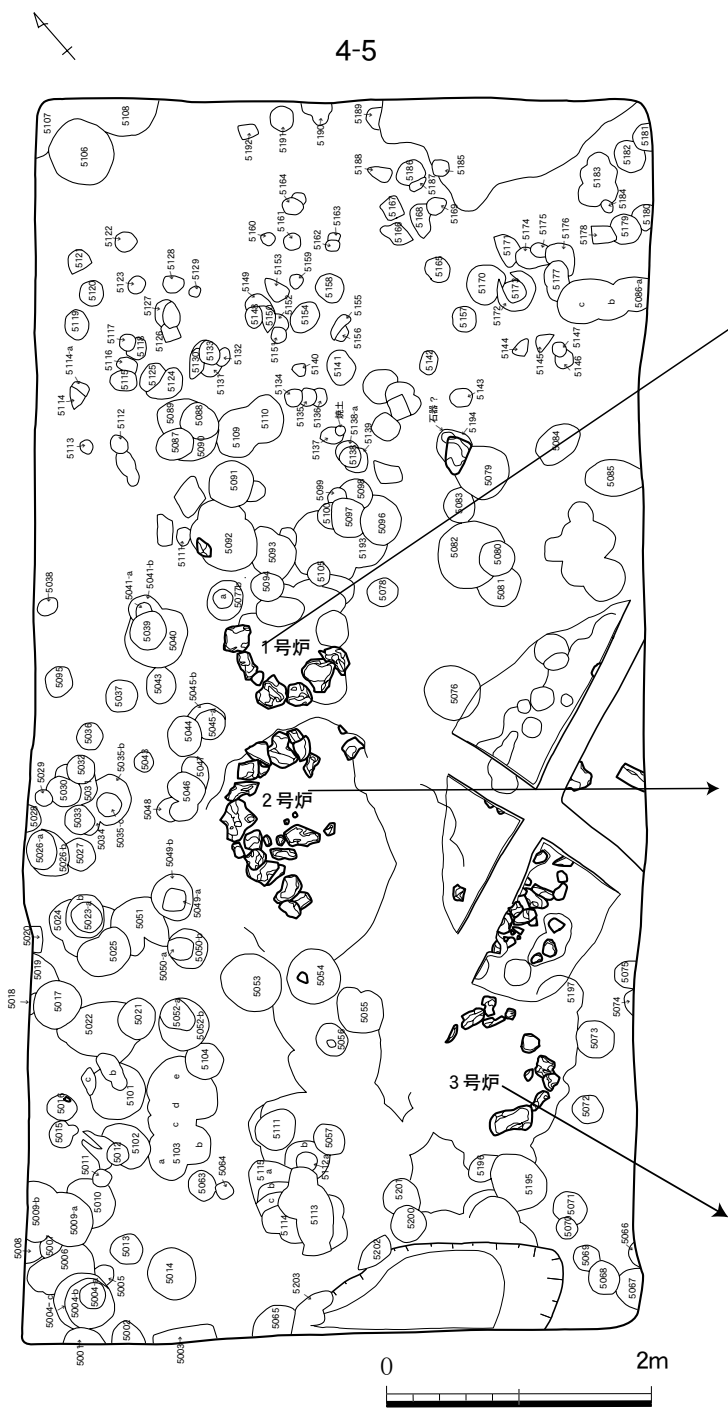
便宜上、柱穴としたが、機能的には必ずしも一致しない。この落ち込みを掘り下げた結果、柱穴は平面の大きさは12cm～81cm、深さは5cm～50cm、平面形は円形、楕円形、不定形、断面は「U」字状、「W」字状、逆台形、摺り鉢状のものが見られた。

これらの中から大きさが20cm～60cm、深さが20cm以上のものについて表2～5に計測一覧を示し、さらに主な柱穴についてはグリッドごとに分けて、表と対照できるように示した。4-5で108個、4-6で67個、4-7で91個、4-8で10個検出された。

柱穴の分布をみると4-5では東側に少なく、西側に多い（第15図）。4-6ではほぼ全面に広がり、中央に1m×4mの大きな落ち込みが見られる（第16図）。また、柱穴No.6061からは人の頭蓋骨（巻首図版3）が検出された。4-7でもほぼ全面に柱穴が広がる（第17図）。柱穴の中には軽石が覆土に集中（巻首図版3）のものもある。4-8では小さい柱穴が西側に集中する（第18図）。柱穴は北西から南東に直径25cm、深さ16cm程の小さいものである。規則的並んでおり、屋敷の囲いがあるいは樹痕と考えられる。

これらの柱穴群から柱穴の大きさや深さなどと検討し、建物の可能性が探ったが、地山面および柱穴内部も砂質のため、色の識別や深さ、大きさが難しく、プランを確定することはできなかった。建物のプランの検討は、本調査にゆだねることとする。

4-5～4-7は出土遺物では白磁や青磁、染付、褐釉陶器などの15世紀～16世紀の遺物が集中して出土することから、これらの柱穴群は15～16世紀の建物だと推定される。



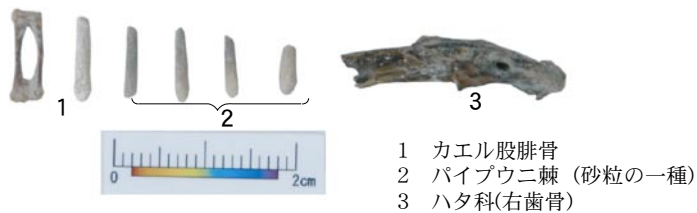
図版2 1号炉



図版3 2号炉

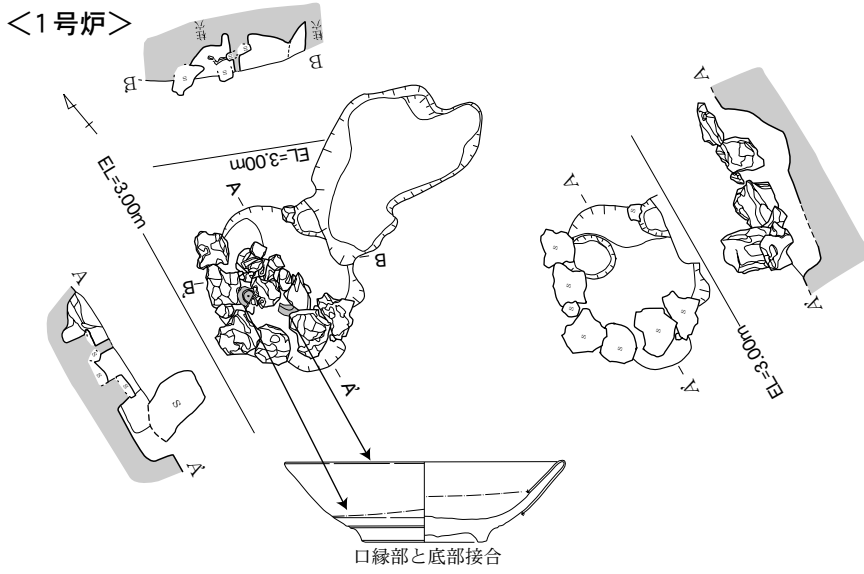


図版4 3号炉



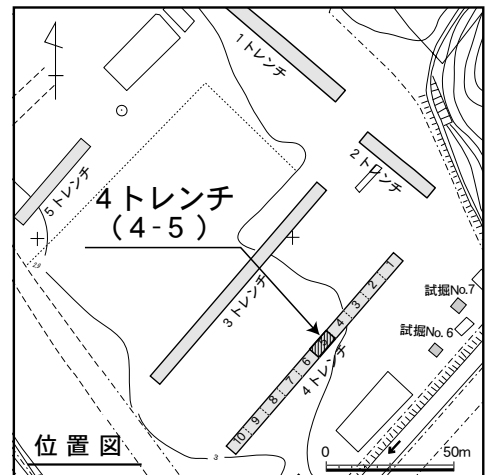
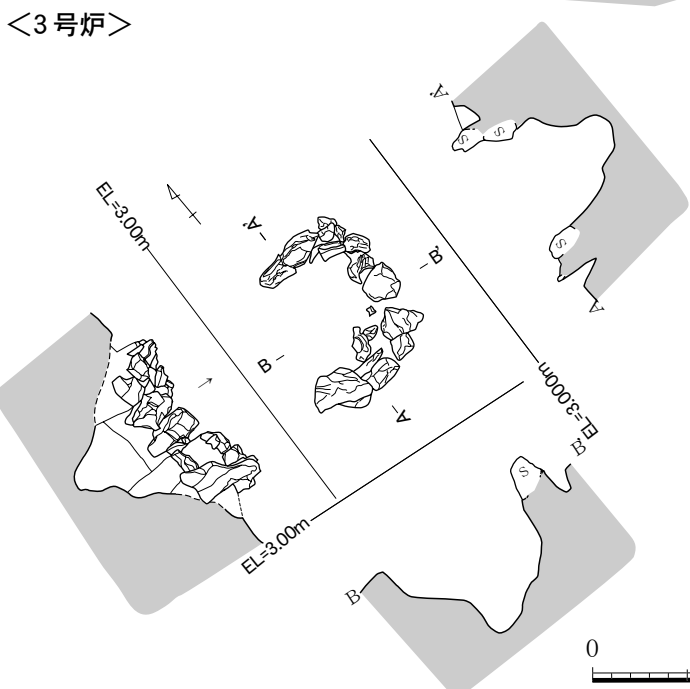
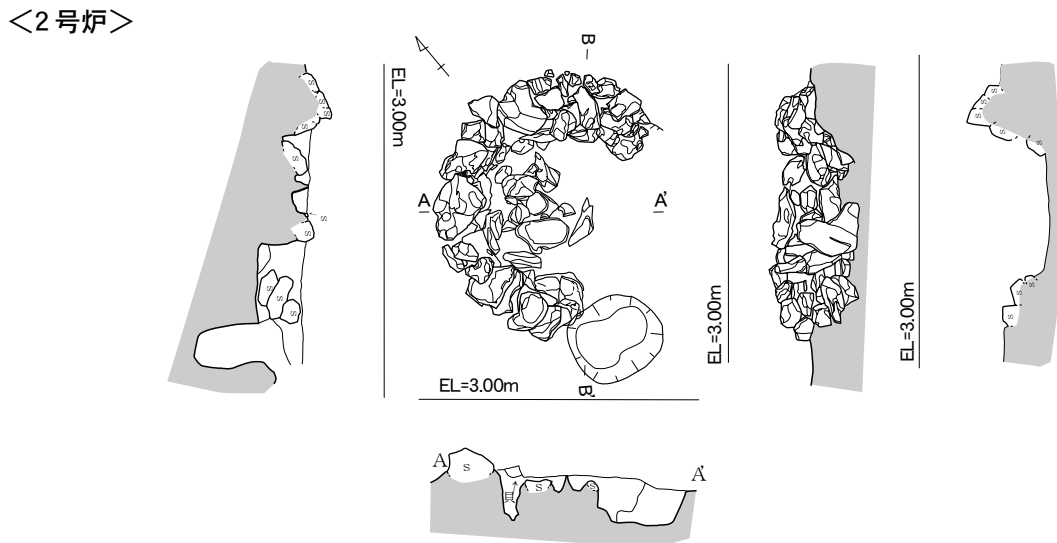
図版5 3号炉検出遺物

第13図 炉址の配置

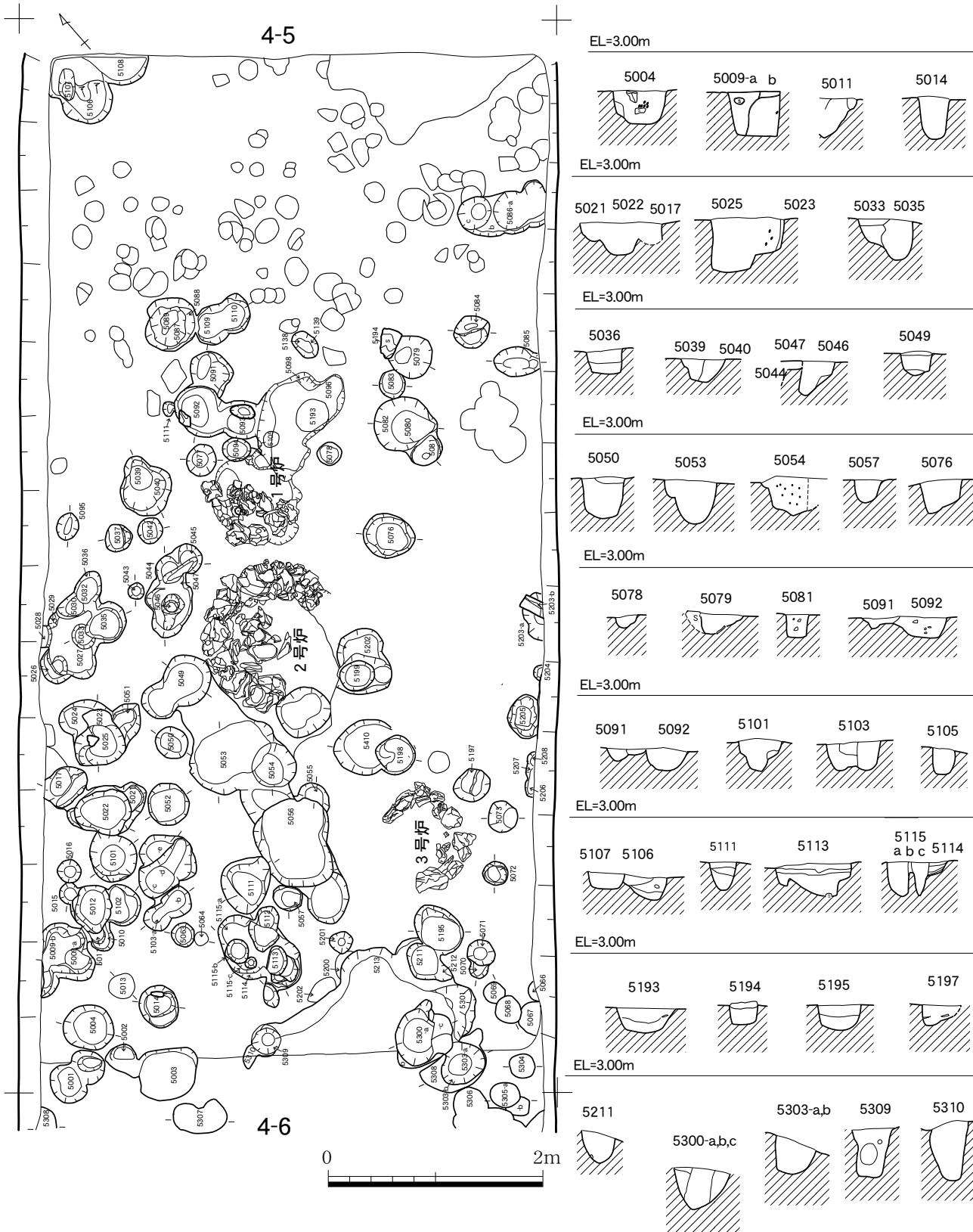


図版6 白磁出土状況

第11図



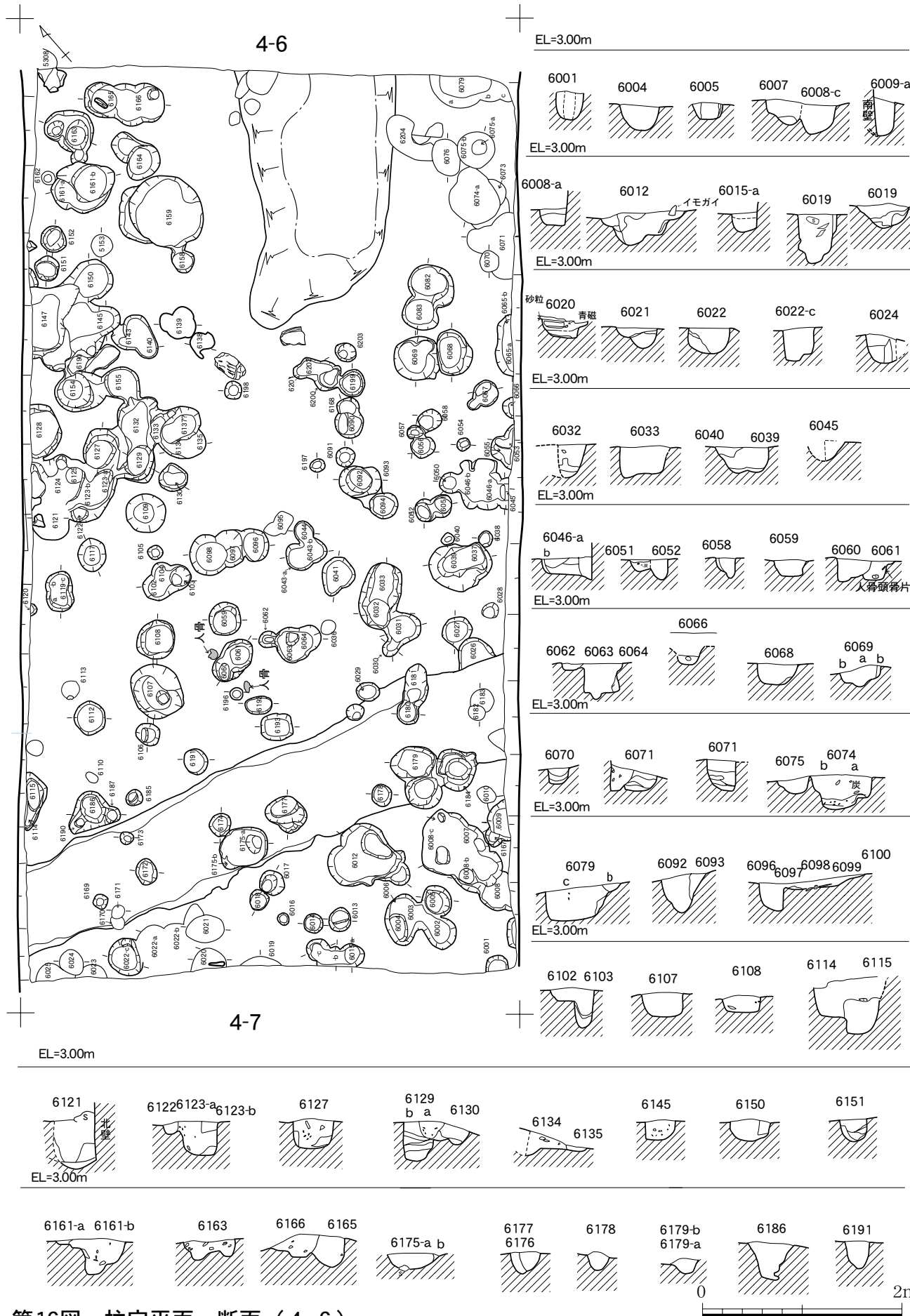
第14図 1号炉・2号炉・3号炉平面・断面



第15図 柱穴平面・断面（4-5）

表2 柱穴計測一覧(4-5)

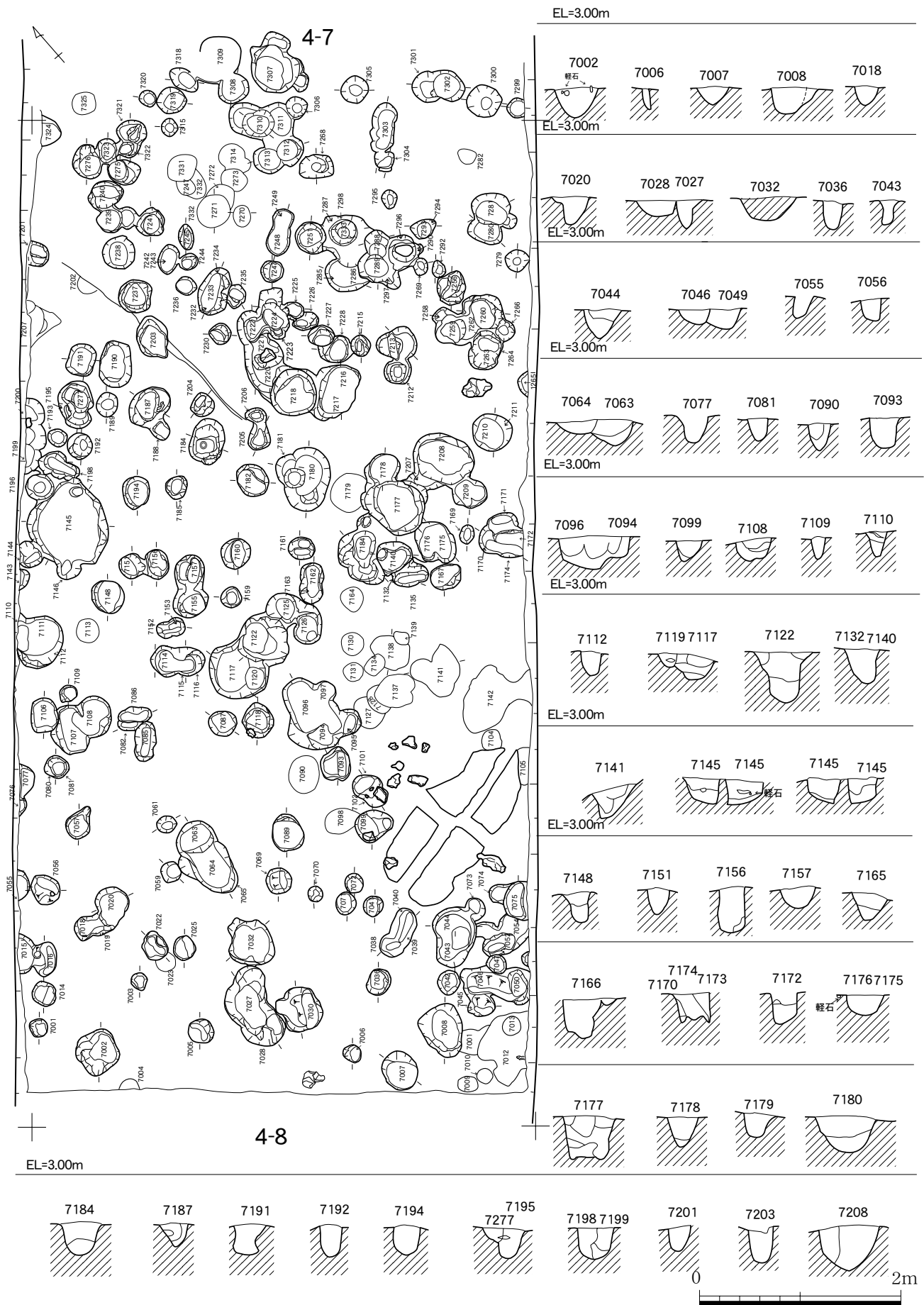
柱穴No.	断面方向	グリッド	平面形状	断面形状	長辺幅(cm)	短辺長さ(cm)	深さ(cm)	遺物
5004	西	4-5	円形	U	58	42	30	炭・石
5009-a	西	4-5	円形	U	40	34	42	土器(くび)1点・土器(胴)5点・褐釉(タイ) 褐釉2点・骨1点・貝6点
5009-b	西	4-5	円形	逆台形	45	20	42	骨(イノシシ)・炭1点・骨1点 5009-aと一緒
5011	南東	4-5	円形	不整形	15	14	26	
5012	北東	4-5	円形	U	16	16	20	5102と一緒
5013	東	4-5	円形	U	24	22	10	骨1点・貝2点
5014	東	4-5	円形	U	40	36	38	貝4点
5016	北	4-5	円形	U	24	20	18	土ワカ1点
5017	西	4-5	円形	U	36	36	20	骨1点・貝13点 5021・5022と一緒
5021	西	4-5	楕円形	U	32	28	18	5017・5022と一緒
5022	西	4-5	不整形	U	60	40	30	骨(イノシシorブタ・魚骨) 5017・5021と一緒
5023	北西	4-5	楕円形	U	34	28	34	炭・褐釉(タイ)骨(イノシシ・クロダイ)・オオシヤコガイ・マガキガイ・オニツノガイ 5025と一緒
5025	北西	4-5	不整形	逆台形	40	30	50	土器(舌・外)1点 土器(胴)2点・貝14点 5023と一緒
5026	北	4-5	不整形	U	36	30	22	
5035	北東	4-5	楕円形	U	38	30	37	土器(後・胴)1点 5033と一緒
5036	北	4-5	円形	逆台形	20	20	20	
5037	東	4-5	円形	不整形	24	24	12	5042と一緒
5039	東	4-5	円形	U	30	25	20	土器(胴)3点・骨(イノシシorブタ)・貝3点 5040と一緒
5040	東	4-5	円形	U	50	46	20	骨(イノシシ) 5039と一緒
5042	東	4-5	楕円形	U	28	20	12	5037と一緒
5043	南	4-5	円形	U	16	16	12	
5044	東	4-5	楕円形	U	32	24	15	5045と一緒
5045	東	4-5	円形	U	28	26	17	5044と一緒
5046	南	4-5	不整形	不整形	48	30	32	5047と一緒
5049	北西	4-5	円形	W	35	32	22	土器(胴)1点・骨(イノシシ)・貝4点
5050		4-5	円形	U	30	29	40	貝4点
5050	北西	4-5	円形	U	30	30	38	褐釉2点・骨(ウシorウマ)
5052	北東	4-5	円形	W	40	38	右25左20	土器(胴)1点・貝5点
5053	南	4-5	円形	W	46	42	40	貝製品(ヤコウガイ)・骨(イノシシ)・貝21点
5054	北	4-5	円形	不整形	42	40	35	骨(イノシシ・フエダイ科)・貝8点
5055	北	4-5	不整形	U	35	30	10	マガキガイ
5057	東	4-5	円形	U	26	22	22	
5063	西	4-5	円形	U	22	20	12	石 5064と一緒
5068	南東	4-5	円形	U	26	24	10	5069と一緒
5071	北	4-5	円形	U	26	22	12	5070と一緒
5072	南	4-5	円形	U	24	22	10	
5073	西	4-5	円形	W	30	30	12	骨(ブタ)・貝2点 5203と一緒
5076	西	4-5	円形	W	42	40	30	
5077	東	4-5	楕円形	不整形	30	26	13	石
5078	東	4-5	円形	W	22	20	20	
5079	南東	4-5	円形	不整形	40	40	18	土器(胴)2点 土器(胴)1点 石・骨製品(イノシシ)・貝製品(ヒメジャコ)・骨(イノシシ・魚)・貝9点
5080	西	4-5	円形	U	26	26	10	5082と一緒
5081	南東	4-5	円形	逆台形	32	32	20	土器(胴)1点
5082	西	4-5	円形	不整形	52	48	10	土器(胴)2点 5080と一緒
5084	西	4-5	楕円形	U	26	24	12	イソハマグリ
5085	東	4-5	楕円形	二段状	42	28	16	
5091北	北	4-5	円形	二段状	32	32	10	5092北と一緒
5092南	南	4-5	不整形	U	50	42	18	貝9点 5091と一緒
5092北	北	4-5	不整形	U	44	52	16	5091北と一緒
5093	西	4-5	不整形	不可	42	28	16	
5095	北	4-5	楕円形	W	24	22	14	
5101	南西	4-5	円形	二段状	44	44	30	
5102	北東	4-5	楕円形	不整形	16	16	12	5102と一緒
5103b北東	北東	4-5	不整形	U	46	25	20	骨(イノシシ) 5103a北東と一緒
5103南西	南西	4-5	不整形	U	60	55	26d22e24	染付(皿・胴)・骨(イノシシ)・貝13点
5105	東	4-5	円形	U	18	16	24	
5106	北西	4-5	円形	不整形	50	46	20	骨(ウミガメ)貝8点 5107と一緒
5107	北西	4-5	不整形	U	-	-	16	5106と一緒
5109	南西	4-5	円形	U	34	32	14	土器(胴)1点・貝3点 5110と一緒
5110	南西	4-5	円形	U	28	26	16	土器(後期系) 胴部1点・土器(胴部)6点・土器(胴)1点・骨(ウシ)・貝8点 5109と一緒
5111	北東	4-5	円形	U	32	28	26	土器(胴)2点・シラナミ
5113	北西	4-5	不整形	不整形	68	28	26	
5114	南	4-5	不整形	不整形	34	14	10	5115abcと一緒
5115a	南	4-5	不整形	U	-	16	32	5114と一緒
5115b	南	4-5	不整形	U	-	8	10	
5115c	南	4-5	不整形	U	-	10	32	
5193	北西	4-5	円形	U	15	15	22	
5194	北	4-5	円形	逆台形	26	24	18	石器?
5195	東	4-5	円形	U	46	38	22	
5197	西	4-5	不整形	不整形	35	28	18	
5198	西	4-5	円形	不整形	38	36	16	褐釉・貝6点
5199	南	4-5	円形	不整形	30	26	30	土器(胴)1点・貝12点
5200	東	4-5	円形	U	26	26	22	5213と一緒
5200-a,b	南	4-5	円形	不整形	28	26	16	5201と一緒
5201	南	4-5	円形	U	28	28	12	5200-a,b
5211	南西	4-5	楕円形	U	40	30	26	土器(胴)1点・貝3点
5212	東	4-5	不整形	W	30	24	22	
5213	東	4-5	-	-	-	-	15	5200と一緒
5214-c	南	4-5	-	不整形	-	-	47	土器(胴)4点 土器(くび)1点・骨(イノシシ・ウミガメ・魚骨)・貝17点
5300a	南西	4-5	円形	U	26	24	38	5300b・5300cと一緒
5300b	南西	4-5	不整形	-	-	-	22	貝3点・5300a・5300cと一緒
5300c	南西	4-5	不可	-	-	-	20	5300a・5300bと一緒
5303-a	南西	4-5	円形	U	22	22	30	5303-bと一緒
5303-b	南西	4-5	円形	U	20	20	30	5303-aと一緒
5304	西	4-5	円形	W	24	22	27	
5305b	西	4-5	円形	すり鉢	20	20	16	5305aと一緒
5307	西	4-5	不整形	W	48	22	15	
5308	北	4-5	不整形	不整形	62	40	20	
5309	南	4-5	楕円形	逆台形	32	22	44	
5310	西	4-5	楕円形	U	22	10	54	骨(イノシシ・魚骨)・貝2点
5401		4-5					16	土器(胴)1点
5402		4-5					16	



第16図 柱穴平面・断面（4-6）

表3 柱穴計測一覧(4-6)

柱穴No	断面方向	グリッド	平面形状	断面形状	長辺幅(cm)	短辺長(cm)	深さ(cm)	出土遺物・備考
6001	西	4-6	楕円形	U	28	10	28	
6004	南	4-6	楕円形	U	32	24	24	
6005	東	4-6	楕円形	U	22	18	16	
6007	南西	4-6	円形	不定形	30	28	24	
6008-a東	東	4-6	円形	U	40	40	16	
6008-c	南西	4-6	楕円形	不定形	58	40	28	
6009	南	4-6	円形	U	42	20	36	骨(魚骨)・貝10点
6015-a南	南	4-6	楕円形	U	30	22	18	
6019南	南	4-6	-	不定形	44	8	48	石
6019東	東	4-6	楕円形	不定形	44	8	22	
6020	東	4-6	楕円形	不定形	38	20	16	青磁
6021	西	4-6	楕円形	W	38	26	30	
6022-a	北西	4-6	不定形	W	42	36	24	
6022-c	東	4-6	円形	二段状	38	34	32	
6024西	西	4-6	楕円形	すり鉢	26	24	10	
6024東	東	4-6	楕円形	U	28	24	26	
6032	西	4-6	円形	U	40	38	32	
6033	南	4-6	円形	W	32	30	28	
6039	東	4-6	不定形	U	36	30	34	骨(イソシ・ウガム・魚骨)・貝16点
6045	南	4-6	-	U	32	10	20	
6046-a	東	4-6	不定形	不定形	40	30	16	
6051	西	4-6	円形	U	22	22	10	炭
6052	西	4-6	円形	U	22	22	30	骨製品が(オト№.3001)
6058	西	4-6	円形	W	24	22	20	
6059	東	4-6	円形	U	34	30	16	貝9点
6060	東	4-6	楕円形	不定形	25	20	23	
6061	東	4-6	円形	不定形	32	30	19	人骨頭骨片・人骨頭骨片
6063	東	4-6	楕円形	W	36	28	34	
6066	南	4-6	円形	U	22	10	32	
6068	南	4-6	円形	U	38	36	20	
6069a	南	4-6	円形	不定形	28	28	18	骨細片№.96 1点・貝10点
6069b	南	4-6	円形	不定形	48	42	10	骨細片№.86
6070	南	4-6	円形	U	22	18	15	
6071西	西	4-6	不定形	不定形	48	36	20	
6074-ab	南	4-6	円形	不定形	58	44	34	炭
6079c	東	4-6	不定形	不定形	55	46	32	
6092	東	4-6	円形	U	32	32	36	
6093	東	4-6	楕円形	不定形	30	20	27	
6096	西	4-6	円形	U	30	26	26	
6102	東	4-6	楕円形	U	32	26	12	
6103	東	4-6	楕円形	U	22	16	40	
6107	南	4-6	円形	U	58	46	24	骨(ウガ)
6108	南	4-6	円形	U	38	36	16	
6114	北	4-6	不定形	不定形	30	10	35	
6115	北	4-6	楕円形	不定形	34	24	55	シャコ貝
6121	西	4-6	円形	不定形	42	42	48	
6122	北東	4-6	円形	U	26	24	10	
6123-a	北東	4-6	楕円形		30	26	34	
6123-b	北東	4-6	円形	U	48	40	10	
6127	北	4-6	円形	U	38	32	30	骨(イソシ)・オニノツノガイ
6129-a.b	東	4-6	円形	不定形	24	22	40	
6130	東	4-6	楕円形	不定形	40	28	16	
6134	東	4-6	円形	不定形	28	24	20	
6145	北	4-6	円形	U	30	26	22	
6150	北	4-6	円形	U	40	40	22	
6151	北	4-6	円形	U	24	24	23	
6161-b	東	4-6	楕円形	不定形	46	34	36	骨(イソシ・ウガ・魚骨)
6163	西	4-6	不定形	不定形	46	36	24	ヌノメガイ・マガキガイ
6165	西	4-6	円形	不定形	36	36	30	
6166	西	4-6	不定形	不定形	60	36	24	マガキガイ・オキニシ・巻き貝不明
6176	南	4-6	不定形	U	32	24	18	
6177	南	4-6	楕円形	U	35	25	22	マガキガイ・オキニシ
6178	西	4-6	円形	U	22	20	16	
6179-a	西	4-6	円形	U	36	35	16	
6179-b	西	4-6	円形	U	45	36	12	
6186	西	4-6	不定形	不定形	38	26	36	
6191	西	4-6	円形	U	25	24	26	

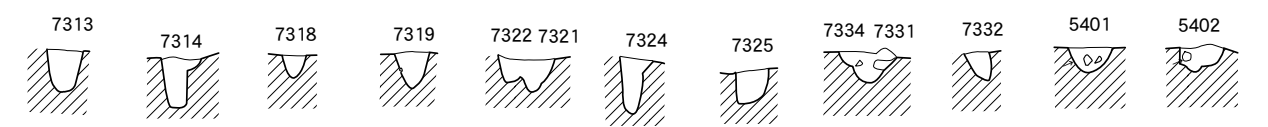
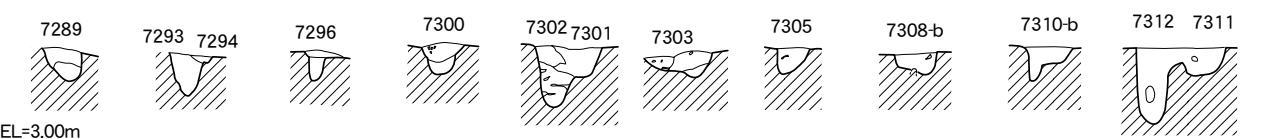
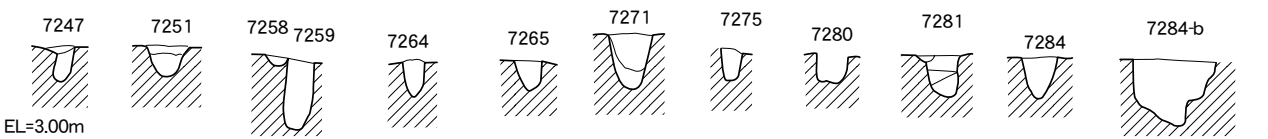
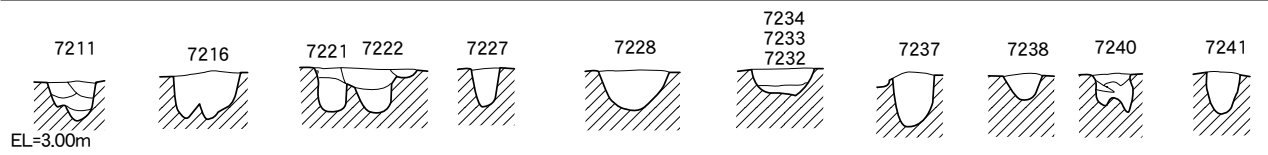


第17図 a 柱穴平面・断面 (4-7)

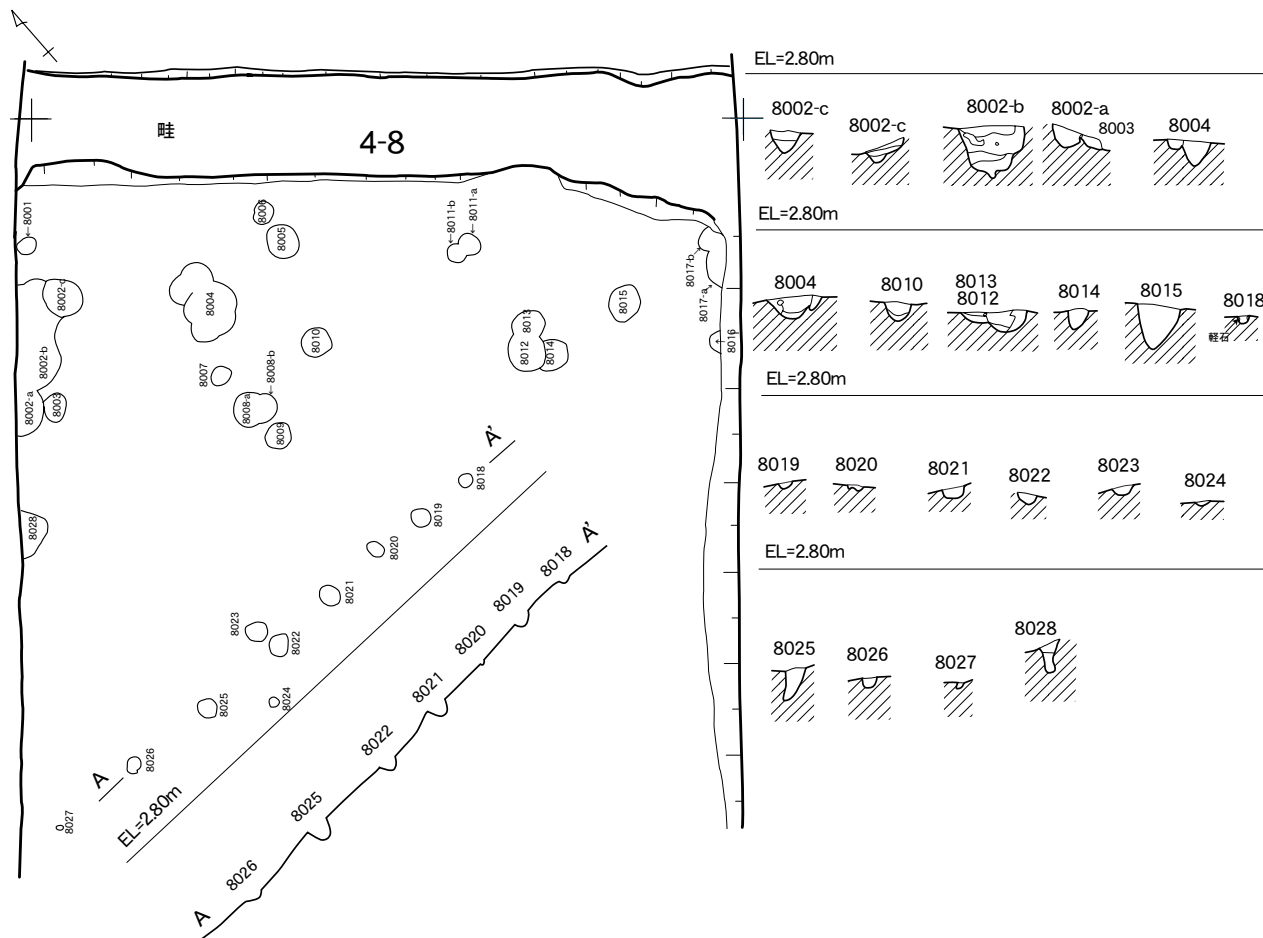
表4 柱穴計測一覧(4-7)

柱穴No	断面方向	グリッド	平面形状	断面形状	長辺幅(cm)	短辺長さ(cm)	深さ(cm)	出土遺物・備考
7002	北	4-7	円形	すり鉢	44	44	30	軽石361g
7006	北	4-7	不定形	U	22	12	20	
7008	北	4-7	W	W	52	36	26	・縄輪1点・骨(ウ)1点・貝6点
7018	南	4-7	円形	U	30	30	20	
7020	北東	4-7	円形	W	34	34	28	
7028	北西	4-7	円形	U	40	38	14	・貝6点
7032	北	4-7	不定形	不定形	45	36	14	
7036	北	4-7	楕円形	U	25	20	28	
7043	南	4-7	楕円形	U	35	26	28	
7044	北	4-7	不定形	すり鉢	44	42	28	
7046	東	4-7	不定形	U	32	25	12	
7055	北	4-7	-	U	30	12	20	
7056	西	4-7	不定形	U	32	30	22	
7063	北西	4-7	円形	U	42	40	26	・古銭1点・貝2点・7064と一緒
7064	北西	4-7	楕円形	U	22	20	10	7063と一緒
7077	北	4-7	楕円形	U	28	34	28	
7081	北東	4-7	楕円形	U	30	20	22	
7090	南	4-7	楕円形	すり鉢	38	38	26	
7093	北	4-7	円形	U	36	34	30	
7094	南東	4-7	不定形	不定形	60	40	20	7096と一緒
7096	南東	4-7	円形	不定形	40	40	30	7094と一緒
7099	南東	4-7	円形	不定形	30	30	16	
7108	西	4-7	円形	W	45	38	20	・骨(ウ)1点・貝15点
7109	南	4-7	円形	U	20	20	22	
7110	北	4-7		すり鉢	26	16	22	
7112	東	4-7	円形	U	25	22	24	
7122	南西	4-7	円形	U	50	45	48	・金属製品(破片)1点・骨(ウ)or(ウ)1点・貝8点
7140	西	4-7	円形	U	24	24	34	7132と一緒
7141	北東	4-7	不定形	U	50	25	28	サラサバティラ
7148	北	4-7	不定形	二段状	38	35	30	
7151	南	4-7	円形	U	26	24	24	
7156	北	4-7	円形	U	30	30	44	・骨細片No.73 1点・貝18点
7157	北	4-7	円形	U	30	28	20	
7165	南東	4-7	-	すり鉢	28	10	28	・骨細片No.81-No.85 1点 貝14点
7166	西	4-7	楕円形	不定形	38	18	38	
7170	東	4-7	円形	U	20	18	28	7173-7174と一緒
7172	北西	4-7	不定形	U	20	4	30	
7174	東	4-7	円形	不定形	22	20	26	7170-7173と一緒
7175	南	4-7	円形	U	28	24	20	7176と一緒
7177	南	4-7	不定形	逆台形	55	34	40	
7178	北	4-7	円形	すり鉢	34	30	30	
7179	北	4-7	円形	U	38	36	24	
7184	北西	4-7	円形	U	44	40	34	貝4点
7187	北西	4-7	円形	すり鉢	40	36	24	
7191	東	4-7	不定形	不定形	40	22	28	貝5点
7192		4-7	円形	U	30	30	32	
7194	南	4-7	楕円形	U	30	24	30	
7198	南東	4-7	-	-	26	22	32	7199と一緒
7199	南東	4-7	-	-	42	25	30	7198と一緒
7203	北東	4-7	不定形	U	36	24	34	
7208	西	4-7	不定形	すり鉢	60	46	44	・骨(ウ)
7216	北	4-7	楕円形	W	40	32	34	・青磁(酒呑壺・口割花文ヘラ)
7217		4-7	楕円形	U	30	25	32	貝7点・7222と一緒
7221		4-7	楕円形	U	30	25	32	
7228	東	4-7	不定形	すり鉢	32	20	28	貝4点
7232	南東	4-7	楕円形	U	20	16	16	7233-7234と一緒
7233	南東	4-7	楕円形	U	40	22	16	7232-7234と一緒
7234	南東	4-7	円形	U	26	26	16	7232-7233と一緒
7237	北	4-7	楕円形	U	32	28	18	・縄輪・骨(ウ)・マガキガイ・コオニコブシ
7238	南	4-7	円形	U	32	32	19	
7240	西	4-7	楕円形	不定形	30	24	24	
7241	北	4-7	楕円形	U	26	24	28	
7247	北	4-7	円形	U	22	22	24	・ウラキツキガイ
7251	南	4-7	不定形	U	32	22	20	貝6点
7259	南東	4-7	円形	U	20	17	48	7258と一緒
7264	北	4-7	楕円形	U	20	10	26	
7265	南	4-7	楕円形	二段状	42	30	20	
7271	南	4-7	円形	U	36	32	38	
7275	南	4-7	楕円形	U	30	22	22	
7277	北	4-7	不定形	U	35	30	28	7195と一緒
7280	南東	4-7	楕円形	W	34	20	20	
7281	南西	4-7	楕円形	二段状	40	22	28	
7289	東	4-7	不定形	W	20	20	22	・骨細片No.15.No.98 1点・貝17点
7293	東	4-7	不定形	U	26	16	14	・骨細片No.59-No.92 1点・貝19点・7294と一緒
7296	東	4-7	不定形	U	26	14	20	・骨細片No.90-No.21 1点 貝8点
7300	西	4-7	円形	二段状	34	34	22	貝3点
7301	西	4-7	円形	U	32	32	20	・骨(ウ)・7302と一緒
7302	西	4-7	円形	U	32	32	42	7301と一緒
7305	西	4-7	円形	U	26	26	18	
7308	東	4-7	円形	W	30	30	16	獣骨
7310-b	北西	4-7	楕円形	W	45	32	24	
7311	北	4-7	楕円形	U	30	26	30	7312と一緒
7312	北	4-7	円形	U	32	30	52	貝6点・7311と一緒
7313	南西	4-7	円形	U	30	26	30	貝4点
7314	西	4-7	円形	二段状	28	26	36	
7318	西	4-7	楕円形	U	32	20	15	
7319	西	4-7	円形	U	24	20	24	貝3点平面図にない
7321	-	4-7	楕円形	二段状	30	24	25	貝6点・7322と一緒
7322	-	4-7	円形	U	20	16	16	・骨(ウ)・ウミナナ・7321と一緒
7324	東	4-7	楕円形	二段状	26	26	38	・骨(ウ)
7325	東	4-7	円形	U	22	22	22	
7332	北西	4-7	楕円形	U	32	20	20	貝2点・平面図にない

EL=3.00m



第17図 b 柱穴断面 (4-7)



第18図 柱穴平面・断面 (4-8)

表5 柱穴計測一覧 (4-8)

柱穴No	断面方向	グリット	平面形状	断面形状	長辺幅(cm)	短辺長さ(cm)	深さ(cm)	出土遺物・備考
8002-a	東	4-8	楕円形	U	40	18	12	8003と一緒に
8002-b	北	4-8	楕円形	不定形	46	30	32	
8002-c北	北	4-8	不定形	すり鉢	34	26	14	
8004南西	南西	4-8	不定形	W	50	26	16	
8004北東	北東	4-8	不定形	W	50	26	14	
8010	南	4-8	円形	U	22	20	12	
8013	南	4-8	円形	右U	20	20	14	8012と一緒に
8014	東	4-8	円形	U	24	20	14	
8015	南西	4-8	楕円形	すり鉢	26	22	30	
8028	西	4-8	不定形	不定形	36	30	18	

まとめ

本遺跡は出土遺物から貝塚時代後期、15世紀～16世紀、近世の3時期に存在していたと考えられる。貝塚時代後期の遺構は検出されなかった。

戦前遺構とされる石列遺構は海岸に通じるもので、その南東側につながる水路址は北側にあった川への排水の為の遺溝で、この2つは一連のものである。

琉球石灰岩を用いた戦前の土木技術をかいま見ることができ、排水路の設置なども見られないいま、その資料的価値は高い。

池状遺構は北西にくぼむもので、川跡につながる遺構か、水辺遺構の可能性が考えられる。

15～16世紀の柱穴群は4-5、4-6、4-7の4トレンチのほぼ中央で検出された。炉址は石で囲まれたもので3基とも近接している。その周辺からは羽口・焼け土が多く出土し、鉄さいも得られている。出土遺物は青磁・染付・褐釉陶器などが多数得られていることから村落と考えられる。

同時期の遺跡としては後兼久原遺跡があり、本遺跡と同じように多数の柱穴群、遺物では青磁や染付、褐釉陶器なども多量出土する。本遺跡とはほぼ同時期に存在していた。しかし、基盤は土層で本遺跡とはことなる。砂丘地の柱穴の出土は熱田貝塚があるが時期は本遺跡より古い。

参考文献

山城安生（編）「後兼久原遺跡一庁舎建設に係る文化財発掘調査報告一」『北谷町文化財調査報告書』第21集 北谷町教育委員会 2003年

金武正紀「恩納村熱田貝塚発掘調査ニュース」沖縄県教育委員会 1978年

第5節 出土遺物

本遺跡出土の遺物は貝塚後期の土器・滑石製石鍋・須恵器・中国産の白磁・青磁・染付・色絵・褐釉陶器、タイ産の鉄絵や褐釉陶器、近世の瓦質土器、現近代の陶質土器（アカムン）・沖縄産の施釉陶器（上焼）・無釉陶器（荒焼）・本土産陶磁器・骨製品・貝製品・石器・軽石・円盤状製品・銭貨・簪・キセル・金属製品が出土した。以下、それぞれの遺物について略述する。

1. 土器

土器は口縁部と底部を細分して集計し、胴部は個数と重量の計測を行い、遺物の平面分布資料とした。その結果、総数5,752点（重さ27,851g）出土した（表7）。最も多く出土したのは4トレンチである。ここでは、それぞれの試掘の特徴を示すため、出土量の多い4トレンチと他のトレンチを分けて図示した。

第19～21図（図版7～9）に4トレンチ、第22図（図版10）にその他のトレンチの土器を示し、表8に観察一覧を示した。以下、遺物について略述する。

a. 4トレンチ

本トレンチは最も出土量が多い。グラフ1で胴部の出土状況を見ると4-1黒色混貝土層で775点（2085g）、淡灰黒色土層530点（1656g）、4-2淡灰黒色土層で1061点（3373g）、黒色混貝土層442点（2145.5g）と出土量が多い。

<口縁部>

口縁部は98点出土したが、ほとんどは無文である。これらは器厚や器面調整や胎土などから大きく浜屋原式土器、大当原式土器、縄文晩期系土器、後期系土器（くびれ平底土器）に分けられるが、明瞭でないものを型式不明として扱った。表7に示したようにくびれ平底土器以外の出土量は少ない。しかし、破片は大きく、後期系土器よりは保存率は高いようである。

・型式不明

器厚が9mm前後の厚手で、焼成はやや悪い土器で、型式が特定できないものをここにまとめた。

図1・2は逆「L」字状になる口縁で、器厚も7～8mm、焼成もやや悪いものである。図1は口唇部に竹管文を不規則に施文するものである。内外面に指痕が顕著に残る。図2は口径34.5cmと大型の土器である。口唇は2cmと広く、「V」字状の篋で押したて調整する。口縁部に外径8mm、内径5mmの孔を外側から内面に穿ち、9mmと厚手である。焼成はやや悪い。図3は厚手で図2と同一と思われる。外面は刷毛目、裏面は指痕が明瞭に残る。図5はやや外反するもので、口縁断面は角をなすものである。

・壺

図6・8・9・4は壺と考えられるものである。

図6は外反し、他の2点に比べて薄く、グスク系土器の壺とも考えられる。図8は外反口縁で舌状を呈し、口径8.6cm、図9は横断面が丸味を帯びるものである。図4は厚さ9mmで、大型壺の肩部と思われる。

- ・晩期系土器

口縁部は外反し、胴部で「く」字状に湾曲するもの（図10・11）である。

特に図10は屈曲が強い、図11はやや丸くなる。晩期系土器の影響と思われる。

- ・浜屋原式土器

図12～15は直口口縁で、外面は器面調整が丁寧、内面は指痕調整が顕著である。図15は口径25.4cm、図16は口径は22.0cmと大きさは図15に近いが、器色は明褐色を呈し、口縁部はやや内傾する。また、外面に不規則な沈線文を縦位に施す。

- ・大当原式土器

図17は胴部で内外面に指痕が顕著に見られる。器厚は不均一で焼成良好である。4-1Ⅲ層出土した。

- ・外耳土器

図18・19は外耳の土器で、胴部のため、口縁の形状は不明。外耳の形状はいずれも弧状、横断面は前者が丸味、後者が上方向に舌状を呈する。

これらは伊礼原遺跡（2007）でも数10点得られており、縄文晩期系土器に近い時期のものと考えられる。

- ・弥生系土器

図20は胴部で、孔は外径8mm、内径5mmで両面から穿孔する。孔の高さに篋で段をつけ、加飾する。砂質で内外面を刷毛で横位に調整する。目は細かく、最大胴径22.0cmを測る。出土地は不明。器面調整や胎土から弥生式土器の可能性が高い。

- ・後期系土器

器厚が4～6mmと薄く、焼成も良い、器面調整は指圧と刷毛ナデが見られる。泥質のものが多い。口縁には直口と外反し、胴部で膨らむタイプがある。前者は鉢か浅鉢、後者は鉢か甕が想定され、アカジャンガー式土器の範疇に含まれるものである。口縁形態で外反口縁、直口口縁、内彎口縁に分け、さらに外反口縁をa・b・cタイプ、直口口縁をa・bに細分した。外反口縁は75点、直口口縁20点、内彎口縁2点、不明2点で、外反口縁が多い。

- ・直口口縁（図25・26・29）

直口口縁は21点出土した。そのうち、口唇が丸味を帯びるもの10点、グスク系と思われるものが7点出土している。

図示したものは、いずれも口縁断面は丸く、図25はやや厚手で、外面に指痕、内面に刷毛目、図26は内外面に指痕が顕著である。

図29は外反気味で、口唇は内側に若干膨らみ、ラッパ状にひらく。口径10.5cmで壺の可能性も考えられる。

- ・外反口縁

外反口縁はaタイプ44点、bタイプ6点、cタイプ21点、不明6点の計77点出土した。

外反口縁には口縁部が舌状（図21・22・27）、玉縁状（図28・31・30・32・33）、口唇のふくらみが強い（図34・35）、角状（図36・37・38）、さらに文様を有するもの（図39・40・41・44・45・46）がある。

文様をみると沈線文を横位（図39）、鋸歯状（図40）、不規則（図41）に施したもの、刺突文を胴部（図44）、あるいは口唇に（図45・46）に施したのものがある。

・内彎口縁

2点出土したが、グスク系土器に近いものである。図は省略する。グスク土器については別項で述べる。

<底部>

底部は丸底、尖底、平底、くびれ平底があり、その出土量は丸底2点、乳房状尖底9点、平底8点、くびれ平底108点の計135点でくびれ平底が主体である。出土地をみると4トレンチ106点、3トレンチ22点出土した。4トレンチのうち、4-1で26点、4-2で42点、次いで4-5で17点がある。

底部は下記のようにさらに細分した。

A類：丸底

B類：尖底 —— 浜屋原式土器に伴う。

C類：乳房状尖底 { a：一般的に乳房状尖底で大方大当原式土器に伴うものである。
b：小ぶり

D類：平底 —— くびれは明瞭でないが、焼成や胎土から後項のくびれ平底の範疇に属するものである。

E類：くびれ平底 { a：張りが強い—底面からの立ち上がり角度が40°以下
b：張りが弱い—底面からの立ち上がり角度が40°以上
c：底径が小さい—底径が3cm以下
d：張りがより強い—底面からの立ち上がり角度が40°以下

A類：丸底

型式は明瞭でないが、胎土などから古手の土器と推定される。器厚が胴部とほぼ同じで、底面が丸くなるもので、2点出土した。図1は外面明橙褐色、内面明灰茶褐色で砂質である。3-5Ⅲ層で出土。

B類：尖底（図2～5）

浜屋原式土器に近い底部と思われる。4点出土している。

図2は小ぶりの尖底で、砂質、混和材は0.5mmと細かい。内外面とも明橙褐色を呈する。4-2淡灰黒色土層の出土。

図3は砂質で、石英を混入、外面は暗茶褐色、内面は暗灰褐色。4-1黒色混貝土層で出土。他に図4・5もあり、いずれも4-1Ⅲで出土している。

C類：乳房状尖底

一般的な乳房状尖底（aタイプ）と指押し上げ（bタイプ）がある。

aタイプ：は焼成が良く、砂質で器面も指で調整するのが顕著で、色調も明・灰色を呈することから大当原式土器の底部のと思われるもので14点出土した。

図6は砂質で、光（透）、多量。図7は内外面指痕。4-4石敷遺構の下の黒色混土砂層で出土、図8は4-1黒色混貝土層。図9は4-5・6Ⅲの出土である。図7は明らかに石列遺構の下部で出土している。

bタイプ：指押し上げタイプは底面がやや平らになるタイプで、3点出土。砂質で、器面調整も良い、胎土により、大当原式土器と浜屋原式土器に相当するものと思われる。

図10～12・14は乳房状尖底であるが、尖底部が平らになるものである。図10、12は4-3Ⅲ、図11は4-1淡灰黒色土層で出土した。図14は尖底部を指で押し上げるものである。

D類：平底

底面から胴部にかけて、くびれがなく、ストレートに立ち上がるもので、9点出土した。焼成や胎土、および器厚などからアカジャンガー式あるいはフェンサ下層式の類の底部と考えられる。

図15は底径3.5cm、泥質、焼成良好。器色は外面が明赤褐色、内面が明灰褐色。角度 31° 4-6Ⅲ層の出土。他に図13・16・17、図28がある。

E類：くびれ平底

出土は113点で底部の85%を占める。底径やくびれの具合で4種に細分される。くびれの具合は中心軸からの角度を測り、角度が 40° 以下と 40° 以上、また底径の小さいもの、底部の厚さが1cm以上に細分した。

a：くびれの張りが強い。

39点出土した。図40は底径6cm、泥質、焼成良好。少量。内外面は明茶褐色を角度 32° 4-5Ⅲ層の出土。図29～31は底厚が10mm前後と厚い。図30は底厚が18mmと厚い。底径6cmを測り、砂質、焼成良好。外面は明茶褐色、内面は明灰褐色。角度 28° を測る。4-5Ⅲ層の出土。図31は底厚が8mm、前者よりは開く。内面に櫛目の調整が見られる。後者のほうが径は小さく開く。

b：くびれの張りが弱い。

36点図36はbタイプで底径8cm、泥質、内外面は指で調整する。混入物は少量。器色は外面明黄褐色、内面明灰褐色。角度は 35° 4-8Ⅲ層の出土。

c：底径が小さい。

図18は底径3cmで泥質、焼成良好。内外面とも暗茶褐色。角度 26° を測る。他に図17・22がある。くびれも弱い。

d：張りが弱く、鏝状。

図14は上げ底で焼成良好。混和材に多量の石英・光（透）を含む。外面橙褐色、内面明灰褐色、角度 46° 4-1Ⅲ層の出土。ほかに図26・33・41・43・45・46がある。図43の底面からは葉痕らしきものが確認できた。図43のくびれは鏝状に強調される。図23はdタイプ、底径7cmで、白粒を混入。

図42は底径が12cmと大きく、胎土からも弥生模倣土器と考えられる。図47はくびれが開き気味である。

b. 他のトレンチ

第22図、図版10に示したのは4トレンチ以外の出土土器である。

表に示したように 出土状況をみると3トレンチでは3-3、3-5で出土が多くなる。隣接する4-1・2と4-5でも出土量が多いことから、そこからの広がりて出土したと考える。以下、出土地別に略

述する。

・1トレンチ

図11は胴部で、全体的にローリングを受けたものである。混入物は石英、赤褐色などが多量混入、器色は黄褐色を呈する。面縄前庭式土器と想定される。1トレンチ泥炭層の下層、白色粗砂層から出土した。

・3-2IV層

図8は外反口縁で、断面は舌状を呈し、胴部はゆるやかに湾曲する。

・3-5層

図1はやや外反する口縁で、断面は舌状を呈する。出土地不明。浜屋原式土器に分類される。

図2は口径13.0cmの有頸の壺で、口縁は逆「L」字状に外反し、断面は丸い。器厚12mmで、焼成良好、外面は丁寧、内面はやや雑に仕上げている。弥生模倣土器と思われる。3-5Ⅲ層の出土。

図3は口径16.0cmの外反口縁で、口縁部は角、内面に指痕が顕著に見られる。アカジャンガー式土器の範疇か。図4は外反口縁で横位に凸帯文を繞らし、その上に刻目文を施すものである。図5も外反口縁である。第23図1は小ぶりの丸底である。砂質である。

・3-7Ⅲ層

図9はくびれ平底である。底径5.0cmと小さく、胴部は開く、外面は指痕が見られる。底面は丸味を帯び、不安定である。

図11は壺の口縁部で、口径7.0cmである。焼成は良好で外面は器面の保持は良く、内面は指痕がある。

・3-8Ⅲ層

図10はくびれ平底で前者に比べて底径7.5cmと大きく、底面は安定する。外面は指痕が見られる。

・4Ⅲ層

図6は口縁部で口唇は舌状、胴部で外反し、口唇で内傾するものである。また、内面に幅広沈線文が施されている。類例は浜屋原貝塚にある。弥生系の土器と考えられる。

・5トレンチ

くびれ平底土器が出土したが、ここでは省略し、詳細は本報告に譲りたい。

まとめ

本遺跡出土の乳房状尖底土器とくびれ平底土器の2つの時期にわたるものと思われる。乳房状尖底および尖底に属する土器は大きな破片が多いのに対してくびれ平底に属する土器は細片が多い。

土器の割れ方も考慮すると大きく2つの時期があったと想定され、後者の方が出土量は多い。これら後期土器の平面分布をみると4-5・6、さらに3-5、7でも出土するが、4-1・2を中心に分布する貝塚後期系土器（くびれ平底土器）の時期が存在していたと思われる。

また、これより古い尖底～乳房状尖底土器は破片も大きく、出土する地域も山手（東側）にあったことが窺え、後期土器の新旧2つの時期が存在していたようである。

表6 土器胴部出土量

グリッド	層	個数	重量 (g)	グリッド	層	個数	重量 (g)	グリッド	層	個数	重量 (g)	
3-2	灰色土層	4	18	4-3	石列遺構	96	671	4-7	Ⅲ	7	25	
	白色枝サコ層	5	53		黒色混貝土層	122	1013		淡灰黒色土層	23	138	
	淡灰色砂質土層	10	36		黒色粘質土層	27	113		淡灰色砂質土層	1	10	
	灰色砂層	19	90		淡茶褐色砂層	85	344	不明	4	5		
	枝サング層	13	78		灰黒色砂質土層	50	652	4-8	暗灰色砂層	1	14	
	泥炭層	4	17		不明	14	65		黒褐色砂質土層	7	14	
						黒色砂質土層	22		120			
3-3	淡灰色粘質土層	1	10	4-4	石列遺構	145	1024	4-9	Ⅲ	9	27	
	淡灰色粘砂質土層	1	2		黒褐色砂質層	1	17		褐色土層	2	22	
	黒色砂質土層	2	8		黒色粘質土層	1	12		黄色土層	4	10	
3-5	淡灰黒色土層	78	227	4-5	淡灰黒色土層	1	2	4-9	砂利層	11	52	
	Ⅲ	274	784		淡灰色砂質土層	1	9		淡灰黒色砂質土層	3	39	
	不明	69	317		不明	4	15		淡灰色土層	4	11	
3-6	灰色砂利層	5	18	4-5	Ⅲ	42	148	4-9	淡灰緑色砂質土層	2	6	
	Ⅲ	23	94		石列遺構	1	5		4-10	不明	3	15
3-7	淡灰色混砂土層	6	36		白色砂利層	10	57			4-10	Ⅲ	1
	不明	97	258		淡灰色土層	40	163	戦前遺構			1	7
3-8	淡灰緑色土層	30	87		淡灰黒色混土層	2	6	4-10	褐色土層	1	8	
	不明	26	62		淡灰黒色土層	102	387		4-4.5	不明	23	121
3-9	灰色土層	4	17		淡灰黒色砂質土層	84	387	4-4.5		灰黒色砂質土層	55	177
	不明	12	30		淡灰色砂質土層	113	40		4-6.7	淡灰緑色土層	15	43
3-10	Ⅲ	3	24		白砂砂利層	19	98	4-6.7		淡灰黒色砂質土層	11	76
					不明	38	244		No1	Ⅳ	6	45
4-1	Ⅲ	530	1656	4-6	Ⅲ	17	60	No3		Ⅲ	10	50
	黒色混貝土層	824	2327		黒褐色砂質層	23	105		No5	淡灰黒色砂混土層	4	23
	砂質層	2	7		淡灰黒色砂質層	21	150	No5		不明	7	18
	淡灰黒色土層	344	1319		淡灰黒色砂質土層	160	718		No5	Ⅲ	100	457
	茶黄色砂質層	1	145		淡灰黒色砂層	3	5	No5		淡灰緑色	1	2
	不明	42	145		淡灰黒色砂利層	74	298		No5	不明	1381	5485
4-2	黒色混貝土層	442	2146		淡灰黒色土層	88	436					
	淡灰黒色土層	1061	3373		淡灰色砂層	1	11					
	茶黄色混砂質層	14	109		不明	53	252					
	白黄色砂層	3	47									
	不明	39	137									

グラフ1 土器胴部グリッド別（個数・重量）出土状況

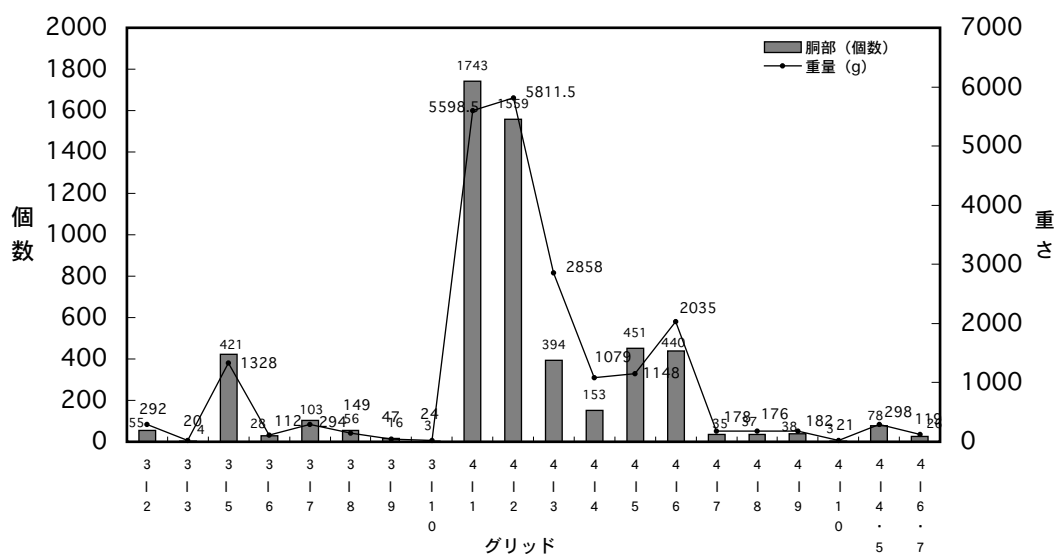


表7 土器口縁部・底部出土量

出土地 グリッド 層	土器分類	晩 期 系	弥 生 系	浜 屋 原 式	大 当 原 式	後期系土器										底部					合 計	グ リ ッ ト 集 計				
						直口			外反				内 彎	不 明	丸 底	尖 底	乳房		平 底	くびれ平底						
						a	グ ス ク	不 明	a	b	c	不 明					a	b		a			b	c	d	不 明
						グリッド	層																			
3-2	表採																							1	2	
	Ⅲ																							1		
3-5	Ⅲ																							16	21	
	不明																							5		
3-6	Ⅲ																							2	3	
	Ⅲ																							1		
3-7	表採・不明																							3	3	
3-8	Ⅲ																							1	1	
3-9	不明																							1	1	
4-1	Ⅲ・混貝	1		1	1	1	7	2	1					3	6	1	6	6	5	2	3	2	2	48	67	
	空白・表採			1	3	2	7	1		1								3					1	19		
4-2	Ⅲ	2	3	2	1	1	1	8	2	6	1		1	1	1	3		1	11	10	6		4	65	85	
	淡灰黒色土層																		1					1		
	空白					1	1	7	1	3	1								2	2	1			19		
4-3	Ⅱ					1		1											1	1			1	5	11	
	Ⅲ			2	1						1			1	1									6		
4-4	Ⅱ						1	1		1									1					4	7	
	Ⅲ	2																						3		
4-5	Ⅲ				1	1	1	1	2					2					5	3		2	18	23		
	淡灰黒色土層																1	2	1						4	
	東側ジャリ層(攪乱)																				1			1		
4-6	Ⅲ		1			1	2			1				1					2	1				9	14	
	淡灰黒色土層						1	2											1		1			5		
4-8	Ⅲ								1								1							2	2	
4-9	Ⅲ																		1					1	1	
4-1	不明				1	1	2	2			1								1		1	1		10	10	
4-2	不明																									
N○5	Ⅲ																			1				1	1	
不明	Ⅲ																		1	1	1			3	15	
	不明		1				2	1	1	1				1		1	2	1	1					12		
合計		5	5	4	3	10	7	4	44	6	21	6	2	2	2	4	14	3	12	39	36	21	5	12	267	
		21						77				2		2		4		17		12				113		
		17						102						148												

表8-1 土器観察一覧

図・図版	番号	部位	口径・器高・底径 厚さ(cm)	観察事項	出土地
第19図 (図版7)	1	口縁部	-	やや外反口縁、逆「L」字状。口唇に刺突文。砂質。多量、外面一ヨコハケ。内面一ユビ。内外面一暗灰褐色。弥生系?	4-6Ⅲ 001010
	2	口縁部	口径34.0	外反口縁、玉縁状。石英、粗。外面一ユビ。内面一ハケナデ。内外面一暗茶褐色。弥生系?	4-2Ⅲ 000315
	3	肩部	-	壺。外径8mm、内径5mm。石英。外面一斜めに条痕、内面一ユビ。内外面一茶褐色。弥生系?	4-2Ⅲ 000315
	4	胴部	-	砂質。0.5mm。弥生系? 図2と同一個体。	4-2Ⅲ 000315
	5	口縁部	-	直口口縁。丸。砂質。多量、0.5mm。内外面一黒褐色。大当原式?	4-2Ⅲ 000313
	6	口縁部	口径12.3	壺外反口縁。砂質。0.5mm。焼成良好。外面一残。内面一北。縄文晩期?	4-2Ⅲ 000817
	7	口縁部	-	外反口縁。舌。内唇一有文、幅広沈線文。砂質。白粒、多量。内外面一明茶褐色。大当原式。	4-2Ⅲ 000817
	8	口縁部	口径12.1	外反口縁。丸。中。焼成良好。内外面一暗黄褐色。	4-2Ⅲ 000817
	9	口縁部	口径7.6	外反口縁。丸。中。焼成良好。外面一明橙褐色。内面一明灰褐色。大当原式?	4-3Ⅲ 010302
	10	口縁部	-	「く」字状。舌。砂質。多量。内面一雑。内外面一明黄褐色。縄文晩期系。	4-4Ⅲ 001204
	11	口縁部	口径26.0	「く」字状。舌。中。多量、0.5mm。焼成良好。内面一ユビ。外面一明橙褐色。内面一明灰褐色。縄文晩期。	4-4Ⅲ 001206
	12	口縁部	-	直口口縁。中。多量。0.5mm。内面一ユビ。外面一明橙褐色。内面一明灰褐色。浜屋原式。	4-1表採
	13	口縁部	口径22.3	外反口縁。「く」字状・舌。中。少量、0.5mm。焼成良好。外面一ハケ(クテ)。内外面一明灰褐色。	4-6Ⅲ 010117
	14	口縁部	-	直口口縁。砂質。多量。内面一ユビ。内外面一明赤褐色。浜屋原式。	4-2Ⅲ 000713
	15	口縁部	口径24.6	直口口縁。丸。中。少量。焼成良好。内面一ユビ。内外面一暗茶褐色。浜屋原式。	4-2Ⅲ 000313

表8-2 土器観察一覧

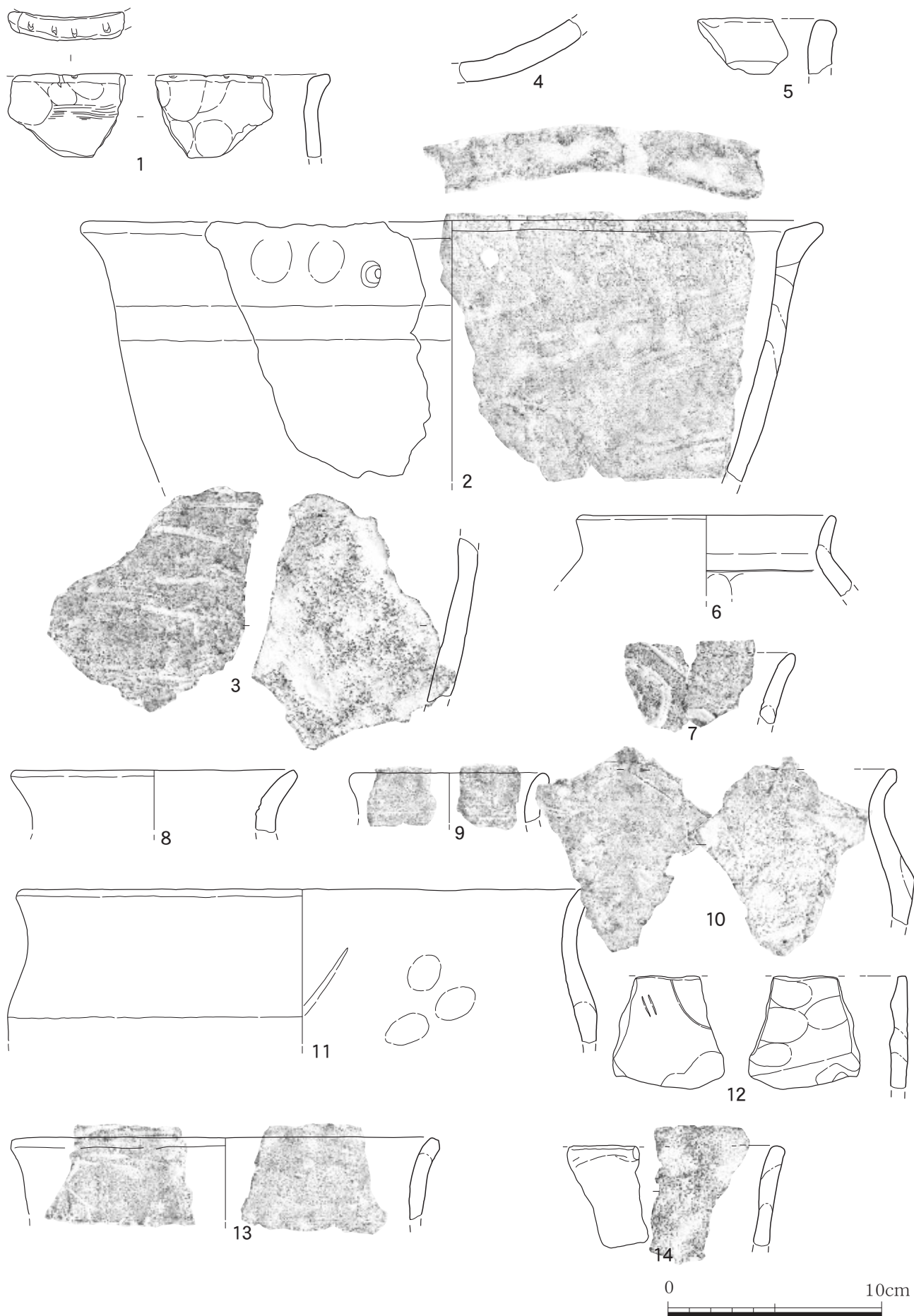
図版	番号	部位	口径・器高・底径 厚さ(cm)	観察事項	出土地
第20図 (図版8)	16	口縁部	口径21.4	直口口縁丸。中。少量、焼成良好。内面一コビ。外面一明橙褐色。内面一明灰褐色。浜屋原式。	4-1Ⅲ 000818
	17	胴部	—	砂質。多量、0.5mm。外面一コビ。内面一ハケ(横)。外面一明赤褐色。内面一明茶褐色。大当原式?	4-3Ⅲ 001206
	18	胴部・耳	—	平面形弧状。泥質。少量、0.5mm。内外面一明赤褐色。縄文晩期系。	4-1Ⅲ
	19	胴部・耳	—	平面形弧状。中。焼成良好。外面一ハケ。内面一コビ。内外面一明茶褐色。縄文晩期系。	4-2Ⅲ
	20	胴部	最大胴径22.1	「く」字状舌。砂質。多量、0.5mm。外面一ハケ。内面一ヨコ。外面一暗黒褐色。内面一暗灰褐色。弥生系	不明
	21	口縁部	—	外反口縁舌。砂質。石英黒透。多量、0.5mm。外面一暗褐色。内面一暗赤褐色。	不明
	22	口縁部	—	直口口縁舌。泥質。焼成良好。内外面一コビ。外面一暗褐色。内面一暗赤褐色。	4-4Ⅲ 001204
	23	口縁部	口径11.9	直口口縁丸。中。外面一コビ。内外面一暗黄褐色。	4-3Ⅲ 柱穴5079 010302
	24	口縁部	口径15.5	直口口縁玉縁状。砂質。石英、0.5mm。焼成良好。内外面一コビ。外面一暗赤褐色。内面一暗灰褐色。	4-5Ⅲ
	25	口縁部	—	直口口縁。砂質。石英、0.5mm。外面一コビ。内面一ハケ(ヨコ)。内外面一明~暗赤褐色。	不明
	26	口縁部	—	直口口縁丸。泥質。石英、0.5mm。焼成良好。外面一コビ。外面一灰褐色。内面一暗灰褐色。	4-5Ⅲ 000821
	27	口縁部	口径8.6	外反口縁舌。砂質。石英、多量。焼成良好。外面一残。内面一コビ。外面一暗灰褐色。内面一暗黄褐色。	4-5Ⅲ 001003
	28	口縁部	口径19.5	直口口縁。泥質。少量。焼成良好。外面一ハケ。外面一暗橙褐色。内面一明黄褐色。	4-6Ⅲ 000314
	29	口縁部	口径10.5	外反口縁丸。泥質。少量。焼成良好。外面一ハケ(タテ)。内面一ハケ(ヨコ)。内外面一明黄褐色。	不明
	第21図 (図版9)	30	口縁部	口径13.8	外反口縁丸。泥質。焼成良好。外面一コビ丁寧。内面一ハケ(ヨコ)。外面一暗灰褐色。内面一明灰褐色。
31		口縁部	口径12.8	外反口縁丸。泥質。細。焼成良好。外面一コビ丁寧。内面一ハケ(ヨコ)。内外面一明黄褐色。	4-2Ⅲ 000309
32		口縁部	—	外反口縁丸。泥質。光透。外面一残。内面一コビ。内外面一明黄褐色。	4-1Ⅲ 000816
33		口縁部	—	外反口縁玉縁状。泥質。石英、多量、0.5mm。焼成良好。外面一残。内面一コビ。内外面一明赤褐色。	3-8Ⅲ 000317
34		口縁部	—	外反口縁玉縁状。肥厚一四角。中。白粒、少量、0.5mm。焼成良好。外面一コビ。外面一明黄褐色。内面一明橙黄褐色。	3-5Ⅲ 000317
35		口縁部	—	外反口縁肥厚。泥質。赤粒。焼成良好。内外面一ナデ(ヨコ)。外面一暗茶褐色。内面一明灰褐色。	4-2Ⅲ 000315
36		口縁部	口径19.3	外反強い丸。泥質。砂粒。細。焼成良好。内外面一コビ。外面一明橙褐色。内面一明灰褐色。	4-2Ⅲ 000313
37		口縁部	口径10.8	外反口縁丸。泥質。少量。細。内外面一コビ。外面一明橙褐色。内面一明灰褐色。	4-6Ⅲ 010116
38		口縁部	—	外反口縁。砂質。少量。細。内外面一コビ。内外面一明赤褐色。	4-8Ⅲ 010319
39		口縁部	—	外反口縁角。沈線文(不規則)。泥質。0.5mm。焼成良好。内面一コビ。内外面一暗茶褐色。	4-5 010306
40		口縁部	—	外反口縁角。幅広沈線文(鋸歯)。中。0.5mm。焼成良好。内面一コビ。外面一暗灰。内面一灰黄褐色。	4-5Ⅲ 010306
41		口縁部	—	外反口縁玉縁状。不規則な沈線文。中。少量。細。内外面一暗灰褐色。	4-5Ⅲ 010306
42		口縁部	—	外反口縁玉縁状。泥質。焼成良好。内面一コビ。内外面一明灰褐色。	不明
43		口縁部	—	外反口縁玉縁状。刻目文。中。石英、細。焼成良好。内面一コビ。内外面一暗灰褐色。	4-6Ⅲ 000314
44		口縁部	—	外反口縁丸。波状口縁。竹管文。砂質。透明。細。焼成良好。内外面一コビ。内外面一明橙褐色。	不明
45		口縁部	—	外反口縁角。口唇に刻目。泥質。石英、0.5mm。焼成良好。内面一コビ。内外面一明赤褐色。	4-2Ⅲ 000313
46		口縁部	—	外反口縁玉縁状。口唇に斜沈線文、口縁に不規則な沈線文。中。細。焼成良好。	4-3Ⅲ 000310
47		口縁部	口径5.2	壺。丸。泥質。細。焼成良好。内面一コビ。内外面一暗黄褐色。	4-5
第22図 (図版10)	1	口縁部	口径27.7	外反。舌状。焼成良好。外面一丁寧。内面一指痕。外面一黒褐色。内面一茶褐色。	不明
	2	口縁部	口径13.0	壺。有頸。逆「J」字状に外反。断面一丸。石英、赤褐色。細。焼成良好。外面一丁寧。内面一指痕。やや雑。内外面赤褐色。	3-5Ⅲ
	3	口縁部	口径16.0	外反口縁角。焼成良好。内外面一明茶褐色。	3-5Ⅲ 000329
	4	口縁部	—	外反口縁。凸帯文+刻目文。	3-5Ⅲ 000317

表8-3 土器観察一覧

図版	番号	部位	口径器高底径 厚さ(cm)	観察事項	出土地	
第22図 (図版10)	5	口縁部	-	外反口縁、舌状。	3-5Ⅲ 000329	
	6	口縁部	-	内彎口縁、「く」字状に屈曲。内面に幅広沈線文。	4Ⅲ 000928	
	7	口縁部	-	外反口縁、角。外面一刷毛目。	不明	
	8	口縁部	-	外反口縁、舌状。胴部で湾曲。石英。焼成良好。外面一丁寧。内面一指痕。内外面暗褐色。	3-2Ⅳ 000418	
	9	底部 くびれ平底	底径5.0	外面一指痕。	3-7Ⅲ 000419	
	10	底部 くびれ平底	底径7.5	外面一指痕。	3-8Ⅲ 000317	
	11	口縁部	底径6.7	直口口縁、舌状。焼成良好。内面一指痕。内外面赤褐色。	3-7 00321	
	12	胴部	-	石英、赤褐色。焼成悪い。器面剥落。内面一指痕。内外面は器褐色。	1トレンチ泥炭層の下層 白色粗砂 000314	
	第23図 (図版11・12)	1	底部 丸底	-	砂質、光(透)。中外面一明橙褐色。内面一明灰茶褐色。	3-5Ⅲ 000327
		2	底部 尖底	-	砂質、中0.5mm。内外面一明橙褐色。	4-2Ⅲ淡灰黒色土層 000315
		3	底部 尖底	-	砂質、石英、中焼成良好外面一暗茶褐色。内面一暗灰褐色。	4-1黒色混貝土層 000817
		4	底部 尖底	-	中間、石英、中1mm焼成やや良好。内面残。外面一明橙褐色。内面一明黒灰褐色。	4-1Ⅲ 000818
5		底部 尖底	-	中間、石英・光(透)、少量。1mm 焼成やや良好。内外面一明灰褐色。	4-1Ⅲ 000818	
6		底部 乳房 状尖底a	-	砂質、光(透)、多量。0.5mm。以下内外面一明橙褐色。	4-1Ⅲ 000925	
7		底部 乳房 状尖底a	-	中1mm焼成良好内面指痕。内外面一明橙褐色。	4-4Ⅲ石敷きの下層 黒 色混土砂層 001207	
8		底部 乳房 状尖底a	-	中間、石英、中焼成良好外面一明赤褐色。内面一明灰褐色。	4-1黒色混貝土層 000817	
9		底部 乳房 状尖底a	-	中間、焼成良好内外面一明赤褐色。	4-5・6Ⅲ 010209	
10		底部 乳房 状尖底b	-	貝?、中焼成良好外面雜に仕上げる。外面一明橙褐色。内面一明灰褐色。	4-3Ⅲ 010302	
11		底部 乳房 状尖底b	-	砂質、石英、多量。0.5mm焼成良好外面一明橙褐色。内面一暗灰褐色。	4-1淡灰黒色土層 000315	
12		底部 乳房 状尖底b	-	砂質、石英、多量。焼成やや良好。内外面一暗灰褐色。	4-1Ⅲ 000313	
13		底部 平底 b	底径6.3	立上角度17° 砂質、光(透)、多量。焼成良好外面一明橙褐色。内面一明黄褐色。	4-1Ⅲ 000818	
14		底部 くびれ平底d	底径	立上角度46° 上げ底。中間、石英・光(透)、多量。焼成良好外面一橙褐色。内面一明灰褐色。	4-1Ⅲ 000314	
15		底部 平底 c	底径3.5	立上角度31° 泥質、0.5mm焼成良好外面一明赤褐色。内面一明灰褐色。	4-6Ⅲ 000314	
16		底部 平底 c	底径2.5	立上角度41° 0.5mm以下焼成良好外面一明橙褐色。内面一明褐色。	不明Ⅲ	
17		底部 平底 c	底径3	立上角度25° 泥質、石英、焼成良好内外面一明灰褐色。	4-1Ⅲ 000818	
18		底部 くびれ平底c	底径3	立上角度26° 泥質、中焼成良好内外面一暗茶褐色。	不明Ⅲ	
19		底部 くびれ平底c	底径4	立上角度8° 中0.5mm以下外面指痕。内外面一明橙褐色。	4-2Ⅲ 000817	
20		底部 くびれ平底c	底径4	立上角度22° 泥質、中焼成良好内外面一明黄褐色。	4-1Ⅲ 000713	
21		底部 くびれ平底c	底径4	立上角度36.5° 泥質、白粒、焼成良好内面刷毛目。内外面一明橙褐色。	4-1Ⅲ 000815	

表 8-4 土器観察一覽

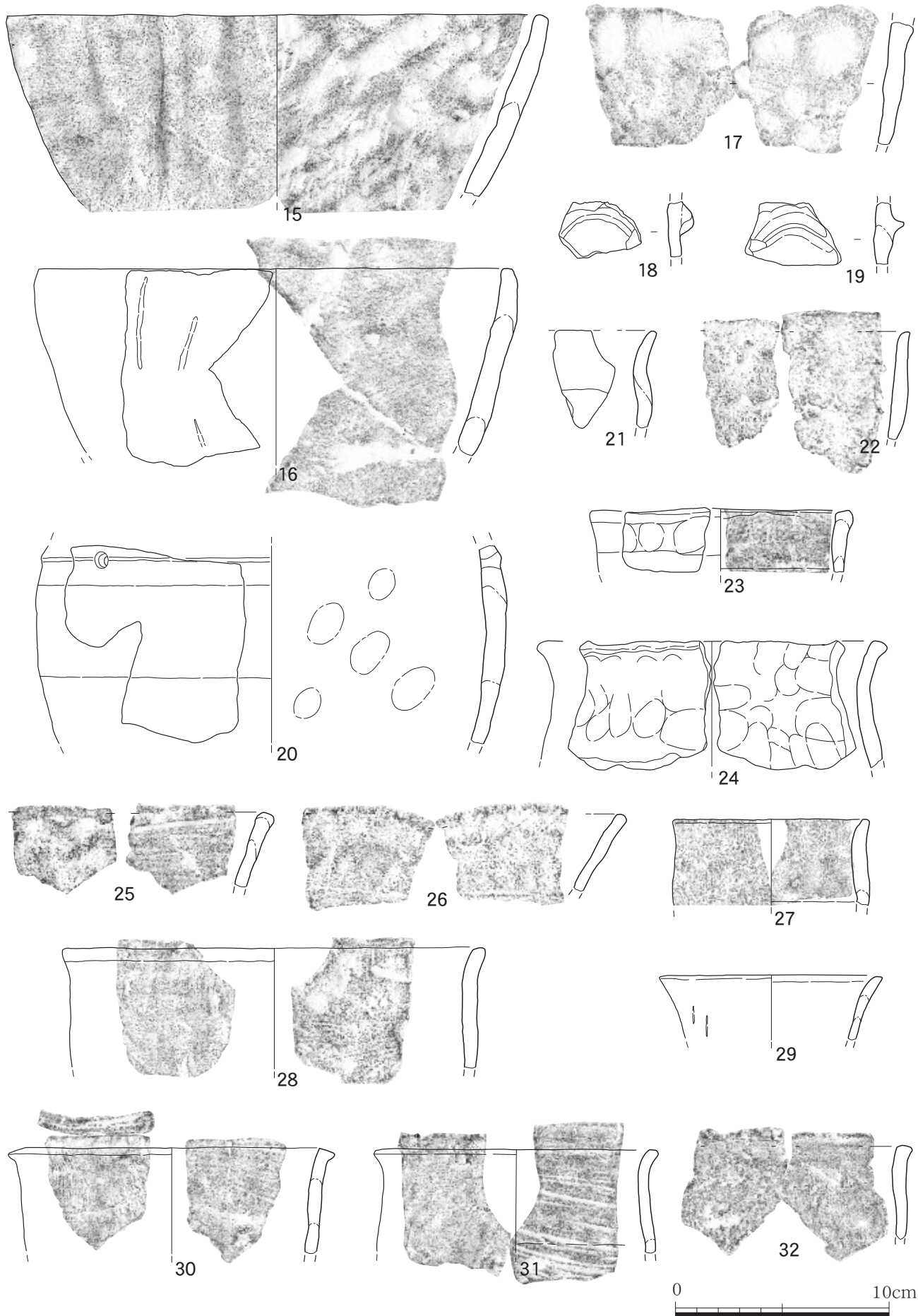
図版	番号	部位	口径器高底径 厚さ(cm)	観察事項	出土地
第23図 (図版11・12)	22	底部 くびれ平底c	底径5	立上角度31° 泥質、少量。0.5mm焼成良好、内外面一明灰褐色。	4-2Ⅲ 000815
	23	底部 くびれ平底d	底径7	立上角度46° 白粒、中焼成良好、外面一明茶褐色、内面一明灰褐色。	4-6Ⅲ 010118
	24	底部 平底 a	底径4.5	立上角度31° 泥質、外面縦に刷毛目、内外面一明茶褐色。	4-1黒色混貝土層 000817
	25	底部 くびれ平底b	底径5	立上角度11° 中0.5mm焼成良好、外面指痕、外面一暗茶褐色、内面一明灰褐色。	4-1Ⅲ 000818
	26	底部 くびれ平底a	底径5	立上角度35° 泥質、外面一明灰褐色、内面一明橙褐色。	4-1Ⅲ 000818
	27	底部 くびれ平底a	底径5	立上角度38° 泥質、少量、内面刷毛目粗い、内外面一明黄褐色。	4-1Ⅲ 000315
	28	底部 平底 a	底径6	立上角度31.5° 砂質、焼成良好、外面刷毛目、外面一明黄褐色、内面一明灰褐色。	4-2Ⅲ 000817
	29	底部 くびれ平底a	底径6	立上角度27° 0.5mm以下焼成良好、外面一明茶褐色、内面一明灰褐色。	4-1黒色混貝土層 000817
	30	底部 くびれ平底a	底径6	立上角度28° 砂質、多量、0.5mm以下焼成良好、外面一明茶褐色、内面一明灰褐色。	4-5Ⅲ 000315
	31	底部 くびれ平底a	底径6	立上角度33° 泥質、内面刷毛目、外面一暗灰褐色、内面一暗茶褐色。	4-3戦前遺構 遺構掘り 下げ 001213
	32	底部 くびれ平底a	底径10	立上角度39° 砂質、石英・珩、多量、0.5mm内外面一明茶褐色。	不明Ⅲ
	33	底部 くびれ平底a	底径4.5	立上角度38° 泥質、焼成良好、外面一明橙褐色、内面一暗灰褐色。	4-1Ⅲ下 000901
	34	底部 くびれ平底a	底径5	立上角度35.5° 砂質、中0.5mm以下内面刷毛目、外面一明橙褐色、内面一明灰褐色。	4-1Ⅲ 000313
	35	底部 くびれ平底a	底径5	立上角度36° 泥質、外面一明橙褐色、内面一暗灰褐色。	4-1Ⅲ 000314
	36	底部 くびれ平底b	底径8	立上角度3.5° 泥質、少量、内外面指痕、外面一明黄褐色、内面一明灰褐色。	4-8Ⅲ 010322
	37	底部 くびれ平底b	底径5.5	立上角度40° 泥質、0.5mm、内外面一明茶褐色。	4-1Ⅲ下 000901
	38	底部 くびれ平底a	底径7	立上角度38° 泥質、少量、0.5mm焼成良好、外面指痕、外面一明茶褐色、内面一明灰褐色。	4-1Ⅲ 000313
	39	底部 くびれ平底a	底径6	立上角度31.5° 泥質、少量、焼成良好、内外面指痕、外面一明橙褐色、内面一明黄褐色。	4-1Ⅲ 000817
	40	底部 くびれ平底a	底径6	立上角度32° 泥質、少量、焼成良好、内外面一明茶褐色。	4-5Ⅲ 010330
	41	底部 くびれ平底d	底径7	立上角度50° 砂質、石英、多量、焼成やや良好、内外面一暗茶褐色。	4-6Ⅲ 010118
	42	底部 くびれ平底d	底径12	立上角度42° 泥質、外面一明橙褐色、内面一明灰褐色。	4-6Ⅲ 000314
	43	底部 くびれ平底b	底径7	立上角度23° 泥質、少量、外面一明灰褐色、内面一明黄褐色。	4-2Ⅲ 000313
	44	底部 くびれ平底a	底径7	立上角度32° 泥質、石英、多量、0.5mm焼成良好、内外面一明灰褐色。	4-6Ⅲ 000314
	45	底部 くびれ平底b	底径8	立上角度25° 泥質、石英、多量、0.5mm以下、内外面一明灰褐色。	4-5Ⅲ 000315
46	底部 くびれ平底a	底径7	立上角度31° 泥質、少量、外面一明橙褐色、内面一明灰褐色。	4-1Ⅲ 000816	
47	底部 くびれ平底d	底径10?	ひらく、立上角度56° 泥質、石英赤粒、少量、焼成良好、内外面一明茶褐色。	4-6Ⅲ灰黒色砂質土層 000712	



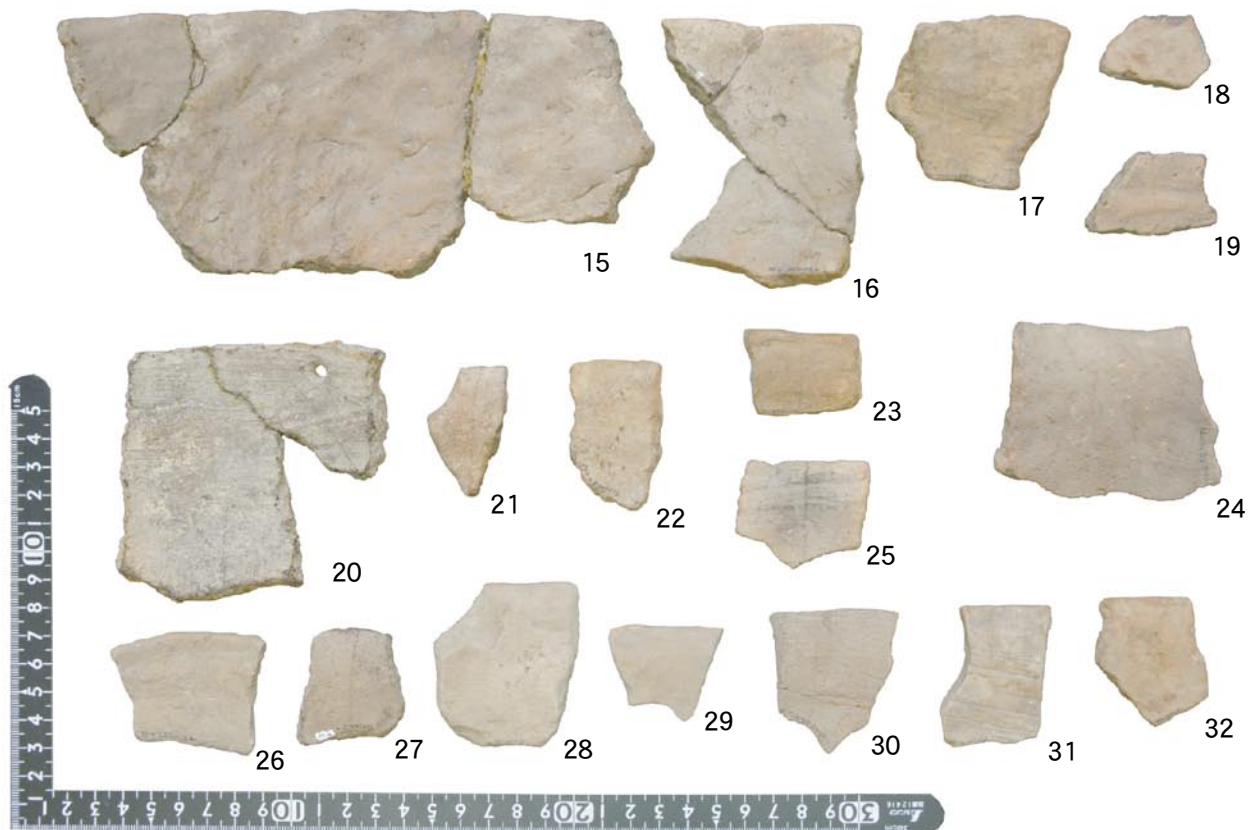
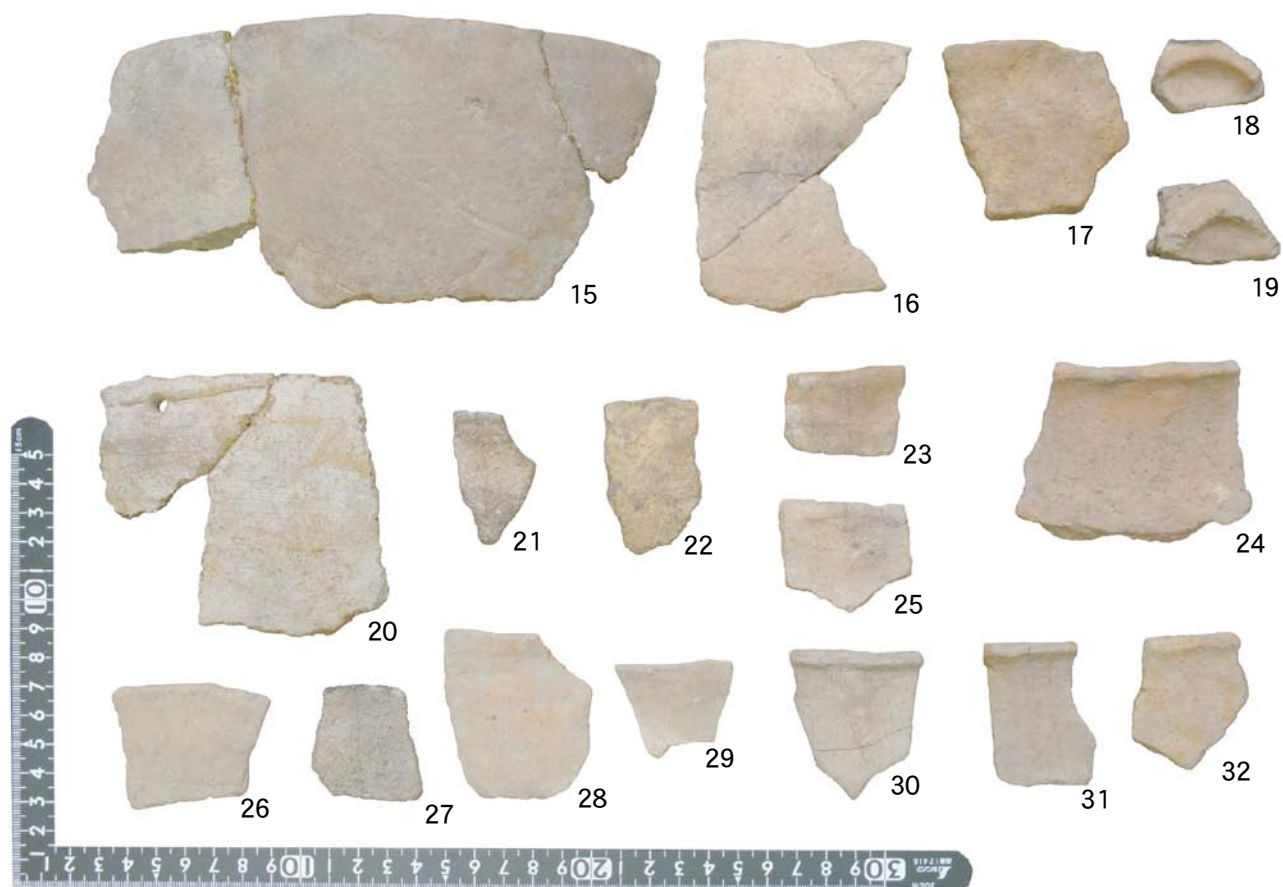
第19図 土器1(4トレンチ)



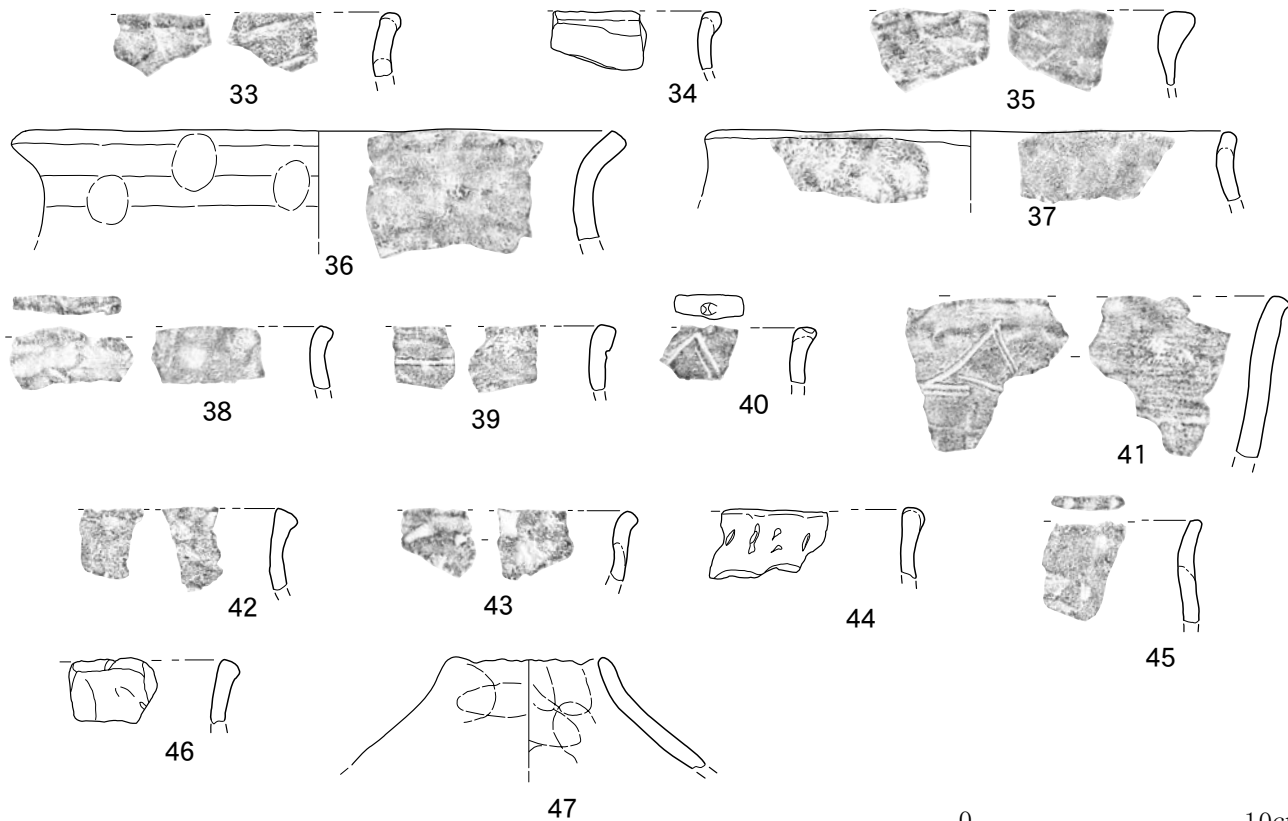
図版7 土器1(4トレンチ)



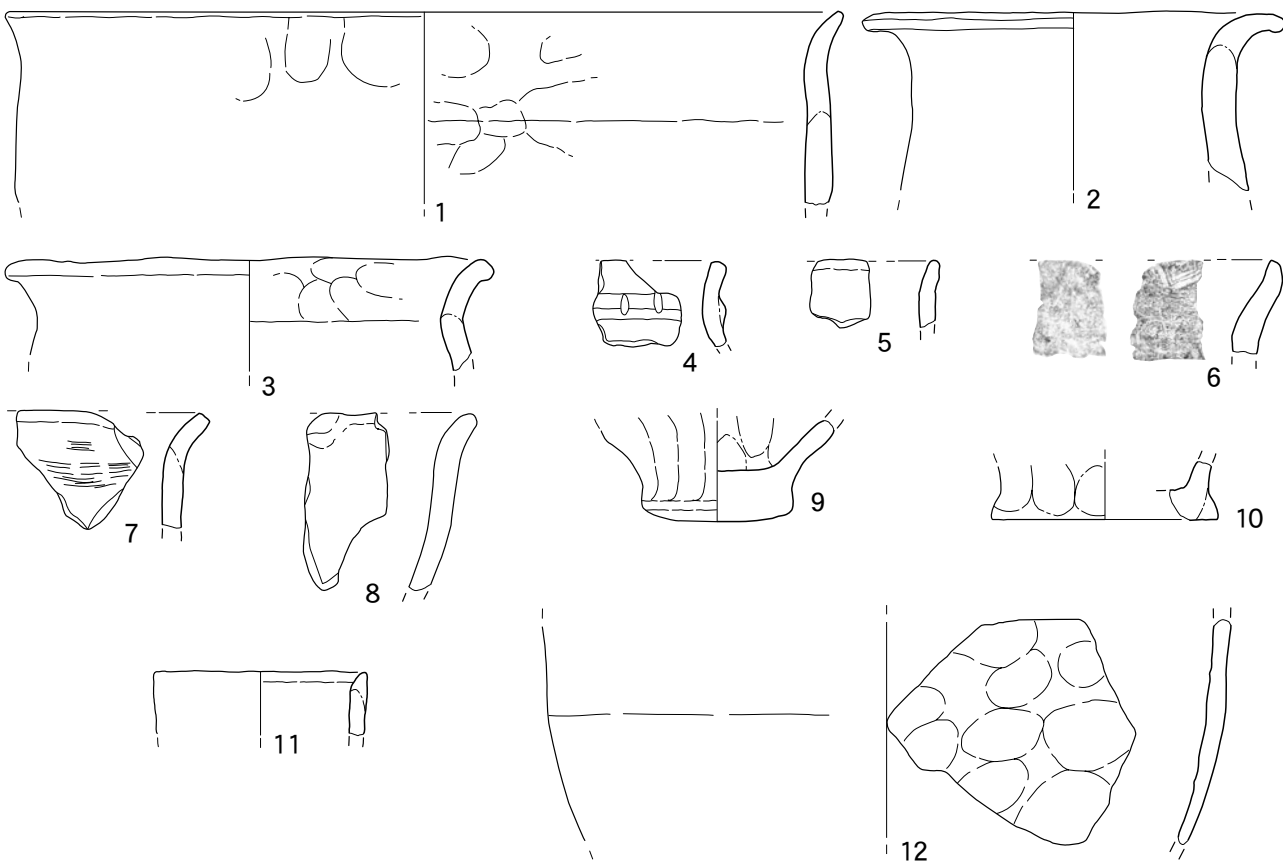
第20図 土器2(4トレンチ)



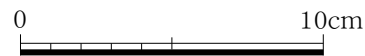
図版8 土器2(4トレンチ)



第21図 土器3(4トレンチ)



第22図 土器4(1・2・3トレンチ)

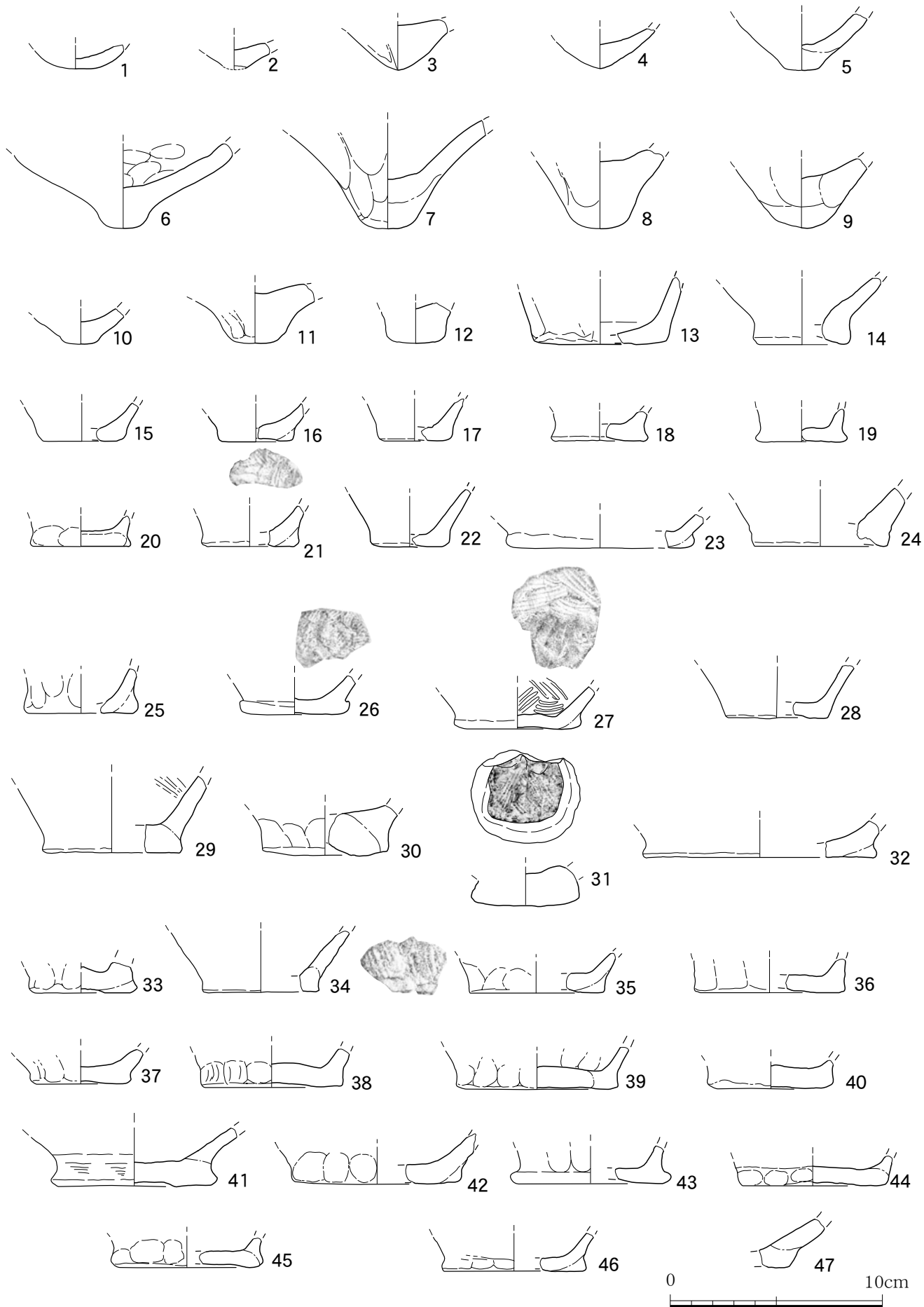




図版9 土器3(4トレンチ)



図版10 土器(1・2・3トレンチ)



第23図 土器 (底部)



図版11 土器 底部1(4トレンチ)



図版12 土器 底部2(4トレンチ)

・グスク土器

本遺跡からは3点出土した。確認できた器形に鍋形・壺形があり、全て無文であった。鍋形口縁部片（図1）、鍋形で鏝状の凸帯が廻っている土器片（図2）、壺形胴部片（図3）である。

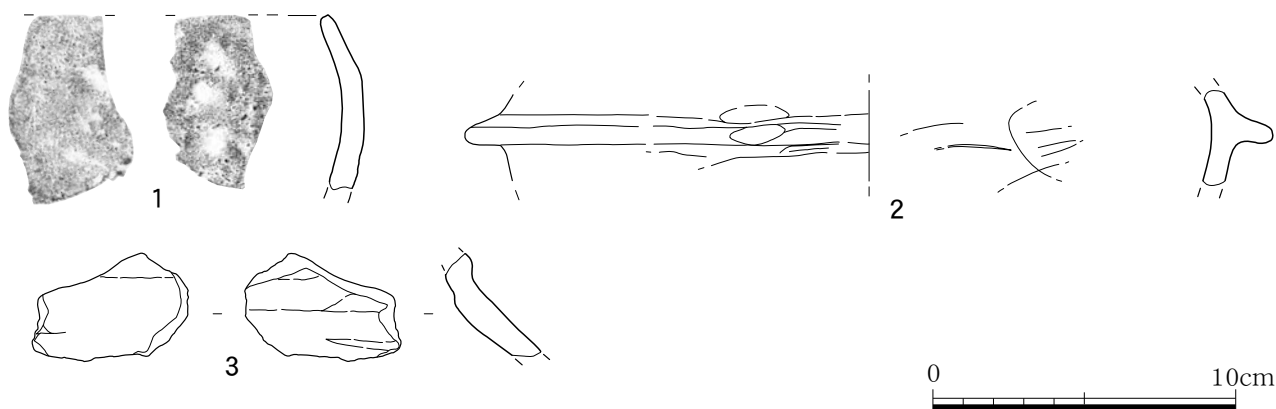
a. 鍋形（第24図・図版13）

図1は、舌状の口唇部を持つ口縁部片である。内湾している。砂質の胎土に2mm大の石英を含む。外面、内面共に指頭押圧痕が残る。焼成は良く、器厚は6～9mmである。4-6Ⅲ層より出土。

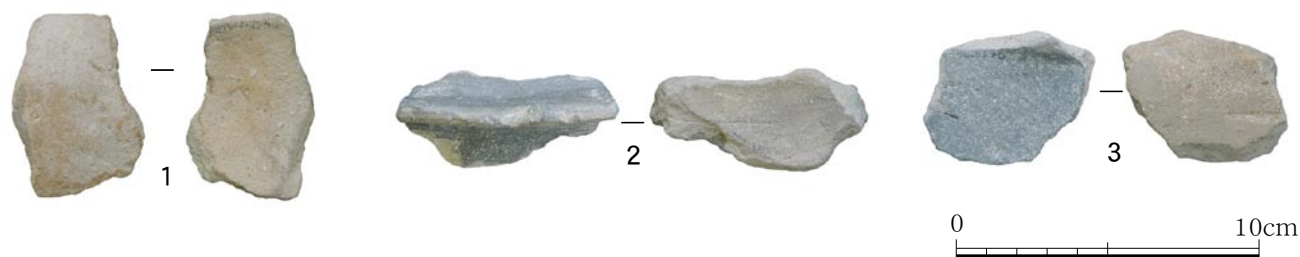
図2は、鏝は縦断面形が「U」字状を呈しており、羽釜模倣と思われ、竈にはまるように下向きになっている。胴径は22.7cmである。胎土は泥質で、混入物は目立つもので、1.2mmの貝、2.4mmの石灰岩で、全体に微細な白色粒が含まれている。宮古式土器と胎土、混入物が似ているが、図3と比べると作りが丁寧で指ナデによる横方向への擦痕が確認できる。焼成は良く、器厚は8mm、鏝の厚さは7.4mmである。4-6淡灰黒色土層より出土している。

b. 壺形（第24図・図版13）

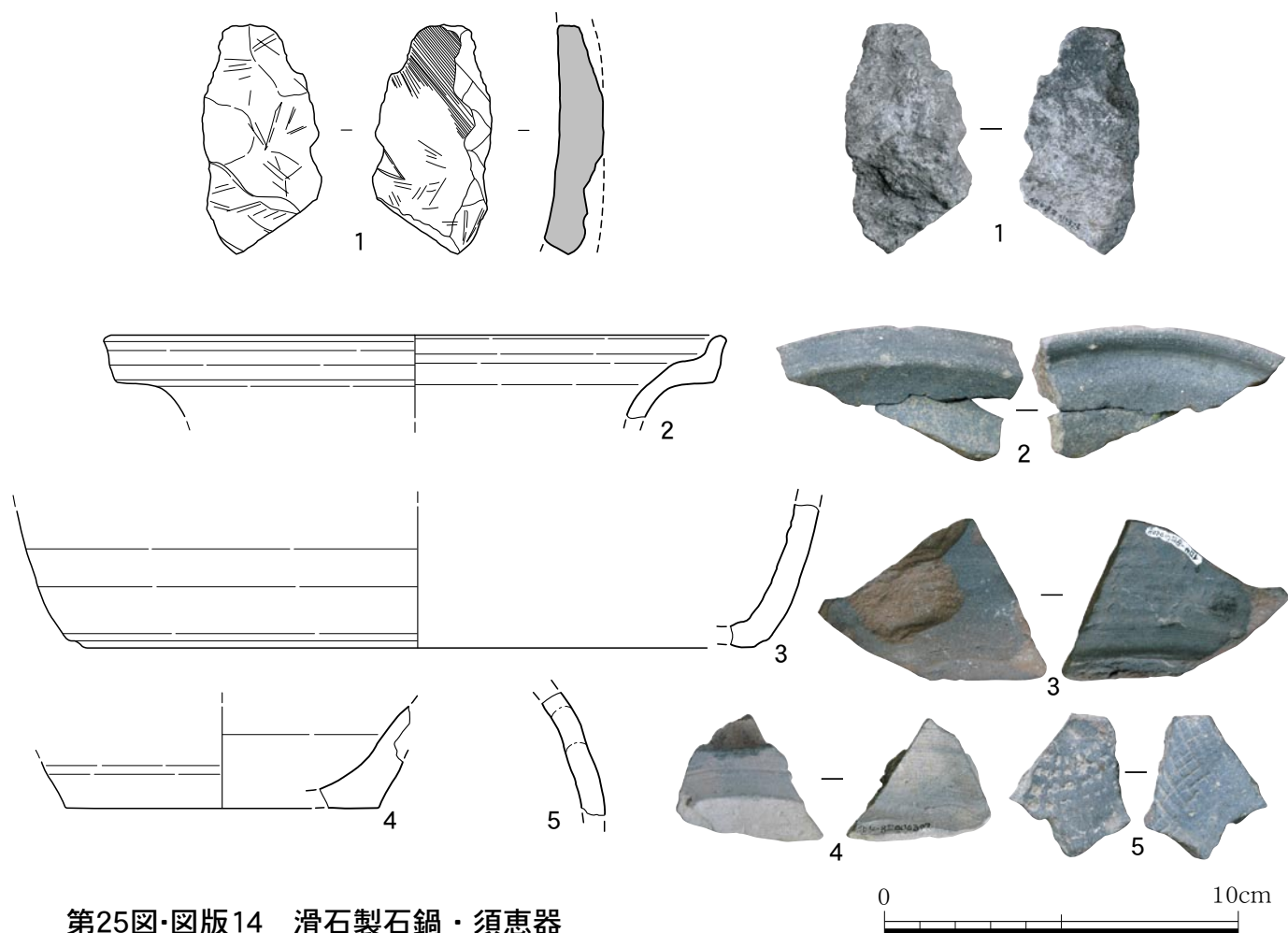
図3は壺形の胴部片で、頸部への立ち上がりが若干見られる。微細な白色粒を多く含み、赤色粒がまばらに入る。いわゆる宮古式土器に比定される。表面は、若干アバタ状になっており、裏面に指ナデによる横方向の擦痕が確認できるが、図2ほど丁寧には器面調整はされていない。器厚は8～10mmである。4-6Ⅲ層より出土。



第24図 グスク土器



図版13 グスク土器



第25図・図版14 滑石製石鍋・須恵器

2. 滑石製石鍋（第25図・図版14）

図1は底部近くで、外面は僅かに器面が残存し、内面は器面が残り、約半分ほどは煤が付着する。石質は他の滑石と異なり、針状の鉱物が多量混入する。4-8黒色砂質土で出土。後兼久原遺跡、伊礼原遺跡（砂）で散発的に出土。

3. 須恵器（第25図・図版14）

徳之島産のカムイヤキとされているもので口縁部1点、胴部1点、底部2点の計4点出土した。4点とも壺と思われる。

図2は口縁部で、口唇は「く」字状に湾曲する。口唇の縁幅12mm、外面は轆轤痕が見られ、混入物に石英、白粒を含む。口径17.3mm、No.5淡褐色砂質層の出土である。

図3は底部でその立ち上がりはストレートである。内外面に轆轤痕が認められる。混入物に石英を若干含む。4-6平面清掃。

図4は底部で若干円味を帯びる。器色は暗灰色で焼成は悪い。外面に轆轤痕、内面に叩き痕が見られる。混入物に白粒を僅かに混入。4-8黒色砂層の出土。

図5は胴部で、暗灰色を呈し、内外面に格子目の叩き痕が施され、焼成は悪く、暗褐色を呈し、サンドイッチ状を呈する。混入物に白粒が認められる。4-6淡灰黒色土層の出土である。本町では後兼久原遺跡、伊礼原遺跡砂丘区で出土している。

4. 白磁

本遺跡出土の白磁は、器種別には碗41点・小碗3点・皿55点・小皿6点・杯3点・瓶5点・壺8点など139点出土した。

出土地別には4-6で61点、4-5で33点得られ、出土状況は、ほぼ青磁や染付と重なるようである。表9に出土状況、表10に観察一覧、図26、図版15に示した。以下、器種別に略述する。

a. 碗

直口口縁と外反口縁に大別される。

直口口縁には胎土が乳白色のもの（図11）と青白磁（図1、図5）がある。いずれも轆轤痕が明瞭である。図4は薄手で、口唇の先端が若干膨らむ。

外反口縁は図2で内底に圈線、外面に轆轤痕が明瞭に残るものである。図3は口唇が舌状を呈するもので、胎土も細かく、型成形で口径17.8cmと大きくなるようである。

底部についてみると内底に蛇の目釉はぎ（図7・8・9・10）、フィガキーで施釉された図11は底径6.2cmで、胎土は青磁に近いものである。

b. 皿

主に外反口縁である。その大きさは14cm（図4）～16cm（図14）である。底部は切り高台と型成形（図17～22）があり、さらに腰部が張る。口縁部形態から直口口縁と外反口縁に分類される。

前者は直径14.4cm（図3）、後者は19cm（図21）を測る。

底部は轆轤成形（図12）と型成形（図17～22）がある。前者は胎土が乳白色で福建あたりのものであると思われる。

後者は白色と灰白色のタイプがある。

図12は切り高台の小皿で底径4.0cmを測り、15世紀代のものである。

型成形の底部は腰が張るもの（図17～21）と腰がまっすぐなもの（図22）がある。いずれも畳付けに目砂が付着する。

c. 小杯

図23は外反口縁で、口縁部断面は舌状を呈する。図24は腰の張る底部で、高台の断面は舌状を呈する。高台は部分的に釉がとぎれるものである。

d. 壺

図26は頸部で、肩部に陰刻でラマ式蓮弁文を施すものである。頸径5.4cmを測り、釉も白く、文様などから14世紀後半～15世紀中頃に属するものと思われる。

図27は厚手の壺の底部と考えられるもので、腰部は無釉である。小破片のため、全形は不明である。

e. 瓶

図25は口縁部がアサガオ状に外反する口縁部で、口径3.2cmを測る。釉は内面の途中まで施され、轆轤痕が明瞭に残る。

以上、白磁について略述したが、年代では14世紀後半～15世紀代のもものと18世紀代のものに分かれるようである。

表9 白磁出土量

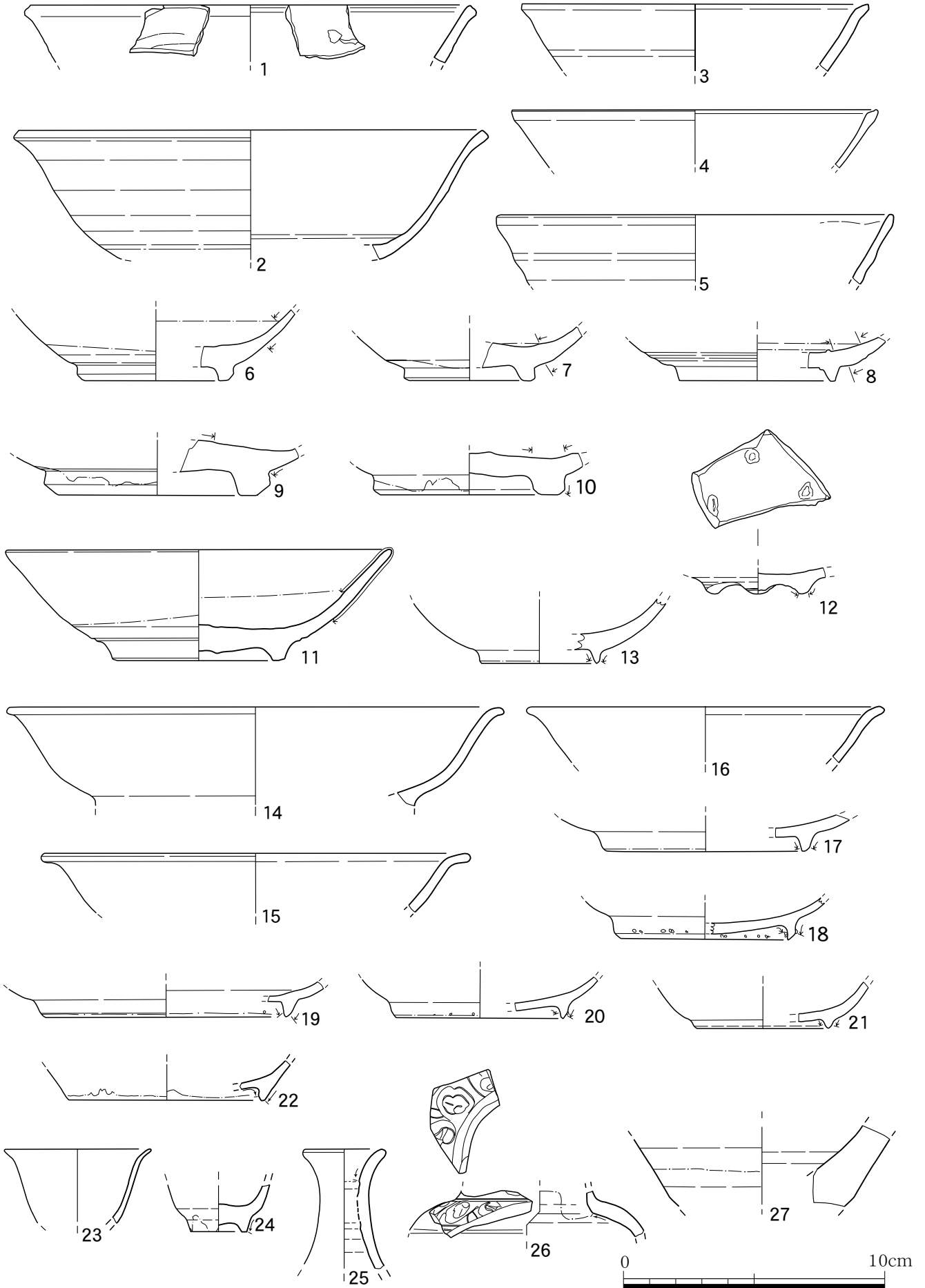
出土地		器種	碗	小碗	皿	小皿	杯	瓶	壺	不明	小計	層集計	グリッド 集計
グリッド	層	部位											
3-5	Ⅲ	底			1						1	1	1
3-7	Ⅲ	底			1						1	1	1
4-1	Ⅲ	口			1	1		1			3	5	5
		胴						1			1		
		底			1						1		
4-3	Ⅱ	口			1						1	2	2
		胴								1	1		
4-4	Ⅱ	口	1		2						3	9	10
		胴	2						1		3		
		底		1	1			1			3		
	不明	胴	1								1	1	
4-5	Ⅱ	口	1								1	1	33
	Ⅲ	口	6		2		2		1		11	31	
		胴	6		4			1		2	13		
		底	1		3	1					5		
		口~底	1			1					2		
黒褐色砂質層	口			1						1	1		
4-6	Ⅲ	口	3		8		1			2	14	60	61
		胴	10		12	1			4	5	32		
		底	4	1	7				1	1	14		
	不明	口			1						1	1	
4-7	Ⅲ	胴			2						2	3	3
		底			1						1		
4-8	Ⅲ	口			2						2	5	5
		胴	1						2		3		
4-9	Ⅲ	口		1	2						3	6	6
		胴	1								1		
		底	1		1						2		
4-10	褐色土層	胴	1								1	1	1
4-5・6	Ⅲ	口			1						1	3	3
		胴							1	1	2		
4-6・7	Ⅲ	胴								1	1	1	1
不明	表採	底			1						1	1	7
	淡褐色砂質層	底	1								1	1	
	淡灰色石混土	口				1		1			2	2	
	淡灰緑色-a	底				1					1	1	
	不明	胴								2	2	2	
合計			41	3	56	6	3	5	8	17	139		

表9 白磁出土量

出土地		器種	碗	小碗	皿	小皿	杯	瓶	壺	不明	小計	層集計	グリッド 集計
グリッド	層	部位											
3-5	Ⅲ	底			1						1	1	1
3-7	Ⅲ	底			1						1	1	1
4-1	Ⅲ	口			1	1		1			3	5	5
		胴						1			1		
		底			1						1		
4-3	Ⅱ	口			1						1	2	2
		胴								1	1		
4-4	Ⅱ	口	1		2						3	9	10
		胴	2						1		3		
		底		1	1			1			3		
	不明	胴	1								1	1	
4-5	Ⅱ	口	1								1	1	33
	Ⅲ	口	6		2		2		1		11	31	
		胴	6		4			1		2	13		
		底	1		3	1					5		
		口~底	1			1					2		
黒褐色砂質層	口			1						1	1		
4-6	Ⅲ	口	3		8		1			2	14	60	61
		胴	10		12	1			4	5	32		
		底	4	1	7				1	1	14		
	不明	口			1						1	1	
4-7	Ⅲ	胴			2						2	3	3
		底			1						1		
4-8	Ⅲ	口			2						2	5	5
		胴	1						2		3		
4-9	Ⅲ	口		1	2						3	6	6
		胴	1								1		
		底	1		1						2		
4-10	褐色土層	胴	1								1	1	1
4-5・6	Ⅲ	口			1						1	3	3
		胴							1	1	2		
4-6・7	Ⅲ	胴								1	1	1	1
不明	表採	底			1						1	1	7
	淡褐色砂質層	底	1								1	1	
	淡灰色石混土	口				1		1			2	2	
	淡灰緑色-a	底				1					1	1	
	不明	胴								2	2	2	
合計			41	3	56	6	3	5	8	17	139		

表10 白磁観察一覧

図・図版	番号	種類	部位	口径・器高・底径(cm)	観察事項	出土地
第26図 (図版15)	1	碗	口縁部	口径:16.8	直口口縁。釉色:内外面-青白釉。器面調整:外面-轆轤明瞭。貫入:有り。素地:白色。	4-6 III 000127
	2	碗	口縁部	口径:17.8	外反口縁。型成形。文様:外面-稜線、釉色:内外面-褐白釉。内底-圈線。器面調整:外面-轆轤明瞭。貫入:細かい。素地:乳白色。	
	3	碗	口縁部	口径:14.4	直口口縁-端反。文様:外面-圈線2条。釉色:内外面-灰白釉。器面調整:外面-轆轤痕。貫入:粗い。素地:灰白色。	4-6 III 000314
	4	碗	口縁部	口径:14.0	直口口縁-角端反、口唇ふくらむ。文様:外面-稜線。釉色:内外面-淡青白釉。貫入:細かい。素地:白色。	4-5 III 001031
	5	碗	口縁部	口径:15.2	直口口縁。文様:外面-稜線。釉色:内外面-灰白釉。器面調整:轆轤痕。素地:赤褐色。	4-6 III 000314
	6	碗	底部	底径:5.6	外反口縁。釉色:白釉。フィガキー。器面調整:外面-轆轤痕。貫入:細かい。素地:白色。	4-6 III 010209
	7	碗	底部	底径:4.7	文様:外面-稜線。釉色:内外面-乳白釉。内底-蛇の目。フィガキー。器面調整:外面-轆轤痕。素地:乳白色。	4-9 III 000314
	8	皿	底部	底径:6.0	釉色:灰白釉。内底-蛇の目、重ね焼きの痕残る。腰畳底-無。器面調整:外面-轆轤痕。素地:白色。	4-6 III 000314
	9	皿	底部	底径:7.6	高台太い。釉色:外面-腰部まで青白釉、内底-無釉。内底-蛇の目。腰畳底-無。器面調整:蛇の目釉剥ぎ。素地:灰色。	4-6 III 001031
	10	皿	底部	底径:7.0	釉色:内外面-白灰釉。内底-蛇の目。畳付~外底無釉。素地:灰色。	4-7 III 000309
	11	碗	口縁~底部	口径:15.8 器高:4.3 底径:6.2	直口口縁。釉色:外面-白乳釉。フィガキー。素地:乳白色。	4-5 III 10P545 010306
	12	皿	底部	底径:4.0	切り高台。釉色:内外面-灰白釉。内底-目痕。外底:施釉。器面調整:轆轤痕。貫入:細かい。素地:白色。15世紀中~後。	4-1 III 000315
	13	碗	底部	底径:4.4	外反口縁。型成形。釉色:内外面-青白釉。内底-無釉。畳-無。砂付着。貫入:粗い。素地:白色。	4-6 III 000314
	14	皿	口縁部	口径:19.0	外反口縁。型成形。釉色:内外面-白釉。素地:白色。	4-5 III 柱穴5079
	15	皿	口縁部	口径:16.4	外反口縁。型成形。釉色:内外面-白釉。素地:白色。	4-6 III 000314
	16	皿	口縁部	口径:13.6	外反口縁。釉色:内外面-白釉。素地:灰白色。	4-1 淡灰黒色土層
	17	皿	底部	底径:7.6	型成形。釉色:白釉。内底-無釉。畳-無、削り。素地:白色。	4-6 III 000314
	18	皿	底部	底径:6.4	釉色:内外面-白釉。内底-無釉。畳-付着。貫入:無。素地:白色。	3-5 III 000317
	19	皿	底部	底径:9.2	型成形。釉色:内外面-灰白釉。畳-無。貫入:粗い。素地:灰白色。	4-5 III 000821
	20	皿	底部	底径:6.4	型成形。釉色:内外面-灰白釉。内底-無釉。畳-無。器面調整:砂付着。貫入:無。素地:灰白色。	4-5 III 000314
	21	皿	底部	底径:5.3	型成形。釉色:内外面-白釉。内底-無。砂目。畳底-無。素地:白色。	4-5 III 001025
	22	皿	底部	底径:7.5	底部の立ち上がりはストレート。型成形。釉色:内外面-白釉。畳底-無。素地:白色。	3-7 000321
	23	杯	口縁部	口径:5.4	外反口縁。釉色:内外面-白釉。素地:白色。	4-5 III 淡灰黒色土層 000315
	24	杯	底部	底径:2.2	釉色:内外面-白釉。(畳底)無。素地:白色。	4-6 III 淡灰黒色土層 000315
	25	瓶	口縁部	口径:3.2	外反口縁。アサガオ状。長頸、肩部はなで肩。内面は頸部の途中まで施釉。素地:白色。	4-5 淡灰黒色粘質土層 中に石列? 000719
	26	瓶	口縁部	底径:5.4	直口口縁。立口。文様:外面-沈線でラマ式蓮弁文。釉色:内外面-青白釉。頸部はマダラに施釉。器面調整:内面-轆轤痕。素地:白色。	4-1 III 淡灰黒色土層 000314
	27	壺	底部	底径:6.5	底部の腰部分まっすぐ。釉色:外面-乳黄釉、内面-灰釉。器面調整:轆轤。素地:乳白色。	4-6 III 000309



第26図 白磁



図版15 白磁

5. 青磁

出土地別には染付・白磁と同じような分布状況である。

器種別に見ると碗386点、筒碗2点、皿82点、壺3点、酒会壺2点、盤16点、瓶10点、鉢9点、不明11点、計521点出土した。

層別にみるとⅢ層（345個）、全体66.2%、中国陶磁器では最も多く得られた（表11）。出土地別には4-6Ⅲ層で138点、4-5Ⅲ層で81点と最も多く全体の44.5%を占める。以下、出土状況を表11、主なものを表12に観察一覧、第27～30図、図版16～19に示し、以下、器種ごとに略述する。

a. 碗

384点出土した。文様別にみると蓮弁文、雷文帯、劃花文、人形手、圏線のみ、無文がある。蓮弁文はさらにヘラ描き、線刻蓮弁文があり、線刻蓮弁文は文様の幅、釉色で細分される。また、口縁を外反口縁と直口口縁に分けた。その結果、最も多いのは直口口縁の線刻蓮弁文である。碗の口縁部を形態及び文様で6つに分類し、底部は釉の掛け具合で3つに分けた。

〈口縁部〉

I類（図1）：直口口縁で、舌状、内面に圏線とヘラで文様。図1は蓮弁文、劃花文である。

II類：図2～5は無文で口唇が膨らみ、口唇は角をなす。外面に稜線が明瞭である。図2は内底に蛇の目釉はぎ、図3は外底の腰部から無釉である。釉は明るいオリーブ色である。

III類：図6～7は外反口縁で、内外面にヘラで文様を施す。口唇に雷文帯、胴部に唐草文を施す。

IV類：図8、9、10、12は直口口縁で、ヘラで文様を施す。

図8と12は内外面に文様が施され、図9、10、11は外面のみである。9は胴下部はラマ式蓮弁文と思われる。

V類：文様は型押しで施文するものである。内外面に文様が見られる（図13、15、16、17、18）。外面は雷文帯に蓮弁文、内面の施文は雷文帯と唐草文で口唇より下方である。碗の大きさは他の碗よりは大きいが、図16は小さい方である。図13は外面に蓮弁文、内面に人形手が明瞭にわかる。

VI類：篋で蓮弁文を施すもので、蓮弁文の幅や文様の整いで細分される。蓮弁文の幅がやや広く、弧状に弁を描くaタイプ（図19～25）と蓮弁文の幅が狭く、弁が崩れるものbタイプ（図26～27,31）がある。さらに蓮弁文が細く、崩れたcタイプ（図28、32、33、34）ものがある。このタイプは素地も灰色で釉も乳色や灰色などがあり、青磁でも質が悪いようである。7点出土。

〈底部〉碗の底部は上のいずれかのものであるが、口縁に伴うような細分は難しいため、下記に分類した。底径は3.9～6.6cmで平均5.23cmである。

底部aは内底に印花文、外底は蛇の目釉剥ぎが施されている。（図35～46）

底部b（図48）畳付けに砂が多く付着し、高台に釉が溜まり、畳付けに熔着が見られる。外底内は無釉で、内底に圏線を施す。また、内底に蛇の目を施すもの（図2、40、41、47）がある。このタイプは素地も灰色である。

底部cは釉を熔着から防ぐために畳付けをヘラで削るもの（図35、41、42、44、45、48）がある。

b. 皿（図49～72）

73点出土した。外反稜花皿（a）、直口皿（b）、口折皿（c）がある。

皿a－外反稜花皿。口縁が外反し、縁は稜花を呈するもの（図53、57、58、59、60、61、62）

外面にヘラで劃花文、口径は10.6cm～12.6cm、底径は5.4cmを測る。図53は内外面に牡丹唐草文が施される。柱穴No.6164の出土。

図57・59・61は内面に櫛描文、内面に文様、及び内底に印花文（図54,55）を施すものがある。

皿b－直口皿で外面に蓮弁文を施す（図64）、外面に圏線、内底に蛇の目釉はぎを施すもの（図65）、無文（図66、67、68）がある。大きさは口径が10.6cm～8.2cm、底径が4.2cmと小さい。

皿c－口折皿。口縁部が逆「L」状に折れるもの（図49）。

内底に双魚文らしきものが陰刻されている。

皿d－型成形で作られたもので、口縁が輪花状をなす（図71）もので、また、図72は先端が細く、畳付けのみ無釉をなすもので前者の底部と考えられる。17世紀～18世紀頃のものと思われる。

c. 盤（図73～75）

盤15点出土した。図73は逆「L」字状の口縁、図74は鍔縁の口縁で、稜花。外面に蓮弁文と圏線、内面にヘラで劃花文、唐草文を施す。他に比べて大きい。図75は底部で、外底が蛇の目釉はぎ、釉は明オリーブ灰色を呈する。

d. 酒会壺（図76・77）

2点出土した。図76は胴部にヘラで劃花文が施される。図77は底部である。厚さ4mmの釉が内外底に見られ、外底はさらに目砂が残る。

e. 瓶（図78～81）

出土数は9点でいずれも胴部片である。図78はヘラで蓮弁文を施す、アサガオ状に外反する瓶の頸部と考える。図79は径4.75mmの耳を頸部に装着する。内面は凹凸になることから、外面は浮文が施されていたものと思われる。釉もオリーブ灰を呈する。首里城跡（1998）でも出土した「青磁浮牡丹双耳瓶」と思われる。

図80はヘラで外面に唐草文と2条の圏線、その下部に蓮弁文を施す。内外面ともに釉を帯びる。釉は灰緑色である。図81も蓮弁文が施される。

f. 壺

出土数3点である。図82は壺の胴部である。形はナデ肩を呈し、肩部に2条の圏線を施す。最大胴径14.3cmを測る。

筒碗:2点の出土である。図83は直口口縁の筒碗で口唇に膨らむ。文様は口縁と胴下部に平行して沈線文を施す。口径7.4cm。図84は胴部であるが、腰部が折れ、前者の下部に相当する。腰部に2条の沈線文を施すものである。胴径8.4cm。

まとめ

碗をみると線刻蓮弁文の碗が主体で、他に型押し碗などがあり、その所属年代は15世紀後半～16世紀代のものである。

底部の分類から外底は蛇の目釉はぎなど15世紀代のもものが多く、遺物の中には首里城跡から出土する青磁と類似するものも少なくない。また、これらの出土を平面分布でみると4-5と4-6に最も多く出土している。本遺跡の時期を検証する好資料である。双耳瓶のように質の良い青磁などが含まれている。

表11 青磁出土量

出土地		器種	碗	筒碗	皿	鉢	盤	瓶	壺	酒会壺	不明	小計	層集計	グリッド集計		
グリッド	層	部位														
3-2	Ⅲ	口	1									1	2	2		
		胴	1									1				
3-5	灰色土層	口	1									1	1	8		
	不明	口	1		1							2	7			
		胴	5									5				
3-6	不明	胴	1						1			2	2	2		
3-7	淡灰色混砂土層	口	1									1	1	6		
	Ⅲ	口	1									1	1			
		胴	2									2	4			
	不明	底	1									1	1			
		胴	1									1	1			
3-9	Ⅲ	胴	1								1	1	2			
3-10	不明	底			1							1	1	1		
		口					2			1		2				
4-1	Ⅲ	口					2					2	4	10		
		胴	1									1				
		底	1									1				
	不明	胴	2		1		1					4	6			
底				1		1					2					
4-2	Ⅲ	口	5		2							7	14	17		
		胴	6		1							7				
	不明	底	3									3				
4-3	Ⅱ	口			1							1	4	8		
		口	1									1				
		胴	1					1				2				
	Ⅲ	口	2									2	4			
胴		2									2					
4-4	Ⅱ	口	6		1							7	17	24		
		胴	6			1						7				
		底	3									3				
	Ⅲ	口	1									1	1			
		口	1				1					2				
		胴	3									3				
4-5	Ⅲ	口	20		8						1	29	81	88		
		胴	32		7	1		2			2	44				
		底	5		3							8				
	Ⅳ	口	1									1	1			
	不明	口	4		1							5	5			
4-6	Ⅲ	口	39		6		2				1	48	138	151		
		胴	65	1	6	2	3	1	1	1	2	82				
		底	5		2							7				
		耳	1									1				
	淡灰色砂利層	胴	1									1	1			
	不明	口	2			1						3	12			
		胴	7		1							8				
		底	1									1				
	4-7	Ⅲ	口	4	1	3						1	9		27	31
			胴	14			1		1				16			
不明		底	1				1					2	4			
		口	2									2				
4-8	表採・不明	口	1		1							2	2	29		
	Ⅱ	胴						1				1	1			
	Ⅲ	口	7		3						1	11	25			
		胴	7		2	1		1				11				
		底	2		1							3				
灰黒色砂質層	胴	1									1	1				
4-9	不明	胴	3		1						4	4	4			
4-10	Ⅲ	口	1									1	4	8		
		口	2									2				
		胴	1									1				
	不明	底					1					1	3			
		口	1					1				2				
4-4・5	Ⅲ	口	1		1							2	6	10		
		胴	4									4				
	不明	口	3									3	4			
		胴	1									1				
4-5・6	Ⅲ	口	1		1							2	6	6		
		胴						1			1	2				
		底	1								1	2				
4-6・7	淡灰緑色層	口	1									1	4	4		
		胴	3									3				
不明	表採・不明	口	38		12	2	2					54	110	110		
		胴	28		4			1	1		1	35				
		底	9		9		2					20				
		口～底			1							1				
合 計			386	2	82	9	16	10	3	2	11	521				

表12-1 青磁観察一覧

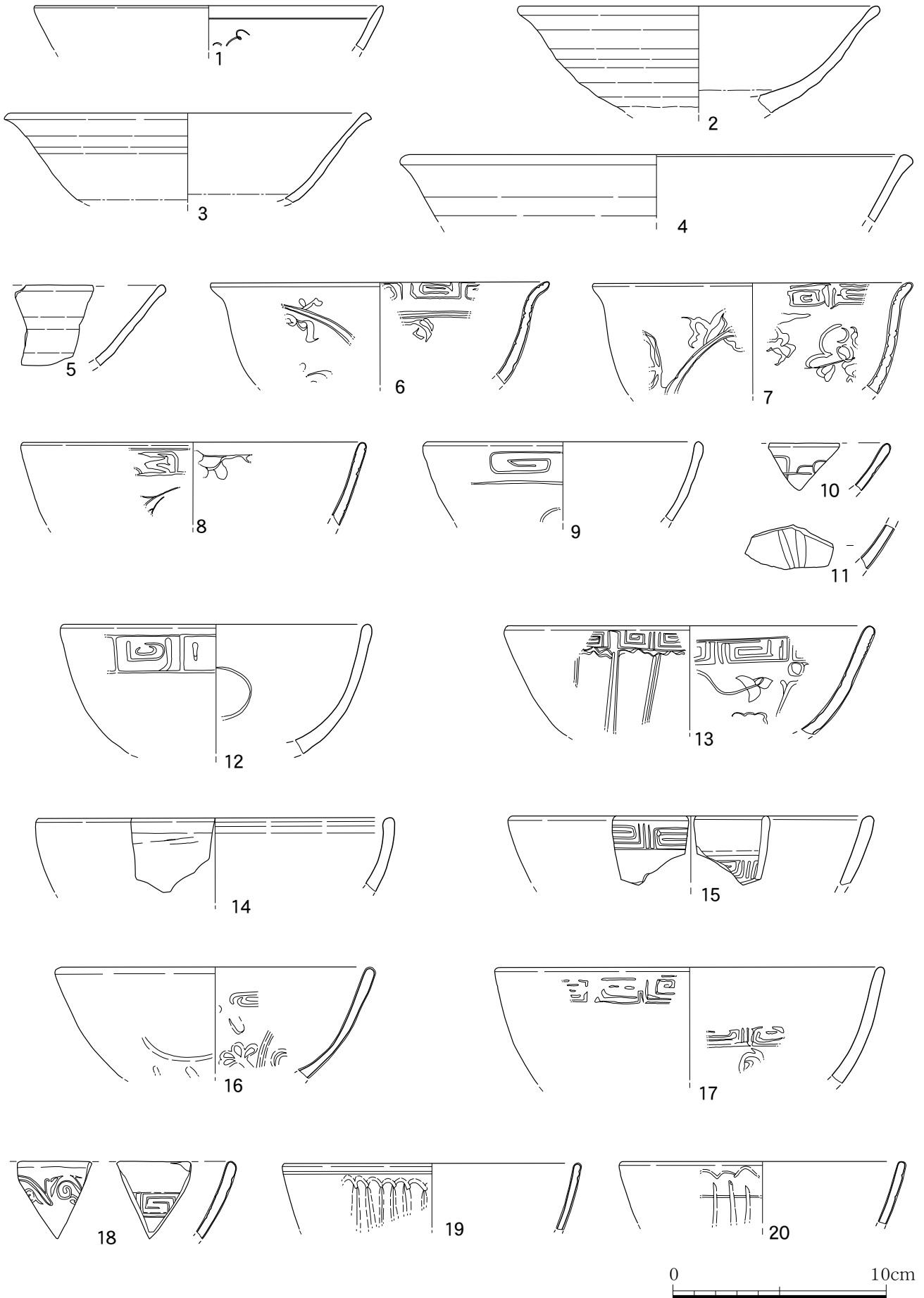
第図版	番号	種類	種別	部位・状態	口径器高・底径 (cm)	観察事項	出土地
第27図版 (図版16)	1	青磁	碗	口縁部	口径:16.2	直口口縁。文様:外面-蓮弁文,内面-劃花文。色調:明緑灰(7.5GY7/1)。鎊。	4-1Ⅲ 000313
	2	青磁	碗	口縁部	口径:16.75	直口口縁-断面:角。ロク口痕明瞭。内底-蛇の目。貫入:粗。胎土:密。色調:明オリープ灰(5GY7/1)。	4-5Ⅲ 000821
	3	青磁	碗	口縁部	口径:17	直口口縁-断面:角。ロク口痕明瞭。貫入:細。胎土:密。色調:明オリープ灰(5GY7/1)。	4-6Ⅲ 000821
	4	青磁	碗	口縁部	口径:23.75	直口口縁-断面:玉縁状。ロク口痕明瞭。貫入:細。胎土:密。色調:オリープ灰(2.5GY6/1)。	4-8Ⅲ 000307
	5	青磁	碗	口縁部		玉縁状。ロク口痕明瞭。素地:灰色。貫入:細。胎土:密。色調:オリープ灰(2.5GY6/1)。福建広東系。	4-6Ⅲ 001031
	6	青磁	碗	口縁部	口径:15.8	外反口縁。文様:外面-劃花文,内面-雷文帯・劃花文,内面口縁部に雷文,胴部に不明の文様。篋描き。厚:5mm。景德鎮。	4-5Ⅲ 010306
	7	青磁	碗	口縁部	口径:15	外反口縁。文様:外面-唐草文?,内面-劃花文・雷文帯+草花文。篋描き。素地:灰白色微粒子。釉色:失透釉。厚:5mm。景德鎮。	4-2Ⅲ 000713
	8	青磁	碗	口縁部	口径:16.2	直口口縁。文様:外面-雷文帯・唐草文,内面-唐草文。篋描き。素地:淡灰白色微粒子。貫入:両面とも粗い。釉色:淡青緑色。厚:4mm。景德鎮。	4-8Ⅲ 010323
	9	青磁	碗	口縁部	口径:12.8	直口口縁-断面:丸。文様:外面-雷文帯。篋描き。貫入:粗。胎土:密。色調:灰白(10Y7/2)。	4-5Ⅳ 010322
	10	青磁	碗	口縁部		直口口縁。文様:外面-雷文帯。篋描き。貫入:粗。胎土:密。色調:明オリープ灰(2.5GY7/1)。	4-8Ⅲ 010308
	11	青磁	碗	胴部		文様:外面-蓮弁文。篋描き。胎土:密。色調:明緑灰(7.5GY7/1)。	4-6Ⅲ 淡灰黒色土層 000313
	12	青磁	碗	口縁部	口径:14.2	直口口縁-断面:丸。文様:外面-雷文帯,内面-劃花文。篋描き。胎土:密。色調:明オリープ灰(5GY7/1)。	4-1Ⅲ 000314
	13	青磁	碗	口縁部	口径:17.4	直口口縁。文様:外面-雷文帯+ラマ式蓮弁文,内面-雷文帯+草花文+人形。型押し。厚:6mm。	4-8Ⅲ 010322
	14	青磁	碗	口縁部	口径:16.75	直口口縁-断面:丸。文様:外面-雷文帯。素地:橙白色。厚:6mm。	4-6Ⅲ 000919
	15	青磁	碗	口縁部	口径:17	直口口縁。文様:内外面-雷文帯。型押し。貫入:細。胎土:密。色調:明黄褐(2.5Y7/6)。	4-6 淡灰黒色土層 000313
	16	青磁	碗	口縁部	口径:14.4	直口口縁。文様:外面-唐草文,内面-雷文帯+唐草文。型押し,篋描き。胎土:密。色調:明オリープ灰(5GY7/1)。	4-5Ⅲ 淡灰黒色土層 000315
	17	青磁	碗	口縁部	口径:18.4	直口口縁。文様:外面-雷文帯+腰部付近圏線?,内面-雷文帯+唐草文。型押し。厚:5mm。景德鎮。	4-5Ⅲ 001002
	18	青磁	碗	口縁部		直口口縁。文様:外面-唐草文,内面-雷文帯+唐草文。型押し。素地:灰色。胎土:密。色調:オリープ灰(10Y5/2)。	4-9 010305
	19	青磁	碗	口縁部	口径:13.8	直口口縁。文様:外面-線刻蓮弁文。貫入:粗。胎土:密(微粒子を含む),灰白(N8/0)。色調:オリープ灰(2.5GY6/1)。	4-5Ⅲ 黒色砂質土層 001025
	20	青磁	碗	口縁部	口径:13.25	直口口縁。文様:外面-線刻蓮弁文a。素地:灰色。貫入:細。胎土:密(長石・チャートを含む),灰白(N7/0)。色調:オリープ灰(5GY6/1)。	4-8Ⅲ 010322
第28図版 (図版17)	21	青磁	碗	口縁部	口径:10.9	直口口縁。文様:外面-線刻蓮弁文b。素地:灰色。胎土:密。色調:明緑灰(7.5GY7/1)。	4-8Ⅲ 000606
	22	青磁	碗	口縁部	口径:13	直口口縁。文様:外面-線刻蓮弁文b。貫入:粗。胎土:密。色調:明オリープ灰(5GY7/1)。	4-6Ⅲ 000314
	23	青磁	碗	口縁部	口径:13.7	直口口縁。文様:外面-線刻蓮弁文a。素地:灰色。貫入:粗。胎土:密。色調:明緑灰(7.5GY7/1)。	4-5Ⅲ 010306
	24	青磁	碗	口縁部	口径:13.6	直口口縁。文様:外面-線刻蓮弁文c。素地:灰色。貫入:粗。胎土:密(長石を含む),灰白(7.5Y7/1)。色調:オリープ灰(5GY6/1)。	4-6Ⅲ 柱穴6175 P6175
	25	青磁	碗	口縁部	口径:14	直口口縁。文様:外面-蓮弁文。篋描き。素地:灰色。貫入:細。胎土:密(微粒子を含む),灰白(5Y7/1)。色調:明オリープ灰(5GY7/1)。	No.5Ⅲ淡茶褐色砂層 0D135 00719
	26	青磁	碗	口縁部	口径:13.25	直口口縁。文様:外面-線刻蓮弁文b。胎土:密。色調:オリープ灰(10Y6/2)。	4-10Ⅲ褐色土層 20 ~30cmD125 000901
	27	青磁	碗	口縁部	口径:13.4	直口口縁。文様:外面-線刻細蓮弁文,釉色:灰緑色の透明釉。厚:5mm。	4-8Ⅲ 010319
	28	青磁	碗	口縁部	口径:13.6	文様:外面-線刻蓮弁文+草文,内底-圏線。厚:6mm。	4-6Ⅲ 000314

表12-2 青磁観察一覧

第図/図版	番号	種類	種別	部位・状態	口径・器高・底径 (cm)	観察事項	出土地
第28図 (図版17)	29	青磁	碗	口縁部	口径:12.7	直口口縁。文様:外面一線刻蓮弁文a。素地:灰色。貫入:粗。胎土:密。色調:緑灰(10GY7/1)。	4-1Ⅲ 000314
	30	青磁	碗	口縁部	口径:12.1	直口口縁。素地:灰色。貫入:細。胎土:密。色調:オリープ灰(2.5GY6/1)。	4-8Ⅲ 010323
	31	青磁	碗	口縁部	口径:15.25	直口口縁。文様:外面一線刻蓮弁文a。素地:灰色。胎土:密。色調:オリープ灰(2.5GY6/1)。	4-8Ⅲ 010319
	32	青磁	碗	口縁部	口径:11.8	直口口縁。文様:外面一線刻蓮弁文c。内面一圏線。貫入:細。胎土:密。色調:明黄褐(2.5Y6/6)。	4-5Ⅲ 000825
	33	青磁	碗	口縁部	口径:12.1	直口口縁。文様:外面一線刻蓮弁文c。貫入:細。胎土:密。色調:灰黄(2.5Y6/2)。	3-6Ⅲ 000317
	34	青磁	碗	口縁部	口径:13.75	直口口縁。文様:外面一線刻蓮弁文c。素地:灰色。貫入:粗。釉色:内外面一灰釉。	4-7 淡灰色砂質土層 000310
	35	青磁	碗	底部	底径:5.8	文様:外面一蓮弁文。篋描き。内底一印花文・不明瞭な圏線。畳付一ケズリ、外底一無釉。厚:10mm。	3-7Ⅲ 000417
	36	青磁	碗	底部	底径:6.2	文様:外面一蓮弁文。外底一蛇の目。胎土:密(長石・石英・チャートを含む)。灰白(5Y8/1)。色調:明緑灰(7.5GY7/1)。景德鎮。	4-3Ⅱ 000815
	37	青磁	碗	底部	底径:5.95	直口口縁。文様:外面一蓮弁文。篋描き。内底一印花文。外底一蛇の目。貫入:粗。胎土:密(長石・石英・チャートを含む)。灰白(5Y8/1)。色調:明オリープ灰(5GY7/1)。	4-6Ⅲ 001124
	38	青磁	碗	底部	底径:6.6	内底一印花文を有するが不鮮明。外底一蛇の目。素地:淡灰白色微粒子。厚:10mm以上。景德鎮。	4-4Ⅱ 000308
	39	青磁	碗	底部	底径:4	文様:外面一蓮弁文と底部付近に2~3条の圏線。外底一無釉。畳付内面途中まで施釉。素地:灰色の粗粒子。貫入:両面ともやや細かい。釉色:内外面一緑灰釉。厚:10mm以上。福建広東系?	4-8Ⅲ 010323
	40	青磁	小碗	底部	底径:5.6	内底一蛇の目。外底一蛇の目。厚:5mm。	4-5Ⅲ 000307
	41	青磁	碗	底部	底径:3.9	内底一蛇の目。畳付一無釉。胎土:密(長石・チャートを含む)。灰白(5Y8/1)。色調:にぶい黄(2.5Y6/3)。	4-6Ⅲ 000314
42	青磁	碗	底部	底径:4.6	内底一圏線。畳付一無釉。素地:灰色。貫入:粗。胎土:密(長石を含む)。灰白(N7/0)。色調:明オリープ灰(5GY7/1)。	4-6Ⅲ 6164 P6146	
第29図 (図版18)	43	青磁	碗	底部	底径:4.2	外底一無釉。素地:灰色。貫入:細。胎土:密(長石を含む)。灰白(10Y7/1)。色調:灰(10Y5/1)。	4-5・6アゼⅢ 010209
	44	青磁	碗	底部	底径:4.6	畳付一無釉。素地:灰色。胎土:密(長石・チャートを含む)。灰(N6/0)。色調:灰黄(2.5Y6/2)。	4-4Ⅱ 000308
	45	青磁	碗	底部	口径:13.4 底径:5.2 高:6.25	直口口縁。文様:外面一線刻蓮弁文。畳付一削り。厚:5mm。	4-5Ⅲ 000014
	46	青磁	碗	底部	底径:5	内底一印花文。外底一蛇の目。胎土:密(微粒子を含む)。灰白(N8/0)。色調:オリープ灰(10Y5/2)。	4-5・6アゼⅢ 010209
	47	青磁	碗	底部	底径:5.2	文様:外面一線刻蓮弁文・圏線。内底一蛇の目。素地:淡紫褐色微粒子。貫入:細。釉色:失透釉。厚:5mm。	4-6Ⅲ 010319
	48	青磁	碗	底部	底径:6.4	高台「逆三角形」。内底一圏線。畳付一熔着。厚:7mm以上。高台に釉が溜まる。畳付けに砂が多く付着。釉内に気泡が多く見られる。明緑色の透明釉。	4-8Ⅲ 010319
	49	青磁	皿	口縁部	口径:12.2	口折。文様:外面一蓮弁文。篋描き。胎土:密(長石・黒色粒子を含む)。灰白(N8/0)。色調:オリープ灰(5GY6/1)。	4-6 000314
	50	青磁	皿	底部	底径:4	内面一蓮弁文。内底一印花文。外底一蛇の目。胎土:密(黒色粒子を含む)。灰白(N8/0)。色調:オリープ灰(2.5GY6/1)。	4-6 000920
	51	青磁	皿	底部	底径:4.3	内底一圏線。外底一蛇の目。貫入:粗。胎土:密(微粒子を含む)。灰白(10Y8/1)。色調:明オリープ灰(2.5GY7/1)。	4-6 6146
	52	青磁	皿	口縁部	口径:10.6	外反口縁。貫入:粗。胎土:密(長石・黒色粒子を含む)。灰白(N8/0)。色調:オリープ灰(5GY6/1)。	
	53	青磁	皿	口縁部	口径:12.5	外反口縁一稜花。文様:内外面一牡丹唐草文	柱穴6164
	54	青磁	皿	底部	底径:5.4	外反口縁。文様:外面一不明の文様。内面一不明の文様。内底一草花文・圏線。外底一蛇の目。素地:灰色微粒子。釉色:内外面一緑灰釉。厚:10mm以上。	4-8Ⅲ 010338
	55	青磁	皿	底部	底径:4.5	内底一印花文・双魚の文様。外底一無釉。貫入:粗。胎土:密(微粒子を含む)。灰白(N7/0)。色調:明緑灰(7.5GY7/1)。	4-1 淡灰黒色土層 000315
	56	青磁	皿	底部	底径:5.8	内底一印花文(菊?)・花文と1条の圏線。外底一蛇の目。厚:10mm以上。	No.5Ⅲ 000717

表12-3 青磁観察一覧

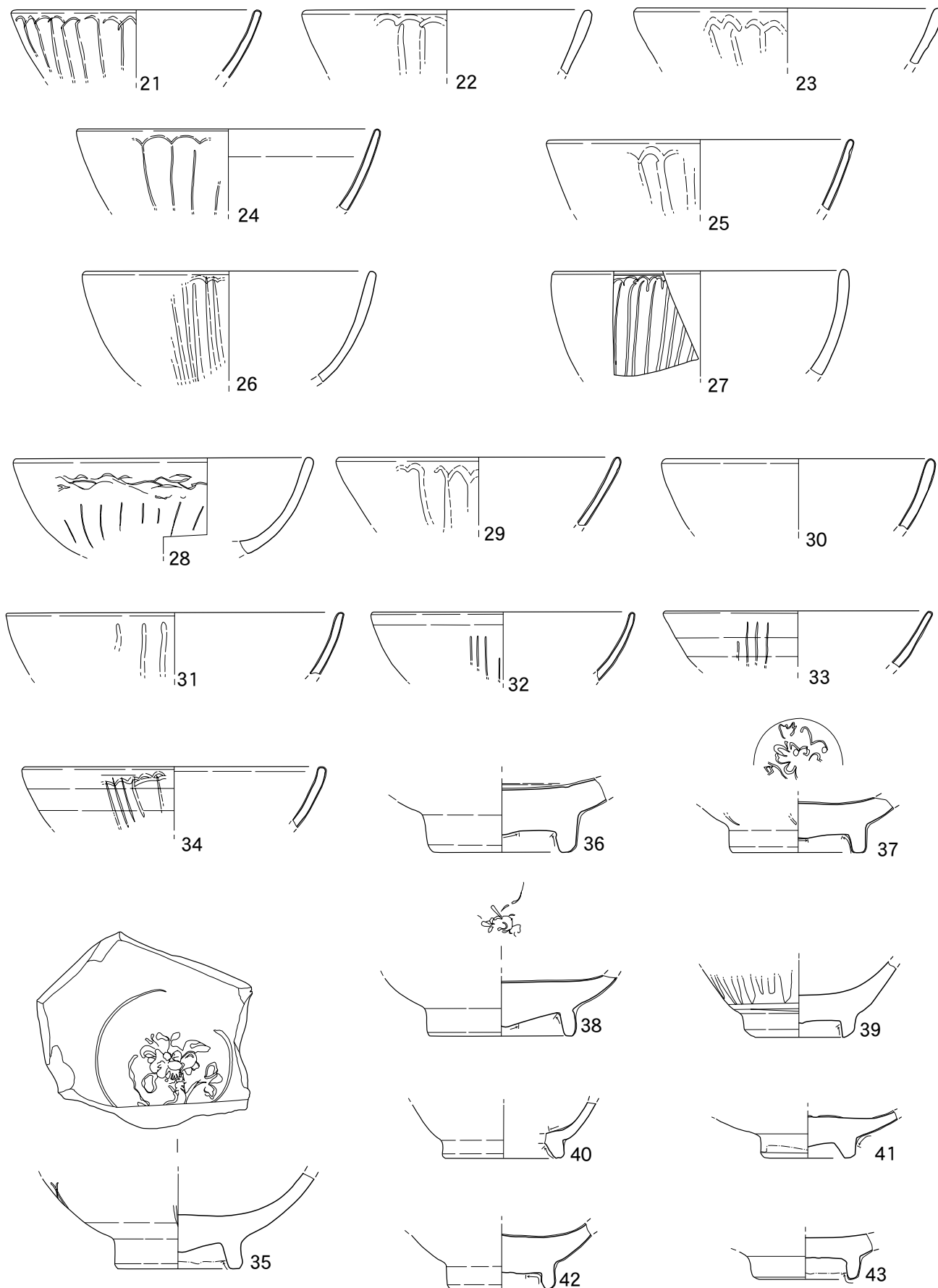
第図版	番号	種類	種別	部位・状態	口径器高・底径(cm)	観察事項	出土地
第29図 (図版18)	57	青磁	皿	口縁部	口径:14	外反口縁-稜花。文様:劃花文。篋描き	4-3Ⅱ 戦前遺構に伴うもの 000308
	58	青磁	皿	口縁部	-	外反口縁-稜花。文様:外面-劃花文。素地:灰色。貫入:粗。胎土:密。色調:灰オリープ(7.5Y5/3)。	4-8 010319
	59	青磁	皿	口縁部	口径:12.6	外反口縁-稜花。素地:灰色。貫入:粗。胎土:密。色調:緑灰(5GY7/1)。	4-5 000821
	60	青磁	皿	口縁部	口径:13.5	外反口縁-稜花。内面-劃花文。素地:灰色。胎土:密。色調:オリープ灰(2.5GY6/1)。	4-6 000315
	61	青磁	皿	口縁部	口径:11.6	外反口縁-稜花。篋描き。素地:灰色。貫入:細。胎土:密。色調:オリープ灰(2.5GY6/1)。	4-8 黒色砂質土層 D106 010305
	62	青磁	皿	口縁部	口径:10.6	外反口縁-稜花。内面-劃花文。篋描き。素地:灰色。貫入:粗。胎土:密(長石含む)。色調:灰白(7.5Y7/1)。	4-5 灰黒色砂質土層 D148 00712
	63	青磁	皿	口縁~底部	口径:8.25 底径:3.75 器高:2.25	直口口縁。櫛描き外底-蛇の目?。素地:灰色。貫入:細。釉色:内外面-青釉。	4-6 淡灰色土層 000309
	64	青磁	皿	口縁部	口径:11.25	直口口縁。文様:外面-蓮弁文。篋描き。貫入:細。釉色:内外面-青釉。景德鎮。	4-6 6164
	65	青磁	皿	口縁~底部	口径:8.8 底径:4.2 器高:2.75	直口口縁。文様:外面-圏線。内底-蛇の目、外底-蛇の目。貫入:粗。胎土:密(微粒子含む)、灰白(5Y7/1)。色調:オリープ灰(10Y6/2)。	4-6 000313
	66	青磁	皿	口縁部	口径:8.2	直口口縁。素地:灰色。貫入:細。胎土:密。色調:明黄褐(2.5Y6/6)。	4-5,6 灰黒色砂質土層畦除去二次堆積 010209
	67	青磁	皿	口縁部	口径:10.6	直口口縁。素地:灰色。貫入:粗。胎土:密。色調:オリープ灰(10Y5/2)。	
	68	青磁	皿	口縁部	口径:8.75	直口口縁。文様:外面-腰部圏線、内面-圏線。	4-5 黒色砂質土層 001115
	69	青磁	皿	底部	底径:5.4	外底-蛇の目。貫入:粗。胎土:密(微粒子含む)、灰白(N7/0)。色調:明オリープ灰(2.5GY7/1)。	4-6 010130
第30図 (図版19)	70	青磁	皿	底部	底径:3.55	内底-蛇の目。疊付-無釉。貫入:粗。胎土:密(微粒子含む)、灰白(N8/0)。色調:灰白(10Y7/1)。	3-7 000321
	71	青磁	皿	口縁部	口径:15	直口口縁。内面-蓮弁文。型押。胎土:密。色調:明緑灰(10GY7/1)。輪花文。	4-5 平面清掃 000922
	72	青磁	皿	底部	底径:5	疊のみ。型押。胎土:密(黒色粒子を含む)、灰白(N8/0)。色調:明オリープ灰(5GY7/1)。	5-6 畦除去 010209
	73	青磁	盤	口縁部	口径:22	逆「L」字状。素地:灰色。胎土:密。色調:明オリープ灰(2.5GY7/1)。景德鎮。	4-5 010323
	74	青磁	盤	口縁部	-	口折。文様:外面-蓮弁文・圏線、内面-劃花文雲(?)と思われる文様。篋描き。厚:8mm。鏝を平坦に仕上げた稜花盤。	4-4Ⅱ 000313
	75	青磁	盤	底部	底径:8.3	外底-蛇の目。貫入:粗。胎土:密(微粒子を含む)、灰白(10Y8/1)。色調:明オリープ灰(5GY7/1)。	4-7 001003
	76	青磁	酒会壺	胴部	-	文様:外面-劃花文。篋描き。素地:灰色。胎土:密。色調:オリープ灰(10Y5/2)。	4-6 淡灰黒色土層 000313
	77	青磁	酒会壺	底部	-	素地:白灰。貫入:粗。胎土:密。色調:オリープ灰(2.5GY6/1)。	3-1 000303
	78	青磁	瓶	胴部	-	文様:外面-蓮弁文。篋描き。胎土:密。色調:オリープ灰(2.5GY6/1)。	No.4Ⅲ 010118
	79	青磁	瓶	胴部	-	耳つき。耳径-4.75cm。青磁浮牡丹文双耳瓶。素地:灰色。貫入:細。胎土:密。色調:オリープ灰(2.5GY5/1)。要接を採す。	4-6 黒色砂質土層 001031
	80	青磁	瓶	胴部	-	文様:外面-唐草文様の文様と2条の圏線・下部に蓮弁文。篋描き。素地:淡灰白色微粒子。釉色:灰緑釉。厚:8mm。内外面ともに釉を帯びる。内面に明瞭なク口痕有り。	4-8Ⅲ 010323
	81	青磁	瓶	胴部	-	文様:外面-蓮弁文。素地:灰色。胎土:密(微粒子を含む)、灰白(N7/0)。色調:灰オリープ(5Y6/2)。	4-5 淡灰黒色土層 000314
	82	青磁	壺	胴部	-	文様:外面-圏線。貫入:細。胎土:密(微粒子を含む)、灰白(N8/0)。色調:オリープ灰(10Y6/2)。	3-6 000321
	83	青磁	筒碗	口縁部	口径:7.4	直口口縁。文様:外面-圏線。貫入:細。胎土:密。色調:明緑灰(7.5GY7/1)。	4-7 黒色砂質土層 001108
	84	青磁	筒碗	胴部	胴径:4.2	文様:外面-圏線。胎土:密。色調:明オリープ灰(5GY7/1)。	4-6Ⅲ 淡灰黒色土層 000315



第27図 青磁1



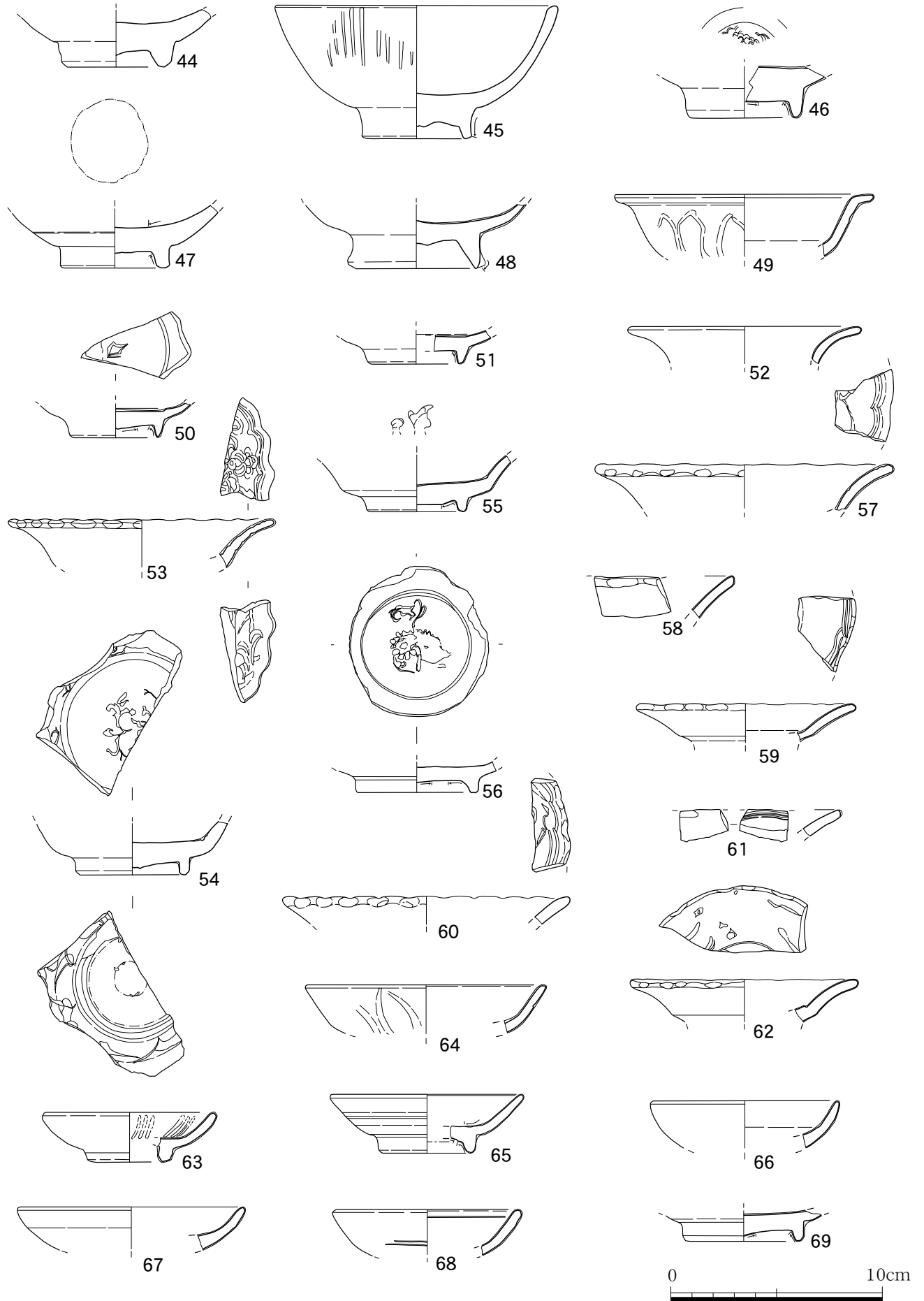
图版16 青磁1



第28図 青磁2



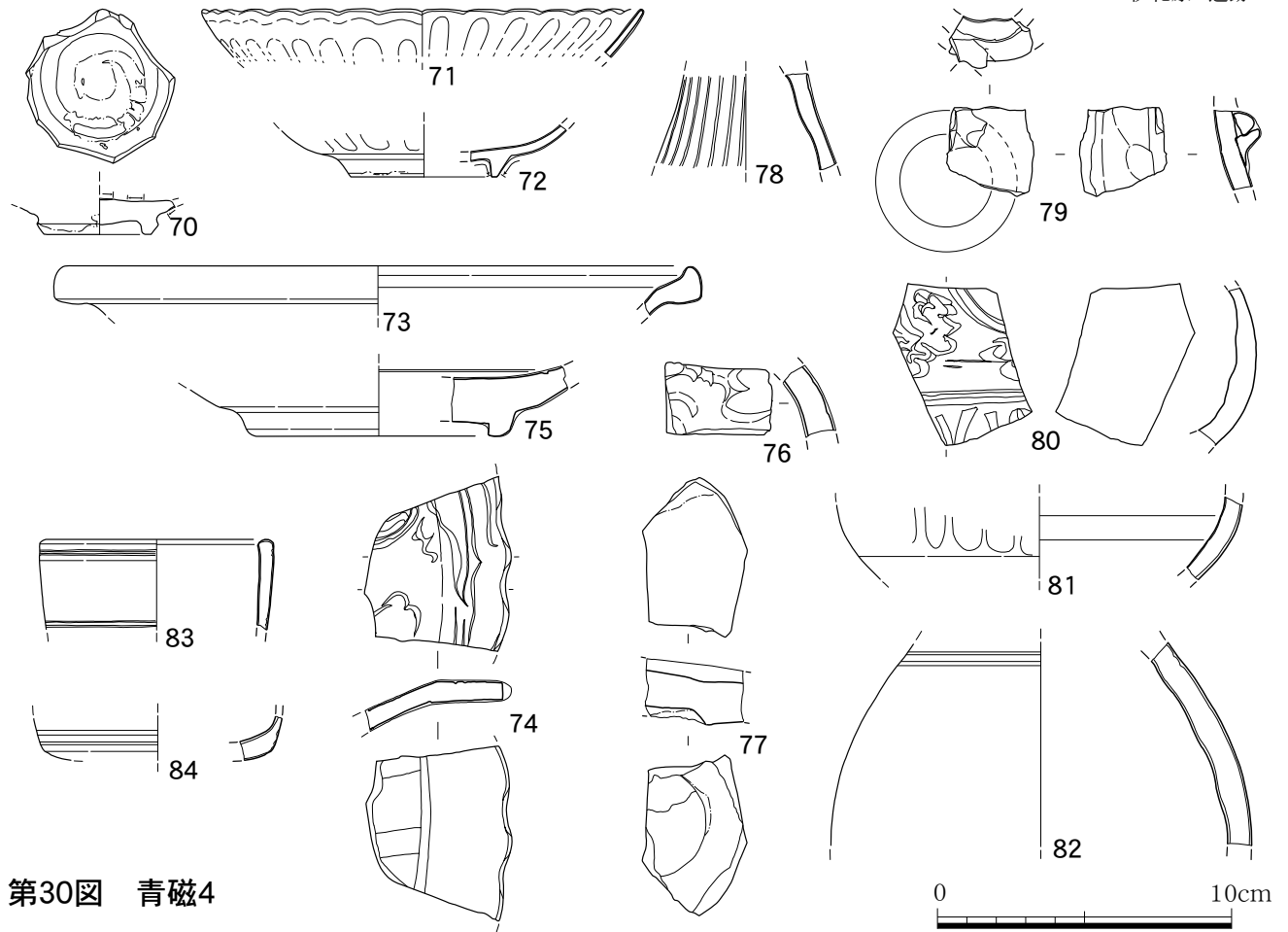
図版17 青磁2



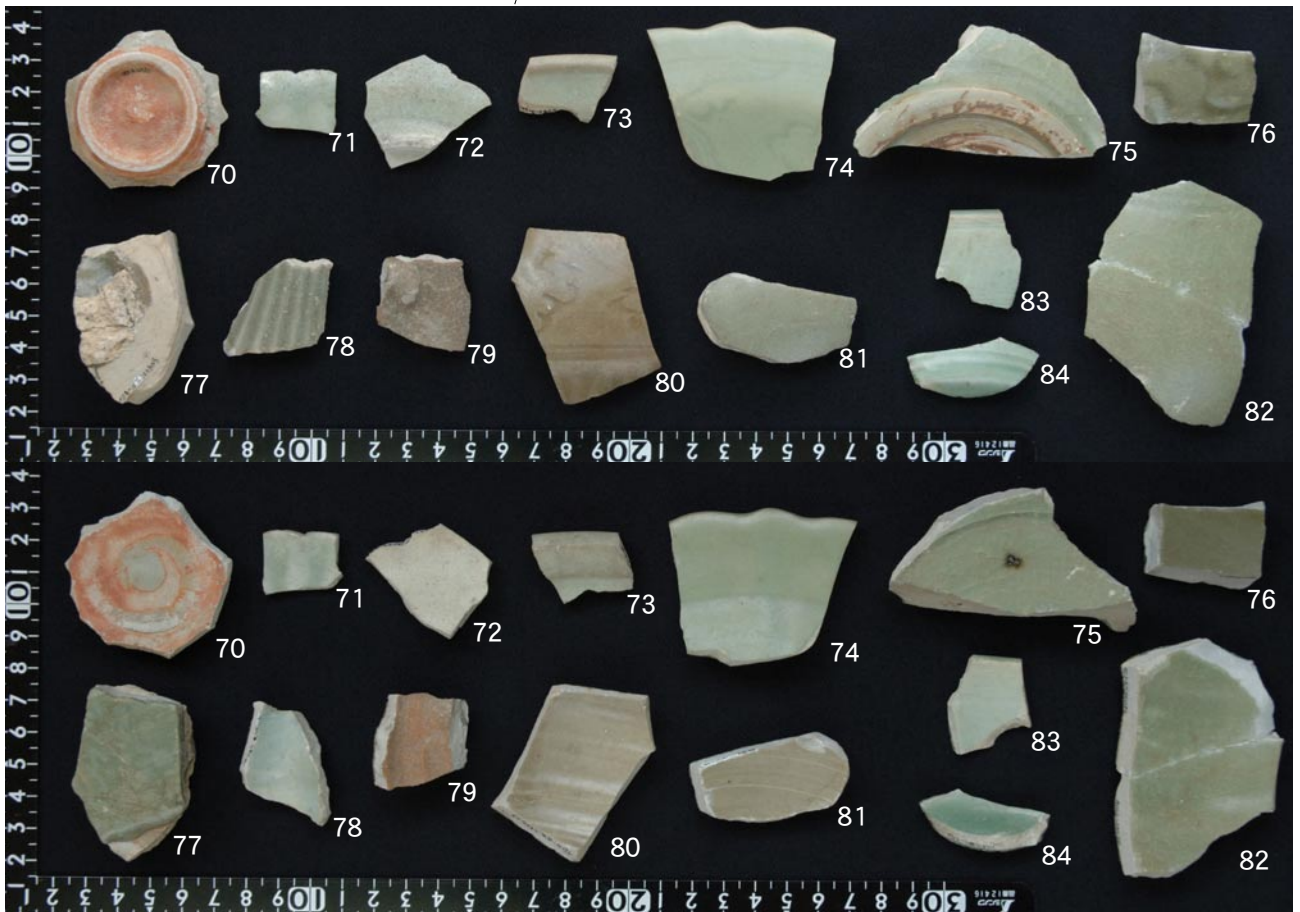
第29図 青磁3



図版18 青磁3



第30図 青磁4



図版19 青磁4

6. 染付

碗183点、小碗1点、皿51点、瓶39点、杯9点、鉢7点の計127点出土した。

最も多い出土地は4-5Ⅲ層で65点、4-6Ⅲ層で113点、青磁・白磁と同じような出土分布を示す。表13に出土量、表14に観察一覧、第31～33図に図、写真は図版20～22に示した。

以下、遺物について略述する。

a. 碗

口縁部66点、胴部100点、底部15点、計297点出土した。

口縁部は外反口縁と直口口縁に分けられる。

外反口縁：9点出土した。図1で外面に牡丹唐草文、内唇に圈線を2条を施す。直口口縁：24点出土した。素地が白色のものと灰白色があり、前者は景德鎮、後者は福建広東系のものと思われる。

図2～10は素地が白色のタイプで外面文様をみると図2草花文、図3と4は龍文、図5～7は波濤文と胴部に唐草文の組合せで図5は文様が略化したもので発色も悪い。図7は発色も鮮やかで、釉色からも新しい感を受ける。図8は胴部に芭蕉文を施すものである。

図9～図11は素地が灰白色で、呉須の発色も悪い。福建・広東系のものと思われる。また、外面は轆轤痕が明瞭に残る。

図9は丸文、図10は崩れた波濤文と思われる。図11は草花文、図12は菊花文である。

他に文様としては、図14は唐草文と鳥文、図15は山水文などが見られる。

底部（図16～22）：底部は15点出土し、底径3.9cm～6.6cmを測る。高台が丸くなるタイプ（図16・17・20）

図16は腰部に蓮弁文、胴部に草花文が見られる。

図17・20は高台が丸くなるもので、文様は外面唐草文、内底に草花文と圈線が施される。文様は丁寧に描かれてるが、発色は鈍い。図6・7底部と考えられる。

図19は径3.9cmと小ぶりである。文様は外面に唐草文、内底に十字花文を施す。

図21は底面が厚く、先端部は舌状を呈する。文様は外底面に「大明〇〇」の文字、内底面に十字花文を施文。発色も鈍い。

図22は高台が角を呈するもので、内外面に圈線で部分的に釉がなく、圈線は暗茶褐色になる。また、外面は腰部～外底にかけて無釉、内底に蛇の目釉剥ぎで質は良くない。福建・広東系と考えられる。

b. 皿

口縁部15点、胴部11点、底部25点の51点出土した。直口口縁（図27～31・38）と外反口縁（図39～44）がある。また、底部は碁筭底（図32～37）と高台タイプ（図43・46～52）がある。後者はまた大と小に分けられる。

直口口縁は小と大があり、小の文様は外面に波濤文と芭蕉文で統一されていることから碁筭底（図）の口縁と考えられる。文様のパターンをみると内面は胴部及び内底に花文（図28と図34）、内底に梅木文（図33）や芭蕉文（図36）、菊花文（図37）、龍文（図35）、内唇に襷文（図38）がある。

大の文様（図45）は外面に唐草文、内面に牡丹唐草文が施され、文様から図46の底部と推定される。いずれも呉須の発色が良く、文様の描き方も丁寧であることから15世紀と考えられる。

外反口縁も小と大がある。文様は外面に唐草文（図39～44）が見られ、さらに内面に唐草文を施す図39と圏線のみのものである。また、内底に玉取獅子（図43・50・51・52）施すものがある。いずれも16世紀から17世紀のものである。

c. 鉢

口縁部5、胴部1点、底部1点計7点の出土である。

図13は鉢の胴部である。文様は外面に大降りな唐草文が見られるが発色は鈍い。素地は乳白色で、文様や胎土の状況から彰州窯と思われる。

図23は底部と考えられるが、底厚が薄く、若干部位に疑問も残る。文様は高台と外底に圏線を施す。

d. 瓶

口縁部1点、胴部32点、底部6点計39点の出土である。

図54は肩部をもつタイプの瓶である。肩部に唐草文が見られる。図55～58・62はなで肩の瓶で、文様から同じタイプと考える。頸部に雲文、胴部に唐草文、腰部にラマ式蓮弁文を施す。図59～61は内唇に圏線、外面に芭蕉文を施すものである。図59は葉脈も丁寧に描かれている。図60・61は呉須の発色も悪く、同一個体と推定される。図63と64は腰部に幾何学文様を施すもので、ラマ式蓮弁文の変化したものと考える。特に図64は小降りで、輪郭は細く、その内部のラインは太く描くもので文様の描き方に規則性がある。図63→図64への変化がうかがえる。

e. 杯

口縁部6点、胴部2点、底部1点出土した。

口縁についてみると図65・66は外反口縁で、図67は直口口縁である。文様は図65が龍文、図66・67は草花文と思われる。

底部についてみると図68は腰部はあまり張らないことから直口口縁、図69は腰部が張ることから外反口縁に伴うものと思われる。文様は前者は外面に格子状、内底に龍文？、後者は内底に文様が確認される。

表13 染付出土量

出土地 グリッド	層	器種 部位	碗	小碗	皿	杯	瓶	鉢	フタ	不明	小計	層集計	グリッド 集計
			3-2	淡灰色砂質土層	胴	1							
3-5	Ⅲ	口	1								1	4	6
		胴	1								1		
		底	2								2		
	不明	口	1							1	2		
胴	1								1				
3-7	表採	口	1								1	1	5
	Ⅲ	口	2				1				3	4	
3-8	Ⅲ	胴		1							1	1	1
		底	2								2	5	8
4-3	Ⅱ	口	2		1						3	5	
	Ⅲ	口	2								2		3
4-4	Ⅱ	胴	1								1	13	18
		口	6								6		
		胴	5				1				6		
		底	2		1						1		
4-4	Ⅲ	口			1						3	5	18
		胴			1					1	2		
4-5	Ⅲ	口	7		2			3			12	64	65
		胴	22		3		13			3	41		
		底	3		7	1					11		
	不明	胴	1								1	1	
4-6	Ⅲ	口	28		5	5		2			40	111	113
		胴	37		1	2	13			1	54		
		底	4		8		4			1	17		
	不明	口	1								1	2	
4-7	Ⅲ	口	3		1						4	11	11
		胴	4		1						5		
4-8	Ⅲ	口	5		2						7	15	15
		胴	7								7		
		底	1								1		
4-9	Ⅲ	口	1		1						2	3	4
		胴						1			1		
4-10	淡灰緑色砂質土層	胴	1								1	1	7
	Ⅱ	口				1					1	1	
		胴	2								2	4	
	Ⅲ	底	2								2	2	
褐色土層		口	2							2	2		
4-4・5	Ⅲ	口	1		2					3	1	1	
4-5・6	Ⅲ	口	1								3	9	9
		胴	4						1		5		
4-6・7	Ⅲ	底					1				1	12	12
		口	1					1			2		
		胴	3		2		1				6		
不明	表採	底			3						4	21	
	Ⅲ	口	1								1		
		胴	4								4		
	淡灰黒色粘質土層	胴	1				1				2		4
		胴	2								2		
	淡灰緑色 - a	底	1		1						2		10
口		1		1						2			
不明	不明	胴	2		2		3				7		
		底			1						1		
合計			183	1	51	9	39	7	1	6	297		

表14-1 染付観察一覧

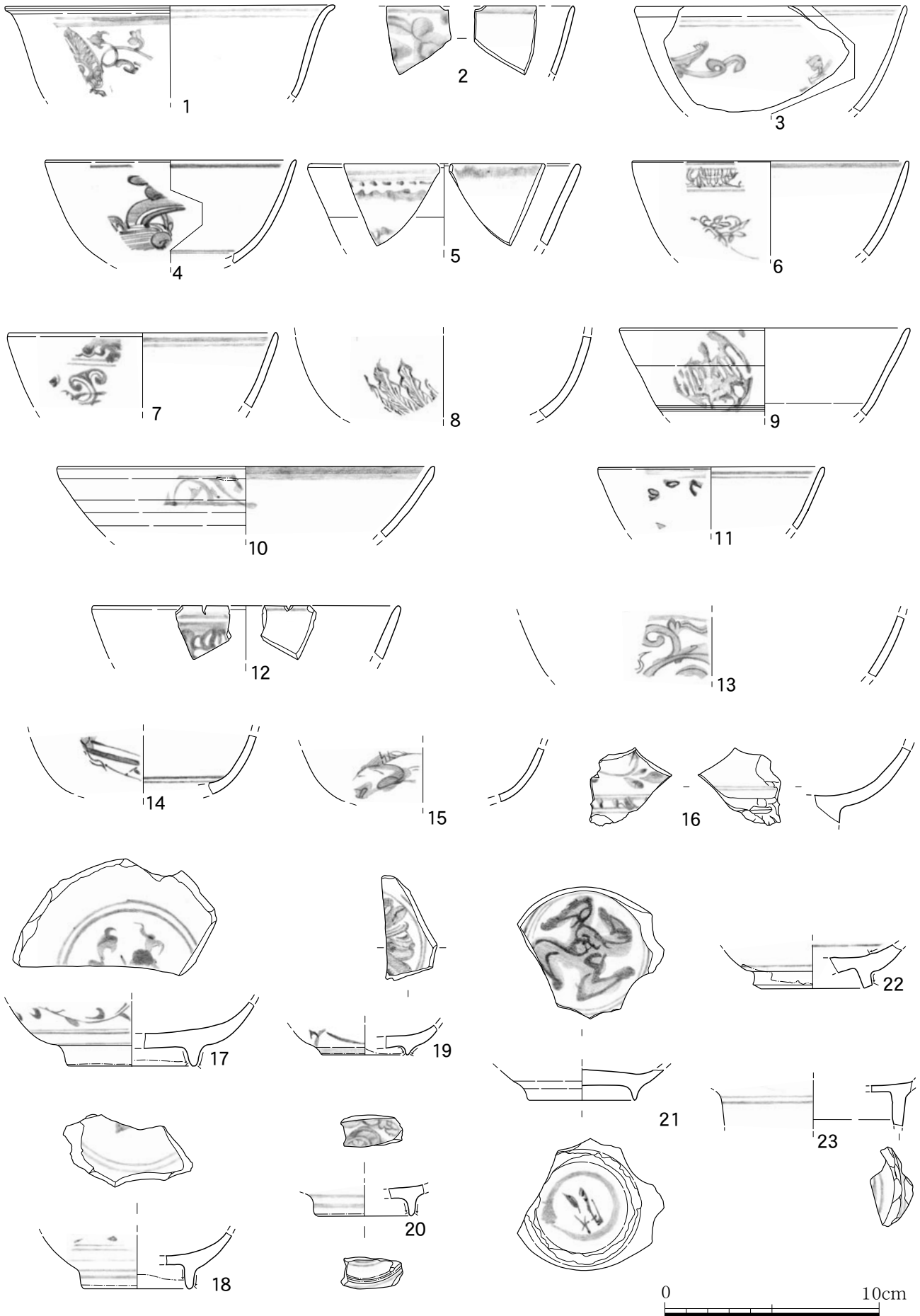
第 図 図版	番号	器種	部位	口径・器高・ 底径(cm)	観察事項	出土地
第 31 図 (図 版 20)	1	碗	口縁部	口径:15.4	外反口縁。文様:外面-圏線と牡丹唐草文、内面-圏線2条、内底-圏線。発色:鮮やか。素地:白色。16後半。	4-8Ⅲ層 010308
	2	碗	口縁部		直口口縁。文様:外面-圏線、草花文、内唇-圏線。発色:鈍い。素地:白色。18前半。	4-6Ⅲ層 000314
	3	碗	口縁部	口径:12.6	直口口縁。文様:外面-圏線、唐草文龍の尾?、内唇-圏線2条。発色:淡い。外面削りあり。素地:白色。15後半~16中。	4-5Ⅲ層 000921
	4	碗	口縁部	口径:11.8	直口口縁。文様:外面-龍文、圏線、内面-上下に圏線。発色:鮮やか。素地:白色。	4-6黒色砂質土層 001116

表14-2 染付観察一覧

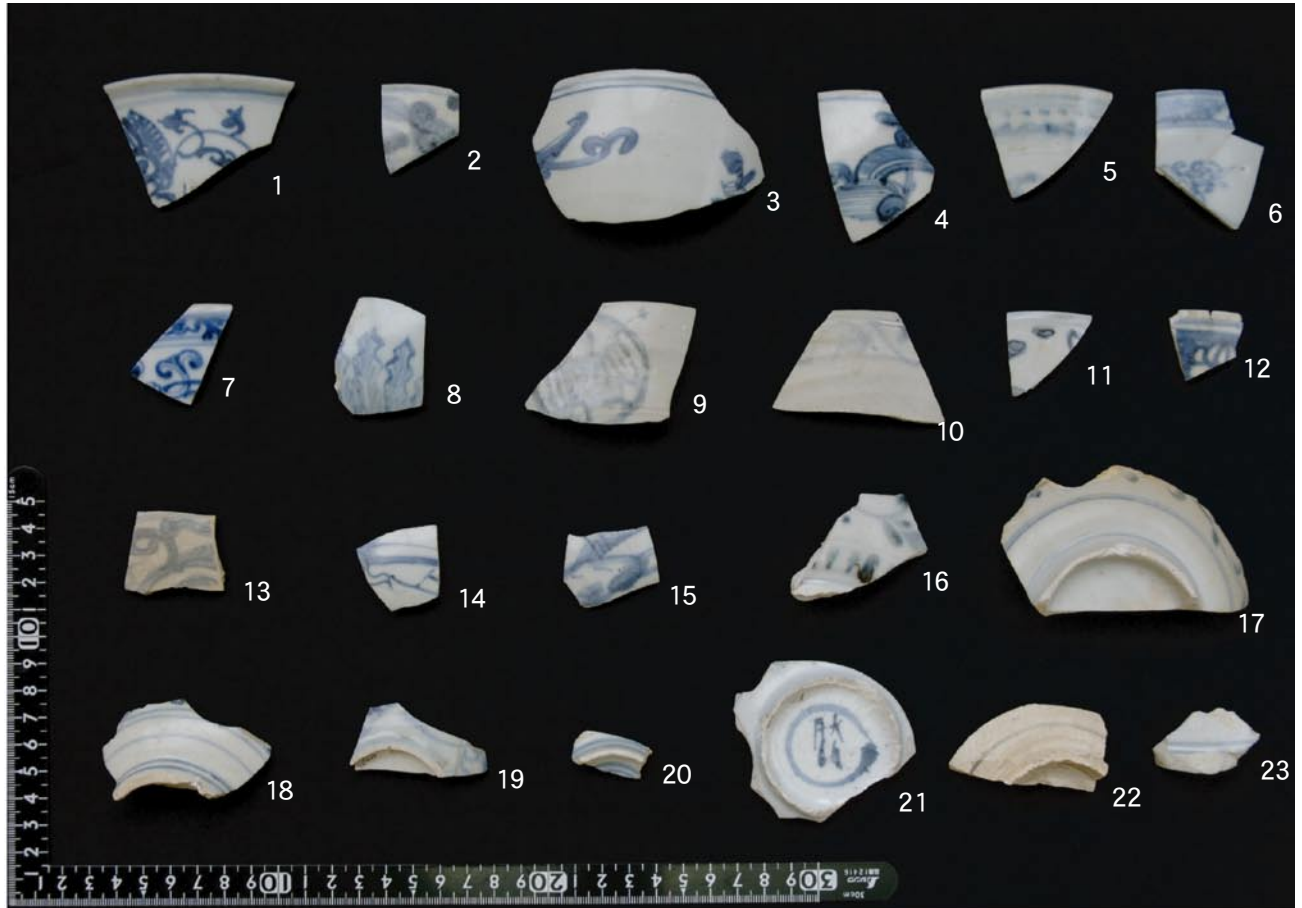
第 図 図版	番号	器種	部位	口径器高 底径(cm)	観察事項	出土地
第 31 図 (図 版 20)	5	碗	口縁部	口径:12.8	直口口縁。文様:外面-波濤文,唐草文、内唇-圏線。発色:鈍い。素地:白色。15後~16初頭。	No.5Ⅲ層 000717
	6	碗	口縁部	口径:13	直口口縁。文様:外面-波濤文,唐草文、内面-圏線。発色:鈍い。素地:白色。16中~17前半。	4-5Ⅲ層 010219
	7	碗	口縁部	口径:13.5	直口口縁。文様:外面-唐草文帯、内面-圏線2条。発色:鮮やか。素地:白色。16中~後。	4-6Ⅲ層 001225
	8	碗	胴部	胴径:13.8	直口口縁。文様:外面-芭蕉文。発色:鈍い。素地:白色。	3-5Ⅲ層 000327
	9	碗	口縁部	口径:13.6	直口口縁。文様:外面-丸文。発色:鈍い。外面-ロクロ痕明瞭。素地:灰白色。	4-6Ⅲ層 000309
	10	碗	口縁部	口径:17.6	直口口縁。文様:外面-波濤文帯、くずれる、内面-圏線。発色:鈍い。外面-ロクロ痕明瞭。素地:灰白色。	4-6-7淡灰黒色砂質 畦除去 010122
	11	碗	口縁部	口径:10.6	直口口縁。文様:外面-草花文、内面-圏線2本。発色:良い。素地:灰白色。	4-6黒色砂質土層 001116
	12	碗	口縁部	口径:14.4	直口口縁。文様:外面-圏線,花文、内面-圏線、内唇-圏線。発色:鮮やか、濃い。貫入有り。素地:白色。16後半~18初。	4-6Ⅲ層 000313
	13	鉢	胴部	-	文様:外面-唐草文?。発色:鈍い。素地:乳白色。	4-4Ⅱ層 001128
	14	碗	胴部	-	文様:外面-唐草文,鳥、内面-圏線2条、内底-圏線。発色:良い。素地:白色。	4-5Ⅲ層 000113
	15	碗	胴部	-	文様:外面-山水文。発色:良い。素地:白色。	4-4淡灰黒色土層 000314
	16	碗	底部	-	文様:外面腰部に蓮弁文,草花文、内面-圏線。発色:淡い。素地:白色。18~19前半。	4-6Ⅲ層 000314
	17	碗	底部	底径:6	高台-丸。文様:外面-唐草文、内底-草花文と圏線。畳付無釉、外底-施釉。発色:鈍い、タッチは良い。素地:灰色。	4-3Ⅱ層 001201
	18	碗	底部	底径:5.2	高台-丸。文様:外面-唐草文腰部に圏線、内底-圏線,草花文。畳付無釉。発色:良い。素地:乳白色。16世紀後半。	4-6Ⅲ層 000315
	19	小碗	底部	底径:3.9	文様:外面-唐草文、内底-十字花文。畳付無釉。発色:鈍い。素地:白色。	4-5Ⅲ層 000314
	20	碗	底部	底径:4.4	文様:外底及び高台に圏線、内底-唐草文。畳付無釉。発色:良い。素地:白色。18~19前半。	4-9Ⅲ層 000307
21	碗	底部	底径:4.9	高台-舌状。文様:外底面に「大明」の文字、内面-十字花文。畳付無釉。発色:鈍い。素地:白色。16~18世紀頃。	不明不明 不明	
22	碗	底部	底径:4.8	高台-一角。文様:外面腰部に圏線、内面-圏線、内底-圏線,ロクロ。内面-蛇の目、外面-腰部~外底無釉。発色:鈍い(鉄釉?)。素地:乳白色。圏線は鉄絵。	4-6Ⅲ層 000314	
第 32 図 (図 版 21)	23	碗・鉢 か?	底部	-	高台は高い。文様:外底及び高台に圏線。発色:淡い。素地:青白色。18~19前半。	4-6Ⅲ層 000310
	24	碗	口縁~ 底部	口径:12.5 底径:5.4 器高:3.8	高台-一角。フィガキーか直口口縁。文様:外面-鉄絵,鉄釉、内外底-蛇の目,ロクロ。発色:鉄、土で。素地:灰色。16世紀後半。	4-5Ⅲ層 001024
	25	碗	口縁部	口径:15.4	直口口縁。文様:外面-圏線。発色:鈍い青。外面-ロクロ痕明瞭。素地:灰色。17後半。	4-6Ⅲ層 000313
	26	碗	底部	底径:6.6	直口口縁。文様:外面-圏線,丸文(鉄絵)、内面-圏線、内底-ロクロ。外底-ロクロ、蛇の目。発色:鉄。外面-ロクロ痕。素地:灰色。	4-4Ⅱ層 000308
	27	皿	口縁部	口径:10	直口口縁,碁笥底。文様:外面-波濤文,芭蕉文、内唇-圏線。発色:濃い。素地:白色。	4-6Ⅲ層 000314
	28	皿	口縁部	口径:10	直口口縁,碁笥底。文様:外面-波濤文,芭蕉文、内面-圏線,花文。発色:濃い。素地:白色。	4-6Ⅲ層 010118
	29	皿	口縁部	口径:12.6	直口口縁,碁笥底。文様:外面-波濤文,芭蕉文、内面-上に圏線,下に花圏線,花文。発色:薄い。素地:白色。15後半~16初。	不明不明 不明
	30	皿	口縁部	口径:9.6	直口口縁,碁笥底。文様:外面-波濤文,芭蕉文、内面-上下に圏線。発色:薄い。素地:白色。	4-6Ⅲ層 000315
	31	皿	口縁部	口径:9.4	直口口縁,碁笥底。文様:外面-波濤文,芭蕉文、内面-上下に圏線。発色:鈍い。素地:白色。15後半~16初。	4-6Ⅲ層 000313
	32	皿	底部	底径:4	碁笥底。文様:外面-芭蕉文くずれ、内面-圏線、内底-芭蕉文?。畳付無釉。発色:淡い。素地:灰色。	4-6Ⅲ層 001031
	33	皿	底部	底径:2.6	碁笥底。文様:外面-芭蕉文,丁寧に描く、内面-圏線、内底-梅木文。畳付無釉。発色:淡い。素地:灰色。	4-6 001006
	34	皿	底部	底径:3.2	碁笥底。文様:外面-芭蕉文、内面-胴部に花文、内底-花文。畳付無釉。発色:濃い。素地:白色。	4-5Ⅲ層 001025
	35	皿	底部	底径:5.2	碁笥底。文様:外面-唐草文、内底-龍か?。畳付無釉。発色:鮮やか。素地:白色。上記(32)より古いか。	4-6Ⅲ層 010118
	36	皿	底部	底径:2.6	碁笥底。文様:内外面-芭蕉文、畳付無釉。発色:濃い。素地:白色。	4-5Ⅲ層 000825

表14-3 染付観察一覧

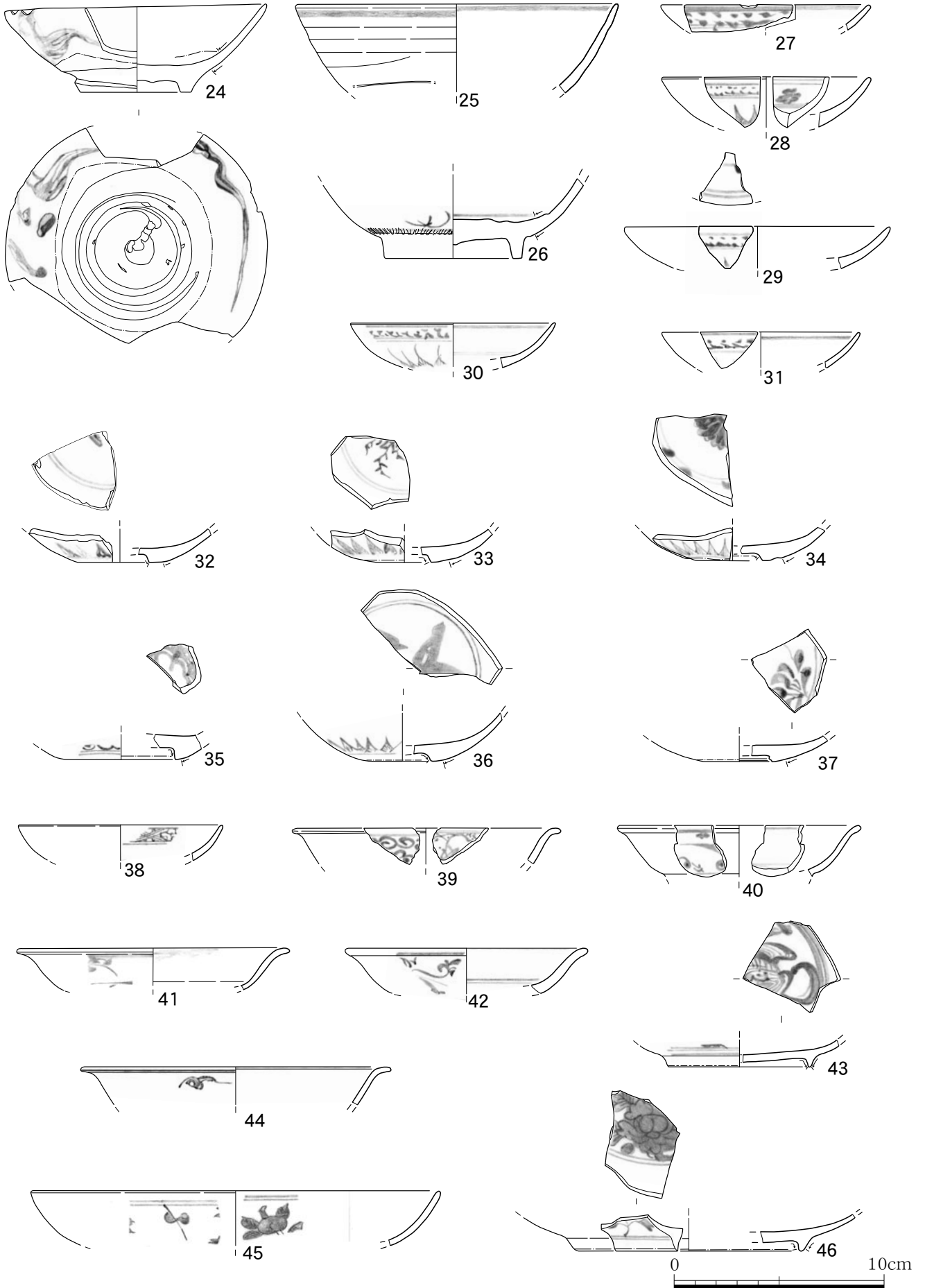
第 図 図版	番号	器種	部位	口径・器高・ 底径(cm)	観察事項	出土地
第32図 (図版21)	37	皿	底部	底径:3.1	直口口縁,基筒底。文様:内底- 花文。畳付無釉。発色:鮮やか。素地:白色。	4-5Ⅲ層 000308
	38	皿	口縁部	口径:9.7	直口口縁-薄手。文様:内面- 羽文。発色:鮮やか。素地:白色。	4-9Ⅲ層 000928
	39	皿	口縁部	口径:12.8	外反口縁。文様:外面- 圏線,唐草文、内面- 圏線,唐草文。発色:鮮やか。素地:白色。 17世紀代,古い?	4-5-6Ⅲ層 010209
	40	皿	口縁部	口径:11.6	外反口縁。文様:外面- 唐草文、内面- 上下圏線。発色:淡い。素地:白色。15後半~16 初。	4-6Ⅲ層 000314
	41	皿	口縁部	口径:13	外反口縁。文様:外面- 唐草文、発色:鈍い。素地:白色。	4-4Ⅱ層 001129
	42	皿	口縁部	口径:11.6	外反口縁。文様:外面- 唐草文,上圏線、内面- 上下圏線。発色:鈍い。素地:白色。	4-6淡灰黒色土層 000313
	43	皿	底部	底径:6.7	外反口縁。文様:外面- 唐草文、内面- 玉取獅子。畳付無釉。発色:鈍い。素地:乳白 色。	4-7Ⅲ層 000310
	44	大皿	口縁部	口径:14.8	外反口縁。文様:外面- 雲龍文+ 圏線、内面- 圏線。発色:悪い。素地:白色。16世紀 頃。	No.4Ⅲ層下 001222
	45	大皿	口縁部	口径:19.6	直口口縁。文様:外面- 唐草文,圏線、内面- 圏線,牡丹唐草文。発色:濃い,丁寧 に描く。素地:白色。	4-5Ⅲ層 000316
	46	大皿	底部	底径:10.8	直口口縁。文様:外面- 唐草文,腰部に圏線、内面- 圏線,牡丹唐草文。畳付無釉。発色: 濃い,丁寧に描く。素地:白色。	4-5Ⅲ層 000927
第33図 (図版22)	47	大皿	底部	底径:8.2	文様:外面- 唐草文,高台に圏線、内面- 唐草文,龍文?,内底- 山水文。畳付無釉。発 色:鮮やか,丁寧に描く。素地:白色。	4-6Ⅲ層 000310
	48	皿	底部	-	文様:外面- 唐草文,腰部に圏線、内面胴部及び内底に龍文様。畳付無釉。発色:鮮や か。素地:白色。	4-4大型石列 001127
	49	小皿	底部	底径:5.8	文様:外面- 腰部に圏線、内面- 圏線。骨付無釉。発色:淡い。素地:白色。	4-6-7淡灰黒色砂質層 畦除去 010122
	50	大皿	底部	底径:6.9	文様:外面- 腰部に圏線、内底- 山水文。畳付無釉。発色:淡い。素地:白色。	4-5-6Ⅲ層 010209
	51	大皿	底部	底径:6.2	文様:外面- 高台に圏線、内面- 文様有り。畳付無釉。発色:鮮やか。素地:白色。	4-6黒色砂質土(落ち込 み) 001031
	52	大皿	底部	-	文様:内底- 玉取獅子。発色:鈍い。素地:白色。	4-6Ⅲ層 P6109
	53	大皿	底部	-	文様:内面- 梅木文。発色:淡い。素地:白色。	不明不明 不明
	54	瓶	胴部	-	長頸瓶。文様:外面- 圏線,雲文,唐草文。内面- 積み痕明瞭。素地:白色。	4-5-6Ⅲ層 010209
	55	瓶	胴部	-	文様:外面- 圏線,雲文,唐草文。発色:やや鈍い。内面- 積み痕明瞭。素地:灰白色。	4-5Ⅱ層下 001215
	56	瓶	胴部	-	文様:外面- 牡丹唐草と蓮弁文発色:やや鮮やか。内面- 積み痕明瞭。素地:灰白色。	4-5Ⅲ層 010119
	57	瓶	胴部	-	文様:外面- 唐草文。発色:鈍い。内面- 積み痕明瞭。素地:灰白色。	4-5Ⅲ層 000919
	58	瓶	底部	底径:7.4	文様:外面- 唐草文とラマ式蓮弁文。畳付無釉。発色:やや鈍い。素地:灰白色。	4-5Ⅲ層 000315
	59	瓶	胴部	-	文様:外面- 芭蕉文。発色:鮮やか。素地:白色。	4-5Ⅲ層 P5113
	60		口縁部	口径:6.8	文様:外面- 芭蕉文、内面- 圏線。発色:悪い。素地:白色。	3-7Ⅲ層 000321
	61	瓶	胴部	-	文様:外面- 芭蕉文。発色:濃い。素地:白色。15~16世紀。	4-6Ⅲ層 000315
	62	瓶	底部	底径:7.4	文様:外面- 圏線+ラマ蓮弁文。畳付無釉,ケズリ。発色:鮮やか。素地:白色。	4-6Ⅲ層 000319+000621
	63	瓶	底部	底径:8.8	文様:外面- 蓮弁文。畳付無釉,ケズリ。発色:鮮やか。素地:白色。	4-6Ⅲ層 000314
	64	瓶	底部	-	文様:外面- 蓮弁文。畳付無釉。発色:鈍い。素地:白色。	4-6Ⅲ層 001031
	65	杯	口縁部	口径:6	外反口縁,逆「L」字状。文様:外面- 圏線+ 雲龍文、内面- 圏線。発色:鮮やか。素地: 白色。	4-6Ⅲ層 000315
	66	杯	口縁部	口径:5.8	外反口縁。文様:外面- 圏線と草花文。発色:鮮やか。素地:白色。	4-10Ⅱ層 000906
	67	杯	口縁部	口径:7.0	直口口縁。文様:外面- 草花文。発色:濃い。素地:白色。	4-6Ⅲ層 001031
	68	杯	底部	底径:2.6	文様:外面- 圏線、文様:内底- 有り。畳付~ 外底無釉。発色:鮮やか。素地:白色。	4-5Ⅲ層 000314
	69	小杯	底部	底径:2.2	文様:外面- 唐草文、内面- 有り。畳付~ 外底無釉。発色:淡い。素地:白色。	4-5平面清掃(淡灰色土 層) 000307



第31図 染付1



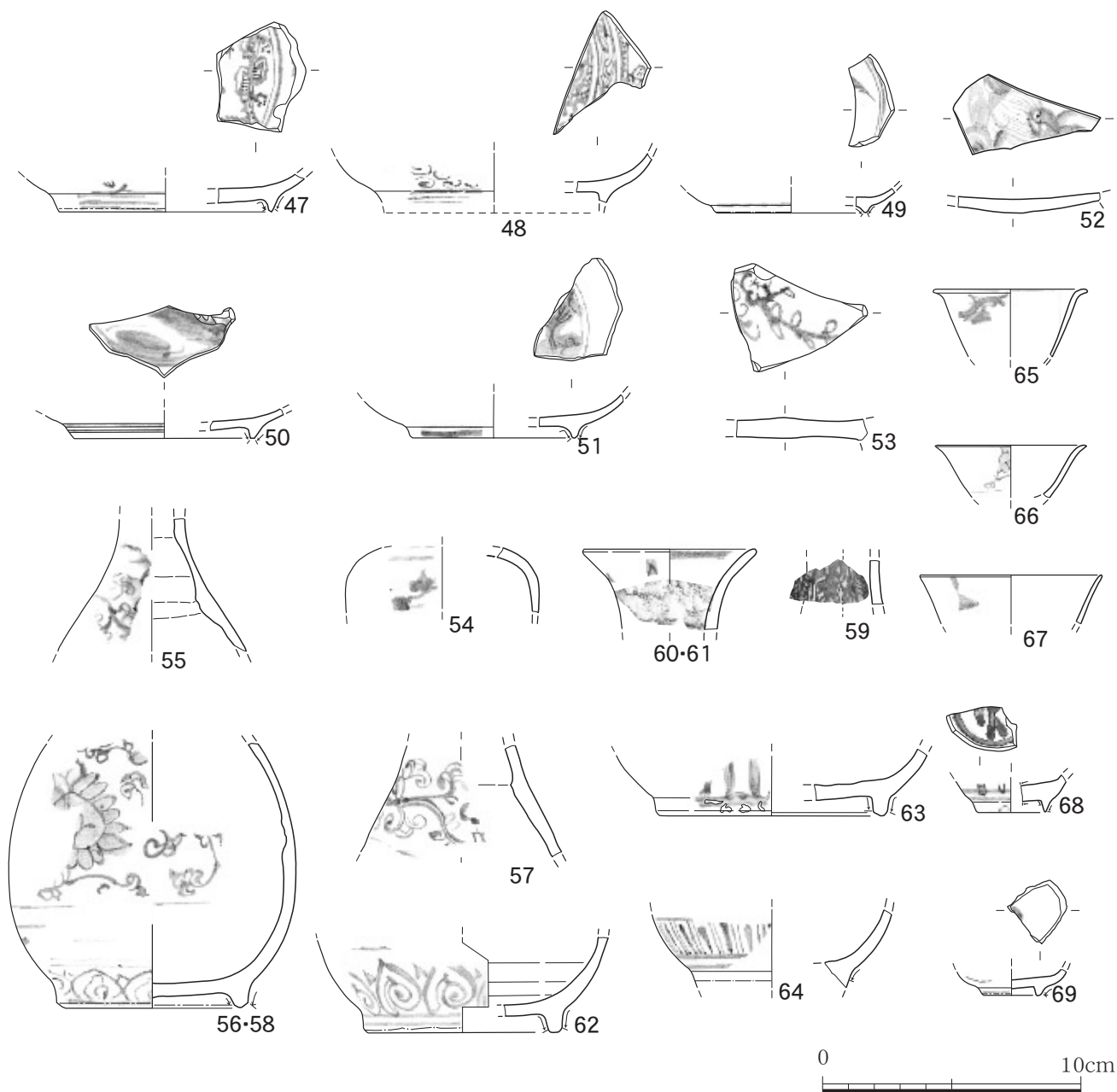
図版20 染付1



第32図 染付2



図版21 染付2



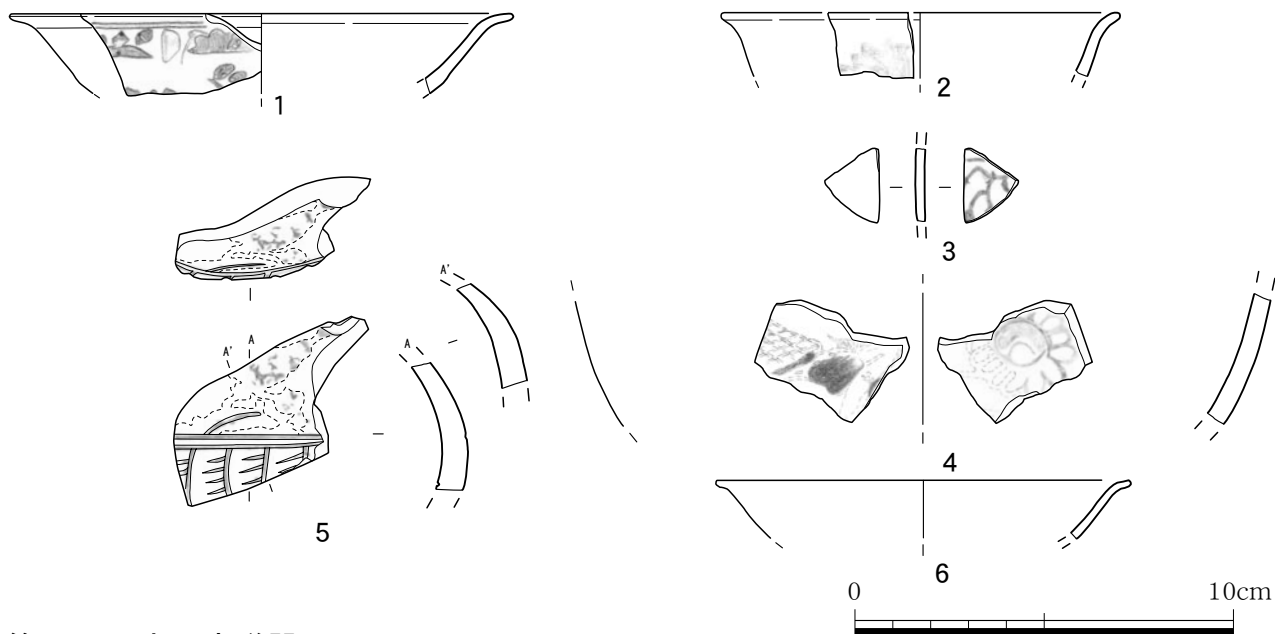
第33図 染付3

表15 染付文様別出土量

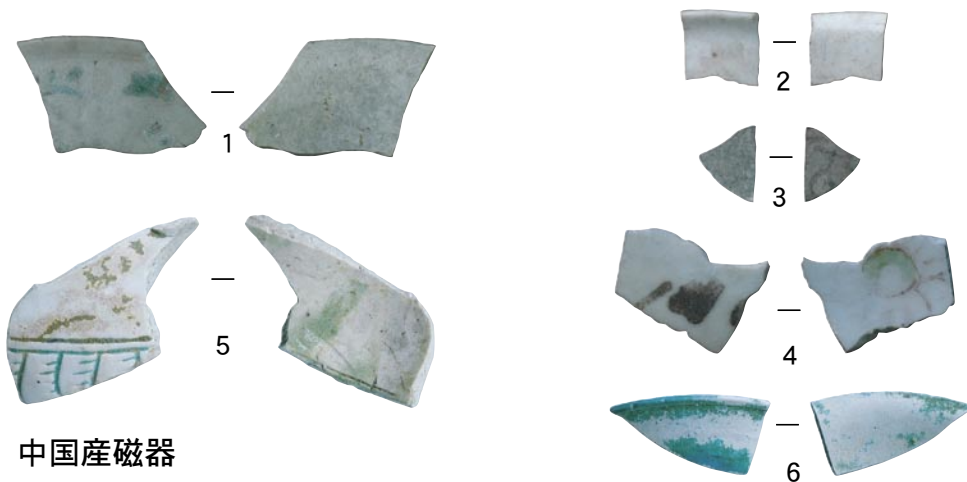
出土層	器種 文様	碗									皿							合計	
		唐草文	福建・広東文	芭蕉文	團線	雷文帯	波寿文	山水文	草花	龍文	不明	唐草文	團線	芭蕉文	波寿文	草花	タスキ文		不明
Ⅱ		2	3		3		1	1	1	1	3	1						1	17
Ⅲ		29	22	9	26	2	9	1	5	1	48	9	4	7	1	2	3	17	195
	褐色土層		1		1						1	大皿1含む					1	3	
	淡灰黒色粘質土層	1																	1
	淡灰色(緑)砂質土層	1								1									2
	淡灰緑色-a		2								1							1	4
	灰黒色土層				1														1
	表採・不明	3	2		4							1				1		3	14
	合計	36	30	9	35	2	10	2	6	3	53	11	4	7	1	3	3	22	237



図版22 染付3



第34図 中国産磁器



図版23 中国産磁器

7. 中国産磁器 (第34図・図版23)

中国産磁器で色絵(図1~5)と翡翠釉(図6)がある。色絵は図1~4の皿と5の型物がある。翡翠釉は皿である。

図1は皿の口縁部で、外反する。外面に赤色と黄緑色で模様を施すが、赤色ははげている。釉は内外面とも白灰色、素地は白色である。口径は13.6cm。4-6Ⅲ層の出土。

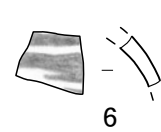
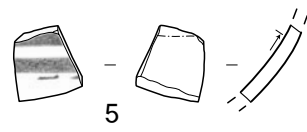
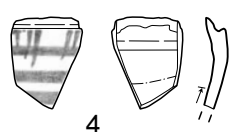
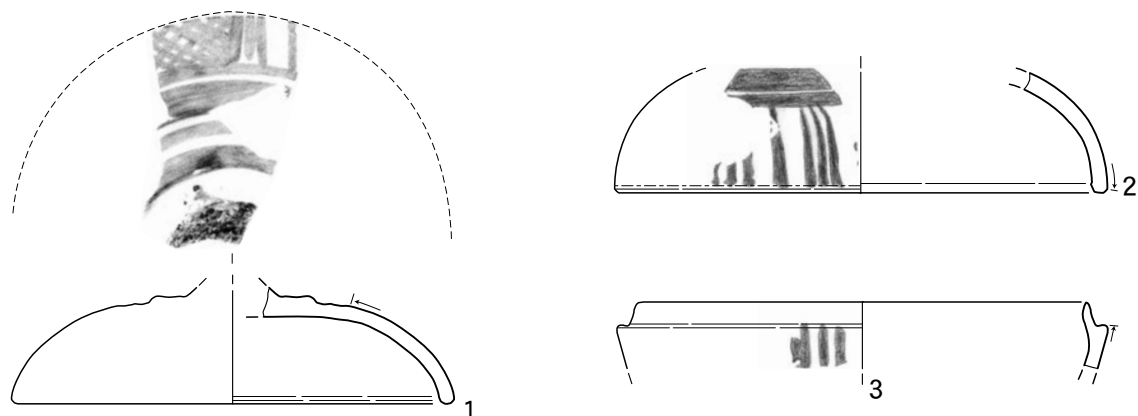
図2はやはり皿の口縁部で外反する。外面に赤色で花文を描くが、はげる。釉は内外面とも白灰色で素地は白色で、4-6Ⅲ層の出土。

図3は皿の底部で文様は内面に赤色で花文の輪郭を描くがはげる。厳密には赤絵に分類されるものである。釉は内外面とも白乳色、素地は白色を呈する。4-5淡灰黒色土層の出土。

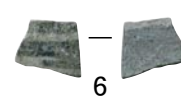
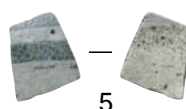
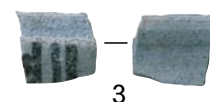
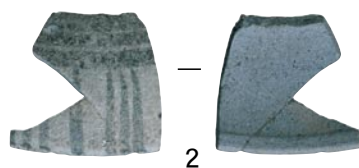
図4は皿か鉢の胴部で、ほかより厚手である。文様は赤色で花文の輪郭、その中に緑釉で花芯を描く。釉は白色、素地も白い。最大胴径18cm。4-6Ⅲ層の出土。

図5は型物の胴部である。文様は外面の上部は沈線文で有軸状の模様を施し、緑と黄の釉で彩色するものである。内面は指痕が顕著に見られ、部分的に緑釉がかけられている。器厚は7mmと厚く、文様や厚さなどから鳥などの置物のようである。3-5淡灰黒色土層の出土である。

図6翡翠釉の皿である。口縁部は外反し、口唇はわずかに玉縁状を呈する。内外面に翡翠釉を施すがはげる。4-6黒色砂質土層落ち込みで出土。類例は首里城や天界寺で出土。



第35図 タイ産鉄絵



図版24 タイ産鉄絵

8. タイ産鉄絵（第35図・図版24）

タイ産鉄絵は6点出土した。器種は合子の蓋（図1・2）と身（図3・4）、おそらく合子の蓋と思われる胴部片2点の計6点の出土である。図1と2は蓋の口縁部でいずれも直口口縁である。

図1の文様は鉄釉で格子と縦位の線の組み合わせで、口径11.6cm、高さ28mm、摘み近くの有段部の径は4cmを測る。器厚は2.5mmと薄い。4-5Ⅲ（淡灰色）の出土。

図2も蓋で、前者と同じく直口口縁であるが、内側に玉縁に膨らむ。文様は鉄釉でほぼ中頃に圏線を二条、その上下に縦位に施すが、その間隔は不揃いである。釉は外面のみ透明釉を施す。素地は明灰色。口径は13cm。4-5Ⅲ層の出土。

図3・4は身の部分で、いずれも口縁部である。口縁部断面は舌状で、前者は先端で「く」字状に外反し、口縁部の段の切り込みは深く、幅6mmを測る。文様は口縁近くで縦位、底部側で横位に3条の鉄釉で描く。釉は透明釉、素地は灰色で、口径11.8cmを測る。4-5Ⅲの出土。

図4は段幅が4mmとやや小さい。

図5・6は胴部で横位に幅4mm、2条の文様素地は前者が明灰色、後者が暗灰色呈する。釉は透明釉であるが、5は内面にも施されている。前者が4-6Ⅲ、後者が4-4・5の出土である。

9. 褐釉陶器 (第36～38図・図版25～27)

ここではグスク時代に、タイや中国で作られたと思われる陶器を扱う。総計483点のうち243点が4トレンチ中央、4-5・6のⅢ層に集中していて、次に多いのは38点で、4-8のⅢ層である。器種は壺・甕・瓶・皿・急須・鉢・合子であるが、壺が429点と八割強を占める。なお、タイのスワンカローク窯産とされる合子は別項(96頁)で扱う。以下図化した47点について述べる。

・口縁形態

- A 大きい丸形
 - a ゆるやかに逆ハの字にひらく・・・図1
 - b 逆ハの字にひらいて外に垂れる・・・図2
 - c やや立ち上がり気味にひらく・・・図3
 - d 欠損して立ち上がり不明・・・図4
- B 小さい丸形
 - a やや立ち上がって大きくひらく・・・図17
 - b 立ち上がり気味にひらく・・・図18、27
- C 四角
 - a 大きく内湾・・・図24、26
 - b ゆるやかに外反・・・図31
- D 小さい三角
 - a 大きく内湾・・・図30
 - b わずかに内湾・・・図29
 - c 立ち上がり気味にひらく・・・図28
- E 逆台形
 - a 大きく内湾・・・図25

胎土

- I 灰色系
 - ① 白色粒子・・・図30、35
 - ② 黒色粒子・・・図1、2、3、4、17、44、45
 - ③ 白、黒色粒子・・・図8、21、25、36、37、38、39
 - ④ 白、褐色粒子・・・図34
 - ⑤ 黒、灰色粒子・・・図32
 - ⑥ 黒、白、褐色粒子・・・図23、43
 - ⑦ 白、赤、黒色粒子・・・図6、12、13、15、20、27
 - ⑧ 混入物は見られない・・・図40、41
- II ピンク色粗粒子
 - ① 赤色粒子・・・図5、9、22
 - ② 赤、白色粒子と貝片・・・図16
 - ③ 黒、赤色粒子・・・図7
 - ④ 黒、赤、白色粒子・・・図14
- III 紫色精緻
 - ① 白色粒子・・・図10、11、18
 - ② 黒、赤、白色粒子・・・図19
- IV 紫色微粒子
 - ① 白色粒子・・・図28
 - ② 白、黒色粒子・・・図33
- V 橙色系粗粒子
 - ① 白色粒子・・・図24、26、31、42、46、47
- VI 黒色粗粒子
 - ① 光る黒色粒子と石英・・・図29

タイ産としたものの特徴としてはA・B類で、なおかつI-②類、II類であることがあげられる(第36図1～4)。中国産としたものの特徴としてはC・D・E類で、IV～VI類のものであることがあげられる(第38図24・26・28・29・30・31)。口縁形態や胎土は産地や窯の違いを表す可能性もあるが、今回は詳細を特定するには至らなかった。

表16 褐釉陶器出土量

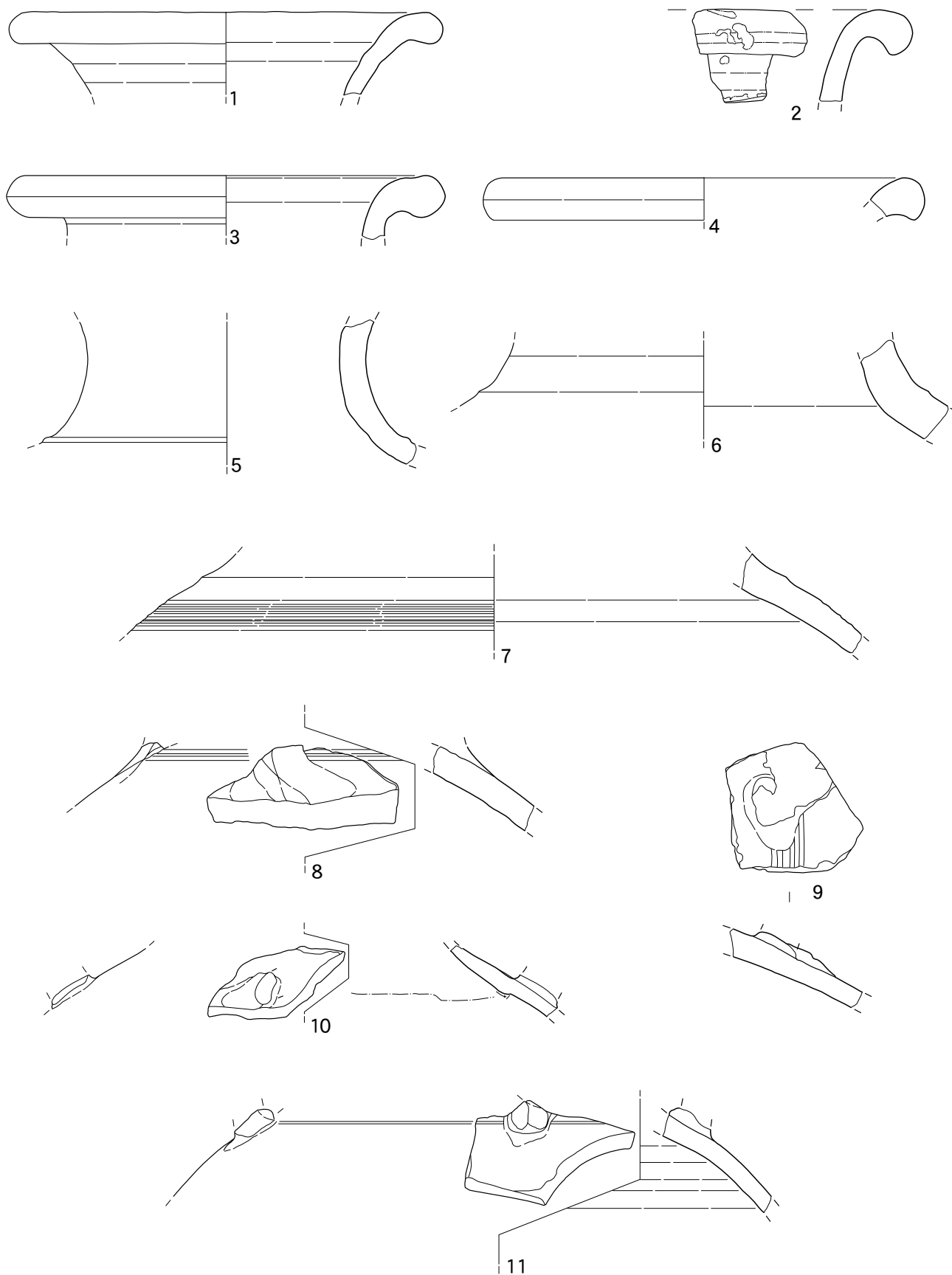
出土地		種類	タイ								中国					その他										小計	層集計	グリット集計		
グリット	層	部位	瓶	壺	壺(小)	壺(中)	壺(大)	蓋	合子	合子(蓋)	不明	壺	壺(小)	壺(中)	壺(大)	不明	皿	瓶	壺	壺(小)	壺(大)	急須	鉢	甕	円盤				不明	
3-5	Ⅲ	胴					2					2							1								5	5	11	
	不明	胴					4					2															6	6		
3-6	Ⅲ	胴			1		1					1															3	3	3	
3-7	灰色土層	胴	1																								1	1	2	
	不明	口				1																					1	1		
3-8	不明	胴										2							1								3	3	3	
3-9	不明	胴									1																1	1	1	
4-1	Ⅲ	胴																	2								2	2	2	
4-2	Ⅲ	口																	1								1	1	6	
	不明	胴					2					2															4	5		
4-3	Ⅱ	胴									1																1	1	15	
		底			1	2						3						1	1			1					9	11		
		底				1																					1	4		
4-4	Ⅱ	口										1		2													4	4	22	
		胴	1			2					1	3			1				3	1					1	13	18			
		底										1															1	1		
		耳		1																							1	3		
4-4-5	Ⅲ	胴						1																			1	1	7	
		口											4														1	6		
4-5	Ⅲ	胴																		1							1	1	141	
		口		1																								2		3
		底	1	1	3	1	11		2	2	2	39						1	54									115		9
		耳		1																								1		1
		底				1							2															3		4
4-5-6	Ⅲ	胴			1	1	4					3								2							11	11	12	
		口										1															1	1		
4-6	Ⅲ	口				1						1		1			1										5	5	124	
		胴			10	7	18		1		1	29								27	1	1					106	115		
		底		1								1								1							3	1		
		耳																										1		1
		不明	胴				1																					0		1
		耳				1																						1		1
4-6-7	Ⅲ	口											1														1	1	4	
		胴					2					1															3	3		
		底																									15	18		
4-7	Ⅲ	口	1									1								1							3	3	21	
		胴			1	1						2																11		15
		柱穴					1																					1		1
4-8	Ⅲ	口																									1	1	38	
		胴				1	7				1	12						1	11								1	34		
4-9	Ⅲ	口																										2	2	10
		胴					1					5															1	9		
4-10	Ⅲ	口																										1	1	22
		胴			1	3						3								1	2							3	3	
不明	Ⅲ	胴										1																17	17	39
		褐色土層											1															2	2	
		淡褐色砂質層			1								2															6	6	
		淡灰黒色砂混じり層				1																						3	3	
		表面清掃					1						2															3	3	
		表面清掃																										1	1	
		柱穴																									1	2		
		表採																									1	3		
不明	口	胴			1	2						7								6							1	17	20	
		注口																									1	1		
		底					1																					1		1
部位別合計			3	6	21	17	70	1	4	2	9	142	1	3	2	13	2	10	162	3	2	2	1	1	1	5	483			
種類別合計			133								161					189														

表17-1 褐釉陶器観察一覧

第図 図版	番号	分類	器種	部位	口径・底径・残存高 厚み(cm)・重量(g)	観察事項	出土地
第36図 (図版25)	1	タイ	壺	口縁	口径:19.6 残存高:3.0 重量:30.58	大きい丸形。ゆるやかに逆ハの字にひらく。釉調:緑色。光沢がある。貫入:見られない。胎土:黒色粒子を含む・灰色やや粗粒子。被熱している。	不明
	2	タイ	壺	口縁	残存高:4.7 重量:45.2	大きい丸形。逆ハの字にひらいて外に垂れる。釉調:黒褐色。光沢がない。貫入:見られない。胎土:黒色粒子を含む・灰色粗粒子。フローテーション遺物	不明
	3	タイ	壺	口縁	口径:20.0 残存高:2.0 重量:18.82	大きい丸形。やや立ち上がり気味にひらく。釉調:黒褐色。光沢がない。貫入:見られない。胎土:黒色粒子を含む・灰色粗粒子。	4-5 攪乱 001220
	4	タイ	壺	口縁	口径:19.6 残存高:2.8 重量:34.0	大きい丸形。釉調:黒褐色。光沢がない。貫入:見られない。胎土:黒色粒子を含む・灰色粗粒子。	4-5 Ⅲ層 000302
	5	タイ	壺	頸部	残存高:6.4 厚み:1~1.2 重量:66.11	釉調:緑色。光沢がある。貫入:見られない。胎土:赤色粒子を含む・ピンク色粗粒子。	4-5 Ⅲ層 000315
	6	タイ	壺	頸部	残存高:4.4 厚み:1.9 重量:43.25	釉調:緑色。光沢がある。貫入:見られない。胎土:白色赤色黒色粒子を含む・灰色粗粒子。	不明不明
	7	タイ	壺	肩	残存高:4.5 厚み:1.1~1.6 重量:99.62	釉調:緑色。光沢がない。貫入:細かく入る。胎土:黒色赤色粒子を含む・ピンク色粗粒子。被熱している	不明不明
	8	タイ	壺	耳付近	残存高:3.3 厚み:1.1 重量:72.96	釉調:緑色。光沢がない。貫入:細かく入る。胎土:白色黒色粒子を含む・灰色粗粒子。縦耳	4-5 Ⅲ層 000308
	9	タイ	壺	耳付近	残存高:3.5 厚み:0.9~1.1 重量:60.72	釉調:緑色。光沢がある。貫入:細かく入る。胎土:赤色粒子を含む・ピンク色粗粒子。横耳	4-4 Ⅱ層 000314
	10	タイ	壺	耳付近	残存高:3.1 厚み:0.5~0.8 重量:27.33	釉調:黒褐色。光沢がある。貫入:細かく入る。胎土:白色粒子を含む・紫色精緻。横耳	不明
	11	タイ	壺	耳付近	残存高:4.4 厚み:0.8~0.9 重量:49.96	釉調:黒褐色。光沢がある。貫入:細かく入る。胎土:白色粒子を含む・紫色精緻。横耳	不明
第37図 (図版26)	12	タイ	壺	胴部	残存高:11.0 厚み:1.1~1.3 重量:389	釉調:緑色。光沢がある。貫入:見られない。胎土:黒色赤色白色粒子を含む・灰色粗粒子。四点接合	4-5 Ⅲ層・Ⅲ層下 000821、001025、 001222
	13	タイ	壺	底部	底径:26.4 残存高:8.9 重量:224	平底。釉調:見られない。貫入:見られない。胎土:黒色赤色白色粒子を含む・灰色粗粒子。	4-5 攪乱 001220
	14	タイ	壺	底部	底径:21.4 残存高:5.0 重量:165	平底。釉調:見られない。貫入:見られない。胎土:黒色赤色白色粒子を含む・ピンク色粗粒子。	4-8 Ⅲ層 000327
	15	タイ	壺	底部	底径:24.0 残存高:4.9 重量:109.64	平底気味。釉調:黒褐色。光沢がある。貫入:細かく入る。胎土:黒色赤色白色粒子を含む・灰色粗粒子。	4-5・6畦 Ⅲ層 010209
	16	タイ	壺	底部	残存高:6.4 厚み:0.9~1.2 重量:68.41	平底気味。釉調:見られない。貫入:見られない。胎土:赤色白色粒子と貝片を含む・ピンク色粗粒子。	4-5 Ⅲ層 000920
	17	タイ	壺	口縁	口径:11.3 残存高:2.9 重量:31.99	小さい丸形。やや立ち上がって大きくひらく。釉調:黒褐色。光沢がない。貫入:見られない。胎土:黒色粒子を含む・灰色粗粒子。	4-6 Ⅲ層 001124
	18	タイ	壺	口縁	口径:9.0 残存高:2.4 重量:11.07	小さい丸形。やや立ち上がり気味にひらく。釉調:黒褐色。光沢がある。貫入:細かく入る。胎土:白色粒子を含む・紫色精緻。	4-8 Ⅲ層 000322
	19	タイ	不明	胴部	口径:8.5 厚み:0.4~0.5 重量:32.9	釉調:黒褐色。光沢がある。貫入:細かく入る。胎土:黒色赤色白色粒子を含む・紫色精緻。	4-5 Ⅲ層 000314
	20	タイ	瓶	胴部	残存高:4.5 厚み:0.4 重量:11.65	釉調:黒褐色。光沢がある。貫入:細かく入る。胎土:黒色赤色白色粒子を含む・灰色精緻。轆轤痕明瞭	4-5 Ⅲ層 000314
	21	タイ	瓶	胴部	残存高:2.7 厚み:0.25~0.35 重量:2.37	釉調:黒褐色。光沢がある。貫入:細かく入る。胎土:黒色白色粒子を含む・灰色精緻。轆轤痕明瞭	4-5 Ⅲ層 000825
	22	タイ	壺	底部	底径:12.4 残存高:2.9 重量:20.41	平底。釉調:黒褐色。光沢がない。貫入:見られない。胎土:赤色粒子を含む・ピンク色粗粒子。轆轤痕明瞭	不明
	23	タイ	瓶	底部	底径:4.45 残存高:1.65 重量:39.25	ケズリだし高台。高台内部がハの字状に開き、量付けは水平で狭い。釉調:見られない。貫入:見られない。胎土:黒色白色褐色粒子を含む・灰色精緻。轆轤痕明瞭	4-6 Ⅲ層 001031

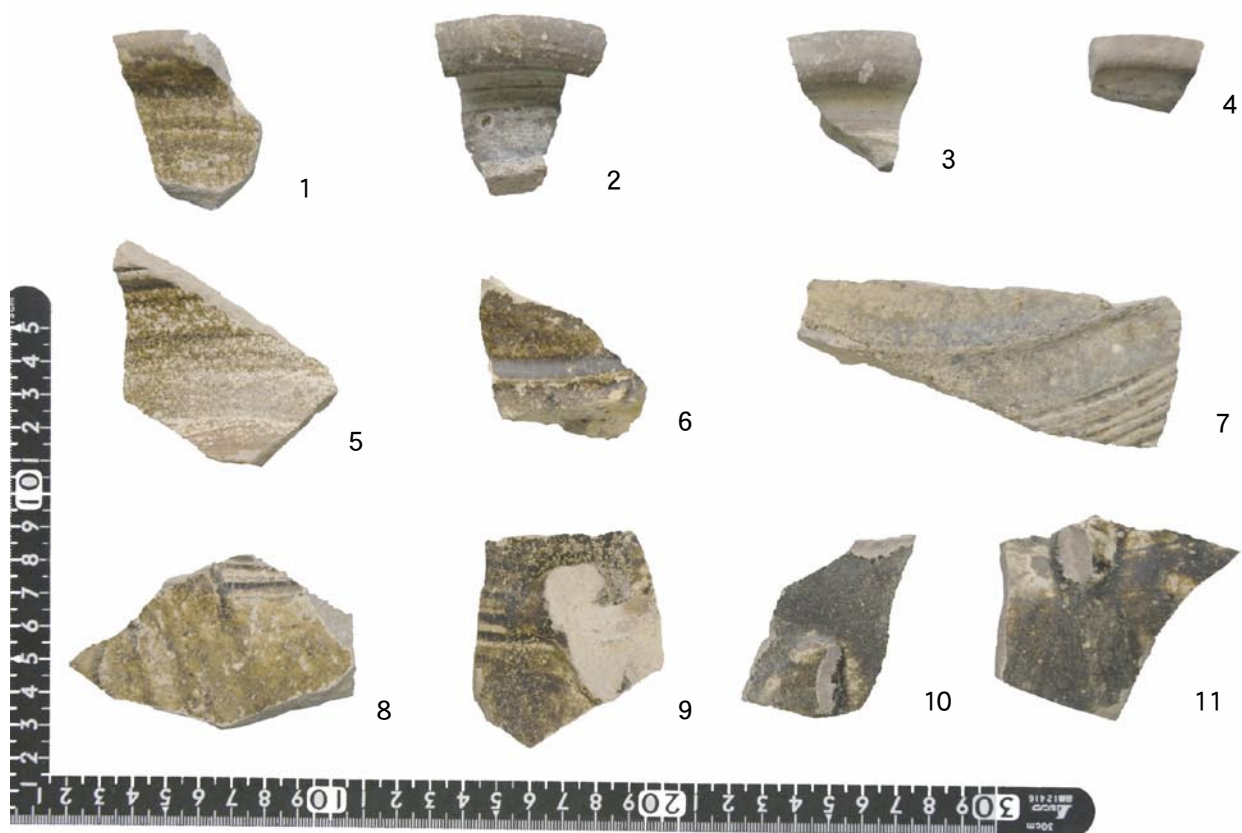
表17-2 褐釉陶器観察一覧

第図 図版	番号	分類	器種	部位	口径底径・残存高 厚み(cm)・重量(g)	観察事項	出土地
第38図 (図版27)	24	中国	壺	口縁	口径:15.1 残存高:4.05 重量:39.50	大きい四角。大きく内灣する・釉調:暗褐色。光沢がない。貫入:見られない。胎土:白色粒子を含む・橙色やや粗粒子。	4-6 Ⅲ層 000314
	25	中国	壺	口縁	口径:17.5 残存高:2.9 重量:39.91	逆台形。大きく内灣する。釉調:緑色。光沢がある。貫入:見られない。胎土:白色黒色粒子を含む・灰白色粗粒子。被熱している。	4-5・6 Ⅲ層 010209
	26	中国	壺	口縁	口径:13.8 残存高:2.75 重量:19.99	大きい四角。大きく内灣する。釉調:暗褐色。光沢がない。貫入:見られない。胎土:白色粒子を含む・橙色やや粗粒子。	4-6 Ⅲ層 001031
	27	中国	壺	口縁	口径:13.6 残存高:2.35 重量:13.34	小さい丸形。立ち上がり気味にひらく釉調:暗褐色。光沢がない。貫入:見られない。胎土:白色黒色赤色粒子を含む・灰色やや粗粒子。	4-1 Ⅲ層 000315
	28	中国	壺	口縁	口径:9.6 残存高:2.4 重量:9.85	小さい三角形。立ち上がり気味にひらく。釉調:黒褐色。光沢がある。貫入:見られない。胎土:白色粒子を含む・薄い紫色やや微粒子。	4-6 Ⅲ層 000921
	29	中国	壺	口縁	口径:10.0 残存高:1.5 重量:4.17	小さい三角形。わずかに内灣する。釉調:黒褐色。光沢がある。貫入:見られない。胎土:光る黒色粒子・石英を含む・黒色やや粗粒子。	4-5・6 Ⅲ層 010209
	30	中国	壺	口縁	口径:10.0 残存高:1.5 重量:11.76	小さい三角形。大きく内灣する。釉調:黒褐色。光沢がある。貫入:見られない。胎土:白色粒子を含む・灰色やや微粒子。	4-6 平面清掃 000919
	31	中国	鉢	口縁	残存高:3.4 重量:16.59	大きい四角。ゆるやかに外反する。釉調:暗褐色。光沢がない。貫入:見られない。胎土:白色粒子を含む・橙色やや粗粒子。	4-6 Ⅲ層 000309
	32	中国	壺	胴部	復元最大径:37.6 残存高:6.5 重量:122	釉調:黒褐色。光沢がある。貫入:見られない。胎土:黒色、灰色粒子を含む・灰色微粒子。五点接合	4-5 Ⅲ層とフロー? 000315、010219
	33	中国	壺	胴部	残存高:5.0 厚み:0.4~0.75 重量:23.70	釉調:黒褐色。光沢がない。貫入:見られない。胎土:白色、黒色粒子を含む・紫色微粒子。轆轤痕明瞭	4-6 Ⅲ層 000313
	34	中国	壺	底部	底径:10.9 残存高:3.65 重量:60.11	上げ底。目砂あり。釉調:緑色。光沢がある。貫入:細かく入る。胎土:白色、褐色粒子を含む・灰色精緻。	4-8 Ⅲ層 010319
	35	中国	壺	胴部	残存高:6.45 厚み:0.55~1.0 重量:49.32	上げ底気味。釉調:褐色。光沢がない。貫入:見られない。胎土:白色粒子を含む・灰色微粒子。外面に粘土片付着	4-10 Ⅲ層 000308
	36	中国?	壺	底部	底径:21.3 残存高:6.7 重量:82.60	平底。釉調:見られない。貫入:見られない。胎土:白色粒子多い黒色粒子わずかに含む・灰色粗粒子。	4-5 Ⅲ層 000308
	37	中国	壺	底部	底径:14.7 残存高:1.5 重量:15.15	平底。釉調:見られない。貫入:見られない。胎土:白色、黒色粒子を含む・灰色微粒子。	4-5 攪乱 001222
	38	中国	壺	底部	底径:8.0 残存高:3.7 重量:23.60	平底。釉調:見られない。貫入:見られない。胎土:黒色、白色粒子を含む・灰色微粒子。三点。	4-6 Ⅲ層 000920、001010、 001031
	39	中国	壺	底部	底径:6.4 残存高:3.0 重量:7.32	上げ底気味。釉調:見られない。貫入:見られない。胎土:黒色、白色粒子・灰色微粒子。轆轤痕明瞭	4-6 Ⅲ層 000313
	40	中国	壺	底部	底径:7.0 残存高:1.4 重量:10.38	平底。釉調:黒褐色。光沢がない。貫入:見られない。胎土:灰白色精緻(やや軟質)。	4-6 Ⅲ層 001031
	41	中国	壺	底部	底径:11.0 残存高:1.35 重量:5.75	平底。釉調:黒褐色。光沢がない。貫入:見られない。胎土:灰白色精緻(やや軟質)。	4-6 淡灰黒色土 000313
	42	中国	壺	底部	底径:14.4 残存高:1.8 重量:10.59	上げ底気味。釉調:見られない。貫入:見られない。胎土:白色粒子を含む・やや粗粒子。轆轤痕明瞭	4-6 Ⅲ層 000310
	43	中国	壺	底部	底径:9.75 残存高:3.5 重量:13.40	上げ底気味。釉調:褐色。光沢がない。貫入:見られない。胎土:黒色、褐赤橙色、白色粒子を含む・灰色やや微粒子。	4-5 Ⅲ層 000307
	44	中国	皿	底部	底径:5.9 残存高:2.1 重量:27.09	ㇿりだし高台。逆台形。釉調:褐色。光沢がない。貫入:見られない。胎土:黒色粒子を含む・灰色やや微粒子。	4-6 Ⅲ層
	45	中国	瓶	頸部	残存高:3.4 厚み:0.35 重量:6.27	釉調:見られない。貫入:見られない。胎土:黒色粒子を含む・灰色やや粗粒子。頸部径は9.0cm。	4-4・5 Ⅲ層
	46	中国	急須	注口?	残存高:1.3 重量:2.37	釉調:褐色。光沢がある。貫入:見られない。胎土:白色粒子を含む・淡橙色粗粒子。	不明
	47	中国	急須	耳	残存高:3.0 重量:15.29	釉調:褐色。光沢がある。貫入:見られない。胎土:白色粒子を含む・淡褐色粗粒子。	4-5 層不明

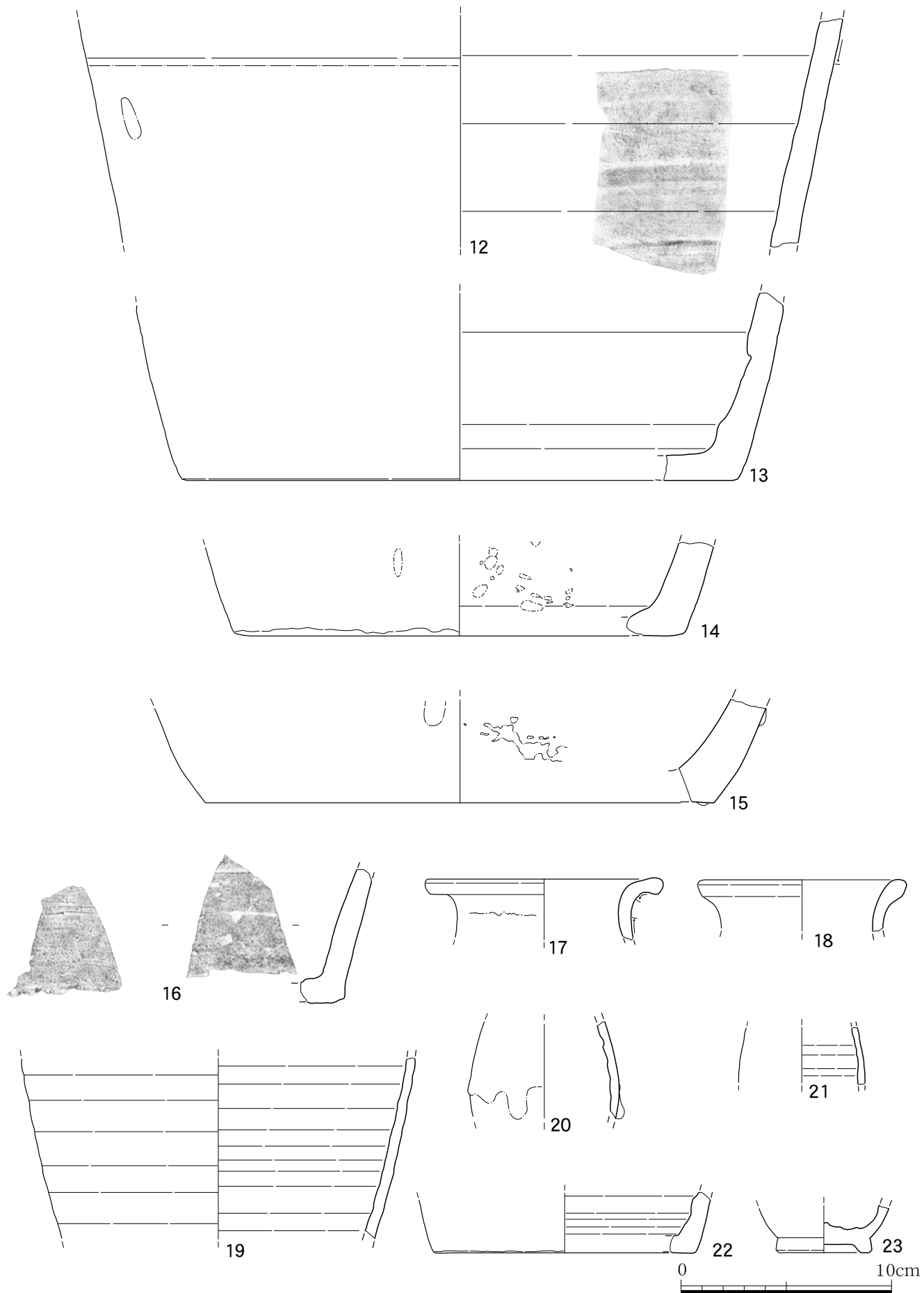


0 10cm

第36図 褐釉陶器1



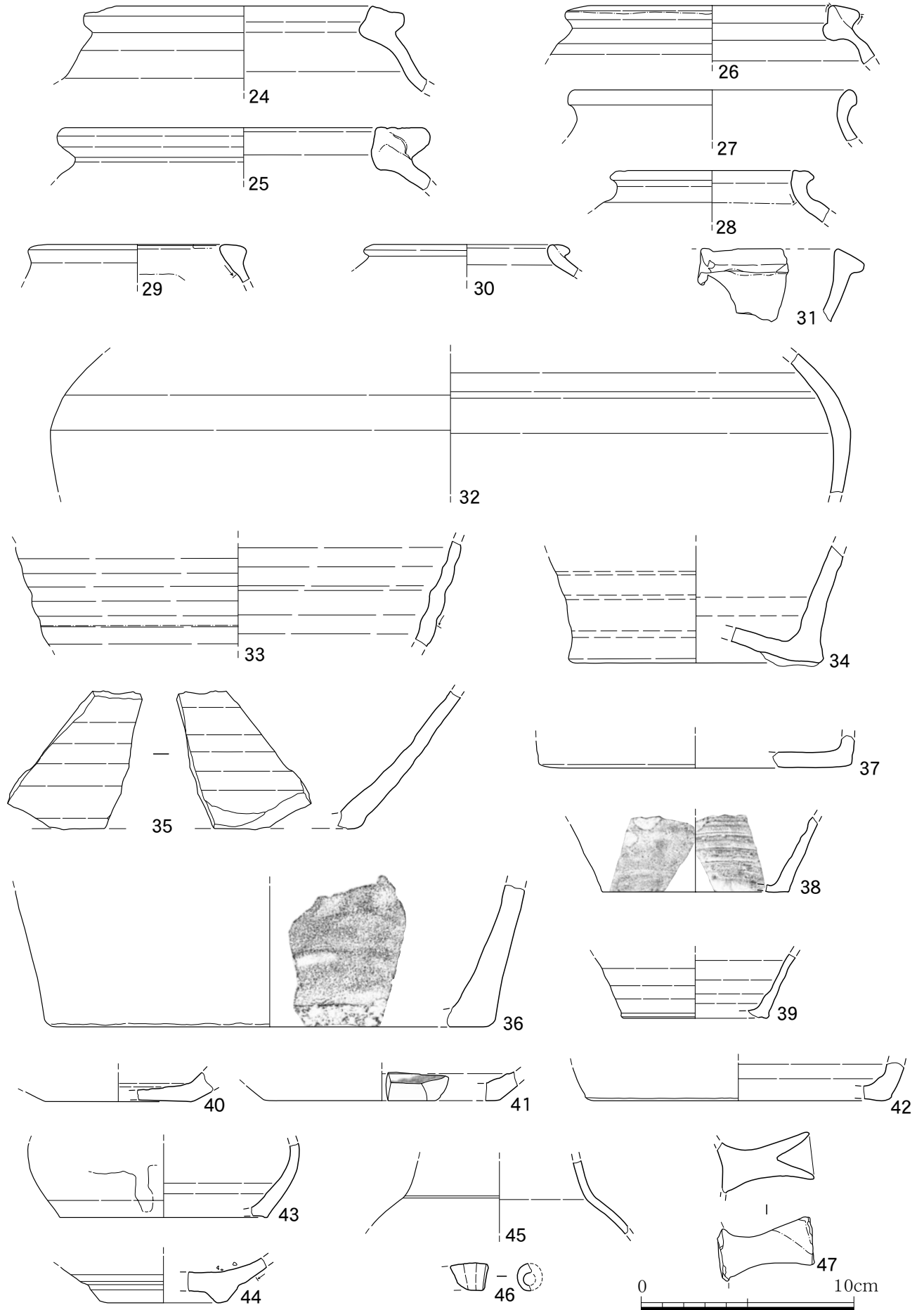
図版25 褐釉陶器1



第37図 褐釉陶器2



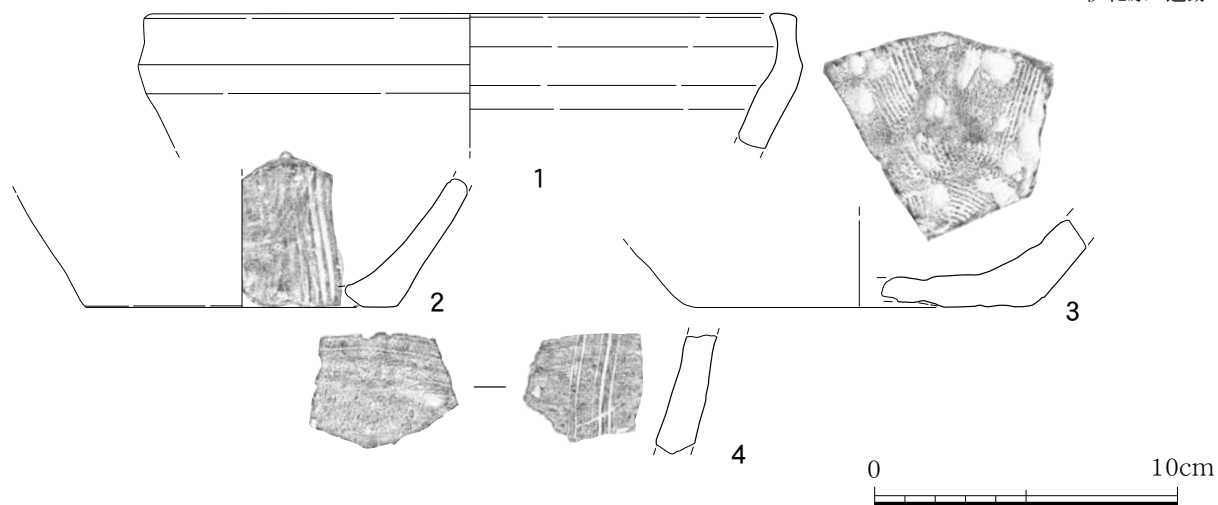
図版26 褐釉陶器2



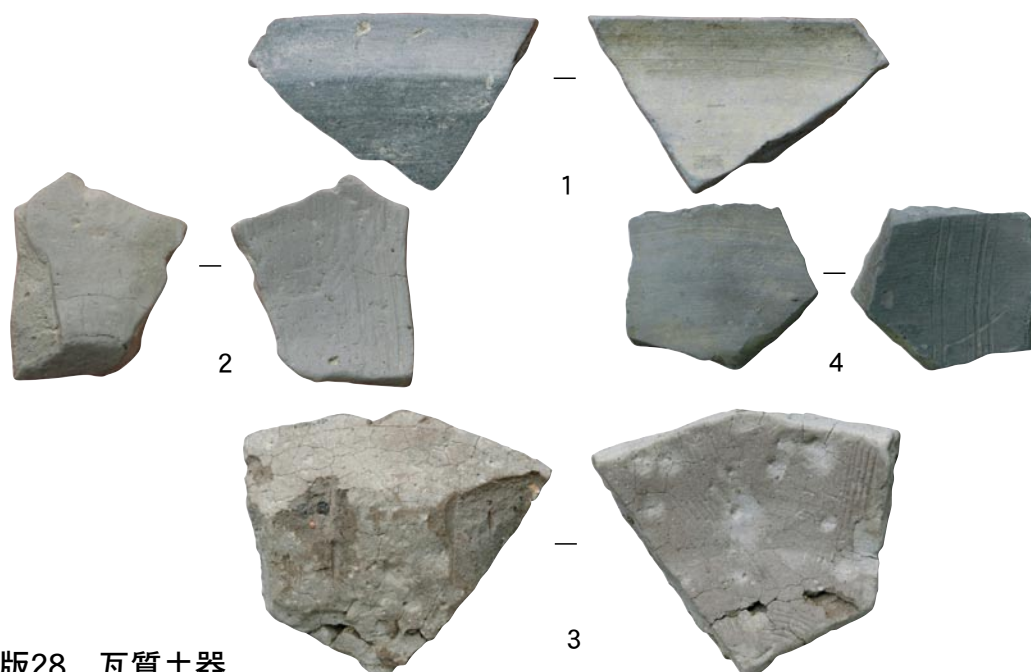
第38図 褐釉陶器3



図版27 褐釉陶器 3



第39図 瓦質土器



図版28 瓦質土器

10. 瓦質土器

口縁部1点、胴部1点、底部2点の計4点出土した。

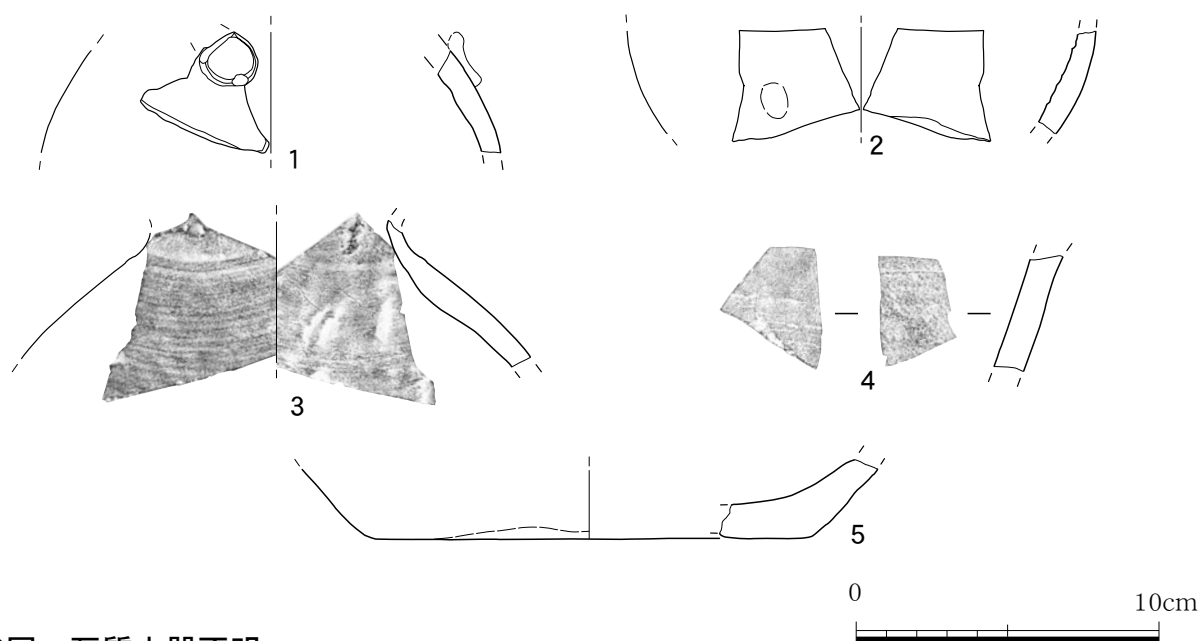
図1は口縁部で、「く」に内彎するもので、内面にすり目は確認出来ない。口縁の形状は角を呈し、器面は内外面とも横ナデの調整が見られる。器色は明灰色で、焼成良好。胎土に白粒を僅かに含む。3-8で出土。湧田古窯跡の出土例から一応、すり鉢と判断したが、別の器種の可能性も否定できない。

図2、3はすり鉢の底部である。

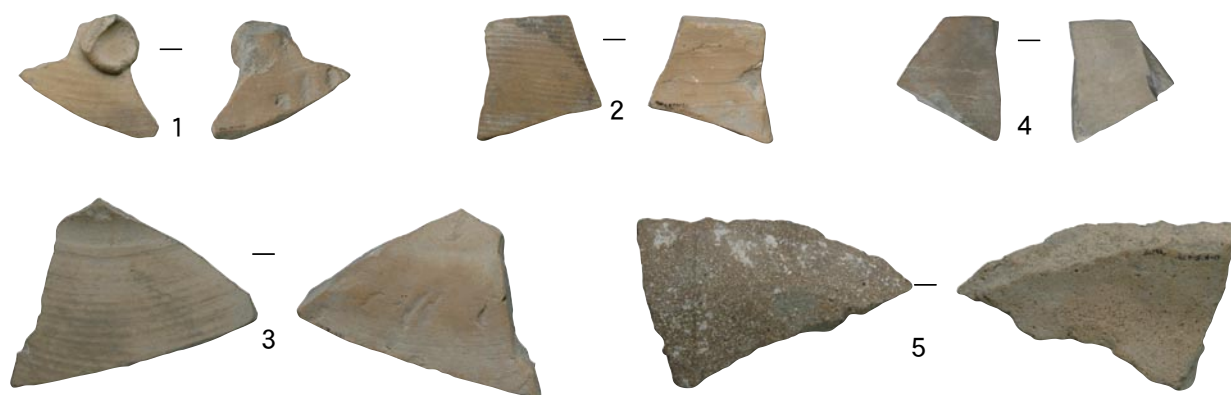
図2は底径10.4cmの底部で、すり目が粗く、その幅は18mmである。器面は外面にわずかに轆轤痕が確認できる。焼成やや悪く、器色は暗灰色を呈する。胎土に透明粒の混入が見られる。器厚は9mmと薄手である。3-5石列より下層で出土。

図3はすり鉢の底部で立ち上がりはやや丸味を帯びる。すり目幅は20mmを測り、内外面に轆轤痕が見られる。焼成は悪く、器面の所々が剥がれる。胎土は細かい。4-7淡灰色土（灰黒色土の上）の出土である。

図4はすり鉢の胴部で、内面のすり目は幅15mmで両端の櫛目が強い。内外面に轆轤痕。焼成は良い。4-7 III層の出土。



第40図 瓦質土器不明



図版29 瓦質土器不明

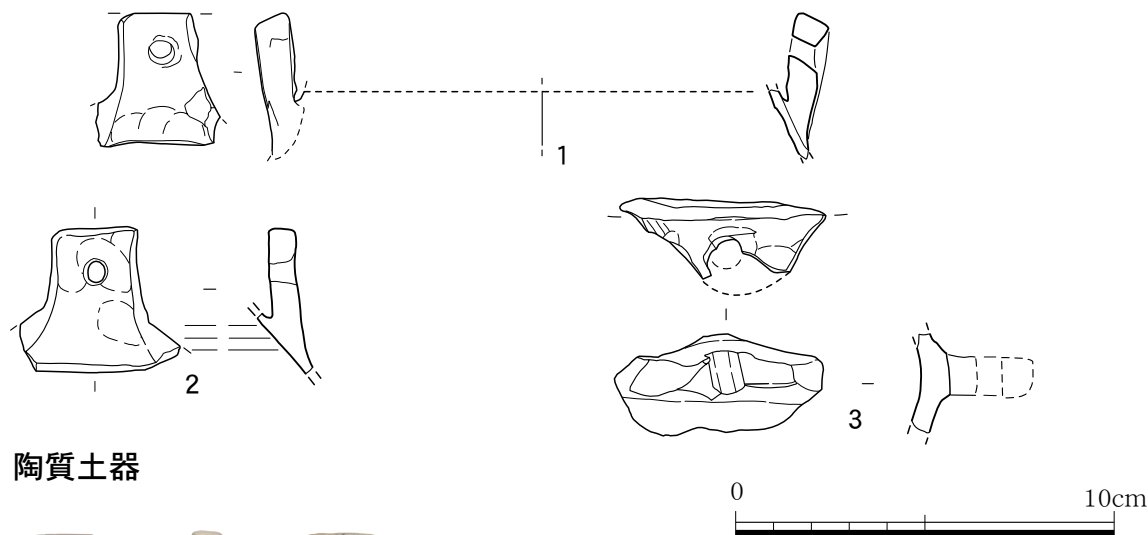
・瓦質土器不明（第40図・図版29）

第39図の瓦質土器よりは薄手、陶質土器よりは厚手で焼成は瓦質土器に似るものでどちらにも属しないものを第40図・図版29にまとめた5点である。

図1～4は同一個体で混入物はニービに含まれる金雲母に似た光沢のある物質が含まれている。陶質土器に比べて、泥質である。

図1は外面に貼り付けの耳、図2は部分的に墨が塗られ、図3は前2点よりは厚手で、頸部に浮文の圏線が施されている。図4は厚さ9mmで底部近くと思われる。内外面に轆轤痕が見られ、器色は外面が橙褐色、内面がやや暗い灰褐色、内部が明灰色のサンドイッチ状を呈する。4-5灰黒色砂質土層。

図5は前4点とは異なり、器厚14mmと厚く、焼成も良好である。砂質で壺の底部と思われる。底径14.5cmを測るもので、底面には白粒を多量含むが内面にはほとんど見られない。直底。4-5畦の出土である。形状はタイ産陶器の壺の底部に似る。



第41図 陶質土器



図版30 陶質土器

11. 陶質土器 (第41図・図版30)

鍋6点、皿か蓋1点、急須2点、火炉3点、不明の胴部破片26点の計40点である。

出土地別には4-4のⅡ層で22個と最も出土量が多い。

表18に出土量、主な遺物について第41図、図版30に示した。

以下主な遺物について略述する。

a 鍋

口縁部、胴部、底部がそれぞれ2点の計18点した。

b 急須

耳2点、胴2点の計14点出土した。いずれも4-3・4グリッドのⅡ層で出土している。

図1は耳の部分である。4-4グリッドの遺構掘り下げ部分で出土。

図2も耳の部分である。4-4の戦前遺構(住居跡)に伴って出土。

c 火炉

耳1点、底部1点、胴部1点の計3点出土した。

図3は耳の部分で4-3で石敷遺構で出土。

d 不明

胴部が29点出土した。

表18 陶質土器出土量

出土地 グリッド	器種		皿	壺	鍋	急須	火炉	不明	小計	層 集計	グリッ ト集計
	層	部位									
3-10	Ⅲ	底	1						1	1	1
4-1	Ⅲ	胴 底			4			1	1 4	5	5
4-3	Ⅱ	口 胴 耳			1	1		9	1 10 1	12	12
4-4	Ⅱ	口			1			3	1	17	19
		胴 底 耳			9 2 2			12 2 2			
		口			1			1			
	黄緑色土層	胴			1			1	1		
4-5	Ⅲ	胴 底			3 2		1	2	1 6 2	8	8
4-6	Ⅲ	口 胴 底		1	1 4		5	9	1 15 5	21	21
4-7	Ⅲ	胴						1	1	1	1
4-10	Ⅲ	胴						2	2	2	2
不明・表採					1			4	5	5	5
合計			1	1	18	14	8	32		74	

12. 沖縄産施釉陶器（第42図・図版31）

本遺跡出土の沖縄産施釉陶器は表19によると 碗86点、小碗1点、皿2点、鍋14点、瓶5点、鉢8点、急須9点、酒器6点、油壺5点、火炉2点、火取1点、不明10点の合計149点の出土である。

出土地別にみると3トレンチで2点、それ以外は4トレンチで出土したが、その中でも4-6で38点、4-4で16点と多く出土している。

以下、表19に出土状況、主な遺物について器種別に略述し、表20に観察一覧、第42図、図版31に主な遺物を示す。

a. 碗

口縁部25点、胴部47点、底部13点、耳1点の計86点出土した。

これらは施釉の仕方では白化粧のないものと外面と内面の釉が異なる掛け分け、白化粧を施すものの3種がある。

図1 底部で、底部までは施釉しない、いわゆるフィガキーである。

図2 は内外底に目砂が見られるものである。

図3 の外面は鉄釉で内面は透明釉の掛け分けで、内底に鉄釉で丸文を施すもので、内面に白化粧は施さない。

白化粧が施されるものは口縁部が外反し、呉須やイッチン技法で加飾する。前者が4-6淡灰色土層で、後者が表面採集で得られた。また、底部を二次利用し、円盤状製品にしたものが4-10黄色土層で出土している。

b. . 小碗

口縁部が1点、3-9灰色土層で出土した。

c. 皿

胴部1点、底部1点の計2点出土した。

d. 鍋

耳1点、口縁部1点、胴部1点、底部11点の計14点出土した。

鍋の底部で、内底は鉄釉を薄く塗り、外底には煤が付着するものが1点出土した。サイズは小さい方である。

e. 瓶

胴部3点、脚台の部分が2点の計5点出土した。

図8は底部で外面に黒釉を施す。茶褐色土層で出土した。

f. 鉢

口縁部4点、胴部4点計8点の出土である。

図6 は波状口縁で、黒釉を施す。表面採集である。

図7 は胴部で外面は黒釉、内面に白化粧はなく透明釉の掛け分けである。4-6淡灰色土層で出土した。

g. 急須

耳1点、口縁部2点、胴部2点、底部1点と蓋が2点の計8点の出土である。加飾は線彫りで、いずれも4-6Ⅲ層の出土である。

h. 酒器

胴部6点の出土である。

他に三島手の加飾もみられる。

i. 油壺

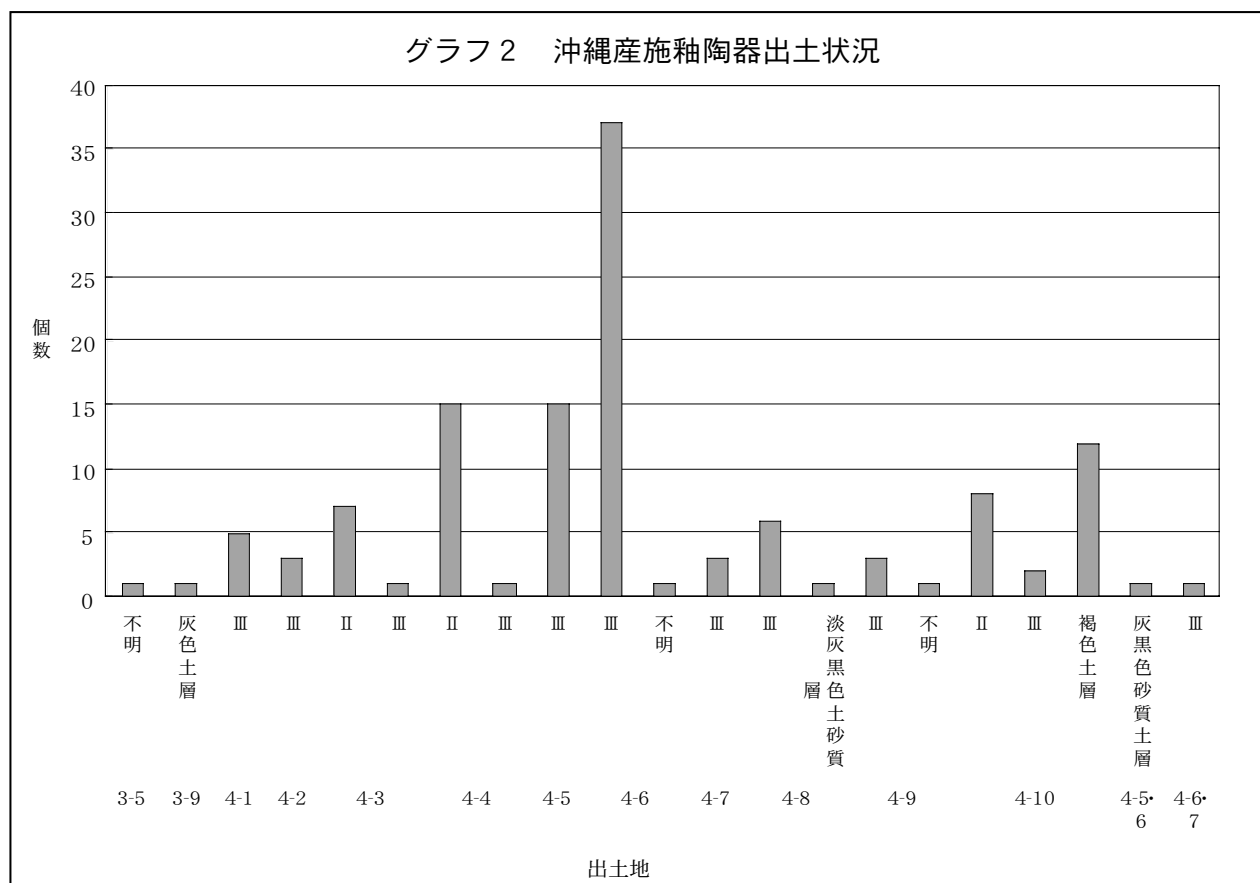
胴部4点、底部1点、計7点の出土である。

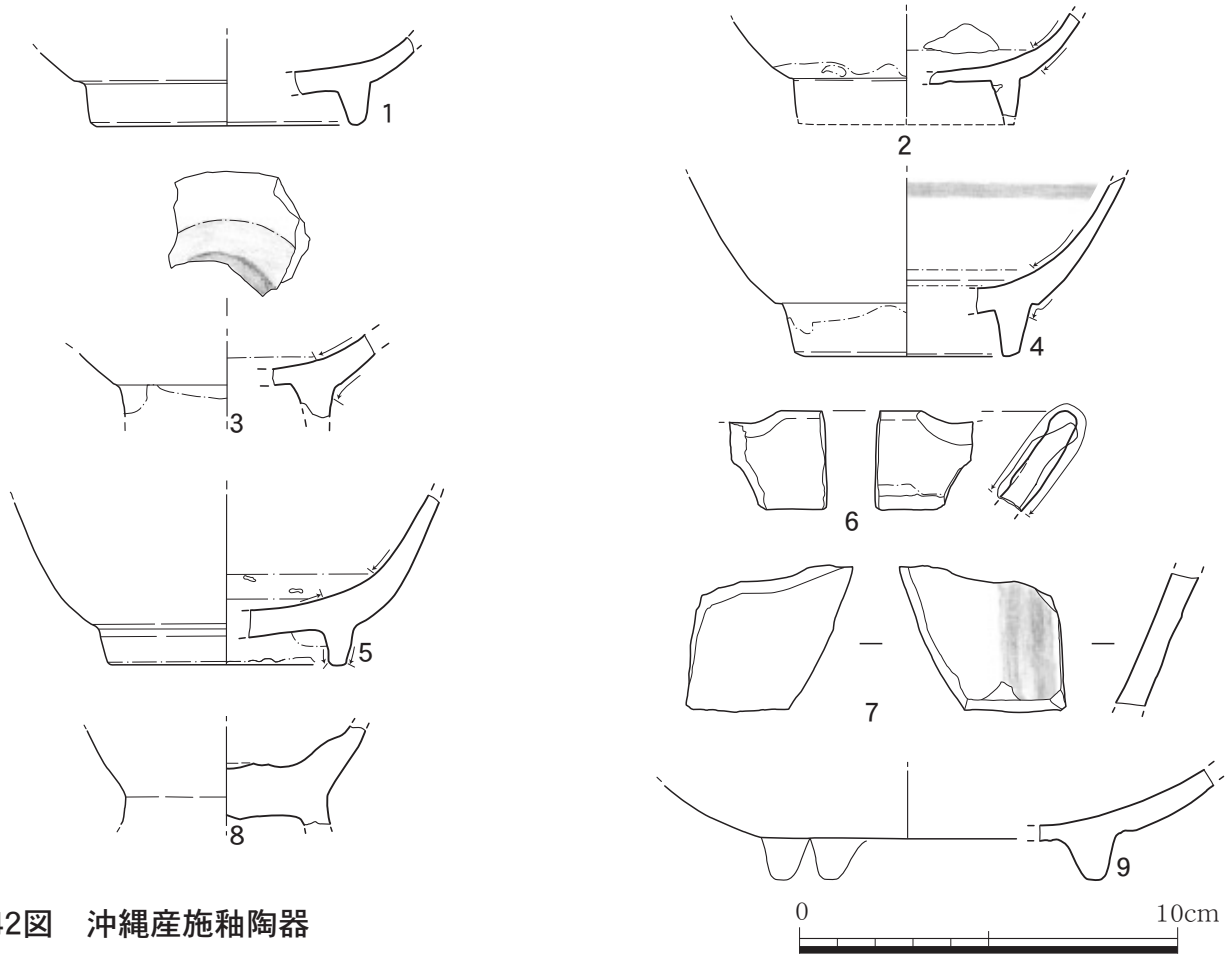
表19 沖縄産施釉陶器出土量

出土地 グリッド	層	器種	器種											小計	層集計	グリッド 集計
			碗	小碗	皿	瓶	油壺	鍋	急須	鉢	火炉	火取	酒器			
3-5	不明	胴	1											1	1	1
3-9	灰色土層	口		1										1	1	1
4-1	Ⅲ	口	2											2	5	5
		胴	1								1		2			
		耳	1										1			
4-2	Ⅲ	口						1						1	3	3
		胴	1		1									2		
4-3	Ⅱ	口	1											1	7	8
		胴	4											4		
		底				1		1						2		
4-3	Ⅲ	胴										1	1	1		
	4-4	Ⅱ	口	2						2					4	15
胴			4		1	1								6		
底			4					1						5		
4-4	Ⅲ	口							1					1	1	
	4-5	Ⅲ	口	4				1						5	15	15
胴			4			1		2		1		1	9			
底			1											1		
4-6	Ⅲ	口	9					2	1					12	37	38
		胴	10				1		1	2		2	1	17		
		底	3				1	2						6		
		耳						1	1					2		
4-6	不明	底										1	1	1		
	4-7	Ⅲ	口	1										1	3	3
胴			1		1								2			
4-8	Ⅲ	口								1				1	6	7
		胴	3				1					1		5		
4-8	淡灰黒色土砂質層	底			1									1	1	
	4-9	Ⅲ	胴	1					1					2	3	4
底			1										1			
4-9	不明	胴	1										1	1		
	4-10	Ⅱ	胴	1										1	8	22
底								7					7			
Ⅲ		胴	2										2	2		
		口	2						1				3			
褐色土層	胴	2			1							5	8	12		
	底	1											1			
4-5、6	灰黒色砂質土層	口	1										1	1	1	
4-6、7	Ⅲ	底						1					1	1	1	
不明	表採	口	2											2	11	
		胴	5						1			2	8			
		耳								1			1			
	Ⅲ	胴	1						1				2	2		
		口	1										1	1		
	淡褐色砂質層	胴	1											1	4	
		底	2			1							3			
灰黒色土層	底	1											1	1		
不明	胴	4										1	5	5		
合計			86	1	2	5	5	14	9	8	2	1	6	10	149	149
備考							壺3									

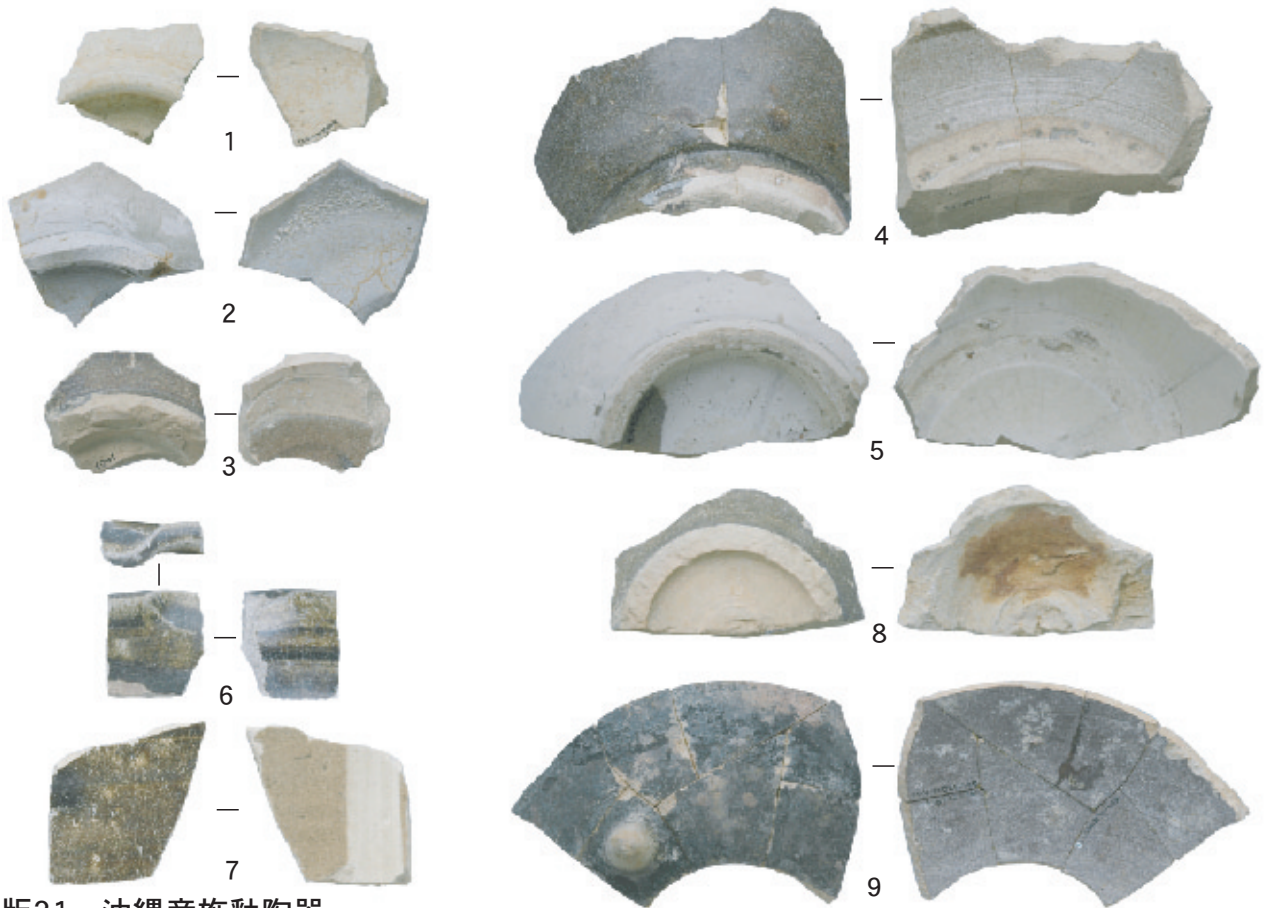
表20 沖縄産施釉陶器観察一覧

第 図 図版	番号	種別	部位・状態	口径・器高・底径 (cm)	観察事項	出土地
第 42 図 (図 版 31)	1	碗	底部	底径:6.9	高台丸味。内外面透明釉、白化粧無。フィガキー。胎土:淡褐色。	4-4 石列遺構大型 西側 001031
	2	碗	底部	胴径:6.0	腰部丸味。内外面透明釉、白化粧無。目砂、フィガキー。胎土:灰褐色。	灰黒色土層試掘020213
	3	碗	底部	高台径:6.2	腰部丸味。内底に丸文(銹釉)。外面黒釉、内面透明釉、白化粧無。かけ分け。蛇の目釉剥ぎ、外底無釉。胎土:淡褐色。	
	4	碗	底部	底径:5.3	内面一圏線(銹釉)。外面透明釉、内面黒釉。白化粧無。かけ分け。蛇の目釉剥ぎ、畳付に白化粧。胎土:淡褐色。	4-3 000310
	5	碗	底部	底径:6.2	腰部丸味。内外面透明釉。白化粧。蛇の目釉剥ぎ、外底一施釉、畳付無釉。胎土:灰褐色。	4-5Ⅲ 000307
	6	鉢	口縁部	—	外反口縁、輪花状。内外面黒釉。白化粧無。胎土:灰褐色。	
	7	鉢	胴部	—	内面一白粘土で施文。外面黒釉、内面透明釉。白化粧無。かけ分け。胎土:淡褐色。	4-6淡灰色土層000810
	8	瓶	底部	胴径:5.3	脚台。外面黒釉、内面無釉。白化粧無。胎土:淡灰褐色。	茶褐色土層盛土 020218
	9	鍋	底部	最大胴径:12.8	外面無釉、内面茶釉。白化粧無。すすあり。胎土:褐色。	4-10 000906





第42図 沖縄産施釉陶器



図版31 沖縄産施釉陶器

13. 沖縄産無釉陶器

碗1点、皿2点、瓶16点、壺114点、鉢13点、すり鉢10点、蓋1点、火炉3点、水甕1点、不明86点の計244点の出土である。

出土地別には3トレンチで10点、4トレンチで205点、不明29点で4トレンチの近世の石列遺構や石敷遺構で多く出土しているようである。

4トレンチの中でも4-4Ⅱ層で56点と最も多く得られている。出土量を表21に示し、主な遺物について表22に観察一覧、第43図、図版32に示し、下記に略述する。

a.碗

図1は口縁部で、舌状を呈し、胴部にかけて若干膨らみを持つ。表面採集である。

b.皿

図2は径5.4cmの小皿の底部で、底部から胴部にかけて膨らみをもつ。灯明皿に類似する。

c.鉢

鉢は口縁部の形態が口縁部直下で「く」字状に湾曲するものと口縁部が逆「L」字状を呈するタイプがある。

図3は小ぶりの鉢で、胴部は湾曲する。口唇直下に幅9mmの刷毛目文を波状に描く。

他に「L」字状のタイプはその幅が18mm（図5）と30mm（図7）の3種があり、後2者には口唇に圏線が施されている。出土地別では4-6淡灰色土層で4点と最も多く得られている。30mmのタイプもここから出土している。

d.すり鉢

口縁部の形態は前者の鉢同様、逆「L」字状と口縁部直下で「く」字状に湾曲する2つのタイプがある。出土地でみると4-3・4の石敷遺構で4点と多い。

図9は口縁部が逆「L」字状に湾曲するもので幅は13mmを測る。すり目幅は15mm、4-4Ⅱ層で出土。

図10は口縁部が「く」字状に湾曲するタイプで、すり目幅は13mm、4-8淡灰黒色土砂質層で出土した。

e.火炉

火炉の耳の部分が1点出土した。小片のため、図は割愛する。4-6淡灰色土層の出土である。

f.瓶

図13・14は胴部で、前者が小、後者が中の大きさである。

図13はナデ肩のタイプで胴部に2条の圏線を施すものである。4-3戦前遺構面の掘り下げで出土した。図14は頸部に「米」窯印が施されている。4-4石列遺構で出土。

g.壺

壺は大きいサイズと小さいサイズが出土した。

うち小サイズは3点である。

4-3で3点、4-4で2点、4-10で2点得られ、4-4の石列遺構が多いようである。

図11は小さいタイプで、口縁部は逆「L」字状を呈するものである。

図12は2段口縁で、口唇は平らになる。形状から底部の可能性も考えられるが、薄手である。

図20は底径が小さく、図17・18は底部が張り、図19・20は底部の立ち上がりがストレート

になるタイプである。

図15は胴部で内面にタタキらしきものが確認でき、須恵器（カムイヤキ）の可能性あるので図示した。外面の肩部に圏線が2条施されている。最大胴径21.7cmを測る。

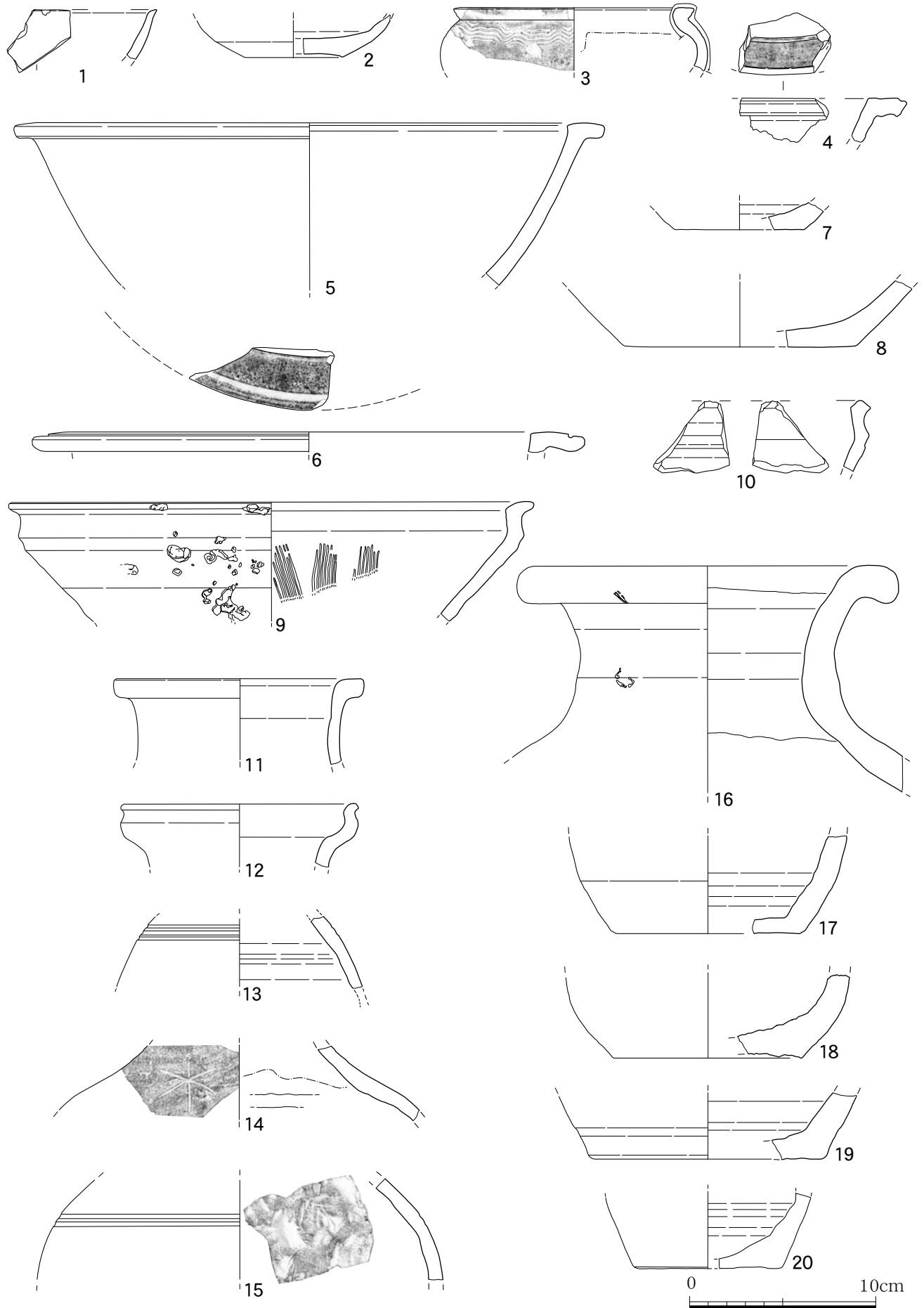
大きいタイプは図16で、有頸のタイプでる。口縁部断面は、蒲鉾状を呈し、外反が強い。タイ産陶器（第36図3）の四耳壺に酷似する。口縁部近くに「×」窯印が施されている。

表21 沖縄産無釉陶器出土量

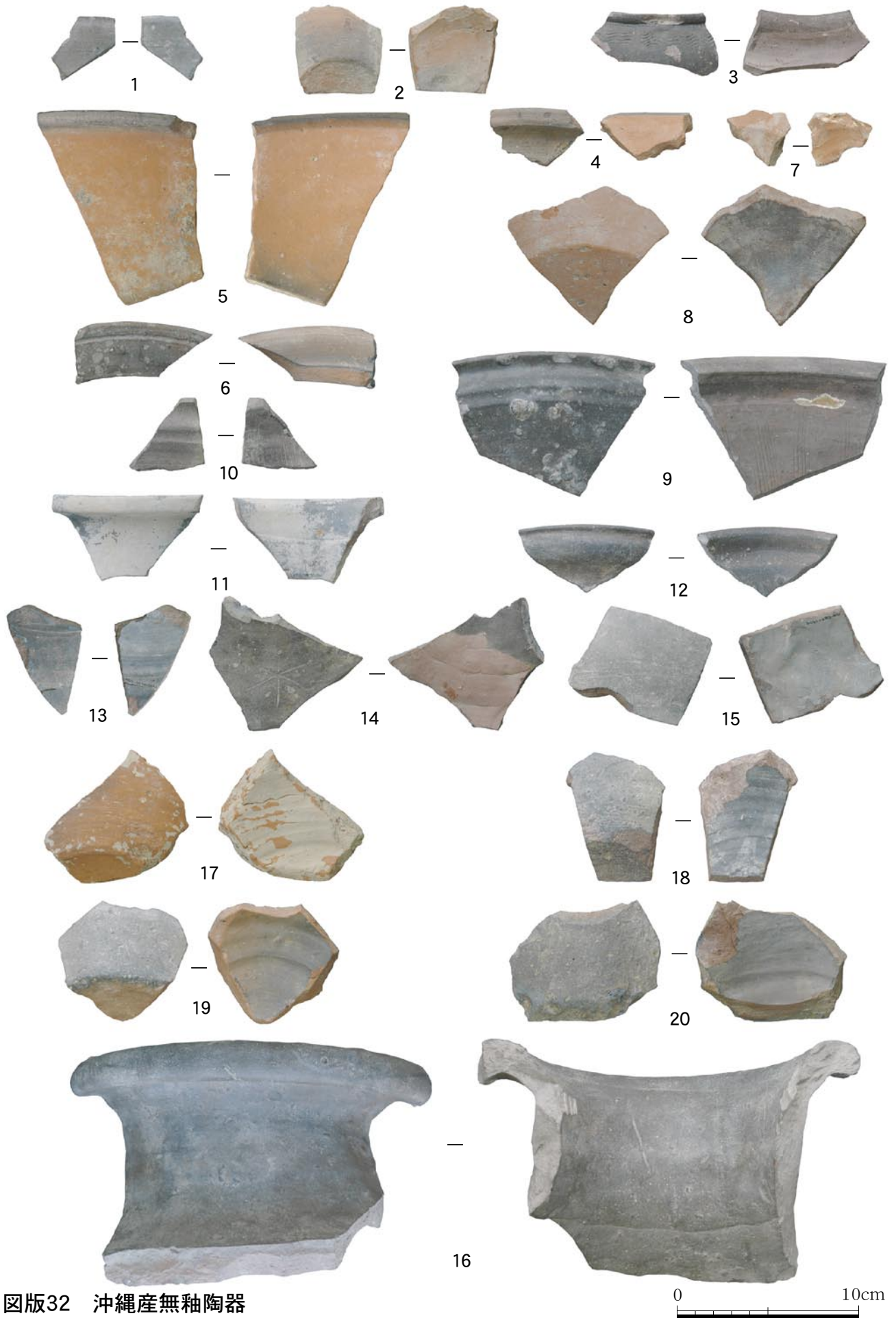
出土地 グリッド	層	器種 部位	碗	皿	瓶	壺	壺(中)	壺(小)	鉢	すり鉢	蓋	火炉	水甕	不明	小計	層 集計	グリッド 集計
3-5	Ⅲ	胴				1									1	1	1
3-7	Ⅲ	胴												1	1	1	2
	不明	胴							1						1	1	
3-8	Ⅲ	胴												3	3	3	4
	不明	口				1									1	1	
3-9	不明	口 胴				1			1						1 1	2	2
3-10	Ⅲ	胴				1									1	1	1
4-1	Ⅲ	胴				1								2	3	3	3
4-2	Ⅲ	胴												2	2	2	2
4-3	Ⅱ	口 胴 底			2 1	11			1 1	1				4	1 18 3	22	28
	Ⅲ	胴 底			1	4 1		1							5 1	6	
4-4	Ⅱ	口 胴 底			8 1	13 3		1	1 1	1 2		1		22	4 43 9	56	60
	Ⅲ	胴				3							1	4	4		
4-5	Ⅲ	口 胴 底				9			1	2	1		1	6	2 18 1	21	22
	Ⅳ	胴			1										1	1	
4-6	Ⅲ	口 胴 底 耳 不明				1 28 2		1	4 1			1		8	6 38 2 1 2	49	49
4-7	Ⅲ	胴				6								3	9	9	9
4-8	Ⅲ	口 胴				1 7			1					2	2 9	11	16
	淡灰黒色土砂質層	口 胴 底								1				3	1 3 1	5	
4-9	Ⅲ	胴				4								1	5	5	5
4-10	Ⅲ	口 胴				1 5								1	1 6	7	9
	褐色土層	胴 底		1										1	1 1	2	
4-6.7	Ⅲ	口 胴			1									1	1 1	2	2
不明	表採	口 胴 底	1			1				2				4 8	7 9	17	29
	Ⅳ	胴			1									1	1	1	
	淡灰緑色-a	胴				1									1	1	
	黄茶褐色土層	胴												1	1	1	
	淡褐色砂質層	胴												1	1	1	
	白色砂層	胴				1									1	1	
	淡灰黒色砂混じり層	胴												2	2	2	
不明	胴 底				1		1						3	3 2	5		
合計			1	2	16	108	1	5	13	10	1	3	1	86	244		

表22 沖縄産無釉陶器観察一覧

第図・ 図版	番号	種別	部位	口径(cm) 器高(cm) 底部(cm)	重量(g)	観察事項	出土地
第43 図 (図 版 32)	1	碗	口縁部		7.46	直口・舌状。灰褐色。内外面轆轤痕	表採
	2	小皿	底部	底径:5.4	31.31	直底。明赤褐色。内外面轆轤痕。混和材:白・黒粒。	4-4 石列遺構 001128
	3	鉢	口縁部	口径:13.0	22.91	逆L字状・内湾。内唇からマンガン釉、内面紫褐色。ハケ目・波状文。混和材:白粒。	4-6 淡灰色土層 000309
	4	鉢	口縁部		23.94	逆L字状・幅2mm。外面茶褐色、内面赤褐色。口唇圏線。	4-4 石列遺構大型 001107
	5	鉢	口縁部	口径:31.8	117.09	逆L字状・幅18mm。内外面赤褐色、口唇黒褐色。内外面轆轤痕。混和材:石英。	3-9 000317
	6	鉢	口縁部	口径:29.8	29.84	逆L字状・幅30mm。内外面暗茶褐色。口唇圏線。	4-6 淡灰黒色土層 000313
	7	小鉢	底部	底径:7.0	12.88	直底。内外面明茶褐色。内面轆轤痕	4-3 遺構掘り下げ 000926
	8	鉢	底部	底径:12.4	88.21	直底。外面茶褐色、内面暗茶褐色。内外面轆轤痕	4-8 淡灰黒色土砂質層 000309
	9	すり鉢	口縁部	口径:28.0	89.58	逆L字状・幅13mm 「く」字状すり鉢。暗茶褐色。すり目幅15mm。外面熔付。混和材:白粒	4-4 II 001124
	10	すり鉢	口縁部		13.59	逆L字状・幅13mm・「く」字状。明灰褐色。すり目13mm。	4-8 淡灰黒色土砂質層 000309
	11	小壺	口縁部	口径:13.6	46.11	直底・逆L字状・幅13mm。明灰褐色。石灰付着	4-4 石列遺構大型、西側 001031
	12	壺	口縁部	口径:12.6	26.39	2段口縁。暗灰褐色	4-10 III 000906
	13	瓶	胴部	最大胴径:13.1	19.37	内外面明灰褐色、内部茶褐色サンドイッチ状。圏線2条	4-3 戦前遺構面掘り下げ 001201
	14	瓶	胴部	最大胴径:19.2	49.27	内外面灰褐色、内部一部マンガン掛け。「米」窯印。混和材:白粒	4-4 石列遺構 001128
	15	壺	胴部	最大胴径:21.7	52	内外灰褐色、内部暗茶褐色。圏線二条。内面タタキ	4-6 淡灰色土層 000309
	16	壺	口縁部	口径:20.4	850	カマボコ状。内外面暗灰褐色、内部茶褐色サンドイッチ状。内面積み痕明瞭。混和材:白・黒粒	4-6 III 001127
	17	瓶	底部	底径:10.4	75.99	ベタ底。内外面橙褐色。石灰付着。内面轆轤痕明瞭。混和材:白粒	4-4 石列遺構大型 001107
	18	小壺	底部	底径:10.0	79.27	ベタ底。内外面暗灰褐色、内部茶褐色。内外面轆轤痕明瞭。混和材:白粒	不明
	19	壺	底部	底径:8.2	74.68	直底。外面灰褐色、内面暗茶褐色、内部茶褐色。内面轆轤痕。	4-4 II 000308
	20	瓶	底部	底径:9.4	102.67	内外面灰褐色、内部茶褐色。内面轆轤痕明瞭	表採



第43図 沖縄産無釉陶器



図版32 沖縄産無釉陶器

14. 近世・近代陶磁器（第44・45図・図版33）

本土産の陶磁器は薩摩焼や肥前磁器など明治以前に生産された近世陶磁器と明治時代に西洋の酸化コバルト、クロムなどの顔料、銅版、ゴム版など施文・印刷技術、石炭窯、重油窯、ガス窯などの導入による安定した工業品の近世・近代磁器がある。ここでは両者を分けて報告する。

表23に出土量、主な遺物は第44・45図、図版33に示した。下記に遺物について略述する。

a. 近世陶磁器

・本土産陶器（第44図1）

図1は備前焼のすり鉢で、口縁部が「く」字状に湾曲する。外面の肥厚部に2条の沈線文を施す。器色は明橙色～灰色、内面は明灰色を呈する。

図9は碗の口縁部で、直口口縁である。内外面に銅緑釉を掛けるもので口唇に釉垂れが見られる。素地は明灰色を呈し、内野山窯と考えられる。

図10は唐津焼の皿で、やや内湾切味の直口口縁である。内面に白粘土で刷毛目文様を施す。素地は暗茶色である。

図11は産地不明の碗の底部である。高台から腰部は丸味をおびる。釉色は黄褐色で外面は腰部まで、内面は総釉である。素地は明橙～灰褐色で肥前陶器に近いが、土が若干違う（渡辺氏教示）。

図12は腰部で大きく屈曲するもので皿の胴部である。内面に黄褐色釉を施釉する。素地は明灰で細かく、産地は不明、中国産の可能性もある。

図13はすり鉢の胴部で僅かに腰部がやや膨らむ。内面に幅12mmのすり目が施され、内外面は無釉。素地は明灰褐色。朝鮮系陶器可能性も考えられる。

図14～16は薩摩焼で、図14は壺の口縁部で若干肥厚する。内唇から外面にかけて暗茶褐色の釉を施す。素地は外面が灰褐色、内面は桃褐色を呈する。薩摩の苗代川窯で18～19世紀のもの（渡辺）。図15は壺の底部でベタ底である。厚さ3mmと薄く、釉は内外面とも明灰褐色を呈する。素地は暗灰褐色。堂手窯に多いタイプである。苗代川窯17世紀頃と考えられる。図16は壺の口縁部でアサガオ状を呈し、口唇の先端は膨らむ。外面は褐緑色釉、内面は黒失透釉、素地は紫褐釉を呈し、古手の苗代川窯か（渡辺）。

薩摩か肥前磁器（図2～8）

図2～4は碗である。図2は直口の口縁部で、文様は青色で外面は2本の線、内面は内唇に圏線と胴部に文様がある。呉須の発色は鈍い。図3は直口の口縁部である。文様は内外面とも幅広の圏線が見られる。図4は底部で腰部が丸味を帯びる。文様は内外面に圏線を施す。文様の発色は鈍い。図5は皿の胴部で、内面に草花文を施す、発色は淡い。図8は瓶の胴部で、外面に肥前磁器の特徴である網目文、呉須の発色は濃い。

b. 近代磁器

近世磁器は絵付けに型紙摺り、ゴム印、吹き絵などの技法がある。

型紙摺りは図17～20である。

碗：図17～19でいずれも外反口縁である。文様は図17が地文に五弁花窓に水仙文、内面は羽状。表面採集。図18は地文に襷文、丸窓の中に菊文・寿文。内底一輪花文。4-4Ⅱ層の出土。

図19は底部で、地文に烈点文にひし形窓の中に花文、内底に花文、目痕が見られる。

＜註・引用文献＞

堀内秀樹『江戸考古学研究事典』江戸遺跡研究会編P285柏書房 2001年

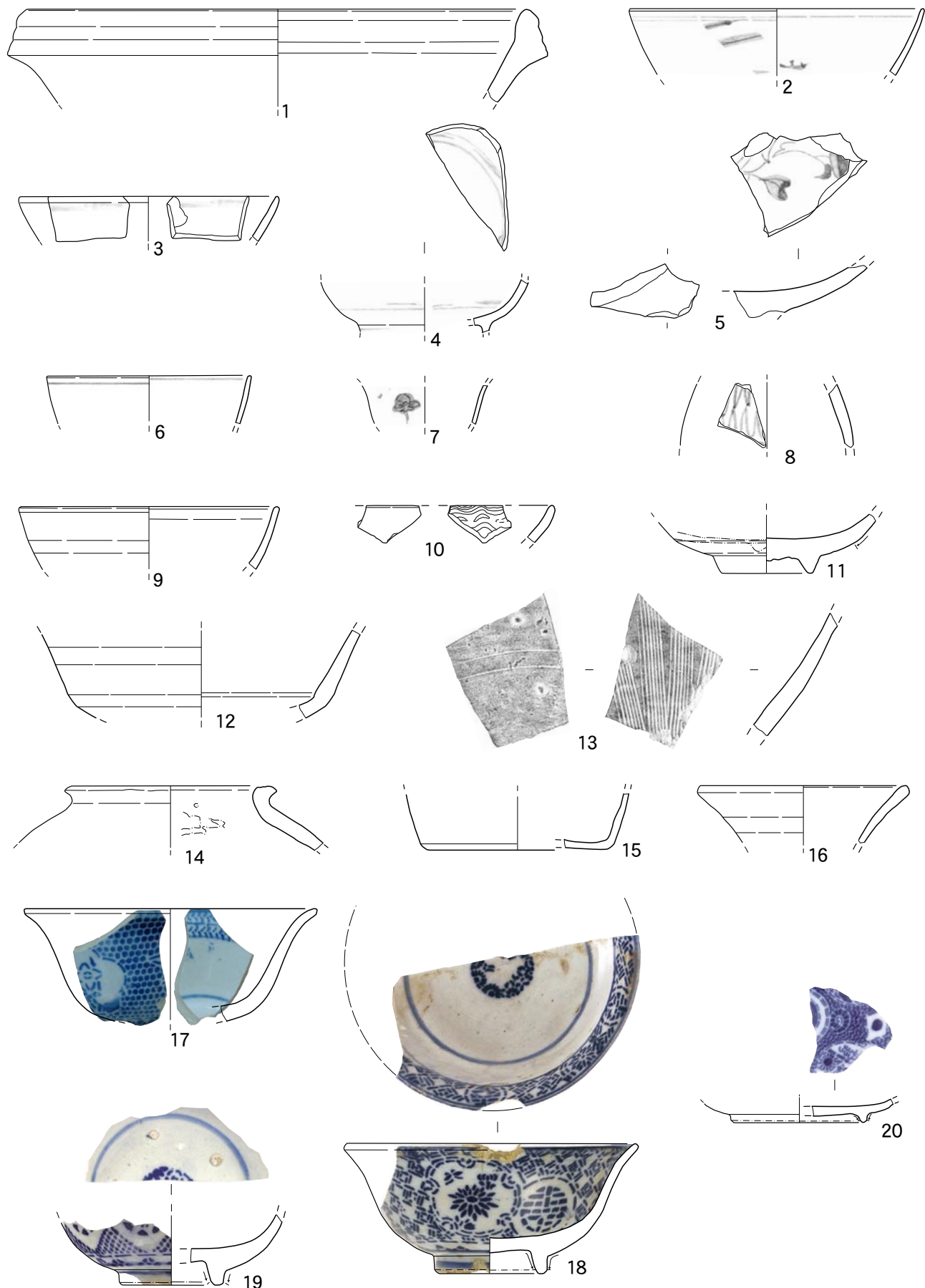
註1：渡辺芳郎先生の教示。

表23 近世・近代磁器出土量

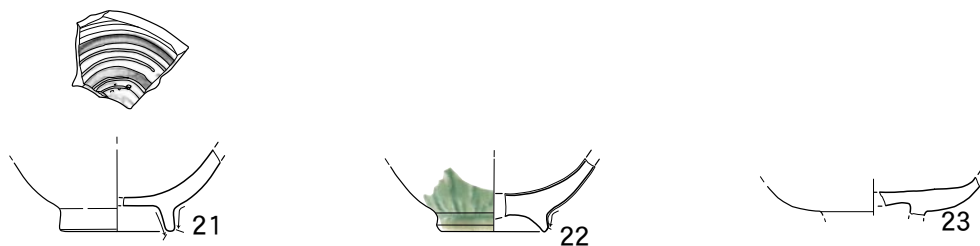
出土地		器種	近世										近代								小計	層集計	グリット集計				
			本磁				本陶						本磁				本陶										
グリット	層	部位	碗	皿	瓶	小杯	碗	皿	瓶	壺	すり鉢	碗	小碗	皿	小皿	瓶	壺(小)	杯	不明	小碗	皿	すり鉢					
3-5	不明	口										1												1	2	2	
		底										1															1
3-10	Ⅲ	口	1																					1	1	1	
4-1	Ⅱ	胴								1												1		2	2	4	
	Ⅲ	口									1													1	2		
		胴																	1					1			
4-2	不明	胴																						1	1	1	
4-3	Ⅱ	口									1													1	4	8	
		底									1	2												3			
	Ⅲ	口									1													1	3		
		胴																		1				1			
		底									1													1			
茶褐色砂層	口										1												1	1			
4-4	Ⅱ	口	1																					1	11	11	
		胴		1							5	1												7			
		底						1			1													2			
		口～底									1													1			
4-5	Ⅲ	口							1	1			2										4	15	15		
		胴	1								4								1		1		7				
		底	1								2	1											4				
4-6	Ⅲ	口						1			2	3									1	1	8	22	22		
		胴			1	1					2	1			1				1	2		3	12				
		底					1					1											2				
4-7	Ⅲ	胴																		1		1		2	3	3	
		底											1											1			
4-8	Ⅲ	胴											1									1		1	2	2	
		底											1											1			
4-9	Ⅲ	口	1								1	1												3	7	7	
		胴																				2		2			
		底										2												2			
4-10	Ⅱ	胴											1							1				2	2	9	
		Ⅲ	口	1							1													2			
	褐色土層	口									3													3	4		
		胴									1													1			
不明	表採	口									2									1				3	12	18	
		胴									3	1		1										5			
		底										1	1			1								3			
		口～底											1											1			
	茶褐色層	底								1	1												2	2			
	茶褐色土層	口～底												1										1	1		
不明	不明	口						1			1													2	3		
		底									1													1			
合計			6	1	1	1	1	1	2	1	2	40	9	14	1	2	1	2	7	1	9	1	103				

表24 近世・近代磁器観察一覧

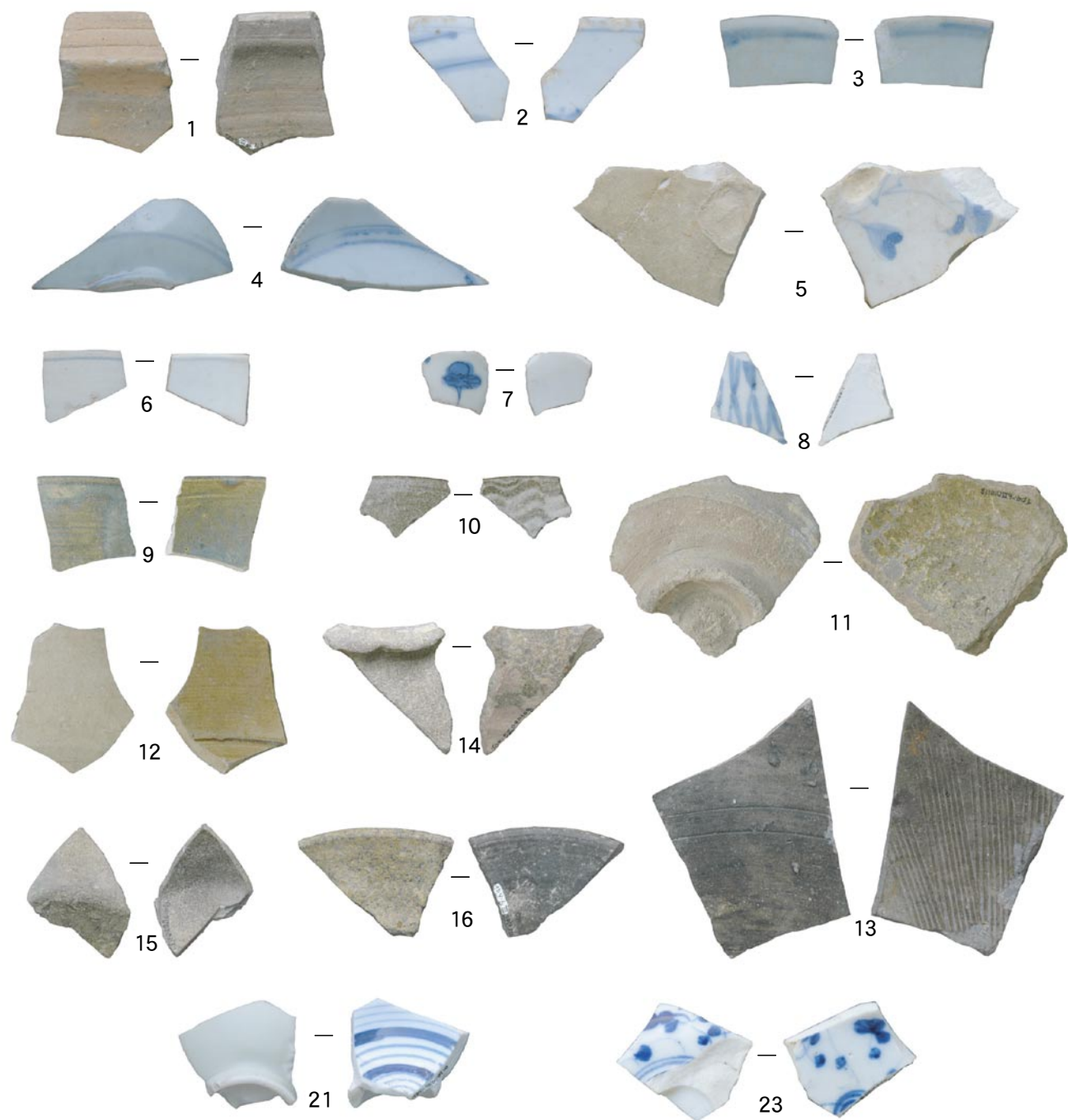
第 図 図版	番号	種類	種類備考	種別	部位	口径器高底 径 (cm)	観察事項	出土地
第 44 ・ 45 図 (図 版 33)	1	本土産陶器	備前焼	すり鉢	口縁部	口径:20.2	直口口縁「く」字状。文様:外唇-2条圏線。器色:外面-明茶色,内面-明灰褐色。釉:無釉。素地:明灰色。	4-5Ⅲ 001213
	2	本土産磁器	肥前磁器	碗	口縁部	口径:10.8	直口口縁。文様:外面-圏線,内面-圏線と草花文。呉須の発色:淡い。釉:白釉。	4-10Ⅲ 000901
	3	本土産磁器	肥前磁器か薩摩	碗	口縁部	口径:9.6	外反口縁。文様:外面-圏線,内面-圏線。呉須の発色:鈍い。釉:青白釉。素地:灰白。	4-4Ⅱ 010222
	4	本土産磁器	肥前磁器	碗	胴底部	底径:4.8	文様:外面-腰部に圏線,内底-圏線。呉須の発色:鈍い。釉:青白釉。	4-5Ⅲ 000919
	5	本土産磁器	肥前磁器	皿	胴部		文様:内底-草花文。釉:白釉。	4-4石敷遺構 000309
	6	本土産磁器	肥前磁器	碗	口縁部	口径:9.4	直口口縁。文様:内外面-圏線。呉須の発色:淡い。釉:失透青白釉。	4-9Ⅲ 010306
	7	本土産磁器		小杯	胴部	最大胴径:6.3	文様:外面-花文。呉須の発色:鮮やか。釉:青白釉。	4-6Ⅲ 000315
	8	本土産磁器	肥前磁器	瓶	胴部		文様:外面-網目文。呉須の発色:淡い。釉:青白釉。	4-6Ⅲ 000307
	9	本土産磁器	肥前磁器?	碗	口縁部	口径:8.6	直口口縁。釉:銅緑釉。	3-10Ⅲ 000303
	10	本土産陶器	唐津焼	皿	口縁部		外反口縁。文様:内面-刷毛文(白)。器面:口ク口。釉:暗茶釉。素地:暗褐色。	
	11	本土産陶器		碗	底部	底径:3.4	底-丸味。釉:外底(無釉)腰から底。素地:明茶。	4-6Ⅲ 010118
	12	本土産磁器		碗	胴部	最大胴径: 12.2	底部-「く」に曲がる。文様:内底-有。釉:外面-無釉,内面-黄褐色釉。素地:乳白。	4-5Ⅲ 000308
	13	本土産陶器		すり鉢	胴部		文様:外面-叩痕,内面-くし目幅12mm。釉:全体に鉄釉。素地:灰褐色。	4-1石列遺構 001107
	14	本土産陶器		壺	口縁部	口径:7.8	「く」字状に肥厚。釉:外面-施釉,内面-頸部。素地:灰褐色。	4-5Ⅲ 000308
	15	本土産陶器		瓶	底部	底径:6.8	ベタ底。器面:型。釉:外面-灰釉,内面-灰釉。素地:灰白,薄手3mm。	4-4Ⅱ 000313
	16	本土産陶器		瓶	口縁部	口径:7.8	外反口縁・アサガオ状。釉:外面-褐釉,内面-墨。素地:紫褐色。	4-6Ⅲ 001006
	17	本土産磁器	型紙摺り	碗	口縁部	口径:10.8	外反口縁。文様:外面-五弁窓に水仙文・地文・点刻文。呉須の発色:鮮やか。釉:青白釉。	表採 020213
	18	本土産磁器	型紙摺り	碗	口縁~底部	口径:10.8 器高:4.8 底径:4.0	外反口縁。文様:地文・内唇-樺文,外面-丸窓に菊花文+吉祥文,内底-菊花文。呉須の発色:鮮やか。量付無釉。素地:白。	4-4Ⅱ 001129
	19	本土産磁器	型紙摺り	碗	底部	底径:3.8	文様:外面-ひし形窓・丸文,内底-圏線・花文・目痕有り。呉須の発色:鮮やか。釉:青白釉,量付無釉。	4-3Ⅱ 000925
	20	本土産磁器	型紙摺り	皿	底部	底径:4.8	文様:内底-地文(点刻文)日の丸+丸窓(海軍旗)。呉須の発色:鮮やか。釉:青白釉,量付無釉。	4-8Ⅲ 000711
	21	本土産磁器	クロム青磁	碗	底部	底径:3.75	文様:内面-圏線。釉:外面-青釉,外底-白釉かけわけ,量付無釉。素地:白。	4-9Ⅲ 000310
	22	本土産磁器	クロム青磁	小碗	底部	底径:3.5	文様:外面-トビガンナ。釉:外底-無釉。素地:白。	4-9Ⅲ 000307
	23	本土産磁器		小碗	底部	底径:3.25	文様:内外面-唐草文。呉須の発色:鮮やか。釉:青白釉。	4-6淡灰色土層 000307



第44図 近世・近代磁器1



第45図 近世・近代磁器2



図版33 近世・近代磁器(写真は50%縮小)

15. 骨製品

板状と棒状及びキズありの3種がある。それぞれ6点、3点、3点の形12点の出土である。表25に観察一覧、第46図、図版34に示した。

以下、これらについて略述する。

a. 板状製品

平面の形状が半月形と方形があり、半月形は5点、方形は1点の出土である。

半月形はまた、孔を有するもの（2点）、無孔のもの（2点）があり、不明（1点）がある。また、有孔が2点、無孔が2点、不明1点あり、孔は径1mmとかなり小さいもので、他の製品（図8）にも同じような孔が施されている。

図2は両面とも端を顕著に研磨、薄くなり、図3は弧状の両端が縦位に研磨に顕著され、両端が細くなる点で共通することから、製品の用途と関連するものと思われる。半月のものはグラフに示したように、本遺跡出土のものは幅が広いものと細いものがある。

類例は後兼久原遺跡、伊原遺跡（1986）や住屋遺跡（1992）でも出土するが、幅は細く、孔は見られない。

b. 棒状製品

イノシシの四肢骨を半裁したもの（図7）とウシの四肢骨を板状に加工したもの（図8）がある。前者は半裁した面のみを研磨あるいは摩耗したもので、骨の形状から大腿骨のようである。後者は半月状製品と同じくウシの四肢骨を板状に加工したものである。素材はほとんどがウシ骨であること、出土場所も4-5、6,8グリッドを考慮するとグスク期の遺物と判断される。

c. キズあり

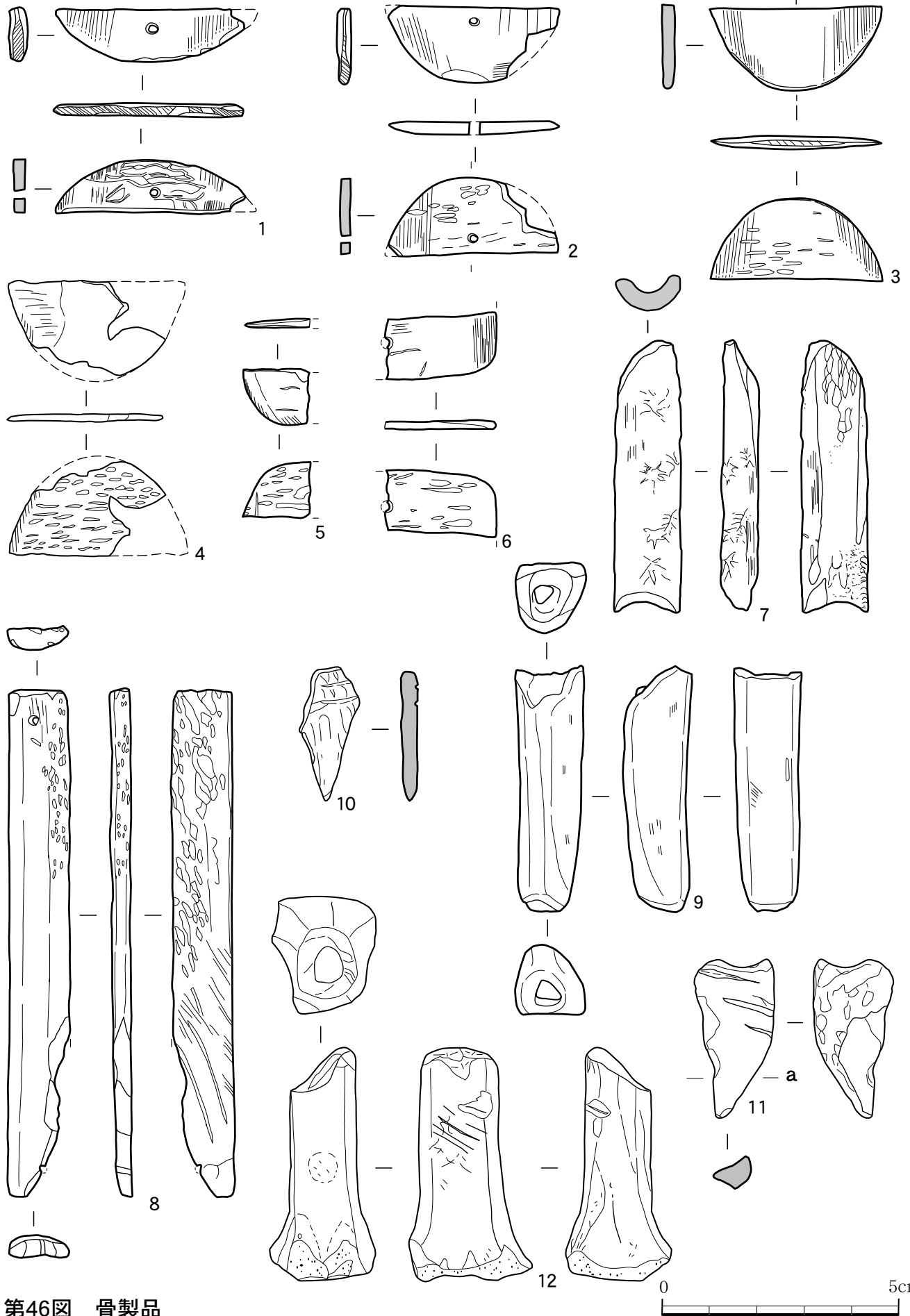
図10～12はイノシシ・ウシの四肢骨に幅1～2mmのキズを有するもので、製品の製作が解体する為のものと思われる。

《参考文献》

- 大城慧・島袋洋他「伊原遺跡」『沖縄県文化財調査報告書』第73集沖縄県教育委員会 1986年
砂辺和正「住屋遺跡」『平良市文化財報告書』第2集平良市教育委員会 1992年
山城安生「後兼久原遺跡」『北谷町文化財調査報告書』第21集北谷町教育委員会 2003年

表25 骨製品観察一覧

第 図 図版	報番号	製品	種類	完破	縦(mm)	横(mm)	幅(mm)	重さ(g)	観察事項	出土地
第 46 図 (図 版 34)	1	板状 半月	ウシ 四肢骨	完形	39.8	11	2.8	1.07	表面研磨。径1mmまっすぐ	不明
	2	板状 半月	ウシ 四肢骨	ほぼ完形	42.3	16	2.6	1.22	表面を縦に研磨。両端は研磨で薄くなる。上面は斜め方向に研磨痕、明瞭。径1mmまっすぐ	4-6 黒色砂質土層落ち込み 001031
	3	板状 半月	ウシ 四肢骨	完形	35.5	17	2.2	1.7	表面を縦に研磨。両端の研磨、顕著。上面は斜め方向に研磨痕、明瞭。	4-6 柱穴 6052 001116
	4	板状 半月	ウシ 四肢骨	破	25.2	17.6	1.6	0.68	表面研磨。海綿も研磨。	4-8 010322
	5	板状 半月	ウシ 四肢骨	破	14.1	11.7	2.3	0.32	表面の研磨方向は斜めと縦。海綿体露出。縁も研磨。	4-5-6 灰黒色砂質土層 趾除去 010209
	6	板状 方形	ウシ 四肢骨	破	22.9	12.8	1.7	0.53	表面の研磨方向は横	4-5 柱穴 5209
	7	棒状 半管状	イノシシ 四肢骨	破	57.5	13.5	7.8	4.32	表裏面とも自然。縁も研磨。	4-5 柱穴 5079 001106
	8	棒状 板状	ウシ 四肢骨	破	107	12	4	6.41	表裏面とも研磨。裏面は斜めに研磨。縁も研磨。径1mm	4-8
	9	棒状製品 管状	イノシシ 脛骨近位部	ほぼ完形	52	16	8	7.4	脛骨の稜部分を摩耗。両端研磨。	4-5 2号炉 010219
	10	未製品 キズ	イノシシ 四肢骨	破	2	11	3.5	0.84	キズ、二カ所、間隔は4mm。	4-6-7 010119
	11	未製品 キズ	イノシシ 四肢骨	破	34	17.2	9	1.53	キズ、三カ所、間隔5mm。	不明
	12	未製品 キズ	イノシシ 大腿骨L遠位部	破	49	23	15.03	11.32	側面にキズあり。	4-6 001006



第46図 骨製品



図版34 骨製品

0 5cm

16. 貝製品

本遺跡出土の貝製品は貝符1点およびその未製品1点、貝小玉（マガキガイ2点、小形イモガイ1点）、二枚貝研磨有孔製品1点、貝輪およびその未製品（オオツタノハ2点、シャコガイ1点、ゴホウラ2点）、また、ゴホウラは自然貝9点、有孔製品1点、二枚貝有孔製品は72点、タカラガイ製品は152点、ホラガイ有孔製品1点、ヤコウガイの螺蓋製貝斧3点、貝匙6点、その残存部が1点、ボタン状製品1点、クモガイの貝匙3点、スイジガイ製品1点、及び未製品1点、シャコガイ未製品1点、リュウキュウザルガイ1点の計262点出土した。

表26に出土量、表27に観察一覧、第47～50図・図版35～38に主な遺物を図示した。観察一覧は図示した以外のもも含め、提示した。

a. 貝符（第47図1・2）

図1は大型イモガイを板状に切り取り、符状にしたもので、破損品である。イモガイの肩部を利用、外面に文様が彫られている。貝は風化が強く、文様は明瞭でないが、広田上層タイプに分類される。3-5で出土。

図2はアンボンクロザメの体層部で、肩部から体層にかけて方形状に切り取ったもので、貝符の未製品と考えられる。貝色は残る。4-2黒色混貝土層で出土した。

b. 貝小玉

マガキガイあるいは小形イモガイの螺塔を利用したものである。図3・3aはマガキガイで、図3aは螺塔部を打割で穿孔し、体層面も打割調整で平らにしたものである。図4は小形イモガイで、後者の方が丁寧に研磨され、研磨面は丸味をおびる。

c. 二枚貝研磨有孔製品

図5はハマグリ類の殻頂に研磨を施し、腹縁に剥離を施すものである。4-4戦前石列遺構掘り下げ時に出土。用途は不明。

d. ボタン状製品

図6は完形でヤコウガイの殻を直径18mm、厚さ3mmの円盤状に加工、その中央に径2mmの小孔を平行に2個穿ったものでボタンである。また、裏面に径7mmの段差をつける。表面にヤコウガイの外殻が確認され、他は真珠層が露出する。孔は内外径の大きさが同じであることから、機械による穿孔と推定され、近現代に属するものと思われる。類例はチヂフチャー洞穴遺跡（1998）で出土している。4-10褐色土層（0～10cm）で出土。

e. 貝輪および未製品

貝輪及び未製品はオオツタノハ2点、シャコガイ1点、ゴホウラ5点出土した。

図7と8はオオツタノハの貝輪である。図7は外縁側は破損し、外殻および内縁は丁寧に研磨される。図8は前者よりは小さいが研磨は顕著である。前者が4-4石敷遺構、後者が4-3淡茶白色砂層（二次堆積）の出土である。

図9はヒメジャコガイの腹縁を用いたものである。外面は研磨が著しい。幅は1.2mmと一定しており、貝輪に用いたものと思われる。

図10はゴホウラの背面型の貝輪である。他に製品が2点出土している。また、ゴホウラの未製品は自然貝に近いもの2点、自然貝が6点出土している。

図13は殻頂部分で殻軸に沿うように打割を施すもので、貝輪の未製品と考えられるが表面は

へび貝が付着している。3-8淡灰緑色土の出土。図12は袖部で下部に打割が残り、へび貝が付着する。4-4遺構掘り下げで出土。図11は腹面利用のもので内縁に打ち割りが確認される。4-2淡灰黒色上部の出土。他にゴホウラの袖部が7点、殻頂3点の計10点出土している。

f. ヤコウガイ螺蓋貝斧

ヤコウガイの蓋の薄い部分を数回打ち割りし、刃状にしたもので、3個出土した。出土地は4-1淡灰黒色土で2個（図26・27）、4-3黒色混貝土の二次堆積で1個である。いずれも剥離は顕著に見られる。剥離は使用の結果、生じたともとれる。図26の方が風化気味である。

g. 貝匙

ヤコウガイ（図20～24）

ヤコウガイの貝殻を器状に切り取ったものである。図20・22・23は身の部分で湾曲が強いことから小形のヤコウガイを用いたと思われる。内面あるいは外面は真珠層が露出する。後者は縁の研磨が顕著である。図22は4-5柱穴5053から出土。

図24は柄の部分と考えられ、縁を直線状に加工したものである。小形のヤコウガイを利用。

類例は久米島カンジン原古墓群、宜野湾市喜友名前原第一古墓群などの近世墓で出土。

アバタが見られる。新しい時期のものか。貝殻の中には打割の残ったものの中にはへび貝が付着したものもある。

h. ホラガイ製容器

図25はホラガイの内唇に径20mm前後の粗孔を1つ施したもので、民俗事例の「ホラガイ薬罐」（上江洲1973）に酷似する。

背面は被熱を受けたためか、大きく破損する。4-1と4-2の黒色混貝土層でそれぞれ1点ずつ出土している。

i. 未製品

図29は大型のシャコガイの殻頂近くを約7.0×5.5cmの方形、厚さ3.5cmに切り取り、その周縁を研磨したものである。研磨は顕著であるが、これまでに類例がなく、どのような製品になるかは不明である。

j. 二枚貝有孔製品

二枚貝の殻頂およびその近くに粗孔を施したものである。本製品は穿孔という単純な加工であるため、自然貝の中には偶発的にできた孔も多々見られる。これらと区別するため、本報告では下記の条件のうち、いずれか、2つ以上の条件を満たすものを「二枚貝有孔製品」として扱った。（拝山遺跡1987）

①孔の穿孔時に複数の打割が見られること

②孔は複孔（孔の輪郭に切り合い）であること

③腹縁に複数の打割がみられること

出土した貝種はメンガイ20個（図34～38）、ウミギクガイ2個、カネツケザルガイ（図32）1個、カワラガイ（図31）、1個、リュウキュウザルガイ1個、リュウキュウサルボオ15個（図39～42）、シラナミガイ（図59）3個、ヒメジャコ（図43～58・60）25個、ソメワケグリ1個（図33）、リュウキュウマスオ3個、計72個である。

出土地別にみると4-1で15個、4-2で14個、4-6で14個、4-5で8個の順で多くなる（グラフ3）。

これらを重量別にみると0～10gが20個、10～19gが19個、20～30gが18個とそのほとんどは

30g以下である。その中でもヒメジャコガイがどの重さでも出土量が多く、シャコガイの小型化になるのが特徴的である。(グラフ4)

図39～42はリュウキュウサルボオで13個出土した。本貝は穿孔の位置が主に殻頂に多い。図41は腹縁に赤褐色が色素が付着しており、朱色か焼土(図6)の可能性が考えられる。3-7の出土。

図34～38はメンガイ類の貝で、19個出土した。図30・38は殻頂の摩耗が著しくヒモズレの可能性が考えられ、前者はさらに腹縁も摩耗する。

図32はカネツケザルガイで貝全体が摩耗するものである。

図43～58・60はヒメジャコで、図49は他と異なり、穿孔方向が外殻→内殻である。図58はやや大きめの貝を用いているが、腹縁を打割調整して殻を小さくしている。図52は腹縁を全縁加工、前背縁に近いところに穿孔する。図50は孔の位置が中前で、他の製品とは異なる。図43二枚貝有孔製品のヒメジャコの中で最も小さく、5.90gを測る。図48は孔の上部の貝の放射肋がはげていることからヒモズレの可能性がある。図55は大きい貝殻であるが、腹縁を全縁カットして重さを調整しているようである。図61も腹縁の加工が顕著に見られるものである。

図59はシラナミで、孔の穿孔が丁寧でその周縁摩耗することから使用痕の可能性はある。

図30はカワラガイで1個出土した。4-2から出土、本品は大原第2貝塚(1980)、百名第2貝塚(1981)など縄文後期から出土。孔の穿孔も丁寧である。装飾的な要素が想定される。

k. タカラガイ製品(図14～図18)

キイロダカラ、ハナビラダカラ、ハナマルユキ、ヤクシマダカラなどが加工されている。加工は背面を除去するもの(図14～18)と背面に粗孔を施すもの(図19)がある。前者に用いる貝種はキイロダカラ、ハナマルユキ、ハナビラダカラ、ハナマルユキ、後者はヤクシマダカラの1点である。

・背面を除去するもの

背面を除去し製品とするものにはキイロダカラやハナビラダカラのように装飾的要素の高いものとハナマルユキのように漁網錘(上江洲1973)がある。

ハナマルユキは70点出土した。出土地別にみるとグラフ6に示したように4-6、4-5に多い。これは4-5・6がグスク期の遺物を多く得られているところでタカラガイ製漁網錘の出現の時期とも一致するものである。

同じように背面を除去したものにハナビラダカラは53点、キイロダカラ(図14・15)5点がある。

これらの貝類は、勝連城跡(1990)でも見られる。用途については前述のハナマルユキ同様、漁網錘なのか他の用途になるかは検討する必要がある。

・粗孔を施すもの

図19はヤクシマダカラの背面の殻口側に粗孔を施したものである。貝殻は色が残り、外面から内面に穿孔するもので、楕円を呈する。重さ34gを測る。No.5トレンチ淡灰黒色砂混じり土最下で出土。類例は勝連城跡(1990)や久米島のカンジン原古墓群(2001)などグスク時代や近世で見られる。

l. クモガイ製品

図示は省略するが、体層を半裁したもので、これまで匙状製品と報告されてきたもので、3点出

土した。製品かどうかは若干疑問が残る資料である。4-2淡灰黒色上、4-1黒色混貝土層、4-9灰色砂混じり土（黄色土下）で出土している。

m. スイジガイ製品

図28はスイジガイの突起部分で突起⑥（上原分類）は半欠し、人工か自然か判断できない。赤褐色物質が付着しているので図示した。4-3では焼土が多量出土しており、その付着の可能性が高い。

まとめ

二枚貝有孔製品ではヒメジャコの貝が小さくなるようで、チヂフチャー洞穴遺跡での同様な資料が報告されている。自然貝でもグスク期にはシャコガイが小さくなる（伊原遺跡1986）ため、採集される貝が小さくなったために、起因するか。

ヤコウガイ製貝匙も小さい貝を利用したものが出土している。グスク期は自然貝も小さくなるようである。

参考文献

- 安里嗣淳・上原 静・大城秀子ほか「沖縄県玉城村 百名第二貝塚の試掘調査」『沖縄県文化財調査報告書』第38集沖縄県教育委員会1981年
- 安里嗣淳・座間味政光・大田宏好 「拝山遺跡－沖縄自動車道（石川～那覇間）建設工事に伴う緊急発掘調査報告書（5）－」『沖縄県文化財調査報告書』第83集沖縄県教育委員会 1987年
- 上江洲 均 『沖縄の民具』慶友社 1973年
- 上原 静・盛本 勲・内間 靖「勝連城跡－北貝塚、二の郭および三の郭の遺構調査－(1)」『勝連村の文化財』第11集勝連村教育委員会 1990年
- 大城慧・島袋洋・島袋春美「伊原遺跡」『沖縄県文化財報告書』第73集 沖縄県沖縄県教育委員会 1986年
- 島袋春美 「奄美・沖縄諸島の漁網錘の形態的研究（その3）－考古資料－」『南島考古』第23号沖縄考古学会 2004年
- 城間肇・森田直哉ほか「喜友名後原・勢頭原丘陵墓群・喜友名前原第一古墓群」『宜野湾市文化財調査報告書 第40集』P宜野湾市教育委員会 2007年
- 当真嗣一・上原 静ほか「大原貝塚－久米島大原貝塚郡発掘調査報告－」『沖縄県文化財調査報告書』第32集沖縄県教育委員会 1980年
- 西銘 章・藤崎京・城間肇ほか 「ヤッチのガマ・カンジン原古墓群」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第6集』 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001年

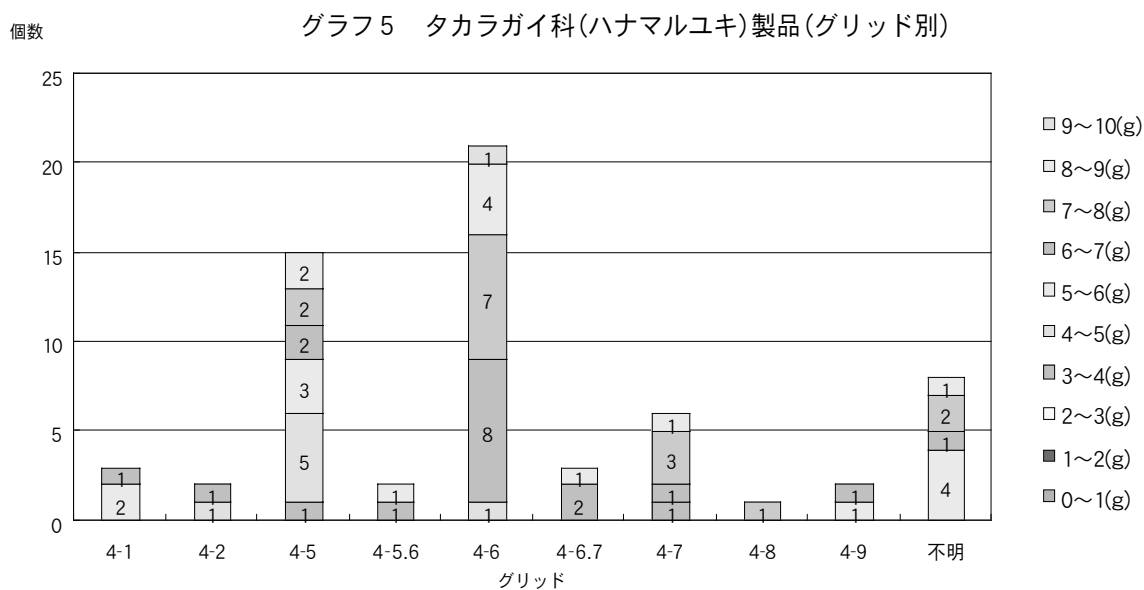
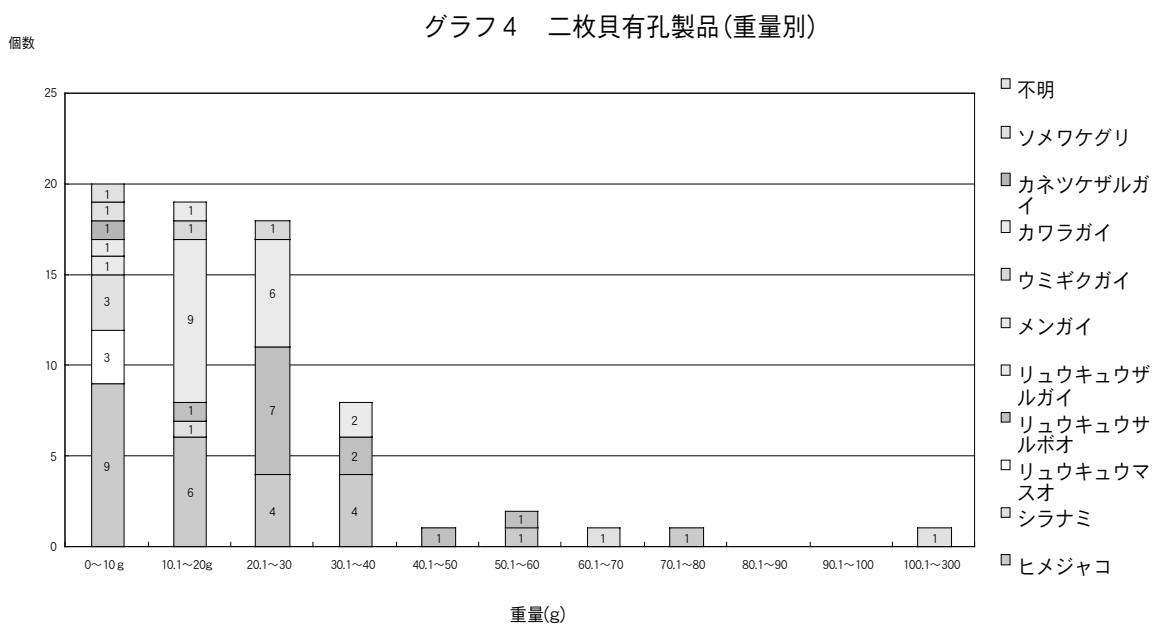
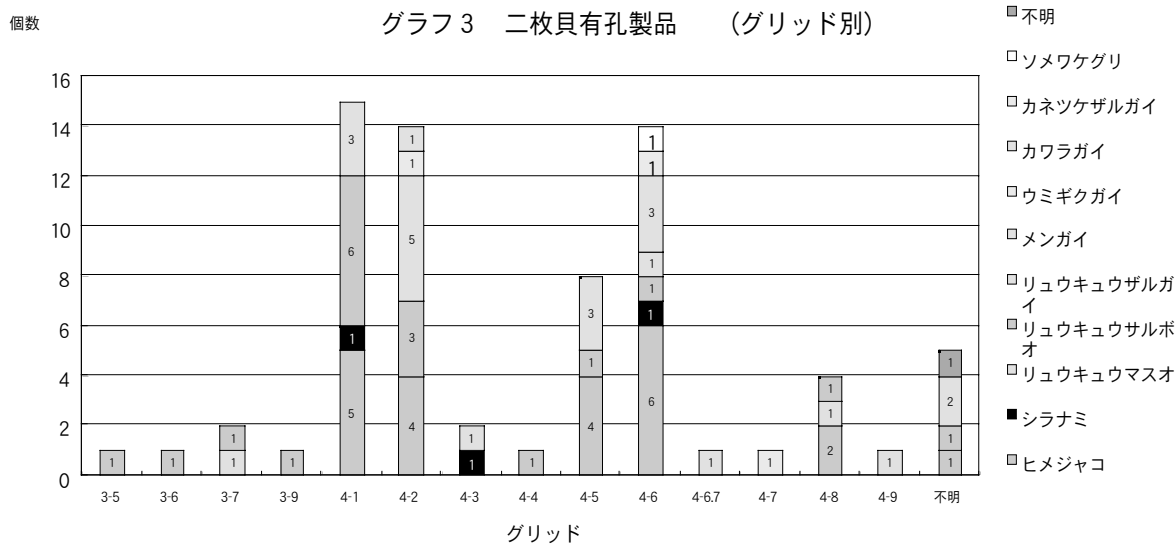
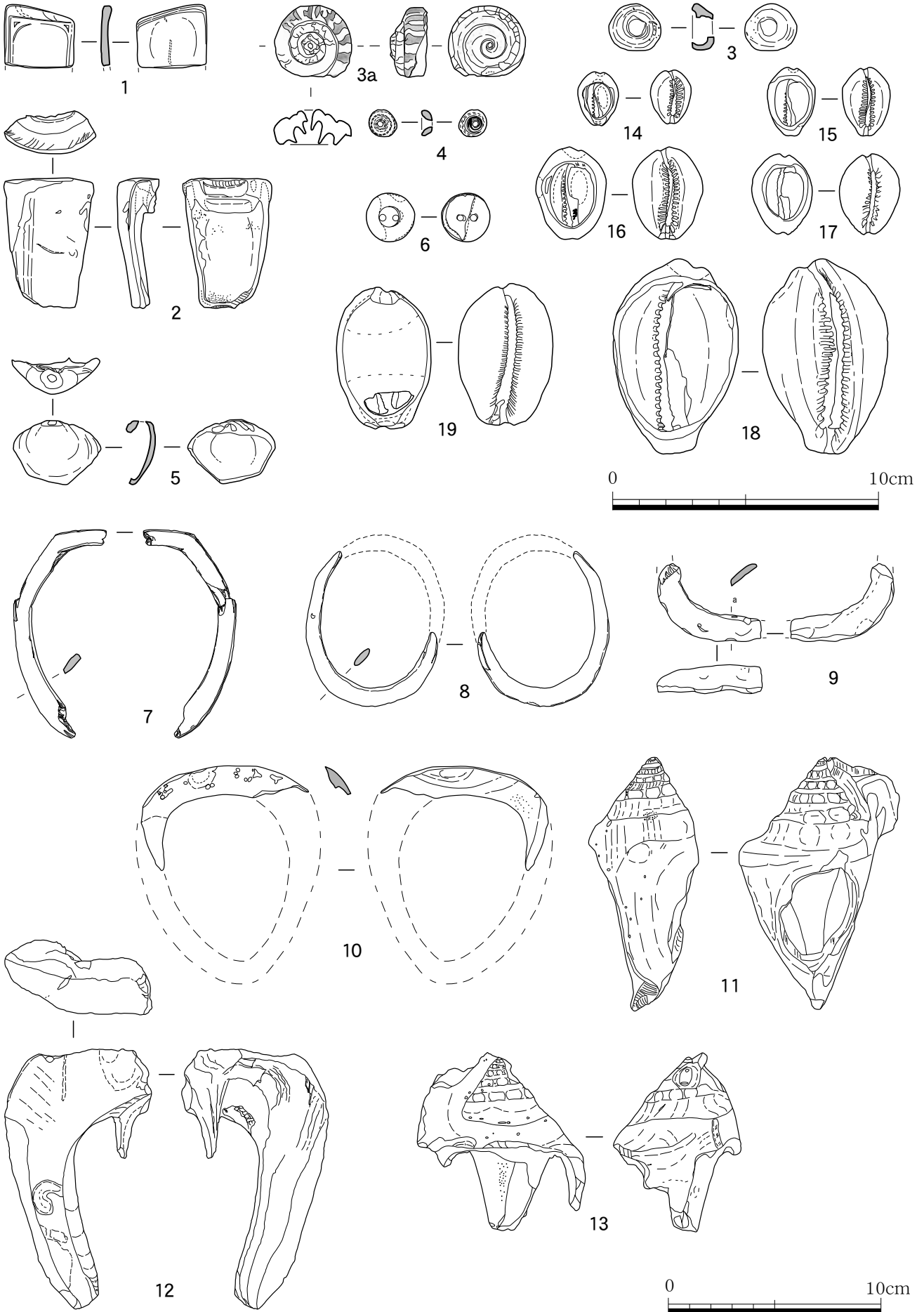


表27 貝製品観察一覧

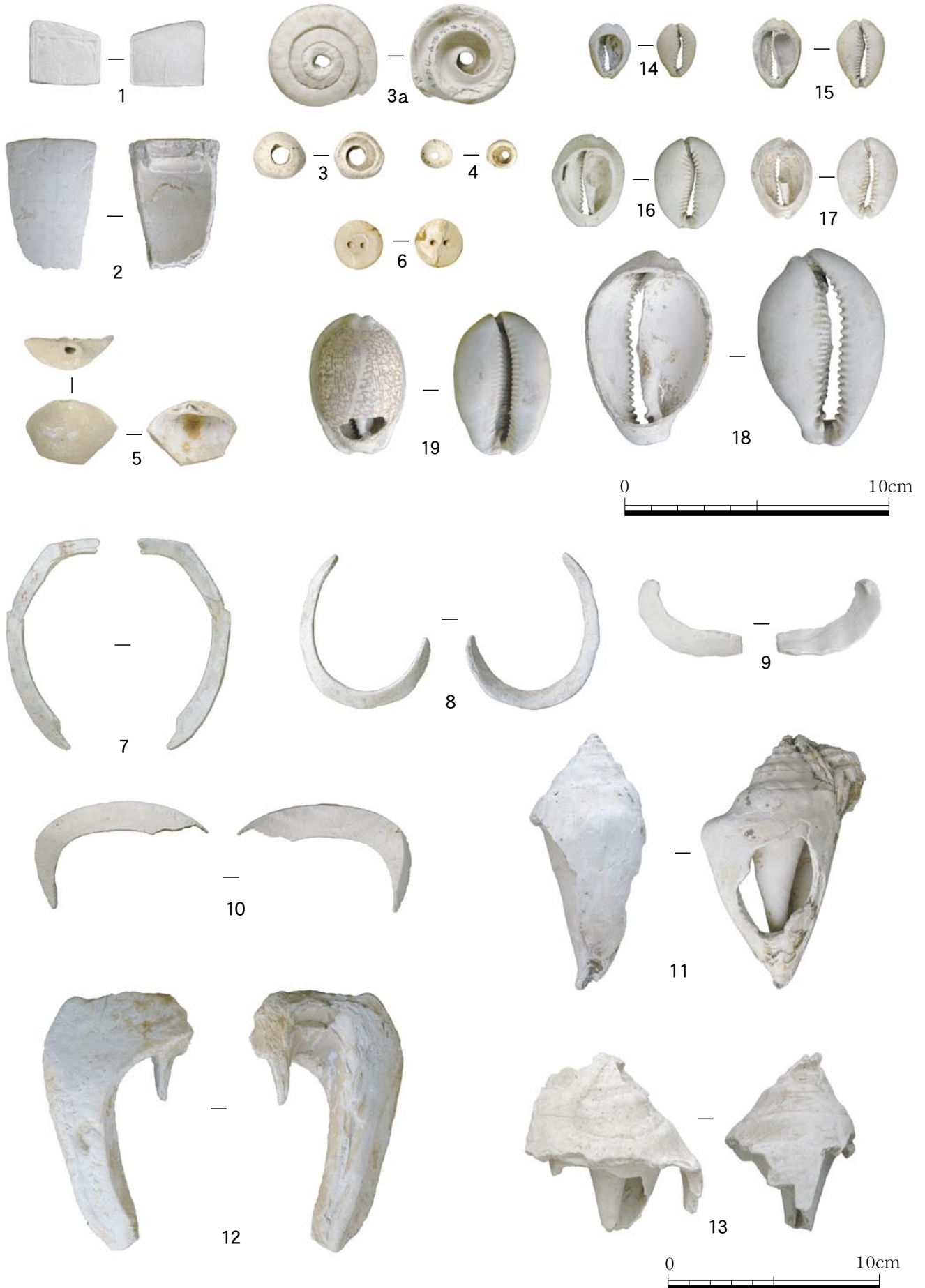
第 図	挿 図 番 号	貝 種	残 存	縦- 最 高 (mm)	横- 最 長 (mm)	重 量 (g)	観 察 事 項	グ リ ット	層 序
第 47 図 (図 版 35)	1	大形イモガイ	破	24	26	3.62	貝符	3-5	不明
	2	アンボンクロザメ	完	49	34	16.71	貝符未製品・貝色残・肩部を体層を方形に切り取る	4-2	黒色混貝土層
	3	マガキガイ	完	17.5	19	2.58	7ハがみられる・自然貝の穿孔を利用	4-6	灰色砂利層
	3a	マガキガイ	完	29	28	10.99	貝玉	4-6	淡灰黒色砂利層
	4	小型イモガイ	完	10	10.9	0.45	貝玉	4-2	不明
	5	ハマグリ類	完	15	32	4.19	殻頂研磨・腹縁剥離	4-4	石列遺構
	6	ヤコウガイ	完	18	18	1.67	孔径2mm・孔径2.5	4-10	褐色土層
	7	オオツタノハ	破	89		5.44	貝輪	4-4	石列遺構
	8	オオツタノハ	破			11	貝輪	4-3	淡茶褐色砂層
	9	ヒメジャコ	破			7.49	貝輪	4-5	淡灰色土層
	10	ゴホウラ	破			16	貝輪	4-1	淡灰黒色土層
	11	ゴホウラ	破	119	75	170	孔径38mm・孔径30mm・貝匙 腹面複孔	4-2	淡灰黒色土層
	12	ゴホウラ	破			195	ヘビ貝	4-4	石列遺構
13	ゴホウラ	破	83	79	132	ヘビ貝・殻軸に沿うように打割	3-8	淡灰緑色土層	
図 なし		ゴホウラ	破			43	風化	4-2	淡灰黒色土層
		ゴホウラ	破				アバタ	4-2	黒色混貝土層
		ゴホウラ	破			79	ヘビ貝	4-3	淡灰黒色砂質土層
		ゴホウラ	破			39	厚手・風化・×	4-4	石列遺構
		ゴホウラ	破			54	幼・風化・薄手・×		IV層
		ゴホウラ	破			10	7ハ・アバタ		不明
		ゴホウラ	破			20	薄手・7ハ・風化・7ハ・薄・粗い打ち割り	4-2	黒色混貝土層
		ゴホウラ	破			35	ヘビ貝-内唇に付着、風化	4-5	淡灰黒色土層
第 47 図 (図 版 35)	14	キイロダカラ	完	20	15	1.9	背面打割、殻軸有	4-6	淡灰黒色土層
	15	キイロダカラ	完	25	17	2.47	背面打割、殻軸有	4-7	黒褐色砂質土層
	16	ハナマルユキ	完	34	26	7.68	背面打割、殻軸有		淡灰黒色砂層
	17	ハナマルユキ	完	30	23	5.69	背面打割、殻軸有		淡灰黒色砂質土層
	図 なし		ハナマルユキ	完	31	23	5.9	軸半欠・やや風化	
		ハナマルユキ	完	31	26	9.67	軸有・縁に摩耗	4-8	淡灰黒色砂質土層
		ハナマルユキ	完	32	23	6.56	軸有・色残・単打	4-7	黒褐色砂質土層
		ハナマルユキ	完	32	24	7.1	軸有・殻口摩耗・整	3-7	III層
		ハナマルユキ	完	34	24	6.67	軸有・やや風化・殻頂摩耗		淡灰黒色砂質土層
第47図 (図 版 35)	18	ホシダカラ	完			39	背面打割、殻軸有		不明
第47図 (図 版 35)		ホシダカラ		84	53	47.6	背面打割、殻軸有	4-1	淡灰黒色土層
		ホシダカラ		84	55	51.47	背面打割、殻軸有	4-1	淡灰黒色土層
		ホシダカラ		77.9	54.2	48	背面打割、殻軸有	4-2	
		ホシダカラ							
第47図 (図 版 35)	19	ヤクシマダカラ	完	53	36	31.92	軸無	4-6	黒色砂質土層
図 なし		ヤクシマダカラ		55	35	34	孔径12mm・孔径16mm・殻口・複・外→内・楕円・色残		淡灰黒色砂質土層
		ハナヒラダカラ	完	23	16	1.94	軸有・色残	3-7	不明
		ハナヒラダカラ		26	19	3.63	軸半欠・色残・縁摩耗	4-7	淡灰黒色砂質土層
第 48 図 (図 版 36)	20	ヤコウガイ	破	49	32	6.26	側縁→打割・周縁を加工	4-7	淡灰色砂質土層
	21	ヤコウガイ	破	48	28	17	アバタ有・周縁を打割後研磨・周縁は打割後研磨	4-2	淡灰黒色土層
	22	ヤコウガイ	破	50.1	39	13	縁をていねいに加工	4-5	淡灰黒色土層
	23	ヤコウガイ	破	47.9	33.4	11.85	表-磨-下-磨-7ハ有・周縁加工	4-2	淡灰黒色土層
図 なし	24	ヤコウガイ	破	48	27	9	表-磨-測-磨-7ハ有・直・縁を加工	4-1	黒色混貝土層
		ヤコウガイ	完			189	アバタ、ヘビ貝付着・周縁に打ち割り		黒色砂質土層
		ヤコウガイ	破			8	測-打・外殻無、真珠層・外面研磨・摩耗	4-7	淡灰色砂質土層
第48図 (図 版 36)	26	ヤコウガイの蓋	完	68	72	132	風化切り未・溝縁を圧剥離	4-1	淡灰黒色土層
図 なし	27	ヤコウガイの蓋	完	68	74	130	残りがよい・薄い部分を打割る	4-1	淡灰黒色土層
		ヤコウガイの蓋	完	71	82	156	表-打・薄い部分を打ち割	4-3	黒色混貝土層
第48図 (図 版 36)	25	ホラガイ	破	102	218		孔径20mm・孔径18mm・楕円・風化・内厚に穿孔・殻頂破損、使用のためか	4-2	黒色混貝土層
図 なし	28	スイジガイ	破			39	赤土が付着・赤褐色の付着・⑥は折れる	4-3	石列遺構
		スイジガイ		70	41	38	7ハ	4-2	淡灰黒色土層
第48図 (図 版 36)	29	シャコガイ	破	73	54	180	研磨・打ち割・風化・殻頂側を研磨・周縁の一部を研磨	4-2	黒色混貝土層
図 なし		クモガイ	完	18	45	57	色残・3貝	4-1	黒色混貝土層
		クモガイ	完	69.8	38.9	26	・整・体層のみ、打割自然	4-9	灰色砂利層

表28 二枚具有孔製品観察一覧

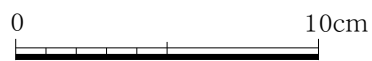
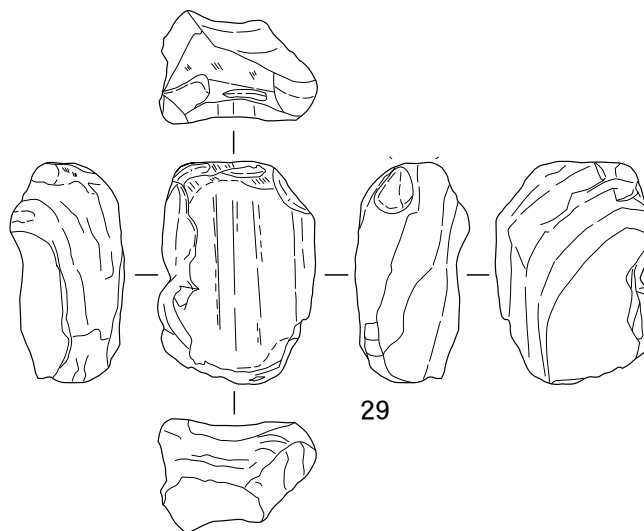
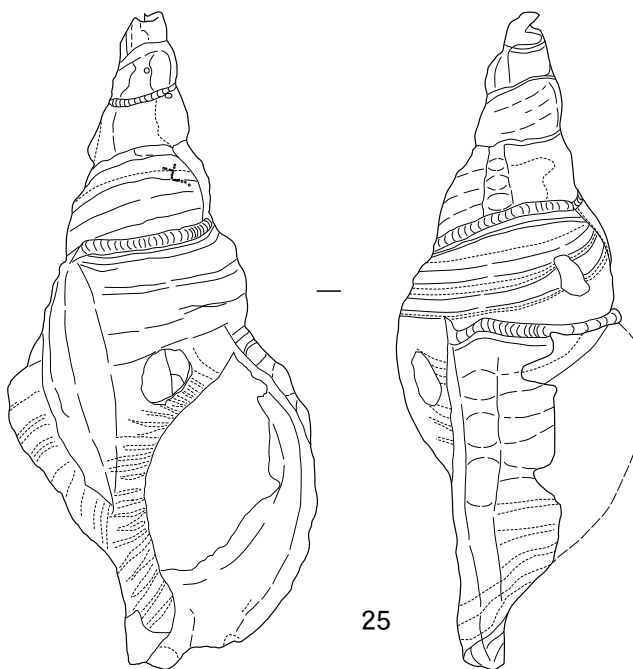
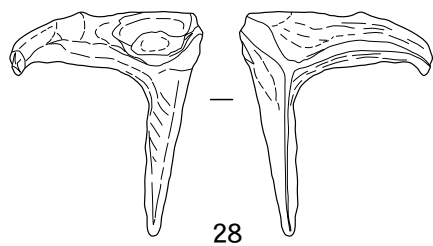
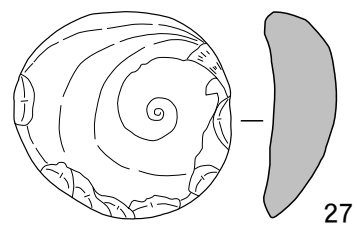
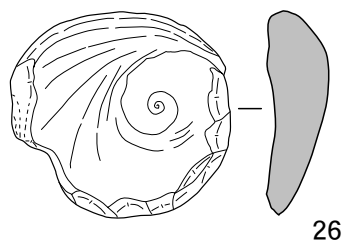
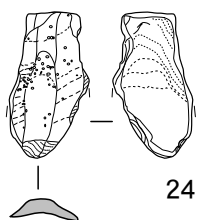
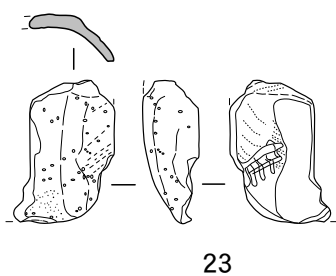
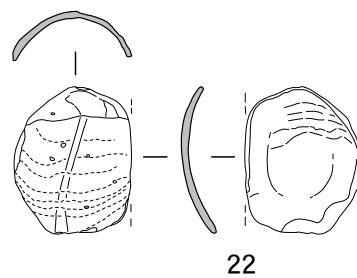
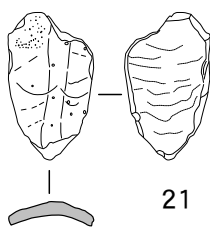
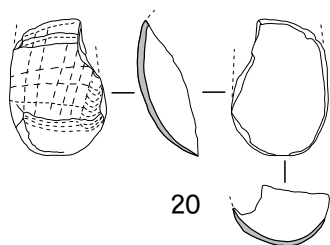
第図	挿図番号	貝種	左・右	現存	縦・殻高 (mm)	横・殻長 (mm)	重量 (g)	孔縦 (mm)	孔横 (mm)	孔位置	孔	孔加工	孔形	磨縁	殻の状況・加工	グリット	層序
第50図 (図版37)	43	ヒメジャコ	右	完	30	44	5.90	9	13	上前	複	内→外		前		4-8	淡灰黒色砂質土層
	44	ヒメジャコ	左	完	31	43	6.17	7	12	上前	複	内→外	横円	前		4-4	石列遺構
	45	ヒメジャコ		完	34	50	8.46	8	15		複			後背・中・前背		4-5	淡灰黒色土層
	46	ヒメジャコ	左	完	40	6.96	24.05									4-6	淡灰黒色土層
	47	ヒメジャコ	左	完	35	48	8.07	4	9	上前	複	内→外		×		4-2	淡灰黒色土層
	48	ヒメジャコ	左	完	44	67	19.98	6	9	上前	複	内→外	円形	×		4-5	淡灰黒色土層
	49	ヒメジャコ	左	完	39	60	12.93	7	17		複	外→内		×			不明
	50	ヒメジャコ	左	完	39	58	10.39	9	12	中前	複	内→外		×		4-1	黒色混貝土層
	51	ヒメジャコ	右	完	33	48	5.93	7	12	上前	複	内→外	長方形	×		4-2	黒色混貝土層
	52	ヒメジャコ	右	完	39	56	13.33	8	13	上前	複	内→外	全			4-6	淡灰黒色土層
	53	ヒメジャコ	右	完	42	63	14.22	10	17	上前	複	内→外	方形	×		4-2	黒色混貝土層
	54	ヒメジャコ	右	完	42	64	15.70	15	14	上前	複	内→外		×		4-6	淡灰黒色土層
	55	ヒメジャコ	右	完	52	68	21.48	15	26	上中	複	内→外	方形	全、顕著		4-2	淡灰黒色土層
	56	ヒメジャコ	右	完	52	70	25.68	11	17	上後	複	内→外	全	摩耗, 厚い・七折りか		3-6	不明
	57	ヒメジャコ	右	完	52	72	33.27	16	22	上前	複	内→外	丸	摩耗, 厚い	風化	4-5	石列遺構
	58	ヒメジャコ	左	完	54	68	34.00	13	17	上中	複	内→外	丸			3-5	不明
	60	ヒメジャコ	左	完	54	64	32.76	9	10	上前	複	内→外		×		4-6	黒色砂質土層
	61	ヒメジャコ	左	完	76	86	58.58	13	20	上前	複	内→外	方形	前→中		4-6	淡灰黒色砂質土層
図なし		ヒメジャコ			36	48	7.42	10	9							4-6	淡灰黒色土層
		ヒメジャコ	右		65	96	72.27	13	18				●	7/17		4-8	黒色砂質土層
		ヒメジャコ	左		54	80	22.16	10	13	上中	複		×	ややマモウ		4-1	淡灰黒色土層
		ヒメジャコ	左		37	56	9.90	5	13		複		×			4-1	淡灰黒色土層
		ヒメジャコ	左		33	53	6.88	9	14		複		×			4-1	淡灰黒色土層
		ヒメジャコ	右		61	93	38.04	15	20		複		×			4-5	不明
第49図 (図版37)	31	メンガイ	左	完	37	38	6.78	9	12	上中	複	内→外	不定形	全	摩耗, 厚い・孔上摩耗	4-5	淡灰黒色砂質土層
	34	メンガイ		完	69	63	33.95	15	22	上中	複					4-6	黒色砂質土層
	35	メンガイ		完	60	56	23.32	21	18	中中							不明
	36	メンガイ		完	58	66	28.12	29	29	中中	複						不明
	37	メンガイ	左	完	51	50	22.32	10	12	上中	複	内→外	方形	▲	摩耗, 厚い	4-6	淡灰黒色土層
	38	メンガイ	左	完	59	46	19.16	17	10	上中	複	内→外	不定形	×	上は摩耗, ひもずれか	4-2	黒色混貝土層
		メンガイ			56	54	20.34	15	15							4-6	淡灰黒色砂利層
図なし		メンガイ	左	完	61	57	18.51	14	12	上中	複	内→外	不定形	×	アバタ	4-2	黒色混貝土層
		メンガイ	左	完	42	50	10.1	11	8	上中	複	内→外	横円	後背・中・前背	孔縁, 殻頂側がシャープ	4-2	淡灰黒色土層
		メンガイ	左	完	51	45	13.68	21	18	上中	複	内→外	不定形	中	アバタ	4-3	茶色褐色砂層
		メンガイ	左	完	66	61	27.24	14	15	上中	複		▲	若干7/17		4-5	淡灰黒色土層
		メンガイ			52	49	24.42	9	11	上中	複		×	7/17有		4-1	黒色混貝土層
		メンガイ	右		69	56	31.64	15	15	上中	単		×			4-5	淡灰黒色土層
		メンガイ			46	46	11.87	12	15		複		×			4-9	褐色砂層
		メンガイ			59	52	17.77	20	19							4-1	淡灰黒色土層
		メンガイ	左		49	48	15.81	9	10	上中	複		●			4-2	黒色混貝土層
		メンガイ	左		53	48	18.04	10	10	上左	複		●	7/17・マモウ		4-2	淡灰黒色土層
		メンガイ			59	53	15.59	14	11	上中	単		×			4-1	黒色混貝土層
		ウミギクガイ	左	完	59	62	23.59	10	13	上中	複	内→外	横円	×		4-7	石列遺構
		ウミギクガイ	右		49	43	11.50	12	11		複		▲	7/17風化		4-2	黒色混貝土層
第50図 (図版38)	59	シラナミ	左	完	60	92	64.26	11	14	上後	単		×	やや風化孔の穿孔が丁寧, 周縁摩耗	4-6	淡灰黒色砂質土層	
図なし		シラナミ	左		50	78	19.37	8	7							4-3	石列遺構
		シラナミ	左		95	13.9	220	23	32							4-1	黒色混貝土層
		シラナミ	左	完	35	35	8.87	12	8	上中	単		×			4-6	淡灰黒色土層
第49図 (図版37)	30	カワラガイ	右	完	51	43	11.88	14	16	中中	単	内→外	円形	前剥離	やや風化	4-2	黒色混貝土層
	33	ソメワケグリ	右	完	30	30	4.38	5	7	上中	複	内→外	方形	×		4-6	淡灰黒色土層
	39	リュウキュウサルボオ	左	完	33	43	7.75	9	11							4-2	淡灰黒色土層
	40	リュウキュウサルボオ	右	完	38	46	7.95	9	8	上中	複	内→外		×		4-1	黒色混貝土層
	41	リュウキュウサルボオ		完	56	65	35.41	10	12	殻頂	単						不明
	42	リュウキュウサルボオ	左	完	45	65	23.63	18	20	殻頂	単	内→外		○		4-1	淡灰黒色土層
		リュウキュウサルボオ	右	完	47	56	13.99	30	23	上中	複	内→外	不定形	×	やや風化	4-2	黒色混貝土層
		リュウキュウサルボオ	右	完	56	78	45.15	20	19	殻頂	複	内→外	不定形	×	磨縁に未, 風化気味	3-7	不明
		リュウキュウサルボオ			44	65	24.13	20	25	殻頂	複	外→内	不定形	×	アバタ	3-9	不明
		リュウキュウサルボオ			54	77	55.15	12	14	殻頂	複			×	アバタ	4-1	黒色混貝土層
		リュウキュウサルボオ	右	完	45	65	24.85	16	25	上中	複	外→内	長方形	中		4-1	淡灰黒色土層
		リュウキュウサルボオ	左	完	49	62	25.4	12	15	殻頂	複	内→外	横円	×		4-2	黒色混貝土層
		リュウキュウサルボオ	右	完	43	62	28.85	12	17	殻頂	複	外→内	方形	×	アバタ	4-8	淡灰黒色砂質土層
		リュウキュウサルボオ	左	完	44	61	27.55	14	17	殻頂	複	内→外	方形	×		4-1	黒色混貝土層
図なし		リュウキュウサルボオ	左	完	49	67	29.02	11	14	殻頂	複	内→外	横円	中		4-1	淡灰黒色土層
		リュウキュウサルボオ	右	完	51	63	38.75	12	13	殻頂	複	内→外	横円	後背・中	アバタ	4-6	淡灰黒色砂質土層
		リュウキュウサルボオ	左	完	34	46	7.54	7	6	殻頂	複	外→内	横円	後背		4-5	淡灰黒色砂質土層
		リュウキュウマスオ	左	完	27	47	3.99	5	4	上中	単		×			4-8	黒色砂質土層
		リュウキュウマスオ	左	完	30	50	3.01	14	16		複		×			3-7	不明
		リュウキュウマスオ	左	完	25	52	2.75	7	6	上上	単		円形	●		4-6.7	淡灰黒色砂質土層
		リュウキュウザルガイ	左		43	42	5.91	16	13		複		方形	×		4-6	淡灰黒色砂利層
		メンガイ			50	37	8.65	12	10		複		×	7/17有			不明



第47図 貝製品1



図版35 貝製品1



第48図 貝製品2



20



21



22



23



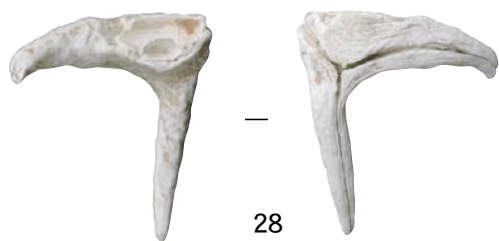
24



25



26



28



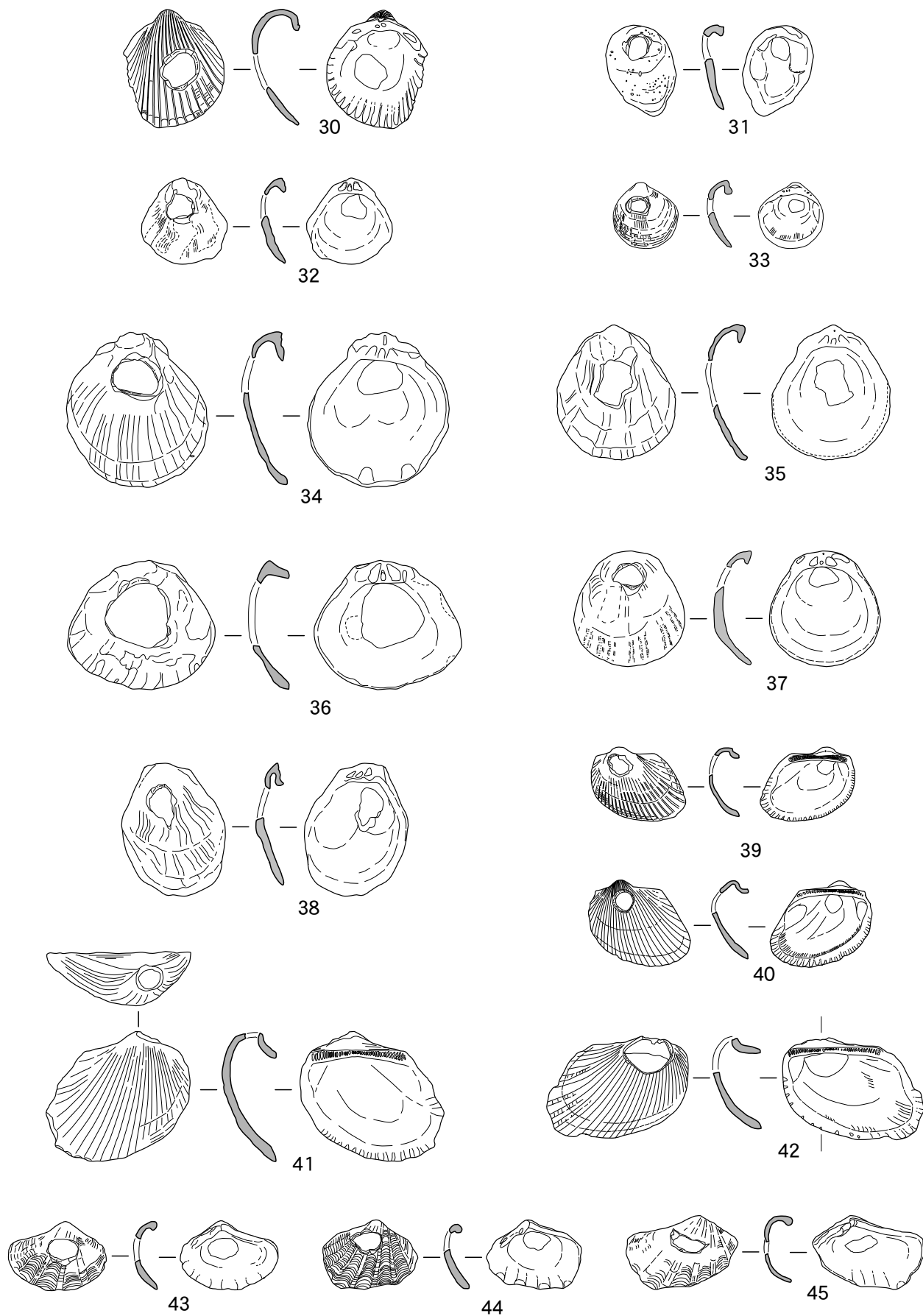
27



29



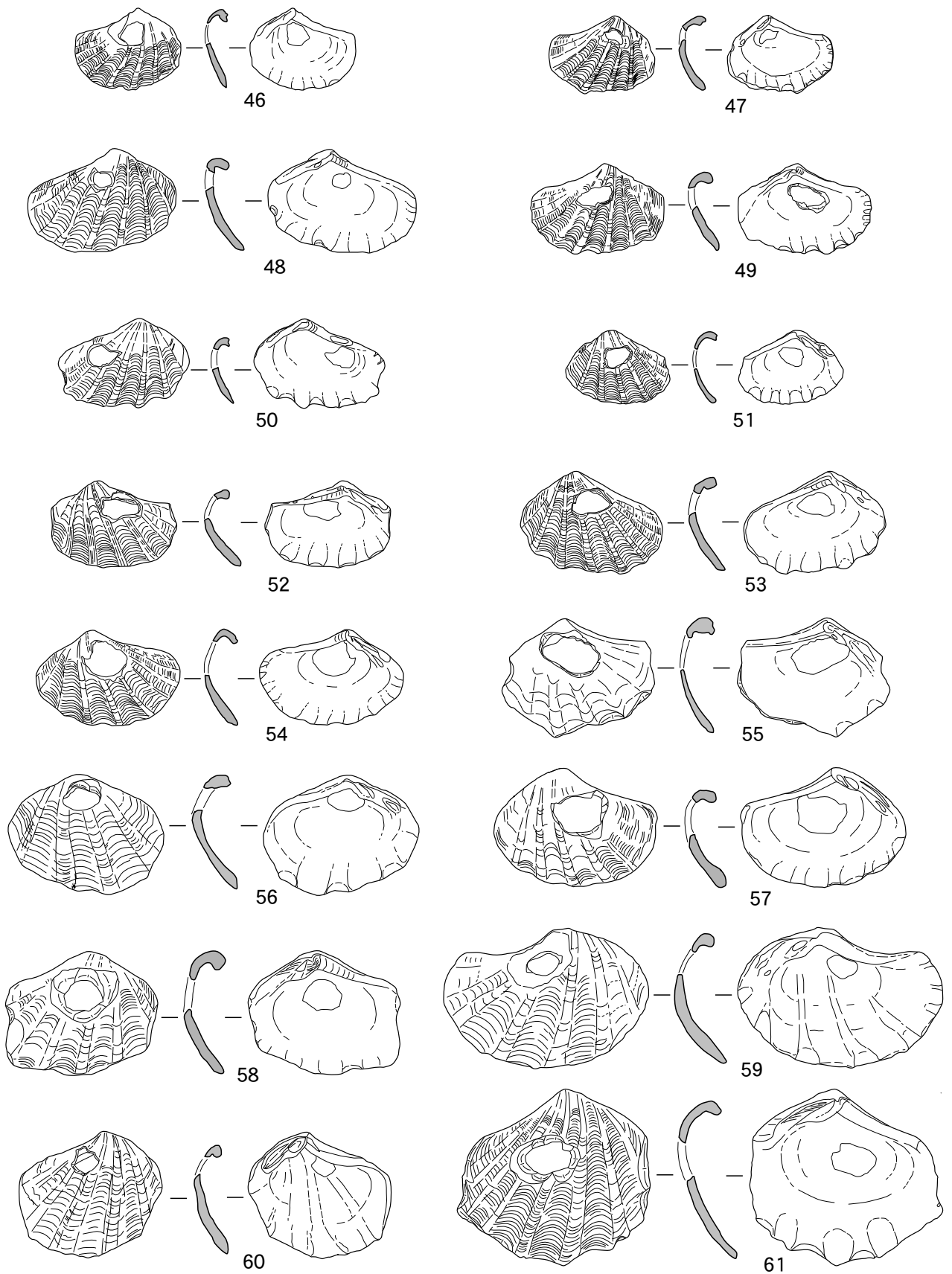
図版36 貝製品2



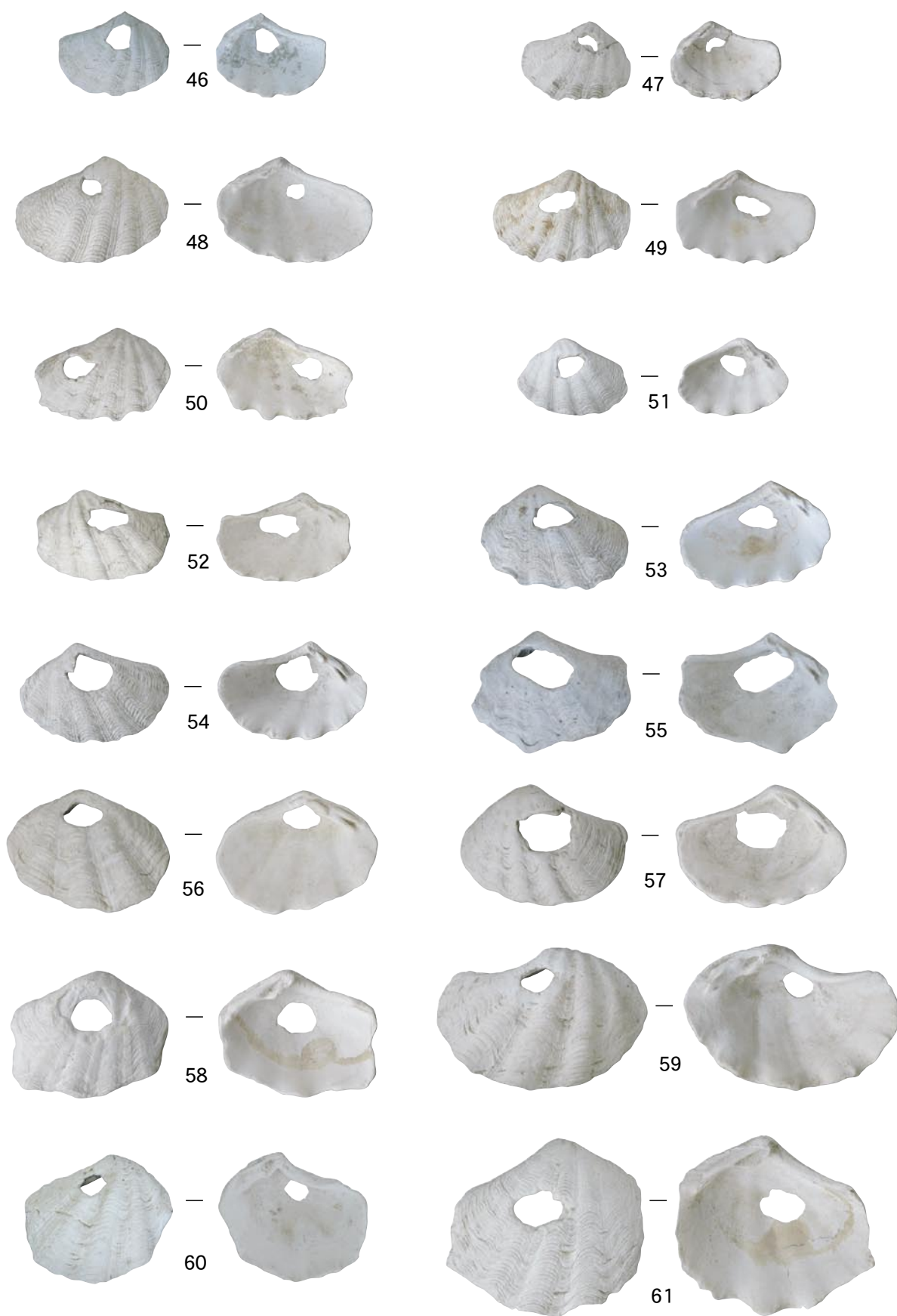
第49図 貝製品3



図版37 貝製品3



第50図 貝製品4



図版38 貝製品4

17. 石器・石製品（第51～55図・図版39～43）

石器及び石器片は総数99点出土している。確認できた器種は石斧、敲き石、凹み石、磨り石、石皿、砥石、円盤状製品、石製品、石球、未製品、用途不明、石器片である。また、煤付の石が出土しており、火炉などと何らかの関係があったかと思われる。

石器の素材としては、角閃石、黒色片岩、凝灰岩、砂岩、輝緑岩、細粒砂岩、千枚岩、石灰藻球の化石などが使用されている。砂岩を利用したものが多く、次いで輝緑岩、凝灰岩等が続く。グリッド毎に出土量を多い順に見てみると、4-5が17点、4-2が15点、4-1が14点、4-6が12点、4-4、4-8共に8点となっている。図化したものの詳細は観察表で述べる。

a. 石斧

石斧は6点出土した。半磨製石斧で、刃部を「両刃」、「片刃」、「刃部不明」に分けた。石材は、角閃石、黒色片岩、砂岩、凝灰岩である。

図1～3は半磨製石斧の両刃である。形状は、図1・2がバチ形、図3は短冊形である。図4は刃部不明である。

b. 敲き石

敲き石は、33点出土した。円礫を利用したものと握りやすいように加工されたものがあり、形状を「柱状」、「転用品」、「楕円形」、「隅丸方形」、「台形」、「不明」に分けた。石材は、輝緑岩、砂岩、凝灰岩である。図5は握りやすく加工された柱状の敲き石、図6は石斧からの転用品で、敲き石である。図7～12は楕円形、図13は台形である。

c. 凹み石

凹み石は4点出土した。図14・15は円礫を利用したもので、形状は「楕円形」、石材は砂岩である。

d. 磨り石

磨り石は6点出土した。円礫を利用したもので、形状を「円形」、「楕円形」、「不明」に分けた。石材は砂岩のみである。図16は磨り石で、形状は円形である。

e. 石皿

図17は円礫を使用した石皿で1点出土した。形状は「方形」で、石材は砂岩である。

f. 砥石

砥石は5点出土した。半磨製と円礫を利用したものに大別でき、形状を「台形」、「方形」、「柱状」、「楕円形」に分けた。石材は砂岩、凝灰岩、細粒砂岩である。図18は方形、図19・20は柱状である。図21は円礫を使用した楕円形の砥石である。

g. 未製品

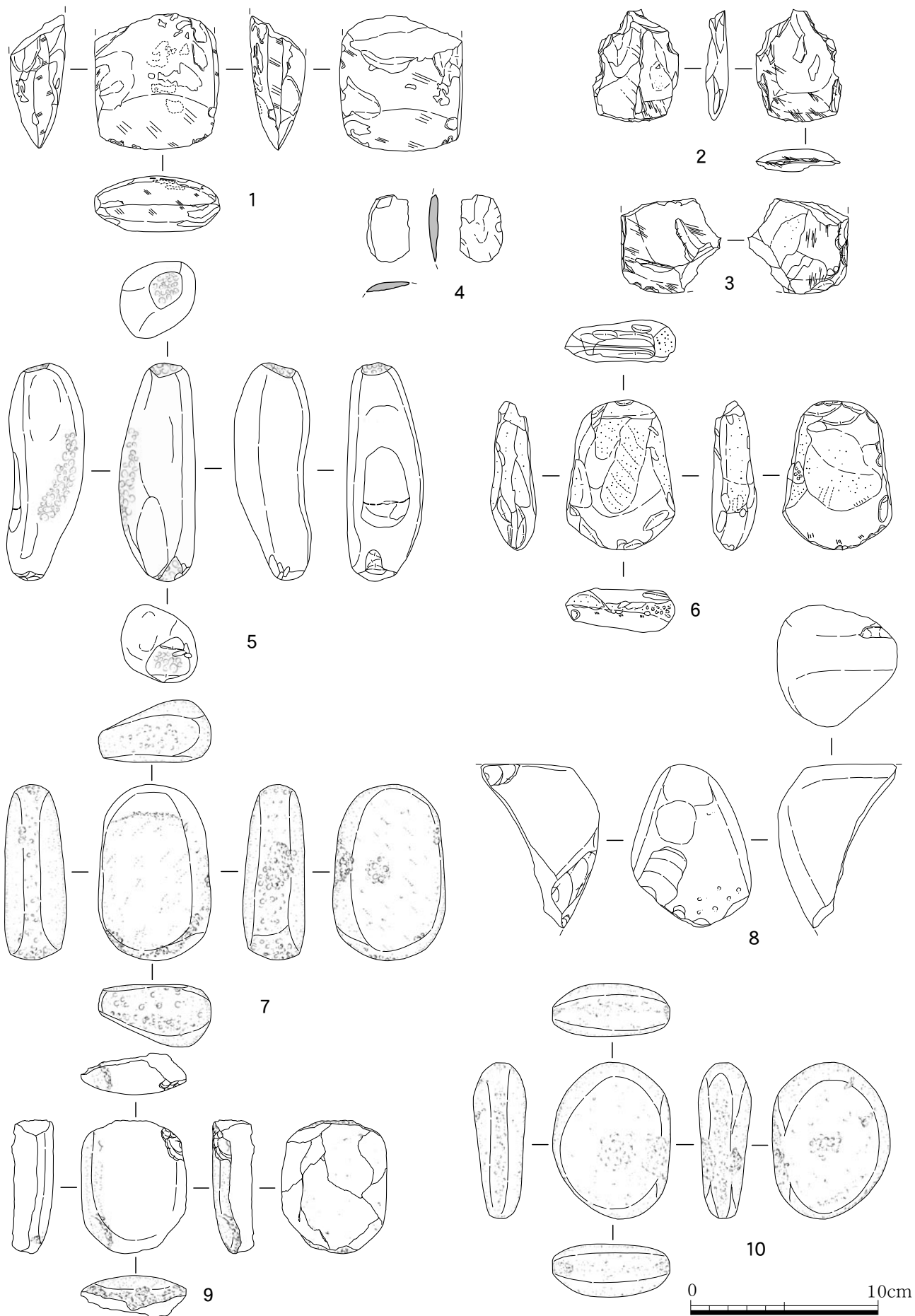
未製品は2点出土した。半磨製、打製に大別でき、形状は「楕円形」である。石材は砂岩、千枚岩である。図22は半磨製のもので未製品としたが、平面観は楕円形である。図23は打製未製品の楕円形である。

h. 用途不明

用途不明石器は17点出土した。円礫を利用したものと打製に大別でき、形状は「方形」、「台形」、「不明」である。使用用途が判然としないものを用途不明として扱った。形状は、図24

表30-1 石器観察一覧

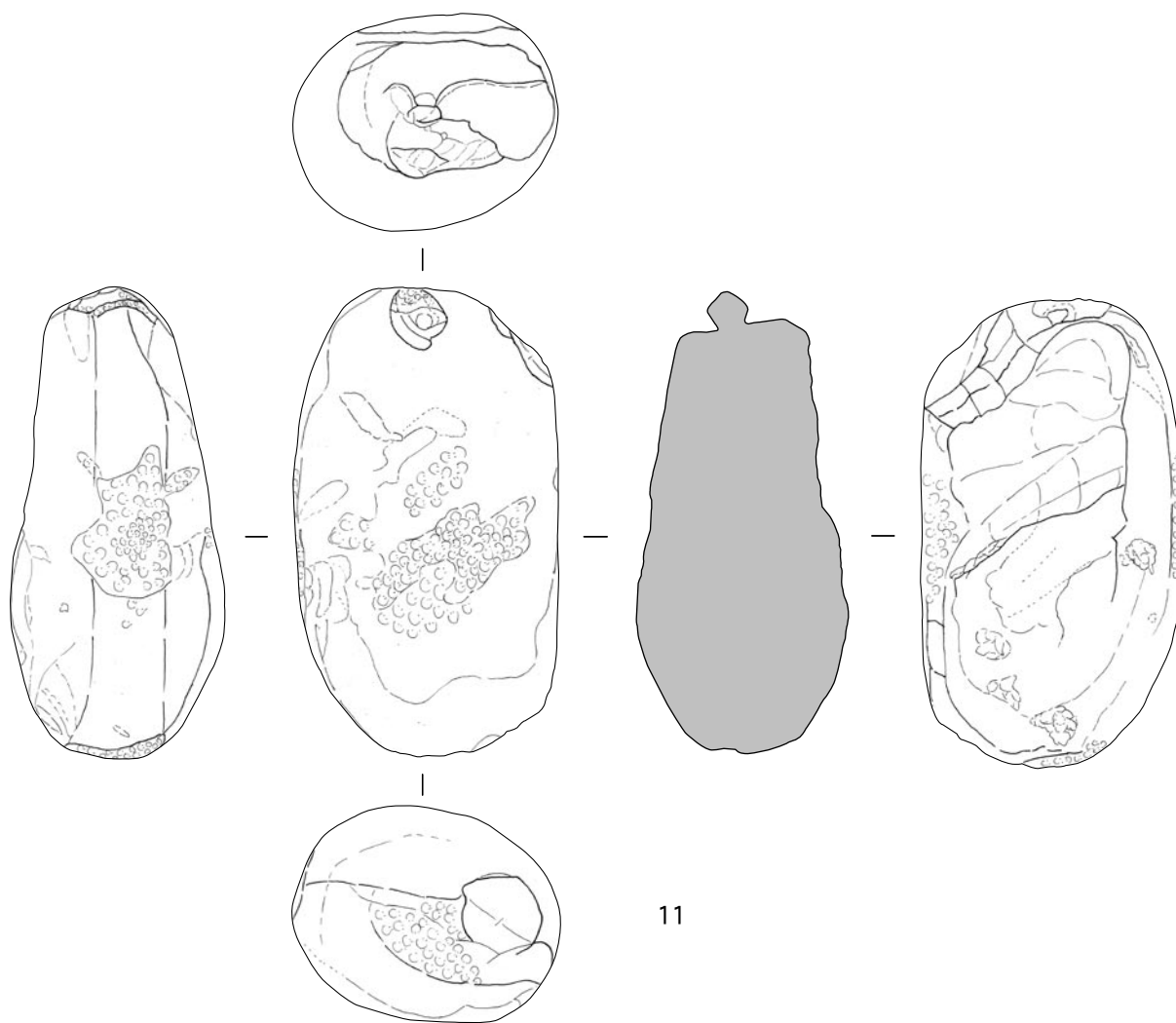
第図・図版	押図番号	器種	分類大	分類小	残存	縦(cm) 横(cm) 幅(cm) 重量(g)	石質	観察事項	出土地
第51図(図版39)	1	石斧	半磨	両刃	刃部	7.3 6.7 2.9 210	角閃石	両凸刃で円刃。平面は短冊形。断面は楕円形。全面を打ち割り調整後に研磨している。刃こぼれは1~2mm程度である。横斧。	4-5 柱穴 5501
	2	石斧	半磨	両刃	刃部	4.9 5.3 1.1 44.62	角閃石	両凸刃で円刃。裏面は刃部だけ研磨されている。平面は短冊形。断面は楕円形。表面は研磨されており、側面は打ち割り痕が見られ部分的に研磨されている。刃こぼれは1~2mm程度。全体形は不明である。	4-7 淡灰色砂質土 00.03.10
	3	石斧	半磨	両刃	刃部	5.5 5.0 1.1 44.94	黒色片岩	両凸刃で円刃。平面はバチ形。断面は楕円形。表裏面共に打ち割りをして出ている所を研磨している。全体形は不明である。	4-6 淡灰色砂利層 01.01.17
	4	石斧	半磨	不明	刃部	3.5 2.3 0.5 5.94	角閃岩	平面は楕円形、断面は錐状になっている。刃縁が破損しており、全体形は不明。	4-2 黒色混貝土層 00.07.13
	5	敲き石	磨製	柱状	完形	11.5 4.1 4.2 310	輝緑岩	平面は柱状。断面は楕円形。全体によく研磨されており、握りやすいように側面が凹んでいる。上下部に敲き痕が見られる。	4-5-6畦除去 (灰黒色砂質土) 二次堆積
	6	敲き石	半磨	転用	完形	8.0 5.9 2.5 170	輝緑岩	両凸刃で円刃。平面はバチ形。断面は楕円形。横斧。刃部にだけ研磨が見られる。刃こぼれが4mm程度みられることから、石斧としての機能を失ったため、敲き石として再利用された、と思われる。	4-6 淡灰色砂質土
	7	敲き石	円礫	隅丸 方形	完形	9.4 5.8 3.2 341	輝緑岩	平断面は隅丸形。全体に研磨が見られる。表裏右側面に敲打による凹みあり。裏面に円状の凹みがあり、一番強い。左側面には稜が成形され、円周に敲き痕が見られる。右側面が厚く敲打痕が側面に対して斜めに入る。	4-2 黒色混貝土層 00.08.17
	8	敲き石	円礫	楕円形	破損	4.5 9.0 6.5 295	砂岩	平面は半楕円形。断面は楕円形。全体的に敲き痕が見られる。磨痕が強く残っているのは、表裏左側面である。下部、表面右側、右側面の敲き痕が顕著である。また両側面に打ち割り痕がある。	4-5 柱穴 5801 01.03.23
	9	敲き石	円礫	楕円形	破損	7.1 5.4 2.1 150	輝緑岩	平面は楕円形。断面は隅丸形。表面は磨痕があり、打ち割り痕も見られる。上下部、両側面に敲き痕がある。裏面は剥離している。	4-6 柱穴 6164
	10	敲き石	円礫	楕円形	完形	8.4 6.1 2.8 208	凝灰岩	平面、断面共に楕円形である。表裏面、部分的であるが磨痕があり、それぞれ中央部に敲き痕で形成される凹みが見られる。円周に敲き痕と擦切痕が見られる。	3-7 00.03.21
第52図(図版40)	11	敲き石	円礫	楕円形	完形	18.2 10.0 8.3 2180	砂岩	平面、断面ともに楕円形。全面に敲き痕があり、表裏面上部に穴を穿こうとした跡が残る。	4-5-6畦除去 (灰黒色砂質土) 二次堆積
	12	敲き石	円礫	楕円形	破損	12.3 11.7 5.7 1400	輝緑岩	平断面共に楕円形。表裏面に敲打痕と凹みがある。円礫をそのまま使用した。左側面は、割れている。	トーガー
第53図(図版41)	13	敲き石	円礫	台形	破損	8.5 7.5 3.2 295	砂岩	平面は台形、断面は方形である。表裏面は打ち割り痕が見られ、上面、右側面、裏面に敲き痕がある。特に右側面に顕著に見られる。	4-4 淡灰色土 00.03.13
	14	凹み石	円礫	楕円形	完形	9.5 6.4 3.6 400	砂岩	平面は楕円形。断面は柱状である。表裏面には磨痕があり、それぞれ中央部に敲打痕で形成される凹みが見られる。両側面には敲き痕が見られる。	4-6 流れ込み黒色砂質 土層の中の砂利層 00.11.22
	15	凹み石	円礫	楕円形	完形	8.8 7.3 4.3 490	砂岩	平面は楕円形。断面は柱状。全面に敲き痕があり、表裏面、両側面共に凹んでいる。	4-4 石敷遺構
	16	磨り石	円礫	円形	破損	6.5 7.3 4.1 260	砂岩	平面は円形、断面は楕円形。表面には磨痕、打ち欠け痕が見られる。裏面は剥離しているが、球形と思われる。	東側石列 00.03.29
	17	石皿	円礫	方形	破損	5.2 6.8 4.1 200	砂岩	平断面共に方形。裏面に凹みが見られる。	4-8 淡灰色土 (砂質)
	18	砥石(?)	半磨	方形	破損	3.3 1.3 2.1 10.24	凝灰岩	平面は方形。断面は三角形。横断面は五角形であり、右上角はほぼ直角に面取りされている。表面右側面に研磨が見られる。破損が激しく器形は不明である。	4-5 淡灰色土層 00.03.14
	19	砥石	半磨	柱状	破損	5.4 2.2 2.2 34.67	凝灰岩	平面は柱状、断面は錐状。表裏両側面共に研磨されている。表面、左側面は湾曲している。	4-6 柱穴 6175
	20	砥石	半磨	柱状	破損	6.5 2.8 4.5 86	凝灰岩	平面は柱状、断面は方形。表裏側面に研磨されており、他の面は欠損している。表裏側面は湾曲しており、研磨痕が見られる。	4-4 石列遺構(大型)
	21	砥石	円礫	楕円形	完形	5.9 5.1 2.7 105.6	細粒砂岩	平面、断面共に楕円形。研磨は施されていないが、平面に二条の溝が見られる。また、擦切り痕も見られる。裏面にも浅く短い溝状のものが見られる。	3-5 00.03.17
	22	未製品	半磨	楕円	破損	6.2 3.1 1.1 25.2	砂岩	平断面共に楕円形。表面は磨かれており、右側に打ち割り痕が見られる。作成途中で失敗したか、使用中に破損したのかは不明である。	4-9 表面清掃 01.03.06
	23	未製品	打製	楕円形	完形	5.6 7.3 0.8 47.4	千枚岩	平断面共に楕円形。平面下部に打ち割り痕が見られる	4-4 石列遺構(大型) 00.11.07



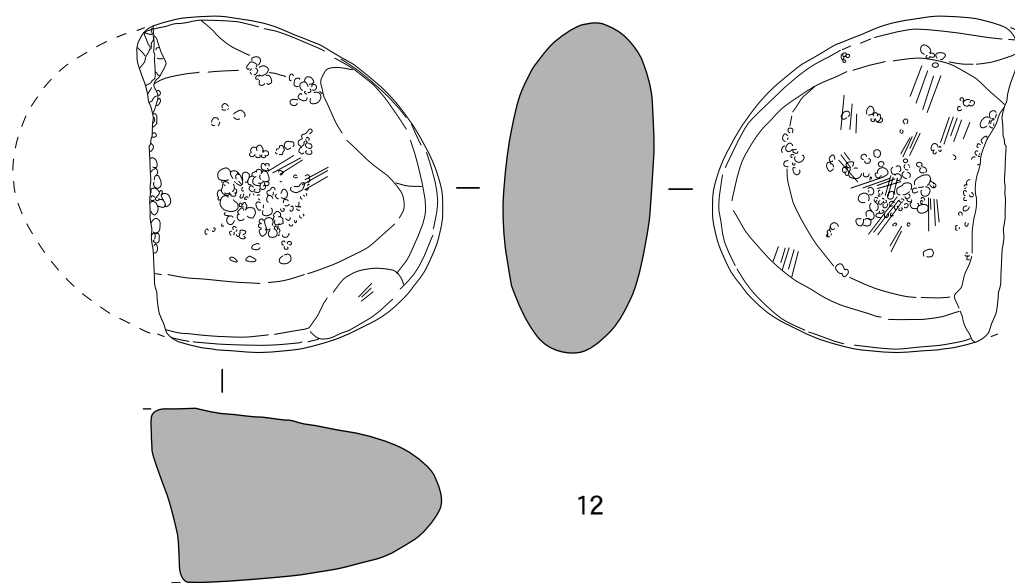
第51図 石器1 (石斧・敲き石)



図版39 石器 1 (石斧・敲き石)



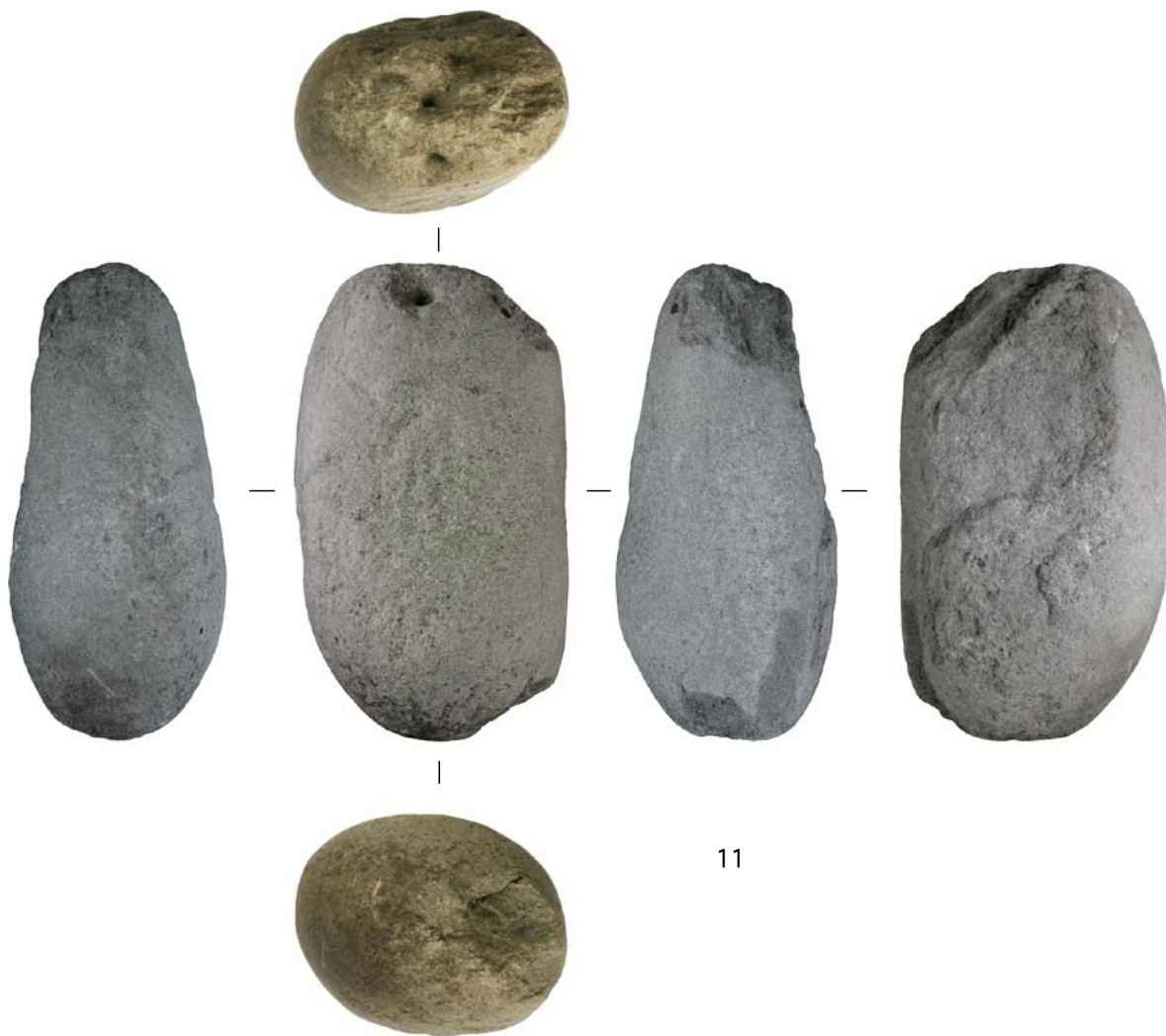
11



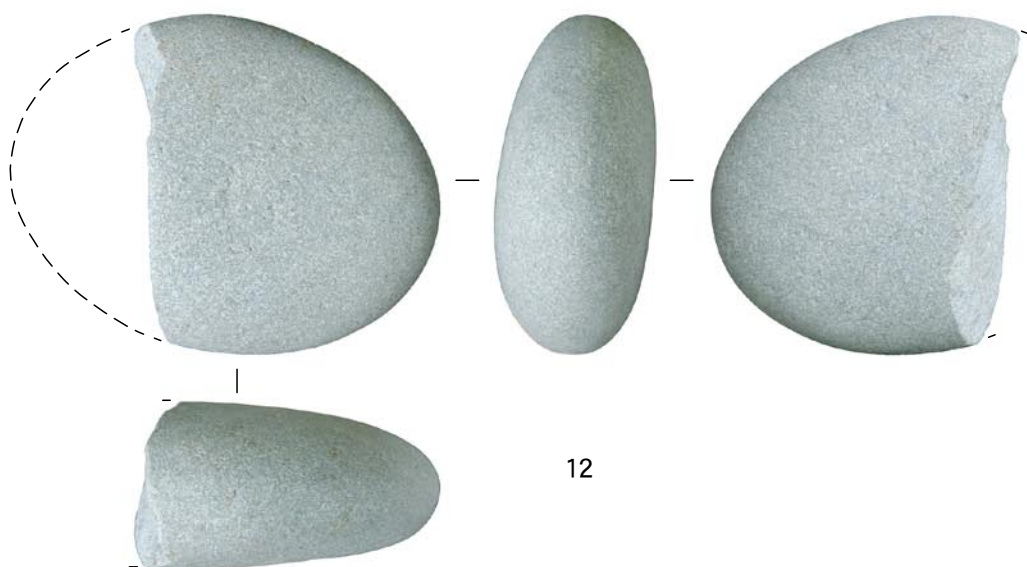
12



第52図 石器2 (敲き石)



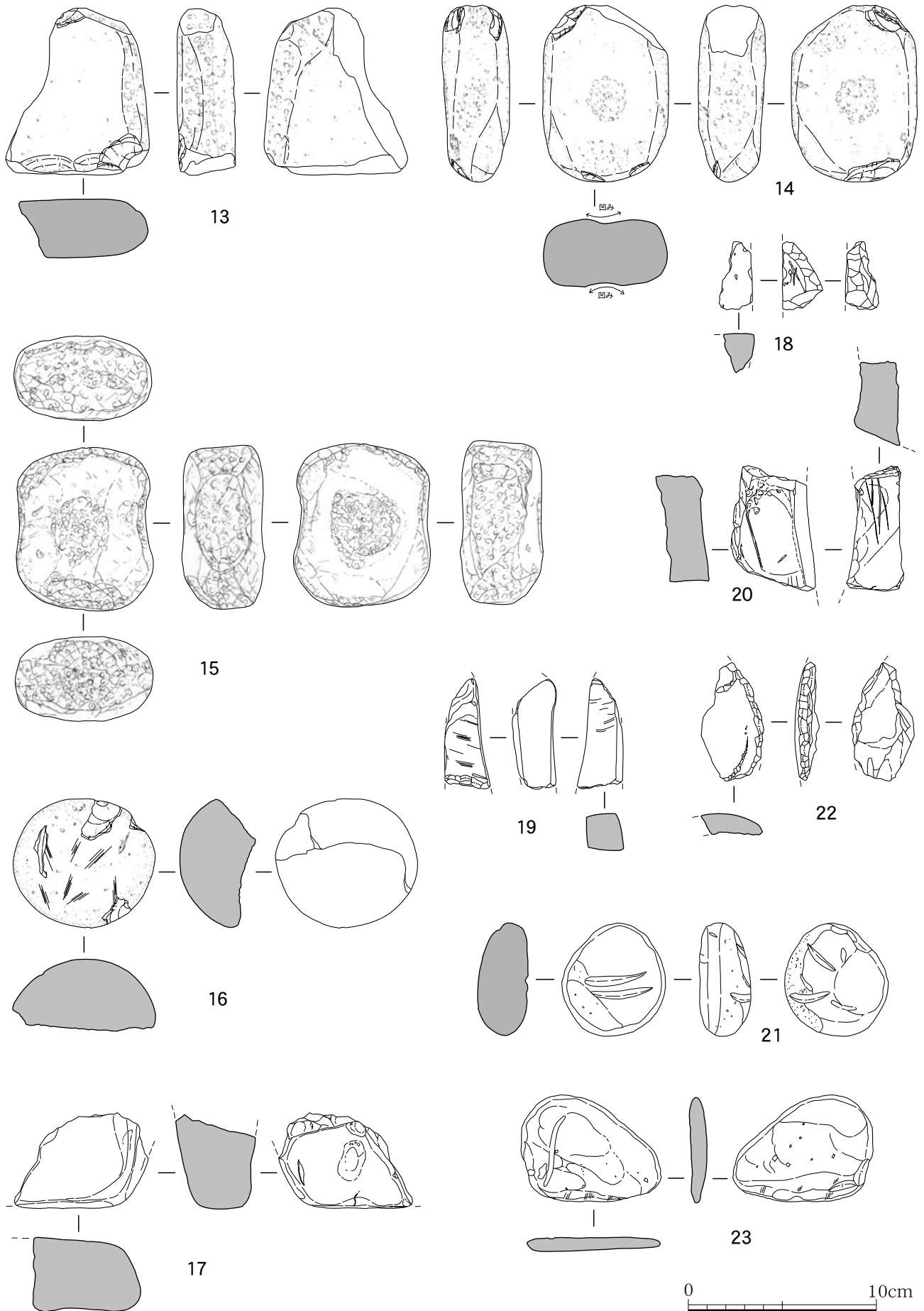
11



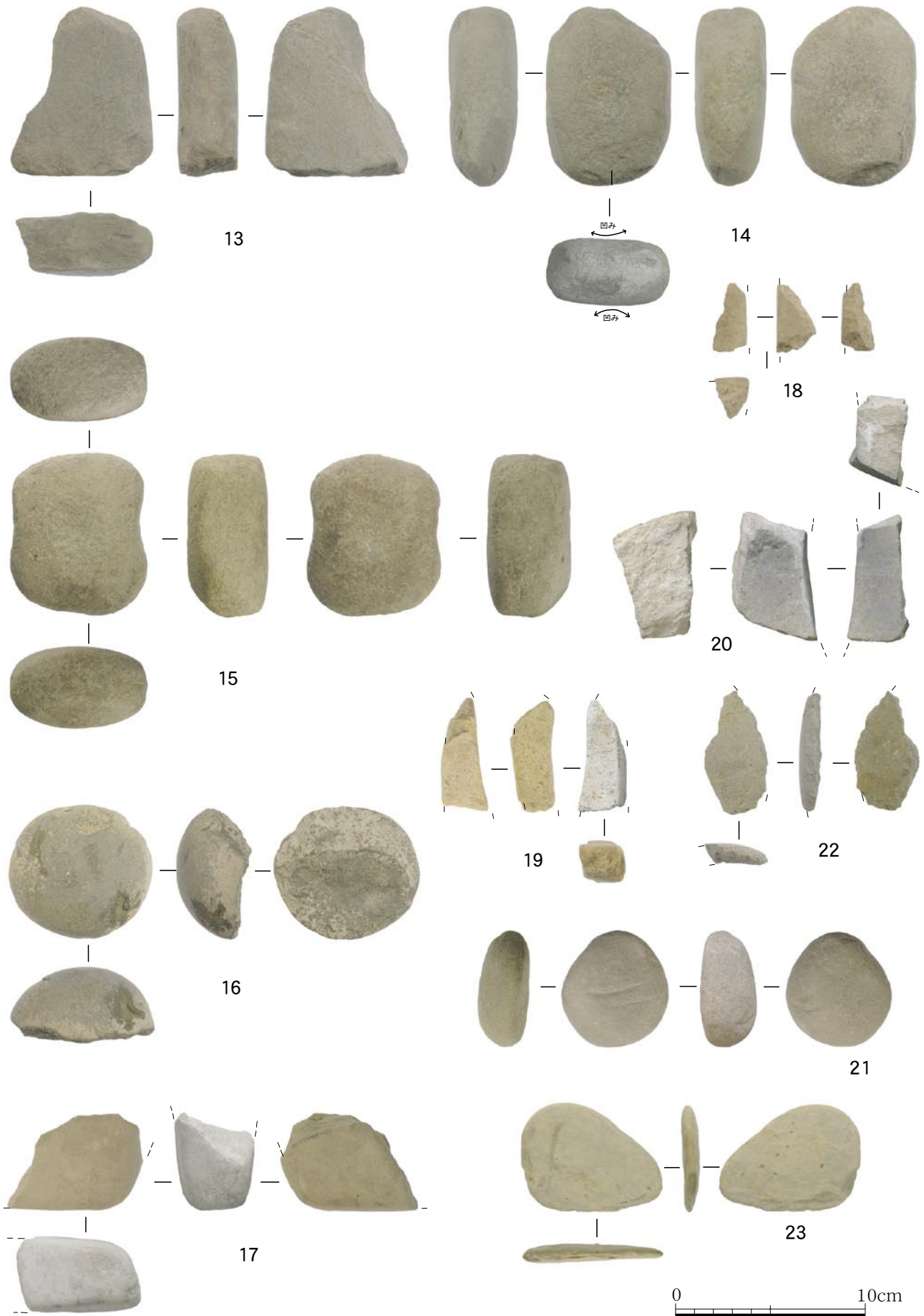
12



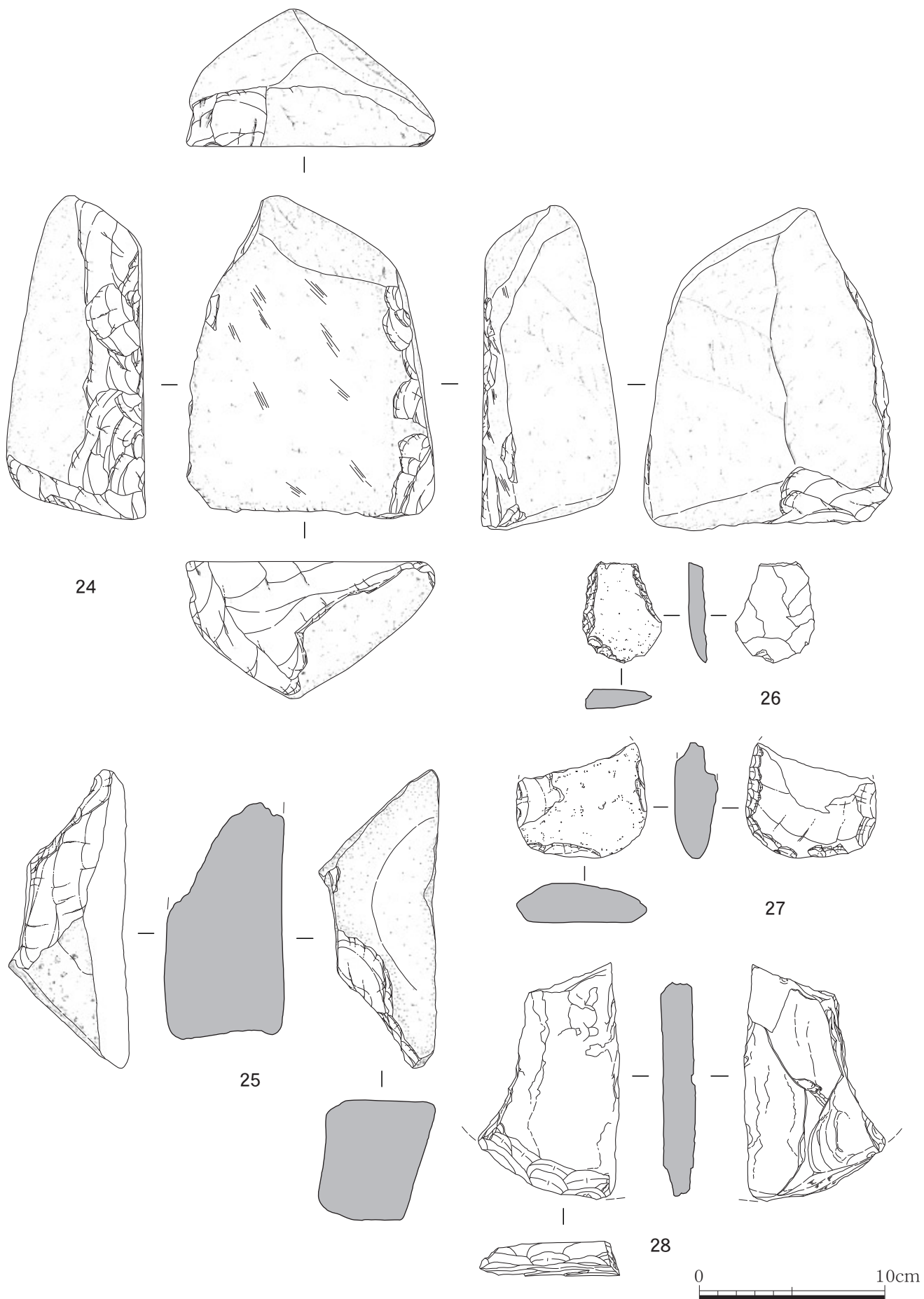
図版40 石器2 (敲き石)



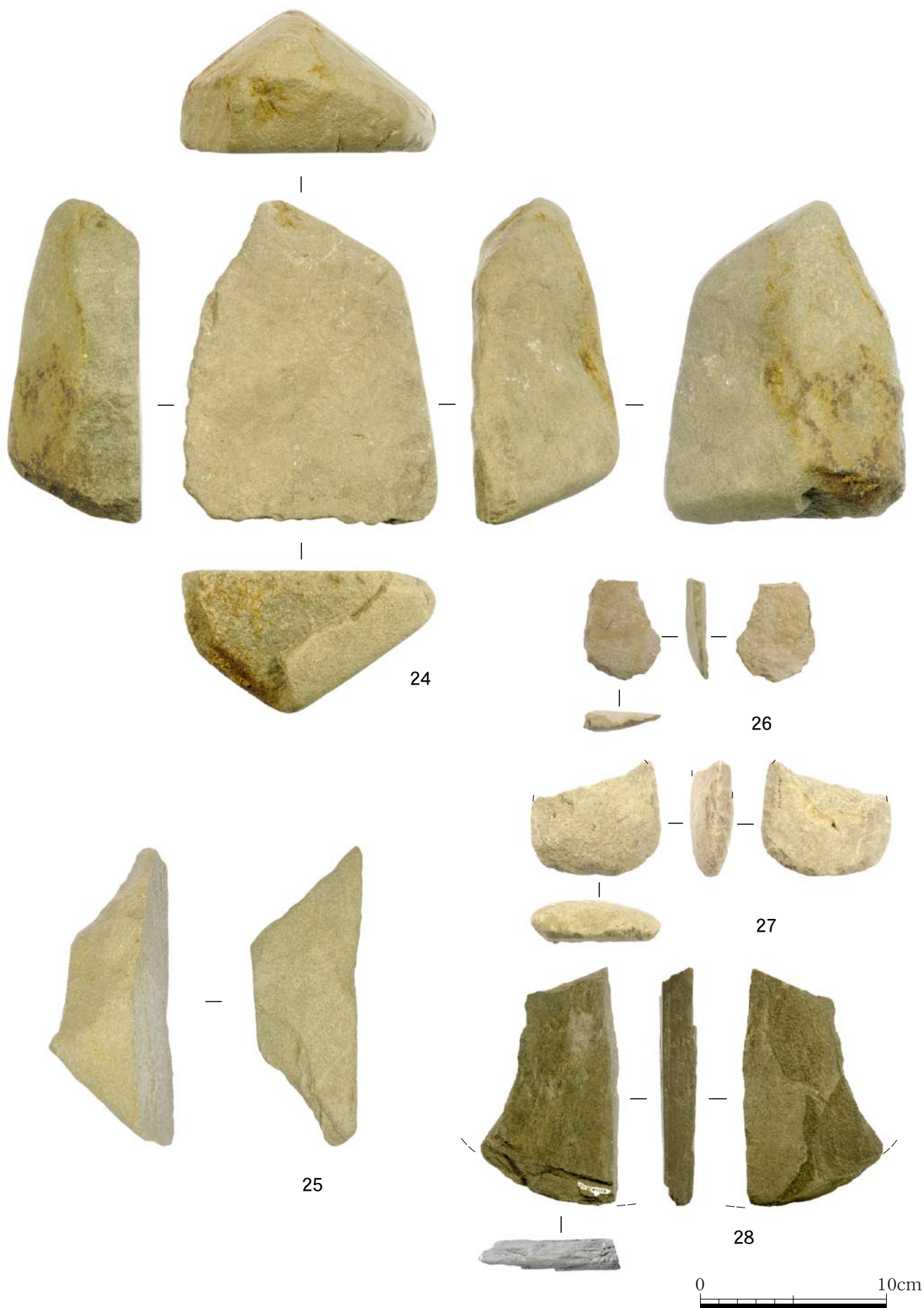
第53図 石器3 (敲き石・凹み石・石皿・砥石・未製品)



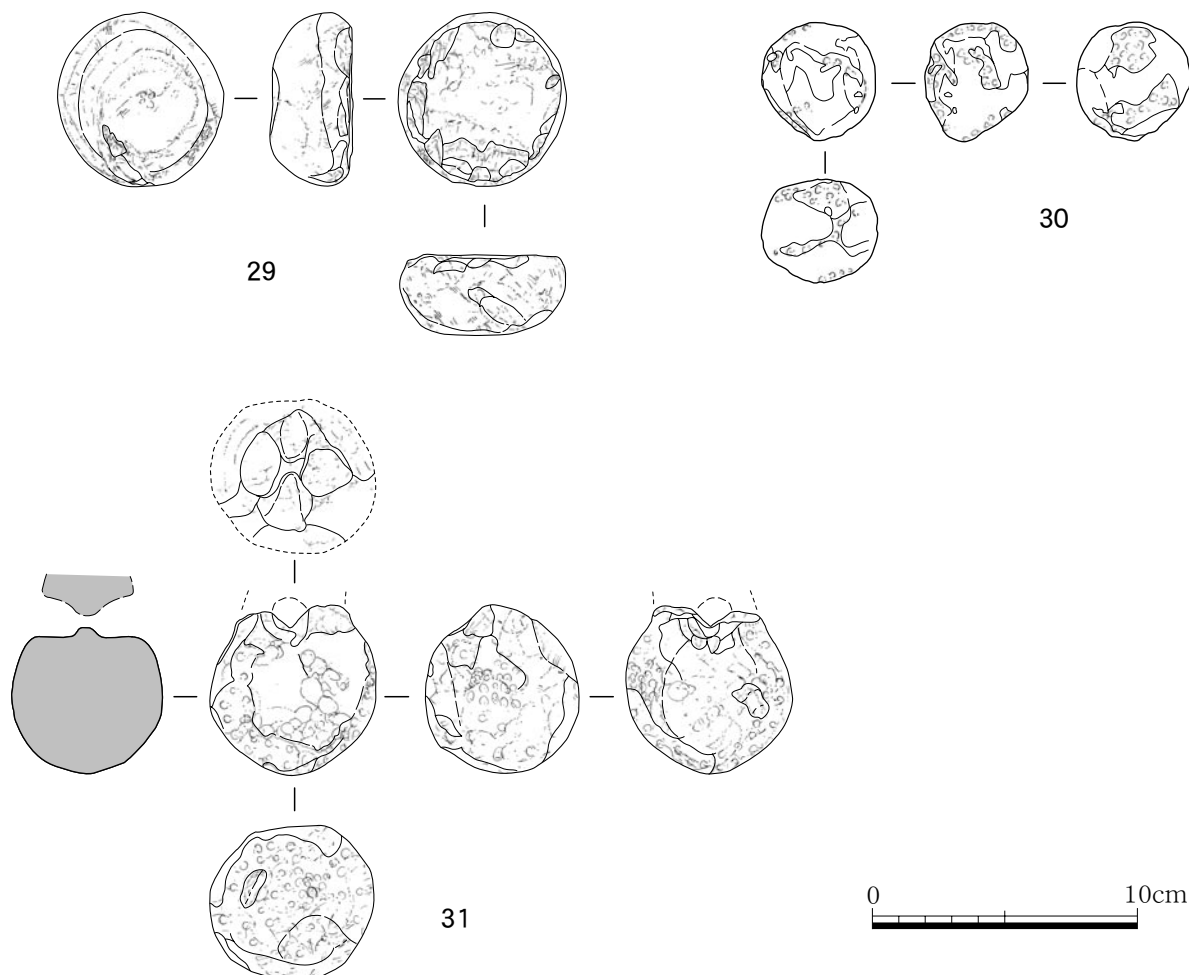
図版41 石器3 (敲き石・凹み石)



第54図 石器4 (用途不明)



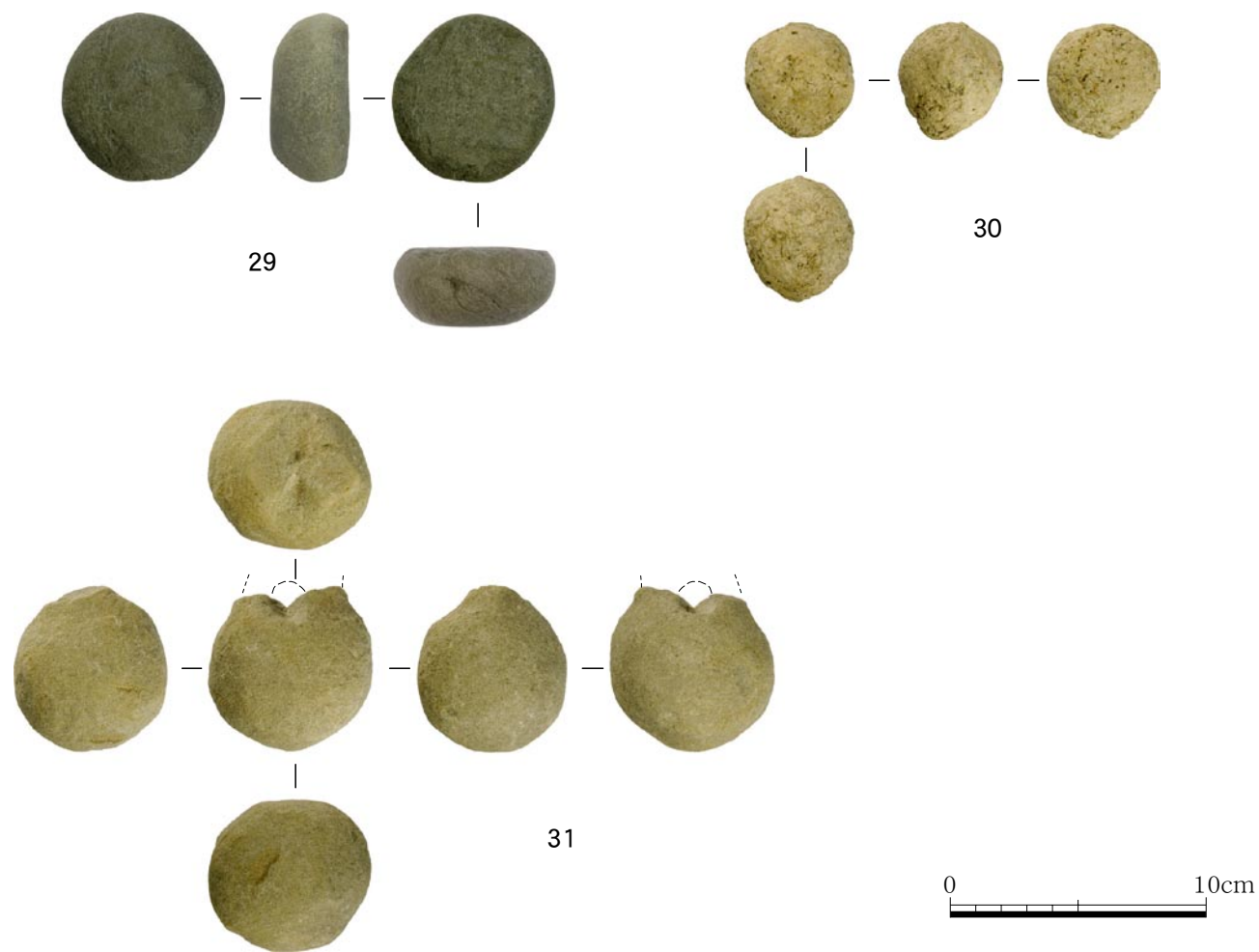
図版42 石器4 (用途不明)



第55図 石器5（円盤状製品・石製品・石球）

表30-2 石器観察一覧

第図・図版	押図番号	器種	分類大	分類小	残存	縦(cm) 横(cm) 幅(cm) 重量(g)	石質	観察事項	出土地
第54図 (図版42)	24	用途不明	円礫	方形	破損	17.5 11.7 7.5 2160	砂岩	平面は方形、断面は柱状。平側面には打ち割り痕が見られる。	グリッド不明
	25	用途不明	円礫	台形	破損	9.5 13.7 6.3 708	砂岩	平断面は台形。自然石を利用したもので、表面に僅かながら凹みが見られ、表裏面に打ち割り痕が見られる。	4-2 黒色混貝土層 00.08.17
	26	用途不明	円礫	不明	破損	5.5 4.1 1.1 29.16	砂岩	平断面不明。側面、表面下部に打ち割り痕が見られる。	4-4 遺構取り上げ 00.09.29
	27	用途不明	円礫	不明	破損	6.8 7.0 2.3 113.71	凝灰岩	平断面不明。表裏面下部側面に打ち割り痕が見られる。	4-1 黒色混貝土層
	28	用途不明	打製	不明	破損	12.7 7.3 1.7 227	黒色片岩	平面は不明。断面は板状。表面下部に打ち割りが見られ、下断面に摩耗が見られる。破損状況から円盤状石器の一部分か？	4-8 黒色砂質土 01.03.08
第55図 (図版43)	29	円盤状製品	円礫	円形	完形	6.5 6.7 3.2 218	砂岩	平面は円形。断面は半楕円。表面円縁、側面に敲き痕が見られる。	4-8 黒色砂質土
	30	石製品	円礫	円形	破損	6.9 6.3 5.9 290	砂岩	平面、断面共にほぼ円形。上部に穴を穿った跡があるが、破損しているため、二股になっている。製作途中で破損したのか、使用時に破損したのかは不明である。全面に敲き痕がある。	3-5 灰黒色土 (石列より下層)
	31	石球	円礫	円形	完形	4.5 4.8 3.9 92	石灰藻球の化石	平面、断面共にほぼ円形。全面に敲き痕がある。	4-6 淡灰黒色土



図版43 石器5 (円盤状製品・石製品・石球)

18・瓦

近・現代の瓦で20点出土した。

平瓦と丸瓦があり、平瓦と判断されるものは12点、丸瓦と判断されるものは4点、分類不可能4点出土した。

出土地別にみると4-4Ⅱ層の戦前遺構、石列遺構、石敷遺構の4-4・5で若干多いようである。3トレンチでも少量出土している。

下記に遺物について略述し、出土量を表31に、主な遺物は第56図、図版44に示した。

図1は丸瓦の縁の部分で、縁には漆喰の痕らしきものが確認できる。

図2は平瓦の縁の部分で4-5淡灰色土層で出土している。いずれも焼成はよく、裏面に布目痕が明瞭に見られる。

図4は瓦ではないが、ここで提示する。厚さ10mm、緩やかに湾曲もので、内外面は橙褐色、やや灰色のサンドイッチ状で 焼成良好、泥質である。4-3灰黒色砂質土の出土。器と考えるが詳細は不明。

図5は平面形が分銅状、厚さ25mmで、縁は丸味がある。砂質で焼成良好、胎土に小型巻き貝が含まれている。用途は不明。いずれも4-3灰黒色砂質土の出土。

19・羽口

出土総数28点 (530.12g) で、4-4Ⅱ層15点 (重さ170.4g)、4-5Ⅲ層1点 (重さ37.89g)、4-6Ⅲ層9点 (重さ230.08g) 4-8Ⅲ層1点 (重さ18.47g)、4-9Ⅲ層1点 (重さ30.33g)、4-5・6Ⅲ層1点 (重さ42.95g) 出土した。最も出土量の多いのは4-4Ⅱ層大型石列、次いで4-6Ⅲ層である。形のわかるものを第57図、図版45に示した。

4-4Ⅱ層の大型石列で最も多く出土し、次いで4-5Ⅲ層と4-6Ⅲ層で出土する。

後者の出土地は後述する焼土でも同じような傾向を示すことから4-5で検出された1～3号炉に関わる遺物と推定される。

しかし、4-2Ⅱ層で出土量が多いのは炉や羽口、焼土の所属年代を示唆するものと思われる。

図1は厚さ3cmで、内外面は緩やかに湾曲し、内面に煤が付着する。器色は外面が橙褐色、内面は灰褐色を呈し、僅かに金雲母らしきものを混入する。焼成はかなりよく、4-5・6灰黒色砂質土 (2次堆積) の出土である。

図2は厚さ6cmと厚く、外面は緩やかに湾曲し、内面に「U」字状の溝が2条見られる。溝の幅は約1cmである。内外面は赤褐色、内部は灰褐色のサンドイッチ状になる。砂質で、焼成は比較的よい。4-4戦前遺構掘り下げの出土。類例としては砂辺サーク原遺跡がある。

20・焼土 (図版45)

出土総数897点 (6025.14g) で、多い順にあげると4-5Ⅲ層432点 (2335.44g)、4-6Ⅲ層107点 (707.78g)、4-4・5・6にまたがるものが84点 (486.42g) と4-5を中心に出土している (グラフ1)。4-5は3つの炉が検出されており、本品はその遺構に関わる遺物と考えられる。

グラフ6 焼土出土状況

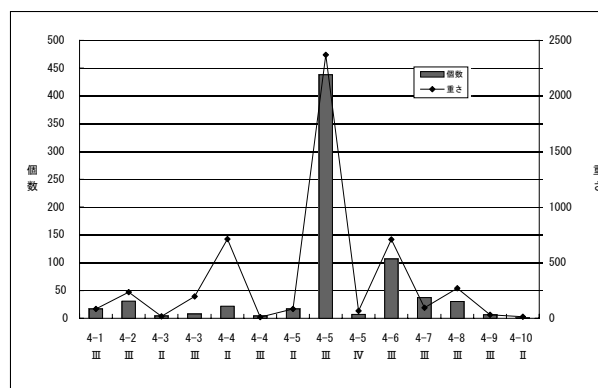
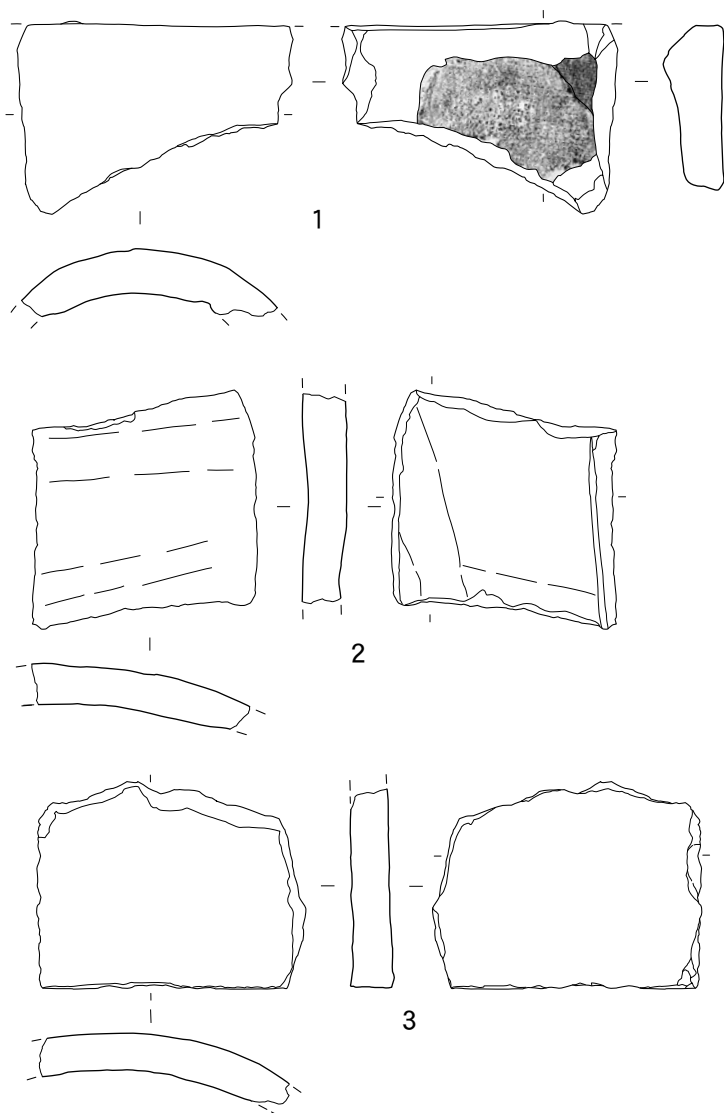
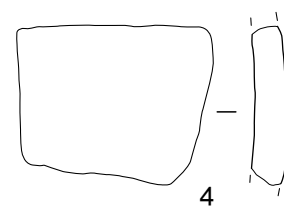


表31 瓦出土量

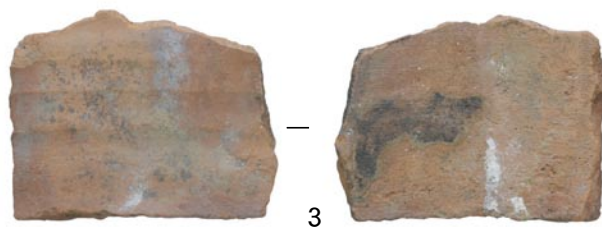
出土地 グリッド	種類		平瓦	丸瓦	不明	小計	層 集計	グリッド 集計
	層	部位						
3-6	Ⅲ	口	1			1	1	1
3-8	不明	胴		1	1	2	2	2
3-9	不明	胴			1	1	2	2
		不明	1			1		
3-10	Ⅲ	不明	1			1	1	1
4-2	Ⅲ	胴	1			1	1	1
4-3	Ⅱ	胴	4		1	5	5	5
4-4	Ⅱ	胴			2	2	11	11
		不明	2	5	2	9		
4-5	Ⅲ	口			1	1	4	4
		胴	1		2	3		
4-7	Ⅲ	不明	1		1	2	2	2
4-8	Ⅲ	不明			1	1	1	1
4-9	Ⅲ	胴	1			1	1	1
4-10	Ⅲ	胴	1			1	2	10
		不明			1	1		
	褐色土層	胴	1		7	8	8	
4-4・5	Ⅲ	胴	1			1	1	1
不 明	表採	胴		2	3	5	6	8
		不明		1		1		
	不明	口	1			1	2	
		胴		1		1		
合計			17	10	22	50		



第56図 瓦

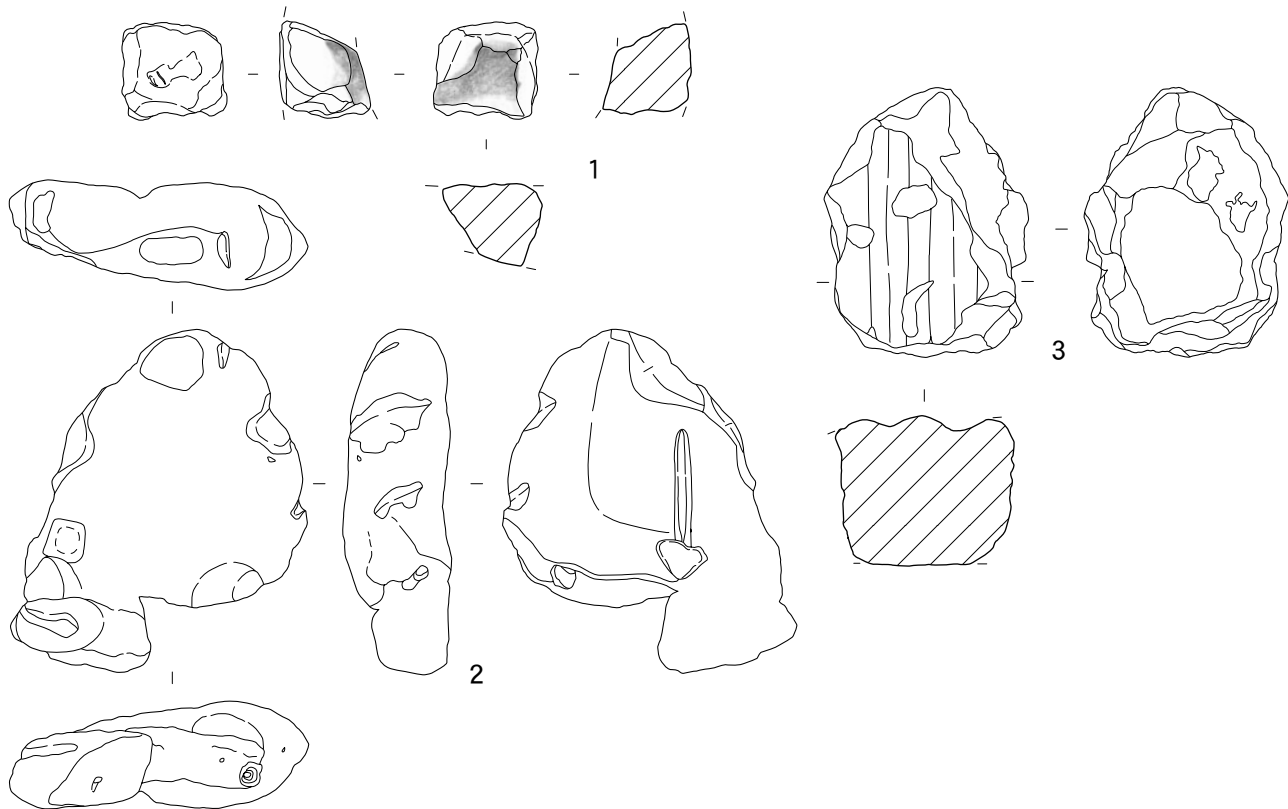


0 10cm



0 10cm

図版44 瓦



第57図 羽口

0 10cm



図版45 羽口・焼土

21. 円盤状製品

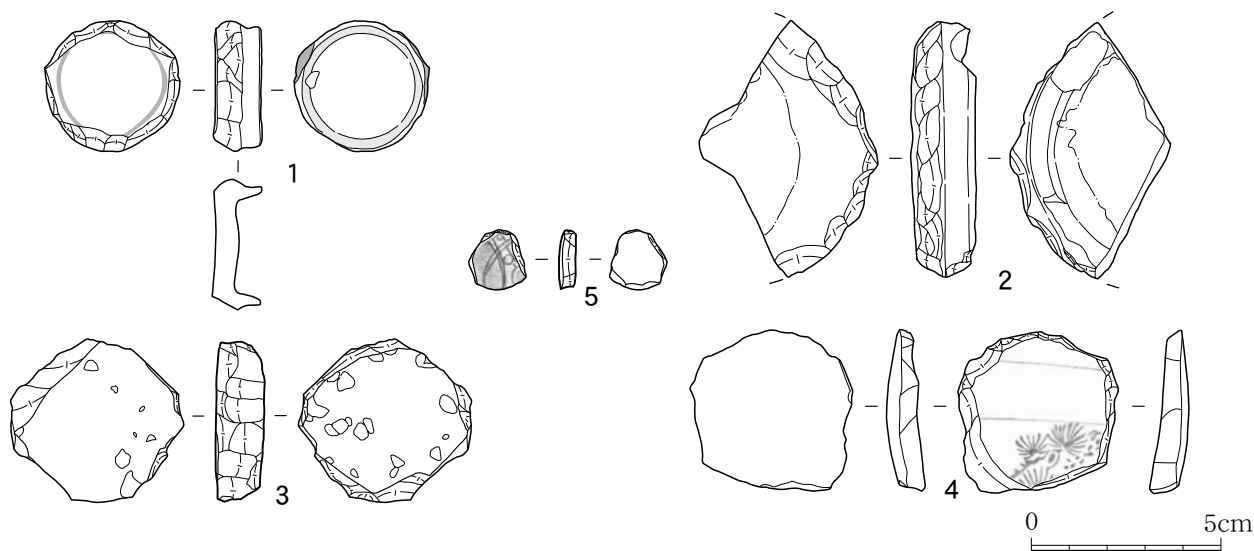
沖縄や中国、本土産の陶磁器類を打ち欠いて加工した物で、おはじきなどの遊具ではないかとの説がある。本遺跡では計5点出土しており、円盤状製品としたものは、次の条件を二つ以上満たしたものに限定した。

①五回以上剥離していること。②たとえ半円状であっても円形にする事を意識した形跡があること。③器として見た場合の外面中央に摩擦痕が見られること。

③の摩擦痕は円盤状製品としての使用痕の可能性を考えている。大きさは1.25cm～6.1cmと幅がある。図1は徳化窯系と思われるが、図5とともに戦前遺構から出土しているため、混入と考えている。

表32 円盤状製品観察一覧

第 図 版	図 番 号	材 料	短 軸 (cm)	長 軸 (cm)	厚 さ (mm)	重 量 (g)	観 察 事 項	出 土 地
第 58 図 (図 版 46)	1	白磁	3.4	3.7	12	15.65	小碗の底部を使用。内面からの丁寧な加工によりやや楕円形に成形。	4-4 大型石列遺構 010221
	2	青磁	4	6.1	11~16	39.6	碗の底部を使用。内外面からの丁寧な加工により円形に成形したと思われるが、三分の二程度欠損している。	4-4 II層 001124
	3	褐釉陶器	4.4	4.6	10~12	25.2	甕の胴部を使用。粗い加工によりやや菱形を呈す。	No5 III層 000718
	4	本土産磁器	4.2	4.2	3~6.5	13.58	碗の胴部を使用。内面からのやや粗い加工により不正円形を呈す。内面に文様あり。断面にカルシウム分固着。	4-4 黄色土 001018
	5	本土産磁器	1.25	1.5	4	1.33	碗の胴部を使用。内外面からのやや粗い加工により隅丸三角形を呈す。	4-4 石敷き遺構 000313



第58図 円盤状製品



図版46 円盤状製品

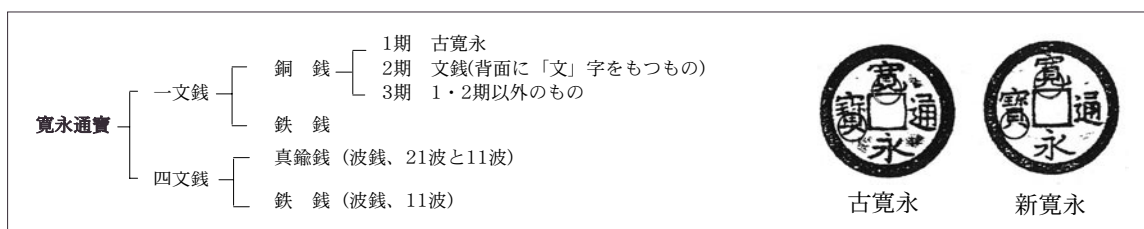
22. 銭貨 (第60図・図版47)

中国銭2点、和銭2点、無文銭5点、不明3点、日本国貨1点、米貨2点の総計15点出土。うち5点は、はっきり文字が確認できるが、残りは変形や錆により判読不能であった。

図5・6は寛永通宝である。字体は古寛永に近いが、大きさや重量などから鉄一文銭とした。

図13は「五」の字と文様・大きさからニッケル製の五銭硬貨としたが、重量が2,14gと軽すぎるので、今後の検討が必要である。

図14はマーキュリータイプで1944年製。図15は裏にリンカーン記念堂が描かれている。1984年製。

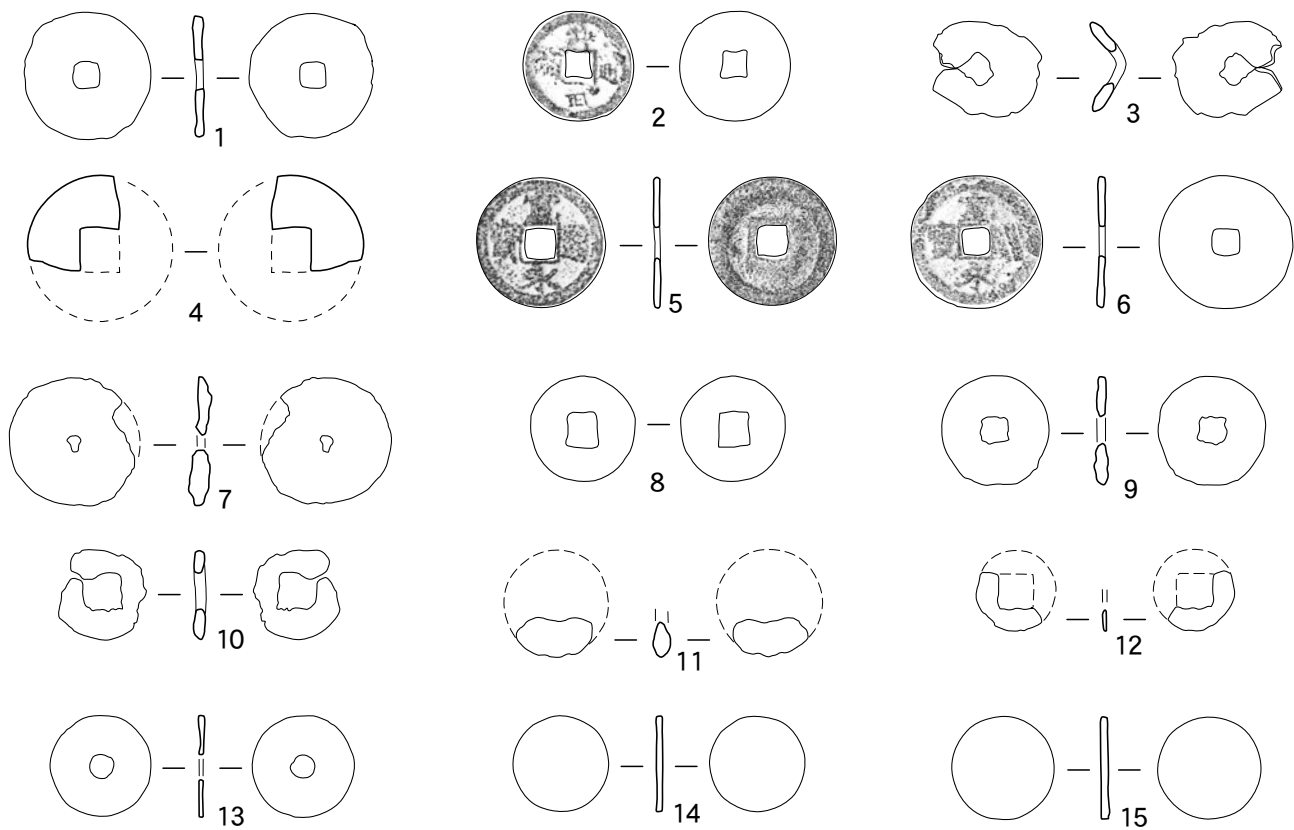


第59図 寛永通宝の分類

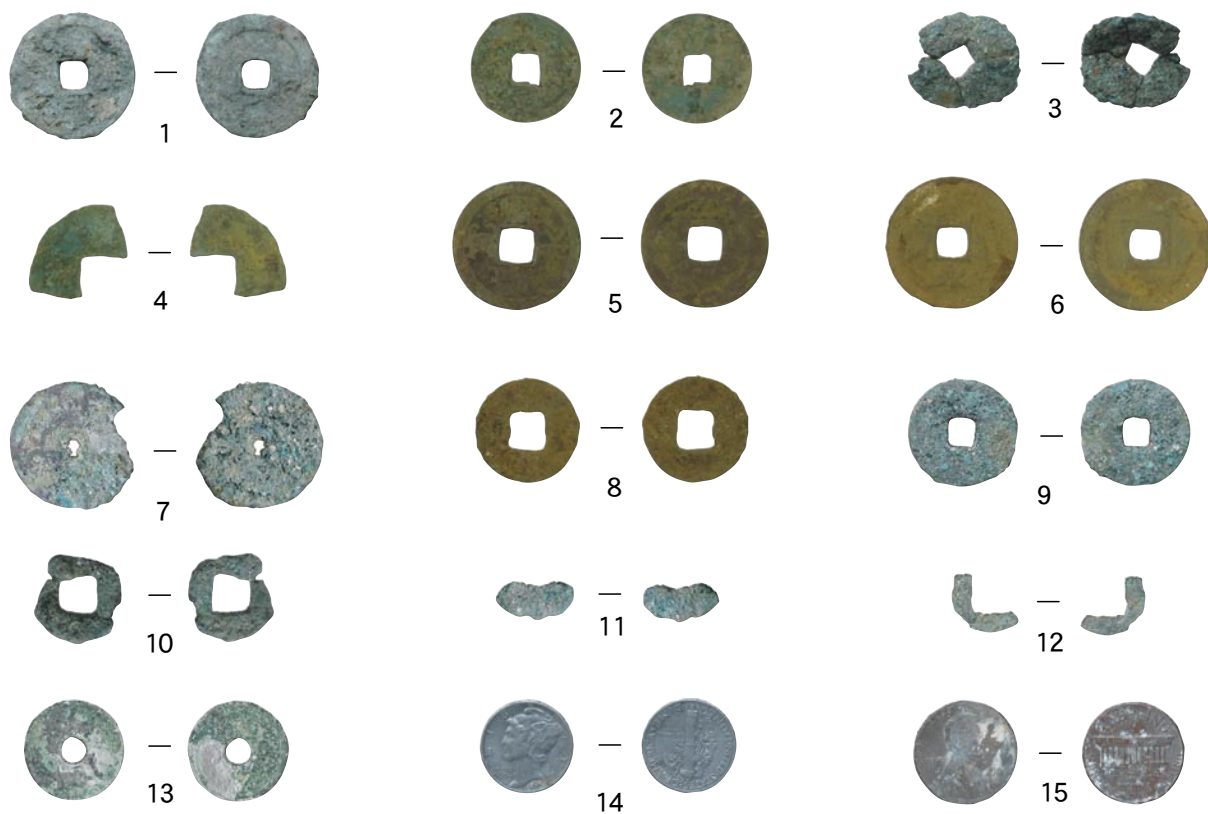
引用文献：永井久美男，編著『日本出土銭総覧』（1996年版）
兵庫埋蔵銭調査会

表33 銭貨観察一覧

第 図・ 図版	番号	種類	種別	完 破	孔形	径(cm)	孔径(mm)	重量(g)	初鑄年	出土地
第 60 図 (図 版 47)	1	洪武通宝	銅銭	完	四角	2.3	5	3.4	1368	4-5 一号炉跡内出土 20010213
	2	洪武通宝	銅銭	完	四角	2.05	5	3.02	1368	4-5・6 畦除去灰黒色 砂質土二次堆積 20010209
	3	判読不能	銅銭	破	四角	2	5	1.71		5203、柱穴324
	4	判読不能	銅銭	破	四角	不明	不明	1.13		4-6 灰色白砂(ジャリ 混り 20010118
	5	寛永通宝	鉄銭	完	四角	2.45	6.5	3.52	1739	4-3 遺構掘り下げ 20000921
	6	寛永通宝	鉄銭	完	四角	2.45	5.5	3.31	1739	4-9 淡灰黒色土 20000310
	7	判読不能	鉄銭?	完	不明	2.4	不明	5.06		柱穴7063・7064
	8	無文銭	銅銭?	完	四角	1.95	6~7	1.24		4-3 二次堆積 黒色 土層 20001208
	9	無文銭	銅銭	完	四角	1.95	5.5	2.07		4-6 柱穴表面清掃 黒褐色砂質層 20000821
	10	無文銭	銅銭	破	四角	1.7	5~7	0.72		4-6 柱穴表面清掃 黒褐色砂質層 20000821
	11	無文銭	銅銭	破	不明	不明	不明	0.43		4-6 柱穴表面清掃 黒褐色砂質層 20000821
	12	無文銭	銅銭	破	四角	不明	不明	0.19		4-6 砂利層 20010117
	13	五銭硬貨	ニッケル 貨	完	丸	1.85	5	2.14	1938 (昭和八年~)	4-10 黄褐色土 20001018
	14	10セント硬貨	銀貨	完		1.8	なし	2.5	1916	3-5 20000321
	15	1セント硬貨	青銅貨	完		1.9	なし	2.51	1959	不明



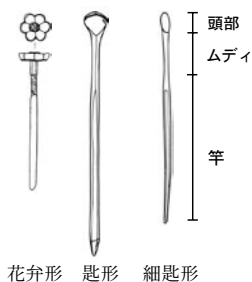
第60図 錢貨



図版47 錢貨

23. 簪

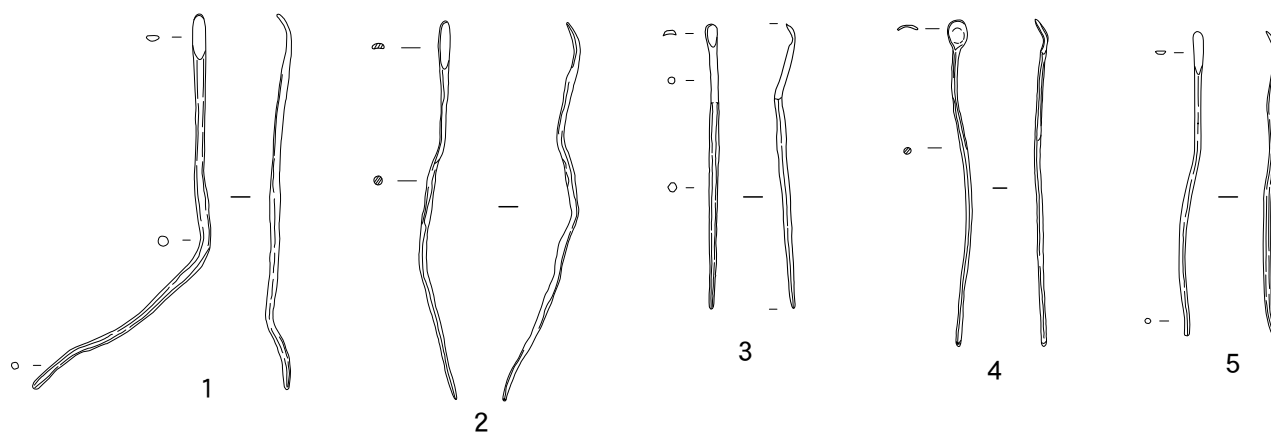
総計5点出土している。すべて完品の金属製で、一部金色も見えるがほとんど暗い青色を呈する。頭部は匙形と細匙形（第62図）が出土し、竿とムディはいずれも六角を呈する（第62図）。図4は本簪で、図1・2・3・5は副簪の可能性が考えられる。



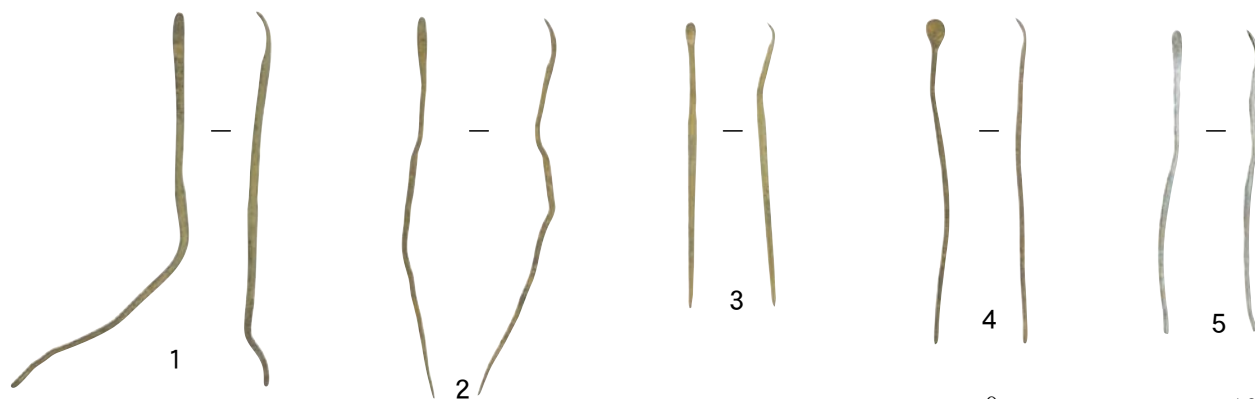
第61図 簪の分類と部位名称

表34 簪観察一覧

第図・図版	番号	完破	頭部形状	材質・色	長さ(cm) 重量(g)	観察事項	出土地
第62図 (図版48)	1	完	細匙形	金属 (暗い青色)	14.1 10.83	ムディの断面は六角で、竿との境で違う角度の六角に切り替わる。竿の途中で曲がっている。一部キズがあり、金色に光る。	4-3 戦前遺構掘り下げ 001130
	2	完	細匙形	金属 (暗い青色)	13.9 5.48	ムディの断面は六角で、竿との境で違う角度の六角に切り替わる。七か所で曲がっているためうねりを呈している。している。	4-3 遺構掘り下げ 000925
	3	完	細匙形	金属 (暗い青色)	10.7 4.79	ムディの断面は六角で、竿との境で違う角度の六角に切り替わる。ムディの途中で曲がっている。一部キズがあり、鈍い金色に光る。	4-4 石組遺構掘り下げ 000922
	4	完	匙形	金属 (暗い青色)	14.4 3.8	ムディの断面は六角で、竿との境で違う角度の六角に切り替わる。ムディと竿の途中で曲がっている。	4-6 淡灰色土 000309
	5	完	細匙形	金属 (暗い青色)	11.5	ムディの断面は六角で、竿との境で違う角度の六角に切り替わる。変形している。	4-4 大型石列遺構 001107



第62図 簪

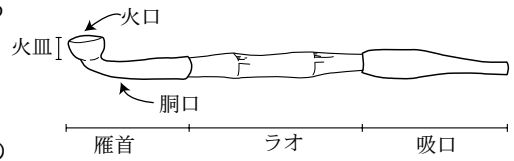


図版48 簪



24. キセル

16世紀初めから使われていた、刻みたばこを吸う道具である。20世紀に入り、紙巻きたばこが流行するようになると次第に姿を消していった。石製1点、沖縄無釉陶器2点、金属製2点の総計4点が出土している。キセルの部分を雁首・ラオ(雁首と吸口をつなぐもの、竹など)・吸口とし、雁首のラオに接する部分を胴(口)、火皿の口を火口とした(第63図)。



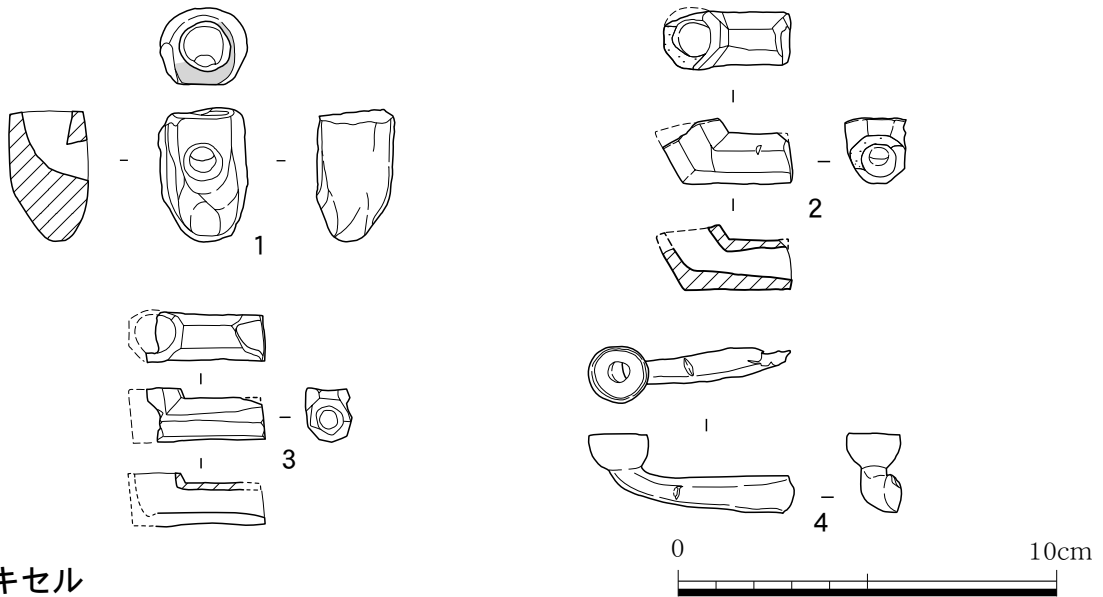
第63図 キセルの名称

《参考文献》

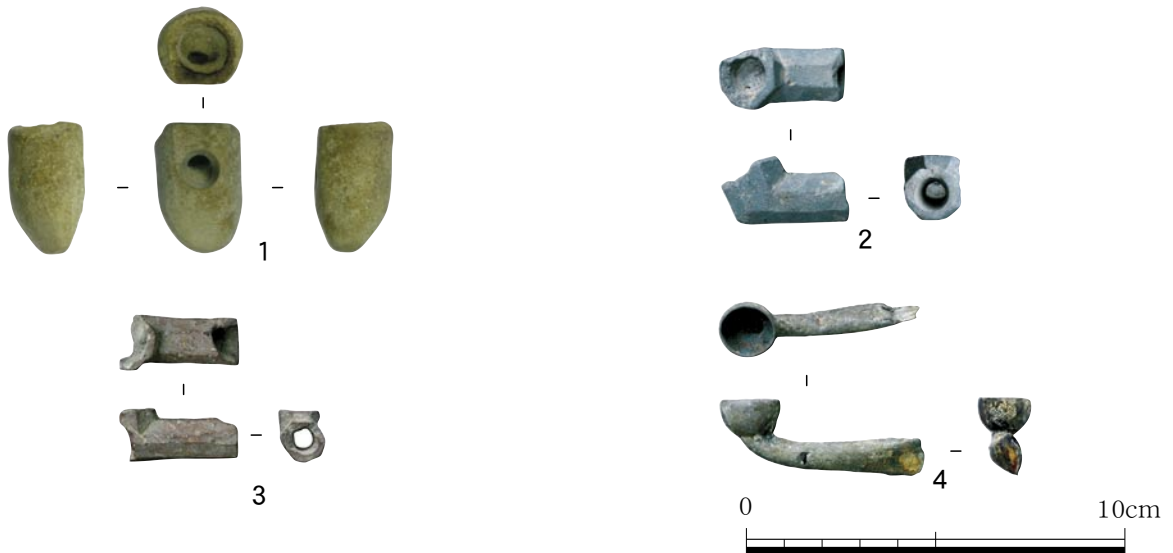
『沖縄百科辞典』上巻 1983年

表35 キセル観察一覧

図・図版	番号	材質	部分	完形・破片	火口径 (cm)	胴口径 (cm)	重量 (g)	長さ (cm)	高さ (cm)	観察事項	出土地
図版49	1	石製	雁首	ほぼ完	1	1.4	21.2	3.5	2.1	灰白色を呈する。被熱のためか胴口が黒変している。火口の面のみきれいに研がれている。	4-6 表探 0006?5?12
	2	沖縄無釉陶器	雁首	破	1.7+α	0.9	8.34	3.4	1.7	灰色を呈する。胴が八面に面取りされている。	4-7 淡灰色砂質土 000310
	3	沖縄無釉陶器	雁首	破	1.1+α	0.9	4.08	3.05	1.9	暗赤褐色を呈する。胴が八面に面取りされている。	4-7 柱穴表面(黒色土層) 000824
	4	金属製	雁首	破	1.4~1.5	不明	4.16	5.6	2.15	褐色を呈するが、キズの部分は銅色。炭や錆付着。	4-6 淡灰色土 000309



第64図 キセル



図版49 キセル

25. 金属製品

本遺跡からは総数14点が出土した。内訳は鉄製品10点、銅製品4点である。この中でめぼしいもの6点を図化した。

a. 鉄製品

図1は角釘である。図2は鎌の刃部片である。

b. 銅製品

図3は釣り針である。「J」字型に彎曲させている。先端には「返し」と呼ばれる針先の向いている方向と逆の方向に尖った部分があり、餌が外れたり針が魚の口から外れるのを防ぐ役割がある。

また、テグスを結ぶ所は扁平で釣り糸が結び易いようになっている。

図4は武具の八双金物で円形、ハート形の孔がある。同じようなものが首里城から出土している^(註1)。図5は突起が付く板状の銅製品である。腐蝕のため、どのような製品であったか不明であるが、飾り金具の一部だと思われる。

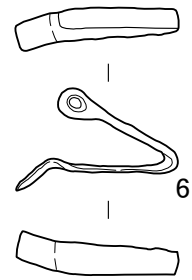
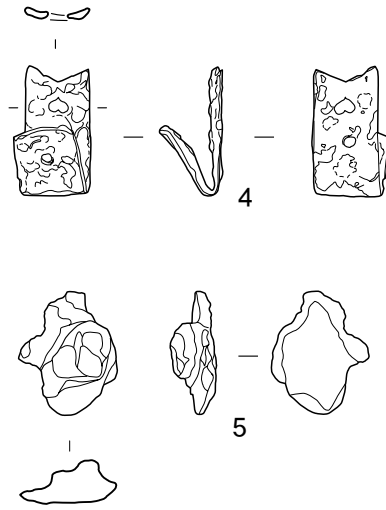
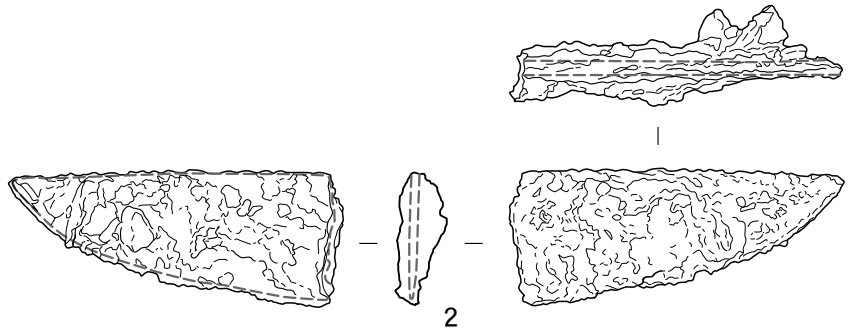
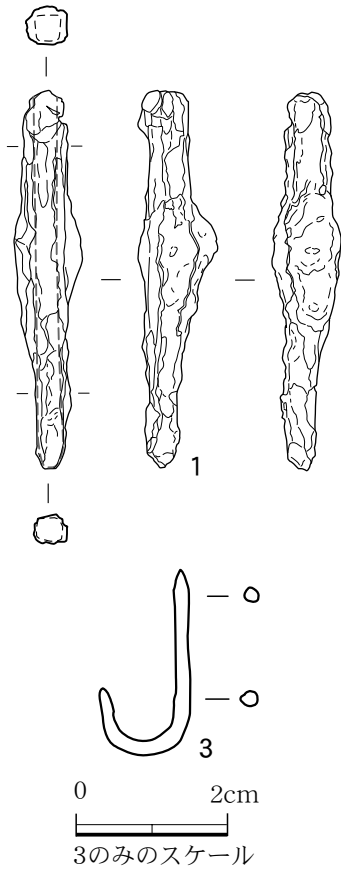
図6は孔を設け、先端、中間が屈曲している用途不明製品である。孔から先端に行くほど横幅が広がり、厚さも薄くなっている。

《参考文献》

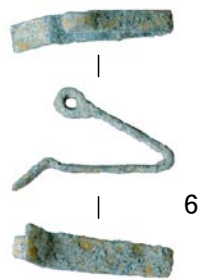
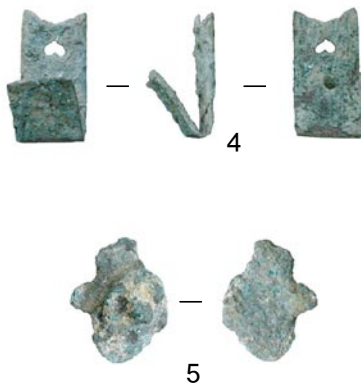
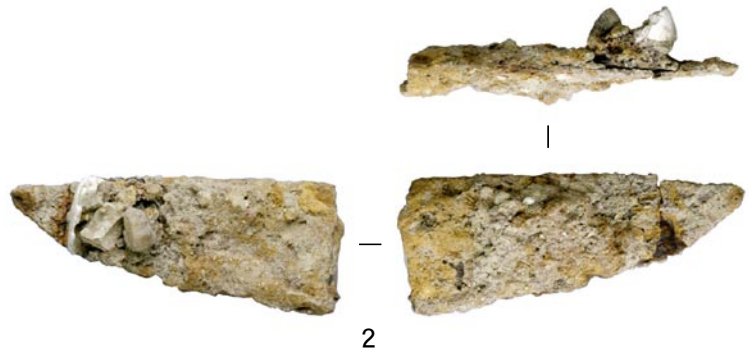
註1：沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡—城の下地区発掘調査報告書—』2004.3

表36 金属製品観察一覧

図版	番号	器種	完・破	材質	縦(mm) 横(mm) 厚(mm) 重量(g)	観察事項	出土地
第65図 (図版50)	1	角釘	完	鉄	98 7.5 6.9 41.52	胴部断面は方形。 錆に覆われている。	4-5 淡灰黒色土層 000314
	2	鎌	破	鉄	84.5 33.1 3.8 32.41	刃部先端片である。錆に覆われている。	3-5 000307
	3	釣り針	完	銅	24.7 12 1.8 0.60	先端に返しがある。緑青に覆われている。	4-4 石列遺構(大型) 001113
	4	武具の 八双金物	完	銅	53.2 17.6 1.9 5.97	円形、ハート形の孔がある。緑青に覆われている。	4-6 黒色砂質土 001030
	5	板状製品	破	銅	32.8 25.9 4.4 12.11	突起は縦19.2mm、横14.5mm、厚さ12.9mm。緑青に覆われている。	柱穴7122
	6	孔状製品	完	銅	78.6 6.0~7.8 1.6~2.0 5.07	孔の部分は厚くなっている。孔径は3.4mm。 緑青に覆われている。	4-6 淡灰黒色ジャリ 010118



第65図 金属製品



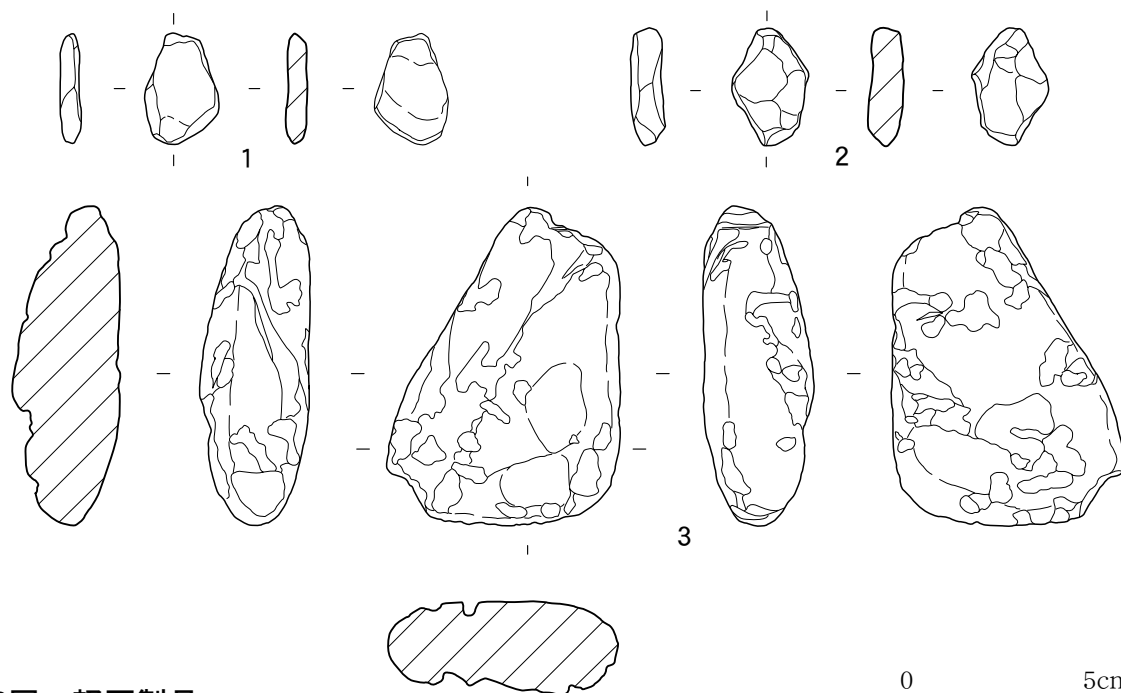
図版50 金属製品

26. 軽石製品

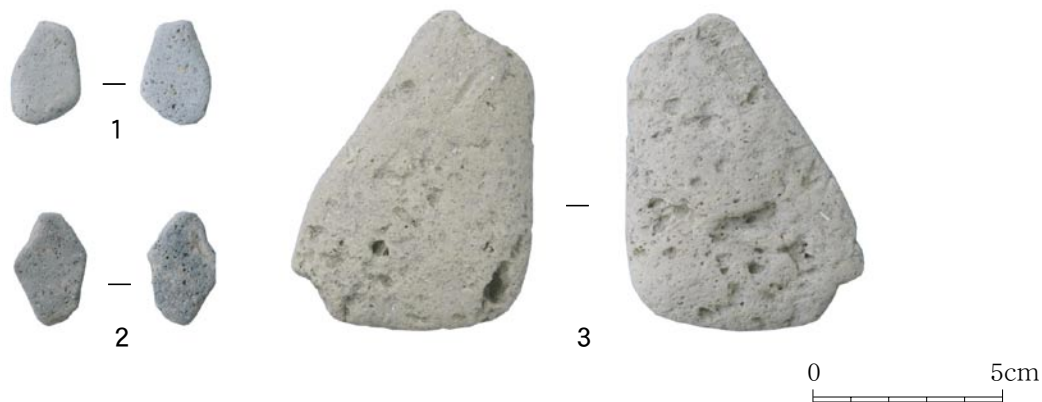
計3点出土している。断面形状が扁平なタイプと楕円形のものの二種類に分かれる。色調などの特徴は図1と2が白色系の灰色、図3は白色系の淡灰色を呈する。用途は不明。

表37 軽石製品観察一覧

図・図版	番号	完・破	平面形状	断面形状	色調	きめ	備考	長軸(cm) 短軸(cm) 厚さ(mm) 重量(g)	トレンチ
第66図 (図版51)	1	完	多角形	扁平	灰色	かなり細かい	一見焼きの甘い須恵器のように見えるがとても軽く、表面がなめらかである。	2.9 1.95 5.5 1	3-9 不明 000317
	2	破	多角形	やや扁平	灰色	かなり細かい	一見焼きの甘い須恵器のように見えるがとても軽く、表面がなめらかである。1より厚く、片面が少し欠損している。	3.1 2.15 8~9 2	4-1 黒色混貝土層 000319
	3	破	隅丸直角三角形	楕円形	淡灰色	やや細かい	基本的に軽石としての発泡は小さいが、数ヶ所大きめの発泡が見られる。石斧のような形状をしている。	8.4 6.1 2.4~2.85 2.8	4-4 赤色粘質土の 下淡灰緑色粘質土 001017



第66図 軽石製品



図版51 軽石製品

27. 軽石

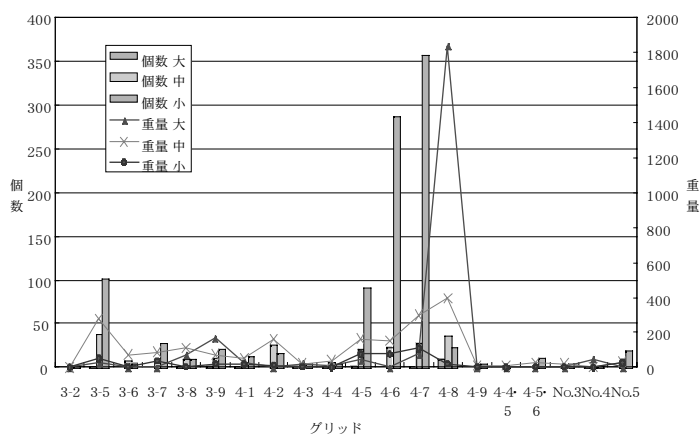
作業として、まず大(7cm以上)・中(3cm以上)・小(3cm未満)に分け個数と量を計った。重量は4,548gで、2コンテナ分となった。重量では4-8トレンチ黒色砂質層に多い。基本的に遺構ではあまり軽石は見られないが、柱穴7002のみ361gと突出していた。軽石には黒色系、白色系があり、色調別に計量したところ、黒褐色が352g、灰色で発泡のやや大きいものが9gであった。この柱穴の埋土は灰黒色砂質となっているが、軽石全体の灰黒色砂質土層は85gと少なめである。柱穴内の内訳が黒褐色56g、暗褐色が29gであり、重量的にも組成的にも違いがあることがわかった。

表38 軽石柱穴別重量

トレンチ	層序	重量(g)	トレンチ	層序	重量(g)	トレンチ	層序	重量(g)
4-5	柱穴5075	2	4-6	柱穴6009	1	4-7	柱穴7002	361
4-5	柱穴5079	9	4-6	柱穴6039	5	4-7	柱穴7008	4
4-5	柱穴5086	2	4-6	柱穴6059	4	4-7	柱穴7060	6
4-5	柱穴5092	20	4-6	柱穴6069-a・b	1	4-7	柱穴7072	6
4-5	柱穴5109	6	4-6	柱穴6109	11	4-7	柱穴7095	5
4-5	柱穴5211	1	4-6	柱穴6146	4	4-7	柱穴7107	5
4-5	柱穴5214-b	4	4-6	柱穴6155	1	4-7	柱穴7108	31
4-5	柱穴5501	1	4-6	柱穴6161-a・b	8	4-7	柱穴7122	4
4-5	合計	45	4-6	柱穴6193	5	4-7	柱穴7126	1
			4-6	合計	40	4-7	柱穴7156	8
						4-7	柱穴7165	4
						4-7	柱穴7171	11
						4-7	柱穴7268	1
						4-7	柱穴7276	3
						4-7	合計	450

柱穴No.5110・6125・7042・7073・7167・7239・7245・7284・7289・7293・7296・7298は少量で計量不可のため省略する。

グラフ7 グリッド別軽石出土状況



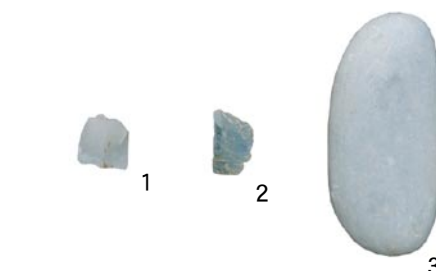
図版52 軽石 1・2・4淡灰色 3・5黒褐色 6黄白色 7淡灰色 8黒褐色

28. チャート

チャートの剥片は3個、重さ60.6g出土している。出土した中で最も大きい破片は57.84gで灰黒色砂質土層で出土した。最も小さい破片は1.7g、表採で得られた。地区別には4-6グリッドに多く得られた。

表39 チャート出土一覧

図版	No.	グリッド	層	重さ(g)
53	1	4-1	表採	1.7
	2	4-4	戦前遺構面掘下げ	1.06
	3	4-6	灰黒色砂質土層	57.84
	計			60.6



図版53 チャート

第四章 自然遺物

第1節 伊礼原D遺跡から出土した貝類遺体

黒 住 耐 二（千葉県立中央博物館）

伊礼原D遺跡は、沖縄島中部西海岸の北谷町に位置する貝塚時代後期（弥生時代併行期）から近・現代まで、多くの時代の遺物を含む遺跡である。隣接地には、縄文時代前期（貝塚時代早期）の曾畑式土器が大量に出土し、低湿地部で堅果類や籠・櫛等の木製品も認められた貴重な遺跡である伊礼原遺跡（中村，2007）がある。本遺跡は、徳川を挟んで伊礼原遺跡の北側に位置している。

今回、報告者は本遺跡の貝類遺体を検討する機会を与えていただいたので、ここに報告したい。また、2002年度に本遺跡の南東部で行われた試掘坑TP7での観察結果についても併せて述べたい。

報告に先立ち、遺跡および遺物の検討の機会を与えて頂いた北谷町教育委員会の中村 愿・東門 研治の両氏、多くの貝類遺体の同定や集計でお世話になった島袋春美氏、発掘から整理・集計まで行って頂いた皆様に感謝したい。早稲田大学の樋泉岳二氏には発掘現場でのアドバイスや出土遺体の情報に関してお世話になった。これらの方々に記してお礼申し上げたい。

材料および方法

今回の伊礼原D遺跡の貝類遺体サンプルは、これまでの調査で発掘中に取り上げられた（ピックアップ法；現場資料）ものからなり、土壌サンプルの水洗選別等で得られたものは含まれていない。得られた貝類遺体は、北谷町教育委員会で、種の同定・出土部位とその状態（死殻・後代のもの等）・集計が行われ、各種を再同定用に抽出されていた。報告者は、再同定用の全種をチェックし、再集計を行った。このため、一部の種では複数種が混入していたり、全てが同一基準で状態等の記録が行われた訳ではないが、出土個体数が数万個体にも上ることから、極めて大きな誤りはないと考えられる。これらの詳細な集計は、表42（pdfファイル）に示されている。

今回は、特にトレンチが山側から海側まで長く、土器等の出土遺物が比較的多く、年代も理解しやすい4トレンチを対象に、詳細な検討を行った。このトレンチ各層の詳細は、本原稿作成時に多少不明確な部分があったので、今回はグリッドを単位としてまとめた。また、複数のグリッドにまたがるものやその可能性のある資料は除いた。ただ、4-3・4グリッドで、「戦前遺構」と示されたものは別に取り扱った。本報告書に示されているように、4トレンチでは、山側の4-1と4-2グリッドでは貝塚時代後期のくびれ平底土器が多く出土しており、弥生時代の形式のゴホウラ貝輪が得られているので、一部には確実に弥生時代併行期も存在している。4-5と4-6グリッドでは、15-16世紀頃の染付や青磁が大量に得られており、この時期の堆積層が主体と考えられている。グリッド4-7から4-10のおよその年代は、出土陶磁器から、18世紀以降-戦前までと捉えられている。

試掘坑TP7では、下部の砂層から弥生時代のゴホウラ貝輪が出土しており、その上部には黒

褐色で淡水産のヌノメカワニナを大量に含む堆積層が存在していた。この層中の貝類遺体を現地
で観察し、特に水田稲作と共に沖縄に持ち込まれたと考えられているマルタニシ（黒住, 2002）
に関しては、その出土レベルを記録した。

結果および考察

1. 出土貝類遺体の分類学的位置と生息場所類型

表1に、今回の調査で得られた貝類遺体の分類学的位置を示した。この表には、出土層位の不明
確なものや明らかに後代のもも含めているため、pdfファイルに含まれていない数種も登載
してある。その結果、海産腹足類（巻貝）35科141種、海産二枚貝類19科56種、淡水産腹足類5
科9種、陸産腹足類5科9種、多板類1科1種、頭足類1科1種、棘皮動物（ウニ類）1科1種と
多数の種が得られた。

各種の生息場所類型も、黒住（1987）に従って表1に示した。この生息場所は、各種の採集場
所と考えることができる訳である。

2. 試掘No.7

層の厚さが1.5mを超える本試掘坑（図1：本報告書も参照）は、概略、下部の50cm程度がや
や砂質の堆積物で（本報告書のIV層とV層）、その中央部から弥生時代のゴホウラ貝輪が出土し
ており、その上部約1mに黒褐色の粒度の細かい堆積層（本報告書のⅢ層）が存在していた。こ
の黒褐色土層中には、かなり高密度でヌノメカワニナが含まれており、下部の砂質層からはカワ
ニナが僅かに確認され、ヌノメカワニナは認められなかった。

このようなヌノメカワニナを多く含む淡水性の堆積物は、伊礼原遺跡（中村, 2007；黒住, 2007a）
や後兼久原遺跡（黒住, 2003b；片桐, 2004）・新城下原第二遺跡（片桐, 2006）等、本遺跡の南
に広く分布している。この堆積層の年代はおよそグスク時代以降のものであり、伊礼原遺跡では
上部に堆積物から水田と認められた層が存在し（中村, 2006, p. 33）、後兼久原遺跡では後述す
るマルタニシが確認できなかったことから、水稲ではない水田が想定されている（黒住, 2003b）。
今回の試掘坑壁面では、黒褐色土層中の下部から約75cmと125cmのレベルに土器が確認され、
決して多くはないが食用ではない可能性もある海産貝類も散在していた。その中に、水田稲作を
示すと考えられるマルタニシ（黒住, 2002）も、殻内に胎児殻（＝幼貝）の存在する状態の個体
を含め、3個体確認された（図2）。これらは、全て黒褐色土層の上部で確認された。

今回、マルタニシが自生的な状態でⅢ層の上部から得られたことから、この地域において水田
稲作が開始されたのは、この層になってからの可能性が示唆されよう。この層中からは、図2に
も示したように、少数の貝塚時代後期土器（浜屋原式／大当原式：本報告書）が得られており、
およそ弥生時代に水田稲作が行われたことを示しているのかもしれない。ただ、これまでの沖縄
諸島の発掘調査によって、貝塚時代後期の水田稲作の証拠は全く得られていない（例えば沖縄考
古学会, 1978）。

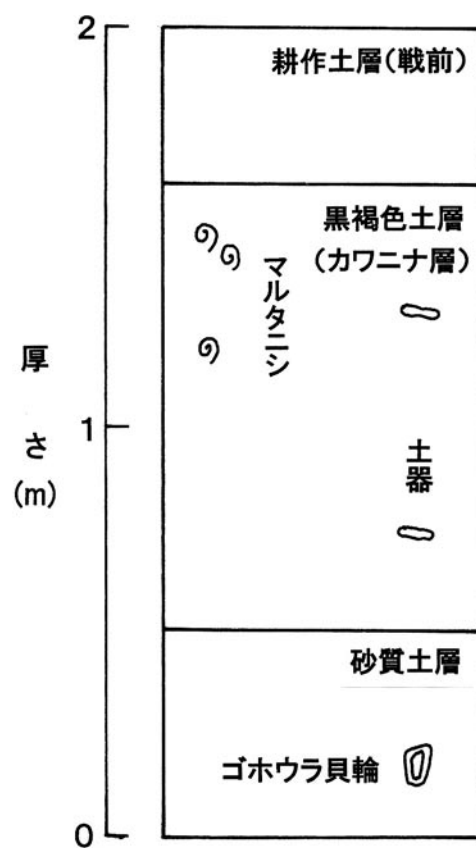
この層に大量に含まれているヌノメカワニナは先史時代に根栽農耕と共に持ち込まれたと考え
（黒住, 2007）、後兼久原遺跡では、ヌノメカワニナの出土層位を水稲ではない水田を想定し（黒
住, 2003b）、その年代は上記の隣接地点を含めておよそグスク時代と考えている。また、この
黒褐色土層が自然堆積なのか、水田のような人為的営力が加わった堆積物なのかという点に関し、

当時の観察では（中村，2006での松田氏のコメントのような認識はできていない）、水田の床土のような構造や層は認められなかった。

このようなことから、現時点において報告者は、試掘No.7で水田稲作を示すと考えられるマルタニシの認められたことを、グスク時代等の後代の堆積物中に、弥生時代の土器等が廃棄された可能性も想定されるのではないかと考えている。今後の発掘において、本地域の層の在り方、さらには水田の形態に関しては詳細な検討が今後の課題であろう。なお、出土したマルタニシの炭素年代を測定することも考えられるが、本地域ではグスク時代相当層のヌノメカワニナから2460年前というかなり古い測定値が得られており（辻，2007）、同じ貝類のマルタニシでも同様な結果になる可能性もあろう。



図版54 伊礼原D遺跡試掘坑TP7の土壌断面



第67図 試掘坑TP7におけるマルタニシの出土位置

3. 4 トレンチの内容

A) 全体的な出土貝類遺体の組成

このトレンチで得られた貝類遺体の詳細と最少個体数を、生息場所類型順に表41に示した。最少個体数には、死殻や色彩の残った後代のものを含めていない。この最少個体数を元に、出土個体数の少ない4-9、4-10および戦前遺構を除いた8つのグリッドのいずれかで、1%を超える種を優占種とし、表42に示した。

いずれのグリッドにおいても、マガキガイが最も多く、全体の約35-65%を占めていた。他の種では、10%を超えるものは4-1グリッドのイソハマグリのみ、5%以上であったのは4-3グリッドのヒメジャコだけと、高い比率を占める優占種の少ないことが今回の結果で示される。

マガキガイの各グリッドでの比率は、4-1,2の貝塚後期では60%以上であったが、グスク時代の4-5,6では35-43%、近世-戦前の4-7から4-10では36-51%、戦前遺構ではまた高くなり、59%と、時代により異なっていた。

このような時代変化は、全体としての生息場所類型組成で比較的明瞭に示すことができた（グラフ8）。それらは、

ア) 外洋-サンゴ礁域のイノー内（I-2）がおよそ80%を超える4-1から4-3および戦前遺構。

イ) イノー内が50%程度に減少し、内湾-転石域（II）が20%程度の4-4から4-7。

ウ) またイノー内が60%を超え、内湾も20%程度の4-8,9。

エ) イノー内が50%程度、内湾が10%未満、淡水域および陸域が10%を超える4-10である。

これらを、前述の時期と優占種（表42）から見てみたい。

ア) は4-1と4-2が貝塚後期とされ、貝類遺体群では4-3もこの時期のものが主体であろう。サンゴ礁のものがほとんどである。4-1ではイソハマグリが多く、またリュウキュウサルボオの割合も比較的高い。後種は、製品も比較的多く認められ（pdfファイル）、貝錘として選択的に得られて可能性も考えられる（本報告書）。戦前遺構では、マガキガイの割合が60%近く、シャコガイ類が目立ち、他の種の割合は極めて低く、僅かにクモガイの割合が高くなっていることが特徴である。

イ) では、4-5と4-6グリッドが15-16世紀頃とされ、マガキガイが減少し、内湾のカワラガイ・リュウキュウシラトリ・ヌノメガイ等が増加している。潮間帯のもの割合も他よりも高く、イソハマグリが多いものの、ハナビラダカラも増加している。4-7では、カンギク・リュウキュウウミニナ・クワノミカニモリも他と比べて多い。また、淡水産（4-4）や陸産（4-5）が多くなることもある。

ウ) の4-8と4-9は18世紀以降の時代で、約半数がイノーのマガキガイで、ヌノメガイ・マスオガイ等の内湾の二枚貝類も多く、この2つの類型で90%程度を占めている。

エ) の4-10では8世紀以降-戦前まで、イノー内が約50%と多いが、淡水産・陸産の割合が両者とも10%を超えている点が特徴的であった。

B) 他遺跡との比較と各時代の中での本遺跡の特徴

上述してきた4つの類型を、隣接した北谷町の遺跡およびいくつかの沖縄島の遺跡と比較して、本遺跡のそれぞれの時代の中での特徴を考えてみたい。

① 貝塚時代後期

この地域からは、伊礼原遺跡（黒住, 2007a）と大作原古墓群（黒住, 2003c）で貝類遺体が報

告されている。前者は土壌サンプル中の少数個体の結果であるが、イソハマグリの優占した90%が外洋—サンゴ礁域のものからなる組成が、後者は古墓の試掘時のもの等の流れ込みの堆積からの貝類であるが、マガキガイが出土個体の大部分を占め、サンゴ礁域でもチョウセンサザエやサラサバテイラは極めて少なく、内湾や河口干潟のものも少ないという組成が知られている。これらの結果は、本遺跡とほぼ同様であり、この地域における当時の貝類採集結果を示していると考えられる。他の外洋—サンゴ礁域のものが優占する貝塚時代後期の遺跡とは、前述のようにチョウセンサザエやサラサバテイラがかなり少ないという特徴がある。その要因は不明であるが、伊礼原遺跡の貝塚時代早期（縄文時代前期）には、両種とも比較的多く得られているので（黒住, 2007a）、当時から海が遠ざかった結果と考えるざるを得ないようである。それが、海退なのか、隆起なのかは不明であろう。同時に、貝塚時代早期と比較して、カキ類やヒザラガイ類がほとんど出土しなくなっている点も特徴的である。

この時期の砂丘遺跡では、土壌サンプルを篩うことにより、中形二枚貝のミドリアオリやリュウキュウヒバリが大量に出土する場合があります、これらの種は一部にはダシ的に利用されていた可能性が示唆されている（黒住, 2002）。本遺跡では、ピックアップ法でのみ貝類遺体が採集されていることにもよるが、両種はほとんど出土していないことから（表41）、その利用はなかったと考えられる（黒住, 1995a, 2002も参照）。遺跡前面に両種が生息できる岩礁域が少遺跡全面に両種が生息できる岩礁域が少なかったという過去の海岸地形復元が想定され、ダシ的には出土個体数の多いイソハマグリが用いられた可能性も考えられる。

また、この時期では、前述のようにリュウキュウサルボオの割合が比較的高かった。これは、本報告書にも記されているとおり、貝錘に利用されており、その素材として遺跡に持ち込まれたものと考えられる。

本遺跡では、礁斜面に生息するゴホウラの貝輪や未加工個体が少数ながら出土しており（表41）、沖縄の同時期の多くの遺跡と同様に、この種が採集されていたことがわかる。それに伴い、礁斜面に生息するアツソデガイ・ヒメゴホウラ・テングガイ・シワクチナルトボラ・マンボウガイ等の種も僅かではあるが出土している。特に、幼貝であったが、マンボウガイの遺跡からの出土は初めてではないかと思われる。

一方で、ゴホウラを採集しておりながら、本遺跡では、大形イモガイやヤコウガイが極めて少なく、チョウセンサザエ・サラサバテイラもかなり少ない。干瀬周辺までゴホウラの採集に出かけているとすれば、これらの種がもっと増加しても良いものと思われる。むしろ、単純なゴホウラ等の採集条件の良い場所に遺跡が立地していたという訳ではない可能性も高い。もしかすると、ゴホウラ等の礁斜面に生息する種や大形のイモガイ類は、周辺地域から本遺跡に持ち込まれたものかもしれない。この現象に関しては、当然遺跡前面のサンゴ礁地形の問題や出土遺物からの人間側の対応の問題等、多方面からの検討が必要だと考えられる。

②グスク時代

本遺跡のグスク時代のグリッド（上記イ）の組成は、後兼久原遺跡（黒住, 2003a）と同様なものであった。マガキガイが優占するものの、内湾の二枚貝類も増加している。また、これまでに指摘してきたように（黒住・金城, 1988）、本遺跡では4-7グリッドで顕著であったが、ウミノ類とカニモリ類の塔型の種（一部で方言名「ちんぼーら」とも呼ばれる）が増加していた。

報告者は、これまで貝塚時代からグスク時代へのグスク主体部を中心とした発掘調査結果から、遺跡出土貝類遺体は、サンゴ礁の貝類から内湾・河口干潟のものへ変化し、その要因は社会的なものではないかと考えてきた（黒住, 1991, 1999, 2002; 安里, 1974や比嘉, 1983も参照）。しかし、今帰仁ムラの発掘調査では、主郭では河口干潟のアラスジケマンが優占していたのに対し（黒住, 1991）、ムラではイノーのマガキガイが優先しており、これは階層による貝類採集形態、ひいては生活諸活動の相違と考えた（黒住, 2005）。

本遺跡の貝塚時代後期での貝類組成でも明らかなように、ここでは干瀬のチョウセンサザエや礁斜面のサラサバテイラがかなり少なく、この状況はグスク時代になっても続いていた。内湾砂泥底の二枚貝類が増加していることは、これまで報告者は否定的であった“本格的農耕開始に伴う土砂流出によるサンゴ礁海域の環境変化”を示しているのかもしれない。ただ、そのような環境変化を考慮しても、マガキガイの優占している状況は変わらず、環境変化が貝類採集に与える影響は、劇的なものではなかったことも同時に示していると考えられる。

そして宮城（2006）が示したように、階層の下部の集団ではヤコウガイの出土が極めて少なく、本遺跡でもグスク時代にはほとんどヤコウガイが出土していない。そして、イノー内のマガキガイが優占するものの、内湾の二枚貝類も増加していた。このように考えてみると、本遺跡のマガキガイを中心とした貝類遺体の組成は、漁撈が中心ではないにしろ、比較的海を利用することの多かった生活実態を示していると考えられるのではないだろうか。近接した本遺跡の南に位置する白比川沿いに立地する玉代勢原遺跡のグスク時代の貝類遺体では、アラスジケマン・クワノミカニモリ・スダレハマグリが優占し、マガキガイは2%程度であり、内湾と河口干潟の種を合わせた割合が60%以上であった（黒住, 1993）。このように、ほぼ同時期ながら、貝類遺体の組成は大きく異なっており、伊礼原D遺跡では海での活動が大きかった可能性を示していよう。

また、この時代では淡水産や陸産貝類の割合が増加している。この状況は隣接した伊礼原遺跡でも認められており、その要因は水田や畑地という耕作地の増加に起因していることも考えられている（黒住, 2007a）。

この時期の特徴の一つとして、ハナビラダカラ・ハナマルユキ両種のタカラガイが増加していることがあった（表42）。その一つの要因として、魚網の貝錘が貝塚時代後期の二枚貝製（本遺跡ではリュウキュウサルボオ等）からハナマルユキ製へと変化した（島袋, 1997）ことも想定される。ただ、ハナマルユキと同時に貝錘には利用されないハナビラダカラも増加していることから、タカラガイ類の貝錘利用が増加の主要因とは考えにくい。

この時期に、琉球から中国へ大量のタカラガイ類が運ばれたことは文献上示されており（例えば三島, 1971）、必ずしも中国との交易用ではないが、当時のタカラガイ購入品は「耳たぶくらいの大きさ」であったことも知られている（真栄平, 1991, p. 339）。また、この中国との交易に関係した那覇市の御物グスクの試掘調査では、完形で光沢の残っているタカラガイ類が多量に出土し、交易用に集積・保管されていた可能性の高いことが指摘されている（新田, 1977）。この報告で図示されたタカラガイの写真からの報告者の同定では、ハナマルユキ（4個）・ハナビラダカラ（1個）・キイロダカラ（1個）と考えられ、上記の耳たぶサイズの種であった。これらの中・小形のタカラガイ類は、最終的には御物グスクへ集められたと考えられるが、各集落等で採集・集積されていた可能性も想定されている（黒住, 1995b）。このように考えると、今回本遺跡で、グスク時代にのみ集中してハナビラダカラ・ハナマルユキが得られたことは、この交易

用のタカラガイ集積の結果であるとも推測される。ただ、その出土様式は、必ずしも完形個体ばかりではないので(表41)、交易用の集積との考えは否定されるのかもしれない。また、新田(1977)の報告や本遺跡での発掘でも、これらのタカラガイ類は集積遺構のような形態は記録されていないようである。推測でしかないが、多量のタカラガイ類は植物質の袋状のものに入れられ、屋外に置かれていたために、集積遺構のような出土形態を取っていなかった可能性も想定されるのではないだろうか。また、グスク時代になるといずれにしても、このような交易用集積という視点を持ち、今後、タカラガイ類の出土様式を検討することは必要であると思われる。

③近世から戦前

今回、18世紀以降の近世から戦前にかけてのサンプルも得られた(上記のウ)・エ)および戦前遺構)。グリッド4-8,9のウ)の組成は、グスク時代よりも潮間帯のもの割合が減少し、マガキガイ等のイノーのもの割合が増加し、内湾の二枚貝類も比較的多いものであった。エ)の4-10では、過去の徳川の河辺と思われるものが確認されており(本報告書)、このことによって、淡水産・陸産貝類の割合が増加しているものと考えられる。この両者を除くと、ウ)の組成に類似すると思われる。特に、戦前遺構では、この傾向が顕著である。

そして、報告者が復帰以降の沖縄島でほとんど生息を確認できなかったシャコガイ類のシャゴウが各グリッドから出土しており、この時期までは確実に本地域に生存していたことが初めて示された。シャゴウは、他のシャコガイ類と異なり、基本的に岩礁域に生息するのではなく、イノー内の砂底に転がっているような状態で生息している。つまり、道具を必要とせず、簡単に採集できるので、捕獲圧による減少が顕著な種である。この種の生存は、当時の海域環境と捕獲状況を示す指標とも考えられる訳である。

本遺跡の近世期の貝類遺体組成は、潮間帯の小形種の割合が低下する他は、ほぼグスク時代と同様なものであると言えよう。近世の“庶民”居住域の貝類遺体としては、リュウキュウサルボオが優占する豊見城市伊良波西遺跡(花城, 1986)やマガキガイが優占し、サンゴ礁域でのヤコウガイ採集を含む漁撈の想定されている南城市垣花遺跡(黒住, 印刷中)等が知られている。

垣花遺跡の組成と本遺跡の組成は類似していることから、ここでは本遺跡のグリッド4-8から10で示される組成は、漁撈集団かどうかは不明であるが、生活諸活動の中で、ある程度漁撈に重きを置いた集団の貝類遺体組成を示しているのではないかと考えておきたい。特に、北谷町では、18世紀以降、首里等から移動した士族により屋取集落が形成され、“百姓”として農耕に従事していた者の割合が高いこと(例えば田里, 1983)が知られている。このような新たな開墾により、海域への土砂流出も増加したと考えられる(中村, 私信)。そのような海域環境の変化が生じていた状況下でも、本遺跡では内湾や河口干潟の貝類の割合が増加することがなかった。この点も、漁撈に重きを置いていたことの現われと考えられる。

引用文献

沖縄考古学会(編). 1978. 石器時代の沖縄. 140 pp. 新星図書, 沖縄.

安里 進. 1974. 沖縄における原始共同体の解体過程(試論) - 沖縄本島南部・久米島を中心として -. 沖縄歴史研究, (11):65-83.

花城潤子. 1986. 貝殻. In 島 弘(編), 伊良波西遺跡, 豊見城村文化財調査報告書(1):11-18, 64-67. 豊見城村教育委員会, 沖縄.

- 比嘉春美. 1983. 貝類遺存体. In 大城慧 (編), 我謝遺跡, 西原町文化財調査報告書, (5):185-189. 西原町教育委員会, 沖縄.
- 片桐千亜紀 (編). 2004. 後兼久原遺跡, 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書, (22): 1-198, 6 pls. 沖縄県立埋蔵文化センター, 沖縄.
- 片桐千亜紀 (編). 2006. 新城下原第二遺跡, 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書, (35): 336, 13 pls. 沖縄県立埋蔵文化財センター, 沖縄.
- 黒住耐二. 1987. 遺跡出土貝類の生息場所類系[型]化の試み. In 島袋 洋(編), 古我地原貝塚, 沖縄県文化財調査報告書, (84): 359-362. 沖縄県教育委員会, 沖縄.
- 黒住耐二. 1991. 貝類遺存体. In 金武正紀ら (編), 今帰仁城跡発掘調査報告書, II, 今帰仁村文化財調査報告書, (14):340-351. 今帰仁村教育委員会, 沖縄.
- 黒住耐二. 1993. 貝類遺存体. In中村 愿 (編), 玉代勢原遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (13):287-293. 北谷町教育委員会, 沖縄.
- 黒住耐二. 1995a. 貝類遺存体. In 中山清美 (編), 用見崎遺跡, 笠利町文化財調査報告, (20): 34-43. 笠利町教育委員会, 鹿児島.
- 黒住耐二. 1995b. スビにまつわる世界. In 久保弘文・黒住耐二, 生態/検索図鑑.沖縄の海の貝・陸の貝, p. 243. 沖縄出版, 沖縄.
- 黒住耐二. 1999. 琉球列島における貝塚の人々の貝類利用: サンゴ礁 vs 内湾. Venus, 58(1):42. (要旨)
- 黒住耐二. 2002. 貝類遺体からみた奄美・沖縄の自然環境と生活. In 木下尚子(編), 先史琉球の生業と交易—奄美・沖縄の発掘調査から—, pp. 67-86. 熊本大学文学部.
- 黒住耐二. 2003a. 貝類遺体. In 山城安生・島袋春美(編), 後兼久原遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (21):264-268. 北谷町教育委員会, 沖縄.
- 黒住耐二. 2003b. 沖縄における貝類遺体からみた湿地堆積物の検討—後兼久原遺跡のコラムサンプリング調査—. In 山城安生・島袋春美(編), 後兼久原遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (21):401-405. 北谷町教育委員会, 沖縄.
- 黒住耐二. 2003c. 貝類遺体. In 山城安生・島袋春美 (編), 大作原古墓群, 北谷町文化財調査報告書, (22):163-171. 北谷町教育委員会, 沖縄.
- 黒住耐二. 2005. 今帰仁城跡周辺遺跡の貝類遺体. In 宮城弘樹 (編), 今帰仁城跡周辺遺跡, 今帰仁村文化財調査報告書, (20):219-226. 今帰仁村教育委員会, 沖縄.
- 黒住耐二. 2007a. 貝類遺体からみた伊礼原遺跡. In 中村 愿 (編), 伊礼原遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (26): 1-573. 北谷町教育委員会, 沖縄.
- 黒住耐二. 2007b. 胎生淡水産貝類からみた先史時代の沖縄諸島における根栽農耕の可能性. 南島考古, (26): 121-132.
- 黒住耐二. 印刷中. 垣花遺跡から得られた貝類遺体. In 城間宣子 (編), 垣花遺跡, 南城市文化財調査報告書, 南城市教育委員会, 沖縄.
- 黒住耐二・金城亀信. 1988. 豊見城村の長嶺、保栄茂および平良グスク試掘調査により出土した貝類. In 金城亀信 (編), 豊見城村の遺跡, 豊見城村文化財調査報告書, 3, pp. 137-153. 豊見城村教育委員会, 沖縄.
- 真栄平房昭. 1991. 大航海時代のイギリス・オランダと琉球. In新琉球史—古琉球編—, pp. 319-341. 琉球新報社, 沖縄.
- 三島 格. 1971. スビとスビ甕. えとのす, (2). (三島格.1977.貝をめぐる考古学.学生社による)
- 宮城弘樹. 2006. グスクと集落の関係について (覚書) —今帰仁城跡を中心として—. 南島考古, (25):27-40.
- 中村 愿 (編). 1989. 伊礼原B遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (8): 1-54. 24 pls. 北谷町教育委員会, 沖縄.

- 中村 愿 (編) . 2006. 伊礼原遺跡—図録集—, 北谷町文化財調査報告書, (25):1-104. 北谷町教育委員会, 沖縄.
- 中村 愿 (編) . 2007. 伊礼原遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (26):1-573. 北谷町教育委員会, 沖縄.
- 新田重清. 1977. 基地内文化財調査報告—御物城の考古学的知見—. 沖縄県立博物館紀要, (3):34-37.
- 島袋春美. 1997. 県内出土の「タカラガイ製品」について. 南島考古, (16):61-70.
- 田里友里. 1983. 屋取集落. In 沖縄大百科, pp. 730-731. 沖縄タイムス社, 沖縄.
- 辻 誠一郎. 2007. 低湿地区. In 中村 愿 (編) , 伊礼原遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (26):37-43. 北谷町教育委員会, 沖縄.

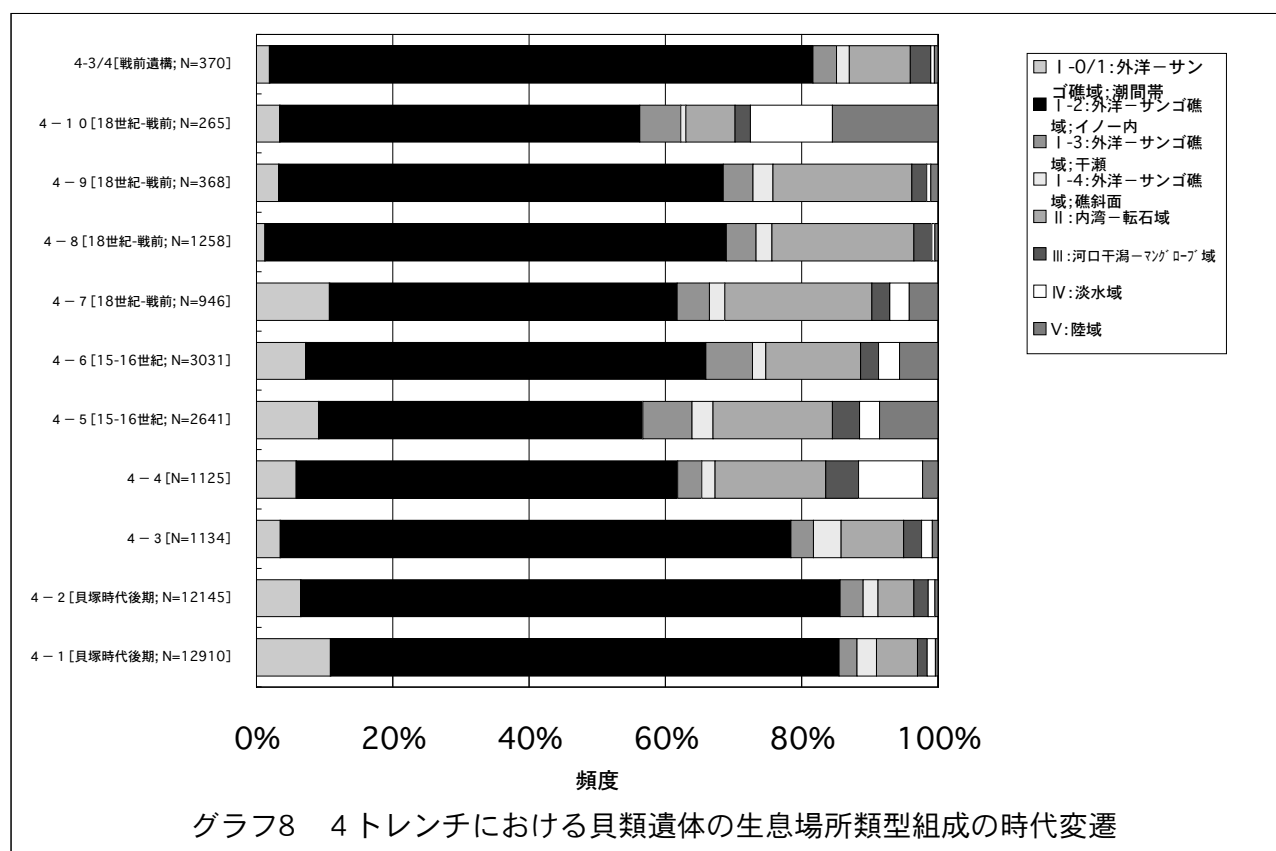


表40-1 出土貝類とその生息場所類型.

		生息場所 類型		
軟体動物門 Mollusca			ヤツシロガイ科 Tonniidae	
腹足綱 Gastropoda			ウズラガイ	Tonna perdas Ⅰ-2-c
ヨメガカサ科 Nacellidae			イワカワトキワ	Malea (Quimalea) pomum Ⅱ-4-c
オオベッコウガサ	Cellana testudinaria	Ⅰ-1-a	フジツガイ科 Ranellidae	
ユキノカサ科 Lottiidae			ミツカドボラ	Cymatium (C.) nicobaricum Ⅰ-2-a
リュウキュウウノアシ	Patelloida saccharina	Ⅰ-0-a	サツマボラ	Cymatium (Septa) aquatilis Ⅰ-2-a
ミミガイ科 Haliotidae			シオボラ	Cymatium (G.) muricinum Ⅰ-2-a
マナナゴ	Haliotis (Ovinotis) ovina	Ⅰ-3-a	シノマキガイ	Cymatium (Monoplex) pileare Ⅰ-4-a
リュウテン科 Turbinidae			ホラガイ	Charonia tritonis Ⅰ-4-a
コシダカサザエ	Turbo (Marma.) stenogyrum	Ⅰ-2-a	オキニシ科 Bursidae	
チョウセンサザエ	Turbo (Marma.) angyrostomus	Ⅰ-3-a	イワカウネボウ	Bursa (C.) granularis Ⅰ-2-a
ヤコウガイ	Turbo (Lunatia) marmoratus	Ⅰ-4-a	オキニシ	Bursa (s.s.) bufonis dunkeri Ⅰ-3-a
カンギク	Lunella moniliformis	Ⅱ-1-b	シワチナルトボラ	Tutufa rebeta Ⅰ-4-a
オオウラウズ	Astralium rhodostoma	Ⅰ-2-a	トウカムリ科 Cassidae	
ニシキウズ科 Trochidae			マンボウガイ	Cypraecassis rufa Ⅰ-4-c
ニシキウズ	Trochus (s.s.) maculatus	Ⅰ-2-a	アツキガイ科 Muricidae	
ムラサキウズ	Trochus (s.s.) stellatus	Ⅰ-3-a	ガンゼキホラ	Chicoreus burunneus Ⅰ-2-a
ギンタカハマ	Trochus (Tectus) pyramis	Ⅰ-4-a	テンクガイ	Chicoreus ramosus Ⅰ-4-a
ベニシリダカ	Trochus (Tectus) conus	Ⅰ-4-a	コイワニシ	Thais (Semi.) squamosa Ⅱ-1-a
サラサバテイラ	Trochus (Rochia) niloticus	Ⅰ-4-a	シラクモガイ	Thais (Stramonita) armigera Ⅰ-3-a
オキナワイシダタミ	Mondonta labio	Ⅱ-1-b	ツノレイシ	Mancinella tuberosa Ⅰ-3-a
アマオブネ科 Neritidae			クチペニレイシダマシ	Drupella concatenata Ⅱ-2-a
コシダカアマガイ	Nerita (Ritena) striata	Ⅰ-1-a	ハナワレイシ	Nassa vexillum Ⅰ-3-a
キバアマガイ	Nerita (Ritena) plicata	Ⅰ-0-a	ムラサキイガレイシガイ	Drupa (s.s.) morum Ⅰ-3-a
フトスジアマガイ	Nerita (Ritena) costata	Ⅰ-0-a	アカイガレイシ	Drupa (Ricinella) rubusidaeus Ⅰ-3-a
アマオブネ	Nerita (Thelyo.) albicilla	Ⅰ-1-b	オニコブシガイ科 Vasidea	
マルアマオブネ	Nerita (Thelyo.) squamulata	Ⅱ-1-b	オニコブシ	Vasum ceramicum Ⅰ-3-a
オオマルアマオブネ	Nerita (Thelyo.) chamaeleon	Ⅰ-1-b	オニコブシ	Vasum turbinellum Ⅰ-2-a
ニシキアマオブネ	Nerita (Ampninerita) polita	Ⅰ-1-c	フトコロガイ科 Columbelloidea	
カノコガイ	Clithon sowerbianus	Ⅲ-0-e	フトコロガイ	Euplica vesicolor Ⅱ-2-d
カバクチカノコ	Neritina (s.s.) pulligera	Ⅳ-5	エゾバイ科 Buccinidae	
シマカノコ	Neritina (Vittina) turrata	Ⅲ-0-e	ノシガイ	Engina (Pusio.) mendicaria Ⅰ-1-a
タニシ科 Viviparidae			ホラダマシ	Ⅰ-2-a
マルタニシ	Chipangopaludina c. laeta	Ⅳ-6	シマベッコウバイ	Japeuthria cingulata Ⅱ-1-b
ヤマタニシ科 Cyclophoridae			オリイレイヨフバイ科 Nassariidae	
オキナワヤマタニシ	Cyclophorus turgidus	Ⅴ-8	イボヨフバイ	Nassarius coronatus Ⅱ-1-c
オニノツノガイ科 Cerithiidae			ヒメオリイレムシロ	Nassarius sp. cf. nodifer Ⅱ-2-c
オニノツノガイ	Cerithium (s.s.) modulosum	Ⅰ-2-c	イトマキボラ科 Fascioliariidae	
コオニノツノガイ	Cerithium (s.s.) columnum	Ⅰ-2-a	イトマキボラ	Pleuroploca trapezium Ⅰ-2-a
ヒメクワノミカニモリ	Clypeomorus zonatus	Ⅱ-2-c	ナガイトマキボラ	Pleuroploca filamentosa Ⅰ-2-a
トウガタカニモリ	Rhinoclavis sinensis	Ⅰ-2-c	ツノマトドキ	Latirus belcheri Ⅰ-3-a
ヨコワカニモリ	Rhinoclavis aspera	Ⅰ-2-c	リュウキュウツノマタ	Latirus polygonus Ⅰ-3-a
カヤノミカニモリ	Clypeomorus bifasciata	Ⅰ-1-b	ムラサキツノマタモドキ	Peristernia nassatula Ⅰ-3-a
イワ(ウミニナ)カニモリ	Clypeomorus batillariaeformis	Ⅱ-1-b	マルニシ	Leucozonia smaragdula Ⅰ-3-a
クワノミカニモリ	Clypeomorus chemnitziana	Ⅰ-1-b	チトセボラ	Fusinus nicobaricus Ⅰ-2-c
ヘナタリ科 Cerithiidae			マクラガイ科 Olividae	
キバウミニナ	Terebralia parstris	Ⅲ-1-c	サツマビナ	Oliva annulata Ⅰ-2-c
ウミニナ科 Batillariidae			フデガイ科 Mitridea	
リュウキュウウミニナ	Batillaria flectosiphonata	Ⅱ-1-c	チョウセンフデ	Mitra mitra Ⅰ-2-c
イボウミニナ	Batillaria zonalis	Ⅲ-1-c	ヒメチョウセンフデ	Mitra episcopalis Ⅰ-2-c
ゴマフナ科 Planaxidae			オオシマヤタテ	Strigatella retusa Ⅰ-1-a
ゴマフナ	Planaxis sulcatus	Ⅰ-0-a	イモフデガイ	Pterygia dactylus Ⅰ-1-b
トウガタカワニナ科 Thiaridae			ミオムシガイ科 Costellariidae	
トウガタカワニナ	Thiara scabra	Ⅳ-5,6	ミノムシガイ	Vexillum balteolatum Ⅱ-2-c
ヌノメカワニナ	Melanoides tuberculata	Ⅳ-6	オオミノムシガイ	Vexillum plicarium Ⅱ-2-c
スグカワニナ	Stenomelania uniformis	Ⅳ-6	イモガイ科 Conidae	
ヨシカワニナ	Stenomelania plicaria	Ⅳ-6	マダライモ	Conus (Virroconus) ebraeus Ⅰ-1-a
カワニナ科 Pleuroceridae			コマダライモ	Conus (Virroconus) chaldaeus Ⅰ-1-a
カワニナ	Semisulcospira bensoni	Ⅳ-5,6	サヤガタイモ	Conus (Virroconus) fulgetrum Ⅰ-1-a
スイショウガイ科 Strombidae			ジュズガケサヤガタイモ	Conus (Virroconus) coronatus Ⅰ-1-a
ムカシタモト	Strombus (Canarium) mutabilis	Ⅰ-2-c	キヌカツギイモ	Conus (Virgiconus) flavidus Ⅰ-2-a
オハグロガイ	Strombus (Canarium) urceum	Ⅱ-2-c	イボシマイモ	Conus (Virgiconus) lividus Ⅰ-2-a
ネジマガキカイ	Strombus (Gibb.) g. gibbosus	Ⅱ-1-c	ヤセイモ	Conus (Virgiconus) emaciatus Ⅰ-2-c
マガキガイ	Strombus (Conomurex) luhuanus	Ⅰ-2-c	イボカバイモ	Conus (Virgiconus) distans Ⅰ-2-c
イボソデガイ	Strombus (L.) lentiginosus	Ⅰ-2-c	ヤナギンボリイモ	Conus (Rhizoconus) miles Ⅰ-3-a
ヒメゴホウラ	Strombus (Tricornis) sinuatus	Ⅰ-4-c	サラサツナシ	Conus (Rhizoconus) capitaneus Ⅰ-4-c
アツデガイ	Strombus (T.) thersites	Ⅰ-4-c	カバミナシ	Conus (Rhizoconus) vexillum Ⅰ-4-c
ゴホウラ	Strombus (T.) latissimus	Ⅰ-4-c	ヤキイモ	Conus (Pinoconus) magus Ⅰ-2-c
クモガイ	Lambis lambis	Ⅰ-2-c	サラサモドキ	Conus (Dauciconus) vitulinus Ⅰ-2-c
ラクダガイ	Lambis truncata sebae	Ⅰ-4-c	アジロイモ	Conus (Darioconus) pennaceus Ⅰ-2-c
スイジガイ	Harpago chiragra	Ⅰ-2-c	タガヤサンミナシ	Conus (Darioconus) textile Ⅰ-2-c
スズメガイ科 Hipponicidae			ニシキミナシ	Conus (Strioconus) striatus Ⅰ-2-c
アツキクスズメ	Sabia acuta	Ⅰ-3-a	シロアンボイナ	Conus (Gastriidum) tulipa Ⅰ-2-c
カワチドリ	Antisabia foliacea	Ⅰ-3-a	クロミナシガイ	Conus (s.s.) marmoreus Ⅰ-2-c
ムカデガイ科 Vermetidae			ミカドミナシ	Conus (Rhombus) imperialis Ⅰ-2-c
フタモチヘビガイ	Dendropoma maximum	Ⅰ-2-a	アカシマミナシ	Conus (Leptoconus) generalis Ⅰ-2-c
タカラガイ科 Cypraeidae			ゴマフイモ	Conus (Puncticulis) pulicarius Ⅰ-2-c
キイロダカラ	Cypraea (Monetaria) moneta	Ⅰ-1-a	コモイモ	Conus (Puncticulis) arenatus Ⅰ-2-c
ハナビラダカラ	Cypraea (Monetaria) annulus	Ⅰ-1-a	クロザメモドキ	Conus (Lithoconus) eburneus Ⅰ-2-c
ナツメモドキ	Cypraea (Eronea) errones	Ⅰ-2-b	アンペンクロザメ	Conus (Lithoconus) litteratus Ⅰ-2-c
コモダカラ	Cypraea (Erosaria) erosa	Ⅰ-2-b	クロフモドキ	Conus (Lithoconus) leopardas Ⅰ-2-c
ハナマルユキ	Cypraea (R.) caputserpentis	Ⅰ-3-a	クダマキガイ科 Turridae	
ヤクシマダカラ	Cypraea (Arabica) arabica	Ⅰ-2-a	トラフクダマキ	Lophotoma acuta Ⅰ-2-c
ホソヤクシマダカラ	Cypraea (Arabica) eglantina	Ⅰ-2-a	タケノコガイ科 Terebridae	
タルダカラ	Cypraea (Talparia) talpa	Ⅰ-2-a	リュウキュウタケ	Oxymeris maculatus Ⅰ-2-c
ホンダカラガイ	Cypraea (s.s.) tigris	Ⅰ-2-c	タケノコガイ	Terebra subulata Ⅰ-2-c
ホシキヌタ	Cypraea (Mystaponda) vitellus	Ⅰ-2-a	トウガタガイ科 Pyramidellidae	
タマガイ科 Naticidae			オオシノミクチキレ	Pyramidella (M.) ventricosa Ⅱ-2-c
トミガイ	Polinices tumidus	Ⅰ-2-c	シノミクチキレ	Otopleura (Aphalista) mitralis Ⅰ-2-c
ソアキトミガイ	Polinices flemingianus	Ⅰ-2-c	ナツメガイ科 Bullidae	
リスガイ	Mammilla melanostoma	Ⅰ-2-c	ナツメガイ	Bulla vernicosa Ⅰ-2-c
ホウシュノタマ	Notochochlis quahtieriana	Ⅱ-1-c	タマゴガイ科 Attyidae	
モクメダマ	Tanea undulata	Ⅱ-2-c	カイコガイ	Aliculastrum cylindricum Ⅱ-2-c
			カラマツガイ科 Siphonariidae	
			ヒラカラマツ	Siphonaria atra Ⅰ-0-a

表40-2 出土具類とその生息場所類型(つづき).

		生息場所 類型	二枚貝印象化石(離型)	fossil bivalve (moult)	VI-12
モノアラガイ科	Lymnaeidae				
タイワンモノアラガイ	<i>Radix auricularia swinhoei</i>	IV-6	多板綱 Polyplacophola		
ヒメモノアラガイ	<i>Austropeplea ollula</i>	IV-6	ヒザラガイ科 Chitonidae		
キセルガイ科	Clausiliidae		ヒザラガイ類	Acanthopleura ap.	I-1-a
ツヤギセル	<i>Luchuphaedusa p. praeclara</i>	V-8	頭足綱 Cephalopoda		
アフリカマイマイ科	Achatinidae		コウイカ科 Sepiidae		
アフリカマイマイ	<i>Achatina fulica</i>	V-9	コブシメ?	<i>Sepia latimanus?</i>	I-2
ナンバンマイマイ科	Camaenidae		棘皮動物門 Echinodermata		
シュリマイマイ	<i>Satsuma m. mercatoria</i> var.	V-8	ウニ綱 Echinoidea		
カツレンマイマイ	<i>Satsuma m. katsurenensis</i>	V-7	ナガウニ科 Echinometridae		
オナジマカマイマイ	<i>Satsuma largillierti</i> var.	V-8	パイブウニ(棘)	<i>Heterocentrotus mammillatus</i> (g1)	I-3-a
オナジマイマイ科	Bradybaenidae				
バンドナマイマイ	<i>Bradybaena circulus</i>	V-8			
オナジマカマイマイ	<i>Acusta d. despecta</i>	V-8			
イトマンケマイマイ	<i>Aegista scepasma</i>	V-7			
二枚貝綱	Bivalvia				
フネガイ科	Arcidae				
フネガイ	<i>Arca avellana</i>	I-2-a			
エガイ	<i>Barbatia (Abarbatia) lima</i>	I-1-a			
ベニエガイ	<i>Barbatia (Ustularca) fusca</i>				
リュウキュウサルボオ	<i>Barbatia (S.) obtusoides</i>	II-1-b			
イガイ科	Mytilidae				
リュウキュウヒバリ	<i>Modiolus auriculatus</i>	I-1-a			
ウグイスガイ科	Pteriidae				
クロチョウガイ	<i>Pinctada margaritifera</i>	I-4-a			
アコヤガイ?		II-2-b			
ミドリアオリ	<i>Pinctada panasesae</i>	I-1-a			
シュモクアオリ科	Isognomonidae				
カイシアオリ	<i>Isognomon perna</i>	I-1-b			
ミノガイ科	Limidae				
ミノガイ	<i>Lima vulgaris</i>	I-2-a			
ウミギク科	Spondylidae				
メンガイ類	<i>Spondylus</i> sp.	I-2-a			
イタボガキ科	Ostreidae				
ニセマガキ	<i>Saccostrea echinata</i>	II-1-b			
オハグロガキモドキ	<i>Saccostrea circumsuta</i>	II-1-b			
ノコギリガキ	<i>Dendrostrea sandwichensis</i>				
ツキガイ科	Lucinidae				
ツキガイ	<i>Codakia tigerna</i>	I-2-c			
クチベニツキガイ	<i>Codakia punctata</i>	I-2-c			
ウラツキガイ	<i>Codakia paytenorum</i>	II-2-c			
ヒメツキガイ	<i>epicodakia bella</i>	I-2-c			
カブラツキガイ	<i>Anodontia edentula</i>	II-2-c			
カゴガイ科	Fimbriidae				
カゴガイ	<i>Fimbria soverbii</i>	II-2-c			
キクザル科	Chamidae				
カネツケザル	<i>Chama iostoma</i>	I-1-a			
シロザル	<i>Chama brassica</i>	I-4-a			
ザルガイ科	Cardiidae				
カワラガイ	<i>Fragum unedo</i>	II-2-c			
オキナワヒシガイ	<i>Fragum loochooanum</i>	II-2-c			
リュウキュウアオイ	<i>Corculum cardissa</i>	I-2-b			
リュウキュウザルガイ	<i>Regozara flavum</i>	II-2-c			
シャコガイ科	Tridacnidae				
シラナミ	<i>Tridacna maxima</i>	I-2-a			
ヒレジャコ	<i>Tridacna squamosa</i>	I-2-c			
ヒメジャコ	<i>Tridacna crocea</i>	I-2-a			
シャゴウ	<i>Hippopus hippopus</i>	I-2-c			
バカガイ科	Mactridae				
リュウキュウバカガイ	<i>Mactra maculata</i>	II-2-c			
タママキ	<i>Mactra cuneata?</i>	II-1-c			
リュウキュウアリソガイ		II-2-c			
ユキガイ	<i>Meropesta nicobarica</i>	II-2-c			
チドリマスオガイ科	Mesodesmatidea				
イソハマグリ	<i>Atactodea striata</i>	I-1-c			
ナミノコマスオ	<i>Davila plana</i>	I-1-c			
フジノハナガイ科	Donacidae				
リュウキュウナミノコ	<i>Latona faba</i>	I-1-c			
ニッコウガイ科	Tellinidae				
ニッコウガイ	<i>Tellina virgata</i>	II-2-c			
リュウキュウシラトリ	<i>Quidnipagus palatam</i>	II-1-c			
サメザラガイ	<i>Scutarcopagia scobinata</i>	I-2-c			
アサジガイ科	Semelidae				
サメザラモドキ	<i>Semele carnicolor</i>	II-1-c			
イソシジミ科	Psammobiidae				
リュウキュウマスオ	<i>Asaphis violacens</i>	II-1-c			
マスオガイ	<i>Psammonaea elongata</i>	II-1-c			
シジミ科	Corbiculidae				
シレナシジミ	<i>Geloina erosa</i>	III-0-c			
マルスダレガイ科	Veneridae				
ヌノメガイ	<i>Periglypta puerpera</i>	II-2-c			
アラヌノメガイ	<i>Periglypta reticulata</i>	I-2-c			
カノコアサリ	<i>Glycydonta marica</i>	I-2-c			
ホソスジイナミガイ	<i>Gafrarium pectinatum</i>	II-1-c			
アラスシケマンガイ	<i>Gafrarium tumidum</i>	III-1-c			
ユウカゲハマグリ	<i>Pitar striatum</i>	II-2-c			
オイノカガミ	<i>Bonartemis histrio</i>	II-2-c			
リュウキュウアサリ	<i>Tapes literatus</i>	II-2-c			
ヒメリュウキュウアサリ	<i>Tapes belcheri</i>	II-2-c			
ヒメアサリ	<i>Ruditapes variegata</i>	II-1-c			
スダレハマグリ	<i>Katelysia japonica</i>	II-1-c			
ハマグリ類	<i>Meretrix *****Iamarckii?</i>	II-2-c			

生息場所類型

- I : 外洋-サンゴ礁域
 II : 内湾-転石域
 III : 河口干潟-マングローブ域
 IV : 淡水域
 V : 陸域
 VI : その他
- 0 : 潮間帯上部(Iではノッチ, IIIではマングローブ)
 1 : 潮間帯中・下部
 2 : 亜潮間帯上縁部(Iではイノー)
 3 : 干瀬(IIのみ適用)
 4 : 礁斜面及びその下部
 5 : 止水
 6 : 流水
 7 : 林内
 8 : 林内・林縁部
 9 : 林縁部
 10 : 海浜部
 11 : 打ち上げ物
 12 : 化石
- a : 岩礁/岩盤
 b : 転石
 c : 礫/砂/泥底
 d : 植物上
 e : 淡水の流入する礫底

表41-1 4 トレンチのグリッド別出土貝類の詳細.

生息場所類型	グリッド番号 4-1		4-2		4-3		4-4	
		MNI		MNI		MNI		MNI
キバアマガイ				1				
フトスジアマガイ								
オオベッコウガサ	1,1b	1						
コシダカアマガイ								
ゴマフニナ								
キイロダカラ	3(1c),f	3		1				
ハナヒラダカラ	19,2il	21		4,3il			3,2il	5
ノシガイ				1				
オオシマヤタテ								
マダライモ	20(13c),4u	11		30(17c),3b,5(1c)u	17	2c,3u	3	2,3uc
コマダライモ	1,2u	3		1				
サヤガタイモ	14(1c),6u	19		1c,4u	4	1,1u	2	1,2u
ジュズガケサヤガタイモ	2u	2		2(1c),2u	3			
エガイ	7,2u/7,3u	10		7,5u/10,4u	14			1/1
リュウキュウヒバリ								1u/0
クロチョウガイ	f	1		3u/1,2u	3			
ヒザラガイ類								f
アマオブネ		1		5,f	6			
クワノミカニモリ	8u	8		2(1c),4u	5	1	1	1,1b,1u
カヤノミカニモリ								1u
イモフデガイ	1b,1u	1						
カイシアオリ	1u/2u	2		1d/0,f	1			
ニシキアマオブネ	2,f	3		3,1b,1u	4			
イソハマグリ	490,740u/563,729u	1292		456(2c),250u/408(1c),252u	704	19,12u/20,6u	31	29,8u/30(1c),17u
ナミノコムスオ	0/2u	2		0/1	1			
リュウキュウナミノコ	15,5u/5,2u	20		4,4u/6,1u	8	1/0	1	1,1u/1u
コシダカサザエ	1	1						
オオウラウス	2u	2		1u	1			
ニシキウス	1,2u	3		1,4(2c)u	3			2b
コオノツノガイ	1b	1						
ヤクシマダカラ	7il	7		2,7(3c)il,2u	6	2il	2	1il
ホシキヌタ	1,2il	3		2,f	3			
シオボラ				2(1c),1u	1			
ミツカドボラ	3,3u	6		3,1u	4	1	1	
サツマボラ								
イワカワウネボウ								
ガンゼキボラ	33,60b,6u	93		35,73b,13u	108	1,3b,2u	4	2,1b
コオニコブシ	36,13b,11u	49		50(1d),8b,10u	59	4,1u	5	9,2u
ホラダマシ								
イトマキボラ	14,58b,15u	72		18,74b,26u	92	9,4b,3u	13	7,7(1c)b,7u
ナガイトマキボラ	1,1u	2		f	1			1b
キヌカツギイモ	2	2		2	2			
イボシマイモ				2,1u	3	2(1e)	1	
フネガイ								
ベニエガイ	0/1u	1		1/1	1			
ミノガイ								
メンガイ類	12(2d),8u/17(3d),8u	22		26(2d),12(1d)u/11,9u	35	1u/4,2u	6	6(1c),1u/3,
シラナミ	188,148u/177(1d),123	336		8cv,242(1d),130u/267,138u	413	38(1d),11u/29(1d),15u	48	24,14u/23,15u
ヒメジャコ	211,149u/170,160u	360		228,202u/238,231u	469	43,20u/34,23u	63	18,8u/18,11u
ナツメモドキ	1	1						1
コモンドカラ								
カワラガイ	24,46u/41,45u	86		33(1c),66u/21,66u	98	9,4u/6,3u	13	13,7u/19,12u
オノツノガイ	8,3b,109u	117		16,4b,151(1d)u	166	3,6b,10(1d)u	12	2,2b,21u
トウガタカニモリ								
ムカシタモト	1,1u	2		1u	1	1u	1	1,1u
マガキガイ	1222(1c),2b,6963u	8184		1634,8b,6147u	7781	141,1b,479u	620	87,333u
イボソデガイ	38,3b,53u	91		36,37u	73	1,1b,1ol,3u	4	4,1ol,4u
クモガイ	1,2b,84oi,41u	85		6,6b,155ol,55(1d)u	161	3,4b,22ol,16u	25	2,7b,16ol,23u
スイジガイ	1b,1u	1		1b,2(1d)ol,2(1d)u	2	f	1	1b,f,1jf
ホシダカラガイ	3,25(1c)il,1u	27		24il,2u	24	1il	1	5il,1u
トミガイ	2							
ヘソアキトミガイ								
リスガイ	5,2u	7		5,2u	7	1	1	
ウスラガイ				1u	1			
チトセボラ	3b,1u	3		1,6b,1u	7	1	1	f
サツマヒナ	1	1						
チョウセンフデ	1u	1						
ヒメチョウセンフデ								
ヤセイイモ	2u	2		2u	2	1	1	
イボカイイモ				1u	1			
サラサモドキ	2,1b,2u	4		2b,6u	6			1u
アジロイモ	1c,f	1		1,f	2			
タガヤサンミナシ	f	1		1b	1			
ニシキミナシ	1u	1		4b,2u	4			
シロアンボイナ								
ミカドミナシ	4b,2u	4		1,4b,4u	5	2u	2	
アカシマミナシ	1,5b,3(1c)u	6		15(2c)b,7u	13	2,f	3	1c
ゴマフイモ	3,4b,7(5c)u	9		3(1c),2b,4u	6	1,2u	3	1uc,f
コモイモ	3,f	4		2,f	3	1c		
クロザメドキ	1b	1		1,f	2	f	1	
アンボンクロザメ	3,8b,34(1d,15c)	21		6,17(6c)b,30(5c)u	31	2(1c),7(3c)b,1uc	5	4,1b,6(2c)u
クロフモドキ	1b,1u	1		1,1bc,2u	3	f	1	1,1b
トラフクダマキ								
リュウキュウタケガイ	f	1		1b	1			
タケノコガイ	1	1						
ナツメガイ						1c		
カブラツキガイ	2/3,1u	4						
クチベニツキガイ	1,1u/0	2						0/1u
ウラツキガイ	7/6,5u	11				3/7	7	6,2u/11,2u
ヒレジャコ	16,39u/12,43u	55		22,32u/18,40u	58	1,8u/4,5u	9	5,3u/2,6u
シャゴウ	2,38u/9(1d),32u	40		13,44u/15,39u	58	5,6u/6,10u	16	1,9u/2,4u
サメザラガイ	1/0	1						
アラヌノメガイ								1/0
カノコアサリ								
スイショウガイ科	1b,7u			1,8u		1u		1b,1c
タカラガイ科	2,1il	3		4il,1ol	4	f		f
小型イモガイ								
イモガイ科	1,7b,36u			13,3b,23(2d)u	13	1,1b,5u	1	2,3u
中型イモガイ				5u		1	1	
大型イモガイ				1	1			
パイプユニ					1			
クブシミ								
シャコガイ類	12u/15u			7u/9u		f		f

B:焼け, b:体層, c:色彩残り, d:死殻, f:破片, j:幼貝, ol:外唇, c:色彩残り, u:殻頂, 二枚貝は左ノ右.

表41-2 4トレンチのグリッド別出土貝類の詳細(つづき-1).

生息場所類型	グリッド番号 4-1		4-2		4-3		4-4		4-5		
	MNI		MNI		MNI		MNI		MNI		
チョウセンサザエ	I-3-a	7,6b,60(5d)u	62	10,9b,63(2c,7d)u	64	3,2b,14(1d)u	16	2,20(1d)u	21	16(1d),6b,49(1d)u	63
チョウセンサザエ(蓋)	I-3-a	65,2u	67	50,4u	54	14	14	5,f	6	42,8u	50
ムラサキウズ	I-3-a									1b	1
アツクスズメ	I-3-a									1	1
ハナマルユキ	I-3-a	16,4il	20	16,8il,1u	24	1,f	2	1,f	2	49(6c),19il	52
オキニシ	I-3-a	4,4b,1u	8	9,7(1b)1u	15	2,1b	3			9(1d),4b,2u	12
ツノレイシ	I-3-a	5,133b,2u	138	10,182(1d)b,3u	191	6,3b,1u	9	4(1h),2b,2u	5	28(1c,5h),25b,7u	47
シラクモガイ	I-3-a	3,9b,1	12	6(1d),11b,4u	16	2	2	2u	2	1bd	2
ムラサキガイレイシガイ	I-3-a	2,1u	3	5,1u	6	1	1			2	2
アカイガイレイシ	I-3-a	48,3b,4u	52	51(1d),2b,5u	55	2(1d),1b	2	2(1d)	1	3(1d),2u	4
オニコブシ	I-3-a	3,4b,2u	7	5,5b,2u	10			2u	2	1,1b,1u	2
リュウキュウツノマタ	I-3-a	1	1								
ムラサキツノマタモドキ	I-3-a									1	
ツノマタモドキ	I-3-a	2	2		1		1			1	
マルニシ	I-3-a										
ヤナギシポリイモ	I-3-a	3(1c),3b,31u	33	5,8b,26u	31	2b,2u	2	7u	7	4,1b,1u	5
ヤコウガイ	I-4-a	4u	4	4u	4	1,f	2	1u,f	2	1u,f	2
ヤコウガイ(蓋)	I-4-a	2,f	3	f	1	1,f	2	1	1	1,f	2
ギンタカハマ	I-4-a	5u	5	2u	2					1b	1
ベニシリダカ	I-4-a			1c							
サラサハテイラ	I-4-a	10,64b,295u	305	157(110c),62b,165(3d)u	209	19(5c)b,34(9c)u	37	3,8(2c)b,30(17c)	16	6(1c),20(2c)b,97(31c)	71
シノマキ	I-4-a	1u	1	1	1						
ホラガイ	I-4-a	f	1	2,2b	4			f	1	f,fc	1
シワクチナルトボラ	I-4-a			1,1u	2						
テングガイ	I-4-a							1b	1		
ミドリアオリ	I-4-a	f	1	2u/1,2u	3	f	1	1/0	1	0/1	1
シロザル	I-4-a	1d,3u/7(1d),3u	9	11(1d),1u/6(1d)	11			1d/0		1/1	1
ヒメゴホウラ	I-4-c	1u	1								
アツソデガイ	I-4-c					1	1				
ゴホウラ	I-4-c			1u	1	f	1	1ol,fd	1	f	1
ラクダガイ	I-4-c	3(1j),4ol,1u	7	1j	1						
マンボウガイ	I-4-c	1u	1								
サラサミナシ	I-4-c	1,4b,29(1d)u	29	1,2b,18(1c)u	18	3,1u	4	f	1	4u	4
カバミナシ	I-4-c	1,3(1c)	3	1b,1u	1	1u	1			1bc	1
コイワニシ	II-1-a	2b	2								
カネツケザル	II-1-a							0/1	1		
カンギク	II-1-b	10,3u	13	9,3u	11	1,f	2	2,1u	3	5,8(1c)u	12
カンギク(蓋)	II-1-b	4,1u	4	12	12	4	4			7,1b,4u	11
オキナワシダタミ	II-1-b			2(1c),1u	2					5(1c),1u	5
マルアマオブネ	II-1-b	4	4	2	2		1			4,1b,2u	6
イワカニモリ	II-1-b	7u	7	1u	1	1	1				
シマベッコウバイ	II-1-b	1,1u	2					1u	1	1	1
リュウキュウサルボオ	II-1-b	178(2A,1d),86u/134,94u	263	176,88u/177,77u	264	19,13u/18,9u	32	13,5u/9,5u	18	11,10u/10,8u	21
ニセマガキ	II-1-b	f	1	3/0	3	1/0	1			1/0	1
オハグロガキモドキ	II-1-b	f	1	1	1						
イボウミナシ	II-1-c	2,12u	14	3,4u	7			1u	1	10,1b,1u	11
ネジマガキカイ	II-1-c	37,63u	100	36(1c)1b,42u	77	3,2b	5	3,1b,9u	12	20,30u	50
ホウシュノタマ	II-1-c	3	3							7(1c),2u	8
イボヨフバイ	II-1-c										
タママキ	II-1-c	2,4u/3u	6	1/1	1			0/1,3u	4	1/1u	1
リュウキュウシラトリ	II-1-c	37,10u/42,3u	47	10,3u/6	13	1cv,3,2u/1,1u	6	6,6u/8,7u	15	31,12u/17,4u	43
サメザラモドキ	II-1-c							1/1	1		
リュウキュウマスオ	II-1-c	2,1u/4,11u	15	15,17u/10,19u	29	7/2	7	3,1u/6,3u	9	12,6/11,14u	25
マスオガイ	II-1-c	21,25u/14,15u	46	10,16u/13,11u	26	5,1u/2,1u	6	8(1c),4u/10,4u	14	20,15u/12,20u	35
ホソスジイナミガイ	II-1-c	6,4u/12,2u	14	3,1u/6	6	2u/4,1u	5	1/6	6	11/18	18
ヒメアサリ	II-1-c	2/0	2					1cv	1	1,1u/1,1u	2
スタレハマグリ	II-1-c	31,10u/24,8u	41	1,2u/6,3u	9	2/1,1u		14/9	14	3,2u/9,3u	12
ホウヤクシマダカラ	II-2-a	1	1	3il	3					1	1
クチベニレイシダマシ	II-2-a										
アコヤガイ?	II-2-b			0/2u	2					f	1
オハグロガイ	II-2-c			1u	1			1,1u	2	1u	1
ヒメオリエレムシロ	II-2-c										
ミノムシガイ	II-2-c							1uc		1	1
オオミノムシガイ	II-2-c									1c,1bc	
クロミナシガイ	II-2-c	13(7c),1b,10c	16	13(7c),,6bc,1u	7	1c,1bc		1c,fc		5(2c),5(1j)u	8
オオシノミクチキレ	II-2-c	1e									
ツキガイ	II-2-c										
ヒメツキガイ	II-2-c	1/0	1	1/2	2			3,1u/1	4	1,1u/3	3
カコガイ	II-2-c							0/1	1		
リュウキュウザルガイ	II-2-c	6,3u/5,1u	9	7,1u/9,4u	13	3/1,1u	3	6/5,f	6	10,2u/8(1d),1u	12
オキナワヒシガイ	II-2-c										
リュウキュウアオガイ	II-2-c										
リュウキュウバカガイ	II-2-c	2/2	2	1u/1,2u	3	1/1	1	0/1u	1	1,1u/2,2u	4
リュウキュウアリソガイ	II-2-c							1,1u/0	2		
ユキガイ	II-2-c							1/0	1	2/3	3
ニッコウガイ	II-2-c									1/1u	1
ヌノメガイ	II-2-c	15,17u/13,15u	32	16,25u/16,20u	41	6,3u/6,2u	9	11,2u/3,2u	13	21,25u/27,27u	54
ユウカゲハマグリ	II-2-c	2,1u/4,4u	8	1,1u/2,1u	3	1u/0	1	5,2u/11(1c)	10	5,4u/14,2u	16
オイノカガミ	II-2-c	8,1u/6	9	1/0	1	0/1,1u	2	1/1	1	1,1u/1,1u	2
リュウキュウアサリ	II-2-c							1/1	1	0/1	1
ヒメリュウキュウアサリ	II-2-c	1/0	1								
ハマグリ類	II-2-c	0/1A	1								
フトコロガイ	II-2-d			1	1					1	1
イワカトキワ	II-4-c									f	
シレナンジミ	III-0-c	16,50u/17,42u	66	28,39u/40,38u	78	9,5u/5,4u	14	1/1,4u	5	4,5u/4,14u	18
カノコガイ	III-0-e										1
キバウミナシ	III-1-c	1u	1					f	1		
リュウキュウウミナシ	III-1-c	4,15u	19	3,2b,12u	15					20,2b,5u	25
アラスジケマンガイ	III-1-c	92,22u/73,31u	114	130,27u/150,25u	175	15,1u/10,2(1c)u	16	22,15u/39,9u	48	55,32u/55,21u	87
カバクチカノコ	IV-5										
トウガタカワニナ	IV-5,6	23,53b,41u	75	69,4b,42u	111	14,1b	15	16,12b,88u	104	47,1b,13u	60
タイワンモノアラガイ	IV-6										
マルタニシ	IV-6	2,1u	3			2	2			2,2b	2
ヌノメカワニナ	IV-6	16,18b,43u	59	5,2b,2u	7	1b	1	f	1	6,1b,5u	11
スグカワニナ	IV-6									1	1
ヨシカワニナ	IV-6	2,1b,17u	19	2,f	3			1b	1	1,1b	2
カツレンマイマイ	V-7	3,1b,1u	4	4,1b,1u	5	1u	1	1,1bc	1	4,1b	5
オキナワヤマタニシ	V-8	17,1b,4u	21	22,2u	24	3	3	9,1u	10	98(2c),5b,8u	104
ツヤギセル	V-8	1u	1								
シュリマイマイ	V-8	2u	2	1	1					1,2b	3
オキナワヤマタカマイマイ	V-8										
パンダナマイマイ	V-8	13,3b,3u	16	21,4b,2u	25	4	4	10,1u	11	91,9b,11u	102
オキナワウスカワマイマイ	V-8	3	3	f	1	1	1	2,1b	3	13	13

表41-3 4トレンチのグリッド別出土貝類の詳細(つづき-2).

	グリッド番号 4-6		4-7		4-8		4-9		4-10		戦前遺構4-3/4	
	MNI		MNI		MNI		MNI		MNI		MNI	
キバアマガイ												
フトスジアマガイ	1	1										
オオベッコウガサ												
コシダカアマガイ	1	1										
コマフニナ	5	5	6	6								
キイロダカラ	3,1il	4	2,1il	3								
ハナヒラダカラ	56(1c),14il,1u	69	16,6il,1u	22	5		1,1il	2	2	2		
ノンガイ												
オオシマヤタテ												
マダライモ	11(6c),4b	9	2(1c),3u	4	2,1u	3	1c		1	1	1c	1
コマダライモ	1	1										
サヤガタイモ	7,3u	10	1,3(1d)u	2	1	1			1			
ジュズガケサヤガタイモ	1	1							1			
エガイ	1/4,1u	5	1/1	1	1/6	6	0/1u	1	0/1u	1		
リュウキュウヒバリ			1u/0	1								
クロチョウガイ	f	1										
ヒザラガイ類												
アマオブネ	1,1b,1u	2	1,1u	2					1	1		
クワノミカニモリ	12(1c),3u	14	6,5b,1u	11	1							
カヤノミカニモリ												
イモフデガイ	1	1										
カイシアオリ	f	1	1/0	1								
ニシアアマオブネ	3	3	1b	1								
イソハマグリ	42,31u/54,33u	87	27,18u/18,18u	45	4,1u/2,1u	5	5,4u/3,2u	9	3/2,2u	4	3,1u/3	4
ナミノコマスオ	1u/0	1										
リュウキュウナミノコ	1,1u/1,2u	3	1u/0	1							1u/0	1
コシダカサザエ												
オオウラウス	1u	1	1u	1	1u	1						
ニシキウス	5(1c),2b,10(2c)u	12	1,4b,2(1c)u	5	3(2c),6(5c)b	1	1,4(1c)b	4	fc			
コオニツノガイ												
ヤクシマダカラ	8(1c),1il	8	1il	1	3il	3	f	1				
ホシキヌタ	4,2il	6	1	1								
シオボラ	2,1b	3	1,1b	2								
ミツカドボラ	10,3u	13	4,1u	5	1	1			2,1b	3		
サツマボラ					2	2						
イワカウネボウ							2					
ガンゼキボラ	13,3b,1u	16	3,2b	5	4	4	3b	3	1	1		
コオニコフシ	28(1j),4b,4u	31	8,4u	12	20,1b	21	6,1u	7	3	3	2	2
ホラダマシ												
イトマキボラ	16,14b,11u	30	4(1d),2b,5u	8	6(1h),7b,3u	12	1,2b,1u	3	1b,1u	1	4,3b,1u	7
ナグイトマキボラ	1,1u	2			1,2u	3					1b	1
キヌカツキイモ	2,3u	5										
イボシマイモ	1,3u	4	2,3u	5	1u	1			1/0	1		
フネガイ												
ベニエガイ	0/1	1	0/1	1								
ミノガイ					0/1	1						
メンガイ類	7,10u/11,3u	17	2,1u/3u	3	10/2,3u	10	3,1u/1d,1u	4	1/1	1	1u/0	1
シラナミ	26,19(1d)/15,15u	44	1,6u/5,5u	10	14,6u/10,8u	20	0,2u/2,3u	5	2u/1u	2	11,6u/8,10u	18
ヒメジャコ	21,16u/28,23u	51	3,7u/2,4u	6	8,9u/12,10u	22	3,3u/5	6	3/2u,1u	3	7,6u/9,6u	15
ナツメモドキ	2(1c)	1	3(1c)	2								
コモンダカラ												
カワラガイ	17,14u/18,23	41	1cv,1,11u/6,8u	15	12,4u/10,4u	16	3,3u/7,7u	14	1/1,2u	3	1/4,4u	8
オオノツノガイ	9(1h),7b,75(1d,2h)u	80	5,1b,31(1d)u	35	10,2b,26u	36	2,8u	10	2,4u	6	2b,3u	5
トウガタカニモリ	1b	1	1b	1								
ムカシタモト	9,1b	10	1	1								
マガキガイ	231(1j),2b,1083u	1314	47,296(1c)u	342	198(11c),476(11)	652	38,139u	177	17,93u	110	53,164u	218
イボソデガイ	3,4u	7	1	1	5,3u	8	1	1			f	1
クモガイ	3(1j),2b,29ol,18u	31	11ol,12u	12	2(1jd),1b,23u	24	2b,7ol,3u	7	4ol,3u	4	4,8b,4ol,6u	12
スイジガイ	f	1			1jc				f	1		
ホシダカラガイ	1,1il,1u	2	1il,1u	1	3ol,1u	3	f	1	1il	1		
トミガイ					1u							
ヘソアキトミガイ					2	2	2	2				
リスガイ	11(1h),9u	19	4,1b	5								
ウスラガイ	2u	2			1u	1						
チトセボラ	1,2(1c),1u	2	1u	1	1u	1	1u	1				
サツマビナ												
チョウセンフデ	1b	1			1,1u	2						
ヒメチョウセンフデ	5	5										
ヤセイモ	1	1					1u	1				
イボカバイモ												
サラサモドキ	1u	1										
アジロイモ	1u	1	1c,1u	1								
タガヤサンミナシ	1u	1									fc	1
ニシキミナシ	1,f	2	f	1								
シロアンボイナ												
ミカドミナシ	1b,2u	2	f	1	f	1					f	1
アカシマミナシ	1b,3u	3	1c,2(1c)u	1	1u	1	1	1			1b,1u	2
コマフイモ	4(1c),1b,1u	4	1uc,f	1	2,1bc	2	1c					
コモンイモ					1c							
クロザメモドキ	2	2	1	1							f	1
アンボンクロザメ	2,2b,13(1c)u	14	2,1b,3(1c)u	4	1,1bc,1u	2	1u	1			1b,3u	3
クロフモドキ	2	2									1u	1
トラフクダマキ												
リュウキュウタケガイ	1,1b	2										
タケノコガイ												
ナツメガイ	1,1u	2										
カブラツキガイ					0/1	1						
クチベニツキガイ	0/1u	1			1/0	1						
ウラツキガイ	8,2u/3	10	6,5u/1,5u	11	1,1u/4,1u	5	1/1	1			0/1	1
ヒレジャコ	1,3u/1	4	1u/2u	2	2u/4u	4	1u/0	1	f	1	1u/1u	1
シャゴウ	4(1j),7u/3,7u	11	2u/1u	2	3,5u/2,5u	8	2,2u/1u	4	1u/1u	1	3u/2,3u	5
サメザラガイ	f	1										
アラヌノメガイ	1,1u/3,1u	4	f	1	1,1u/1u	2						
カノコアサリ	1/0	1										
スイショウガイ科	2u		1u				1	1				
タカラガイ科	f		f				f		f		1u	
小型イモガイ	1,7u	1	1u		1u		1	1				
イモガイ科	1,1b,17u	1	6(1d)u		3,1b,11u		1,f	1	2,3u	2	3b,1u	
中型イモガイ	1u		f		3,2u						f	
大型イモガイ												
バイブウニ		1				2						
クブシミ		1										
シャコガイ類	0/1		1u/0		f		f		f		f	

表41-4 4 トレンチのグリッド別出土貝類の詳細(つづき-3).

	グリッド番号 4-6		4-7		4-8		4-9		4-10		戦前遺構 4-3/4	
		MNI		MNI		MNI		MNI		MNI		MNI
チョウセンサザエ	2,6b,63(3d)u	62	13(1d)u	12	12,2b,19(2c)u	29	1,1b,3u	4	1,2u	3	1b,5u	5
チョウセンサザエ(蓋)	50,1u	51	11,1u	12	7	7	1	1	2,1b	3	3,2u	5
ムラサキウズ					4,1b,3u	7						
アツクスズメ												
ハナマルユキ	51(4c),22il,1ol	69	17(3c),5il,1u	19	6(2c),6il,1ol	10	1,2il	3	1il	1	1c	1
オキニシ	15(1h),1b,1u	15	1	1	2	2			1	1		
ツノレイシ	18(3d,2h,1j),17b,6u	30	2(1h,1j),4b,1u	5	2,f	3	3,1b,1u	4	2,1b	3	2b	2
シラクモガイ	3	3							1	1		1
ムラサキイガイレイシガイ	2,1b	3					1	1				
アカイガレイシ	8,2(1h)	9	1	1			1	1				
オニコブシ					1,f	2	1,f	2				
リュウキュウツノマタ	1,1b	2							1	1		
ムラサキツノマタモドキ												
ツノマタモドキ			1u	1	1u	1			1	1		
マルニシ											1	1
ヤナギシボリイモ	2,14u	16	6u	6	1b,1u	1	f	1	5u	5	1,2b	3
ヤコウガイ	f	1	f	1	f	1					f	1
ヤコウガイ(蓋)	2,f	3			f	1			2f	1	1	1
ギンタカハマ			1u	1	1,1b,2(1c)u	2	1u	1				
ベニシリダカ												
サラサテイラ	2(1c),6(1c)b,63(20c)	44	2,1b,22(8c)u	16	9(3c),6b,18(1c)	23	2,4(2c)b,13(8c)u	9	1u	1	3(1c)b,3(1c)u	3
シノマキ					1	1						
ホラガイ	1b	1	f	1	1b,fc	1						
シワクチナルトボラ												
テングガイ												
ミドリアオリ	f	1	f	1							1/1	1
シロザル	1/0	1	0/1u	1	1/0	1						
ヒメゴホウラ												
アツソデガイ												
ゴホウラ	f	1									f	1
ラクダガイ												
マンボウガイ												
サラサミナシ	2(1c),6u	7	f	1	1u	1	1u	1			2u	2
カバミナシ			fc									
コイワニシ												
カネツケザル	1u/0	1	f	1	1/0	1						
カンギク	13(1c),1b,4u	16	4,3u	7	3	3					1	1
カンギク(蓋)	38,f	39	13,2u	15	1	1	3	3				
オキナワイシダタミ	5(4h)	1										
マルアマオブネ	11	11	5,1u	6			2	2				
イワカニモリ			1u	1								
シマベッコウバイ	3	3	1u	1	1							
リュウキュウサルボオ	9(1d),14u/20,15(1d)	34	3,2u/7,1u	8	8,7u/11,7u	18	4/6,2u	8	1,2u/1,1u	3	4,1u/6,1u	7
ニセマガキ	1/1	1			1/0	1						
オハグロガキモドキ												
イボウミニナ	3,3u	6					1	1				
ネジマガキカイ	21,30u	51	14,11u	25	15,8u	23	4,6u	10	4u	4	1,1u	2
ホウシュノタマ	4	4	2,1u	3								
イボヨフバイ	2	2			1							
タママキ	1/0	1	0/1u	1	2/1,1u	2					0/1u	1
リュウキュウシラトリ	13,8u/13,3u	21	16,6u/6,12u	22	24,4u/11,6u	28	4,2u/2,3u	6			0/1	1
サメザラモドキ												
リュウキュウマスオ	14,3u/8,7u	17	1,9u/2,8u	10	17,9u/7,3u	26	2,2u/1	4	0/1u	1	1/0	1
マスオガイ	6,14u/8,15u	23	8,9u/3,12u	17	18,15u/30,6u	36	1,3u/2,3u	5	1u/1u	1	1/0	1
ホソスズイナミガイ	3,1u/4	4	3,1u/0	4	5/0	5	2/2	2	1/1			
ヒメアサリ	1,1u/1	2									1cv	1
スタレハマグリ	1/3	3	0/2,1u	3	5,3u/6	8	1u/0	1	0/1	1	1/0	1
ホソヤクシマダカラ	f	1										
クチベニレイシダマシ					f	1						
アコヤガイ?	0/1u	1	0/1u	1								
オハグロガイ	1u	1	1	1	2	2						
ヒメオリレムシロ												
ミノムシガイ	1c,2b	2										
オオミノムシガイ					1	1						
クロミナシガイ	6(3c),6(1c)u	8	1,3(1c)u	2	4(3c)	1			1,1u	2	f	1
オオシイノミクチキレ	1c,2b	1										
ツキガイ			0/1u	1								
ヒメツキガイ	1/1u	1	0/1,1u	2	1d/0							
カゴガイ												
リュウキュウザルガイ	2,1u/5,1u	6	1u/0	1	4,1u/1,1u	5	1/0	1				
オキナワヒシガイ			0/1d									
リュウキュウアオイ	f	1										
リュウキュウバカガイ	1,5u/3u	6	2u/1u	2	6,2u/2,2u	8	1,1u/0	2				
リュウキュウアソソガイ												
ユキガイ												
ニッコウガイ	0/1	1										
ヌノメガイ	27,40u/37,38u	75	2,6u/2,8u	10	30,9u/31,13u	44	5(1d),3u/1,6u	7	2u/1,2u	3	4,2u/3	6
ユウカゲハマグリ	8,3u/14,3u	17	3,4u/5,2u	7	12,1u/19,3u	22	1/7	7	0/1u	1		
オイノカガミ	2,1u/2	3	3/0	3	3,1u/3	4	1/0	1			0/1u	1
リュウキュウアサリ	0/1	1			1/2(1c)	1						
ヒメリュウキュウアサリ			0/1									
ハマグリ類												
フトコロガイ												
イワカワトキキ												
シレンシジミ	1,6u/5,7u	12	1,1u/0	2	1u/2,2u	4			0/1u	1	1/1,5u	6
カノコガイ												
キバウミニナ												
リュウキュウウミニナ	10,13u	23	12,21u	33								
アラスクマンガイ	39,28u/28(1j),25	67	10,13u/12,7u	23	17,3u/23,6u	29	2,2u/5,3u	8	2,1u/5	5	2/5	5
カバクチカノコ					1	1						
トウガタカワニナ	69,3b,8u	77	10,1b,3u	13	1b	1	1,f	2	3,3b,28u	31		
タイワンモノアラガイ											1	1
マルタニシ	6,4u	10	3,1b	4	1	1			1c		1u	1
ヌノメカワニナ	2,1b,2u	4	1,3u	4	2	2			1	1		
スグカワニナ												
ヨシカワニナ	1	1	2,4u	6								
カツレンマイマイ	7(1c),4u	10	2,1b,2u	4					5	5		
オキナワヤマタニシ	41(3c),10u	48	4(2c),1b,3(1c)u	4	1	1	1	1	6,1u	7	1c	1
ツヤギセル												
シュリマイマイ	2,f	3										
オキナワヤマタカマイマイ	1u	1										
バンドナマイマイ	83,9b,14u	97	22,7b,8u	30	4,f	5	2,1u	3	21,1b,4u	25	f	1
オキナワウスカワマイマイ	9,1b,4u	13	2b,1u	2			1c		4	4		

表42 4 トレンチにおける優占種の出土状況.

	グリッド番号		4-1		4-2		4-3		4-4		4-5		4-6		4-7		4-8		4-9		4-10		戦前遺構4-3/4		合計
	MNI	%	MNI	%	MNI	%	MNI	%	MNI	%	MNI	%	MNI	%	MNI	%	MNI	%	MNI	%	MNI	%	MNI	%	
I-1:外洋-サンゴ礁域:潮間帯																									
イソハマグリ	1292	10.01	704	5.80	31	2.73	46	4.09	116	4.39	87	2.87	45	4.76	5	0.40	9	2.45	4	1.51	4	1.08	4	1.08	2343
ハナビラダカラ	21	0.16	7	0.06	0	0.00	5	0.44	70	2.65	69	2.28	22	2.33	0	0.00	2	0.54	2	0.75	0	0.00	0	0.00	198
クワミカニモリ	8	0.06	5	0.04	1	0.09	2	0.18	8	0.30	14	0.46	11	1.16	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	49
I-2:外洋-サンゴ礁域:イノー内																									
マキガイ	8184	63.39	7781	64.07	620	54.67	420	37.33	914	34.61	1314	43.35	342	36.15	652	51.83	177	48.10	110	41.51	218	58.92	218	58.92	20732
ヒメジャコ	360	2.79	469	3.85	63	5.56	29	2.58	43	1.63	51	1.68	6	0.63	22	1.75	6	1.63	3	1.13	15	4.05	15	4.05	1067
シラナミ	336	2.60	413	3.40	48	4.23	38	3.38	61	2.31	44	1.45	10	1.06	20	1.59	5	1.36	2	0.75	18	4.86	18	4.86	995
シャゴウ	40	0.31	58	0.48	16	1.41	10	0.89	12	0.45	11	0.36	2	0.21	8	0.64	4	1.09	1	0.38	5	1.35	5	1.35	167
ガンゼキホラ	93	0.72	108	0.89	4	0.35	3	0.27	32	1.21	16	0.53	5	0.53	4	0.32	3	0.82	1	0.38	0	0.00	0	0.00	269
コオニコフシ	49	0.72	59	0.89	5	0.35	11	0.98	32	1.21	31	1.02	12	1.27	21	1.67	7	1.90	3	1.13	3	0.82	3	0.82	232
イトマキホラ	72	0.56	92	0.76	13	1.15	14	1.24	28	1.06	30	0.99	8	0.85	12	0.95	3	0.82	1	0.38	7	1.89	7	1.89	280
オニツノガイ	117	0.91	166	1.37	12	1.06	23	2.04	19	0.72	80	2.64	35	3.70	36	2.86	10	2.72	6	2.26	5	1.35	5	1.35	509
クモガイ	85	0.66	161	1.33	25	2.20	25	2.22	21	0.80	31	1.02	12	1.27	24	1.91	7	1.90	4	1.51	12	3.24	12	3.24	407
I-3:外洋-サンゴ礁域:干瀬																									
チヨウセンササエ	67	0.52	64	0.53	16	1.41	21	1.87	63	2.39	62	2.05	12	1.27	29	2.31	4	1.09	3	1.13	4	1.09	3	1.13	346
ツノレイシ	138	1.07	191	1.57	9	0.79	5	0.44	47	1.78	30	0.99	5	0.53	3	0.24	4	1.09	3	1.13	4	1.09	3	1.13	437
ハナマルユキ	20	0.15	24	0.2	2	0.18	2	0.18	52	1.97	69	2.28	19	2.01	10	0.79	3	0.82	1	0.38	3	0.82	1	0.38	203
I-4:外洋-サンゴ礁域:礁縁面																									
サラサバタイラ	305	2.35	209	1.72	37	3.26	16	1.42	71	2.69	44	1.45	16	1.69	23	1.83	9	2.45	1	0.38	9	2.45	1	0.38	734
II:内湾-艇石域																									
リュウキュウサルボウ	263	2.04	264	2.17	32	2.82	18	1.60	21	0.80	34	1.12	8	0.85	18	1.43	8	2.17	3	1.13	3	1.13	7	1.89	676
ネジマガキカイ	100	0.77	77	0.63	5	0.44	12	1.07	50	1.89	51	1.68	25	2.64	23	1.83	10	2.72	4	1.51	2	0.54	2	0.54	359
カララガイ	86	0.67	98	0.81	13	1.15	31	2.76	52	1.97	41	1.35	15	1.59	16	1.27	14	3.80	3	1.13	3	1.13	8	2.16	377
マスオガイ	46	0.36	26	0.21	6	0.53	14	1.24	35	1.33	23	0.76	17	1.80	36	2.86	5	1.36	1	0.38	1	0.38	1	0.38	210
リュウキュウシラトリ	47	0.36	13	0.11	6	0.53	15	1.33	43	1.63	21	0.69	22	2.33	28	2.23	6	1.63	0	0.00	0	0.00	1	0.27	202
スダレハマグリ	41	0.32	9	0.07	0	0.00	14	1.24	12	0.45	3	0.10	3	0.32	8	0.64	1	0.27	1	0.38	1	0.27	1	0.27	93
カンギク	13	0.10	12	0.10	4	0.35	3	0.27	12	0.45	39	1.29	15	1.59	3	0.24	3	0.82	0	0.00	0	0.00	1	0.27	105
リュウキュウウミナ	19	0.15	15	0.12	0	0.00	0	0.00	25	0.95	23	0.76	33	3.49	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	115
リュウキュウマスオ	15	0.12	29	0.24	7	0.62	9	0.08	25	0.09	17	0.56	10	1.06	26	2.07	4	1.09	1	0.38	1	0.38	1	0.38	144
ウラツキガイ	11	0.09	0	0.00	7	0.62	13	1.16	23	0.87	10	0.33	11	1.16	5	0.40	1	0.27	0	0.00	0	0.00	1	0.27	82
スノメガイ	32	0.25	41	0.34	9	0.79	13	1.16	54	2.04	75	2.47	10	1.06	44	3.50	7	1.90	3	1.13	6	1.62	6	1.62	294
III:河口干潟-マンダローブ域																									
アラシケマンガイ	114	0.88	175	1.44	16	1.41	48	4.27	87	3.29	67	2.21	23	2.43	29	2.31	8	2.17	5	1.89	5	1.35	5	1.35	577
シレナジミ	66	0.51	78	0.64	14	1.23	5	0.44	18	0.68	12	0.40	2	0.21	4	0.32	0	0.00	1	0.38	6	1.62	6	1.62	206
IV:淡水域																									
トウガタカワニナ	75	0.58	111	0.91	15	1.32	104	9.24	60	2.27	77	2.54	13	1.37	1	0.08	2	0.54	31	11.70	0	0.00	0	0.00	489
V:陸域																									
オキナワヤマトアシ	21	0.16	24	0.20	3	0.26	10	0.89	104	3.94	48	1.58	4	0.42	1	0.08	1	0.27	7	2.64	1	0.27	1	0.27	224
ハンダママイ	16	0.12	25	0.21	4	0.35	11	0.98	102	3.86	97	3.20	30	3.17	5	0.40	3	0.82	25	9.43	1	0.27	1	0.27	319
合計	12910		12145		1134		1125		2641		3031		946		1258		368		265		370		370		36193

第2節 伊礼原D遺跡第3・第4トレンチ出土の脊椎動物遺体

樋 泉 岳 二 (早稲田大学)

ここでは伊礼原D遺跡の第3・第4トレンチから出土した脊椎動物遺体(骨類)の特徴について述べる。

1. 資料と方法

分析資料の採集方法は、発掘現場において手で拾い上げられたもの(ピックアップ資料)である。資料の年代については現在検討中とのことであるが、第4トレンチでは4-1~4-4グリッドで貝塚時代後期後半(くびれ平底土器)を主体とする遺物、4-3・4-4グリッドの上層で戦前の遺構、4-5・4-6でグスク時代(15~16世紀)の集落跡、4-7~4-10グリッドで18世紀以降の遺物が確認されている。したがって、今回分析した骨類には貝塚時代後期後半~戦前の幅広い年代の資料が混在していると考えられるが、大まかにはトレンチの東側(4-1グリッド側)で古い時期、西側(4-10グリッド側)で新しい時期の資料が多く含まれているものと推測される。

遺体の同定は、基本的に北谷町教育委員会の島袋春美氏によって行われ、一部資料を筆者が確認した。以下の記述はそのデータに基づくものである。なお、上記の通り資料の出土層準・年代に関してさらに検討を要する状況であるため、今回は最小個体数の算出は行わず、同定標本数のみを集計した。

2. 結果と考察

骨類の分布状況をみると(表63・グラフ9)、第4トレンチからの出土数が多いのに対して、第3トレンチでは少なく、とくに魚類はほとんどみられない。第4トレンチの出土状況をグリッド別にみると、4-5・4-6グリッドからの出土が最も多く、4-1・4-2グリッドと4-8グリッドがこれに次ぐ。その他のグリッドからの出土数は少ない。

骨類の大半は哺乳類遺体で、魚類・爬虫類(カメ類)がこれに次ぐ。他に鳥類が僅かに確認されている。

哺乳類ではイノシシが圧倒的に多く、ウシがこれに次ぎ、ウマも普通にみられる。他にネズミ類・イヌ・ヤギ・ジュゴン・クジラ類が確認されたが、いずれも少数である。なお、イノシシの中にはブタの可能性のある資料が含まれるが、明確な判別は難しく、さらに検討を要する。イノシシの年齢構成については、良好な顎骨標本が得られていないものの、遊離歯ではM3が多くみられることから、とくに若齢に偏る傾向はないようであり、この点からは飼育を示唆する様相は読みとれない。ジュゴンは10点中9点が肋骨破片で、加工痕のある資料も見られることから、骨製品の素材として肋骨が持ち込まれたものと推測される。

爬虫類はウミガメ類が多く、リクガメ類も少数ながら多くのグリッドから出土している。

魚類はフエフキダイ科とハリセンボン科が多く、ブダイ科がこれに次ぐ。他に8分類群が確認されているが、いずれも少数である。

骨類の内容を地区別にみると(グラフ10)、イノシシが最も多く、ウシと魚類がこれに次ぐパターンは全グリッドで共通しているが、ウミガメ類・ジュゴンは東側(4-1~4-6グリッド)で多

いのに対し、ウマは西側で明確に増加し、ウシも不明確ながら西側で多くなる傾向がみられる。魚骨はグリッドごとの出土数の差異が大きく、合計値ではとくに分布の偏りは認められないが、主要魚種のうち、フエフキダイ科とハリセンボン科は4-5グリッドより東側に多いのに対し、ブダイ科は西側でも出土しており、傾向が異なっている（グラフ11）。すなわち、魚骨の組成は東側（4-1～4-5グリッド）ではフエフキダイ科とハリセンボン科に集中する傾向があるのに対して、西側ではこれらが減少し、組成が多様化する傾向がある。以上のような分布の偏りは、先述した地区ごとの資料の年代差をある程度反映しているものと思われる。

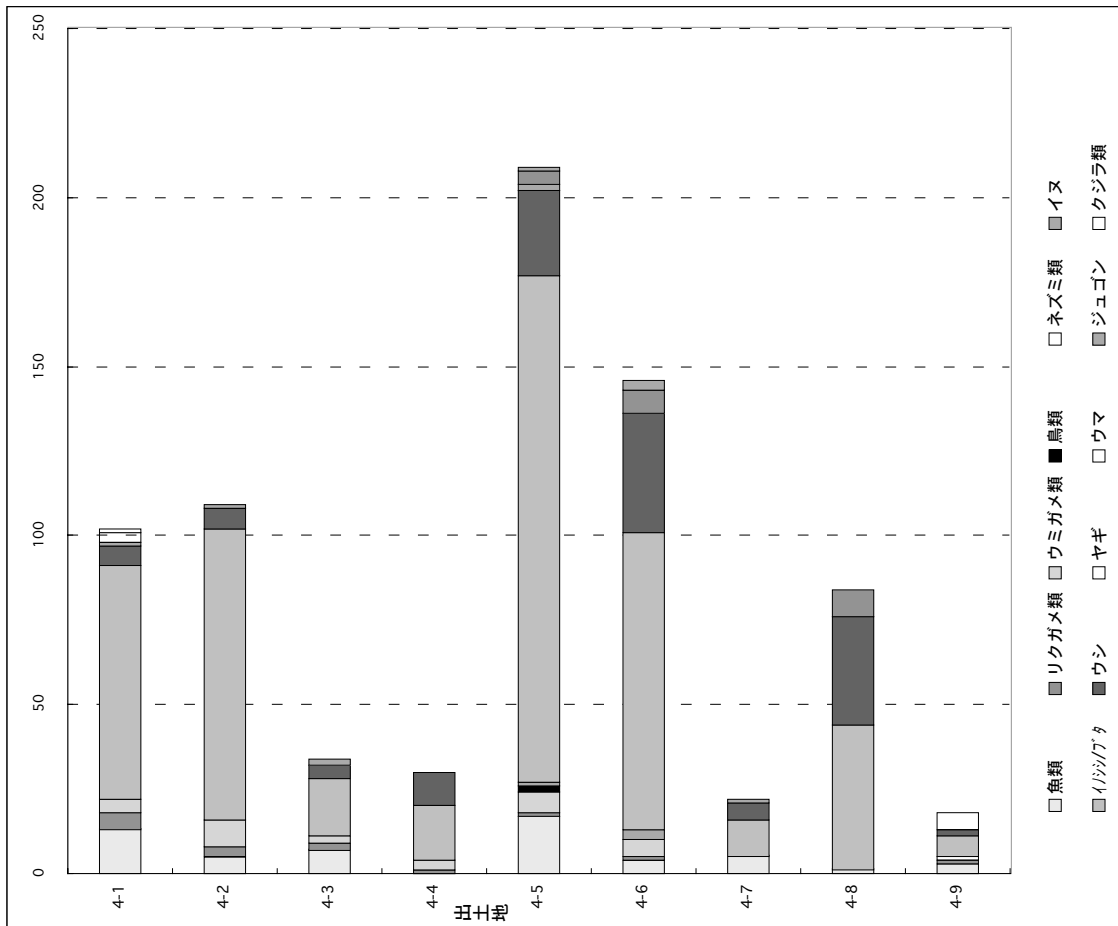
沖縄の遺跡における出土骨の様相を概観すると、貝塚時代前期～後期には魚骨が圧倒的多数（ピックアップ資料では最小個体数比8割前後）を占め、イノシシがこれに次ぐパターンが一貫して認められる。この点は、今回の調査地区に隣接する伊礼原遺跡「砂丘区」（貝塚時代前期～後期中心）の出土骨（樋泉2007）でも同様である。これに対し、グスク時代以降には一般に魚骨が減少し、ブタ・ウシ・ウマなどの家畜の出現と増加という明確な変化が認められる（樋泉2002）。今回の分析結果をこれと比較すると、グスク時代以降の資料が主体と推測される西側の様相は、この時代の一般的様相と類似する。いっぽう東側では貝塚時代後期主体と考えられるにも関わらず、魚骨が著しく少ない点で、伊礼原遺跡「砂丘区」も含め当該時期の一般的様相とは傾向が明確に異なる。これをどう解釈するかは今後の課題だが、第4トレンチ東側の「場」の性格が、限られた活動（動物利用に関しては主にイノシシ狩猟）に関わるものであった可能性も考えられる。

参考文献

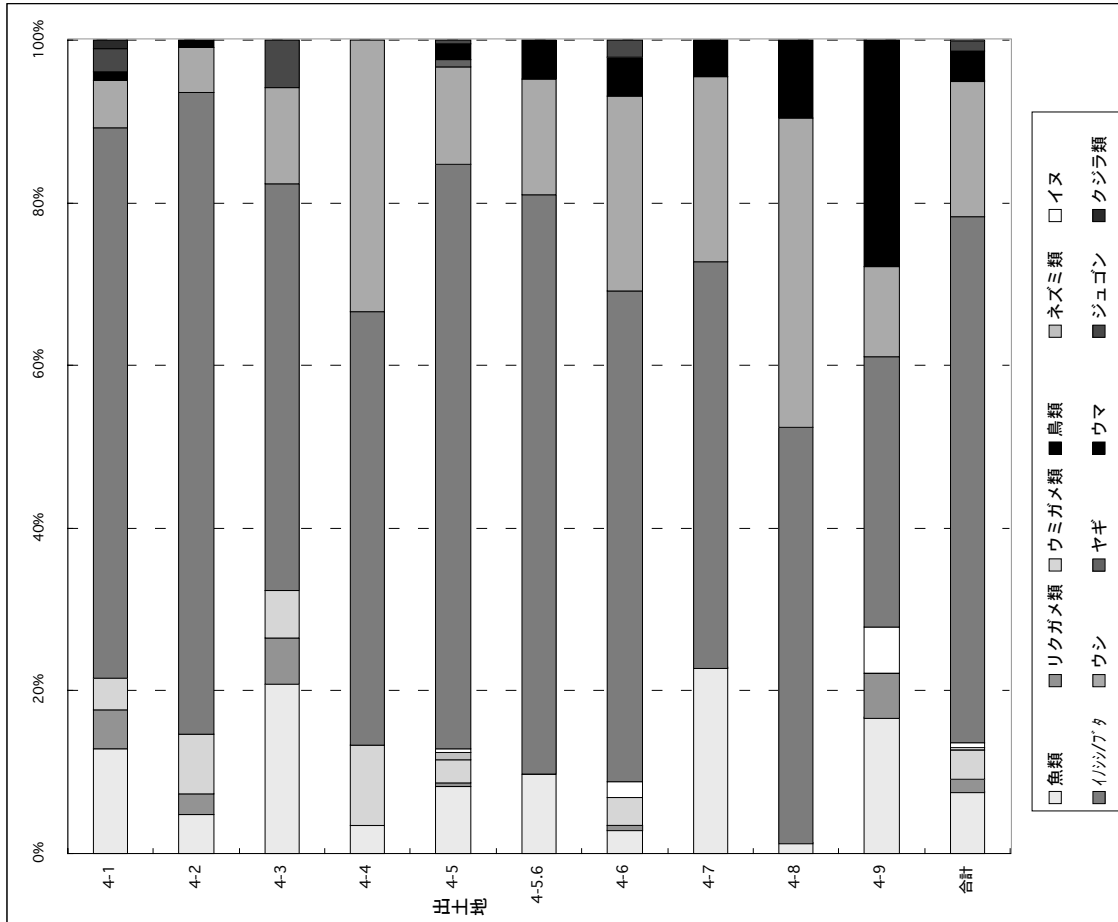
- 樋泉岳二（2002）「脊椎動物遺体からみた奄美・沖縄の環境と生業」、『先史琉球の生業と交易－奄美・沖縄の発掘調査から－』（木下尚子編）、熊本大学文学部、pp.47-66。
- 樋泉岳二（2007）「伊礼原遺跡から出土した脊椎動物遺体群」、『伊礼原遺跡－伊礼原B遺跡ほか発掘調査事業－』（北谷町教育委員会編）、沖縄県北谷町教育委員会、pp.480-534。

表63 第3・第4トレンチ出土脊椎動物遺体の同定標本数（イノシシ／ブタ・ウシ・ウマの部位不明破片は除外した。）

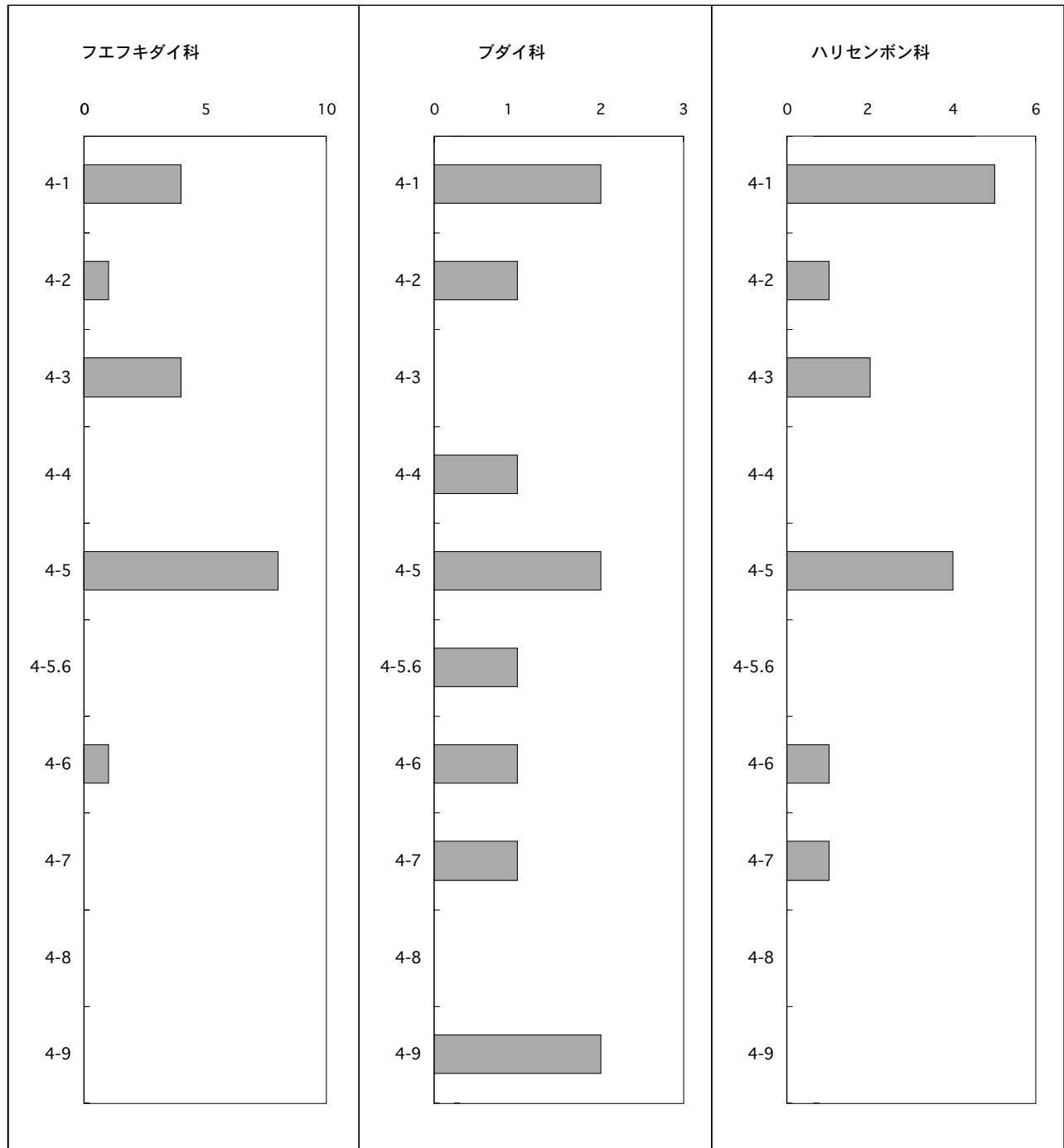
グリッド	サメ類	ウツボ科	フエダイ科	クロダイ属	フエフキダイ科	サバ科	ベラ科	イロブダイ属	ブダイ科	カワハギ類	フグ科	ハリセンボン科	魚類合計	リクガメ類	ウミガメ類	鳥類	ネズミ類	イヌ	イノシシ／ブタ	イノシシ／ブタ 歯	ウシ	ウシ 歯	ヤギ	ウマ	ウマ 歯	ジュゴン	クジラ類	カニ類	合計
3-2													0	0	1				4	2	2							1	10
3-5													0	0	6				10	2	14	5		1					38
3-6													0	0					2	1	1	1	1						6
3-7								1					1	1	2	2			9	1	4	1	2	1					23
3-8													0	0	1				4	1	1								7
3-9													0	0					7	1	2	1	1						12
4-1			1		4		1	1	1			5	13	5	4				59	10	4	2	1	1		3	1		102
4-2		1			1		1		1			1	5	3	8				64	22	6			1			1		110
4-3					4	1			1			2	7	2	2				17		4				2				34
4-4									1				1		3				14	2	9	1							30
4-4.5												1	1						3										4
4-5			1	1	8				2		1	4	17	1	6		2	1	143	7	21	4	2	1	3	1	1		210
4-5.6									1	1			2						12	3	2	1							21
4-6			1		1				1			1	4	1	5			3	85	3	27	8	5	2	3				146
4-6.7													2						4		1	1							8
4-7	1			1			1		1			1	5						11		3	2		1					22
4-8										1			1						41	2	31	1	7	1					84
4-9									2		1		3	1				1	6		2		5						18
4-10													0						1		1		1						3
5ト													0			1			5		3	3	1	1					14
不明	1											2	5		5			2	23	5	7	2	2						52
合計	2	3	3	4	18	1	3	1	11	2	2	17	67	13	43	3	2	7	524	60	145	35	2	22	17	10	1	3	954



グラフ9 第4トレンチ出土脊椎動物遺体のグリッド別出土数.



グラフ10 第4トレンチ出土脊椎動物遺体のグリッド別組成(同定標本数比).



グラフ11 第4トレンチ出土主要魚類のグリッド別出土数.

表54 イノシシ(歯)集計一覧

Table with columns for 部位 (Location), 上顎 (Upper Jaw), 下顎 (Lower Jaw), and 計 (Total). Rows include 4-1 黒色混貝土層, 4-1 黒色混貝土(ふるい), 4-2 淡灰黒色混貝土層(ふるいがけ).

Table with columns for 部位 (Location), 上顎 (Upper Jaw), 下顎 (Lower Jaw), 上下不明 (Upper/Lower Unknown), 歯種不明 (Tooth Type Unknown), and 計 (Total). Rows include 3-5 不明, 3-6 灰色ジャリ層, 3-7 表採, 3-8 淡灰黒色土層, 3-8 淡灰緑色土層, 4-1 黒色混貝土(ふるい), 4-1 茶黄色砂質層, 4-2 淡灰黒色土層, 4-2 茶褐色砂層(淡灰)黒色混貝土層(ふるい), 4-2 茶黄色砂質層, 4-2 灰白色砂層, 4-4 大型石砕石敷遺構, 4-5 淡灰色土層, 4-5 黒色砂質土層, 4-5 3号炉, 4-5 柱穴, 4-5 攪乱, 4-5.6 灰黒色砂質土層, 4-6 黒褐色砂質層, 4-6 柱穴 NO6155, 4-7 淡灰色土層, 4-8 淡灰黒色土層, 泥炭, 不明.

表56 ブタ遺体同定結果

Table with columns for 部位 (Location), 頭蓋骨 (Cranium), 上顎 (Upper Jaw), 下顎 (Lower Jaw), 椎 (Vertebrae), 肋骨 (Ribs), 上腕骨 (Humerus), 機骨 (Scapula), 尺骨 (Ulna), 寛骨 (Ilium), 大腿骨 (Femur), 中節骨 (Metacarpals), 種子骨 (Metatarsals), 手(足)根骨 (Metapodials), 中手(足)骨 (Metapodials), 四肢骨 (Limb Bones), and 計 (Total). Rows include 3-5 不明, 3-8 淡灰緑色土層, 3-9 灰色土層, 3-9 不明, 4-1 ふるいがけ, 4-5 淡灰黒色土層, 4-5 黒色砂質土層, 4-5 石列遺構, 4-5 白色砂利層, 4-5 1-3号炉, 4-5 柱穴, 4-5.6 灰黒色砂質土層, 4-6 淡灰黒色土層, 4-6 黒褐色砂質層, 4-6 黒色砂質土層(淡灰)黒色砂利層, 4-6 柱穴, 4-6 平面清掃, 4-7 淡灰色砂質土層, 4-7 黒色土層, 4-7 柱穴, 4-7 不明, 4-8 暗灰色砂層, 4-8 黒色砂質土層, 4-8 平面清掃.

表57 イノシシ(ノブタ)計測一覧

Table with columns for グリッド (Grid), 層序 (Stratigraphy), 種類 (Type), 部位 (Location), 左右 (Left/Right), SD(mm) (SD), BD(mm) (BD), and 備考 (Remarks). Rows include 3-6 イノシシ 上腕骨 左 w 欠.近体遠.欠, 3-7 表採 イノシシ 上腕骨 右 p 近体, 4-1 淡灰黒色土層 イノシシ 脛骨 左 p 近体, 4-2 淡灰黒色土層 イノシシ 脛骨 左 w 近体遠端, 4-2 淡灰黒色土層 イノシシ 機骨 左 w 近体遠, 4-4 大型石列遺構 イノシシ 大腿骨 左, 4-5 淡灰黒色土層 イノシシ 上腕骨 左 d 体遠端.欠, 4-5 淡灰黒色土層 イノシシ 上腕骨 左 d 体遠端.欠, 4-5 淡灰黒色土層 イノシシ 機骨 右 w 欠.p.s.d.欠, 4-5 灰黒色砂質土層 イノシシ 機骨 左 w 近体遠.欠, 4-5 2号炉 イノシシ 上腕骨 左 w 近体遠, 4-6 黒色砂質土層 イノシシ 機骨 右 w p.s.d, 4-8 淡灰黒色土層 イノシシ 上腕骨 左 w 近体遠, 4-5.6 灰黒色砂質土層 イノシシ 脛骨 右 w 近体遠, 4-2 黒色混貝土層 イノシシ or ブタ 上腕骨 左 w 近体遠, 4-4 黒褐色砂質層 イノシシ or ブタ 機骨 左 p 端近体.

表55 イノシシ/ブタ遺体同定結果

Table with columns for グリッド (Grid), 層序 (Stratigraphy), 部位 (Location), 頭蓋骨 (Cranium), 下顎 (Lower Jaw), 椎 (Vertebrae), 肩甲骨 (Scapula), 上腕骨 (Humerus), 機骨 (Scapula), 尺骨 (Ulna), 寛骨 (Ilium), 大腿骨 (Femur), 脛骨 (Tibia), 腓骨 (Fibula), 手(足)根骨 (Metapodials), 中手(足)骨 (Metapodials), 基節骨 (Metacarpals), 四肢骨 (Limb Bones), and 合計 (Total). Rows include 3-8 淡灰緑色土層, 3-9 不明, 4-1 淡灰黒色土層, 4-1 不明, 4-2 淡灰黒色土層, 4-2 黒色混貝土層, 4-2 茶黄色砂質層, 4-3 不明, 4-4 黒褐色砂質層, 4-4 不明, 4-5 淡灰黒色土層, 4-5 2号炉 西側, 4-5 柱穴, 4-4.5 難除去, 4-6 淡灰黒色土層, 4-6 黒色砂質土層, 4-6 淡灰黒色砂質層(黒褐色砂質), 4-6 淡灰黒色砂利層, 4-6 柱穴, 4-6 平面清掃, 4-8 淡灰黒色土層, 4-8 淡灰黒色砂質層, 4-8 黒色砂土層, 4-8 黒色砂質土層, 不明, 合計.

表58 イノシシ(歯)出土一覧

Table with columns for グリッド (Grid), 層序 (Stratigraphy), 部位 (Location), 左右不 (Left/Right Unknown), and 備考 (Remarks). Rows include 3-5 不明 下顎 M3 右 b -.-, 3-5 不明 下顎 M1 左 f ++, 3-6 灰色ジャリ層 下顎 歯 1 左, 3-7 表採 I 歯根, 3-8 淡灰黒色土層 下顎 M2 右 破, 3-8 淡灰緑色土層 歯 M1?, 3-9 牙C.オス 左, 4-1 黒色混貝土層 下顎C オス 左, 4-1 黒色混貝土層 下顎 M3 左 e ++, 4-1 茶黄色砂質層 下顎 M1 右 e ++, 4-1 ふるいがけ 下顎 I, 4-1 黒色混貝土層 牙C.オス 左, 4-1 黒色混貝土層 下顎 歯 1, 4-1 黒色混貝土(ふるい) 下顎 M1 左 e ++, 4-1 黒色混貝土(ふるい) 上顎 I 不, 4-1 黒色混貝土(ふるい) 下顎 I 不, 4-1 黒色混貝土(ふるい) 下顎 M2 左 d ++, 4-2 淡灰黒色土層 C 下顎 右, 4-2 淡灰黒色土層 下顎 M2 左, 4-2 淡灰黒色土層 下顎 P1 左, 4-2 淡灰黒色土層 下顎 I 左, 4-2 淡灰黒色土層 牙C.オス 左, 4-2 淡灰黒色土層 下顎C メス, 4-2 淡灰黒色土層 牙C オス 右, 4-2 淡灰黒色土層 下顎 歯 1, 4-2 灰黒色土 下顎 P2. 右, 4-2 灰黒色土 下顎 P3 右, 4-2 茶黄色砂層 歯 M3 破, 4-2 黒色混貝土層 下顎 M1 右 d ++, 4-2 黒色混貝土層 牙C.オス 右, 4-2 黒色混貝土層 下顎 P4, 4-2 黒色混貝土層 下顎 M1 左 g ++, 4-2 黒色混貝土層 下顎 M2 左 d ++, 4-2 淡灰黒色混貝土層(ふるいがけ) 上顎 M3 右 a 未萌出, 4-2 茶黄色砂質層 下顎M2 左 d ++, 4-2 茶黄色砂質層 下顎M3 左 a 未萌出, 4-2 灰白色砂層 下顎 P2 左, 4-2 灰白色砂層 下顎 M2 右 b -, 4-2 灰白色砂層 下顎 C オス 右, 4-4 石敷遺構 下顎 M2 右 c ++, 4-4 大型石列遺構 下顎 C オス 左, 4-5 淡灰色土層 歯 1, 4-5 淡灰色土層 下顎 M3(2) 左, 4-5 黒色砂質土層 歯 1, 4-5 黒色砂質土層 歯 M 不 破, 4-5 3号炉 下顎 M3 右 e ++, 4-5 柱穴 NO6801 歯 1, 4-5 攪乱 下顎 歯 1 左, 4-5.6 灰黒色砂質土層 下顎 M1 右, 4-5.6 灰黒色砂質土層 下顎 P2 右, 4-5.6 灰黒色砂質土層 歯 1, 4-6 黒褐色砂質層 牙C.オス 右, 4-6 黒褐色砂質層 歯 P 破, 4-6 柱穴 NO6155 下顎 M1 右, 4-7 淡灰色土層 下顎 C 左, 4-8 淡灰黒色土層 牙C.オス 左, 4-8 淡灰黒色土層 歯 M 3 左 a, 不明 不明 下顎 M3 右 d ++, 不明 不明 下顎 C オス 左, 不明 不明 上顎 M3 左, 泥炭 下顎 M2 左 h ++, 泥炭 下顎 M3 左 j ++, 泥炭 下顎 M3 左 j ++.



図版55 貝類(巻貝1)



図版56 貝類(巻貝2)



図版57 貝類(巻貝3) (T-沖かい R-陸産貝を示す)



図版58 貝類(二枚貝1)



図版59 貝類(二枚貝2)



図版60 カメ・ジュゴン 1リカメ上腹板(右) 2リカメ 剣状腹板(右) 3・4リカメ 腹甲板 5ウカメ 下顎骨(左)
 6ウカメ 大腿骨(右) 7カの爪 8ジュゴン 椎 9・10ジュゴン 肋骨



図版61 イノシシ 1後頭骨 2牙(左) 3上腕骨(右・幼) 4寛骨(右) 5寛骨(左・幼) 6・7脛骨(左)



図版62 ウマ 1上歯(右・P4) 2上歯(左・M3) 3上歯(左・P4) 4・5下歯(P) 6大腿骨(右)7脛骨(右)
8中手(足)骨 9距骨滑車(左) 10足根骨



図版63 ウシ1頭蓋骨 2膝蓋骨 3上歯(M2) 4下歯(右・P) 5肋骨 6橈骨(左) 7大腿骨(右・P) 8脛骨(左) 9橈骨(右・左) 10寛骨 11・12距骨(右) 13踵骨(左) 14中手骨(左) 15中手骨(右) 16中足骨(左) 17足根骨 18中節骨(右) 19末節骨(左) - 202 -

第五章 理化学的分析

第1節 伊礼原D遺跡の放射性炭素年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

北谷町に所在する伊礼原遺跡は、沖縄本島中部の東シナ海に臨む海岸低地に位置する。周辺の詳細な地形分類については、松田(2007)により周辺の地形分類図が呈示されている。今回調査が行われた伊礼原D遺跡の位置は、この分類図上によると、段丘間の埋積谷の出口前面に広がる砂丘後背の湿地に位置する。

伊礼原D遺跡の発掘調査では、段丘間の埋積谷から続く旧流路が検出され、流路沿いにグスク時代とされる遺物が確認されている。遺物の中には人骨も多数含まれている。また、旧流路の下流側では、サンゴ礫を多量に含む砂礫層が確認され、その砂礫層からは前Ⅱ期とされる室川下層式や前Ⅲ期とされる面縄前庭式などの土器が出土している。本報告は、No.5トレンチのグスク時代とされる人骨及び、No.1トレンチのそれよりも下位とされる泥炭層より出土した人骨に関わる年代資料の作成を目的とするものである。

1. 試料

試料はNo.5トレンチのグスク時代遺物包含層より出土した人骨(試料No.7)と同遺跡No.1トレンチの泥炭層より出土した人骨(試料No.8)及び伊礼原E遺跡B-2トレンチの近世遺物包含層とされた白色砂層から出土した人骨(試料No.9)の合計3点である。

なお、No.1トレンチの泥炭層の延長は、旧流路下流側で面縄前庭式や室川下層式などの土器が出土しているサンゴ砂礫層の上位に堆積することが確認されている。

2. 分析方法

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。今回のように、骨が試料である場合には、無機質成分である炭酸カルシウムよりも硬タンパク質のコラーゲン成分の方が適当とされていることから、アルカリ処理と塩酸による脱灰を行い、コラーゲンの抽出を行う。抽出した試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅(Ⅱ)と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じ切り、500℃(30分)850℃(2時間)で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に¹³C/¹²Cの測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}\text{C}$ を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma;68%)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02(Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。

3. 結果

同位体効果による補正を行った測定結果を表1に示す。試料No.7は850±30BP、試料No.8は

2,390±30BPを示した。表2には暦年較正結果を示す。暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い(¹⁴Cの半減期5,730±40年)を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。較正には北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。また、暦年較正は測定誤差 σ 、 2σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。測定誤差を σ として計算させた結果、各試料の暦年は、試料No.7でcalAD1,165-1,218、試料No.8でcalBC510-402、であった。

前述したように、試料No.7の人骨は、発掘調査所見によりグスク時代の年代観が与えられているが、上述した放射性炭素年代及びその較正暦年は、その年代観をほぼ支持している。今後、他のグスク時代とされる人骨の年代値も得たうえで、グスク時代の人骨に関する年代観を検討する必要がある。

試料No.8の人骨が示す年代は、本土では縄文時代晩期に相当する年代である。松田(2007)は、この時期の伊礼原遺跡周辺の地形の変化として、前浜・後浜の前進と砂丘の拡大および砂丘背後における後背湿地の形成を述べている。No.8の人骨を包含する泥炭層は、この時期に形成された後背湿地の堆積物に相当する可能性がある。

表1. 放射性炭素年代測定結果

試料名	遺跡名	採取位置・層位など	種類	補正年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 BP	Code No.
No.7	伊礼原D	No.5トレンチ・グスク時代の層	人骨	850±30	-19.62±0.67	760±30	IAAA-72257
No.8	伊礼原D	No.1トレンチ・泥炭層	人骨	2,390±30	-27.92±0.81	2,440±30	IAAA-72260

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ （測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

表2. 暦年較正結果

試料名	補正年代 BP	暦年較正年代 (cal)						相対比	Code No.	
		σ	cal AD		cal BP					
No.7	852±28	2 σ	cal AD 1,165	—	cal AD 1,218	cal BP 785	—	732	1.000	IAAA-72257
			cal AD 1,053	—	cal AD 1,078	cal BP 897	—	872	0.050	
			cal AD 1,153	—	cal AD 1,259	cal BP 797	—	691	0.950	
No.8	2,394±31		cal BC 510	—	cal BC 436	cal BP 2,460	—	2,386	0.743	IAAA-72260
			cal BC 425	—	cal BC 402	cal BP 2,375	—	2,352	0.257	
			cal BC 729	—	cal BC 692	cal BP 2,679	—	2,642	0.074	
			cal BC 659	—	cal BC 653	cal BP 2,609	—	2,603	0.007	
			cal BC 543	—	cal BC 395	cal BP 2,493	—	2,345	0.919	

- 1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer)を使用。
- 2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 3) 1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 4) 統計的に真の値が入る確率は σ は68%、 2σ は95%である。
- 5) 相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

引用文献

松田順一郎,2007,伊礼原遺跡砂丘区の堆積物・埋没地形と中央区・南区にみられた古地震跡.伊礼原遺跡-伊礼原B遺跡ほか発掘調査-北谷町教育委員会,44-59

第2節 伊礼原（D・E）遺跡の放射性炭素年代測定

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

放射性炭素年代測定は、呼吸作用や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素（ ^{14}C ）の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。過去の大気中の ^{14}C 濃度は一定ではなく、年代値の算出に影響を及ぼしていることから、年輪年代学の成果などを利用した較正曲線により ^{14}C 年代から暦年代に換算する必要がある。

2. 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法	備考
No.1	伊礼原E, Y-1	人骨(歯)	acid washes	AMS	コラーゲン抽出
No.2	伊礼原D, MA-1	人骨(歯)	acid washes	AMS	コラーゲン抽出
No.3	伊礼原D, ST-01	人骨	acid washes	AMS	コラーゲン抽出

acid washes：酸洗浄，AMS：加速器質量分析法（Accelerator Mass Spectrometry）

3. 測定結果

試料名	測定No. (Beta-)	未補正 ^{14}C 年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年代 Calendar Age (2 σ :95%確率, 1 σ :68%確率)
No.1	241423	NA	NA	—
No.2	241424	NA	NA	—
No.3	241425	NA	NA	—

(1) 未補正 ^{14}C 年代

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在（AD1950年）から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は5,730年であるが、国際的慣例によりLibbyの5,568年を用いた。

(2) デルタ $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比（ $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を-25(‰)に標準化することで同位体分別効果を補正する。

(3) ^{14}C 年代

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値により同位体分別効果を補正して算出した年代。暦年代較正にはこの年代値を使用する。

(4) 暦年代 (Calendar Age)

^{14}C 年代を実際の年代（暦年代）に近づけるには、過去の宇宙線強度の変動などによる大気中 ^{14}C 濃度の変動および ^{14}C の半減期の違いを較正する必要がある。較正には、年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値およびサンゴのU/Th（ウラン/トリウム）年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。IntCal04ではBC24050年までの換算が可能である（樹木年輪データはBC10450年まで）。

暦年代の交点は、 ^{14}C 年代値と較正曲線との交点の暦年代値を示し、1 σ （68%確率）と2 σ （95%確率）は、 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点や複数の1 σ ・2 σ 値が表記される場合もある。

4. 所見

伊礼原（D・E）遺跡の人骨（No.1～No.3）について、加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定を試みた。その結果、いずれの試料もコラーゲンが残存しておらず、測定結果を得ることができなかった。また、人骨の他の部位についてNo.1とNo.3は2回、試料2は1回の追加測定を試みたが、いずれの試料もコラーゲンが残存しておらず、測定結果を得ることができなかった。

文献

Paula J Reimer et al., (2004) IntCal04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26-0 ka BP. Radiocarbon 46, 1029-1058.

尾寄大真（2005）INTCAL98からIntCal04へ。学術創成研究費 弥生農耕の起源と東アジアNo.3－炭素年代測定による高精度編年体系の構築－, p.14-15.

中村俊夫（1999）放射性炭素法。考古学のための年代測定学入門。古今書院, p.1-36.



No.1、No.2、No.3（2回目）



No.1、No.3（3回目）



No.1
伊礼原E Y-1



No.2
伊礼原D MA-1



No.3
伊礼原D ST-01

第3節 北谷町伊礼原B・D・E遺跡出土石器の岩石肉眼鑑定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

本報告では、伊礼原B～E遺跡から出土した石器について、肉眼観察により、その岩質を鑑定し、石材の利用傾向を把握する。

1. 試料

肉眼鑑定を行った試料は、伊礼原B遺跡出土の石器12点、伊礼原D遺跡出土の石器17点、伊礼原E遺跡出土の石器18点、合計47点である。器種の内訳は、磨製石斧3点、半磨製石斧10点、打製石斧4点、石斧1点、石皿4点、砥石1点、敲石16点、磨石5点、凹み石1点、石錐1点、用途不明1点である。

2. 分析方法

(1)肉眼鑑定

野外用のルーペを用いて構成鉱物や組織の特徴を観察し、肉眼で鑑定できる範囲の岩石名を付す。個々の石材の正確な岩石名は、薄片作製観察、X線回折試験、全岩化学組成分析等を併用することにより調べることができるが、今回の鑑定では石材の組成を把握することを目的としているため、肉眼観察のみに留めている。

3. 結果

(1)肉眼鑑定

石器・岩質一覧を表1に、遺跡別肉眼鑑定結果一覧を表2示す。肉眼観察の結果、堆積岩類として砂岩28点、チャート1点、火山岩類として輝石安山岩1点および玄武岩1点、半深成岩類として輝緑岩4点、変成岩類として緑色千枚岩1点、緑色片岩3点、堇青石ホルンフェルス2点、変質岩類として輝緑凝灰岩1点および緑色岩5点が同定された。

器種別の石材組成は以下の通りである。

磨製石斧：磨製石斧を構成する岩石は緑色岩2試料、輝緑岩1試料である。

表1. 肉眼鑑定による石器・岩質一覧

		磨製 石斧	半磨製 石斧	打製 石斧	石斧	石皿	砥石	敲石	磨石	凹み石	石錐	用途 不明	合計
堆積岩	砂岩		3	3		4	1	11	4	1	1		28
	チャート							1					1
火山岩	輝石安山岩							1					1
	玄武岩								1				1
半深成岩	輝緑岩	1	1		1			1					4
変成岩	緑色千枚岩		1										1
	緑色片岩		2	1									3
	堇青石ホルンフェルス		2										2
変質岩	輝緑凝灰岩											1	1
	緑色岩	2	1					2					5
	計	3	10	4	1	4	1	16	5	1	1	1	47

石斧：刃部は欠損し体頭部のための1試料が輝緑岩である。磨製石斧に属すると思われる。

半磨製石斧：半磨製石斧を構成する岩石は砂岩3試料、緑色片岩・堇青石ホルンフェルス各2試料、緑色千枚岩1試料、緑色岩1試料、輝緑岩1試料である。

打製石斧：砂岩4試料、緑色片岩1試料の構成となり砂岩を多く使用している。

石皿：4試料ともに砂岩を使用している。

砥石：砂岩を使用している。

敲石：砂岩11試料、チャート1試料、輝石安山岩1試料、輝緑岩1試料、緑色岩2試料の構成である。

磨石：砂岩3試料、玄武岩1試料を使用している。

凹み石：砂岩1試料を使用している。

石錐：砂岩1試料を使用している。

用途不明：輝緑凝灰岩1試料を使用している。

4. 考察

沖縄島の地質は構造的には、本部累帯・国頭累帯および島尻累帯からなり、各帯の間はそれぞれ辺土-名護断層及び天願断層により境されている(小西,1965)。また、この他、中期更新世以後の新时期堆積岩類が全島に亘って散在・分布する。北谷町にも更新世の琉球層群国頭層および那覇層が分布するがこれらの地質からは石器の材料となる硬質岩は採取できないことから、これらの基盤をなす地質に石材の起源が求められる。北谷町から最も近い基盤岩の露出地域としては、嘉手納町や沖縄市の北部に分布する国頭累帯が挙げられる。以下に国頭累帯の地質について概説する。

本部半島を除く国頭～中頭地方の地質は本州・四国・九州の四万十帯に相当する国頭累帯に属している。国頭累帯を構成しているのは嘉陽・名護両累層で、KONISHI(1963)及びKONISHI et al.(1973)によって、白亜紀-古第三紀に対比される堆積岩類および変成岩類で構成されている。

名護累層は泥質千枚岩・同片岩・砂岩片岩・互層片岩・緑色片岩および緑色岩などの変成岩類からなり、また嘉陽累層は、砂岩・粘板岩・泥質千枚岩・砂岩片岩・礫岩片岩などからなり、砂質岩に富むのが特徴である。両累層は複雑な摺曲構造を示し、かつNE性の摺曲軸に直交する多くの断層で切られ、錯綜した分布を示す。

また、国頭累帯中には、石英斑岩・花崗斑岩・デイサイトなどの酸性岩岩脈が貫入している。これらの岩脈の一つである名護東南方の黒雲母石英安山岩について ^{40}Ar - ^{39}Ar 法や Kr - Ar 法で測定した結果では、およそ1200万年前という値が出ている(木崎編,1985)。

以上述べた地質学的背景から、今回鑑定された各石材について、その産地について述べてみたい。

1)輝緑岩

敲石に1試料、磨製石斧に1試料、半磨製石斧に1試料、石斧に1試料使用されている。沖縄島では他遺跡でも磨製石斧として多用されている岩石である。

2)緑色千枚岩・緑色片岩・堇青石ホルンフェルス

緑色千枚岩(1試料)、緑色片岩(3試料)が打製石斧および半磨製石斧に使用されている。緑色千枚岩・緑色片岩は国頭累帯を構成する岩種である。在地性岩石と判定される。堇青石ホルンフェルスは半磨製石斧(2試料)に使用されている。堇青石ホルンフェルスは、一般に泥質堆積

岩類が花崗岩などの深成岩類の貫入による熱変成作用を被ることによって生成される岩石である。沖縄島においては、読谷村の長浜川上流域において名護層に貫入した閃緑岩とその周縁に形成されたと考えられているホルンフェルスが確認されているほかは、ほとんど記載例がない。今回認められたホルンフェルスが、上記の岩体に由来するか否かは、現地調査による確認と試料の顕微鏡観察等による比較が必要である。

なお、琉球列島における比較的大規模な花崗岩類の分布域としては、石垣島、奄美大島、徳之島、沖永良部島などがある。石垣島においては、中生代のチャート、頁岩、砂岩などの堆積岩類を主体とする富崎層に貫入する中新世の花崗岩類がある。奄美大島、徳之島および沖永良部島には、白亜系の四万十帯の堆積岩類に、始新統の花崗岩類が貫入している。これらの花崗岩類の周辺にはホルンフェルスが生じていると考えられるが、その分布範囲はいずれも小規模で石器に利用された例は知られていない。本試料は県外から移入された可能性も十分考慮されなければならない。

3)砂岩

砂岩は全石器中28試料を占め最も多く見られる岩種である。器種も多岐に渡り、打製石斧(3試料)、半磨製石斧(3試料)、石皿(4試料)、凹み石(1試料)、砥石(1試料)、敲石(11試料)、磨石(4試料)、石錐(1試料)に使用されている。在地性岩石と判定される。チャートは敲石(1試料)に使用されている。チャートは名護断層北西側の中-古生層に属する岩石で、本部半島の本部層・今帰仁層に相当する地層に由来する在地性岩石である。

4)輝石安山岩・玄武岩

沖縄島には新第三系の久米島、現世の硫黄島に見られるような安山岩の大規模火山活動は知られていない。しかし、本部累層および国頭累層中には各所に安山岩の岩脈が認められ、とくに安富祖および本部半島塩川の採石場に含角閃石安山岩の岩脈などが観察の対象とされている(沖縄地学会,1982)。玄武岩については、沖縄本島においてその分布は知られていないため、産地は不明である。ただし、名護層に産する緑色岩の弱変質玄武岩の可能性や、上記の安山岩に伴う漸移的な岩相の可能性も考えられることから、鏡下観察や原産地調査を行なう必要があるだろう。

5)変質岩類

緑色岩が磨製石斧(2試料)、半磨製石斧(1試料)、敲石(2試料)に、輝緑凝灰岩が用途不明の石器に使用されている。これらは沖縄島にも存在する岩石で、緑色岩は国頭累帯名護層緑色岩部層の構成岩石となっている。また、輝緑凝灰岩は本部累帯の石灰岩分布地帯の石灰岩下盤に存在する。したがって、いずれも在地性とみなされる。

引用文献

木崎甲子郎編著,1985,琉球弧の地質誌,沖縄タイムス社,278p.

小西健二,1965,琉球列島(南西諸島)の構造区分,地質学雑誌,7,437-457.

KONISHI,K.,1963,Pre-Miocene basement complex of Okinawa and the tectonic belt of the Ryukyu Islands,Science Report Kanazawa University,8,569-602.

KONISHI,K.,ISHIBASHI,T. and TSURUYAMA,K.,1973,Find of nummulites orthoquartzitic pebbles from the Eocene turbidites in Shimajiri belt,Okinawa,Science Report Kanazawa University,18,45-53.

沖縄地学会編著,1982,日曜の地学14 沖縄の島々をめぐって,築地書館,228p.

表2 遺跡別肉眼鑑定結果一覧

遺跡名	番号	No.	器種	岩石名
伊礼原B遺跡	1	1	半磨製石斧	緑色岩
	2	2	半磨製石斧	堇青石ホルンフェルス
	3	3	半磨製石斧	緑色千枚岩
	4	4	打製石斧	緑色片岩
	5	5	半磨製石斧	砂岩
	6	6	半磨製石斧	砂岩
	7	9	敲石	砂岩
	8	10	敲石	砂岩
	9	11	敲石	砂岩
	10	12	磨石	砂岩
	11	13	磨石	砂岩
	12	16	不明	輝緑凝灰岩
伊礼原D遺跡	1	1	半磨製石斧	緑色片岩
	2	2	半磨製石斧	緑色片岩
	4	4	打製石斧	砂岩
	5	5	半磨製石斧	砂岩
	6	6	石皿	砂岩
	7	7	石皿	砂岩
	8	8	凹み石	砂岩
	10	10	敲石	砂岩
	11	11	敲石	緑色岩
	12	12	敲石	砂岩
	13	13	敲石	輝緑岩
	14	14	磨石	玄武岩
	19	19	石皿	砂岩
		151	石斧	輝緑岩
		152	半磨製石斧	輝緑岩
	156	磨石	珪化砂岩	
	164	磨製石斧	輝緑岩	
伊礼原E遺跡	1	11	打製石斧	砂岩
	2	13	半磨製石斧	堇青石ホルンフェルス
	3	16	石錐	砂岩
	4	20	磨製石斧	緑色岩
	5	24	石皿	砂岩
	6	32	磨製石斧	緑色岩
	7	34	砥石	砂岩
	8	94	打製石斧	砂岩
	9	102	敲石	輝石安山岩
	10	104	敲石	砂岩
	11	112	敲石	砂岩
	12	113	敲石	砂岩
	13	114	磨石	砂岩
	14	116	敲石	チャート
	15	117	敲石	緑色岩
	16	118	敲石	砂岩
	17	119	敲石	砂岩
	18	120	敲石	砂岩

第六章

沖縄県北谷町伊礼原D遺跡出土の古人骨(1)

松下孝幸* 松下真実**

【キーワード】：沖縄県、グスク時代人骨、土壙墓、男性骨

はじめに

沖縄県北谷町字伊平伊礼原に所在する伊礼原D遺跡の範囲確認調査が2000年(平成12年)におこなわれ、柱穴などから人骨が検出された。この人骨は設定されたトレンチのうちの「4トレンチ6区」から検出された人骨で、2000年におこなわれた確認調査で人骨が検出されたのはこのトレンチからのみである。人骨の保存状態は比較的良好であるが、埋葬状態を保って出土したものは存在しない。また、所属時期についても15世紀に作られた柱穴群の下層に存在する堆積層の中に入っていたので、正確には「15世紀以前」というかなり漠然とした時代が考えられているが、その後の発掘調査によって、7～8世紀頃か、それよりも古い可能性も指摘されている。念のためにAMS年代を測定してみることにしたが、その結果を本稿に間に合わせるができなかったため、時代については別の機会に触れることにしたい。

また、2007年(平成19年)にはこの遺跡の発掘調査が実施され、1基の土壙墓から埋葬人骨などが検出されている。

範囲確認調査で検出された人骨は、比較的堅牢で、下顎骨には明瞭な特徴も認められたので、計測や人類学的観察の結果を報告しておきたい。

資 料

表1 出土人骨一覧 (Table 1. List of skeletons)

人骨番号	残存部位	性別	年齢	備考
4トレンチ6区				
No.1 SK-1	左側頭骨	女性	不明	
No.1 MA-1	下顎骨	男性	不明	径は大きい。
No.2 SK-2	後頭骨	不明	壮年	
No.3 SK-3	前頭骨	女性	不明	
No.4 SK-4	前頭骨	不明	小児	6歳程度
No.5 SK-5	左頭頂骨	不明	壮年	柱穴から検出
No.6 SK-6	頭頂骨片	不明	不明	溝状遺構から検出

範囲確認調査で検出された人骨は表1に示すとおり、下顎骨や頭蓋の破片などで、四肢骨は存在しない。出土した頭蓋は、前頭骨が2個、後頭骨、側頭骨、下顎骨がそれぞれ1個、頭頂骨が

* Takayuki MATSUSHITA ** Masami MATSUSHITA

The Doigahama Site Anthropological Museum [土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム]

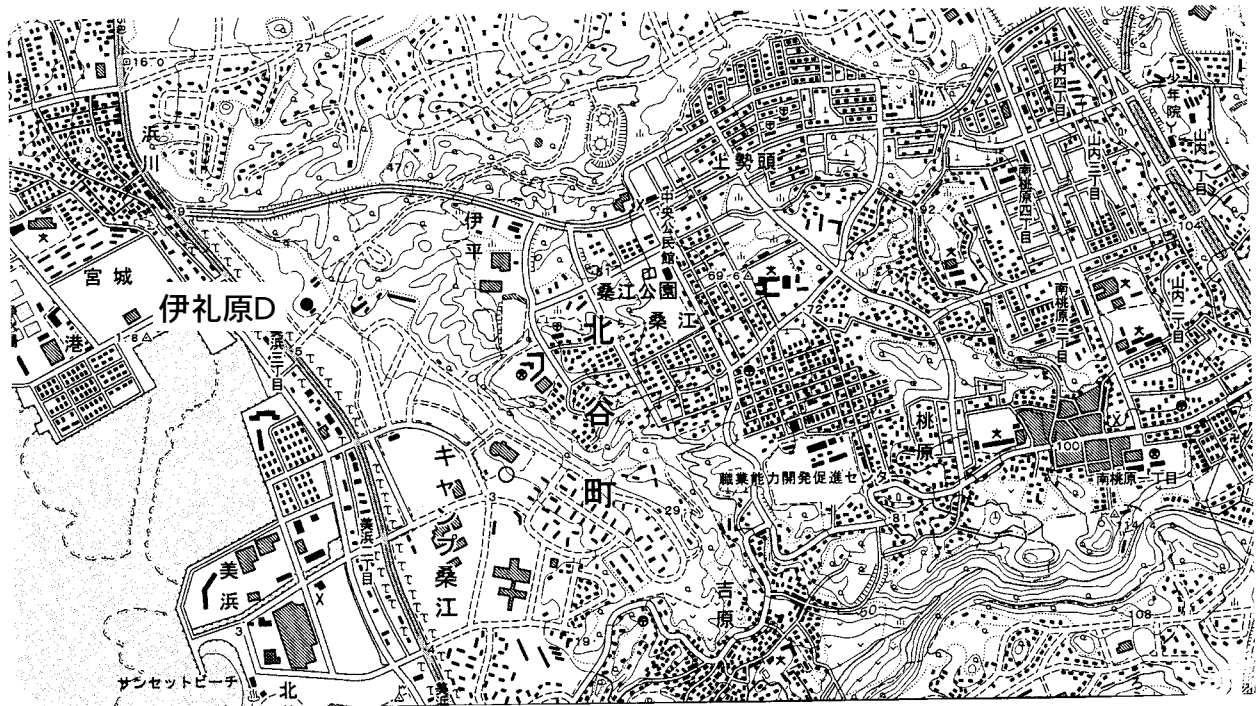
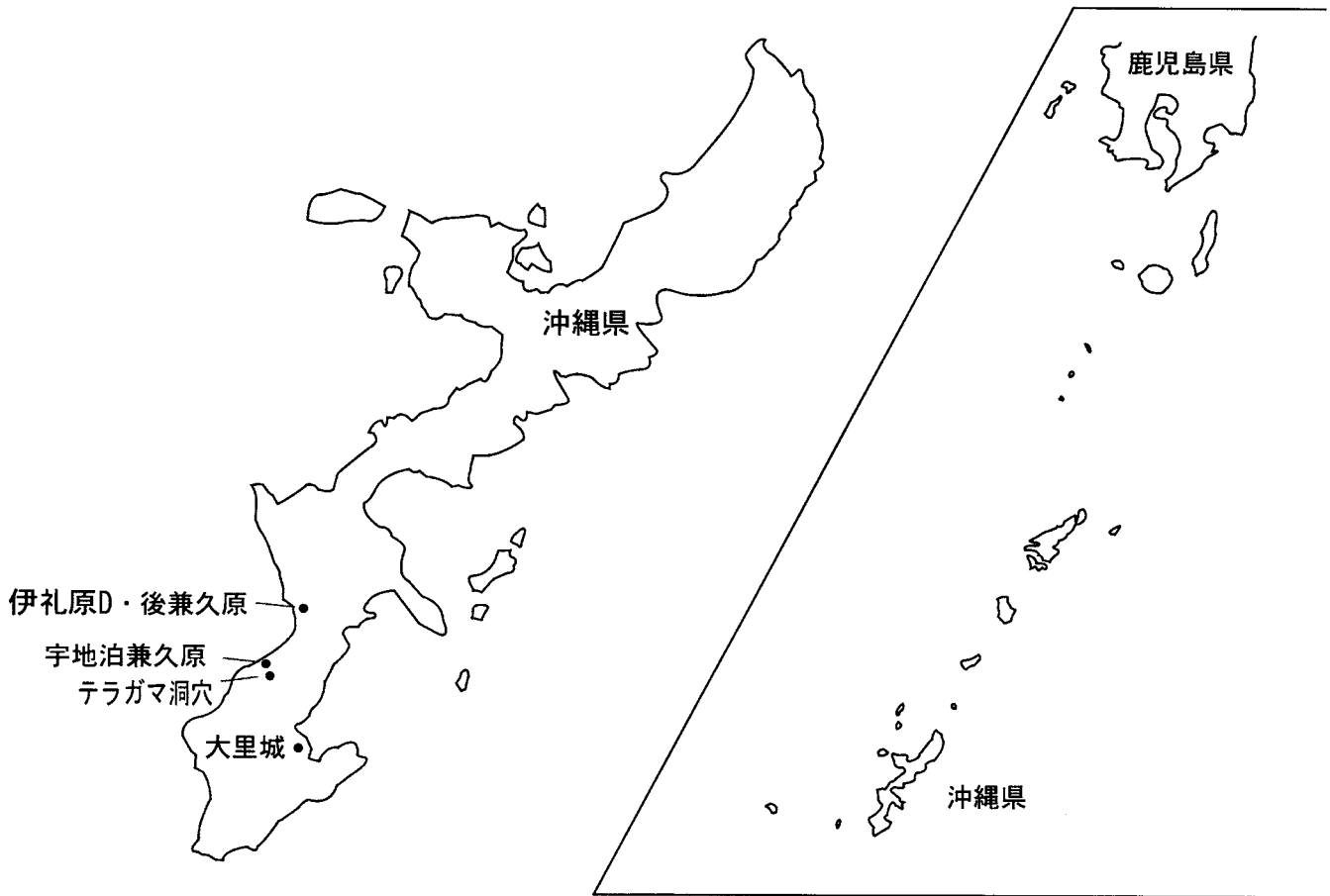


図1 遺跡の位置 (1/25,000)

(Fig. 1 Location of the Ireibaru D site, Chatan cho, Okinawa Prefecture)

2片である。7個(片)の中に小児骨(前頭骨)が1個含まれる。残りの6個(片)は成人骨である。下顎骨は後述所見から男性下顎骨であるが、脳頭蓋片に男性を思わせるものは存在しない。側頭骨と前頭骨は女性と思われるが、同一個体かどうかは不明である。従って、7個(片)には、小児1体、男性1体のほかに少なくとも女性1体が含まれていることになり、最小個体数は3体、最大個体数は7体である。

この人骨は、考古学的所見より、「15世紀以前」に属する人骨と推測されている。年齢については各人骨所見で推定根拠をあげた。年齢区分については表2を参照されたい。

表2 年齢区分 (Table 2.Division of age)

	年齢区分	年 齢
未成人	乳児	1歳未満
	幼児	1歳～5歳 (第一大臼歯萌出直前まで)
	小児	6歳～15歳 (第一大臼歯萌出から第二大臼歯歯根完成まで)
	成年	16歳～20歳 (蝶後頭軟骨結合癒合まで)
成人	壮年	21歳～39歳 (40歳未満)
	熟年	40歳～59歳 (60歳未満)
	老年	60歳以上

注) 成年という用語については土井ヶ浜遺跡第14次発掘調査報告書(1996)を参照されたい。

所 見

No.1 人骨

No.1として取り上げられていたのは左側頭骨と下顎骨である。

1. SK-1(左側頭骨)(女性・年齢不明)

側頭骨の骨質は堅牢で硬い。径はかなり小さい。乳様突起は小さく、外耳道骨腫は認められない。大きさから性別を推定すれば、女性骨ということになる。

2. MA-1(下顎骨)(男性・年齢不明)

下顎骨も骨質は堅牢である。径はかなり大きく、一見して男性下顎骨である。保存状態は良好で、両側の下顎頭を欠損している以外はよく残っている。高径はやや高く、筋突起も大きい。また下顎枝は広く、下顎切痕は浅い。下顎骨には歯が釘植していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

⑧ 7 6 5 4 ③ ② ① | ① ② ③ ④ ⑤ 6 7 ⑧

〔●:歯槽閉鎖 ○:歯槽開存 /:不明 ▽:先天性欠損、番号は歯種〕

〔1:中切歯、2:側切歯、3:犬歯、4:第一小白歯、5:第二小白歯、6:第一大臼歯、7:第二大臼歯、8:第三大臼歯〕

咬耗度はBrocaの2度(咬耗が部分的に象牙質まで及ぶ)である。下顎骨の径がかなり大きいことから性別を男性と推定した。年齢は不明である。

No.2 人骨 SK-2(後頭骨)(性別不明・壮年)

後頭骨である。径は小さいが、骨壁はやや厚い。外後頭隆起部は全体的に膨隆しているが、外

後頭隆起そのものの発達は認められない。沖縄県の古人骨は極端に大きいものが存在し、このようなものは男性とみなしても大過ないと思われる。しかし、径が小さいものについては頭蓋の性差が小さく、寛骨(骨盤を構成する骨)がないと、性別を誤る危険性が高い。本例もこの推測困難の例である。性別は不明としておきたい。年齢はラムダ縫合が内外両板とも開離していたようなので、壮年と思われる。

No.3 人骨 SK-3(前頭骨)(女性・年齢不明)

前頭骨である。骨質は堅牢であるが、骨壁は厚くない。眉上弓の隆起は認められない。前頭鱗は垂直に立ち上がり、膨隆していたものと思われる。女性前頭骨と思われるが、年齢は不明である。

No.4 人骨 SK-4(前頭骨)(小児)

前頭骨で、冠状縫合に近い部分が残存していた。骨壁は薄く、大きさから6歳程度の小児の前頭骨と思われる。

No.5 人骨 SK-5(左頭頂骨)(性別不明、壮年)

頭頂骨の一部である。骨壁は堅牢であるが、あまり厚くない。おそらく左側の頭頂骨と思われるが、残存部分が少なく確証を欠く。性別は不明であるが、年齢は観察できた矢状縫合の一部が内外両板とも開離していたようなので、壮年と推定した。

No.6 人骨 SK-6(頭頂骨)(性別・年齢不明)

左右不明の頭頂骨の骨片である。骨質は硬いが、薄い。性別・年齢は不明である。

要 約

沖縄県北谷町字伊平伊礼原に所在する伊礼原D遺跡の範囲確認調査で人骨が検出された。人骨は頭蓋の一部であったが、骨質は堅牢である。人類学的観察をおこない、以下の結果を得た。

1. 検出されたのは、前頭骨が2個、後頭骨、側頭骨、下顎骨がそれぞれ1個、頭頂骨が2片である。下顎骨は男性、前頭骨は女性と小児の骨で、最小個体数は3体、最大個体数は7体である。
2. 人骨は、考古学的所見より、15世紀以前の人骨と推測されている。
3. 頭型や顔面の特徴を知ることはできなかったが、下顎骨の径はかなり大きく、屈強な男性を想起させる人骨であった。沖縄県ではこのように径の大きな下顎骨の出土は珍しく、伊礼原遺跡では伊礼原E遺跡から出土した貝塚時代早期に属すると考えられている下顎骨が存在するのみである。
4. 今回検出された人骨から、この調査区には埋葬跡が存在することが確実となった。骨質は堅牢なことから、当時この地に生活していた人たちの形質解明を期待することができる。

謝辞

〈擲筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた北谷町教育委員会の皆様に感謝致します。〉

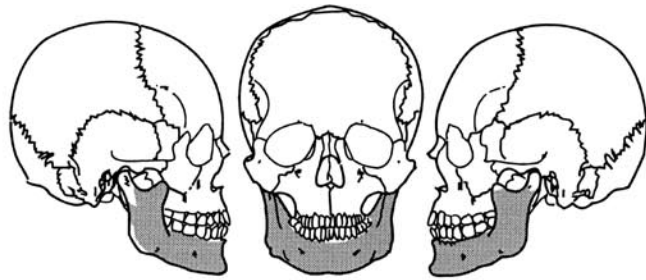
《参考文献》

1. Baba,H,b.Endo,1982 : Postcranial Skeleton of the Minatogawa Man.The Minatogawa Man(The university Tokyo,bullentin, 19) : 61-195.
2. 金関丈夫、1929 : 沖縄県那覇市外城嶽貝塚より発見せる人類大腿骨に就いて。人類学雑誌、44 : 217-230.
3. Martin-Saller, 1957 : Lehrbuch der Anthropologie. Bd.1.Gustav Fischer Verlag, Stuttugart : 429-597.
4. 松下孝幸・他、1988 : 沖縄県宜野座村クジチ墓出土の近世人骨。宜野座村乃文化財第6集(クジチ墓・クジチ原遺跡発掘調査報告書) : 107-140.
5. 松下孝幸・他、1989a : 沖縄県北谷町クマヤー洞穴出土の古人骨(縄文時代晩期相当期人骨)(会)。解剖学雑誌、64 : 362.
6. 松下孝幸・他、1989b : 沖縄県北谷町伊礼原B遺跡出土の人骨。伊礼原B遺跡－旧メイモスカラー地区雨水排水施設工事に係る発掘調査－(北谷町文化財調査報告書第8集) : 39-48.
7. 松下孝幸・他、1990 : 沖縄県浦添市城間古墓群出土の近世人骨。城間古墓群－牧港補給地区開発工事に伴う緊急発掘調査－ : 75-112.
8. 松下孝幸・他、1992 : 沖縄県宜野湾市真志喜安座間原遺跡出土の縄文・弥生時代人骨。謝名Ⅱ(真志喜土地区画整理事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書 [1])(宜野湾市文化財調査報告書第15集) : 第5章 : 1-99.
9. 松下孝幸・他、1993 : 沖縄県具志川島遺跡群出土の古人骨。具志川島遺跡群(伊是名村文化財調査報告書第9集) : 215-244.
10. 松下孝幸、1996 : 沖縄県北谷町上勢頭古墓群出土の近世人骨。上勢頭古墓群(北谷町文化財調査報告書第16集) : 105-115.
11. 松下孝幸、2001a : 沖縄県大里村大里城出土のグスク時代人骨。大里城－都市公園計画に係わる緊急確認発掘調査報告書(2)－ : 109-122.
12. 松下孝幸、2001b : 沖縄県北谷町山川原古墓群出土の近世・近代人骨。山川原古墓群(2)－瑞慶覧(11)倉庫建設に係る文化財発掘調査報告(北谷町文化財発掘調査報告書第20集) : 239-273.
13. 松下孝幸、2001c : シャレコウベが語る、日本人のルーツと未来、長崎新聞社(長崎新聞社新書)。
14. 松下孝幸、2003a : 沖縄県読谷村木綿原遺跡出土の弥生時代人骨。南島考古、No.22 : 67-108.
15. 松下孝幸、2003b : 沖縄県北谷町後兼久原遺跡出土のグスク時代人骨。後兼久原遺跡－庁舎建設に係る文化財発掘調査報告書－(北谷町文化財調査報告書第21集) : 385-399.
16. 松下孝幸、2003c : 沖縄県北谷町大作原古墓群出土の人骨。大作原古墓群－嘉手納(12)・(13)送油管移設に係る文化財発掘調査報告－(北谷町文化財調査報告書第22集) : 149-161.
17. 松下孝幸、2004 : 「自然人類学」『環境考古学ハンドブック』 : 444-454. 朝倉書店
18. 松下孝幸、2006 : 宜野湾市嘉和テラガマ洞穴遺跡出土の縄文・グスク時代人骨。嘉和テラガマ洞穴遺跡(宜野湾市文化財調査報告書第35集) : 81-102.
19. 松下孝幸、2007a : 沖縄県北谷町伊礼原遺跡出土の縄文人骨。伊礼原遺跡(北谷町文化財調査報告書第26集) : 467-479.
20. 松下孝幸、2007b : 沖縄県具志頭村ガルマンドウ原洞穴遺跡出土の人骨。土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム研究紀要第2号 : 38-62.
21. 松下孝幸、2007c : 宜野湾市喜友名後原・勢頭原丘陵古墓群出土の近世人骨。喜友名後原・勢頭原丘陵古墓群 喜友名前原第一古墓群 (宜野湾市文化財調査報告書第40集) : 55-72.

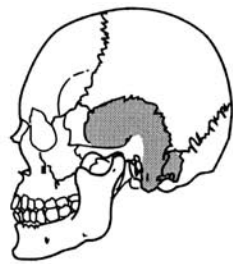
22. 松下孝幸、2007d：宜野湾市喜友名前原第一古墓群出土の近世人骨。喜友名後原・勢頭原丘陵古墓群 喜友名前原第一古墓群（宜野湾市文化財調査報告書第40集）：73-89.
23. 松下孝幸、2008e：沖縄県北谷町伊礼原E遺跡出土の縄文人骨。（投稿中）

表3 下顎骨(mm、度)(Mandibula)

		伊礼原D No.1 MA-1 男性
65	下顎関節突起幅	-
65(1).	下顎筋突起幅	-
66	下顎角幅	-
67	前下顎幅	51
68	下顎長	-
68(1).	下顎長	-
69	オトガイ高	-
69(1).	下顎体高(右)	-
	(左)	-
69(2).	下顎体高(右)	31
	(左)	30
70	枝高(右)	-
	(左)	-
70(1).	前枝高(右)	-
	(左)	-
70(2).	最小枝高(右)	-
	(左)	57
70(3).	下顎切痕高(右)	-
	(左)	-
71(1).	下顎切痕幅(右)	-
	(左)	-
71	枝幅(右)	-
	(左)	38
71a.	最小枝幅(右)	-
	(左)	37
79	下顎枝角(右)	-
	(左)	-
66/65	下顎幅示数	-
68/65	幅長示数	-
68(1)/65	幅長示数(右)	-
69(2)/69	下顎高示数(右)	-
	(左)	-
71/70	下顎枝示数(右)	-
	(左)	-
71a/70(2)	下顎枝示数(右)	-
	(左)	64.91
70(3)/71(1)	下顎切痕示数(右)	-
	(左)	-



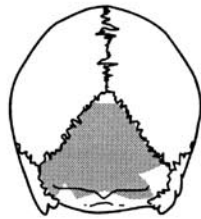
伊礼原DNo. 1 MA-1 (男性・不明)



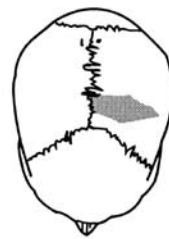
伊礼原DNo. 1 SK-1 (女性・不明)



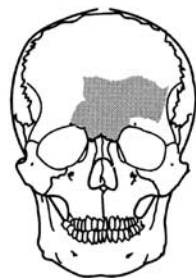
伊礼原DNo. 4 SK-4 (小児・6歳程度)



伊礼原DNo. 2 SK-2 (不明・壮年)



伊礼原DNo. 5 SK-5 (不明・壮年)



伊礼原DNo. 3 SK-3 (女性・不明)

図2 人骨の残存図 (アミかけ部分)

(Fig. 2 Regions of preservation of the skeleton. Shaded areas are preserved.)



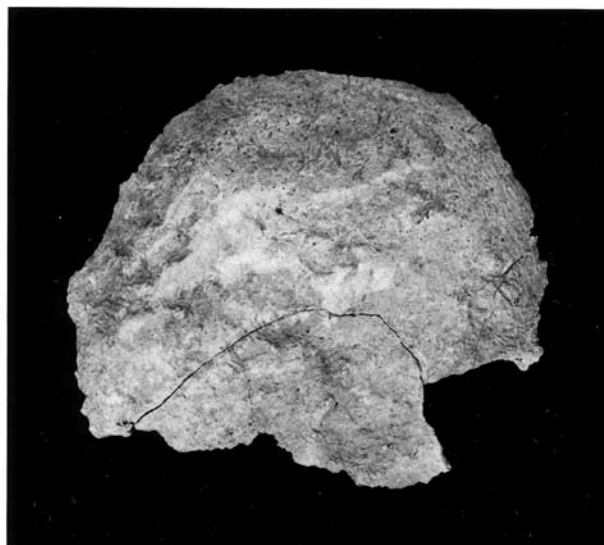
伊礼原D No.1 MA-1 (下顎骨・男性)
(Ireibaru D No.1 MA-1, mandibule, maie)



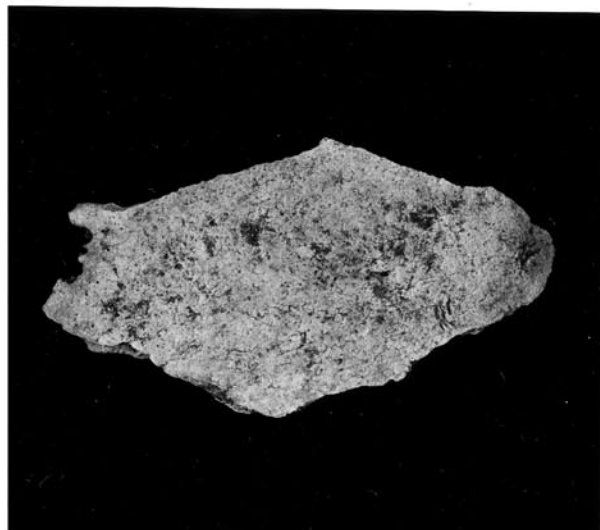
伊礼原D No.1 SK-1 (左側頭骨・女性)
(Ireibaru D No.1 SK-1, left temporal bone, female)



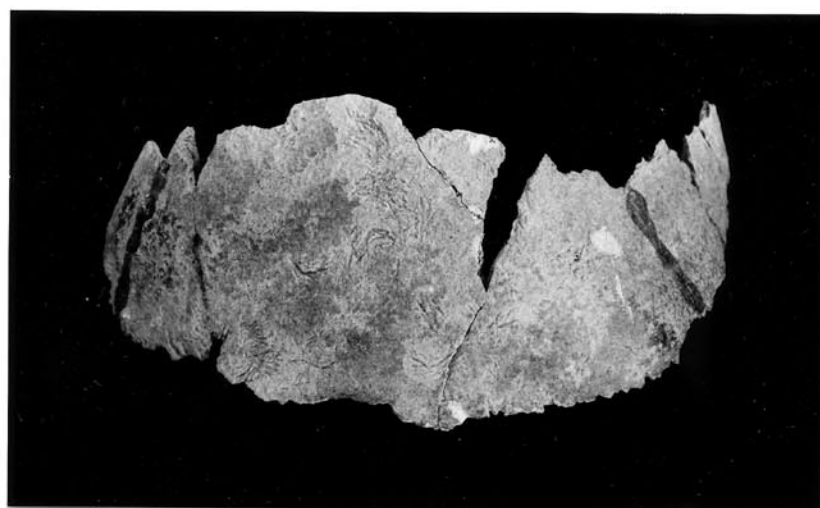
伊礼原D No.3 SK-3 (前頭骨・女性)
(Ireibaru D No.3 SK-3, frontal bone, female)



伊礼原D No.2 SK-2 (後頭骨・性別不明)
(Ireibaru D No.2 SK-2, occipital bone, unknown)



伊礼原D No.5 SK-5 (左頭頂骨・性別不明)
(Ireibaru D No.5 SK-5, parietal bone, unknown)



伊礼原D No.4 SK-4 (前頭骨・小児)
(Ireibaru D No.4 SK-4, frontal bone, Juvenile)

第七章 まとめ

本調査はキャンプ桑江北側返還跡地に伴う区画整理事業の範囲確認調査で、平成12年2月10日～平成12年3月31日と平成12年7月11日～平成13年3月29日までの延べ11ヶ月を費やしての調査であった。

伊礼原D遺跡は伊礼原遺跡と伊礼原B遺跡の中間、ナガサ川（ナガサガー）の右岸に位置している。ナガサ川は範囲確認調査の結果や地積図・米軍航空写真等から、戦前は本遺跡の北側約100mを西に流れていた。戦後、米軍基地の改良工事により現在の形になっていることが確認できた。本遺跡は河川の改良工事で分断された状態になっているが、伊礼原遺跡のグスク時代の範囲と同一遺跡と考えられ^(註1)、柱穴の粗密の状態から伊礼原D遺跡が中心部で、伊礼原遺跡は南側端部にあたるものと考えられる。そのことから伊礼原D遺跡はナガサ川の左岸河口部に位置するグスク時代の集落跡であったと考えられる。また、ナガサ川の河口にあたる伊礼原B遺跡（2007）から出土している土器片や青磁等の遺物は、本遺跡の西側を流れていた徳川が増水等により氾濫し、本遺跡の遺物を含みながら、蛇行してナガサ川に合流し、流れ込んだものとも思われる^(註2)。

出土遺物から15～16世紀にかけての集落であったと判断される。検出遺構、出土遺物から貝塚時代後期、15～16世紀、近世～近代と大まかに3つの時期が存在する複合遺跡である。

本遺跡については、前章までに遺構・遺物について詳細と若干の考察を述べたが、本章では、今回の調査成果を今一度整理し、本遺跡のまとめを行いたい。

調査では、川底面、数多くの柱穴遺構、石列、炉址等の遺構が検出され、それに伴って中国産陶磁器、タイ産褐釉陶器、沖縄産施釉陶器、陶質土器、石器、土器等の遺物が出土した。検出面別の遺構は、第4トレンチだけに見られ、第1検出面（②層：旧耕作土層）から石列遺構、水路状遺構、第2検出面（③層：黒色砂質土層）から掘立柱建物跡と思われる柱穴、炉跡が確認できた。

以上のことから、本章では遺構と遺物が他のトレンチと比べて比較的多い第4トレンチを主体に述べていく。

第4トレンチは、幅5m、長さ100mのトレンチで山側から海側まで長く、5m×10mの10グリッドで分けられている。

遺構の位置を見てみると、4-3・4グリッドで第1検出面の石列遺構と水路状遺構が確認された。水路状遺構には木杭が伴って出土しており、また、ヌノメカワニナ等の淡水性の貝類遺体も多く出土することから推測すると北東にあるナガサ川から石列で囲んだ水田に水を引き込む用水路の役割をしていた。水田を満たした水は、木杭（第11図）に因ってその進入を堰き止められ、水路状遺構を伝って南西の徳川に流れ込んでいたものと考えられる^(註3)。戦時中の米軍写真^(註4)には、当時の田園風景が写っており、そのことが推測される^(註4)。

4-5グリッドでは第2検出面の3基の炉址、掘立柱建物址^(註5・6)と思われる柱穴群が確認され、4-6～8グリッドでも同じく第2検出面の掘立柱建物跡と思われる柱穴群が確認された。この第2検出面は約620基の柱穴群を検出し、特に4-5～8グリッドで密集して検出されている。切り合いが見られる柱穴も多いことから、幾度かの立て替えや別の建物が重なったものと考えられ、当時の遺跡の中心、或いはその近辺ではないかと考えられるが、明確なプランは確認されなかった。

遺物は、本土産陶磁器、沖縄産施釉陶器、簪、銭貨等の近世、近代の遺物から中国産陶磁器等

の15～16世紀の遺物、後期系土器、貝製品等の貝塚時代後期の遺物が出土している。

以下、グリッド毎と検出面毎に整理し若干の考察をまとめていきたい。

4-1、4-2グリッドでは、遺構等の検出面は得られなかったが、黒色混貝土層（④層）でアカジャンガー式土器、大当原式土器等の貝塚時代後期の遺物が出土した。その中には弥生系土器や浜屋原式土器等の土器片が大型で、一括して出土したのもあった。これらは貝塚時代後期の中でも、アカジャンガー式土器等のいわゆるくびれ平底土器に先行し、後期の時期区分が細分化される可能性がある。この後期系土器が出土した黒色混貝土層を貝塚時代後期の層と位置づけた。④層は4-1～4-3まで確認できた。本遺跡の貝塚時代後期の生活址は海側よりも山側寄りであったことが推測される。

4-3、4-4グリッドの第1検出面では、肥前系の薩摩磁器、沖縄産施釉陶器、簀、瓦、陶質土器、円盤状製品等から近世～近代の遺物が出土したことがわかった。

4-5、4-6グリッドの第2検出面では15～16世紀頃の白磁、青磁、染付、褐釉陶器が大量に得られており、青磁には首里城跡から出土した「青磁浮牡丹双耳瓶」と類似するものもある^(註7)。また、中国産磁器の翡翠釉皿も首里城跡^(註7)、天界寺跡^(註8)から類例が見られる。備前焼のすり鉢も出土しており、これらと同時期に沖縄に持ち込まれた可能性もある。今帰仁城址に出土例がある^(註9)。

4-6グリッドで出土した人骨片は、Ⅲ層柱穴群の下層から出土しており、建造物等の人為的な要素が加わり、下層にあった埋葬址が破壊され、Ⅲ層で人骨が散在したと思われる。時期的には、前述した④層と同じ時代区分だと思われるが、明確ではない。また、同グリッド③層の柱穴から出土した炭化米により、この地域に稲作があったことが想定される。

4-7～10グリッドでは、検出面は得られなかったが、旧日本国五銭硬貨、銅版、ゴム版等の印刷技術を用いた近代磁器等の近代の遺物や薩摩焼の本土産陶磁器等の近世の遺物や滑石製石鍋、カムイヤキ等のグスク時代の遺物も散見される。

自然遺物では、貝類遺体、脊椎動物遺体、軽石等が出土しており、特に脊椎動物遺体は魚類が少なく、哺乳類が多い。4-1・2グリッドにはイノシシ等の在来種の獣骨が多く、4-5・6グリッドは、ウシ、ウマ等の移入動物が多く出土しており、時代毎に食料対象となった哺乳類の種類がわかることができた。ウシ、ウマ等の移入動物は、同グリッドから出土している青磁、白磁、染付等の中国産陶磁器と同時期のものであり、大陸から交易に伴い持ち込まれたことが推測できる。また、炭化米も出土しているこのことから牛馬を使って水田を耕していたであろうと考える。また、『李朝実録』に金非衣ら（1477年与那国島に漂着）による記録に、沖縄本島では牛馬が食用とされ、市場で肉が売られていた。陳侃（1534年来島）の『使琉球録』には伊平屋での供食メニューに牛・山羊があるがブタの記載がないことを紹介し、「この頃、豚はまだ庶民の食生活にとって、さほど重要な食料ではなかったと思われる^(註10・11)。」としていることから、食肉としていたことも窺える。

軽石は、グラフ7を見てみると数は多くはないが大きくて重いものが4-8に見られ、小～中型の軽石が4-7、4-6、4-5の順に多く見られる。これは、第68図の層序を見てみると海側から山側に緩やかに砂丘が堆積しており、大きくて重い軽石が4-8に留まり、小～中型の軽石が波の影響等の自然現象により、4-7、4-6、4-5に堆積し、砂丘の堆積に添って軽石の汀線を為していた、と考えられる。

また、第4トレンチと同じような遺物が第1、3トレンチからも出土しており、第22図の表で見

られるようなくびれ平底を伴う貝塚時代後期の土器や、3トレンチでは染付、青磁、瓦質土器、薩摩焼等のグスク～近世の遺物が出土している。1トレンチ、5トレンチでは、人骨片が出土しており、AMS法を用いて測定した結果、1トレンチで出土した人骨は縄文晩期に相当し、5トレンチで出土した人骨は12世紀頃のものとして測定された。

検出面、遺物からすると、貝塚時代後期の中でも、乳房状尖底土器に代表される古い時期から人々が住み始め、15～16世紀の青磁、染付等の中国産陶磁器等の遺物を伴って、掘立柱建物の平地住居が建ち並んだ集落があり（4トレンチ第2検出面）、近世から近代頃には、本土産陶磁器、沖縄産施釉陶器、簪、銭貨等を伴った水田が形成されていた（4トレンチ第1検出面）。

特に第2検出面から大量に出土した青磁、白磁、染付等の中国産陶磁器は、首里城跡から出土したものと類似するものもあり^(註12・13・14)、後兼久原遺跡と同じような様相を持っていた^(註5・6)と考えられる。同じような15世紀から16世紀頃の中国産陶磁器が、首里城、今帰仁城址、越来城址、具志川城址、喜屋武城址等のグスクから出土していることから、当時の王府であった首里から、各地へもたらされたことが考えられる^(註9・15・16・17・18)。柱穴の密度から第2検出面が見られる4-5～8グリッドは、伊礼原遺跡を含むこの地域一帯のグスク時代の中心部で、それらのグスクと同じく15～16世紀に盛行期を迎えた。砂丘区にこのような粗密な状態で柱穴が見られるのは同時期では見当たらず、砂地という土地性から、幾度となく立て替えが行われ、このような密度で柱穴群が検出されたのであろうと考える。

本調査の後に行われた4トレンチ南東側の試掘調査（試掘No.6、No.7）では、近世の4基のピット状遺構や諸岡型ゴホウラ製貝輪、弥生系土器等の貝塚時代後期の古い時期の遺物が出土した。だが、明確な遺構は見られなく、遺物も白砂層と粗砂層が交互に堆積する層と枝サンゴ層で縄文時代前期の室川下層式土器、縄文時代中期の面縄前庭式土器、貝塚時代後期の土器が混在して出土していることから、本遺跡との様相とは若干違うようである。試掘No.6、No.7の詳細は後述で述べることにする。

今回の調査により、これらの成果を得ることが出来た。しかし、遺構が検出された場所は4トレンチのみと幅の狭い長方形の発掘調査区ということで、屋敷跡のプランや居住地、耕作地、葬地等の集落構造の構成要素の把握が十分に検討できなかった。3トレンチからも同じ時期の遺物が出土していることから、更に調査区を拡げ、本調査では掴めきれなかった集落跡の全貌が2007年度に行われた発掘調査で明らかになった。追って報告したい。

最後に、本遺跡の発掘調査、並びに報告書作成に関わった関係者の方々には、衷心から感謝申し上げます。

《参考文献》

- 註1. 北谷町教育委員会 『伊礼原遺跡』 2007年
- 註2. 北谷町教育委員会 『伊礼原B遺跡』 1989年
- 註3. 北谷町教育委員会 『北谷町史 第三巻 資料編2 民族 上』 1992年
- 註4. 北谷町教育委員会 『北谷町の地名』 2006年
- 註5. 北谷町教育委員会 『後兼久原遺跡』 2003年
- 註6. 沖縄県立埋蔵文化財センター 『後兼久原遺跡』 2004年
- 註7. 沖縄県教育委員会 『首里城跡 -京の内跡発掘調査報告書（I）-』 1998年

- 註8. 沖縄県立埋蔵文化財センター 『天界寺跡（I）』 2001年
- 註9. 今帰仁村教育委員会 『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅰ』 1983年
- 註10. 金城須美子 『史料にみる産物と食生活 －「李朝実録」と「冊封使録」をめぐって－』 1982年
- 註11. 金城須美子 「沖縄の肉食文化に関する一考察－その変遷と背景－」 『全集 日本の食文化 第8巻 異文化との接触と受容』 1997年
- 註12. 沖縄県立埋蔵文化財センター 『首里城跡 －継世門周辺地区発掘調査報告書－』 2002年
- 註13. 沖縄県立埋蔵文化財センター 『首里城跡 －右掖門及び周辺地区発掘調査報告書－』 2003年
- 註14. 沖縄県立埋蔵文化財センター 『首里城跡 －御内原地区発掘調査報告書－』 2006年
- 註15. 今帰仁村教育委員会 『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅱ』 1991年
- 註16. 沖縄市教育委員会 『越来城』 1988年
- 註17. うるま市教育委員会 『具志川グスクⅠ』 2006年
- 註18. 具志川市教育委員会 『喜屋武グスク』 1988年



石列・柱穴群検出状況 (4-1～7)



池状遺構の検出状況 (4-8・9・10)

図版64 4トレンチ



柱穴内の頭蓋骨(4-6)



雨による崩落で発見された下顎骨(5トレンチ)

図版65 人骨検出状況



掘り下げ作業風景
(西側より)



柱穴断面実測作業
(東側より)



壁面図・断面図
実測作業

図版66 作業風景1



表土掘り下げ状況
(作業風景東側より)



作業風景
(西側より)

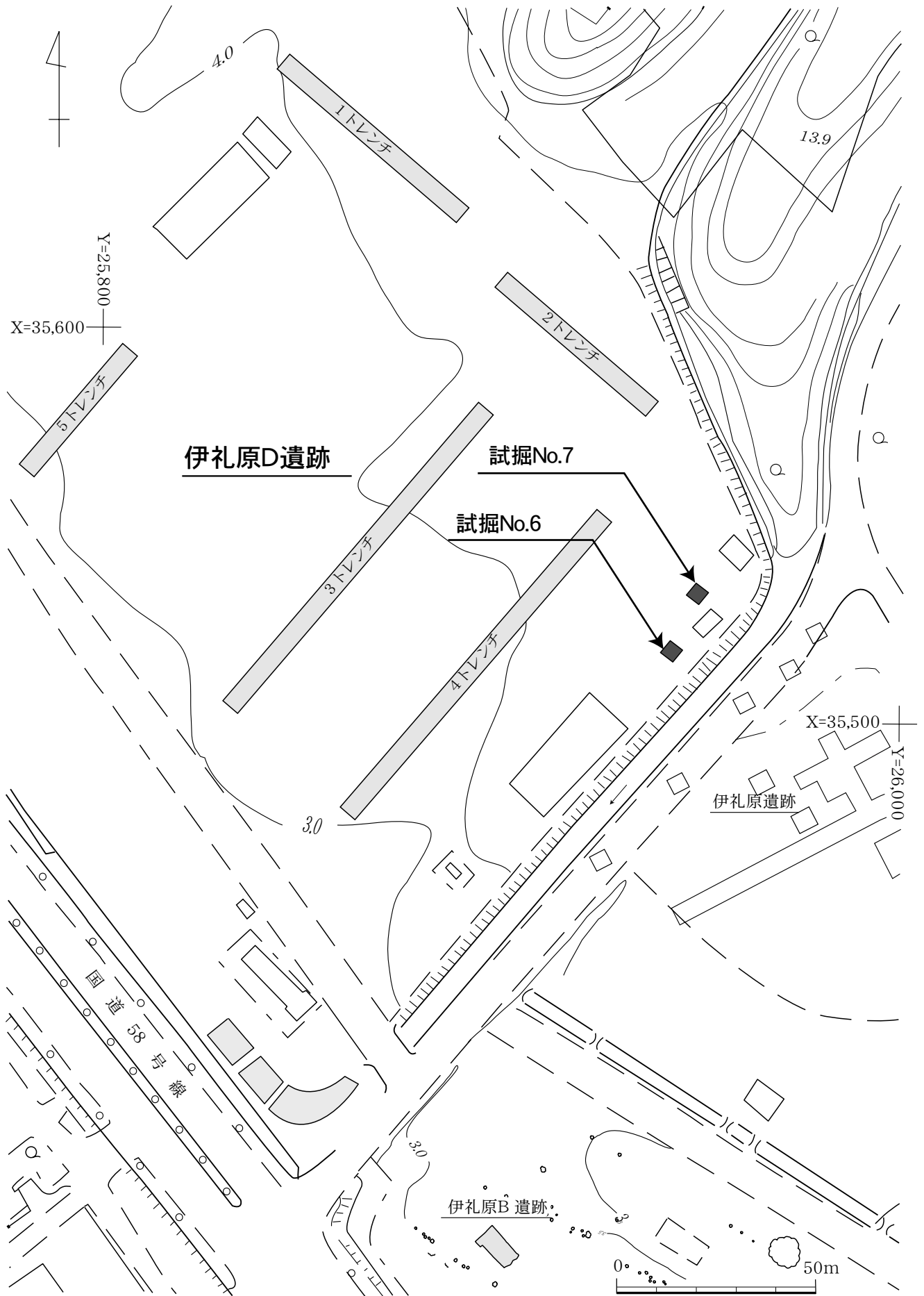


発掘調査員
集合写真



第68図 伊礼原D遺跡の柱状図と遺物変遷図 (3・4トレンチ)

付篇
試掘NO. 6・7



第69図 試掘No.6・No.7位置

試掘 No. 6

本遺跡の試掘調査は、No.6・7の2つの試掘穴を設け行った。ここでは、試掘No.6で得られた層序を述べる。層序はⅠ～Ⅶ層に分けられ、客土をⅠ層、茶褐色粘質土をⅡ層、橙黄褐色砂層とその下に白砂と粗砂が交互に堆積する層をⅢ層、礫が混ざる白砂層をⅣ層、灰白色粗砂層をⅤ層、混礫灰色粗砂層をⅥ層、混礫・サンゴシルト層をⅦ層とした。

各壁面を見てみると、東壁ではⅢb層～Ⅲh層が北から南へと緩やかに傾斜して堆積しており、南壁、北壁ではⅢb層～Ⅲh層が東から西へと緩やかに傾斜して堆積している。西壁では、他の壁面で見られたような緩やかな傾斜は無く、Ⅱ層が大きくⅢ層を掘り込んでいる。Ⅲc～Ⅴ層を見ると白砂と粗砂が交互に堆積していることがわかる。Ⅰ・Ⅴ・Ⅵ層を除く全ての層から土器や石器、貝製品などの遺物が出土している。だが、Ⅶ層で室川下層式土器と共に浜屋原式土器が出土していることから、流れ込み等の自然現象によるものだと思われるため文化層との位置づけはしない。

1. 層序

Ⅰ層：客土

厚み：90～120cm。戦後米軍が整地する際運んできた。下から礫、砂、土、芝生で構成される。砂と土の間からはコールタールが流れ出す他、鉄屑や木材も見られる。

Ⅱ層：茶褐色粘質土

厚み：30～60cm。戦前、若しくはそれ以前の層。無文の土器片を多量に含む。土器の他に、海産、陸産貝も多種見られ、10～20cm大の礫も包含している。層下部では土中の鉄分が沈降したのか、赤褐色を呈す。同層が耕作土であったのかは不明である。

Ⅲ層：Ⅲ層は、橙黄褐色砂層であるa・b層と白砂層と粗砂層が交互に堆積するc～h層とに分けられる。Ⅲa・b層を①、Ⅲc～hを②とした。以下に①と②について述べる。

①Ⅲa・b層：橙黄褐色砂層

Ⅲa層：橙黄褐色砂

厚み：10cm。Ⅱ層とⅢb層の混在層。層上部はやや締まり、若干粘土をパミス状に含む。下部は脆い。砂の粒子はやや粗い。イソハマグリ等を包含するがその量は少なく、食用ではなかったと思われる。

Ⅲb層：Ⅲa層と同一（第70図）

厚み：10～40cm。土器片が1点見られる。ローリングを受けていない無文土器が出土しており、時期は不明である。ピット状遺構が4つ出土している。西壁ではⅢ層を大きく掘り込んでいるのが見られる。

②Ⅲc～h層：白砂・粗砂層

Ⅲc層：淡灰白色砂層（第70図）

厚み：5cm～20cm。やや粗い粒子の砂で構成される。層中に獣骨等を含む。Ⅲb層と層の構成は類似している。若干色調が淡くなる。第72図で見られるような土器底部片、口縁部片が出土している。

Ⅲd層：淡灰白色粗砂層（第70図）

厚み：15～20cm。粗い砂の粒子と細かな枝サンゴ、小型の貝類で構成される第72図で見られるような土器口縁部片と骨が出土している。

Ⅲe層：淡灰白色砂層

厚み：5～15cm。やや細かい砂で柔らかい。貝類はほとんど見られない。土器片が1点確認できるがローリングを受けている。

Ⅲf層：淡灰白色粗砂層

厚み：5～20cm。無遺物層。粗目の砂と枝サンゴ、小型の貝類で構成される。波の影響により形成されたと思われる。

Ⅲg層：白砂層

厚み：10～30cm。粒の細かい砂で構成されており、5cm大程度の礫を僅かに含む。貝はほとんど見られない。弥生式土器の可能性が高い土器片が出土している。

Ⅲh層：白色粗砂層

厚み：5～20cm。無遺物層。白砂（礫混じり）直上の層で、やや粗目の砂層である。

Ⅳ層：混礫白砂層（第70図）

厚み：25～35cm。第73図で見られるような一括土器や底部片、石斧刃部片、石材などが検出されている。当時の生活面を残していたと思われる。礫は5～30cmくらいのもので様々である。貝も多く特にイソハマグリが目立つ。

Ⅴ層：灰白色粗砂層

厚み：20～25cm。かなり粗い砂とシルト質の砂が交互に堆積している。水による影響を大きく受けたものと思われる。

Ⅵ層：混礫灰色粗砂層

厚み：15～30cm。無遺物層。Ⅴ層とは異なりシルト質の砂が含まれない。

Ⅶ層：混礫・サンゴシルト層（図版69・第74図）

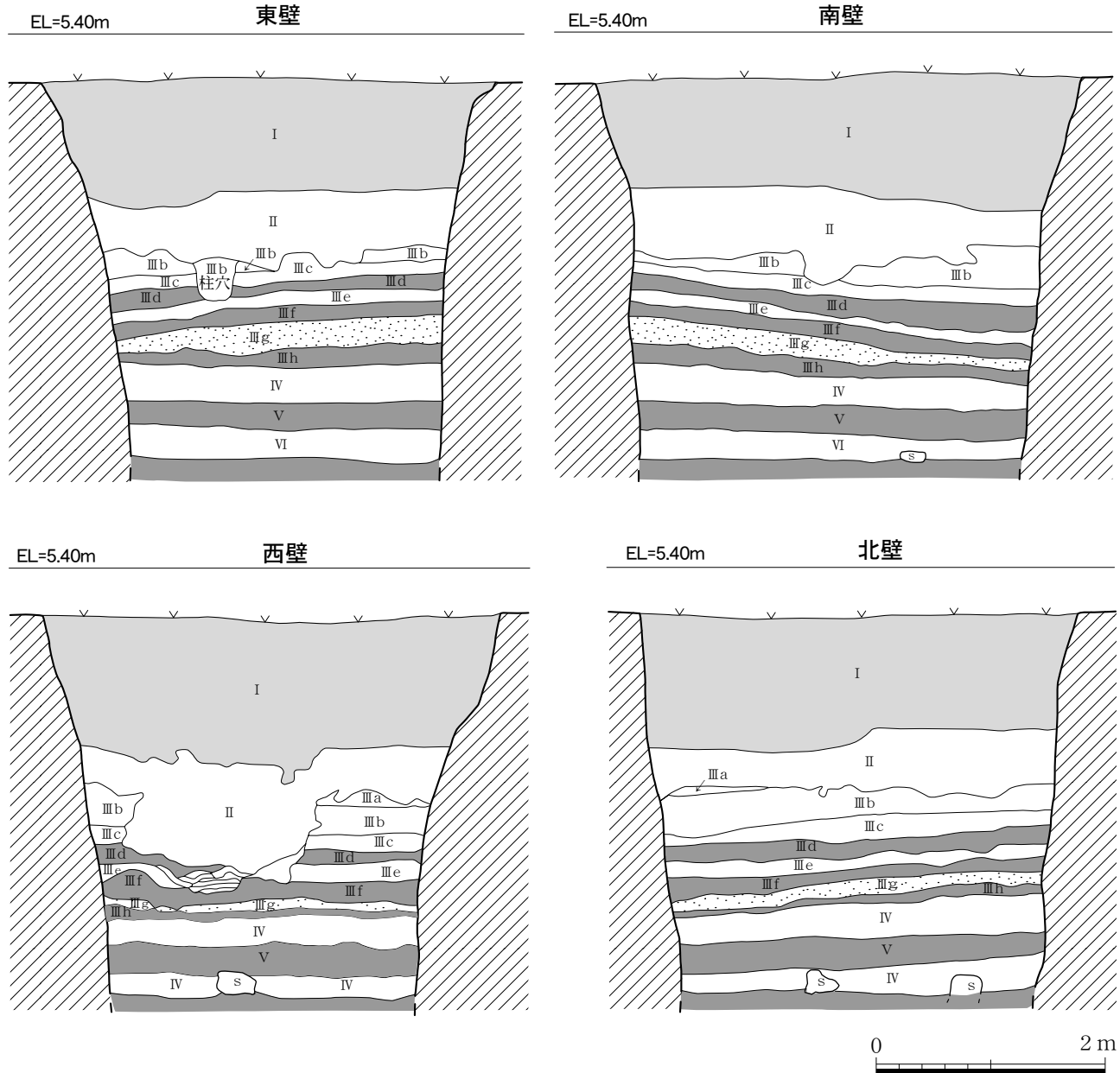
床面に見える層で、土器及び獣骨が検出される。層中にサンゴや小粒の礫を大量に含む枝サンゴ層である。かなり粗い砂とシルト質の砂も混在している。出土貝も様々でシャコガイ等は30cm～40cmにもなる大型のものも散見される。獣骨類は全体が黒く変色し、非常に堅く硬質化している。同層からは真水が染み出す。室川下層式土器口縁部片（第 図）と浜屋原式土器底部片（第 図）、面縄前庭式土器口縁部片（第 図）等が供出しており、流れ込みによるものと思われる。また、ジュゴンの肋骨を利用した骨製品、ゴホウラを利用した有孔製品などの貝製品が出土している。

2. 遺構

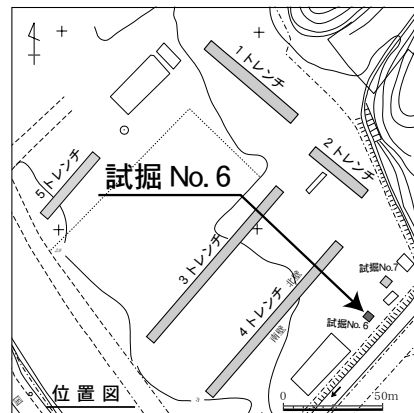
遺構については、No.6トレンチで橙黄褐色砂層（Ⅲb層）で、ピット状遺構が4点見られた。

a. ピット状遺構

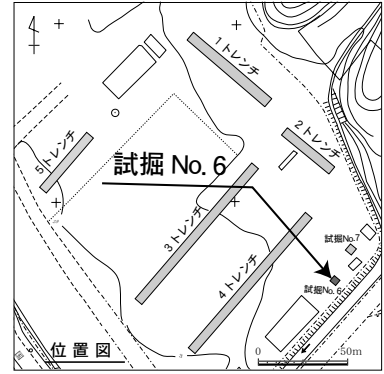
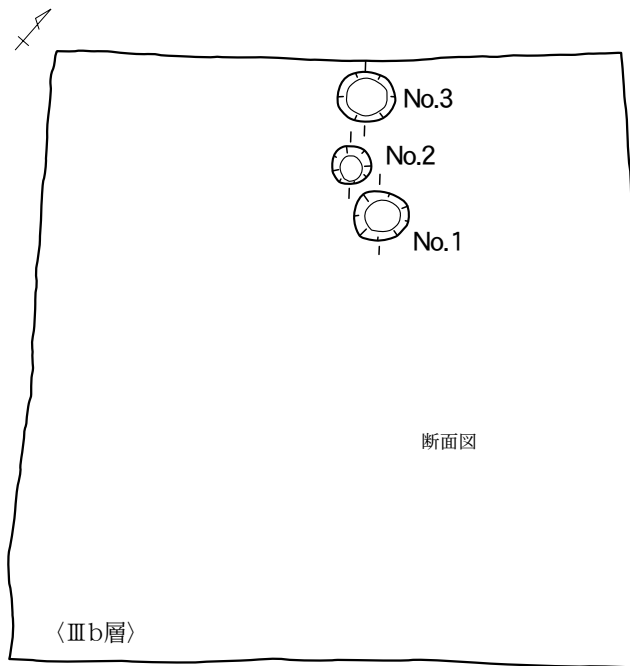
淡黒褐色を呈し、やや締まっている。砂は周囲のものとの差異はなく、やや粗目である。アラズジケマン、イソハマグリが見られる。Ⅲb層に対応する。No.4はⅢb層からⅢd層まで約40cm以上掘り込まれており、直径も約40cmある。柱穴だと思われるが、本試掘穴内では住居プランは見られなかった。本遺跡では、数多くのピット状遺構群が出土しており、今後の資料整理によって、住居プラン等の遺構が見えてくるのではないだろうか。



層	層名
I	客土 (90~120cm)
II	茶褐色粘質土 (30~60cm)
III	a 橙黄褐色砂 (10cm)
	b 柱穴 (40cm)
	b IIIaと同一 (10~35cm)
	c 淡灰白砂質 (5~20cm)
	d 淡灰白粗砂 (15~20cm)
	e 淡灰白色質 (5~15cm)
	f 淡灰白色粗砂 (5~20cm)
	g 白砂 (10~30cm)
h 白色粗砂 (5~20cm)	
IV	混礫白砂 (25~35cm)
V	灰白色粗砂 (20~25cm)
VI	礫混じり灰色粗砂 (15~30cm)
VII	混礫・サンゴシルト

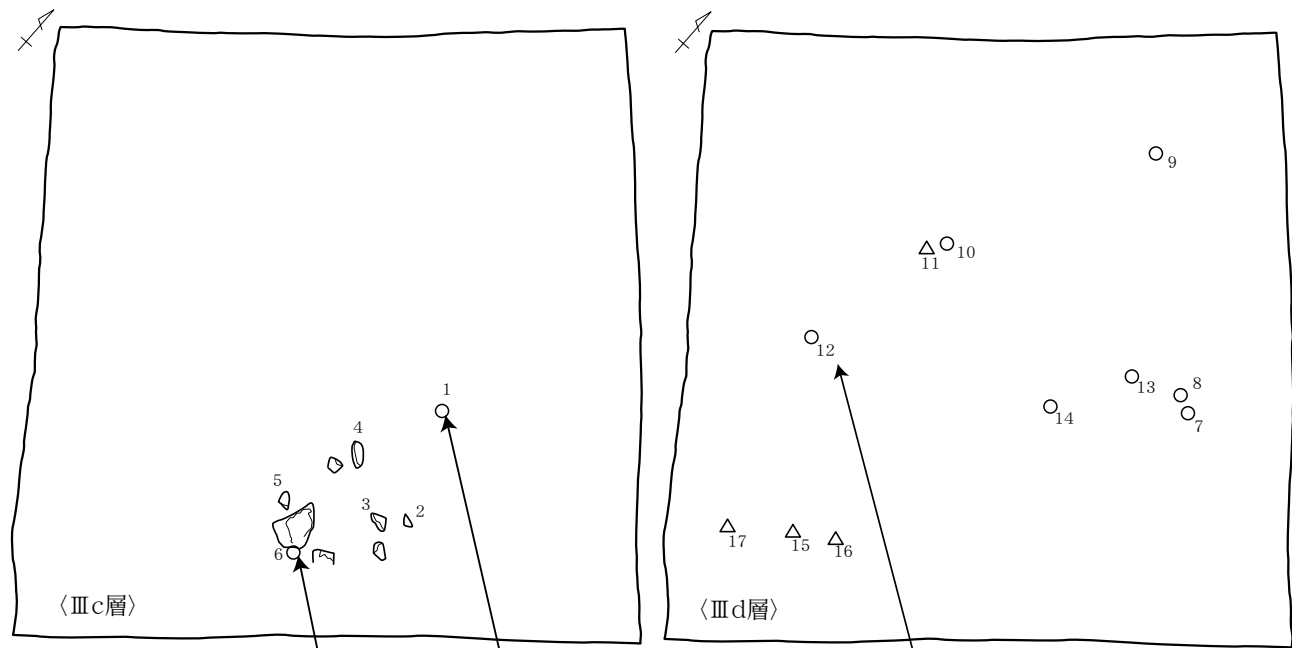


第70図 試掘No.6 層序

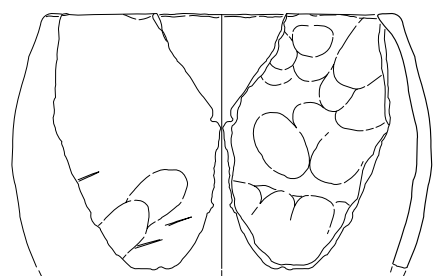
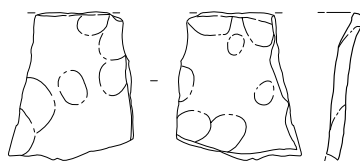


遺構No	平面形状	断面形状	土色	短辺長さ (cm)	深さ (cm)	備考
No.1	円形	U	淡黒褐色	32	16	やや締まる
No.2	円形	U	淡黒褐色	25	8	やや締まる
No.3	円形	U	淡黒褐色	36	30	やや締まる
No.4	-	U	淡黒褐色	37	46	やや締まる

第71図 試掘No.6 ピット状遺構



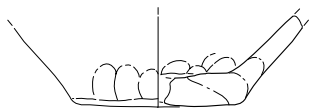
凡例 ○ 土器
△ 骨



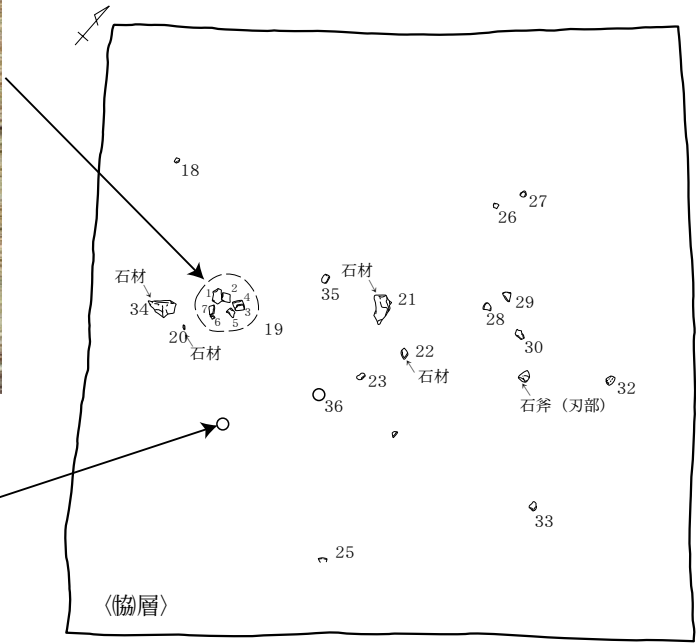
第72図 試掘No.6 遺物出土状況 (Ⅲc層・Ⅲd層)



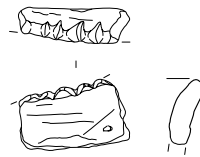
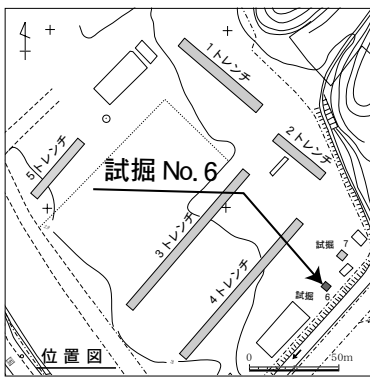
図版68 一括土器



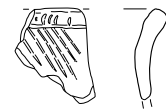
第75図12



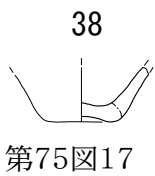
第73図 試掘No.6 遺物検出状況（IV層）



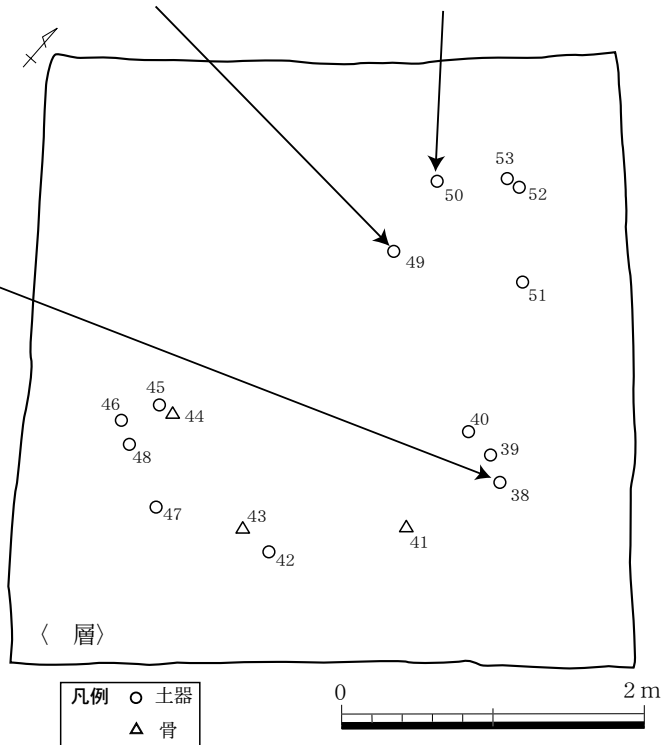
第75図14
（室川下層式土器）



第75図15
（面縄前庭式土器）



第75図17



第74図 試掘No.6 遺物出土状況（VII層）



図版69 試掘No.6 VII層状況

本試掘穴からは土器、骨製品、貝製品が出土した。

以下。各遺物について記述する。

3. 土器

盛土（図1）

図1は後期系土器の口縁部で外反する。先端は角をなし、外面に横に沈線文を施す。泥質で焼成も良い。

Ⅱ層（図2・3）

図2は壺の胴部で、器面調整や胎土などから弥生式土器と思われる。図3は口縁部で逆「L」字状を呈する。胎土や器面調整から弥生式模倣土器と思われる。

Ⅲ層（図4～11）

図7～10は口縁部で、図7、9、10は外反し、図8は内彎する。図7は断面が舌状を呈し砂質で胎土に黒色鉱物を多量混入する。Ⅲc 白砂層ドット取り上げ

図9は談面が丸味をおび、沈線で「く」字を描く。砂質で黒色や透明の粒を多量混入する。Ⅲd 白砂層の出土。

図10は断面が丸味をおび、砂質で器色が明橙褐色を呈し、弥生式土器の可能性が高い。Ⅲg 出土。

図8は口縁部が内湾する。断面は角を呈し、砂質で焼成は良好。砂質で器色は外面が暗灰褐色、内面が明黒灰褐色。Ⅲd 出土。

図4は乳房状尖底の底部で、砂質で器面：外器面にユビ痕が見られ、焼成も良い。Ⅲ白砂層出土。

図5・6は胴部で「く」字状に湾曲する。砂質で、黒色や透明の鉱物を混入することから縄文晩期系土器と思われる。前者がⅢb 灰黒色土層（貝層の上）、後者がⅢa 茶色砂層（盛土）の出土
図11は壺の胴部で、外器面はヘラでナデられ、石英などを多量含み砂質を呈する。器色も明黄褐色で弥生式土器と思われる。Ⅲg 白色砂層（茶黄色粒の上層）で出土。

Ⅳ層（図12）

図12はくびれ平底で、砂質で石英やチャートを多く含み、弥生模倣土器と思われる。

Ⅶ層（図13）

室川下層式土器（図13、14）、面縄前庭式土器（図15、16）、浜屋原式土器（図17）、弥生模造土器（図18）が出土した。

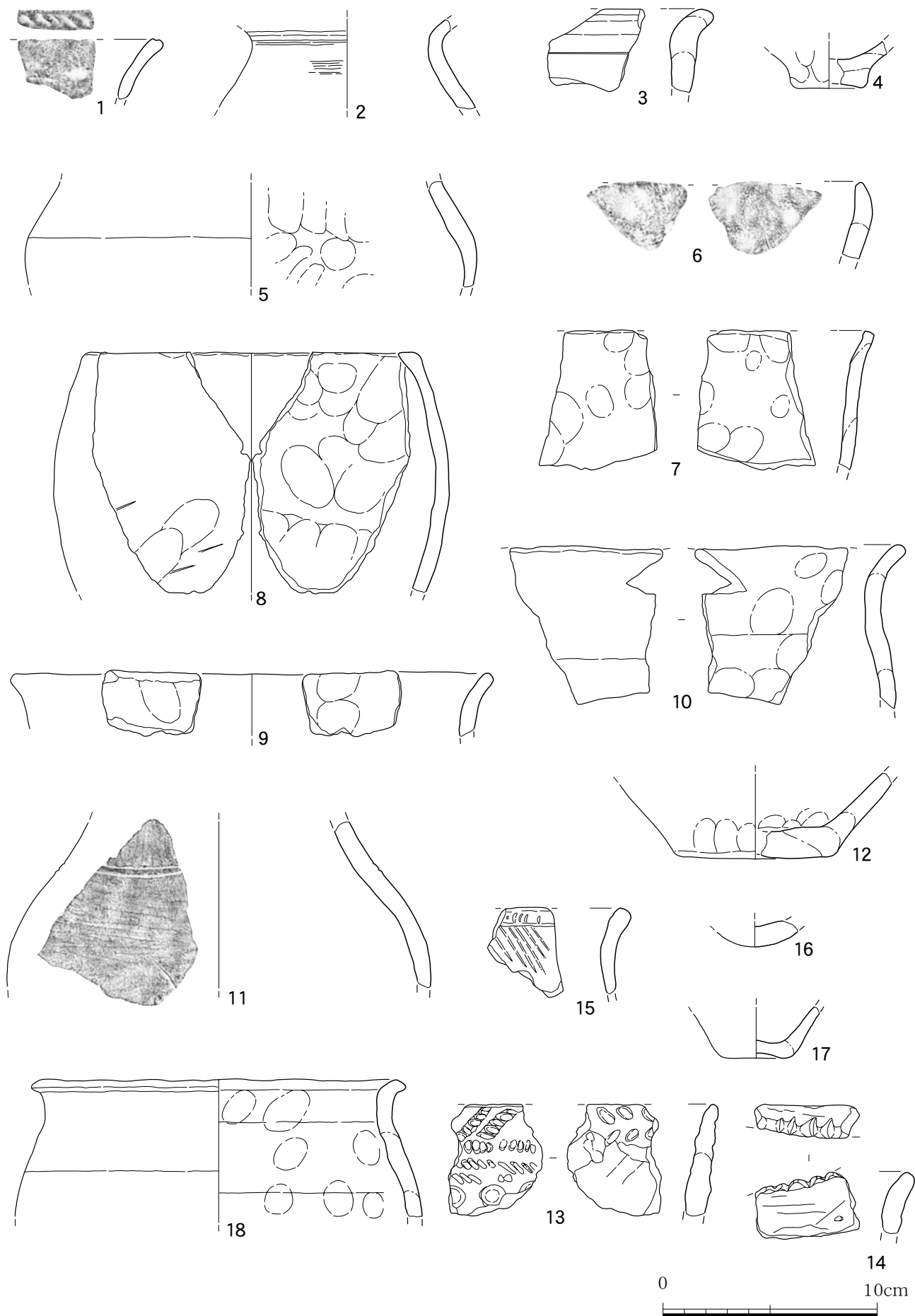
・室川下層式土器：図13口縁断面が舌状を呈し、外器面に貝殻文を稜杉状、内器面は短斜線文を施文する。

図14は口縁部で断面は丸味を帯び、外反する。山形の口縁で、文様は口唇に刻目文、押引文？が見られる。

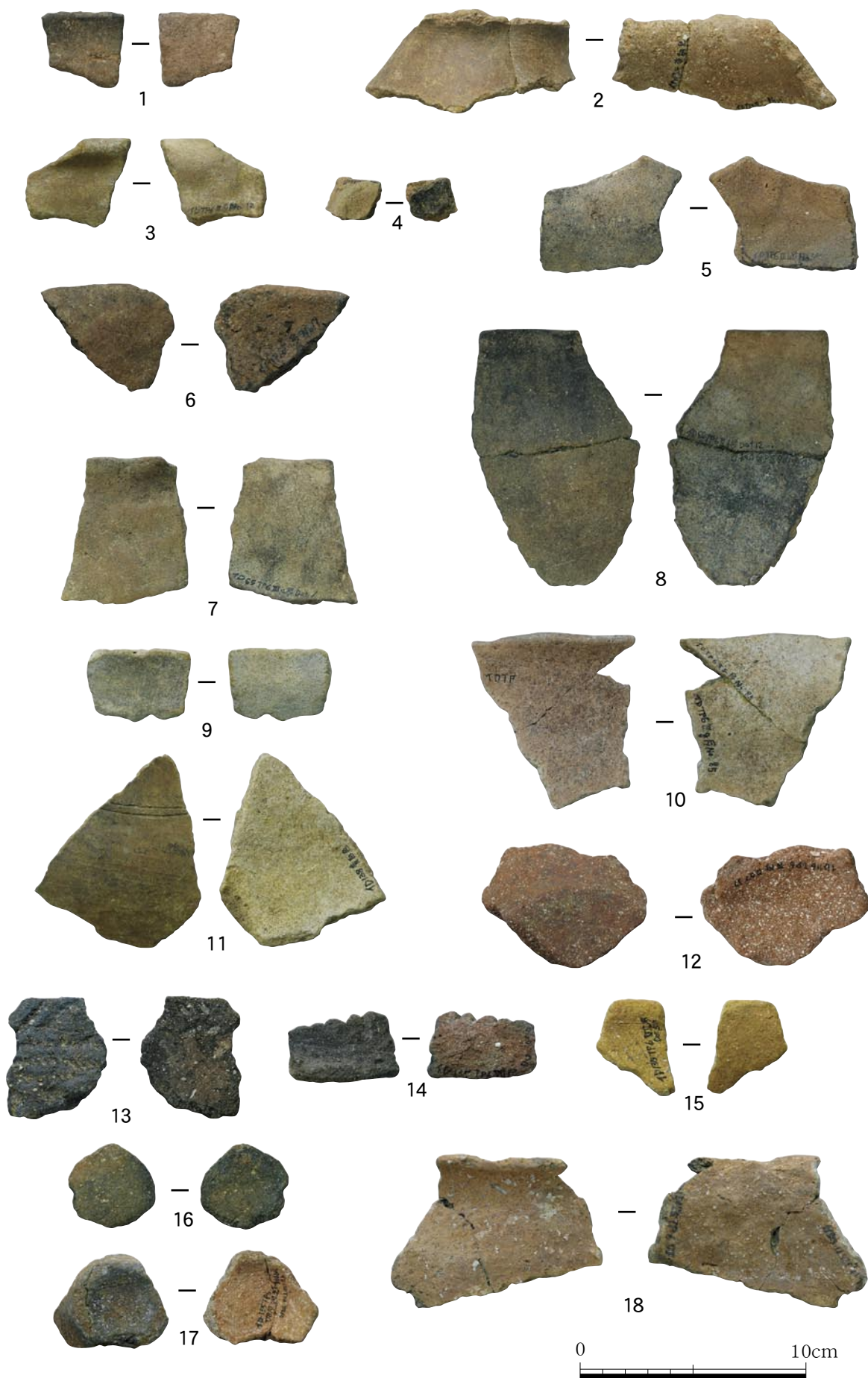
いずれも石英やチャートを多量混入し、砂質で焼成も悪い。器色は内外面とも暗灰褐色である。

・面縄前庭式土器：図15は口縁部で文様は斜沈線文を施す。図16は丸底である。

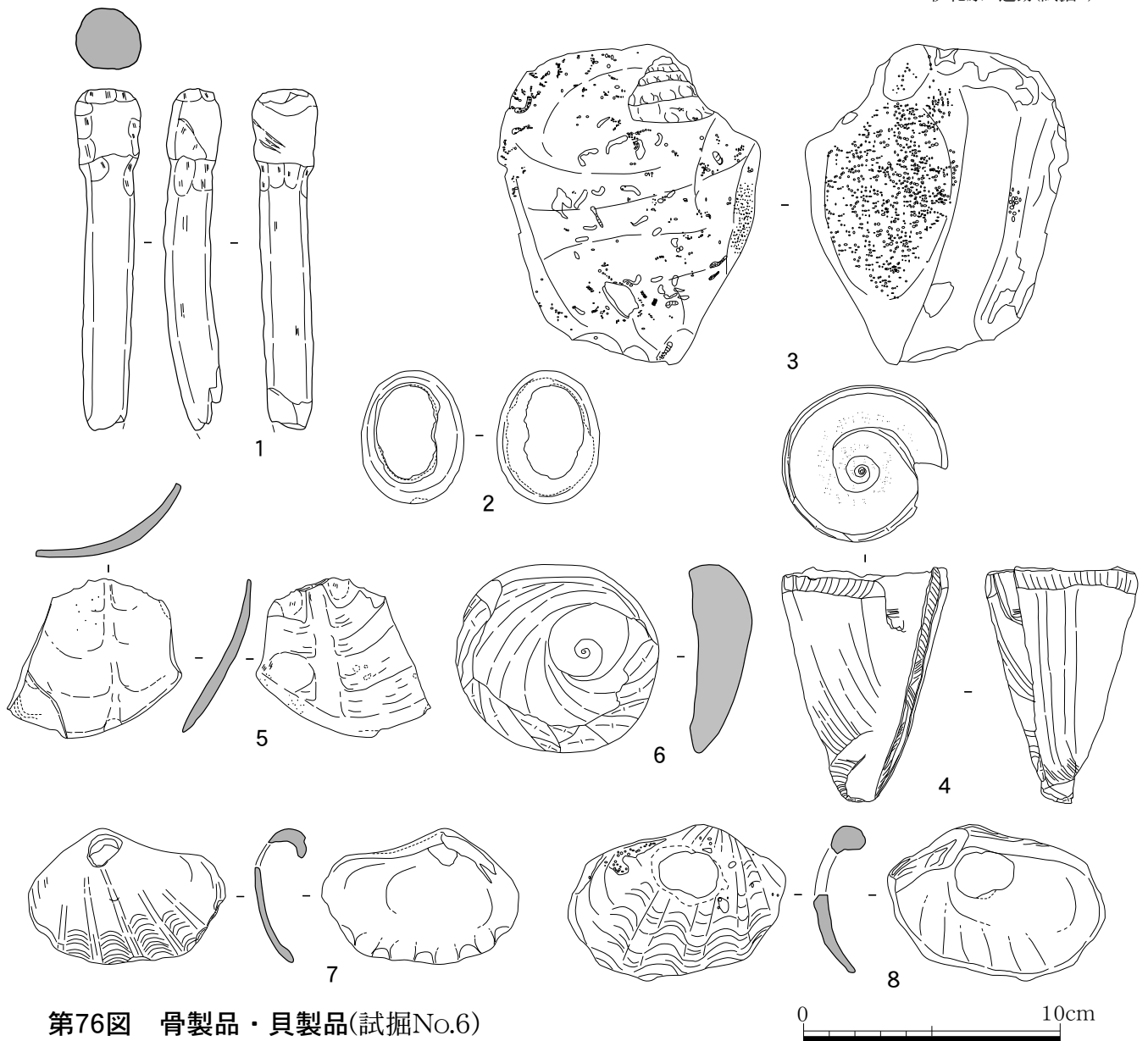
・浜屋原式土器：図17上げ底ぎみで、底径が小さく、乳房状尖底に分類されるものである。砂質でチャートなどを多量含む。図18壺の口縁部で先端は舌状で外反する。砂質で石英を多量含む。器色は外面が明赤褐色、内面が明茶褐色で弥生模倣土器と思われる。



第75図 土器 (試掘No.6)



図版70 土器 (試掘No.6)



第76図 骨製品・貝製品(試掘No.6)

4. 骨製品 (第76図・図版71)

図1はジュゴンの肋骨を利用したもので、試掘no.6Ⅶ層(淡灰色粗砂層)で出土した。ジュゴンの肋骨の一端は幅25×18mmの方形に加工し、下部に棒状に加工したものである。棒状部分の横断面は方形を呈し、顕著に研磨される。両端とも、裂けたように折れていることから未製品と思われる。

5. 貝製品 (第76図・図版71)

試掘6出土の貝製品は貝輪1点、貝匙1点、ゴホウラの有孔製品1点、イモガイの未製品1点、二枚貝有孔製品製品2点である。出土層をみると二枚貝有孔製品製品がⅡ層、すべて枝サンゴ層の出土である。

- ・貝輪

オオベッコガサ1点の計4点出土した。

- ・貝匙



図版71 骨製品・貝製品(試掘No.6)

ヤコウガイの殻口部分で、匙の身の部分に用いたと思われる。貝殻の外殻を削り、真珠層部分を利用したもので、縁の部分削り、加工する。これまで出土している貝匙とは逆の取り方である。

・有孔製品

第76図3はゴホウラの前溝孔に粗孔を施すものである。貝の大きさは12cm×10cmで若干小さい。また、貝殻には腹面には細かいアバタが無数残り、背面にはヘビ貝がかなり付着している。

・未製品

図4はイモガイ切り取り残存部分である。

アンボンクロザメの体層を横位にすり切り、さらに、殻口は縦位に成長線に沿うように破損する。残存部分からイモガイの大きさを推定すると殻径は7cm以上である。試掘6で壁面清掃の出土

・二枚貝有孔製品製品

第76図7と8で試掘6のⅡ層と清掃時の2点出土した。

いずれもヒメジャコで、大きさもほぼ同じである。伊礼原D遺跡の4トレンチでも多数の二枚貝有孔製品が出土している。ほぼ同時期であろう。他の製品比べて風化気味である。

6. 糞石

1点出土している。残存長2.8cm、最大径1.4cm、重量2.07gで淡褐色(一部白色)を呈する。

表面は一部アバタも見られるがすべすべしている。くびれ部と押しつぶされたような圧痕が一ヶ所ずつあり、くびれ部のほうが若干欠損しているように見える。

目視で確認できる骨などはなく、とてももろい。試掘時(2002年)にIVa層(白砂層)から出土しており、同層で浜屋原・アカジャンガー式土器を確認している。

パリノ・サーベイ株式会社に1点の半分の鑑定をお願いしたところ、糞石状の土壌塊という結果がでた。

表64 糞石出土遺跡(参考資料)

県名	市町村名	遺跡名	よみがな	時期	落とした生き物	数量(点)
沖縄県	北谷町	伊礼原遺跡	いれいばるいせき	縄文~弥生		4
鹿児島県		柘原貝塚	くぬぎばるかいづか	縄文後期?	人・犬	
熊本県		轟貝塚	とどろきかいづか	縄文前期	不明。人骨に伴う糞石からマイワシ・カタクチイワシ・ハゼなど	
熊本県	山鹿市	石棺墓			人?コオロギ?の後ろ脚入り	
宮崎県	えびの市	島内地下式横穴墓69号		古墳時代?		
千葉県	市川市	曾谷貝塚	そやかいづか		人or犬?	6
鳥取県	鳥取市	青谷上寺池遺跡	あおやかみじちいせき	弥生	人・犬	
奈良県	田原本町	唐古・鏡遺跡	からこ・かぎいせき	弥生中期		
奈良県	桜井市	カタハラ一号墳			コガネムシ科の幼虫	1938
福井県	三方町	鳥浜貝塚	とりはまかいづか	縄文前期		2000以上?
滋賀県	大津市	栗津湖底遺跡第3貝塚	あわづこていだいさんかいづか	縄文中期		
神奈川県	横浜市中区	元町貝塚	もとまちかいづか	縄文前期~中期		
宮城県	東松島市	里浜貝塚	さとほまかいづか	縄文		103
宮城県		大木囲	だいきがこい	縄文		
秋田県	秋田市	秋田城跡	あきたじょう	奈良・平安		
青森県	仙台市	富沢遺跡	とみざわいせき	後期旧石器時代	シカ	
青森県	階上町	寺下遺跡	てらしたいせき	縄文晩期	人or犬?	
岩手県	宮古市	崎山貝塚19次調査	さきやまかいづか	縄文前期?		

7. 伊礼原D遺跡出土糞石の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

北谷町に所在する伊礼原遺跡は、沖縄本島中部の東シナ海に臨む海岸低地に位置する。周辺の詳細な地形分類については、松田(2007)により周辺の地形分類図が呈示されている。今回調査が行われた伊礼原D遺跡の位置は、この分類図上によると、段丘間の埋積谷の出口前面に広がる砂丘後背の湿地に位置する。伊礼原D遺跡の発掘調査では、この段丘間の埋没するにおいて泥炭層が検出され、その中から魚骨などを含むいくつかの糞石が検出された。本報告では、この糞石とされる試料のうち、試料の記録保存を考慮し、状態の良いものは避けた、1点について、顕微鏡観察、微細物分析、花粉分析・寄生虫卵分析を実施し、情報の収集を行なう。

1. 試料と分析手法の選択

分析に用いる試料は、伊礼原D遺跡より出土した糞石とされる試料1点である。試料の詳細については、実体鏡観察の結果にて述べる。この糞石とされる試料1点について、実体鏡観察、微細物分析、花粉分析・寄生虫卵分析を実施する。

糞石とされる試料の分析例としては、辻(1984)などがあり、構成する微細物の検討や花粉分析・寄生虫卵分析等の直接的な方法が行なわれている。また、X線回折や理化学分析、脂肪酸分析などの化学的な糞石の特性の検証も、有効な手段として行なわれている。今回の手法の選択には、過去の事例等をふまえたものとしたが、分析の供した試料が、2cmに満たない小型のものであることから、微細物分析・花粉分析・寄生虫卵分析の直接的な手法を優先したものとした。

2. 分析方法

(1)実体顕微鏡観察

糞石とされる試料1点について、実体顕微鏡下において観察を行う。観察後、試料を写真撮影する。

(2)微細物分析

試料(乾燥重量1.12g)を水に浸して崩し、粒径0.25mmの篩を通して水洗する。篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定可能な種実や炭化材などを抽出する。

(3)花粉分析・寄生虫卵分析

微細物分析において篩を通った残渣を全て回収し、花粉分析・寄生虫卵分析の試料とする。これについて、重液(臭化亜鉛、比重2.3)による有機物の分離を施し、花粉・胞子および寄生虫卵分離・濃集する。処理後の残渣を定容してから一部をとり、グリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査して出現する全ての花粉・胞子化石と寄生虫卵について同定・計数する。

3. 結果

(1)実体顕微鏡観察

糞石とされる試料は、17.51mm×14.62mm×11.16mmであり、褐色～黄褐色を呈する土塊である。表面観察からは、魚骨等の化石類は認められず、白色～褐白色の粒子(主として0.1-0.3mm、最大約1mm)の付着が認められるのみである。試料の外観写真を図版に示す。

(2)微細物分析

分析の結果、同定可能な種実を確認されなかった。分析残渣中には、白色～褐白色の粒子、土壌塊が認められるのみである。なお、白色～褐白色の粒子は、顕微鏡観察の結果、大部分が石英であった。

(3)花粉分析・寄生虫卵分析

分析の結果、花粉化石、シダ類孢子、寄生虫卵は、いずれも検出されなかった。残渣中には、微細な植物片や菌類に由来すると思われる組織片が、わずかに点在するのみである。なお、分析の際、試料に重液を加えたところ発泡が認められた。重液は臭化亜鉛を希塩酸(10%HCL)で溶かしたものであり、試料中の石灰質が希塩酸に反応し発泡したものと考えられる。

4. 考察

今回分析した糞石とされる試料からは、魚骨等の大型動物遺体、種実等の大型植物遺体、花粉・シダ類孢子・寄生虫卵等の微化石は、全く検出されなかった。一方、試料の観察により認められた白色～褐白色を呈する粒子は、そのほとんどが石英に同定された。また、試料は花粉分析・寄生虫卵分析の際に、希塩酸(10%HCL)による反応によって発泡をしており、石灰岩起源の岩片を含んでいることが推測された。

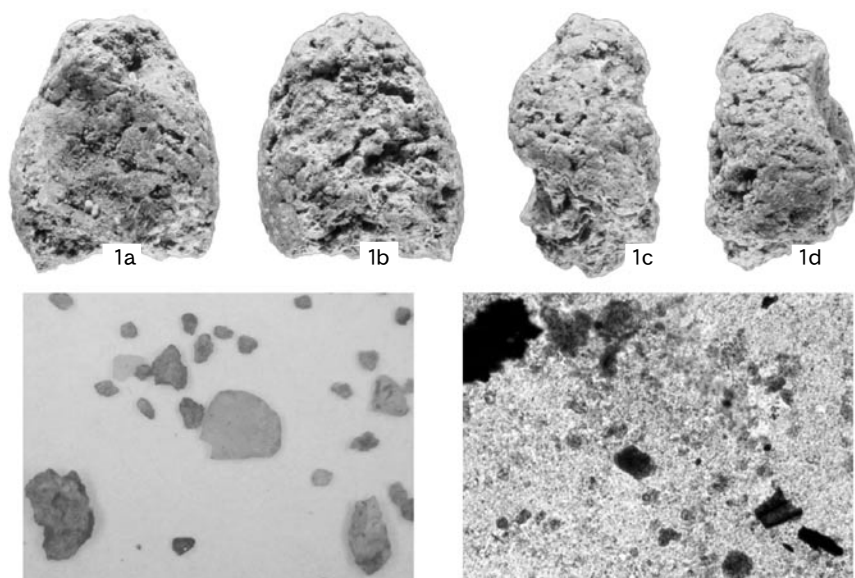
以上のことより、今回の観察・分析の結果は、糞石であることを指示するものではなく、糞石状の形を呈する土壌塊と考えられる。今後は、このほかに検出された糞石とされる試料についても、分析調査を行ない、類例を蓄積と共に再検討を行なう必要があると考える。

引用文献

松田順一郎,2007,伊礼原遺跡砂丘区の堆積物・埋没地形と中央区・南区にみられた古地震跡,伊礼原遺跡-伊礼原B遺跡ほか発掘調査-,北谷町教育委員会,44-59

辻 誠一郎,1984,糞石の構成物と包含花粉群集,古文化財編集委員会編 古文化財の自然科学的研究,同朋舎,531-534.

図版72 試料の外観・分析状況写真



1.試料の外観写真

2.微細物分析に認められる残渣

3.花粉分析・寄生虫卵分析プレパラート内の状況

5mm 1mm 50μm

試掘 No. 7

1. 層序

本遺跡の試掘調査は、No.6・7の2つの試掘穴を設け行った。ここでは、試掘No.7で得られた層序を述べる。層序はⅠ～Ⅴ層に分けられ、客土をⅠ層、戦前の耕作土をⅡ層、カワニナを含む粘質土層をⅢ層、無遺物のシルト層をⅣ層、遺物包含層のシルト層をⅤ層とした。

Ⅰ層：客土

厚み：100cm。戦後、米軍が整地をする際に運ばれて来たものと思われ、下部から礫層、砂層、土層、芝生の順で堆積している。北壁から南壁へパイプが走っており、Ⅱ層とⅢ層上部が掘り込まれている。鉄屑や陶器片が砂層から見られる。

Ⅱ層：戦前の耕作土

Ⅱa層：灰褐色粘質土

厚み：5～20cm。水を通さない層で、水は層上面から壁面を伝って流れる。層中にはイソハマグリと陸産マイマイが若干見られるが、カワニナは認められない。炭化物も少し含まれる。粘性は強く常に水分を含んだ状態である。

Ⅱb層：茶褐色粘質土

厚み：10～40cm。Ⅱa層に比べ層中にカワニナを含み炭化物が多い。炭化物と粘質土が交互に堆積した跡がパミス状に残る。

Ⅱc層：茶褐色混砂粘質土

厚み：5～30cm。若しくは床土であると思われる。Ⅱb層よりも若干カワニナが多くなり、砂が混じる。その為、粘性は落ちるが堅く締まる。砂の動きから水による何らかの作用があったものと考えられる。陶器片が一点確認できる。

Ⅲ層：カワニナ含有粘質土層

Ⅲa層：黒褐色粘質土（マンガン混）

厚み：10～20cm。Ⅲ層はいわゆるカワニナ層で、No.6試掘穴にみられる砂丘の後背湿地にあたる。層中にはカワニナが多く炭化物や土器も見られる。Ⅳa層は他のカワニナ層と違いマンガンが多く含まれる。カワニナの他にイソハマグリも認められる。

Ⅲb層：黒褐色粘質土

厚み：20cm。Ⅲa層よりもカワニナが増える。マンガンはほとんど見られない。炭化物と土器片はⅢa層同様確認できる。又、層中に砂が混在し、リュウキュウシラトリ・イソハマグリ等の海産貝も見られる。

Ⅲc層：黒褐色粘質土

厚み：20cm。Ⅲb層に比べ白色粒が少なく、やや黒色味を帯びる。炭化物や土器片が認められる他、獣骨（イノシシ）も1点確認できた。

Ⅲd層：黒褐色粘質土

厚み：10～20cm。Ⅲc層に比べやや淡くなり砂が若干多くなる。マルタニシ等の淡水貝が確認できた。

Ⅲe層：黒褐色粘質土

厚み：10cm。カワニナが多くなり炭化物や砂も増加する。

Ⅲf層：黒褐色混砂粘質土

厚み：15～25cm。Ⅲe層よりも更に砂が多くなり、堅い。イソハマグリも比較的多くなるようである。

Ⅲg層：黒褐色混砂粘質土

厚み：10～20cm。カワニナが減少、小型化し、層中の砂の割合が大きくなる。海産貝が多い。他のカワニナ層に比べ僅かに土器片が多く見受けられる。

Ⅲh層：暗灰褐色粘質土

厚み：15～25cm。カワニナ層（Ⅲ層）の中で最もカワニナが少ない。砂はほとんど見られないが、礫（3～8cm大）が混じる。土器片は認められなかった。同層は、東壁と東側の南北壁でそれぞれ見られるが西壁では確認できなかった。

Ⅳ層：無遺物シルト層**Ⅳa層：灰白色粘質シルト**

厚み：10～20cm。粘土とシルトが混在し、水の影響を受け、マーブル状を呈す。粘土の他にも砂が混じり南壁で顕著である。層上部はカワニナが少量見られ粘性が強い。炭化物の他に木片も見られ、土器片は確認できない。10～15cm大の礫を包含する。

Ⅳb層：灰褐色粘質シルト

厚み：20～30cm。Ⅳa層に比べ粘性が強くなり、層中に含まれる木片、炭化物の数が多くなる。南壁ではⅣa層よりも更に砂の混在率が上がるが、北側へ移行していくとほとんど見られなくなる。

Ⅳc層：淡緑灰色シルト

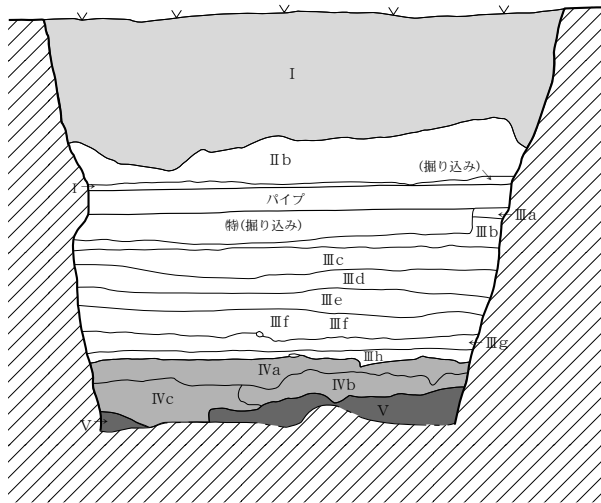
厚み：20～30cm。粘土がほとんど含まれていないので、粘性がなくサラサラしている。粒の細かいシルトと粗砂が交互に堆積している様子も窺えられるが、さほど時間差は無いように思われる。カワニナ、海産貝、土器は見られない。

Ⅴ層：遺物包含シルト層（第77図）

厚み：5～30cm。灰褐色粘質シルト。粘土を含み、粘性が強い。又、南壁では砂が大量に見られ、シャコガイ、マガキガイ、サラサバティー、イソハマグリ等の海産貝も多い。ゴホウラの貝輪3点が出土している。木片も大型で、中には先端が焼け焦げているものや、人為的に整形されている感じのあるものも見受けられる。同層からは比較的土器片も多く認められる。ローリングはあまり受けていない。この層から水が染み出し始める。

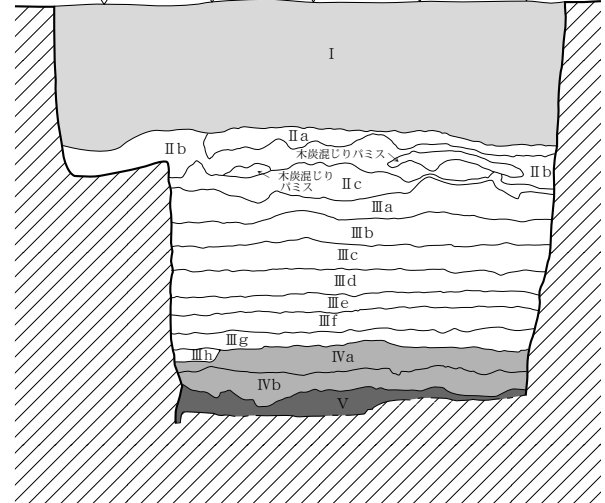
EL=5.40m

東壁



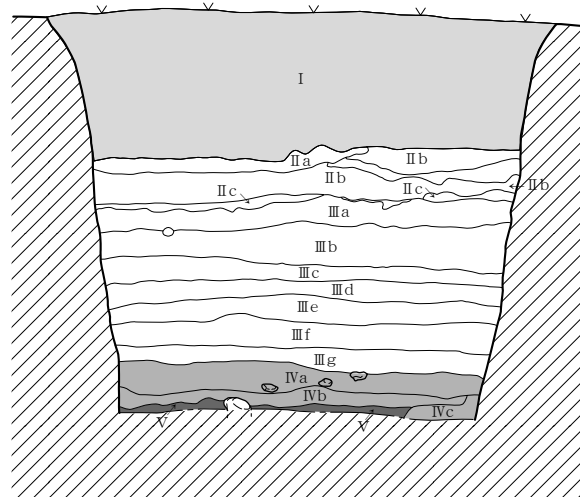
EL=5.40m

南壁



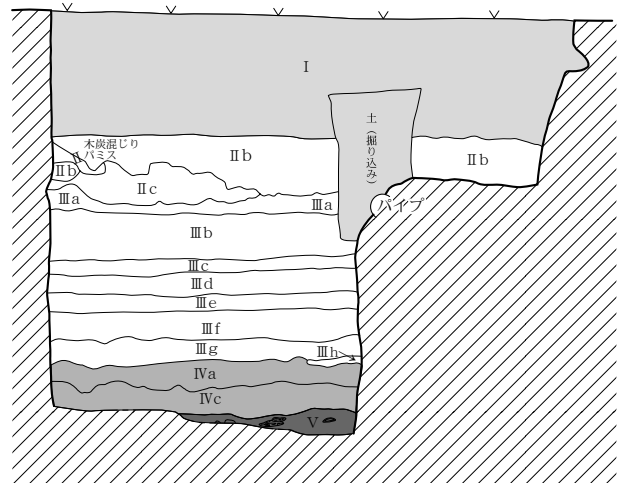
EL=5.40m

西壁



EL=5.40m

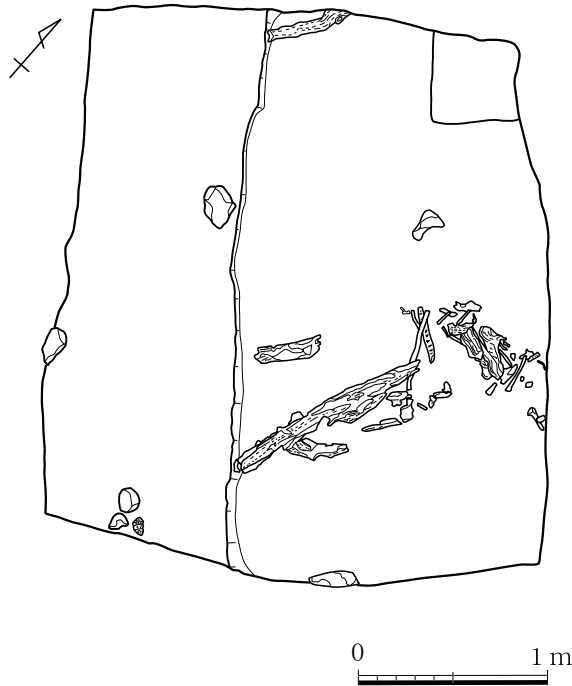
北壁



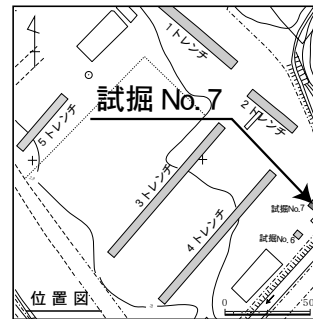
層	層名
I	客土 (100cm)
II	a 灰褐色粘質土 (5~20cm)
	b 茶褐色粘土質 (10~40cm)
	c 茶褐色混砂粘質土 (5~30cm)
III	a 黒褐色粘質土 (マンガン混) (10~20cm)
	b 黒褐色粘質土 (20cm)
	c 黒褐色粘質土 (20cm)
	d 黒褐色粘質土 (10~20cm)
	e 黒褐色粘質土 (10cm)
	f 黒褐色混砂粘質土 (15~25cm)
	g 黒褐色混砂粘質土 (10~20cm)
	h 暗灰褐色粘質土 (5~10cm)
IV	a 灰白色粘質シルト (10~20cm)
	b 灰褐色粘質シルト (10~20cm)
	c 淡緑灰色シルト (20~30cm)
V	灰褐色粘質シルト (5~30cm)



第77図 試掘No. 7 層序



図版73 木片検出状況(北側より)



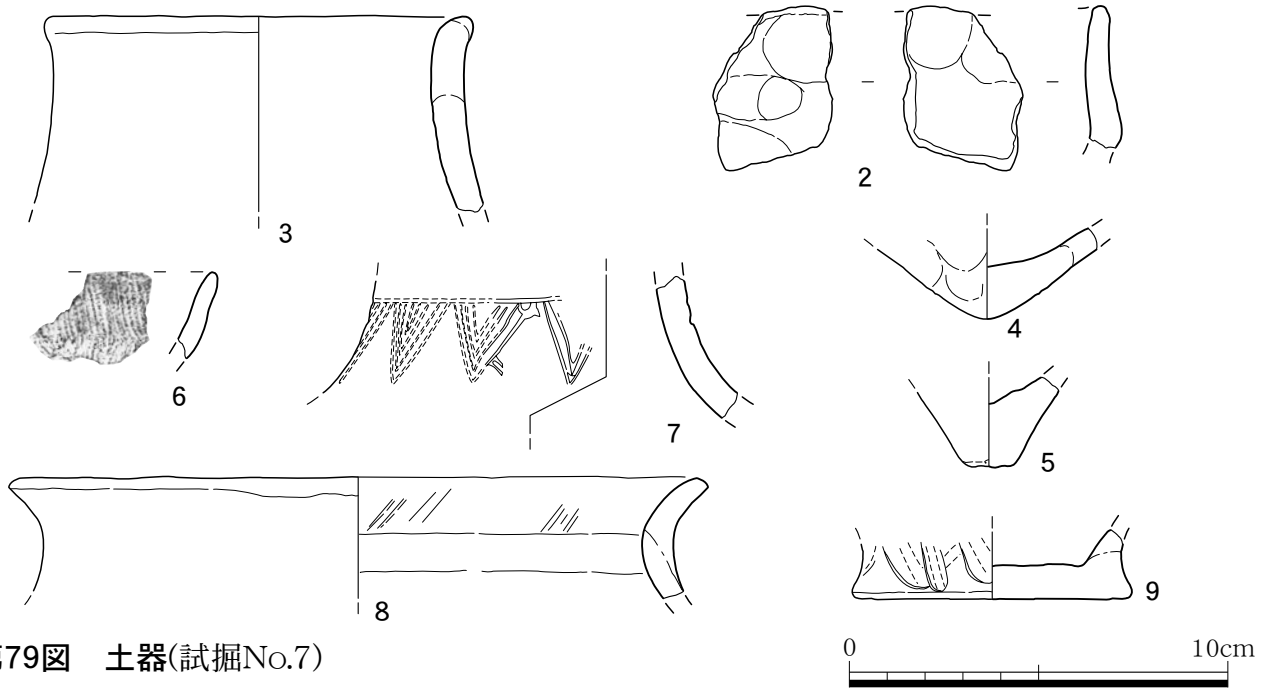
第78図 試掘No. 7 木片検出状況

2. 遺構

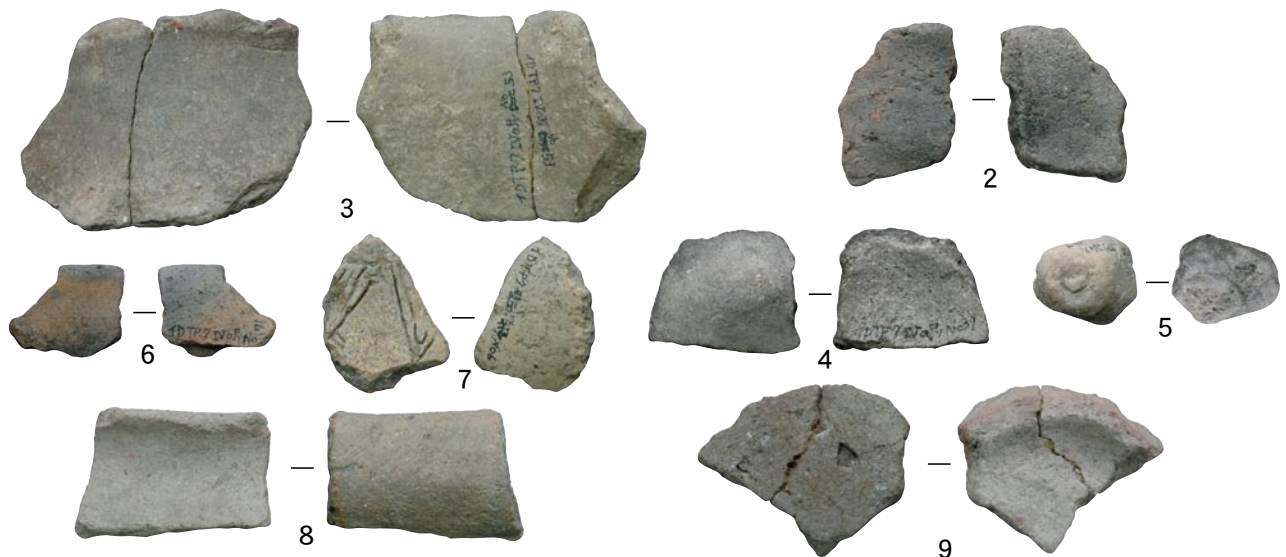
ここでは、V層で先述した木片について述べる。

V層出土の木片(図版73)

南東側にまとまって見られ、この中で最大のものが全長約110cmである。東壁近くから出土した木片群は焼け焦げており、図版73では明瞭に見られる。なんらかの形で人為的な要素が加わったものであるとも取れるが、人工的加工のものか自然のものか判然としない。また、図版73は樹皮が炭化したものもであり、枝部分の年輪が表面に見られる。



第79図 土器(試掘No.7)



図版74 土器(試掘No.7)

3. 土器 (第79図・図版74)

試掘7出土の土器は大きく浜屋原式土器、弥生式土器、大当原式土器、アカジャンガー式土器が出土した。出土した層はⅢ層の加コナ層、Ⅳa層、Ⅳb層で得られた。

主なものは、第79図、図版74示す。

Ⅲ層(図1)：図1は浜屋原式土器の口縁部で、器厚が10mmと厚手である。混入物に黒色鉱物を含むが混入量は少ない。図2は大当式土器の口縁部で外反する。内外面とも指痕が顕著である。

Ⅳa層：図3は弥生模倣土器の壺の胴部である。泥質で、器厚は9mmと厚く、焼成も良い。

図4・5は底部で、泥質、縄文晩期の尖底土器と思われる。

Ⅳb層：図6は直口口縁で、断面は丸味を持つ。大当原式土器の口縁部と考えられる。

壁面清掃：図7は壺の胴部と砂質で焼成も良く、外器面は残り、内面にユビ痕が施される弥生系土器と考えるであろうか。図8口縁部で外反する。先端は丸味を呈する。焼成は良く、器面は内外面ともユビで調整する。後期系土器である。

図9はくびれ平底である。泥質で、焼成は良く、器面は内外面ともユビで調整する。



第80図・図版75 貝製品(試掘No.7)

4. 貝製品 (第80図・図版75)

本試掘出土の貝製品はゴホウラ製貝輪3点である。

図1～3はゴホウラの腹面を利用したもので、いずれもV a層から出土した。3点とも貝輪の幅が2.5cmと広く、「諸岡型」に分類されるものである。貝殻はいずれも外面もしくは内面にアバタがはっきり確認できる。研磨はいずれも顕著であるが、図1は殻軸部分に打ち割りが若干残る。

研磨の状況を見ると3点とも内縁の断面は舌状を呈し、内面から研磨されたと思われる。外縁についてみると図3は内面に研磨が強い。

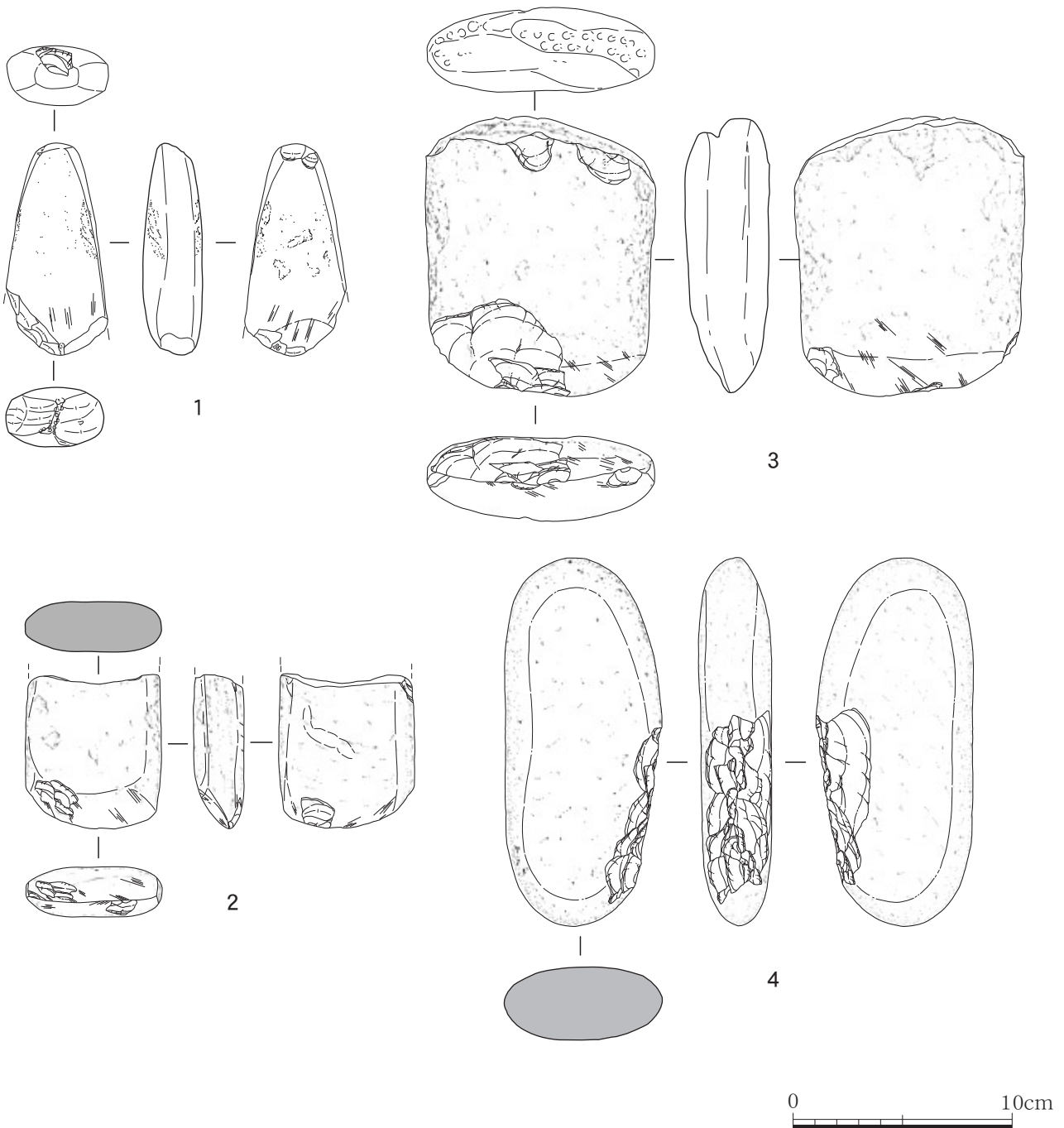
伊礼原遺跡砂丘区(2007)でも3点出土していることから一連のものと思われる。

5. 石器 (第81図・図版76)

試掘調査では4点の石器が出土した。内訳は石斧が3点、未製品が1点である。

石斧は磨製品と半磨製品が得られた。片刃と両刃、刃部不明がそれぞれ出土しており、磨製片刃は図1である。刃部不明のものは図2である。半磨製両刃のものが図3である。また、未製品は作成途中のものと思われ研磨された後に連続して打ち割り痕が観られる (図4)。

詳細は、表65に載せる



第81図 石器 (試掘No.6-7)

表65 石器観察一覧

No.	器種	分類大	分類小	残存	縦横幅 重量	石質	観察事項	出土地
1	石斧	磨製	不明	体・頭部	95mm 45mm 26.6mm 202g	角閃岩	刃部破損のため、刃縁は不明。刃先は円刃か？ 平面は乳房状、断面は柱状。全面に研磨が観られる。 また、側面は角が削られ、面取り調整が施されている。	試掘 平安山原地区 黄白色
2	石斧	磨製	片刃	刃部	69mm 60mm 23.5mm 199g	斑レイ岩	刃部は弱凸強凸片刃で、円刃。平面は短冊形、断面は半楕円。 側面は、面取り調整が観られる。	表採
3	石斧	半磨	両刃	完形	125mm 104mm 37.5mm 958g	斑レイ岩	両凸刃で円刃。平面は方形。断面は柱状。 表裏側面に研磨が施されているが、敲打痕により部分的に観られるのみである。上面にも敲打痕が観られる。	No.6 盛土(茶褐色 土)Ⅱ層
4	未製品	磨製	楕円	完形	166mm 70mm 32.8mm 648g	砂質片岩	平面は楕円形、断面は長楕円形。全体に研磨が施されており、 右側面には、打ち割り痕が観られる。作製途中か？	No.6 Ⅲ c 層



図版76 石器(試掘No.6・7)

表66 その他の種類出土一覧

試掘No.		種類	部位	
試掘No.6	II層	ウシ/ウマ	四肢骨	
	II層	ウシ/ウマ	歯	不
	III d層	哺乳類同定不可	不明	
	III g層	哺乳類同定不可	不明	
	III g層	不明	不明	
	II d層	魚類不明	不明	
	III b層	魚類不明	不明	
	III c層	魚類不明	不明	
	IV a層	ミナシクロダイ	右前上顎	左
	VII層	ベラ	上咽頭骨	左
	II層	人骨?	四肢骨	
VII層	人骨?	不明		
試掘No.7	II(C)層	ウシ	下顎 M1	右

表67 ウミガメ・リクガメ・クジラ出土一覧

グリット	層序	種類	部位	備考
試掘No.6	II層	ウミガメ	鳥口骨	
試掘No.6	II層	ウミガメ	背or腹	
試掘No.6	II層	ウミガメ	背or腹	
試掘No.6	III c層	ウミガメ	縁甲板	
試掘No.6	III c層	リクガメ	背甲板	
試掘No.6	VII層	クジラ	不	焼有り

表68 イノシシ(ブタ?)歯出土一覧

グリット	層序	種類	部位	左右不	咬耗状況	備考
試掘No.6	II層	イノシシ	上顎 P4	右	(+)	
	II層	イノシシ	上顎 M1	右	j (+)(+)	1.5~2.0才
	II層	イノシシ	上顎 M2	右	h ++++.+++	2.0才以上
	II層	イノシシ	上顎 M3	右	f ++.+.+	2.0才以上
	II層	イノシシ	上顎 M1	右	h ++++.+++	1.5~2.0才
	II層	イノシシ	上顎 M2	右	f ++.++	2.0才以上
	II層	イノシシ	上顎 M3	右	d +.+. -	2.0才以上
	II層	イノシシ	下顎Cオス	右		
	II層	イノシシ	上顎 P4	不		
	III c層	イノシシ	上顎 M3	左	b -. -. -	1.5~2.0才
	III d層	イノシシ	下顎 M1	不	b -. -	0.5~1.5才
	III d層	イノシシ	下顎 M1	不	b -. -	0.5~1.5才
	III d層	イノシシ	下顎dm3 dm4P M1	左右		
	III g層	イノシシ	下顎 I	不		
	VII層	イノシシ	下顎Cオス	左		
	VII層	イノシシ	I			
	VII層	イノシシ	下顎 M3	右	h ++. ++. ++	2.0才以上
III b層	イノシシ/ ブタ?	下顎骨	右			
試掘No.7	IV b層	イノシシ	上顎 I	不		
	IV b層	イノシシ	下顎(切歯骨)	左右		

試掘のまとめ

伊礼原D遺跡の拡がりを再確認するため、本遺跡の後背湿地と考えられる南東部の伊礼原遺跡との中間、ナガサガの南東部に4m×4mの試掘を2ヶ所設け、それぞれNo.6・7とした。平成14年2月12日～平成14年3月8日の約1ヶ月を費やしての調査であった。

調査では、試掘No.6からはピット状遺構、試掘No.7からはまとまった状態で焼け焦げた木片群が検出され、それと共に貝製品、土器等の遺物が検出された。

本試掘の調査成果については、前章までに検出遺構・出土遺物について詳細と若干の考察を述べたが、本章では、今回の調査成果を今一度整理し、本試掘の考察を行いたい。

検出面別の遺構は試掘No.6に見られ、第1検出面（Ⅲb層）からピット状遺構が検出された。これは、北壁・東壁のⅢ層上面でピット状遺構が確認されており、Ⅱ層のピット状遺構がⅢ層の白砂面で検出されたと思われることから、Ⅱ層下面は伊礼原D遺跡本体の柱穴遺構と同じ15～16世紀のものだと考えられる。また、遺構ではないが試掘No.7V層でゴホウラ製貝輪の他に焼け焦げた木片群が確認できた。

遺物は、室川下層式土器、面縄前庭式土器の土器片、石斧等の石器、骨製品、貝製品が出土している。以下、試掘No.6、試掘No.7を層序と遺物毎に整理し若干の考察を行いたい。

試掘No.6のⅡ層では、弥生系土器や半磨製両刃石斧、ヒメジャコ製有孔製品が検出された。Ⅲ層では弥生系土器や磨製石器、Ⅳ層では一括土器や、くびれ平底の弥生系土器等が、Ⅶ層では室川下層式土器、面縄前庭式土器等の縄文前・中期系土器、面縄前庭式土器と同時期と考えられるジュゴンの肋骨を使用した棒状製品や浜屋原式土器等の貝塚時代後期系土器、それと同時期であるオオベッコウガサ製貝輪、ヤコウガイ製貝匙、ゴホウラ製有孔製品が確認された。Ⅴ・Ⅵ層は無遺物層である。

Ⅱ層は15世紀～戦前の耕作土層であると考えられるが、貝塚時代後期の遺物が出土している。これは、西壁で見られるように大きくⅢ層に掘り込んでいるためⅢ層の遺物が攪乱されてⅡ層で出土していると考えられる。また、本遺跡の4トレンチから出土したものと同一ような小型ヒメジャコ製有孔製品が出土していることから15世紀～戦前の層ということが窺える。

Ⅲ層～Ⅳ層には後期系土器のくびれ平底片や弥生系土器等が出土していることから、貝塚時代後期に相当されるが、白砂層と粗砂層が交互に重なって砂丘を形成しているため生活面との位置付けはしていない。

Ⅶ層では、室川下層式土器、面縄前庭式土器等の縄文時代前・中期と浜屋原式土器、ゴホウラ製有孔製品を含む貝塚時代後期の遺物が混在して出土している。貝塚時代後期の層は前述したⅣ層であり、Ⅶ層との間にはⅤ・Ⅵ層の無遺物層があり、時間差があることから、河川の氾濫等による流れ込み等の自然現象により、混在した物と考えられる。

試掘No.7のⅡ層では褐釉陶器が出土しており、Ⅲ層では浜屋原式土器、大当原式土器、Ⅳ層では、弥生系土器、Ⅴ層では諸岡型ゴホウラ製貝輪、木片が出土している。

Ⅱ層から出土した褐釉陶器は、伊礼原D遺跡本体から出土している褐釉陶器と同じ時期のものと考えられることから、15～16世紀頃の層だと考えられる。Ⅲ～Ⅴ層は、浜屋原式土器、大当原式土器等の後期系土器が出土していることから、貝塚時代後期に相当される。また、Ⅴ層から諸

岡型ゴホウラ製貝輪が出土していることから、Ⅴ層は、Ⅲ、Ⅳ層よりも古い時期に分類されると考えられる。また、Ⅲ層からは水田稲作を示すと考えられるマルタニシが確認されているが、水田稲作が開始されたのはⅡ層の時代になってからの可能性が示唆される（黒住）。

今回の調査により、これらの成果を得ることが出来た。伊礼原D遺跡本体の拡がり、ナガサガールの南東部までに及び、伊礼原A・B・C遺跡と同様に先史時代から戦前までの広範囲に渡って人々の生活の跡があった遺跡である。小型ヒメジャコ製有孔製品等の遺物やピット状遺構により、15～16世紀の生活面が4トレンチからナガサガール方向に広がっていたことが今回の試掘調査で確認できた。しかし、遺構が検出された場所は試掘No.6のⅢ層上面（Ⅱ層）で、4基しか検出されておらず、本遺跡全域を発掘調査した2007年度の資料整理を待って、屋敷跡のプランや居住地、耕作地、葬地等の集落構造の構成要素の把握を十分に検討し、報告書を作成していきたいと考える。

最後に、本遺跡の発掘調査、並びに報告書作成に関わった関係者の方々に、深く感謝の意を表したい。

報 告 書 抄 録

ふりがな	いれいばる いせき							
書 名	伊礼原D遺跡							
副書名	キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査							
巻 次								
シリーズ名	北谷町教育委員会文化財調査報告書							
シリーズ番号	第28集							
編著者名	中村愿・東門研治・松原哲志・島袋春美・細川愛・秋本真孝・黒住耐二・樋泉岳二・松下孝幸・松下真美							
発行機関	沖縄県北谷町教育委員会							
所在地	〒904-0192 沖縄県中頭郡北谷町字桑江226番地 TEL 098-936-3159							
発行年月日	2008年(平成20年)3月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いれいばる いせき 伊礼原D遺跡	おきなわけん 沖 縄 県 ちやたんちよう 北 谷 町 あざいへい 字 伊 平 こあざいれいばる 小字伊礼原	473260	44	26° 19' 13"	127° 45' 33"	2000. 02) 2001. 03.29	1,700	キャンプ 桑江北側 返還に伴 う範囲確 認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺物	主な遺物			特記事項	
伊礼原D遺跡		貝塚時代後期		土器・石器・貝製品・乳房状 尖底・くびれ平底			骨製品 軽石製品・軽石 人骨	
		グスク (14後半~17世紀)	柱穴・炉跡	滑石製石鍋・須恵器・白磁・ 青磁・染付・色絵・タイ産陶 器・褐釉陶器				
		近世~近代	石列遺構・ 水路址・池 状遺構	瓦質土器・沖縄産陶器・本土 産陶磁器・簪・円盤状製品・ キセル・銭貨				
試掘穴No.6 (枝サンゴ層)			柱穴	室川下層式土器・面縄前庭式 土器				
試掘穴No.7		貝塚時代後期		ゴホウラ製貝輪、石器、弥生 系土器				
要 約	<ul style="list-style-type: none"> ・ナガサ川の左岸河口部に位置するグスク時代の集落跡であったと考えられる。 ・山手側に貝塚時代後期 ・砂丘地に炉跡、柱穴を確認。出土遺物から15~16世紀にかけての集落であったと判断される。 ・砂丘地上部に石列遺構、水路状遺構と戦前の遺跡を確認。近世~近代の遺物とグスク時代の遺物が出土。 							

北谷町文化財調査報告書 第28集

伊 礼 原 D 遺 跡

—キャンプ桑江北側返還に伴う発掘調査事業(平成10～14年度)—

編 集： 北 谷 町 教 育 委 員 会
発行年： 2008年(平成20年)3月28日
 沖縄県北谷町字桑江226番地
 電話 (098) 936-3490
印 刷： (有) S k i l l
 沖縄県読谷村字波平1732-1-203号
 電話 (098) 958-1515
